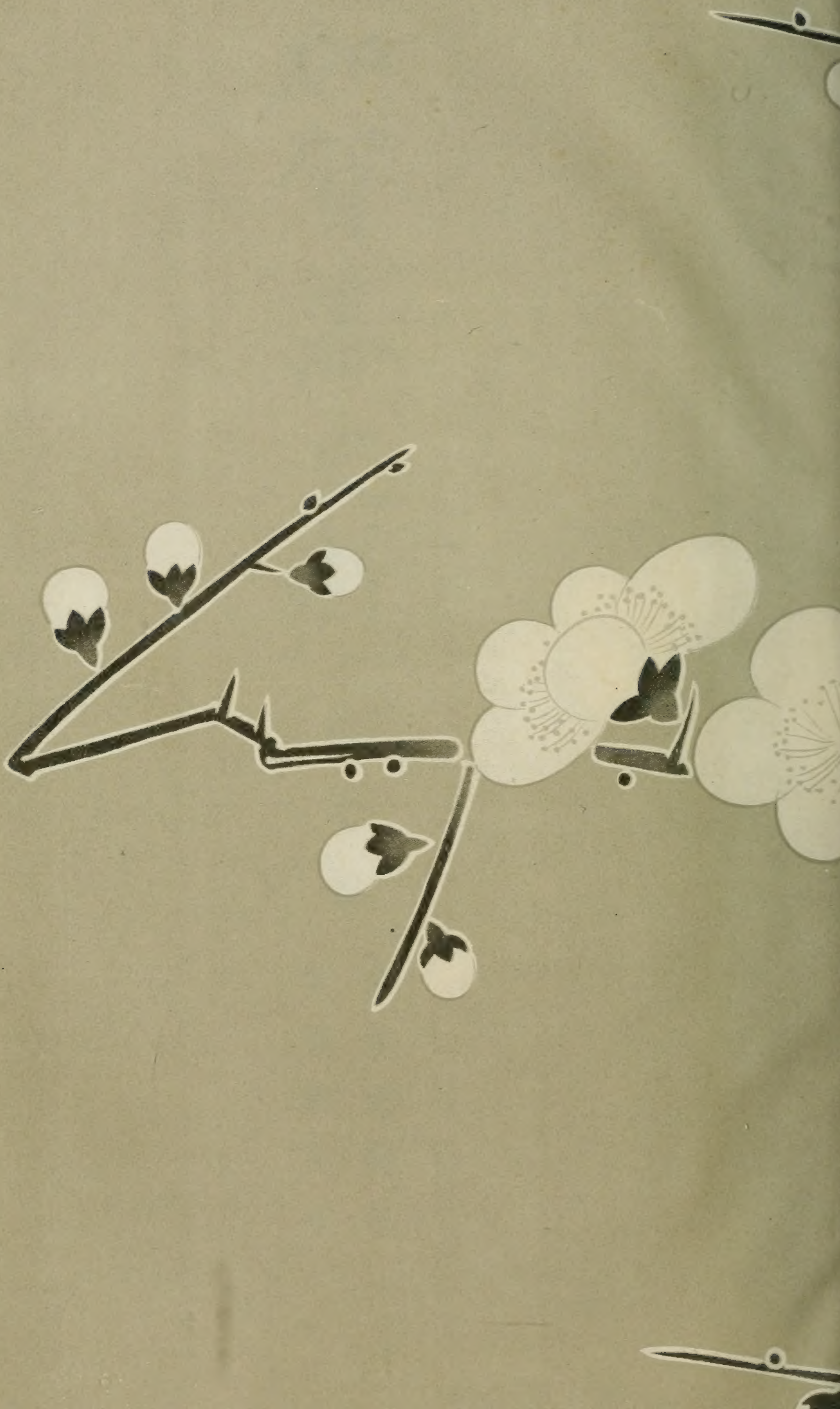


加賀藩史料

第七編

自元文參年
至寶曆七年

加賀藩史料第七編

元文三年

正月朔日。諸大夫、年頭の禮の服裝に長袴を用ふ。

〔御年譜〕

一、年頭御規式如例。但諸大夫中裝束今年長袴に相成。鶴之㕝丁山崎武右衞門勤之。

正月二日。前田宗辰初めて柳營に登り年頭を賀す。

〔御年表〕

正月二日宗辰公御登城、始て年頭御禮仰上らる。公より右御禮の御使者、定番御馬廻御番頭佐久間吉右衞門盛亮を江戶へ差上らる。十六日發出。

公よりは前田吉德

正月八日。十村等に命じて農事の勸奬を懈るなからしむ。

〔司農典〕

覺

一、當春者雪も無之、野早成年に候條、追付荒起爲仕可申候。但山方稼を以致御收納候村々

者、時節不後様稼も仕、且亦改作方無油斷相心得させ、里方者麥・菜種之手入、并荒起等情爲出可申事。

一、用水普請、早速可申付事。

一、種池拵、早速可申付事。

一、彼岸中日一統爲種漬可申候。奥山之雪有之所に而も、雪を取除、彼岸中日必定爲種漬可申事。

一、苗代拵、念を入可申付事。

右之通村々組合頭・長百姓共ゟ申渡置、支配之十村彼岸中日前より村廻仕、荒起等并養用意見屆可申候。廻口御扶持人者三月致村廻、麥・菜種之様子可申達候。此外支配之十村、植付頃且又草修理仕候時分、其上秋に至り麥・菜種蒔植仕候頃相廻、情を爲出可申候。廻口御扶持人者、前之外植付仕廻候頃与、二百十日之時分、都合年中三度村廻仕、村々之様子委細可申達候。跡々より村廻仕候得共、組并廻り口村々、不殘相廻り候者無之段相聞候條、今年より古格之通、一村も不殘村廻仕、罷出候前に末々ゟ不申聞、不圖相廻り、村々情不情見屆置可申候、以上。

戊午正月八日

改作奉行

正月十二日。河北郡に於いて製造する紙の種類を調査せしむ。

〔加州郡方舊記〕

御支配所に而、爲御用漉出候紙之外、商賣紙漉出候、紙別紙之通今以商賣等に漉出申候哉、又は外に品違申紙茂出候哉、跡々より漉出紙、當時相止申品茂有之候哉、委細御申聞可有之候。則先年漉出候品々別紙之通に候間、增減付札に成共御記可被指越候、以上。

正月十二日　　會所

闘屋佐左衞門殿

林源太左衞門殿

上書　紙漉出申村々相尋委細書上申帳

元文三年二月　　河北郡御所村　長次郎

一、大奉書　高一尺四寸、幅一尺九寸二歩

一、中奉書　高一尺二寸二歩、幅一尺七寸二歩

一、延小奉書　高一尺一寸三歩、幅一尺六寸一歩

一、小奉書　高一尺五歩、幅一尺五寸二歩

一、大杉原　高一尺一寸九步、幅一尺七寸九步

一、中廣杉原　高一尺一寸二步、幅一尺七寸

一、中ノ上包紙　高九寸四步、幅一尺五寸六步

一、大高檀紙　高一尺五寸三步、幅二尺一寸七步

一、玉子奉書　高一尺二寸六步、幅一尺七寸八步

一、御書杉原　高一尺三寸、幅一尺八寸七步

一、御捻奉書　高一尺二寸六步、幅一尺七寸八步

一、新御捻奉書　高一尺二寸六步、幅一尺七寸八步

一、新御好小奉書　高一尺一寸三步、幅一尺六寸一步

一、御元結紙　高一尺三寸四步、幅一尺七寸八步五厘

一、御書替紙　高一尺二寸五步五厘、幅一尺七寸八步五厘

一、御捻御書杉原　高一尺二寸二步、幅一尺八寸

一、上ノ上包紙　高九寸四步、幅一尺五寸六步

一、御書上包紙　高八寸一步、幅一尺五步

一、御鼻紙　高八寸一步五厘、幅五寸九步

幅二尺五寸なるべし

一、色合御好奉書　高一尺二寸二歩、幅一尺七寸二歩
一、十色御鼻紙　高八寸一歩五厘、幅五寸九歩
但、色白・濃淺黄・薄淺黄 薄紅・濃紅・濃紫・黄・薄紫・もえぎ・かき。
一、五色杉原御鼻紙　高五寸五歩、幅二寸二歩五厘
但、色白・濃淺黄・濃紅・紫・黄。
一、五色布目御書杉原　高一尺二寸二歩、幅一尺八寸
但、色右同斷。
一、五色杉原御鼻紙　高六寸六歩、幅四寸六歩
但、色右同斷。
右之外茶・薄かき・朱染紙、御好次第漉上申由。
一、御好捻奉書　高一尺二寸六歩、幅一尺七寸八歩
一、御好大高奉書　高二尺、幅二寸五歩
一、奉書うち曇　高幅時々御好次第漉上申に付、覺無御座候由。
一、うち曇ある紫入　高幅右同斷
一、ちり入腰張紙　高幅右同斷

付札は元文三年のものなり

一、並中廣杉原　高一尺一寸、幅一尺七寸
一、並　杉　原　高一尺五歩、幅一尺五寸二歩
一、大　　杉　高八寸、幅一尺一寸八歩
一、中　　杉　高六寸六歩、幅四寸六歩
一、小　　杉　高五寸七歩、幅四寸二歩五厘
右三十五口、爲御用河北郡二俣村より漉上申由。
此所付札。此三十五口御用次第に漉出申由。
一、延中杉御鼻紙　高六寸五歩五厘、幅九寸二歩
一、並　大　杉　原　高一尺一寸九歩、幅一尺七寸九歩
一、折中杉原御鼻紙　高六寸六歩、四寸六歩
一、紙　漉　杉　原　高一尺五歩、幅一尺五寸二歩
一、生漉延中杉原御鼻紙　高六寸五歩五厘、幅九寸二歩
〆五口、御書立に御座候得共、新出來に付書上申候。
此所付札。此五口近年御好にて漉上申候。
一、大　　廣　高一尺一寸九歩、幅一尺七寸六歩

但高幅町方紙屋より好次第、二步・三步宛高下御座候。

一、中　廣　高一尺一寸、幅一尺七寸　但右同斷。

一、御　本　高一尺、幅一尺五寸三步　但右同斷。

一、半　紙　高五寸五步、幅一尺七寸　但右同斷。

一、中　杉　高六寸五步、幅四寸六步　但右同斷。

一、小　杉　高五寸八步、幅四寸一步　但右同斷。

一、小奉書　高一尺三步、幅一尺五寸　但右同斷。

一、高長奉書　高一尺七寸五步、幅二尺五寸

一、紙漉半紙　高五寸四步、幅一尺六寸九步

但高幅町方紙屋より好次第、二步三步宛高下御座候由。

一、紙漉中杉　高一尺八步、幅一尺六寸八步　但右同斷。

一、漉返中杉　但高六寸四步、幅四寸五步　但右同斷。

一、ち り 紙　高七寸七步、幅一尺七步　但右同斷。

一、赤　紙　高七寸七步、幅一尺七步

〆十三口、河北郡二俣村より商賣紙漉出申由。

此所付札。此十三口御好次第に漉出申候。

一、杉　原　高九寸、幅一尺三寸五歩

一、漉返半紙　高五寸五歩、幅一尺六寸

一、薄墨紙　高九寸、幅一尺三寸

一、薄墨半紙　高五寸五歩、一尺六寸

一、ちり紙　高八寸、幅一尺

〆五口、河北郡野村より商賣紙に漉出申由。

此所付札。此五口之内薄墨紙・ちり紙、此二品漉出申候。但高幅少々宛相違御座候。外三口は只今漉出不申候。少々宛相違御座候。

一、杉　原　高九寸、幅一尺三寸

一、杉原半紙　高五寸五歩、幅一尺六寸

一、漉返杉原　高九寸、幅一尺三寸

一、漉返半紙　高五寸五歩、幅一尺六寸

一、薄墨紙　高八寸、幅一尺二寸

一、薄墨半紙　高五寸五歩、幅一尺六寸

一、ちり紙　高八寸、幅一尺一寸

一、漉返ちり紙　高八寸、幅一尺一寸

〆八口、河北郡上田上村より商賣紙漉出申由。

此處付札。此八口之内漉返半紙・薄墨紙・薄墨半紙・漉返ちり紙、此四品漉出申候。但高幅少々宛相違御座候。外四品者只今漉出申候。

一、杉原　高九寸、幅一尺三寸三歩

一、杉原半紙　高五寸二歩、幅一尺五寸五歩

此所付札。此杉原半紙者漉出不申候。

一、漉返杉原　高八寸五歩、幅一尺二寸五歩

一、漉返半紙　高五寸二歩、幅一尺一寸五歩

一、漉返中杉　高五寸五歩、幅八寸五歩

一、薄墨紙　高八寸、幅一尺二寸五歩

一、薄墨半紙　高五寸二歩、幅一尺五寸五歩

一、丁銀封上包中折　高八寸、幅一尺三寸三歩

此處付札。丁銀上包紙中折に而者無御座候。杉原類に漉上申候。

一〇

一、ちり紙　高八寸、幅一尺
一、漉返ちり紙　高八寸、幅一尺
右十口、河北郡銚子口村より商賣紙漉出申由。
此處付札。右十口之内付札之外今以漉出申候。但高幅少々宛相違御座候。
一、杉原　高九寸五歩、幅一尺三寸
一、漉返杉原　高九寸、幅一尺一寸
一、薄墨紙　高八寸、幅一尺一寸
一、ちり紙　高七寸五歩、幅一尺一寸
一、漉返ちり紙　高七寸五歩、幅一尺一寸
右五口、河北郡中村より商賣紙に漉出申由。
此處付札。右五口共只今以漉出申候。但高幅少々宛相違御座候。
一、杉原　高九寸、幅一尺三寸三歩
一、ちり紙　高九寸、幅一尺一寸
右二口、河北郡下荒屋村より商賣紙漉出申候。
一、薄墨紙　高八寸、幅一尺二寸

一、漉返ちり紙　高八寸、幅一尺
右二口、河北郡袋村より商賣紙漉出申由。
此處付札。右二ヶ村分、四品共に只今漉出不申候。
右御支配所に而先年漉出紙品々如此に御座候、以上。
正　月　　會　所
右私組下内紙漉出申村々相尋、委細付札相記上之申候、以上。
元文三年二月　　御所村　長　次　郎
林　源左衛門殿
關屋佐左衞門殿

正月二十日。十村等の職務に關する心得を諭す。

〔司農典〕
一、改作之御法近年者心得違いたし候者有之躰に候條、古き御格を覺候者に立寄委細に承置、組支配等嚴重相心得可申候。若難相知儀者改作所に可尋事。
一、其方共早速在所に立歸り、荒起等之儀別紙を以申渡候通相心得、油斷仕間敷候。來月に入候はゞ致村廻、何日に罷出何日に相仕廻候由可申達事。

一、代官算用等相遂候旨に而金澤長逗留仕候儀不宜候間、算用相遂候儀有之候はゞ、其段及斷、指圖を請手代を殘し置可申事。

一、惣而上納銀手代・番代に取捌爲仕候与も、夫々奉行人請取切手を當座に取受、紛失無之樣相心得可申事。

一、代官米致皆濟候者、早速算用帳相調、免相指引念を入見屆、以後に至り紛敷儀無之樣相心得可申事。

一、御扶持人幷平十村致村廻候儀、先達而申渡候通、村々不殘相廻、村切之田畑等有所見屆置可申候。拙者共致村廻候刻、村に寄田畑等之樣子相尋候節、不案內之族有之候はゞ可爲不念候條、兼而其心得可仕候事。

一、改作方之儀其方共本役に候條、外御用にかこつけ、村廻延引等仕間敷候。及老年に行步成兼候歟、病氣等之者は名代誓詞申付置候者爲致村廻、其段可及斷に候。名代役申付候者無之候はゞ、憖成手代嚴重申付致村廻、其段も可及斷に候。何之故障も無之、手代等相廻候儀仕間敷事。

一、其方共金澤詰番之刻、村廻時節に向候はゞ、同郡無組十村に申談振替可申候。詰番手代指出申間敷候、名代人無之者は、時節に寄手代請承屆候儀も可有之候得共、無組御扶持人申

少高は小高なるべし

談候得ば指支候儀無之筈に候事。
一、御郡に寄、手振之御扶持人無之所に、名代人幷手代詰番相願候はゞ、樣子次第可承屆事。
一、其方共妻子共迄、衣類等之儀不相應之儀無之樣相心得、末々迄も急度申渡、奢たる仕形無之樣可仕候。此儀は數度申渡置候得共、等閑之樣子も相聞候條、左樣之族有之候はゞ相咎可申候事。
一、近年切高仕候者多有之候。百姓共不精故に候條、無油斷申付、猥に切高不仕樣爲相心得可申候。無據切高仕者有之候はゞ、念を入切高請取候百姓承屆可申候。表向者何村誰と申成、下に而は無故者にも切高相渡置候由取沙汰相聞候條、向後右之族於有之に者、其村之肝煎・組合頭者不及申に、五ヶ村組合之肝煎・組合頭不屆、第一十村可爲不念事。
一、百姓共高わけ候儀不仕樣、中古より申付置候處、下に而少高之內を致配分置、及難澁に候者も有之由相聞候條、若下に而高わけ置候者於有之に者遂吟味、面出し之百姓に可仕候。向後は高五十石餘致所持候百姓者、勝手次第二男等へ高わけ、面出し之百姓に仕候儀承屆可申候。高五十石以下之百姓高わけ候はゞ可爲曲事事。
一、御改作被仰付候時分、諸郡へ作食米御貸渡、春之內兩度に致配當候儀、各存る通に候。依之秋に至り候得ば、一番に作食米返納之物を十村見屆、帳面に記、改作所へ指出候得者、

指置は差置にて加へ置く義なり

作食取立奉行指出、御藏納見屆、御藏戶前に封印致御格に候處、中古より忽に相心得、冬に至り作食積物帳面指出候條、向後者作食積物帳面九月晦日可指出事。

一、每歲收納米步入之儀、古格之通相違無之樣可相心得候。近年は役人を相極、秋に至り度々爲申談候得共、向後者役人指止候條、御定之通步入帳一ヶ月に兩度充相認、改作所へ可指出候。村に寄、米出來遲速有之儀に候條、早稻・中稻多作候村々より多爲斗、組切之步入無相違樣可仕事。

一、組持十村中鍬手米取立候儀子細有之、往古者鍬手米取立致御藏納置、十村肝煎之働次第一人に三四十俵宛被下候處、中古より鍬手米取立候儀不及斷に候。向後者鍬手米取立候員數每年可及斷に事。

一、いたづら者有之手鎖を指置候儀、御郡奉行等より指圖之外、下に而手鎖指置候儀、五・七日より日數多縮仕置候者有之候はゞ、夫々申斷禁牢可相願候。數日手鎖指置不申候而不叶者は、其品可申斷事。

一、每年收納皆濟、往古者十二月廿日切に候處、中古より十一月晦日切皆濟爲仕候樣申渡置候得共、冬作之手入等閑に相成候間、向後者古格之通、十二月廿日迄之内皆濟狀取立、改作所へ可指出事。

附り、秋縮之書付指出候以後皆濟仕候儀、各働次第たるべく候。十二月廿日以後皆濟仕候はゞ可爲曲事候。

右之通嚴重相心得可申候。此外追而申渡品も可有之候、以上。

戊午正月廿日

中村勘太夫
大塚彌五太夫
栗田源右衛門
不破門左衛門
丹羽伊太夫
横山三郎兵衛
熊谷四郎兵衛
芝山三郎左衛門

諸郡御扶持人・平十村中

（中村勘太夫以下は改作奉行なり）

右改作奉行中帳面之通急度可相心得者也。

御算用場

正月廿九日。本鄉邸の作事門等類燒に罹る。

先月は正月
造酒丞は大聖寺侯前田利道

〔大野木克寛日記〕

先月廿九日江戸無縁坂町屋より出火、折節風烈敷餘燼他に及ぶ。就中造酒丞様御屋形不殘燒失、本郷御館御作事御門幷割場之役所等燒失。兼而は今月十九日幸姫様眞田殿ゟ御入輿之筈に候所、右御類燒に付暫御延引之由、此等之趣今朝江戸御留守御用前田將監より及注進と云々。

〔政隣記〕

正月廿九日江戸無緣坂講安寺門前町家より出火、同寺、造酒丞樣御本家幷御長屋、出雲守樣御長屋迄十五筋、此方樣割場御作事所火消道具置所御類燒、午上刻出火未刻鎭火。

三月四日。前田利和の抱守を辭したる中吉助左衞門遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月、勢之佐殿御抱守左之人々ゟ初而被仰付。

寺西傳左衞門・岡山藤兵衞・中吉助左衞門。

右助左門者、組外七人扶持外十五俵之被下高に候處、小身を申立不相勤、右御役御斷申上候處、不屆に思召候に付、三月四日遠慮被仰付。御番頭大河原八郎左衞門・庄田主稅ゟ、右御斷之書付致與書取次候儀不調法に候。急度被仰付樣も可有之候得共、其儀者先御用捨之旨被仰出。

三月十一日。嫁娶を行ふ人家に石礫を投ずるの禁令を勵行せしむ。

〔國事雜鈔〕

舊臘礪波郡野原村百姓八右衛門与申者、せがれに致嫁娶候處、大勢立集り礫を打、八右衛門儀石に當り相果申候。前々より、嫁娶之砌石を打候儀不仕樣に、町方・御郡方等停止に申渡置候由に候へ共、右之通に候間、向後急度申渡候樣、町奉行幷御郡奉行等に被仰渡可然奉存候、以上。

三月朔日

藤田求馬
富田織部
伊藤內膳
山崎庄兵衛

本多安房守樣

舊臘礪波郡野原村百姓八右衛門与申者せがれ致嫁娶候處、大勢立集り礫を打、八右衛門儀右に當り相果候旨、公事場奉行別紙之通申聞候。右之節石打候儀は御停止に候處、近年猥に罷成右之族に候條、向後之儀は急度相心得候之樣に、御郡方之者共に可被申渡候、以上。

三月十一日

本多安房守

横山兵庫殿
奥村彈正殿
松原善右衛門殿

三月十一日。大聖寺侯前田利道幼年なるを以て加賀藩より横目を派遣す。

〔政隣記〕

三月十一日御横目青木彦太夫大聖寺ゐ被遣之。十八日歸着。造酒丞樣就御幼少、大聖寺御家老中より依願御横目遣之、此始而也。此以後年中兩度程宛被遣筈也。

四月十一日。前田重靖金澤觀音院に宮參を行ふ。

〔政隣記〕

四月十一日嘉三郎殿卯辰觀音院ゐ御宮參、四時御出。三御丸通大手より御參詣、御歸七十間御門御入、金谷御廣式ゐ御立寄、又七十間御門御出、甚右衛門坂より土橋御門通、九半時頃御歸。騎馬御供御留守居物頭原九左衛門、御近習御持弓頭三輪藤兵衛、御先御待受定番御馬廻番頭杉江杢左衛門（御廣式御用兼候故也。）右に付今朝御時服五・御箱肴、從中將樣御近習頭伊藤六郎左衛門を以被進之。從嘉三郎殿も干鯛一箱・御樽代三百疋、御廣式御用達宮崎左兵衛を以被上之。右御使ゐ金二百疋宛被下之。騎馬御供人等ゐ絹或綿等、其外定番頭初御廣式附ゐ、夫々御先

參議公は前田綱紀
當上樣は德川吉宗

例之通被下方有之。其外都而如御前例。

五月三日。稻新助・內山覺仲の幕府より助修を命ぜられたる庶物類纂續集成る。

〔可觀小說〕

一、若水嘗而語某云、庶物類纂正編千卷は專漢名慥に相知れ無疑品々迄を載之候。和名のみにて漢名未慥品々者、續篇に載之申意得に而、是亦千卷に及可申候。植類に而申時、さくら・かへで等迄にても其種類甚夥候旨。

一、稻若水編集庶物類纂、存生之內出來三百六十二卷、金澤御文庫江納有之候。若水兼而之存寄は、一書廿四部千卷之筈に候處、其功未成候而病死に付、參議公一部千卷に成就被仰付度、若水弟子內山覺仲江被命候。續集・後篇などゝは無之、不足を補入仕候樣に被仰付置候處、未及筆記以前御逝去に而其分に罷成候。享保十九年甲寅當上樣上意を以、若水嫡子新助及內山覺仲を東都江被爲召、丹羽正伯總裁被命、元文三年迄五年にして補書六百三十八卷出來、都合千卷成就。五月三日献納し了る。新助は其功半にして病死也。元文三年夏覺仲御暇被下候節、正伯迄申含候は、本書三百六十二卷金澤文庫に有之、新篇六百三十八卷無之候而者、故參議公志者空敷罷成候樣に御座候。何とぞ繕寫被仰付、一部千卷に仕文庫江納度趣申

述候處、其段達上聞尤に思召、先今年歸鄕仕致休息可申、來年被爲召、六百三十八卷爲御寫可被成との趣に而罷歸候。今春被爲召、四月上旬東海道を經候而罷越候樣に、正伯奉之申來候に付、三月廿一日金澤首途上京、京師より東都へ罷越候。

一、覺仲去夏御暇可被下前、正伯を以御內意被仰出候者、今度類纂成就仕候に付御褒美可被下候得共、金銀米錢等被下候分に而者、當座之祝事迄に成、其身之爲に難成候。覺仲にも不限相加り申者共迄も、主人々々之家に而、或は先祖以來之知行減少仕候と歟、又は家業難取續と歟、ヶ樣之筋望次第に可申上候。加增・新知等に而も可被仰渡候。其外望次第、江戸城御下町並に而屋敷歩數過分に被下、貸屋等仕、子孫迄も產業に可罷成候。又は武藏・相模・安房・下總等之內に而、藥園等之爲に田地五萬畝計も可被下候。此兩品は舊例も有之、御代々被下置候而只今罷在候も有之候。莵角望次第之旨被仰出候。覺仲追而御請可申上旨申達置、翌日正伯宅に迄參申候は、昨日御內意之趣奉承知、誠以難有次第可申上樣も無御座候。私儀者自餘与違、於加州は累代相勤、肥前守時分は別而先祖覺仲懇意に召仕、覺仲町と申今以越中國に町並迄も有之程之儀に御座候得者、江戸御城下に而屋敷拜領仕事与、近國に而過分之田地拜領仕事は尤願無御座候。加增等之儀は、惣而主人之胸中より出不申儀は迷惑仕候故、願不申上候。ヶ樣之存念、憚多事ながら可然御請被仰上被下候樣にと申述致退出候。則其趣御近

覺中は覺仲

御名は加賀守

習頭共迄具に奉達御内聽候旨、直談に申聞候。去年七月御參勤前御加增百石被下候。

〔政隣記〕

五月三日。稻若水編集庶物類纂三百六十二卷、享保四年吉宗公松雲公江就御所望被上之。右之書若水儀、廿四部千卷に仕立候筈之處、其功未成而若水死。松雲公千卷に成就被仰付度、若水弟子内山覺中江御内々被命候得共御用多、且御老後御氣色御不快がちに而其通に成有之所、享保十九甲寅年吉宗公上意を以、若水嫡子新助幷内山覺中を被爲召東都江、丹羽正伯江（若水高弟本草に委し、將軍家江被召出置者也。）依之總裁被命、右若水が編集所殘之六百三十八卷、今年迄に五ヶ年を經て成功、今日獻納之。依て同晦日御用番本多中書殿江聞番被召呼、御渡之御書付左之通。

銀三十枚　　松平御名家來　内山覺中

庶物類纂編集丹羽正伯江被仰付候處、加州より罷越情出し手傳候に付、爲御褒美被下之。

銀十枚　　稻德一郎

庶物類纂編集丹羽正伯江被仰付候處、右類纂前編三百六十二卷は於加州先年出來之砌献上有之候。右之書は其方祖父若水編集に相掛り候事故、去る寅年正伯に編集被仰付候節より、亡父新助儀手傳相勤候處、去巳年相果候。今般後編之書六百三十八卷出來立候に付、其方江白銀被下之。

前田家譜奥泉金兵衞を前田重靖の生母善良院の父に作る、恐くは父子同名なるべし、但しこの金兵衛は本文に據れば善良院の叔父なる如きも、書に兄とするものあり、寛保元年十二月八日参照

右爲御禮、御老中方ゟ御飛札被遣之。

一、若水編集不足之六百餘卷成就せす、續集・後編抔こ無之、先に編集之書不足を補入迄に而、書躰題號不可替旨、松雲公御在世之内兼而覺中ゟ被命故、此度右之趣も覺中就正伯達上聞、題號書躰少も前編に不違等云々。覺中六月江戸發金澤ゟ歸。

〔徳川實紀〕

五月三十日、醫員丹羽正伯貞機庶物類纂の續集を命ぜられたるに、大部の編集こゝに成功せしを褒せられて、銀百枚を賜ふ。其子二人も助修せしをもて、おのおの十枚下さる。これにあづかりし松平加賀守吉德・本多肥前守忠辰が家人にも銀若干、市井の醫二人には金十五兩づゝ給ふ。

六月朔日。前田重靖の生母の族奥泉金兵衞新たに祿せらる。

〔護國公御年譜〕

一、六月朔日御産婦之母儀妙閑弟、新知百五十石組外奥泉金兵衞被仰付。

六月二日。金澤卯辰觀音山崩壞す。

〔政隣記〕

六月二日卯辰觀音山出崎四間計崩、下に有之家潰。死人者無之。

十九日とあるは二十日なるべし宗濕は前田綱紀の女直姫が二條吉忠に嫁して生む所

六月十五日。大槻朝元その祿を加增せらる。

〔護國公御年譜〕

一、六月十五日御加增二百石大槻內藏允、同百石物頭並山村善左衞門、加增百五十石兒玉彌藤次。

六月廿二日。二條宗濕の薨去を弔する爲金澤より使者を發す。

〔政隣記〕

六月十九日夜。二條右府宗濕公先頃より少々御浮腫有之候處、今月十五日强雷御肝に障、御指重之旨、金澤へ申來、御見廻之御使御馬廻組篠嶋政右衞門へ被仰付候處、十八日亥刻薨去之由二十日夜中來に付、(御年廿一、御法名常勸喜院前右丞相尊儀与奉號、御養君は九條樣御次男右君樣御願、則勅許之申來。)政右衞門儀御聞懸御悔之爲御使廿二日金澤發、同日頭分以上爲伺御機嫌登城、尤常服、普請は三日、鳴物・殺生等七日遠慮觸有之。御代香之御使新番頭青地藤太夫廿四日金澤發、七月八日於京都法輪寺御代香相勤。十日京發、十六日金澤へ歸着。江戶へ者廿四日相知れ、佐渡守樣同日一日御遠慮之旨、御用番へ御屆有之。

六月。藩侯の行列に於ける器具服裝等の制を定む。

〔典制彙纂〕

覺

一、竪笠・對挾箱、年寄中幷御家老役ハ勝手次第に候。其外ハ可爲無用事。

一、歩之者布羽織用可申事。

但、中小將ハ絹布之内勝手次第之事。

一、小者等紺色一統仕着相止可申候。着用之衣類、假令色相交に而も不苦被思召候事。

右御行列、尤御前後共、右之通相心得候樣可申達旨被仰出候事。以上。

六月

七月朔日。内山覺仲等幕府の庶物類纂續集補助の任務を終りたるを以て秩祿を增さる。

〔護國公御年譜〕

一、七月朔日御加增百石内山覺仲。白銀五枚・白布三疋充行山傳左衞門・高畠金左衞門。右庶物類纂御用相勤候に付如斯。

七月六日。前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

七月六日卯之刻過金澤御發駕。御供家老本多頼母・玉井市正、若年寄西尾隼人。但、市正は一宿御跡也。

七月十日。本郷邸の大書院・小書院等成る。

〔政隣記〕

本郷御邸、享保十五年御類燒以後、御式臺等者出來候得共、御大書院・御小書院・御舞臺・御樂屋はいまだに出來不仕、今年被仰付に付、去年閏十一月二日記之通、丹羽澤右衞門當二月朔日江戸着諸事申談、内作事奉行三人在江戸飯田勝左衞門・河内山仲太夫・國澤喜内、御大工頭羽十郎右衞門、同六日より御普請事初、四月廿二日御柱建、御小書院より建初之、七月十日迄に不殘出來。

一、御大書院、御書院者富田屋六兵衞、御舞臺御樂屋者和泉屋五郎兵衞請負に而出來。

一、御普請方惣御入用、文金九千五百兩餘と文銀十六貫三百目餘也。

七月十八日。前田吉德江戸に着す。

〔御年表〕

七月六日金澤御發駕、十八日御着府、十九日上使松平右京大夫殿參出。

〔政隣記〕

十八日卯刻過御下邸・御中邸御立寄、辰上刻本郷御邸に御着府、追分御門より中之口に被爲入。御留守詰之頭分、御當代には御迎に不罷出候處、佐渡守様去々年御出府之節被仰出有之、今年より御用に不指合頭分、何も中之口御門内に罷出蹲踞仕。御意も有之。中之口には者佐渡守様・龜次郎殿・勢之佐殿御出迎。御先立者前田將監勤之。

佐渡守様今曉丑五刻御出、御下邸に被爲入御待受、御對顔之上御先に御歸也。

七月廿三日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔御年表〕

七月廿三日御登城、本多頼母政恒・玉井市正貞衛御供にて御同見。

七月。百姓存生の內養子をなし置きたる者といへども相續の際許可を得ざるべからざることを令す。

〔司農典〕

百姓存生之内養子仕候儀、改作所に不承屆候。存生之内養子仕置、二十歳に滿候而も、跡目之砌其旨及斷に、指圖を受申儀古法に候條、得其意、養子仕置致病死候百姓之跡目立之儀、

御扶持人十村役は御扶持人十村及び平十村の義

及斷に候樣相改可申者也。

午七月　　改作奉行

諸郡

八月二日。十村を命ぜられたる際提出すべき誓紙に關して規定す。

〔改作方雜留〕

十村共誓詞申付覺

一、御扶持人・十村役被仰付候節は、十村共一統之誓詞幷見立誓詞、此兩樣之誓詞可申付事。

但、名代役茂同事。

一、平十村より御扶持人十村に被仰付候節は、十村共一統之誓詞は最前之誓詞用申段申渡、見立誓詞迄可申付事。

但、御扶持人十村に被仰付候節は、名相改候はゞ、兩樣之誓詞可申付事。

一、平十村役被仰付候節は、十村一統之誓詞まで申付候事。

但、名代役茂同事。

一、御扶持人十村幷平十村共、せがれ等名代役之誓詞いたし罷在候者、本役に被仰付候節は、身當り之誓詞相濟不申儀故、御扶持人に被仰付候はゞ兩樣之誓詞、平十村に被仰付候はゞ一

統之誓詞迄可申付事。

右先例等致詮議候處如此に候事。

元文三年

右之紙面を以、元文三年八月二日御算用場御横目より改作所江示談之上、右之通相極申事。

竹千代の生誕は元文二年五月廿二日

八月四日。前田吉德、德川家治の生誕を祝する爲老中の臨邸を請ふ。

〔政隣記〕

八月四日竹千代樣御誕生爲御祝儀、御老中方御招請之儀、今朝細井佐次右衛門殿を以、御用番本多中務大輔殿迄被仰遣候處、同日聞番被召呼、大久保八郎兵衛參出之處、九月七日晩各申合可罷越旨御書付御渡。依之爲御禮、卽日御家老本多賴母、御老中方江御使者に被遣、若年寄中江者組頭御使被遣候。

八月十日。能登の十村等に對し欅樹伐採に關する取扱方を令す。

〔御郡典〕

各支配所之内に有之欅木御林之儀者勿論、百姓持山林又者居垣根等に有之欅木伐取度旨相願候共、先指留置被申候。尤跡々より當場江被相達候儀に候得共、向後者各手前に而承屆、寺社方并百姓居垣根之內無據儀者格別、右之通相心得らるべく候、以上。

八月十日　　　　　　　　　　御算用場

村井安左衞門殿

不破忠太夫殿

右之通御算用場より申來候に付、寫遣候條、兼而其心得可有之候。披見以後判形候而、先々相廻、從落着可相返候、以上。

午八月十二日　　　　　　　　不破忠太夫

　　　　　　　　　　　　　　村井安左衞門

能州四郡御扶持人・十村中

八月十四日。大槻朝元の妻歿す。

〔留帳鈔錄〕

拙者娘大槻內藏允妻、產後相滯、不相叶療養致死去候に付、如御定今日より十日之日數致忌引候。爲御案內如此御座候、以上。

八月十四日　　　　　　　　　前田修理

前田圖書樣

〔留帳鈔錄〕

しいひ本の儘、しなび歟

拙者妹大槻内藏允妻女、今晩相果候付忌引仕候。依之兼而達御内聽候通、御用方之儀御自分樣御勤可被成候。支配人方之儀に拙者相勤申候。右爲御案内如斯御座候、以上。

八月十四日　前田大學

前田圖書樣

八月廿一日。幕府より交附せられたる人參種を金澤に送る。

〔兎鷄綱〕

一、朝鮮人參種　一箱三百粒

右公儀より相渡候に付、其表に差越、二百粒は澤村源之丞、百粒は苗加村久左衛門に相渡、爲蒔候樣被仰出候間、可被申渡候。右種三百粒こは有之候得共、殊之外しいひ有之候間、不足仕儀も可有之候、以上。

元文三年八月二十一日　遠田勘右衛門

大塚彌五太夫殿

丹羽伊太夫殿

九月六日。河北郡小坂村にある磔刑場の由來を上申す。

〔加州郡方舊記〕

就御尋申上候。

一、河北郡小坂村領はりつけ場、先年は百坂村往還道脇東之方に而御座候處、六十四年以前小坂村領金くさり川上に一人被仰付、翌年より小坂村領只今之場所に被仰付候由承傳申候、以上。

元文三年九月六日　　御所村　長次郎

九月七日。老中松平伊豆守等本鄉邸に臨む。

〔政隣記〕

九月七日、前月四日記之通、今日御老中方就御招請、松平伊豆守殿・若年寄西尾隱岐守殿、御奏者土井甲斐守殿(兼寺社御奉行)・戸田右近將監殿、大御大目付・町御奉行・御勘定奉行・佐渡御奉行・浦賀御奉行御一人宛、九時過御出。御能、翁三番三傳右衛門・高砂三十郎・羽衣寶生大夫・祝言金札喜内、狂言福の神八右衛門。右御饗應之内段々相濟。伊豆守殿御盃被下面々、本多賴母・若年寄西尾隼人・人持品川主殿・御馬廻頭丹羽武兵衛・御小將頭北川久兵衛・組頭並大槻内藏允、都合六人也。但御老中御兩人御出候得者、組頭以上不殘御盃被下候に付、玉井市正・人持青木新兵衛・定番頭遠田勘右衛門・御小將頭原田外記も相加り申筈之所、御一人御越に付、此四人には御盃頂戴不仕、右之通一役より一人宛に相成候。八半時御退出。御跡祝安藝守様初、

御勝手ゟ御出之御一門樣、於御大書院御吸物・御酒御祝。御跡能鶴龜喜内・祝言吳服彌三郎。畢而七時過御一統御退出。

　但、安藝守樣初、御勝手御出之御方々六十人、坊主衆十人、御白洲見物町人六百四人。

〔政隣記〕

一、今日隨分御首尾好御饗應相濟申候。何も情に入、諸事僉議も仕候故、御首尾も宜、御喜悅被遊候。此段何も申聞候樣被仰出候段、御用勤候諸頭ゟ勘右衞門演述之。

今日御饗應方丹羽武兵衞・北川久兵衞、聞番主付中村勘右衞門也。

一、今日一統熨斗目・半上下、但長袴は前記之通。

九月廿一日。前田吉德、德川家治の生誕を賀する爲一門以下を招待す。

〔護國公御年譜〕

一、九月二十一日竹千代樣御祝御一門樣方御招請、御客方御小書院に而安藝守樣始二十人、同御勝手方御執持御方九人、御書院織田兵部殿始三十四人、御居間書院前田信濃守殿始十九人、同御勝手久津見又助殿始四十四人、御執持兼御用人相詰候席に而吉田長佐等六人、其外御數寄屋組頭初坊主衆三十一人、御廣間溜百人組與力始三十七人、御勝手座敷上之間・二之間懸下役中・御一門樣方御家來・御留守居等三十三人、凡二百三十三人。御料理三汁十菜白木具。

御中入以後蒸饅頭、木具蒸籠。

翁三番叟 彌太夫　弓八幡 彌三郎　八嶋 十左衞門

六　浦 何次郎　藤　榮 宮門

末　廣 彌太夫　から素袍落 忠藏

〔政隣記〕

一、右爲御祝儀、同月廿一日にも御一門樣初幷御出入衆御招請、都合九十八人。御能有之。

一統熨斗目・半上下着用。

是侍御給事相勤候分也。御步以下給仕之分八十三人。

一、同斷、預玄院樣・神田御前樣等御子樣方へ、同月廿五日御料理進、御能被仰付。且頭分以上へ、於御家老席、本多賴母殿被申渡趣左之通。

竹千代樣御誕生爲御祝儀、當七日御老中方御招請、其以後御一門樣方御招請之時分、何も御用情に入相勤候故、御首尾能相濟、御喜悅被思召候。依之今日御能見物被仰付候間、緩々可致見物旨被仰出候。

右畢而御老中方者二汁七菜、頭分以上は二汁五菜御料理被下之。御家老席へ者御前御出御意、御酒之內御使御近習頭。頭分席へ者御家老中を以、御料理之內御意有之。

一、同日着服廿一日同斷。且本阿彌・後藤家・町醫師等五十五人計、御能見物被仰付、御料理被下之。

一、同日御歩以上御能見物可被仰付旨被仰出候段、御横目中申談。

九月。凶作なるを以て免切を許すべき村数を協議決定す。

〔改作方雑留〕

元文三年洪水、其上虫指に付、作躰以之外悪敷成候旨に而、諸郡より見立願候に付、段々詮議有之候へ共、見立無之候而は難叶趣に付、御扶持人共へ申渡、先内々に而願村書出候様に申聞候處、見分之様子上中下に分け、惣村数二千二百十七ヶ村書出申候。依之精誠僉議数度、申渡左之通相極申候。

古例不作之節、御扶持人等内見分仕儀、改作所ゟ致内達、指圖を請申儀に候處、此度内達も不仕遂見分候儀、沙汰之限之段、大塚彌五太夫急度相尤候。

一、段々僉議之上願村数千十五ヶ村に相極り、先之右之村数損毛高中勘に相しらべ、大概何程計之免切に可相成哉申儀内ならし致し、御算用場奉行中へも猶更致内談、免切に可罷出趣に決定之上、乞帳指出候様に申渡候事。

一、乞帳之表を以、中勘損毛高しらべ申様子、左之通に候。

覺

能美

一、六萬九千三百三十九石二斗八升六合

定納　一萬四百石九斗

口米　千百六十四石九斗一升

石川

一、九萬千六百七十一石

定納　一萬三千七百五十石六斗五合

口米　千五百四十石七合

河北

一、五萬二千二百六十七石三斗四升五合

定納　七千八百四十石一斗一合

口米　八百七十八石九升一合

羽咋

一、四萬八百六十石六斗

定納　六千百二十九石七斗五合
口米　六百八十六石五斗四升二合

鹿　嶋

一、二萬九千七百二十三石
定納　四千四百五十八石四斗五升
口米　四百九十九石三斗四升六合

礪　波

一、十三萬四千二百七十六石六斗六升二合
定納　二萬百四十一石四斗九升九合
口米　二千二百五十五石八斗四升八合

射　水

一、八萬二千八百二十五石六斗四升三合
定納　一萬二千四百二十三石八斗四升六合
口米　千三百九十一石四斗七升

右七郡草高

〆五十萬九百六十三石五斗三升六合

定口

〆八萬三千五百六十一石三斗二升

覺

一、百二十六ヶ村　能美郡

一、百六十八ヶ村　石川郡

一、百三十七ヶ村　河北郡

一、百　二　ヶ村　羽咋郡

一、五十七ヶ村　鹿嶋郡

一、二百八十二ヶ村　礪波郡

一、百四十三ヶ村　射水郡

〆千十五ヶ村

右村々當作見立相願申候。今年之儀、植付以後草生宜相見候處、五月中大雨に而度々洪水仕、水損御座候得共、土用中天氣相直り候に付作躰宜相成申候處、七月半過より長雨に而水損彌增、其上虫指にち痛も有之、存之外不作仕由に而、御郡々御扶持人共遂見分見立相願申に付、

精誠吟味仕相願候。村数之内爲相減、右之通に相極候。私共追付御郡々江見立に罷出申候、以上。

午九月

改作奉行九人
内中村勘太夫江州御用

横山兵庫殿
奥村彈正殿
松原善右衛門殿

十月十三日。金澤小立野の水道内より小兒の首三個を發見す。

〔寸錦雜志〕

元文三年十月十三日夜中之事に候哉、金澤小立野水道の内に一・二歳計の首三有之、及斷に付、檢使與力罷出改候處、何者之所爲に候哉終に相知れ不申候。其節男女之差別檢使共不分明、只小兒之首与迄致見分候事。

十月廿六日。本鄕邸前の附近にて發見したる棄兒を廣式に收容して扶育す。

〔政隣記〕

造酒丞は大聖寺侯前田利道
御袋方は前田宗辰の生母淨珠院

十月廿六日造酒丞樣御物見下に、當歳之男子捨有之、御目付衆ゟ前々之通御屆可仕旨聞番言上、東御門續に而乳爲給置候處、御廣式に而育申度由御袋方被申、御廣式ゟ相渡候處、後捨五郎与號く。異相者也。袂之内に元文三年午九月十九日之朝七時出かんかつしと有、解不申与云々。

十一月十日。幕府より交附せられたる人參の實生を金澤に送致す。

〔兎鷄綱〕

人參實生十本一箱

右此方樣に而人參之生立宜敷有之に付、日光にて寅・卯兩年之實生取交被進旨に候間、御國差越、澤村源之丞・苗加村久左衛門ゟ、五本宛可相渡旨就被仰出候。栽領足輕兩人申付、人足持に而指遣候。到來次第右兩人ゟ御渡可有之候、以上。

元文三年十一月十日　遠田勘右衛門

横山兵庫殿
奥村彈正殿
松原善右衛門殿

猶以寅・卯は五年・四年之由に候に付、札も無之樣子に候間、植付申時分若札相見ゟ候はゞ、

其儘、「置候様に御申渡可有候。將又根之大さ之様子重而可被仰越候。日光は殊之外寒氣強之所由に候。左候得ば寒じ申所も宜敷候哉与存候。植付心得にも相成可申候間、此段も御申聞可被成候、以上。

十二月朔日。大に雪降るを以て城中に三千餘の人夫を使用して之を除かしむ。

〔改作方雜留〕

一、午十二月朔日夜深雪に而、明二日御城中日用三千三百人御用に候處、日用頭共手前より七百人指出候得共、殘分御郡より可差出旨、御算用場御奉行より大塚彌五太夫迄急に申來候。此儀御郡奉行支配之儀に候得共、急成儀に付卽刻彌五太夫より、十二月朔日亥下刻之刻付印形之紙面を以、野々市村庄左衞門・上野村十右衞門・淵上村源五郎・御所村長次郎・押野村宇右衞門、此者共へ一通宛相渡、人數有次第指出候様に申渡候。翌日御郡奉行へ引渡也。

一、日用頭共より指出候七百人之分は、御定之口錢日用頭取申候。御郡方より出候分は、日用頭へ口錢相渡不申段、割場奉行へ示談有之様に、御算用場奉行中へ申達候。尤御郡より出候日用は、割場迄爲相詰可申旨、十村共へ申遣也。

十二月廿二日。前田宗辰袖留の儀を行ふ。

〔政隣記〕
十二月廿二日佐渡守樣御袖留之儀、當十五日御用番松平左近將監殿迄被仰達、今日御袖御留被遊候。元祿十六年中將樣御袖留之諸事御同事。

〔護國公御年譜〕
一、十二月二十一日少將樣御袖下被留候に付、御祝御囃子有之。

日附前文と相違す

十二月廿五日。前田吉德の生母明年侯の五十歲に達するを祝して物を贈る。

〔政隣記〕
十二月廿五日中將樣來年御五十賀之爲御祝儀、從預玄院樣御附頭小幡平三を以、縮緬三卷・二種・五百疋・御行器餅一荷・鮮鯛一折ニ被進之。右爲御禮、御近習頭鷹栖左門を以、預玄院樣に綿廿把・二種・千疋被進之。

十二月。物價高直なるを以て在江戶の小者の給銀支給法を改めしむ。

〔政隣記〕
今月在府之小者共月俸料輕賦成を歎き訴之。依之金澤之跡扶持不被下並之者共、一ヶ月分中

今月は十二月なり

勘御扶持方代被渡下之、當五月迄は文字銀に古銀三分二相交、百目百三四五十星之平均に被下、六月よりは公儀被仰渡之通、不殘文銀を以百八・九十星餘被渡下。米穀諸物日々高貴也。暮より翌年に至り月俸次第に増被下。

是歳、氣候順ならずして領内の收穫大に缺損す。

〔政隣記〕

（去冬は元文二年）

去冬よりも寒氣薄く、初春梅・椿等之花早く、東武には元日之頃八重之白桃なども咲、菜種之花も駿州等に舊臘より咲、北國等も正月より咲、雨繁く、五月別而霖雨、諸國洪水多く、大井川廿日餘りも御逗留之御大名方多く、諸物拂底高直無比類。下賤之旅人無貯者は衣服等代替、志候方迄不得行、空く本國に歸る者も多し。富山之御領洪水多く、御損毛八萬石餘、西國も損毛多く、御領國秋迄長雨度々にて不作、三ヶ國御損毛現米十五萬石餘、公邊に之御屆草高八十二萬五千百石餘。但江州御領共也。御家中引免多候處、加州分御引足米十一月廿四日被下之、越能分は今月廿一日被下之。今年七月初越能米一石代四十星餘之處、追付高貴に及、十月に八・九十星、今月猶高貴也。至冬東都雪四・五度降、尺或尺二・三寸、凍甚く、金澤十二月朔日頃三・四尺餘之雪積、其後深雪に不及、至春段々消。

（今月は十二月）

正月朔日。前田吉德病むを以て年頭の禮を缺く。

〔重煕公御年譜〕

一、正月元日、中將樣去暮より御風氣に付御登城御斷、龜次郎殿年頭御禮今日被爲請間敷旨昨日被仰出。年始御祝詞中將樣より龜次郎殿に、今日御箱肴一種被遣、御使丹羽澤右衞門御先手物頭御近習頭。

正月廿二日。村肝煎交迭の際屆出の手續を令す。

〔御郡典〕

一、無高所肝煎代り之儀、田地方指加申儀無之分者、御郡奉行に迄願之事。

一、宿方肝煎田地も支配仕候得者、御郡奉行・改作奉行連印之事。

一、田地方に指加り不申宿方、尤御郡奉行に迄願之事。

一、浦方肝煎立代りも右同斷。

右之趣辛亥五月一統へ申談置候得共、今般詮議之趣有之、重而相改、先規之通改作奉行連印に而願紙面可指出候、以上。

己未正月　　　　　　　　　　　　　御算用場

村井安左衛門殿

不破忠太夫殿

右之通御算用場より之紙面、爲心得寫遣候條、可得其意候。披見以後判形候而相廻、落着より可相返候、以上。

未正月廿二日　　　　不破忠太夫

村井安左衛門

能州四郡御扶持人・十村中

正月廿五日、徳川吉宗、前田吉徳に鶴を贈る。

〔政隣記〕

正月廿五日、上使御使番加藤左兵衛殿を以、御鷹之鶴御拝領、御作法如前々。但左兵衛殿、御家老之内ゟ御逢可被成候段御申聞之旨に付、御大書院寄附御廊下迄本多頼母出候處、御取持前田帯刀殿右御廊下御敷居左之方に御出、是ゟ御申に付、御敷居之内三疊目竪疊ゟ出候處、左兵衛殿御申聞候は、今日被下候鶴少々疵有之候。是は野先より之疵に候。此段各迄爲念申達候間、宜取計候様に被仰聞に付、承知仕可申聞旨頼母及御答、則達御聽候。御請之時分、

右之御挨拶も被仰渡候事。但二月廿一日御披有之、御作法如御例。

二月四日。前田利和着袴の儀を擧ぐ。

〔政隣記〕

二月四日勢之佐殿御着袴に付、爲御祝儀御時服五・御上下二具・御箱肴、御使御近習頭野村七兵衞を以被進之（のしめに而相勤。）七兵衞に金二百疋被下之。從勢之佐殿も鯣一箱・御樽代三百疋、御抱守遠藤五左衞門を以被上之。（金二百疋被下之。）御居間書院勢之佐殿御禮被仰上、御太刀披露若年寄西尾隼人、御取合御家老玉井市正、御太刀目錄隼人引之、御熨斗三方御表小將持出、（のしめ着用。）御前に上之、御手自被進之。

二月十八日。平井吉左衞門その若黨等の爲に殺さる。

〔政隣記〕

二月十八日於金澤、御馬廻組青木新兵衞元組知行高三百石歳六十平井吉左衞門、（最前御大小將之處、勤方不宜組外に被仰付、去年組方之節御馬廻に入。）若黨吉川政右衞門に被刺殺。是裁許人中田儀左衞門与申者申合、其外若黨・小者何も致同意手傳候由。政右衞門兄吉川淺右衞門与申浪人も申合候由也。扨吉左衞門急病之旨、一家山本五郎左衞門、近所杉野善兵衞・石黑平次右衞門抔にも、晩景に至り及案內。五郎左衞門病後に付、給人を早速見廻に遣候處、異變之躰故、五郎左衞門に右給人より押而早速

罷越候樣申遣候に付、五郎左衞門參出、其內近所之善兵衞・平次右衞門も罷越、儀左衞門初縮仕、相頭人江八郎右衞門ゟ及斷得共病氣に付、御用番溝口舍人幷伊藤彥兵衞も罷越取曖之、檢使御橫目坂野藏人・渡邊喜左衞門見屆之。十九日公事場奉行宅に而、儀左衞門等吟味之上禁牢。政右衞門者醫師不破元澄ゟ使に參、夫より逐電、五郎左衞門等罷越候節も不在合。然所兄淺右衞門、才川玉鉾邊に而身を投候を見屆候由申に付、御郡方より才川搜索候得者、政右衞門尸取揚に付、鹽詰に致置之。惣而今度殺逆之徒、父方之分者いとこ以上禁牢、母方幷養子に參候者は、先其分に仕置候樣、年寄中之僉議に而極る。御馬廻組由根源太夫母は政右衞門をばに付、源太夫ゟ被指預旨、源太夫頭土肥庄兵衞迄、廿八日公事場奉行中より申來、則申渡之。政右衞門母者御鷹方御步永井梶右衞門娘にて、致禁牢に付、梶右衞門儀も外祖父故指扣被仰付。

〔護國公御年譜〕

一、二月十八日晝以前、小立野鷹匠町御馬廻頭入江八郎右衞門組三百石平井吉左衞門家來、若黨・裁許人等三人小者兩人申合、兼而相巧候儀に而、其朝若黨之內吉川政右衞門と申者に髮を爲結、表居間に罷在、髮付無之とて勝手へ被立、罷歸候節、側に差置候脇指其儘差置勝手へ罷越、髮付を取被歸座候所、右政右衞門彼脇指を以吉左衞門橫腹を突徹し候所、吉左衞門

も日頃すこやか成者、右手負ながら彼若黨を組伏候所、裁許人其外若黨・小者立懸りひたと切申候由。此音を聞、吉左衞門召仕候妾長刀を拔持出候得ども、戶を閉難入候内とやかく仕候所、彼女を奥へ押籠、其外下女等をも一所に奥へ追込、戶口に番を附置候所、下女之内隣家塀越に爲致告知らせ候に付、隣家より入江八郎右衞門病氣に付溝口舍人へ案内いたし候に付、舍人早乘に而駈付、右妾口上を承家來ども夫々致縮候内、彼政右衞門は直に逐電いたし候所、四・五日立、犀川乞食小屋之邊に而致入水相果居申候に付、當分何者とも不相知候。公事場へ相渡吟味之所、奉行藤田求馬承及候事有之候間、彼政右衞門母を呼、彼屍を爲見候所、躰も損じ聢与難見分候所、彼母屍側へ立寄候得ば、此屍目・口より夥敷血流れ出候よし。ヶ樣に難見分死骸は、必父母側へ寄候得ば血を出し候事決定に付、政右衞門死骸に相極候由。此吉左衞門妾は、吉左衞門死後餘程貯も有之、宮腰御鹽裁許菊田八郎左衞門妾に罷成候。右政右衞門骸は鹽詰に致置、泉野にて磔罪に罷成候。磔懸候は同七月二十一日也。

二月廿五日。非人頭等金澤町中の持分を定む。

〔金澤古蹟志〕

御請書之事

一、私共仲間非人頭七人相談仕儀者、近年殊之外難儀仕申候而、金澤町中場分け仕申儀は、

右町中七つ分け、才川三つ分け取、淺野川四つ分け取申候儀、頭衆中ゟ申達候へ者、御聞届被成候而、私共願之通被爲成下候儀難有奉存候。惣而御用之儀者、只今之通仲間七人にして一度相勤可申候。若御用筋不屆之儀御座候はゞ、如何樣共曲事可被仰付候。爲其私共人々御請仕上之申候、以上。

元文四年二月廿五日

笠舞村領非人頭　左兵衛　印
同　次郎兵衛　印
同　三郎右衛門　印
淺野中嶋村領非人頭　八　助　印
同　市兵衛　印
同　間兵衛　印
同　勘兵衛　印

藤内頭　三右衛門殿
同　仁　藏殿

〔金澤古蹟志〕

一、私共之儀者、承應元年御公儀樣より、藤内頭三右衛門殿・同仁藏殿則被召出、被仰渡候儀

兩御橋は犀川淺野川大橋なり

者、可然者非人頭に相立可申樣に被仰付候由に付而、私共非人頭に御兩人差圖を以非人頭仕來候。則承應元年石川郡中村領・加賀郡淺野中嶋村領兩所に、居屋敷被爲懸御意、頂戴仕候。以後より私共相勤申御役之次第。

一、御城中樣御廻り、並當御町筋御三ヶ所之御ぼだい所ゟ御參詣被爲成候時分、私共罷出、乞食共を此御道筋おひちらし申候事。

一、御公事場樣より目あかし三右衛門殿ゟ被爲仰渡候儀者、乞食共之儀は不及申上、何者によらず不審成者御座候はゞ、藤内頭三右衛門殿・同仁藏殿私共同事候而御斷可申上旨被仰渡候付而、相勤申候處、乞食之内無心元者御座候へ者、則目あかし三右衛門殿迄御斷申上候御事。

一、御町中兩御橋之下、其外兩川原に死去仕乞食御座候得者、御町御會所樣より御見立に御出被成候へ者、其御町より私共方ゟ御案内御座候へ者、晝夜共に罷出、相片付申候御事。

一、御寺方御門之下・同道筋に乞食死去仕候へば、御案内次第晝夜共罷出、御指圖請、相かたづけ申候御事。

一、御侍樣方御門之下・御道筋に死去仕乞食御座候へ者、御案内次第に晝夜共罷出、相かたづけ申候御事。

一、御郡方に川ながれ之乞食死去人御座候時分、則御足輕並御裁許之御十村御出被成、御見たてを以相かたづけ申候御事。

右之通先年より相勤申候得共、金澤御町中・御寺御門之下・兩御橋之下惣而ちり乞食之儀者、跡々より私共支配不仕候。去共御同事に口上にて前々申渡候、以上。

元文四年二月

加賀郡淺野中嶋村領

非人頭 八　助 印

同 市郎兵衛 印

同 勘兵衛 印

同 間兵衛 印

石川郡笠舞村領

非人頭 左兵衛 印

二郎兵衛 印

二郎右衛門 印

藤内頭 三右衛門殿

同 仁　藏殿

二月廿五日。前田吉德の養女繁姫盛岡侯の嫡子南部信貞に婚することを許さる。

〔政隣記〕

二月五日、南部修理大夫殿御嫡龜五郎殿ゟ、繁姫樣御再縁御内談被仰入に付、南部殿ゟ細井佐次右衞門殿を以被仰入、從南部殿者大嶋織部殿を以被仰越、御料理出、御對顏等如御前規。十八日右御願書細井殿を以御用番本多中務大輔殿ゟ御指出、南部殿より者大嶋殿を以御差出、廿四日左之通御奉書。

猶以病氣等に而難罷出候者、名代可被指越候、以上。

御用之儀候條、明廿五日四時可有登城候、恐々謹言。

二月廿四日

本多中務大輔

松平伊豆守

松平左近將監

松平御名殿

（御名は加賀守）

右に付廿五日御登城之處、繁姫樣御再縁御願之通被仰出。依之西御丸御登り、御老中方御廻勤、頭分以上ゟ御弘等如御例。あなたより御使御家老吉田友右衞門來、此方より玉井市正被

遣之。

四月朔日。前田宗辰初めて月次登營の禮を行ふ。

〔御年表〕

四月朔日、宗辰公初て月次御登城。

四月二日。前田吉德の女楊姫髮置の儀を行ふ。

〔政隣記〕

四月二日、楊姫樣御髮置、御白髮御近習御先手鷹栖左門上之、御時服二被下之。妻より御箱肴上之候に付、白銀五枚被下之。同日富士ゟ御宮參、御中邸ゟ御立寄。騎馬御供御近習大組頭野村七兵衞・同組頭並大槻內藏允、富士御先詰左門。右御祝儀、御時服五・御箱肴一種宛、御近習頭兩使を以被進之。從楊姫樣も御箱肴一種・御樽代五百疋・御赤飯御行器一荷、御廣式御用達御使二人を以被上之。

右御使四人ゟ金二百疋宛被下之儀、且御供之面々等ゟ中將樣・預玄院樣より絹・綿等夫々被下候儀等、都而御前例之通。

四月十二日。中村典膳、前田綱紀の雅號を富永數馬に報ず。

富永數馬樣　　　　　　　　　　中村典膳

日外拜借之一冊、永々忝次第奉存候。入用之所拔書等仕候に付返進仕候。大切之もの御恩借御禮難盡候。御別號之儀、私覺申分文字を忘れ申も有之、今度致吟味、才記方迄遣し申候。左に書付懸御目申候。御本に三省と有之御別號、曾而々々承不申候。去共御書物役之衆之内覺有之樣子に御座候。尙期拜顏候、以上。

四月十二日

松雲軒（松雲書院共申由御意に御座候）　養民堂

敬義　梅墩（御集を梅墩集と申候）

中和　敍倫

右私奉覺候分。

顧軒　樂命軒

三省　會經閣主人

右之分誰彼物語等に而承申候。

以上

右元文四未年春、於東武宗辰君、中村正白に、松雲公御別稱覺候哉御尋之處不存覺、遠田勘右衛門にも相尋候得共覺悟不仕候故、中村典膳覺可罷在候、承合可申上旨申上候間承度由、幸典膳せがれ在府に依て正白申談候趣申越、典膳より被申越趣右之通也。

四月十四日。前田吉德の女益姬江戶に生る。

〔政隣記〕

四月十四日未下刻、本鄉於御廣式御姬樣御出生、御生母楊姬樣御同事鏑木氏也。依御產穢翌十五日御登城御斷、御名從預玄院樣益姬樣与被進之。蓁日於金澤奧村小源太に被仰付、五月十五日御例之通御腰物被下之。廿日御七夜に候得共、御日柄に付廿一日御祝御前例之通。

四月十四日。能登奧郡の諸職人工賃を增さんことを請ふ。

〔郡方舊記〕

覺

一、一匁八分	家大工	一、三匁	舟大工
一、一匁五分	木挽	一、一匁五分	桶師并屋わふき共
一、一匁二分	檜物屋	一、一匁二分	ぬしや
一、一匁	壁塗	一、二匁二分	石切

經方は恒方と書するを普通とす

右御郡方諸職人手間料銀、文銀に罷成、最前之通に而者間に合不申、迷惑仕申候に付、只今文銀圖りを以書上申候間、右之通に被仰付可被下候。尤賄之外何によらず取遣不仕候樣に仕度奉存候間、御紙面を以被仰觸可被下候。爲其御斷申上候、以上。

元文四年四月十四日　大澤村　儀左衞門

鹿野村　經　方

村井安左衞門殿

不破忠太夫殿

御郡方に罷在候諸職人作料銀之儀、御扶持人十村大澤村儀左衞門・鹿野村經方別紙書付出見屆候條、是以後別紙之通作料相極、夫々雇候樣に双方に可申渡候。披見以後判形候而先々相廻、落着より可相返候、以上。

元文四未四月十八日　村井安左衞門　印

不破忠太夫　印

鳳至郡・珠洲郡御扶持人・十村中

四月廿八日。小松に火災あり。

四月なり

三百卷とは正編三百六十二卷のことなり

〔大野木克寛日記〕

昨廿八日九つ時頃より小松御城下火事、町屋・寺社等凡百七・八十軒程燒失、申刻頃鎭ると云々。

五月四日。幕府の編輯せる庶物類纂續集の謄寫を命ず。

〔御年譜〕

一、五月四日今般公儀に而諸物類纂出來之所、御家にも三百卷有之に付、御寫置被成候樣に申來、内山覺中右御用被仰候。（御歩小頭山瀨專右衞門等寫取候樣被仰出。）

五月廿五日。前田重熙乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

五月廿五日龜次郎殿御乘馬初、御手綱絹川源兵衞（組外御馬役）上之、御馬一疋下飯野村栗毛四歳、御使組頭並御近習大槻内藏允を以被進之。御目錄持參。御馬は組外御馬役齋藤龍左衞門爲牽參、御廣式於御玄關前龜次郎殿頂戴之被成、追付爲御禮御居間に御出、御居間前外御庭新御馬場に而被爲召。此時源兵衞御手綱上之。御前・宗辰公・勢之佐殿御出御覽。右相濟、於御居間御表小將御膳役佃久太夫、御のし三方持出御前に上之。御手自御のし龜次郎殿に被進之。右御祝御雜煮・御吸物等、御家老初御近習頭等に被下之。

六月十六日。前田宗辰登營し初めて嘉祥の禮を行ふ。

〔政隣記〕

六月十六日嘉祥、宗辰公始而御登城。昨日御用番左近將監殿御宅ゟ、聞番被召寄被仰渡、則今日御登城之所、御着座御菓子御頂戴。依之西御丸ゟも御登、御用番ゟも御勤、御兩殿樣共御長袴被爲召。

七月朔日。大槻朝元その秩祿を增さる。

〔護國公御年譜〕

一、七月朔日御加增二百石大槻内藏允、同百石兒玉彌藤次。

七月五日。金澤鷽助馬場に火災あり。

〔大野木克寛日記〕

七月五日。今曉八半頃淺野川鷽助馬場裏町淺川金左衞門と申者家より出火、三・四十軒餘類燒、七過鎭。右火事に付予金谷御文庫ゟ可罷出處、方境事之外違候故見合居申候。然共及大火候故越後屋敷ゟ參出、御用番對馬守殿へ罷出候段相達、其上に而私共金谷御文庫受取、當時は左京・私兩人迄に御座候。尤右御文庫ゟ可罷出候へ共、方境以之外違申候に付見合罷有候。方境に無構可罷出候哉。但火本へ罷越防可申候哉、相扣可申候や、御指圖次第可仕与罷出候旨申入候處、か樣之事は時々有之事に候。左樣候はゞ先見合候樣にと御申に付、追付退出、

直に左京宅江罷越、右之趣申述、夫より伊崎氏・横山久女之介宅江見舞罷歸候。其後右近・貞次郎追々伊崎氏宅江罷越候。尤右近・貞次郎共に馬上に而罷越候。兩人共追付致歸宿候。

七月廿一日。先に平井吉左衛門を殺害したる若黨等磔刑に處せらる。

〔大野木克寛日記〕

七月廿一日小雨下、晝後甚雨。

當春平井吉左衛門を及殺害候吉左衛門家來五人、於泉野今日磔に被仰付。但吉左衛門切殺候吉川政右衛門儀者、其砌溺死仕候に付鹽詰に成爲申候。右頭取儀左衛門儀者致籠死候に付、是亦鹽詰に成爲申候。右二人死骸磔に掛り申候。且又政右衛門爲立退、其上才川に而爲致溺死、右政右衛門路金盜取候政右衛門兄ははね首、則被掛獄門候。右増如此。

〔政隣記〕

七月廿一日左之通被仰付。

はりつけ

平井吉左衛門若黨　吉川政右衛門

同人若黨　中田儀左衛門

此者主人吉左衛門に意恨有之由に而、傍輩共申合切殺し、逆罪至極之者に依て如斯申付者也。

此者主人を切殺可申由、政右衛門申にまかせ傍輩申合致棟取、逆罪至極によつて如此申付者也。

同人若黨　高桑忠左衛門

同人小者　權内

同斷　時内

此者共、傍輩中田儀左衛門等申にまかせ、政右衛門儀主人を切殺候時分手傳等いたし、逆罪至極によつて如斯申付者也。

七月廿一日

梟首

平井吉左衛門若黨吉川政右衛門兄浪人若黨

吉川淺右衛門

此者弟政右衛門儀主人を切殺可申由、傍輩共申合候趣致同心、政右衛門儀主人を切殺欠落仕候砌取持、川ゟ身をなげさせ、重罪至極之者に付如此申付者也。

七月廿一日

七月廿七日。前田吉德就封の暇を受く。

〔御年表〕

七月廿七日上使松平右京大夫殿を以御暇、家重公より上使松平能登守殿也。廿八日御登城、本多頼母政恒・玉井市正貞御供にて御目見。

八月廿二日。前田吉德江戸を發し、歸國の途に就く。

〔政隣記〕

八月廿二日江戸御發駕。御作法前々之通、宗辰公御中邸迄龜次郎殿御上邸敷付迄、御姫様方は御居間三之間迄、勢之佐殿は御居間書院大廊下迄、御一門様方者御式臺迄御見送、御先立御留守居菊池十六郎勤之。御道中無御滯東岩瀬御泊に而、御餌柄之鷺御家老本多頼母・若年寄西尾隼人・定番頭遠田勘右衞門・御馬廻頭丹羽武兵衞・御小將頭北川久兵衞・御歩頭奥村半兵衞・御用人千福久太夫・御小將横目戸田與一郎に、一羽宛拜領被仰付。

九月二日。年寄横山大和守の指控を免ず。

〔浚新秘策〕

一、元文四年己未九月二日、中將様去廿二日江戸御發駕、同晦日境御旅館より、朔日早飛脚を以安房守一名へ御親翰。其趣は横山大和守儀指扣罷在候儀御免許被遊候。御用向如前々可相勉候。此旨安房守可申聞候。尤同列之面々にも可申聞旨被仰下。二日に相達候に付、安房

守登城、同列之面々ゟ御親翰爲致拜見、其上に大和守宅ゟ安房守罷越、御意之趣申含、卽日大和守登城、二日より勤仕有之候。

九月四日。前田吉德金澤に着す。

〔政隣記〕

九月四日、昨三日夜高岡御泊、同夜九時御立。今日九半時頃御歸城。江戸ゟの御禮使は伴八矢。發足等如例。

十月二日。金澤三社珉德寺前に火災あり。

〔護國公御年譜〕

一、十月朔日珉德寺前より出火いたし、小家五十餘類燒。夜中八時より七つ時鎭火。

〔大野木克寛日記〕

十月二日、今曉八時頃青山將監下屋敷邊小家より出火、風も無之候得共隣家へ移り、小家五拾軒計燒失。將監下屋敷甚危候へ共防留申候。且又其邊侍屋敷類燒は無之候。前田多宮・前田式部增火消に罷出候由。予者御文庫へ可罷出と、其用意仕候へ共、方角も違たる事故見合、罷出不申候。

朔日の夜半以後なるが故に二日とするを正しとす

十月廿五日。毛利六郎左衛門知行を召放さる。

〔政隣記〕

十月廿五日、由比五郎左衛門組御馬廻二百五十石毛利六郎左衛門、女を殺害亂心に付御知行被召放、一類に御預、十人扶持被下置。

但、右六郎左衛門先年於江戸自殺仕損候得共、其節之頭原九左衛門、亂心に而無之、病氣与言上、久敷引籠有之候所、彌宜、御當代に至御番も勤候處、右之通に候事。

十月廿六日。青木恒右衛門逼塞を命ぜられ小倉多門知行を召放さる。

〔政隣記〕

十月廿五日、杉江杢左衛門組定番御馬廻百廿石青木恒右衛門、同人弟杢左衛門支配百五十石小倉多門、小立野嫁坂邊に兄弟同居仕有之候處、出入仕町人与於右居宅口論之上手疵を負せ候首尾不宜、今日於公事場御吟味。十一月十一日にも右兩人幷恒右衛門母・下女・小者も、於同所御吟味之上、多門人持組今枝民部に、恒右衛門は一門に御預之處、十二月廿六日於公事場、恒右衛門は逼塞。多門者民部宅に公事場奉行中幷杢左衛門・御横目兩人參り、御知行被召放候段藤田求馬申渡。公事場御横目兩人も罷越、御歩横目兩人も罷越、縮所より出し候指引等仕候事。但、町人は追放代之刑二ヶ年禁牢被仰付。

十一月十二日。前田吉德の女橘姬江戸に生る。

〔護國公御年譜〕

一、十一月十二日橘姬樣御出生。御生母名蘭、木村小左衞門女、以後病氣退身。

〔政隣記〕

十一月十七日江戸より早飛脚來、當十二日夜於御上邸御廣式御姬樣御出生之旨申來。但御七夜之節、從預玄院樣御名橘姬与被進。

一、右に付御墓目奥村助右衞門ゟ被仰付、十九日に献上物被下物等如御前例。

十一月十九日。前田重靖袴着の儀を行ふ。

〔政隣記〕

十一月十九日嘉三郎殿御着袴、御內々に而御祝、御表向ハ御平生之通。爲御祝儀御時服五・牟御上下二具・干鯛箱、御近習頭を以被進之。從嘉三郎殿、御行器一箱・錫一折、御廣式御用達を以被上之儀等、御前例御二男樣以下之通。

十二月六日。前田重熙疱瘡を患ふとの報金澤に達す。

〔重熙公御年譜〕

一、十二月六日朝、前月二十九日酉之刻江戸發足之早飛脚到來、御姫樣方御疱瘡之旨申來。御表小將小幡藤左衞門早打御使被仰渡。龜次郎殿茂御熱御座候由、定而御疱瘡に而可有御座、彌御疱瘡相極候はゞ、御進物之御使相勤可申旨被仰出候處、御疱瘡に極、御使勤之。同月十五日龜次郎殿御酒湯被爲召。

十二月九日。前田宗辰疱瘡を患ふとの報金澤に達す。

〔政隣記〕

十二月九日江戸より之早飛脚着、宗辰公御疱瘡之由申來。御近習御先手鷹栖左門早打に而被遣、同日未下刻發、十三日江戸着、十五日發、十九日戌刻金澤江歸着。橋宗仙院御奥醫師也御樂被上之。山科神安相詰有之、度々奉診存寄申上。追而御順快之旨申上之。但左門發足前、金一枚・御羽織被下、御内々金十兩被下段、宗辰公も銀五枚・御染物二反被下之。

十二月十二日。前田吉德の女益姫江戸に歿す。

〔政隣記〕

十二月十七日益姫樣御疱瘡に而、十二日御卒去之由告來。今日一日鳴物等遠慮。但當四月御出生、御法號寶明院樣与云々。

前田宗辰は在江戸なり

十二月廿五日。金澤に於いて前田宗辰の疱瘡平癒を賀す。

〔政隣記〕

一、十二月廿五日於金澤、宗辰公御酒湯爲御祝儀、頭分以上登城御帳に付。

一、廿六日右御祝儀年寄中等より御肴獻上之。但江戸にも御肴代金百疋宛獻上。

〔政隣記〕

一、十二月廿六日前記にも有之通、宗辰公御疱瘡御酒湯被爲濟候爲御祝儀、若年寄以上以御目錄獻上、何も布上下着用。但獻品は鴨・鯛・鯉・鯔之内一品宛也。江戸に者、惣代以飛脚、前記之通御肴代獻上。年寄中・御家老中より飛脚出之。若年寄中者、右飛脚に以傳附上之。右御祝儀金澤に在合候宗辰公御附之人々に、左之通拜領被仰付。

綿五把宛　前田將監　品川主殿

絹三疋　樋口次郎右衛門

同二疋　杉江助四郎

染物三反宛　御側小將 西尾內膳　同上 岡田主稅

正月十三日。前田吉德幕府に使を派して先に宗辰の疱瘡を問はれたるを謝す。

〔德川實紀〕

正月十三日、松平加賀守吉德封地より使して干鯛奉り、長子佐渡守宗辰が疱瘡酒湯いはひのとき、御使下されしを謝し奉る。

正月十五日。前田吉德本年出府に隨從せしむる家老等を命ず。

〔政隣記〕

正月十五日今年江戸御供御家老横山藏人・玉井市正、若年寄西尾隼人御直に被仰渡。

正月二十日。百姓の分高を行ふ時は殘餘の持高五拾石以上たるべき前令を恪守せしむ。

〔廳事通載〕

元文三年正月百姓高分之儀、以紙面申渡候處、持高五十石餘有之分、次・三男に高分け爲持候儀勝手次第之旨相調候。此所に心得違も有之躰に候。五十石餘之高を二・三十石と分け申儀に

ても無之候。致配分候而殘持高五十石致所持儀に候。其餘之分は勝手次第致配分候樣に可申儀に候。此所心得違も可有之候間、重而申渡置候條、向後此通に可相心得候、以上。

申正月廿日　　改作奉行印

諸郡御扶持人・十村中

正月廿一日。大槻朝元の知行を加增せらる。

〔政隣記〕

一、正月廿一日左之通於御奥被仰付。

御馬廻組頭並に被仰付。　組頭並より　大槻内藏允

二百石御加增

正月廿七日。前田吉德の女橘姬江戶に歿す。

〔政隣記〕

正月廿七日、今曉去年十一月御出生之橘姬樣、御驚風に而御卒去。金澤へは二月五日早飛脚着、同日一日鳴物等遠慮之一統觸有之。

二月十一日。富田織部の與力水谷孫丞竊盜の罪を以て取調べられ、後五

箇山に流さる。

〔政隣記〕

二月十一日富田織部與力、去暮會所銀利足返上之者ゟ取次可遣由申入、取次上候内封を破り、少々銀子盗取跡繕上之候躰之水谷孫丞儀、今日於公事場御吟味有之候得共不致白狀、先中川八郎右衞門ゟ御預、十六日にも於公事場御吟味之處致白狀禁牢被仰付、追而五ヶ山祖山村ゟ流刑被仰付候處、同年閏七月廿日病死。

二月十七日。前田宗辰前髮を除く。

〔政隣記〕

二月廿七日。宗辰公御疱後御髮之内餘毒有之に付、爲御養生御前髮被爲執度旨、今月十六日從中將樣御願書付、御用番迄間番を以被指出候處、翌十七日御願之通御聞屆之段、以御付紙被仰渡、卽日御前髮被爲執候旨、同夜江戶發之中飛脚金澤へ來着。依之御祝儀之御使御馬廻組神尾内藏太被仰渡、三月六日發足。但御老中本多中務大輔殿御嫡從之助殿御疱瘡之旨告來、右御見廻使内藏太ゟ被仰付、宗辰公ゟ者右御序に御祝儀被仰進候趣に相成、道中日數八日振程に可參旨被仰渡、同月廿六日歸着。

二月廿九日。大槻朝元、前田善左衛門の妹を迎へて妾とす。

〔浚新秘策〕

一、元文五年二月廿日頃前田善左衛門儀（御馬廻組三百石。）前田源兵衛（同正月廿一日御小將頭より御馬廻頭に被仰付。）宅に罷越申聞候は、此間媒を以、私妹を大槻內藏允にもらひ申度旨申越候。但書附等を以相願候事は望み無之候。奉公人分と申に仕、呼請申度由申事に候。如何可有之哉と內談に罷越候。源兵衛申候は、奉公人分と申事は、御先代數度被仰渡候趣有之、難成筋に候。旁此相談は不入事に候、其段斷申入可然旨申聞相返し候。善左衛門は前田平左衛門孫に而、同姓に候得共筋目は遠く候。乍然同姓之內源兵衛事者家本、其上當時重職ゟ相勤候故談合に罷越候事に候。源兵衛養子四郎左衛門は前田瀨兵衛孫に而、瀨兵衛は平左衛門と兄弟に候。善左衛門罷歸、右之媒を以、右源兵衛存寄を以、一家之內如此申もの有之由にて斷申遣候。然所內藏允申越候は、手前も重き御役儀相勤候へば、奉公人分と申候而呼請事難成筋は能存候。一家之內左樣に申入は大形合点に候。左候はゞ此方より申談樣も可有之旨に而、其分に罷成候。然所善左衛門組頭丹羽武兵衛に、於お次申聞候は、善左衛門妹事緣組願上候而呼請申などはいやに存候。すでに前田大學殿を以、今以緣者と存罷在候事に候へば、旁緣者と申筋に而は無之、奉公人分に而呼取申度候。御內聽をも奉得候而、其趣に可仕旨御意も有之旨申聞候由。仍之武兵衛宅に善

左衛門呼寄候而、内藏允存寄申聞。扨は先年武兵衛組に堀彌三左衛門罷在候、其娘を三田村主計方に子共介抱人と申名目に而遣申候。此例も有之候條、奉公人と申名目を相止候而、子供介抱人と稱し遣候て可然旨申聞候へば、善左衛門承知仕候由申。武兵衛申候は、最初源兵衛に内談之時、不同心之趣も候間、罷越源兵衛に相達可然哉と申候所、善左衛門申候は、源兵衛に申聞候には不及候。私組頭として御自分樣被仰聞候得者、是に而事濟申候。只今被仰而候趣に相心得可申候。源兵衛儀は、右申聞候趣に候得者、不同心に御座候外に存寄は無之筈に候と返答仕候旨に而、其事決定仕、同月廿九日内藏允宅に遣申候。乍然奉公人同斷之仕形に而者如何敷候とて、薙刀・挾箱爲持、乘物に而、善左衛門身上相應に仕立遣し候由。此月廿七日同役中寄合に付、土肥庄兵衛宅に各致參會候。源兵衛も致出座候所、武兵衛儀源兵衛を呼立、右之趣申述候而、源兵衛に外に存寄も有之間敷との挨拶有之候。源兵衛申候は、外に對し分而存寄とては無之候。善左衛門儀は、拙者不同心に付爲斷申儀を乍存辨、御自分に迄源兵衛重而申聞には不及候。外に存寄も無之筈などゝ答申儀は、何とも其分には難仕事と存候。乍然此折節彼是申立候而は如何敷候。おそからぬ事と存候旨申聞置候。三月朔日於御城中、武兵衛儀源兵衛に申候は、前田大學殿ことの外大慶がりに而候。前田殿同姓に候。其上御自分を日當に仕候故、一段との事に而悦被申候旨申聞候。源兵衛儀、此は近頃心外之事

拙子は青地禮幹

と存候故、一往武兵衞に迄申含置候事も有之由。常々心安申通候拙子儀故、此度の首尾申聞置候旨、三月四日右之趣共源兵衞被申聞候。拙子申入候は、此五・七日も前より世間風聞とて申聞候者ども有之候趣、御自分儀大槻氏と縁者に御成候と申儀に付、一向可有事ども不存、例之巷説にて可有之と申、誰にも不承打過候。然所當朔日以來は、善左衞門妹を御自分養女に被成、大槻氏に被遣候とも、又は四郎左衞門殿養女と被成奉公人に被遣候とも、取々申候。私は御心安仕候間承知も可仕候。慥成事承度と、書狀を以尋に參り申所兩所有之候。仍之驚入、扨は似寄申儀も候歟。風說迄共不存。朔日以來兩三度に及び御役所迄罷越御尋可申と仕候所、他人多相見に候故扣候而不申出候所、始終之樣子思召に委敷被仰聞致承知候。近頃御難澁之至に察申候。丹羽氏之御仕樣は于今不限事、不足論候。善左衞門殿との御間は畢竟何と可被成候哉、義絶之外は有之間敷樣に存候旨申候所、義絶之儀申出候事、只今殊之外障り申筋共有之、急には不申出意得に候。とくと料簡之上に可仕と存候旨被申聞候。同年七月江戶に御發駕之日、源兵衞儀御算用場奉行に被仰付候。

五月九日。前田綱紀の十七回忌法會を天德院に執行す。

〔政隣記〕

五月九日松雲院樣十七回御忌に付、昨今於天德院御法會。御奉行橫山大和守、御作法如前々。

總長は高辻前權中納言

十五日天德院等御招請御能有之。

〔大野木克寛日記〕

今度松雲公御法會によつて、高辻總長卿より御牌前に被備候詩歌の寫、不破氏持參に付借用之、左に記之。

目錄

花山院前大臣常雅公　油小路前大納言隆典卿

阿野中納言實惟卿　中山中納言榮親卿

總長　五條前中納言爲範卿

武者小路前中納言公野卿　東坊城宰相長誠卿

倉橋三位泰章卿　愛宕三位通貫卿

冷泉三位爲村卿　東久世中將通積朝臣

平松少納言時行朝臣　五條少納言爲成朝臣

家長　清岡大藏大輔長香

題者　冷泉三位

夏懷舊　十七回忌作善

舟壑潜移歳月流。蟬聲知節却添愁。百年遺愛口碑在。今日薦新方麥穐。

常雅

水に吹風にもこゝろの來しかたをしのぶ袂にかほる立花

隆典

ふるも今涙の雨よ五月闇見しよを忍ぶ今日の御法に

實惟

澤邊一方何墜聲。千年青史姓名明。涙添天上黄梅雨。雲霧冥々不耐情。

榮親

漠々愁雲海北天。星移倍憶孔融賢。寂寥唯有舊晴月。惆悵不堪聞杜鵑。

爲範

一別悠々十七年。薰風惹恨涙泫然。當時未盡交驩意。長景徐裁歎逝篇。

總長

涙もやもろき枕に時鳥猶有りしよい音をだにも鳴

總長

有し世の跡とふ窓にしたひ來て螢や消ぬ影殘すらん

公野

蕭條梅雨自凄涼、恨別偏隨夏日長、遙憶當時恍如夢、因君今夜斷愁腸

長誠

何をかも昔を忍ぶ友とせん花橘のにほはさりせば

泰章

回序忽々頻變遷。樹頭花謝綠深然。思量已往人生事、惆悵豪雄多沒泉。

通貫

なき影も年をへだてゝ袖の香の有りし世遠き宿の橘

爲村

植置し花橘にしのぶかなありし其世の袖の移香

通積

雨過竹陰生嫩涼。新梢依舊自蒼々。蘇仙鶴去名空在。無奈秋來夏日長。

時行

料知墳上樹蒼々。歲月如流夢一場。更有杜鵑感時報。北雲望斷舊愁長。

爲成

黄梅雨裏氣蒿森。憶古偏知懷舊心。可待山陽聽笛去。林園坐感夏禽音。

家　長

曾間伽遊十七年。悵然遙望北方天。夢醒猶憶當時事。半夜不堪聞杜鵑。

長　香

五月十九日。前田吉德の養女繁姬將に婚せんとするを以て能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

五月十九日御能被仰付、繁姬樣御登城初而御表に御出。御年寄中等於檜垣之御間御料理被下、御馳走當番組頭勤之、御給事御大小將。且當番に而詰候頭分以上、於波之御間御菓子・御吸物・御酒被下之。大槻內藏允を以今日御心祝之儀有之、御能被仰付候。御菓子・御吸物等被下、御酒給候樣被仰出。

六月八日。先に前田綱紀の法會を執行したるを以て特赦を命ず。

〔大野木克寬日記〕

六月八日晴。今日予出仕如例、八時退出。松雲公御法會に付赦之儀今日被仰出候。其內極罪水谷孫丞儀死罪御免、流刑被仰出候由。

七月三日。前田吉德の女斐姬金澤に生る。

〔政隣記〕

七月二日、二御丸於御廣式御姬樣御出生。追而御名斐姬樣与從預玄院樣被進之

七月六日。前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

七月六日五時前御發駕。御家老・若年寄御供。但玉井市正、一宿御跡也。

七月十八日。前田吉德江戸に着す。

〔政隣記〕

七月十八日辰上刻、江戸御表御下屋敷迄宗辰公御迎等如前々。翌十九日上使松平右京大夫殿御出。

閏七月朔日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔御年表〕

閏七月朔日御登城。横山藏人正從・玉井市正貞備御供に而御目見。

〔德川實紀〕

政隣記に二日に作るもの非

不情は不精

閏七月朔日、月なみ例の如し。松平加賀守吉德參覲す。

八月。十村の職務及び百姓の心得に關して諭す。

〔司農典〕

一、毎歳御扶持人幷平十村始、初春より村廻仕、諸事勢子入候樣申渡置候處、等閑に相心得候者有之躰に相聞候條、以來無油斷村々相廻り、御改作之御法違背不仕、急度相守申候樣、嚴重可申渡儀專要に候事。

一、度々申渡儀に候得共、近年百姓共樣子不宜候條、改作不情之者於有之に者、早速可申斷候。御定之通追出可申付候事。

一、今年夏之内天氣不順に候處、其後照續殊に宜有之、秋も永く、例年同事之作躰与相聞候處、前月廿三日暫時之間風吹候儀を申立、百姓共地頭へ罷越候而者、鏟留に而收納不仕候旨申者有之段相聞へ候。此儀者支配之十村幷村肝煎共心得惡敷故、末々百姓共蟠候心底不屆に候。

一、惡作之年見立相願、拙者共罷出免切相極候時分、中稻を刈殘し置候得ば、其村之肝煎等曲事に申付候儀、其方共能存居申通に候。左候得者早稻・中稻者早速刈取、步入仕等に候處、鏟留抔与申立、地頭へ者收納不仕、密に貢米等仕候由取沙汰相聞候。改役人共忽に相心得、

造用は雜用

第一肝煎共不締故に候條、此段嚴重可申渡候。若於相顯に者、十村可爲不念候事。
一、檢地幷年季引免、且亦惡作之年見立相願候時分、其御郡御扶持人幷平十村共、嚴重遂詮議相撰申筈に候處、役人共持高有村々、又者一類幷よしみ之有之村を取用ひ、或者小村を指除大村を相願候族有之段取沙汰相聞候。惣而役人共勤方之儀者、被仰付候誓詞前書之趣其に信用仕、聊無失念可相守儀に候處、件之惡說有之候。若右之通猥成族有之候はゞ、可遂吟味候。其時に至り行當り申間敷候事。
一、諸百姓願事有之節、造用等申立費成儀有之段取沙汰相聞候。若十村手代幷肝煎之內不宜者有之、私曲之族有之候はゞ、十村之越度に可申付候條、猥成儀無之樣嚴重可申渡候事。
一、跡々より數度覺書を以申渡候儀、諸百姓共等へ不申聞者も有之、納米等之儀不締之品相聞候に付、當年も御算用場へ申達一統相觸候。向後末々小百姓にも篤与申渡、請紙而肝煎手前へ取置可申候。拙者共致廻村候時分、於所々に右紙面見屆申儀も可有之候。若相觸候趣不申渡十村於有之者、急度可遂詮議候條、兼而其心得可仕候事。
一、御法度之借貸之儀、色々品を替、勝手不如意之百姓共爲及難題、高利を取立候旨沙汰有之候。ヶ樣之趣實正承屆次第、嚴敷可遂吟味候間、爲心得申聞置候條、可得其意候。第一大高致所持候百姓共、春之內土田に而請作人に卸し置、其年見立有之候へ者、御用捨免之內致

指引、請作人に相渡、地主之德分多く有之段も相聞候。ヶ樣之儀一向有之間敷儀に候。其子細者、一ヶ年切請作仕儀に候得者、春初相極置候作德米、地主に相渡候外者、請作人取捌可仕事勿論之儀故、具に不及申達に候條、此旨百姓大小不限致承知候樣、村々に委細可申聞置候。末々不行屆儀於有之に者、可爲不念候事。

右之通得其意、村々肝煎・組合頭惣而百姓共に、嚴重可申渡者也。

申八月　　改作奉行

諸郡御扶持人・平十村中

九月廿二日。前田吉德の養女繁姬金澤を發して江戶に向ふ。

〔政隣記〕

九月廿二日、繁姬樣今日晝前金澤御發輿。御供頭分等左之通。

御小將頭　富永數馬

惣縮定御供、且又御道中奉行相兼。

金澤御留守居　原九左衞門

御附物頭並　橫地伊右衞門

一人宛御駕籠跡御供。但九左衞門儀者御道中奉行相兼。

年表に廿一日に作る

御横目　西村甚太夫　　　　　　御大小將横目　村田吉左衞門
會所奉行　河村覺左衞門　　　　割場奉行　渡邊源左衞門
御旅舘取次御大小將兩人。御大小將六人内四人宛歩御供。
御附御用人・同並共四人。
御賄頭　　　　藤井治部左衞門
本道・御針醫・御外料一人宛。
新番御歩三人に而、二人宛歩御供。
御歩小頭一人定御供。
御鎖口番者、江戸御中邸御廣式番・龜次郎殿御抱守等六人に而勤之。
此外御歩御細工人。
御宿拵御大小將二人。宿割同二人。
十月十一日御着之筈に候處、糸魚川一日御逗留、且短日御關所隙取等に而、十三日申下刻江戸御中邸に御着。十五日御供人何も中將様御目見被仰付、御雇に而參候町外料も御目見被仰付。

追加。糸魚川御逗留者少々御不例に付而也。

十月。領内に於ける米穀の減收を幕府に上申す。

〔政隣記〕

今秋御損毛高五十一萬石餘与、十月御届有之。

十一月二日。前田宗辰會津侯保科正容の女常姫に結納を贈る。

〔政隣記〕

十一月二日、從宗辰公常姫樣ゟ今日御結納物被進之。御使者御家老横山藏人、褐熨斗目・長袴着、副使聞番後藤瀨兵衞、褐熨斗目・半上下着。會所奉行河村覺左衞門御進物爲取唠、右兩人より先達而罷越、褐熨斗目・半上下着。御進物巳刻御上邸大御門より出。先に足輕、次御横目、夫より御進物御長持數九つ、其間々居臺。簍臺十、內四つ御樽。尤裁領足輕等差添。終に者御步横目兩人二行に罷越、惣人數御步横目二人、御步二人、足輕三十一人內一人小頭・三人押足輕、持參人百二人、外雨具持也。

常姫樣ゟ

一、御小袖　六つ

上惣地幸菱に葵梅鉢織交紅五色之唐織　一つ

下地白綸子惣模樣　一つ

上綸子地黑惣摸樣に葵梅鉢ちらし　一つ
下地白惣もやう　一つ
上　紅梅　一つ
下白御小袖　一つ

一、御帶　二筋　折居
紅地幸菱五色葵梅鉢織交　一筋
白地幸菱もやう右同斷　一筋

一、白銀　百枚附臺
一、雉子　一折二十
一、昆布　一折十三把
一、鯣　一折十三連
一、鹽鯛　一折二十
一、熨斗　一折二十把
一、御樽　三荷

肥後守樣ゟ　御太刀馬代金一枚・紗綾十卷・鯣一箱・昆布一箱・御樽一荷・御目錄。
隆七樣ゟ　御太刀馬代・金一枚・紗綾三卷・鯣一箱・御目錄。
白銀五枚宛・御目錄。常姬樣御附年寄女中三人。
同　五十枚・同。　同斷惣女中ゟ。
右大御門出候節、御兩殿樣・龜次郎殿御式臺へ御出。御出入衆も御出也。暨御一門樣方も御出被成候。右操出候後、於御大書院二汁九菜御料理出、御嶋臺御盃、小謠御囃子被仰付。安藝守樣御公用に而遲く御出に付、於御小書院御料理出、御囃子も重而被仰付。御大書院之御客も御小書院ゟ御越御聽聞に付、御吸物等出、相濟御開。尤輕き御面々者、外御席々に而御料理出之。
一、肥後守樣より右御挨拶之御使者、御家老西鄉賴母三千石之由。裃熨斗目・半上下、副使御留守居中根新八裝束同上被遣。御口上玉井市正承之。裝束同上。隆七殿より宗辰公ゟ之御口上者、松原善右衞門承申上、御答も同人申述。
佐渡守樣ゟ　肥後守樣御口上。
今日吉辰に付、妹方ゟ結納御祝儀被遣、千秋萬歲致大慶候。爲御祝御目錄之通被懸御意、幾久相祝申候。依之以使者申述候。

一、中將様御大書院ゟ御出、頼母・市正誘引に而被召出、御口上被聞召。畢而頼母自分之御祝箱肴献上、披露富永數馬。宗辰公にも御出、右御同事、頼母御太刀・馬代献上御禮申上、披露樋口次郎右衞門勤之。新八も御目見被仰付。畢而前田帶刀殿御相伴、御廣間於上之間御雜煮等・御酒被下之。給事御大小將。新八は於同二・三間富永數馬相伴に而右同事被下。給事新番。畢而於御大書院、頼母ゟ從宗辰公御盃并御手自御肴被下之。御盃奉返上退。重而御兩殿様御着座、頼母被召出、御直答被仰聞。細井佐次右衞門殿前後御取合御申上、且左之通被下之。

從中將様　絹五疋・包熨斗・御目錄　　西郷頼母

從宗長公　紗綾五卷・同斷　　同　人

從御同公　紗綾三卷・同斷　　中根新八

右開候以後以御使者被遣。

一、於肥後守様藏人御料理・御盃・御腰物被下之。瀬兵衞も御目見御料理被下。覺左衞門も御料理被下之。被下候品々左之通。

御腰物 友次代金三枚　一腰　　横山藏人

白銀　十枚　　後藤瀬兵衞

同　三枚　　河村覺左衞門

同　　　　　　二枚宛　　御歩横目二人
同　　　　　　一枚宛　　御歩四人
金子　　　　　二百疋宛　足輕小頭一人・押三人
鳥目一貫文宛　　　　　　足輕二十七人
同　五百文宛　　　　　　持參人小者百二人
從常姫様　綿五把・御肴一箱　　　横山藏人ゟ
　　　　紗綾二卷・御肴一箱　　　後藤瀨兵衞ゟ
右御腰物之外は、追而以御使者被下候事。
一、今日於御料理之間、御家老中より諸頭迄列居、赤飯・御吸物・御酒被下之。物頭御持方也進士齋宮御馳走方主付に而、何も相祝候樣申述。御酒之內御近習頭鷹栖左門罷出、御酒綏りこ給候樣御意之趣申述。給事御大小將・新番、指引御大小將御番頭・同御横目。且御大小將等御殿詰合候人々、於長園爐裏之御間に、夫々頂戴被仰付。其外在合候足輕・小者ゟも赤飯・御酒被下之。今日頭分無地熨斗目・同上下。御客衆ゟ之御給事幷御式臺相詰候御大小將等、常熨斗目・半上下、無地着用も勝手次第。御勝手に相詰候平侍以下、服紗小袖・麻上下、返小紋者除之。頭分以上、今日之御祝儀御帳に付。

十一月十九日。前田吉德の養女繁姫盛岡侯の嫡子南部信貞に嫁す。

〔政隣記〕

十一月十九日繁姫樣御婚禮に付、晝九つ二歩時本郷御廣式御出輿、大御門より御出、信濃守樣御居邸廣尾御廣式ゟ御入輿。御供御輿渡横山藏人、御貝桶渡玉井市正、御迎牧野因幡守殿・毛利甲斐守殿、御送り溝口出雲守殿・柳生飛驒守殿也。

御一門樣幷御出入衆四十方計早朝より御出、御出輿之節御兩殿樣・龜次郎殿・御一門樣等御式臺ゟ御出御見立。右相濟、御一門樣等御大書院其外御席々ゟ御通り、三汁七菜之御饗應、御嶋臺出御盃事、謠御囃子相濟御披。

一、門火燒御用、與力陰山藤右衛門・足輕二人・小者二人勤之。

一、御先女中乘物十六挺、御廣式御用達湯原平左衛門指添、南御門より罷越、尤平左衛門馬上之事。

御出輿御行列大概

足輕三人並び　同小頭二人並び　御横目井口五郎左衛門　押者　此間一町計
聞番後藤瀨兵衛　押者

足輕　侍　御大小將不破源兵衛　御乘替輿四人に而舁之　手替　御步　御輿建
足輕　手替　御步　御輿建

簇云々本のまゝ

手替 手替　此間少置　足輕 足輕　侍　御大小將村田吉左衛門　御貝桶　手替 手替　御歩 御歩

此間少置　御歩横目 御歩横目　押者 押者　此間少置　御輿渡騎馬横山藏人　御貝桶渡騎馬

玉井市正　此間少置　足輕 足輕　御廣式附御歩 御廣式附御歩　御先乘物御中居簇絹張持之乘

足輕 足輕　御先乘物年寄女中伊澤　足輕 足輕　御先乘物年寄女中梅園　足輕 足輕　此間少置

御附御用人並筒井官兵衛　足輕 足輕　御輿建 御輿建　手替 手替　此間少置　御挾箱 御挾箱　手替 手替

御歩 三人並　同斷　同斷　御歩横目 御歩小頭　御長刀　手替　○○　御貝桶渡人下り 立候而は此丸之

所に御供、御輿渡人も 右同斷　侍三人 並御大小將　侍二人並 御大小將　侍侍　御小將御守脇指持之 御小將御守刀持之

御輿　御時宜役御附御用人伊崎彦左衛門 右同斷御附物頭並横地伊左衛門　侍　二人並 御大小將　侍侍　御大小將 會所奉行

湯原藤衞門 津田林衞門　御横目西村甚太夫 御番頭一木逸角　物頭原宗兵衛 御歩頭水越三衞門　御歩横目 同小頭　御歩 御歩　御輿舁

手替三人並び　同　同　御傘　手替　御擔 御擔　手替二人 手替二人　御茶辨當　手替

御歩 御歩　雨具篭入 雨具篭入　手替 手替　此間少置　足輕 足輕　御歩 御歩　御供乘物年寄女中岩野

足輕 足輕　御供乘物若年寄高瀨　足輕 足輕　此間少置　御用人並代御大小將松田四郎衞門 割場奉行中川十左衞門

足輕小頭二人並び　足輕三人並び　小者三人並　此間少置　御歩横目 御歩横目　押者 押者

若黨三人並び　同斷　押者 押者　草履取三人並び　同斷　押者 押者　鎗三本並

同斷　押者 押者　馬　同　押者 押者　騎馬金澤御留守居原九左衞門　あなた御屋敷 近く成候はゞ

下り立御輿之跡御番 頭御横目之邊に御供　騎馬定番頭遠田勘右衞門　押者 押者　御醫師賀來順徵　あな た御

屋敷近にて下立 乘物釣寄　此間少置　御歩横目 御歩横目　押者 押者　乘物御迻年寄女中　足輕 足輕

足輕小頭 足輕小頭　御歩小頭以下雨具篭　手替 手替　同　同 同　同　同 同　同　同 同

唐油は桐油

同
同　押足輕　足輕小頭二人並び　御用笠籠二つ並び　侍分自分雨具
同　押足輕　　　　　　　　　　　　　　　　　　　侍分自分雨具
笠籠　押足輕
笠籠　押足輕　以上

右御供人裝束、御家老中兩人は褐子持筋熨斗目・同長袴、諸頭幷平士褐のしめ・半上下、御歩小頭・同御横目腰不明熨斗目・花色上下、御歩けんぼう作り紋小袖・白色上下、足輕小頭花色絹羽織紋子持角菊菱・袴小倉嶋、押足輕・平足輕共黑しけ絹羽織・袴上に同。御輿舁・御乘替御輿舁紺染木綿袷・十德褐紋根笹、小者紺染無紋。

一、歩御供之侍分何も馬爲牽之。但此日鞍覆懸申間敷候。日駄覆者勝手次第、雨降候者侍中羅紗合羽・手傘、御歩小頭已下唐油合羽・着笠、御供人足袋無用之事。

一、廣尾御邸ゟ七時前御輿入、御供人披道は長坂ゟ懸り、虎御門・昌平橋・金助町、御作事御門より入。藏人・市正初六時前披、一先御長屋ゟ直に罷越、追付御殿ゟ出候事。

十一月十九日。隱質を取ることを禁止す。

〔前田貞直手記〕

隱質之儀に付高畠木工紙面寫別紙之趣に候處、組・支配之人々家來末々迄申渡、組等之内裁許

有之面々者、是又夫々申聞候様被申渡、尤同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月十九日　　横山大和守

盗賊改方定格候而、前々より被盗物似寄申品は、質屋幷古手・古金商賣人共より爲指出、改方相洩候儀無御座候處、然に近年被盗物之品、別而刀・脇指之類、商賣人に賣渡不申候哉、似寄に指出申品多は無之候。相考候處、商賣人之外江賣渡、且又高利に而隱質取申者も有之様に承及、相尋候處、當秋より兩度町方に右之族之者有之候。尤賊物は無御座候得共、急度吟味仕、向後御縮相立候様申渡候。町方之儀は、町奉行申渡相止可申候得共、御家中奉公人・浪人・若黨躰之者隱質取申者有之候之様に風聞仕候。右之趣心得違候而不苦儀与存候者も有之躰に御座候間、向後隱質取申儀無之様に、一統被仰渡有之様仕度奉存候、以上。

十一月八日　　高畠木工

横山大和守様

十二月朔日。前田吉德參議に任ぜらる。

〔政隣記〕

十二月朔日、昨日依御奉書今朝六半時御登城（服紗小袖・御上下）之所、御座之間江被爲召、

御懇之上意、其上參議御拜任被仰出、西御丸御老中・若御年寄中御勤御歸館、御客衆御對顏被爲入候節、於御居間書院藏人・市正・隼人被爲召、今日之御樣子被仰聞。依之於御家老中席、諸頭ゐ御弘左之通。

昨日御老中方御連名御奉書到來、今日御登城被成候處、於御座之間御懇之上意、其上宰相御拜任被仰渡、重疊難有御仕合に被思召候。此段何も可申聞旨御意に候。依之御祝詞御帳に付。

一、右之趣御三家樣・姫君樣方ゐ者御家老御使、御側衆ゐは組頭御使、其外御一門樣方等夫々御使被遣。且右に付廣德寺御靈前ゐ御代香横山藏人、右不殘卽日被遣。

一、今般御昇進之儀、金澤幷富山ゐ被仰遣、御使御大小將笠山李兵衛今朔日夜被仰渡、三日曉發足、十二日夕方富山ゐ着、翌十三日御使勤之、御返答承、十四日晩景金澤着、十五日越後屋敷ゐ出、年寄中ゐ御意之趣申述、嘉三郎殿ゐ之御使御廣式ゐ參上申上。十八日年寄中御請於越後屋敷承之、十九日金澤發、晦日晝江戸ゐ歸着。但十八日於金城諸頭以上ゐ御弘有之。

〔德川實紀〕

十二月朔日、月なみ例のごとし。尾張宰相宗勝卿中納言に昇進あり。水戸中將宗翰卿・紀伊中將宗將卿ともに宰相に任ぜられ、松平加賀守吉德も宰相にのぼる。

十二月三日。大槻朝元その祿を加增せらる。

〔護國公御年譜〕

一、十二月三日御加增三百石大槻內藏允。

十二月四日。凶作に拘らず租納皆濟せしを以て賞與として諸郡に貸米を行ふ。

〔加州郡方舊記〕

諸郡今年作不出來に有之候に付、秋縮り御請指出候儀致難澁候處、拙者共より申渡趣其方共令承知、末々江申渡候所一統得心仕、全皆濟候段尤之至に候。然所從御上御書立を以、九萬石爲御褒美御貸米被仰付候段被仰出、於拙者共忝奉存儀に付、別紙御書立之寫相渡候條、謹而奉拜戴、末々迄可申渡者也。

庚申十二月四日

大塚彌五太夫
栗田源右衞門
不破門左衞門
橫山三郎兵衞

小谷兵左衞門
熊谷四郎兵衞
行山傳左衞門
芝山三郞左衞門

諸郡御扶持人・平十村中

十二月十一日。前田吉德登營して參議昇任を謝す。

〔政隣記〕

十二月十一日、今般御仕官御禮御願之書付、當四日朝細井佐次右衞門殿を以御用番に迄御達置之所、昨日御老中方御連名之以御奉書、今日五半時御登城、御仕官之御禮被仰上候樣申來に付、五時御出御登城、御禮被仰上御首尾左之通之旨。

一、御黑書院公方樣・大納言樣御上段御着座。

作り御太刀。黃金二枚・卷物十・御馬一疋裸背　松平御名。

右出座、御太刀目錄御奏者番披露、則引之。重而出席上意有之、任官之御禮申上旨伊豆守言上之、年寄共御取合申上。

一、四時前御下り、西御丸に御登、夫より御老中方御勤、九時前御歸館。但今日御熨斗目・御

長袴上下。御供熨斗目着用。

一、御献上之御馬、吉田鹿毛、三歳三寸五分。

一、西之御丸へ御献上。作り御太刀・黄金二枚・御馬一疋裸背。（船見鴾毛三歳二寸。）

十二月十三日。前田吉徳參議昇任の口宣を受くるが爲に使を京都に赴かしむ。

〔政隣記〕

一、同斷に付、口宣御奉書相渡次第京都へ之御使、宗辰公御用之人持組品川主殿へ被仰渡。右口宣金澤へ持參、不及出府、江戸へ持參者御大小將出府之者へ可申渡旨、御小將頭へ被仰渡。十一日口宣御渡候樣に、御老中方より京都へ被仰遣候御連名之御奉書、於殿中躑躅之間御用番松平伊豆守殿、聞番河村貞右衛門へ御渡に付、請取來上之。同日於御居間書院品川主殿被召出、御意有之、於御家老中席御羽織一・黄金二枚・紗綾二卷拜領被仰付。十三日江戸發、京都へ罷越、口宣受取、翌年正月京發、金澤へ持參。御月番より御大小將神保長左衛門へ御渡、正月廿七日江戸へ持參上之。

〔大野木克寛日記〕

禁裏　御太刀折紙白銀五百兩　附、臺雲脚
上臈御局　白銀五十兩
長橋御局　同　斷
大御乳人　同　斷
女御御方　白銀三百兩　附、臺雲脚
上臈御局　白銀五十兩
御局　同　斷
內侍所　御太刀折紙白銀二十兩　附、臺二重緣
上卿　銀六十匁
職事　同　斷
宣旨　同　五十匁
左中將如元上卿　同　六十匁
同職事　同　斷
兩傳奏　御太刀折紙銀百兩宛
雜掌四人　銀四十匁充

副　使　同　二十匁

右御官物之外

禁裏　綿百把

女御御方　縮緬十巻 紅白

右之通御進献之。

　兩傳奏御太刀・金馬代・時服三領充。

右之通被進之。

　以上

十二月十五日。前田吉德使を日光山に遣して參議昇任を謝せしむ。

〔政隣記〕

十二月夜今般御昇進に付、日光へ之御使若年寄西尾隼人、副使聞番見習御大小將河村貞右衛門被仰渡。十一日隼人御居間書院に而被召出、御懇之御意、御手自紋絹二反・御頭巾一被下之。於御家老席御羽織一・黄金三枚・紗綾三巻、河村貞右衛門にも白銀五枚拜領。十五日江戸發、十八日日光着、十九日御代拜勤之。同日彼地發出、廿二日江戸へ歸、御目見御懇之御意有之。但貞右衛門者御目見無之。

十二月十八日。前田吉德前名吉治を改む。

〔政隣記〕

十二月十八日、相公樣御名吉治公与被稱候處、今般竹千代樣御名家治公与被稱候に付、昨十七日御用番松平伊豆守殿ゟ御届、今十八日より吉德公と御改。御判も御改之處、松百舗依御献上、今日御奉書到來、右御請より御改被爲調。但御改判之御届者無之。

十二月廿一日。前田重熙初めて諱を利安と稱す。

〔政隣記〕

十二月廿一日、今日龜次郎殿ゟ御名被進に付、御服紗小袖・布御上下被召、御居間ゟ御出處、御字利安と御目錄を以御手自被進之。幷御のしも御手自被進之候。御近習遠田勘右衛門・大槻内藏允ふくさ小袖・布上下着用罷出有之。御取合勘右衛門申上。

十二月廿八日。遠田勘右衛門班を人持組に進めらる。

〔政隣記〕

十二月廿八日左之通被仰付。

御加增五百石先知合千五十石。人持組に被仰付。

〔浚新秘策〕

一、庚申の年十二月廿八日御近習定番頭遠田勘右衛門五百石御加増、人持組に組替、大組頭野村七兵衛二百五十石御加増、御馬廻頭被仰付、足輕頭並三浦左京二百五十石御加増、御馬廻頭に被仰付候。勘右衛門江は先達而大槻内藏允を以御内意之由に而、人持組に被仰付候はゞ御請可仕哉との御尋有之候。勘右衛門申候は、於御家人持組と申候は重き御會釋に御座候。御請仕間敷樣は無御座候旨申上候。其上に而御前江召、久々相勤骨折申に付五百石御加増被下、人持組に組替被仰付候由御意有之候。勘右衛門退出之上、大槻迄申述候は、御内意も有之結構に被仰付候上に、存寄申上候儀致迷惑候得共、少心底に叶不申儀候間申上候。先年二百石御加増被下候節も御斷申上候。當春金澤に而三百石御加増被下候節も御斷申上候。只今五百石被下候に付御請申上候而は、前々は少分故御斷申上候樣に相聞江申候。一向左樣之譯に而者可有之樣無御座、常々御奉公之筋、御勝手方之事を專一に相勤候に付、末々瑣細之事共迄御儉約申渡、輕者共江被下物迄も相省申候。其外表向至而小祿に而、御奉公も勤兼申もの共江御加増可被下ものも居多御座候。御心附之御座候事迄も、存寄申上候而御猶豫被遊候。御前にも御覺可有御座与奉存候。然處私身之上に者、御加増拜領仕候而能ものに而可有之哉。

但度人持に被仰付候而は、定番頭に而被下候役料三百石指上申候。被下人足輕・小者十人指上申候へば、五百石被下候而大形似寄申ものに御座候。此上に御斷申上候事は却而如何に奉存候。只願くは私存生之內迄拜領いたし、死後には指上申度候。人持組之儀も私一代に而、せがれ伊織儀者其儘被召使被下候樣に奉願候。此存念を御序を以被申上候樣にと謹而申述候處、內藏允中々請合不申、左樣之事共何と可被申上候哉。第一先達而御內意も有之、御請可申上との事故如此被仰付候。其上にヶ樣之藥袋も無之事何と可被申上候哉与、言葉をあらし過言を雜へ申候。仍之不首尾に相見え、其分に致し相別れ申候由。追而遠田氏右之存念一封にいたし、御家老玉井市正殿へ迄相達、被入御覽可被下候旨申述候處、市正殿一覽有之、甚驚候而、此事表向より被仰渡候事にも候はゞ取次も可仕歟。一向御直迄之御樣子に而、手前共不存事に候へば請取難申候。大槪難取次候はゞ、其外御近習頭之內を以、一封も被指上可然旨再三被申候由。依之遠田重而申入候は、決而此願御請取被仰上候事不罷成候はゞ、不及是非儀。其上は元來被下置候御知行・御役儀等迄も、屹度御斷申上、指上申に而可有御座候旨被申候。就其市正殿請取被指上候所、數日過候而御聞屆被成旨被仰出候由也。

遠田氏事雜說區々に而不分明候。御用人半田主鈴慥成趣承傳候旨に而被申聞候通如右。在江戶同役富永數馬より返狀之趣如左。

遠田氏之儀に付御尋之趣承知候。爰元に而も御同然之沙汰に候。慥成事且而不承候。去共存寄有之、御内々を以申上置候趣有之と、其夜より直にも被申候旨申候。餘程過候而私も其挨拶仕、感稱之趣申達候得者、思召之外辛苦仕候。又々各様後指を御さしの事にも可罷成などゝ被申候。乍推參千萬御尤にも存候。又は程之可有御座事かと申候而別れ候。此中者沙汰も無之候。何と治り候哉。暖氣に成御返し被成事も可有之と、舊臘被仰渡候故、頓而發足之心得、雪消候道中沙汰を待暮し、今月中歟來月初には罷越候支度之旨、是は子息も其咄し、世上之御加增御斷之事者、伊織ゟ尋候而も不存由申而居被申候。如仰賢人と可申候。上代にも不恥人、惜敷事不及筆紙候。尤罷歸候而も、只今迄之通御近習勤候樣に、去冬被仰渡旨に候得共、隱居同事之振に而、只今とても御用筋申談候衆も見え不申候。近比〳〵難得人物に候。相代り相續可勤者は中々當代・末々も有兼可申候。人欲名利を離れ、草木之詠を樂しみ被罷在候。早々御火中可被下候。御屋敷中替事無之候得共、跡々とは風俗もちがひ、華美に移、御勝手は難澁彌增申候、已上。

二月十三日　　　富永數馬

青地藤太夫様

〔浚新秘策〕

去年は元文五年

一、去年の暮於江戸遠田勘右衛門を人持組に被仰付、御加增五百石被下候時分之首尾、畢竟は大槻内藏允を御寵愛より事起り候。兼て勘右衛門御加增御斷申上候宿意は、御儉約を御好被遊、末々迄も甚しき御勘辨にて、御役も勤得不申者も有之時節、其身不足も無之者に御加增被下候事を氣の毒に存、先我身より辭退仕候て、大槻も心附候樣にとの下心に候由。去暮人持組に組替の事は、無是非仕合にて御請申上候へども、御加增の儀者兼ても御斷申上候事故、達て奉辭候。然處相公樣思召に不相叶、後には列迄も大槻下にと被仰渡。勘左衛門は七十有餘の老人、無面目仕合と存、迚も御奉公は可相勤首尾共不存、引退可申心底に相極め、脇よりも其趣に相見え候最中に、佐渡守樣より勘右衛門へ御親翰被成下候而、如何樣の事にも泥み不申、只御奉公の筋無事相勤候樣に被遊度候旨にて、古人の故事等御引證被仰聞候。老人甚不堪感涙、夫より心をおこし付、何事にも不泥相勤候。新兵衛を以御請申上、御親翰は鎧櫃の内に納置候旨新兵衛へ迄申聞、今以隱居も不願相勤候。外人の不知事なり。

寬保元年

正月元日。前田吉德初めて參議相當の禮を以て登營賀儀を行ふ。

〔政隣記〕

元日御登城、舊臘參議就御昇進、今年より白綾被爲召候。御禮之節も、是迄は御太刀御持參御禮被仰上候得共、今度より御太刀御老中御披露に而、御三家樣御同事也。御拜領之御時服も、白綾交左之通。

御時服二、木地臺居　しとら金色淺明御熨斗目御紋付、裏茶羽二重、ぬめ白綾御紋付、裏紅羽二重、

右之外年頭御規式等都而如御例。

正月廿七日。前田吉德の參議に任ぜられたる口宣江戶に達す。

〔政隣記〕

正月廿七日、去年十二月二日記之通、參議御拜任之口宣品川主殿受取、今月十六日金澤着。於越後屋敷本多安房守より御大小將神保長左衞門江被仰渡、同日申上刻發出、今晝江戶着、御家老衆江相渡上之。長左衞門詰人に付直に相詰候也。

二月十九日。前田吉德參議拜任を祝する爲閣老等の臨邸を求む。

〔政隣記〕

二月十九日舊臘參議御拜任に付、御老中方御招請之儀、今日細井佐次右衞門殿を以、御用番松平左近將監殿迄御込候處、翌廿日聞番被召呼、三月二日各申合可相越旨之御書付相渡。右御用、御馬廻頭松原善右衞門、御小將頭富永數馬・三輪藤兵衞江主付被仰出候由、御家老中御

申渡。但、文昭院樣御臺所從一位天英院樣、今月廿八日就薨去、同夕御用番ゟ聞番被召呼、此節之儀候間可被指延樣、追而日限可被相伺由被仰渡。依而四月廿六日重而細井殿を以被仰込候處、同日晩方聞番御招、五月四日之晩何も御越之旨御書付御渡。卽日御老中ゟ者御家老役、若御年寄ゟ者組頭を以御禮被仰遣。附、余方に者御直勤に候得共、此方樣故前々如此。

〔政隣記〕

二月廿二日御老中方御招請に付、今日より御座敷等御修覆初り、御客等も裏御式臺に而取次候儀前々之通。廿八日御給仕ならし御覽。御先手衆等御見分有之儀も前々之通也。

二月廿一日。前田吉德初めて德川吉宗直判の內書を受く。

〔御年表〕

二月廿一日、舊臘歲暮の御祝儀御獻上に依て、今日御直判の御內書初て御頂戴也。右御弘有之。

二月廿六日。大槻朝元その祿を加增せらる。

〔護國公御年譜〕

一、二月廿六日御加增二百二十石、都合二千三百石、人持組大槻內藏允。

二月廿九日。前田吉德、德川家宣の夫人逝去したるを以て登營奉弔す。

〔政隣記〕

二月廿八日一位樣申ノ下刻薨御、依之翌廿九日一統御登城。

文昭院樣御臺所、天英院樣与奉稱。

御兩殿樣兩御丸ゟ御登城、外御勤ハ無之。右に付普請者來月五日迄、鳴物者同十二日迄停止与大御目付衆より申來。但御邸内に而者鳴物幷大勢集り謡等、來月廿八日迄遠慮、金澤ゟ者三月五日相知れ、普請三日、鳴物等者九日迄遠慮与御觸有之。

三月二日。幕府諸侯を召して改元のことありたるを報ず。

この改元は二月廿七日に行はれたるなり

〔政隣記〕

三月三日今日御三家初諸御大名、爲伺御機嫌兩御丸ゟ御登城候樣、大御目付衆より御廻狀來、御登城之處、年號寛保与今日より改元之旨御弘、御折紙に書付、御席々御座上之御方ゟ相渡、御順達也。右御祝儀者御忌明に被仰上等。但四月朔日御居殘御祝儀可被仰上旨、追而申來。西御丸に而者、改元之御祝儀不及被仰上旨も申來候事。

三月八日。金澤寶圓寺附近に災あり。

〔大野木克寛日記〕
三月八日、昨夜五過寶圓寺裏門邊小家より出火。折節風强、忽餘燼及四方大火に罷成、小家數五・六十軒計燒、四半頃鎭。上阪猛見居宅危候に付、卽刻出馬。然共別儀無之、頗及歡喜訖。右之趣故金谷へ者不能出馬、纏幷挑灯迄遣之候。

四月十八日。前田吉德の女喜代姬將に婚せんとするを以て餞別の宴を行ふ。

〔政隣記〕
四月十八日喜代姬樣江御餞別御料理於御表被進、御囃子等被仰付。御附之面々幷御家老・若年寄・人持大槻內藏允・遠田勘右衛門、其外御婚禮御用勤候人々江も御料理被下之。且御殿在合候頭分江も、御菓子・御吸物・御酒被下之。但、大槻・遠田は御家老中之末席に而御料理被下、今日より初而也。

四月廿一日。廣島侯淺野吉良の嫡子淺野宗恒、喜代姬に結納を贈る。

〔護國公御年譜〕
一、四月廿一日伊勢守樣より御結納被進候。

伊勢守は淺野宗恒

前年とは元文五年十一月十九日繁姫の入輿をいふ

四月廿二日。喜代姫淺野宗恒に入輿す。

〔政隣記〕

四月廿二日喜代姫様今日伊勢守様ゟ御婚禮、午之刻ゟ被仰合に而、八時前御出輿。御迎仙石越前守殿・松平宮内少輔殿、御送は稲葉内匠頭殿 酒井山城守殿。御輿渡横山藏人、御貝桶渡玉井市正。御道筋本郷昌平橋・日比谷御門より、安藝守様御上屋敷御廣式ゟ被爲入。裝束并御祝等都而前年十一月十九日ゟ御同事。夜に入、於御居間書院も御囃子被仰付、望之者共承候様被仰出。

一、御出輿之節、大御門下ゟ若年寄西尾隼人、御白洲ゟ頭分、且方々より之御附使者罷出、其外前年之通。將又御出輿之砌より雨降出、段々大雨に相成。

一、御行列御先女中乗物二十三挺、是に准じ前年之御行列よりは餘程多し。趣は一に付略す。

一、あなた御式臺敷附ゟ宮内少輔殿并御出入之面々、鏡板階上ゟ御一門等、白洲頭分以上、御門下御家老等罷出候。御廣式御門内中程に疊を敷。其外に者縁取敷、上に者一面に蠟子を掛。右疊之上に御輿臺出有之候。請取御家老也。此方御家老、刀を爲持、長袴之引をおろし進退有之。御腰物持は帶刀ながら、御輿之御先角所に土足之儘罷在。受取人者腰指迄に而出受取之。御玄關ゟ御迎、左右手蠟懸覆ひを持出、御先ゟ立。尤御廣式御門外に而篝火焼申候。

右之外前年同斷。

五月四日。閣老等前田吉德の招宴に臨む。

〔政隣記〕

五月四日、前記二月十九日記之通參議御拜任爲御祝儀、今日御老中方御招請。御老中松平伊豆守殿・本多中務大輔殿、若御年寄板倉佐渡守殿、御奏者番堀田相模守殿・戸田越前守殿、御留守居・御大目付・御作事奉行・御普請奉行・長崎御奉行・日光御奉行御一人宛御出。御老中等者九時少過御出、御奏者衆以下者九時少前御出。諸事御作法前々之通。御庭も御見物有之。今日者御老中御兩方御出に付、御盃十人ゟ被下之。御一人に而五人宛、一度に兩人宛出る。御家老中より組頭並後藤瀨兵衞迄御盃被下之。御能御番組左之通。此度は御自分御祝に付、白洲見物者不被仰付候。

翁　高砂　六浦　金札。　御跡能　龍田　養老

一、御老中方ゟ彌御出候樣二日に御使組頭、今日御歸後御禮御使御家老、若御年寄衆ゟは御使御步頭勤之。

五月六日。前田吉德、皇子の降誕を賀する爲金澤より使者を發せしむ。

〔政隣記〕

三月四日權典侍局　皇子二月廿九日御降誕之旨、今日江戸ゟ申來。京都ゟ御祝儀御使御先手坂井甚右衛門、五月六日金澤立、同月廿八日歸。

五月廿五日。前田吉德、參議拜任を祝する爲一門を請待す。

〔護國公御年譜〕

一、五月廿五日御一門樣方御饗應御能有之。

六月朔日。前田重煕弓始の儀を行ふ。

〔御年表〕

六月朔日龜次郎君御弓始。御持弓頭吉田左太夫茂實祗候。

六月十五日。御歩小頭井關源左衛門等江戸にて駕籠に乘りたるを以て遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

六月十五日、御歩小頭井關源左衛門・御歩萩原勘太夫遠慮被仰付、御國ゟ御返、同夜歸。御歩渡邊彥太夫・小森貞右衛門・村田八左衛門・上木政太夫は、於江戸遠慮被仰付候段、御歩頭水越三右衛門於御長屋に申渡之。右者櫻田御前樣御婚禮御供披候節、何も町駕籠に乘候儀に付、

此間三右衛門御長屋へ、御表小將横目武田判太夫・御大小將横目西村甚太夫出座、右之人々手前御尋有之處、源左衛門は御目見も可被仰付御沙汰に付早く歸度、大雨に付駕籠に乘候由、御歩も御館へ出候儀不遲樣にと迄存、うかと心得違候由申聞。勘太夫者度々江戸へ罷越候者、外四人は不案內者故、右之通輕重被仰出与云々。(井關は翌年七月十一日遠慮御免、小頭并御知行被召放、御切米五十俵被下、定番御歩に被仰付。萩原も遠慮御免定番御歩被仰付、渡邊等は於江戸遠慮御免。)

一、御城使御歩鈴木佐左衛門儀、御使之度々遲く歸候に付指扣被仰付。其外惣樣御歩中へ、惣而對歷々慮外之仕形之旨等、江戸・金澤共風俗之儀段々被仰出有之。

一、翌十六日申刻頃、横山藏人御貸長屋へ御歩頭水越三右衛門被召呼、玉井市正列座、御大小將横目兩人出座。三右衛門儀御歩支配仕樣不應御意、遠慮被仰付、御國へ被相返候段被仰出候旨被申渡。依之同夜四時過江戸發歸。翌年三月六日遠慮者御免、御歩頭は被指除之。

六月二十日。前田吉德の子八十五郎江戸に生る。

〔政隣記〕

六月廿日。於本鄉御廣式若子樣御出生、御生母鏑木氏。勢之佐殿御同腹。七月朔日御七夜之御祝、御名八十五郎殿与、從預玄院樣被進之。

六月廿四日。前田重靖の抱守山口彌兵衛の役儀を除き遠慮を命ず。

〔護國公御年譜〕

一、六月二十四日、嘉三郎殿御抱守山口彌兵衛役儀被差除、遠慮。同日御歩小頭井關潤左衛門・平御歩萩原勘太夫、江戸より御返候而遠慮被仰付。

七月廿七日。前田吉德就封の暇を受く。

〔御年表〕

七月廿七日上使松平右京大夫殿を以て御暇、家重公より上使同人也。廿八日御登城、御手自御熨斗御頂戴。横山藏人正從、玉井市正貞衛御供にて御目見。但御熨斗進せられ候は初て也。御拜任故也。

〔德川實紀〕

七月廿八日、月次なり。松平加賀守吉德就封のいとまあり。例は黑木書院にて辭見する事なりしが、けふはじめて御座所にめされ拜謁す。特恩こそ聞えし。

七月。石川郡の十村等、百姓の風邪に罹りたる者多きを以て貸米を請ふ。

〔加州郡方舊記〕

覺

外八十三人本復人

一、二百八十八人　男女　淵上村源五郎組

笹塚・古保・打木・無量寺・畝田・普正寺村・風邪煩人

外二十七人本復人

押野村宇右衛門組

一、三百九人　男女　八田中村・御經塚・横江・矢木・荒屋・二日市・保古・中屋・下福増・入江・玉鉾・間明・八日市・八日市新保・上安原村・新保村・高畠村煩人

外三十九人本復人

野々市村少左衛門組

一、七十九人　男女　額新保・圓光寺村・德用・三日市・有松村煩人

外四百四十六人本復人

一、七十人　男女　倉部・八田新屋・成・宮永・新宮永・平木・風邪煩人

右石川郡之内當春より風邪相煩申に付、近在又は宮腰・松任等に罷在候醫師を懸、隨分療治爲致申候所、風邪宜罷成候而も、病後力付不申耕作不得仕、指閊申候に付、植付中相草修理等、餘村より人足を懸合力いたさせ、隨分手おくれ不仕候樣、夫々十村より申付候。御田地養等手閊申候故、干鰯等才覺仕相渡申候。給物之儀茂指閊候故、才覺も仕相渡申候へ共、數日之

儀に御座候に付、相調兼難儀仕申候。右申上候通、風邪段々宜体に罷成候者も、急に力付不申候故、押立作方相勤兼申候。只今御田地手入最中、其上作物段々出來仕時節に向申候に付、不達者に御座候而者難成奉存候。申上兼候得共御貸米三百九十五石御貸被下候はゞ、隨分養生等爲致、段々宜者早速力付申樣仕度奉存候。御相談被遊被下候樣奉願度、奉得御内意候、以上。

丙七月　　　田井村　喜兵衛

村井村　與三右衛門

御改作御奉行所

覺

一、六十四人　病死人　淵上村源五郎組

一、百二十六人　同斷　押野村宇右衛門組

一、廿八人　同斷　野々市村少左衛門組

一、九十七人　同斷　村井村六左衛門組

右組々書上申通御座候、以上。

丙七月七日　　田井村　喜兵衛

村井村　與三右衛門

八月廿二日。前田吉徳江戸を發して金澤に向ふ。

〔政隣記〕

八月廿二日八半時過御發駕、御中邸・御下邸ゟも御立寄、夜九時頃大宮驛御泊ゟ御着。但御供御家老等如去年、御作法前々之通。宗辰公御中邸迄御見送。

九月四日。前田吉徳金澤に着す。

九月四日金澤御着城、御作法前々之通。御歸國御禮御使山崎庄兵衛、御目見等如御前例、同日發。

九月廿六日。儒者兒島平十郎江戸より來り組外組に加へらる。

〔大野木克寛日記〕

九月廿七日折々小雨、寒冷。

御儒者兒嶋平十郎、去頃自東武到着。昨日支配頭寺社奉行御用番將監被爲召、平十郎事組外ゟ御加被遊、御番相勤候樣被仰渡候旨、御用番大和守殿達之。其段將監宅ゟ平十郎相招申渡之。組外番頭ゟ引渡之候云々。

平十郎父者平兵衞と云、平十郎代迄江戸在住也。然處平十郎金澤ゟ引越罷越候。御知行三百石、只今迄寺社奉行令支配之。

十月廿三日。前田重敎金澤に生る。

〔政隣記〕

十月廿三日、金城於二之御丸御廣式に、酉上刻若子樣御出生。十一月朔日御七夜御祝儀五百八十俵。御名健次郎殿与杉江李左衞門上之。

十一月八日。藩の財政困難なるを以て儉約を專一とすべきを告ぐ。

〔典制彙纂〕

御勝手連々御難澁之處、近年打續莫大之御損毛、其上去年以來不時御物入多有之、御借銀等過分に罷成、最早此上被成樣も無之御時節に至候付、各別之趣に而御格も御改可被成品有之候。左候へば大切至極之儀に候間、各萬端心を附、御爲之儀に候得者、少々之品に而も御儉約之筋に成候儀者、無油斷可有詮議候。且又他役所之事に而も、心付儀有之候はゞ、無遠慮互に同役同事に相心得、和順を以申談、專御儉約之筋相立候樣、急度可相心得旨被仰出候條、被得其意、唯今より御格被改候同事相心得、嚴重御儉約之筋相立候樣可被僉議事。

以上

平兵衞諱は景范

酉十一月八日

御儉約之儀に付被仰出之趣有之、諸役人等ゟ別紙之通申渡候付、寫相達候條、各も御儉約之筋被心付候儀有之候者可申聞候。且又返上銀等、唯今迄無據申立有之分は承届、銀高之内或は半分又は三之一上之候人々茂有之候得共、是以後猶更嚴重僉儀可有之事に候條、兼而各被致其心得、專儉約を用候之樣、夫々支配之人々ゟ急度可被申渡候事。

以上

酉十一月十日

十一月二十日。十村等に命じて嘗て配下の組より藩に用立てたる銀子の利子を低減せしむ。

〔岡部氏御用留〕

先達而相觸候通、御儉約之儀無油斷心懸、御爲之筋は嚴重に可相心得候。

一、其方共組々より御かり銀、御利足一歩二充被下候得共、當月より八充之御利足に爲仕度事に候。尤御算用場奉行中ゟも及示談置候之間、銀主共へ申談、此節御儉約之筋大切至極之儀に候得者、人々違背之筋有之間敷儀に候得共、和順之上を以右之通に相減候樣可仕候。尤承知之旨早々可申越候。自然右之通に相減、指支申品も有之候はゞ、早速罷登委細可申聞候。

披見以後判形候而先々相廻、落着より可相返候、以上。

酉十一月二十日　村井安左衛門

不破忠太夫

能州四郡御扶持人・十村中

右之通今般御書立を以被召出候に付、寫相達候條奉得其意、嚴重に相心得可申候。御儉約之儀心附候品も有之候はゞ可申聞者也。

酉十一月　改作奉行

御扶持人・十村等中

十一月廿二日。百姓その作配する田地を悉く切高とすることを禁じ、必ずその幾分を剰さしむ。

切高とは他人に譲渡すをいふ土地は百姓の所有にあらざるが故に賣却とは言はざるなり

〔筒井舊記〕

百姓中切高之儀、一升高・二升高に而も相殘之候而切高仕筈に御座候。持高不殘切高与申儀者、不罷成儀に御座候。尤懸作高之儀は格別之儀に御座候。此儀存違之者有之候間、此段私より何れも申談候様に与、御改作所より被仰渡候。切高附札に御印形罷成候刻者、御改難被成候間、自然麁抹之儀有之候はゞ、急度可被仰付候間、隨分念に入候様可申談旨被仰渡候間、

左樣に御心得可被成候、以上。

十一月廿二日　　大澤村儀左衞門

仲間宛所

十二月八日。前田重靖生母の族奥泉金兵衞縮所に押籠めらる。

〔護國公御年譜〕

一、十二月八日嘉三郎殿御袋御方兄、先年於江戸被召出、金澤ゟ引越御貸小屋に罷有候奥泉金兵衞、不行狀者に付御貸小屋において縮所出來いたし被押籠候。子細は、先頃右衞門橋邊にて、夜中錢屋何某手代錢をかたね罷通候所、何者とも不知切殺、錢を奪取候儀當分不相知候所、段々僉議有之候得ば、右金兵衞所爲之由略致露顯候趣に付、御續柄も有之候者にて人殺之儀、無沙汰に相成候而、右之通に被仰付候。

奥泉金兵衞に就ては元文三年六月朔日參照

〔浚新秘策〕

一、去年冬金澤御城下高畠左門宅之屏腰に、町人躰之者を斬殺し置候。右町人は尾張町淺野屋某と申者之手代に候。其日之朝銀百目を錢買に罷越候者有之、賣渡し、則其手代致持參候其路にて斬殺、鳥目奪取申爲躰に候。種々遂吟味候へども不相知候故、程經て竪町に罷在候浪人奥泉幸七与申者召使之僕、同町之内町人内より綿衣一盗取候樣子に候得共、不慥候に付

去年は寛保元年

疑敷存する迄にて相過候。彌疑敷事ども有之に付、粗取沙汰に及申。幸七兄與泉金兵衛は組外二百石被下、長瀬五郎右衛門組に候。此者前々より不法方外者に候へども、嘉三郎殿母儀之兄に付、誰々も相ひかへ其分に仕置候得共、近年五郎右衛門達御內聽、世間徘徊不仕樣いたし置候。右幸七僕賊仕候儀紛れ無之躰に付、五郎右衛門より召捕之、高畠木工に相達遂吟味候處に、右僕白狀不仕候而申候は、是等よりも甚大事之賊をいたし、人を殺し候者有之候ても其分に罷成候て、却て綿衣一つ見え不申候とて、如此御吟味は難心得などゝ口走り候故、承り屆候へば、幸七兄與泉金兵衛所爲之趣明白に申顯候。五郎右衛門も承り屆達御內聽候處、御隱密とも有之不及披露押込置候事。右金兵衛兄弟共に、立花飛驒守殿御家來に候處、兩人共平生不屆至極之者に付、其分に難成ほどの事どもに候處、嘉三郎殿御袋方於江戶御寵遇にて、則於江戶被召出候其時も、已に飛驒守殿に而は、合羽一重致所持申体にて可爲追放かと申時節に候。其身之一大幸出來、幸七共に立花家を罷出候。右幸七寬保二年之春長瀨五郎右衛門與力に被召出、百石被下候事。

十二月二十日。藤内をして死刑の者ある時その執行に當らしめん爲手當として鳥目を給す。

〔金澤古蹟志〕

於町會所斬罪申付候節、首討等之儀、藤内共御用無手攄相勤候樣當秋申渡、委曲請紙面被取置段承届。其砌御手前共迄藤内頭仁藏願紙面遂披見、願之通是又承届、僉議之上、今年より永々爲目毎歲二十貫文宛行置候條、先達而請紙面之通嚴重に相心得候樣可被申付者也。

寛保元年十二月廿日　　　　　町會所印

森川政右衛門殿

笹田彌三右衛門殿

森　庄右衛門殿

十二月二十日。御馬廻組津田新六の子平馬足輕小頭を疵つけて自殺す。

〔護國公御年譜〕

一、十二月廿日夜中本多房州家中篠井久馬宅にて、御馬廻組二百石津田新六嫡子平馬、右久馬組足輕小頭野村喜八と申者を疵付、其身は同家中靑木孫右衛門於門前致自害相果申候。

是歲。御算用場奉行等藩債償却の方法を上申す。

〔吉德公の記〕

今年御借銀二萬貫に及、來年は二萬三・四千に成候趣。ケ樣に候ては畢竟御續き難成事故、大坂御借銀年賦に被成、御土藏より八千貫御渡し、其上は當時の御樣子を以て、夫々至て嚴重

下拙は本多安房守

に遂御儉約候はゞ、御取續の所大變は格別、先は請合申程に相考候由、御算用場奉行横山兵庫・奥村彈正・前田源兵衞、御儉約奉行戸田靭負・大橋又兵衞・千福久太夫・林源太左衞門等、和州・下拙・大學・市正へ紙面差出候。樣々遂僉議奉御內聽候所、畢竟は右の通に可有之候へども、外に思召の筋有之に付、先此度は右の趣御延引可被成候。相考候趣は尤に思召候由に付、其段右人々へ密に申達、先是にて相收候。大槻へ取入御儉約工夫仕候行山傳左衞門と申小役人存寄、灰吹銀五千貫計引替の儀被仰出、大坂へ寄々相廻し、密に安右衞門引替申筈に候。然ども年內先少々指遣候跡は又樣子も替り可申や。御國にて引替可申と申者も有之、割合の儀只今內談最中、畢竟の治定は未相知候。御家中より御借米の儀も安右衞門紙面には書載出し候へども、此儀御延引の御內意にて事濟申候。

右十一月十九日安房殿紙面也。

寛保二年

藩侯在國の際に於ける年頭の儀式は毎年略相同じ今その一例として今年の詳を揭ぐ

〔政隣記〕

正月朔日。前田吉德金澤に於いて年頭の禮を行ひ諸士の拜賀を受く。

從御先代之御格式を以、御當代享保十一年御在國初而之年頭以來如玆。尤依其年少宛之差、或は交名等之替有之儀は推而可知之。前々御作法全不記之。又以後も大樣違之儀は可記之。

不然時者大旨今年之通可知御格与。

元日明ヶ六時前御熨斗目・御半袴被爲召、於御居間大服御茶蓬萊御服紗・雜煮・御土器夫々引替上之。長柄之御銚子御加、御肴上之、相濟段々引之、二汁五菜之御料理御本膳与御土器引替、御膳被召上、御吸物・御銚子・御肴上之。御給事御表小將之内配膳役兩人に而勤之。但御規式之御引渡三献者御次に飾扣置。三ヶ日朝服紗・御雜煮上之也。

一、御禮人等表向六時揃に而、頭分以上御帳に付。御表宜候旨月番より言上有之。

一、五つ二歩御裝束御直垂被爲召、御奧書院ゟ御出、諸大夫四人大紋着用御禮被爲請候。御家老役兩人布衣着用に而、御緣頰御右之方に伺公。御太刀持之役御表小將(但配膳役。)兩人素袍着用。御奏者番素袍着用に而獻上之御太刀持出、鬮之内三疊目に置之。諸大夫之面々蔦之間御廊下より列之通段々罷出、御鬮之内一疊目に而御禮申上、御奏者番御鬮之外御左之方御杉戸際に扣披露之。御表小將素袍着用に而御太刀引之候。但御近習之面々熨斗目・長袴、蔦之間御廊下与、松之間二之間御緣頰、御奧書院入口御杉戸際与二ヶ所御屛風に而圍、伺公仕候。

一、諸大夫之面々御禮相濟、蔦之間御廊下に扣罷在。右御家老役末座之者より會釋有之。大

和守等段々罷出、近く寄候樣に与御意に而、次第之通横山大和守・本多安房守・前田土佐守・前田對馬守、御間之内御右之方御唐紙際に別居仕、諸大夫之面々裝束に而御禮被爲受、目出度御儀奉存旨、右御家老役座上之者出懸り御挨拶申上る。天氣も宜敷候由御意、諸大夫座上之御請申上る。熨斗与御意有之、御表小將素袍着用、御熨斗三方持出、大和守等頂戴之。畢而右之御表小將引之。其以後御熨斗頂戴仕難有奉存旨御禮、右座上之御家老役出懸り申上る。今日者何も裝束に而御禮被爲受、珍重に被思召候由、重而御意有之。平伏仕、段々末座より退出。但檜垣之間上之間より二之間に懸、御緣頬之方一間々々に圍、家來三人宛召連罷出、大紋之直垂に相改申候。

一、右相濟、御裝束被召替、於御居間書院嘉三郎殿御禮被爲受。御太刀置所上之間御敷居之内際、二之間竪疊二疊目之下に而、御禮披露若年寄役勤之。御家老役之内出懸り可有之候。御家老役・若年寄例之所に伺公之事。

一、右相濟、御小書院御着座。村井主膳・長新十郎・奥村助右衛門・奥村丹三郎・前田大炊・御家老役・若年寄并前田外記迄御禮相濟、被爲入、御居間書院三之間に御着座、船之間に而鶴之庖丁御覽被遊候。嘉三郎殿にも御出、御居間書院二之間に而御覽被遊候。庖丁御料理頭井口數右衛門相勤之。畢而御目通に而御目錄頂戴之、御小袖一御用人相渡之。

一、重而御出、於御大廣間人持頭分御禮、年寄中助右衞門・丹三郎・大炊伺公。御用番幷外一兩人、御禮人出口御衝立之外に有之指引。且又御大廣間之横御緣頰に毛氈を敷、其上に御家老役・若年寄・御近習頭伺公。矢天井之間に右御禮之內迄御表小將・同御番頭相詰、幷御廣間之御緣頰にも毛氈を敷、寺社奉行・定番頭・御馬廻頭・御小將頭・新番頭・御步頭・御大小將御番頭伺公御禮人指引、御横目御用人者竹之間二之間に伺公、何茂列之通替々御禮申上。御太刀引御大小將十二人、右指引御小將頭一人・同御番頭一人、竹之間二之間出口相詰罷在候。

御禮之次第、但御太刀に而御禮

人持組、定番頭、御馬廻頭、御小將頭、組頭並、町奉行、今石動等支配人幷魚津在住（此兩役者前輩次第）御太刀引之。

鳥目に而御禮

新番頭、御步頭、大組頭、御持方頭、御留守居番、御先手物頭、物頭並、（龜次郎殿附）物頭並、物頭聞番、（御前樣方御附）物頭並、御奧小將御番頭、御表小將御番頭、組外御番頭、御大小將御番頭、（佐渡守樣御附）御大小將御番頭並、定番御馬廻御番頭、小松定番御馬廻御番頭、御使番、御臺所奉行、御細工奉行、鳥目引之。

御奧小將横目、御表小將横目、御大小將横目、鳥日引之。

御太刀に而御禮人持組

津田内藏助、大槻内藏允、遠田勘右衛門、上坂平兵衛、津田伊兵衛、御太刀引之。

鳥目に而御禮

御役儀御免之諸頭、仙石庄左衛門並之寄合。

以　上

一、右相濟御奥ゟ被爲入候刻、船之間に而御表小將一統御禮。年寄中之内一人伺公。披露御奏者番、何も年頭御禮申上候旨唱之、身上當之鳥目之前に置。此以後惣禮者何も如此也。

一、御大廣間御禮人しらべ宜候旨月番より言上、重而御出之刻、御居間書院三之御間に而、御奥小將御番頭支配之人々一統御禮、伺公無之、披露御奏者番。

一右相濟舟之間に而最前相殘候御表小將等御禮。年寄中之内一人伺公、披露御奏者番。夫より御大廣間に而、不行步に而獨禮難成人持横山兵庫・奥村彈正（兩人は御太刀目錄前に置。）頭分吉田平兵衛・三階伴右衛門・山口源太夫、御大小將・御射手・御異風・新番・御歩小頭・三十人頭・新番組御歩・御醫師・坊主頭一統御目見。伺公年寄中、其外今朝之御禮之通伺公。披露御奏者番。（平兵衛以下身當員數鳥目前に置。）

一、右相濟被爲入候刻、御居間書院三之間に而、佐渡守樣御側小將御禮。伺公無之。披露御

奏者番、相濟被爲入候。九つ打追付相濟候也。

裝束三ヶ日・四日・六日熨斗目・半袴、元日御大小將以上幷二日も八百石以上遠所奉行等長袴。

一、松之間二之間に而、年寄中幷新十郎・助右衞門・丹三郎・大炊、御家老役同席に而御雜煮・御吸物・御酒被下、かよひ坊主。但、若年寄者常之席に而被下候事。

一、如御例鶴之庖丁被仰付候御膳下可被下候旨、八時前御近習頭を以被仰出、同人誘引、於御居間書院二之間、年寄中新十郎・助右衞門・丹三郎・大炊、御家老役・若年寄見習前田外記同席に而、鶴之御料理頂戴、二汁五菜。御茶請、御茶後御菓子迄被下之。遠田勘右衞門（人持御近習）を以御意有之。御茶迄相濟、御近習頭を以御禮申上る。但今年者御料理可被下趣、最初之御意遠田勘右衞門申述。誘引丹羽澤右衞門。本膳出御意野村七兵衞。御酒之上御意三輪藤兵衞相勤る。但、給事御表小將之事。

一、人持江戸御留守居前田將監・菊池十六郎、人持御近習大槻内藏允・遠田勘右衞門、鶴之御料理御下被下候段、御近習頭演述。御居間書院三之間下之方御屛風圍に而、御料理二汁五菜頂戴。本膳出候而御意之趣御使御近習頭相勤之。但、御給事御表小將。

一、御近習頭・御用人・御臺所奉行幷魚津在住茨木覺左衞門・今石動在住半田半左衞門、例之

通鶴之御料理一汁三菜御下頂戴被仰付候。但舟之御間坊主給事。御近習廻平士も、於波之間例之通鶴之御吸物被下之。

〔政隣記〕

一、嘉三郎殿江年頭之爲御祝詞干鯛一箱・御目録被進之、御近習頭。斐姫様・健次郎殿江も右同斷。

一、斐姫様より年頭爲御祝詞御樽代五百疋被上之、健次郎殿より干鯛一箱・御目録被上之。御使、御廣式御用達。（此御使人金二百疋宛被下之。）

〔政隣記〕

同日於江戸、御太刀馬代御献上之御使、御小將頭青地藤太夫素袍着御城江持參。御作法如前々。

正月朔日。辰の刻日蝕あり。

〔可観小説〕

一、寛保二年壬戌正月丙午朔巳未、日食八分食也。自辰至巳後刻。余在東都。是日陰雲終日不見日體。自辰至巳稍闇、誠可謂八分食也。然に在本藩則食甚しく、無陰雲而數星見光。是日朝參の人互に面色不見ほどの事と云。行路の人恐怖して、姑くは往來の人絶たりと也。蓋地氣使

之然者歟。余往年在本藩而見皆既食、然不至其闇矣可恠。

正月二日。前田吉德諸士の拜賀を受け謠初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月二日御禮人六時揃、御表宜候段月番より申上、四半時過御廣間に御半袴被爲召御出。昨朔日所勞之町奉行稻垣與三右衛門、昨日河北・石川・橋爪三御門當番之物頭、各長袴且又御馬廻一統並居御目見。年寄中初其外御緣頰之伺公元日之通、披露御奏者番。(八百石以上幷小松・高岡・魚津・所口・宮腰町奉行、境・別宮奉行は不依身代長袴着用、各靑銅百疋上之。)右相濟被爲入候時分、御通懸り於柳之御間、御役者共諸橋何次郎・波吉宮門御目見、披露奏者番、年寄中之内一人伺公之事。

但、披露之御奏者番迄長袴、其外年寄中初伺公之面々にも半袴。

〔政隣記〕

同夜御謠初七時揃、御表宜候段月番より申上、暮六つ打、追付御大廣間に御熨斗目・御半袴に而御出、御上段下に御着座。年寄中長袴着用に而、御大廣間上之間御緣頰之方に何も罷出。近く寄候樣御意、御敷居際三尺計置列居。其儘御前之御吸物御三方に而出之。年寄中幷奧村助右衛門にも御吸物出之。(御前御給事・御銚子役等は御表小將。年寄中に者給事は御大小

將。）御嶋臺・御肴出之、長柄御銚子御加出。年寄中助右衛門ゟ御盃被下、御盃御取上げ被遊候時、座上之大夫四海波之小謡を謡ひ、直に高砂之御囃子初る。年寄中助右衛門迄は御盃返上仕候。御盃取次、若年寄替々相勤之。御家老役より若年寄幷若年寄席見習人持前田外記迄御盃被下、返上無之。御肴者若年寄等迄御直に被下之候。但年寄中幷助右衛門・御家老役・若年寄及前田外記迄、御盃臺置所段々違有之。畢而御銚子御加二つ宛御大小將持出之。御酒御請、少被召上被指置候を、御前之御銚子役右之御銚子ゟ移之、御流之二銚子ゟ加之、御左右ゟ別れ、二之御間御敷居之内二疊之下に居る。其時數之御土器・御肴御大小將四人二行に持出、御銚子之際御左右に置之。其時年寄中、右御肴之所御左右ゟ一人宛出、頂戴人兩人宛一度に御左右ゟ出、御土器を取御酒を請、御前に向頂戴而汲之時に、御肴右之年寄中はさみ加候而御土器を持退く。段々右之通に出、半ばに又二銚子出、最前之二銚子と替る。其時右二銚子向合加候而退く。御囃子之間々に小謡を謡ひ、御規式相濟候時分猩々之御囃子一度に相濟、御前御吸物御三方迄段々引之、年寄中吸物も引之、猩々は座上之太夫舞納る處ゟ、若年寄御目錄（時服二ツ）於御前相渡、頂戴之仕候。但竹田權兵衛勤候者、外に一　　一被下之。

右相濟候而、今晩は天氣も靜に而首尾能相濟候由御意有之。年寄共座上之者御挨拶申上、五時前相濟被爲入候。但惣役者ゟ者、白銀二枚宛御目錄を以被下之、町奉行相渡之。

一、右御作法之內、御着座之御間横御緣頰に、御家老役・若年寄・御近習頭伺公、矢天井之間に御表小將相勤、御大廣間御緣頰に御小將頭一人・御大小將御番頭・同御横目伺公、御勝手御用人等御給事出口、御小將頭一人・同御番頭・御横目・御表小將御番頭・御横目相詰申候。

一、御流頂戴人、今年は人持組之役懸は不依役列に、身當座列之通を以段々罷出、寺社奉行・假奏者・御奏者、佐渡守樣御用并御留守居御用前田將監、並御算用場奉行・公事場奉行・御近習勤候人持・定番頭・御馬廻頭・御小將頭・組頭、並町奉行・今石動等支配・魚津在住・新番頭・御步頭・御近習御持方頭・御留守居番御用人・御近習御先手物頭・御近習物頭並。(組頭並物頭並之聞番面々列之所に出る。聞番御流頂戴之儀去々年春より初る。)

一、御流初り、役者に之土器・御肴板おしきに居、御大小將持出、大夫一人につぎ、銚子脇に指置、猩々之囃子方役者出る時分罷出引之。

一、御流頂戴之人々、竹之間二之間より同御下段に懸列居、御吸物・御酒・御取肴・御肴も被下。御給事御大小將、長袴着用。

一、御家老役・若年寄に者御吸物不被下候事。

一、御給事人何も長袴。指引等御番頭等半袴。御緣頰伺公之御番頭・御横目も半袴。御流頂戴人長袴、小さ刀帶しながら罷出頂戴之。

一、御給事役附。

御前御吸物　御嶋臺　御押御酌

代御銚子　御加提　御滴　御肴直

御家老等ゐ被下候數之御土器　御座之間しん切役半袴

以　上

御流御銚子　同代り　御加　同代り

御流被下候數之御土器　同御肴

年寄中吸物　二之間等しん切役　役者給仕

以上御大小將勤之。

御　番　組

高　砂　何次郎　惣左衛門 八郎兵衛　久太郎 又十郎　東　北　宮　門　庄七 八郎兵衛　五郎兵衛

猩　々　何次郎　半四郎 丈助　久太郎 又十郎

一、被下方前記之通、大夫者御時服二宛、惣役者・御細工者白銀二枚宛、役者溜所實檢之間、役者指引御大小將兩人。

正月三日。前田吉德寶圓寺に詣で次いで諸士の拜賀を受く。

〔政隣記〕
正月三日九半時前寶圓寺ゟ御參詣。御禮人者前日依被仰出五半時揃、御歸以後御表宜段月番より申上、御半袴に而御大廣間ゟ御出。昨日當番之御馬廻・定番御馬廻・組外・年寄中支配之平士・寺社奉行支配之平士・町同心・御厩方・火矢之者・御歩小頭・同並・定番御徒・小頭・御算用者小頭・同並・御料理頭・預玄院樣幷御前樣方御臺所頭・御細工物小頭・定番頭支配之御臺所頭・御免之者・與力寄親列之通、組附幷平士之與力迄相濟、本組・明組與力（組附に而當時頭無之組附與力）・御大工頭。
右一統御目見、年寄中助右衞門・丹三郎・大炊伺公、御奏者番披露。其外諸頭伺公二日之通。
但支配御禮に付、夫々之御番頭も此時者伺公に罷出候。平士役懸り、御馬奉行・御作事奉行支配人之内より御目見仕候故、是又伺公。
右相濟於柳之間、金澤・小松・高岡 宮腰・松任・所口町人前々御目見被仰付候分、幷府中町・今石動・氷見・城端・魚津町肝煎、津幡御旅屋守。
但、金澤町肝煎は本町肝煎之內より一人爲惣代罷出。
右御通懸り一統御禮、年寄中一人伺公、御奏者披露之。
右相濟、於柳之間檢校御目見、伺公・披露右同斷。

正月四日。前田吉德乘初・射初・打初の儀を行はしめ諸士の拜賀を受く。

〔政隣記〕

正月四日朝五つ七歩頃御居間前於御馬場御乘初、千歲之御馬被爲召候。御例之通御馬役にも爲御乘御覽、御裝束御熨斗目・御半袴、御近習頭一人罷出有之、尤御馬奉行等罷出。

一、四半時頃御禮人相揃候段月番より申上、追付御出、於御小書院隱居幷人持嫡子・年寄中次男同弟・人持次男三男・頭分嫡子・上坂平兵衛等嫡子・同人等二男・御役御免之頭分嫡子・仙石庄左衛門並嫡子迄御目見、相濟被爲入。重而九時過御表へ御出、於矢天井之間昨日殘候定番御馬廻等御禮被爲請、披露御奏者番、伺公年寄中之内一人。夫より御大廣間へ御出、御射初吉田家初小頭幷御射手不殘御覽、被爲入。御卷藁者御大廣間二之間之下之方、竹之間上之間之御敷居際。三之間之方には御屛風立、竹之間之方に者御衝立建つ。御衝立之際に月番年寄衆伺公、外年寄中助右衛門・丹三郎・大炊伺公。御緣頰之伺公、此御間に而御禮人有之時之通。

　但、御城中御帳附御大小將一人、御射初之内御勝手へ相詰罷在候。

御前御裝束御半袴、其外何ものしめ・半袴。

一、子供之分、人持嫡子も御禮人一統半袴。今日御禮人揃刻限五時之事。

一、三之御丸於稽古所御鐵炮打初有之、御異風小頭幷御異風中相勤。年寄中之内一人、御横

目・御城中御帳附御大小將一人宛、御異風裁許物頭罷出候。

但、中之角追而入御覽。

一、御射初・御打初・御馬乘初御祝儀物被下に付、月番年寄中松之間二之間ゟ出席。二之間御緣頰に而御目錄御用人渡之、御橫目中指引之事。御射手・御異風兩裁許物頭幷御馬奉行時服二宛。

但、吉田三家も大方物頭又は御射手裁許故如此被下之候。若いまだ平士之時者、御染物五端被下之御例也。

御射手・御異風兩小頭白銀三枚宛、御射手・御異風同二枚宛、御馬役中時服一宛被下之。御馬飼料裁許御步白銀二枚宛、御中間小頭幷小頭代・御厩留書足輕・爪髮役足輕・惣御中間迄金子等被下之。

一、御射手・御異風裁許幷兩小頭等、御馬役曁御留守居番・御帳附役御大小將、於御臺所御祝御雜煮等被下之。

正月五日　前田吉德天德院に詣づ。

〔政隣記〕

正月五日、天德院ゟ九時過御參詣。

正月六日。前田吉德寺社方の拜賀を受く。

〔政隣記〕

正月六日御表宜候段月番より申上、追付御大廣間に御出、四半時過寺社方御禮被爲請。年寄中助右衞門・丹三郎・大炊伺公、披露御奏者番。替々御緣頰等伺公元日御禮之通。御大小將出し方に六人、引方に六人相別り相勤。指引御小將頭・同御番頭、御禮人之指引御橫目。尤寺社奉行幷寺社方與力等罷出有之。勝興寺は實檢之間に屛風圍に而被有之。

御目見之寺社方左之通

能州 惣持寺　寶圓寺　天德院　瑞龍寺

右者御大廣間御鋪居より竪疊二疊目之頭十帖一本置之、一疊目之頭に而御禮。

如來寺　玉泉寺　桃雲寺　惣持寺塔頭 芳春院

高岡 繁久寺　酒井 永光寺　氷見 光禪寺　今石動 永傳寺

輪島 蓮江寺　瑞龍寺塔頭 東漸院　瑞龍寺塔頭 末廣二本 林洞庵　同 末廣二本 龜占庵

瑞龍寺頭塔 末廣二本 法性庵　西養寺　明王院　寶幢寺

波着寺　觀音院　倶利伽羅 長樂寺　能州一宮 長福寺

安居 安居寺　末廣二本 眞長寺　菅原 末廣二本 成喜坊　菅原 末廣二本 遍照坊

石動山 天平寺　二上山 養老寺　大岩山 日石寺　吠木山 法住寺

徳田 安養寺　富木 大福寺　越中一宮 慶高寺　千手院

岩倉寺　白山 長吏　立山 岩峅寺　立山 芦峅寺

小松天神 百疋 能俊　埴生神主 百疋 上田石見守　小松八幡宮宮司 百疋 古曾部伯耆守　百疋 鬪山城守

寺中神主 五十疋 河崎和泉守　春日神主 百疋 高井周防守　寺中神主 五十疋 河内　黒津船神主 百疋 權頭

白山神主 百疋 釆女　小松山伏 五穀寺

但、上に書付無之分、都而十帖一本献上也。

右従如來寺芦峅寺まで、御大廣間御敷居之内より一疊目頭に献上物置之、同御敷居之外二疊目之頭に而御禮。是人持并組頭之御禮疊也。能俊以下者、御敷居之外一疊目之頭御左右に鳥目置之、御敷居より外三疊目之頭御左右に而御禮。鳥目に而御禮之頭分御禮所也。

御太刀馬代 勝興寺　但御進物置所惣持寺等同斷。

今日煩等に而不罷出寺社

鵜飼 金峯寺　太田 海門寺　三崎 高勝寺　小松 養福院

永久寺　船見 法福寺　所口神主 船木志摩守　三崎神主 大宮司

八幡神主 紀伊　一宮神主 監物　所口神主 民部　所口 光德寺

神護寺は城内に祀れる東照宮附屬の宮寺なり正月十日御佛殿は徳川綱吉

正月七日。諸士の出仕するもの年寄等に謁す。

〔政隣記〕

正月七日出仕之面々揃次第、年寄中於竹之間謁、退出如前々。御目見無之。

正月八日。前田吉徳神護寺の佛殿に詣づ。

〔政隣記〕

正月八日神護寺御佛殿ゟ御直垂被爲召御參詣。十日御佛殿ゟも今日御參詣。

正月九日。前田吉徳天徳院に詣づ。

〔政隣記〕

正月九日天徳院ゟ御參詣御長袴。

十日御參詣八日に濟、今日無之。十一日御規式無之。

正月十二日。前田吉徳寶圓寺に詣で歸城の後十村・山廻等に謁を許す。

〔政隣記〕

正月十二日八時前寶圓寺ゟ御參詣、御長袴。御還城之節表御式臺より被爲入、十村・山廻等表御式臺に並居御目見、御奏者番披露、熨斗目半袴着用。御横目も同斷着用。年寄中等服紗小

袖・布上下に而御式臺階上に伺公。御用番者下之方少引離伺公。御家老役常服に而階下に伺公。若年寄は鏡板之上ゟ罷出有之、一人は御先立仕候。御近習頭・御奥小將・御表小將・奥御納戸奉行は階上中敷居之下迄罷出有之、御供仕候。御駕籠之戸者、御近習頭敷付之上ゟ罷出有之明之候事。

但、御算用場奉行・御郡奉行・改作奉行、前々之通熨斗目・布上下着用、御大式臺に列居有之事。

當番之御大小將・同御番頭御式臺上之方、虎之御間後にして相詰罷在。

翌十三日今日御目見被仰付候十村等百三人、於御臺所御料理被下之。

〔政隣記〕

十四日如來寺ゟ御參詣、但今日は無之。

正月十五日。前田吉德小松城番等の拜賀を受く。

〔政隣記〕

正月十五日例月之出仕無之。御表宜候段月番より申上、九時前御居間書院ゟ御出、左之三人被爲召。誘引大和守。

御家老役　本多頼母

今年江戸御供被仰付。

前田外記

若年寄本役被仰付に付御意、江戸御供も被仰付。

右相濟御小書院ゟ御出、小松御城番一人年頭御禮、御太刀引之。同所御番頭幷頰本復頭分年頭御禮、前田外記役儀之御禮等相濟被爲入。年寄中助右衞門・丹三郎・大炊伺公。瀧之御外間御緣頰に定番頭等伺公。萩之御間御家老・若年寄幷御近習頭伺公。芙蓉之間に、御太刀引御大小將、指引御小將頭、同御番頭、御判物方御用主付之組頭・御用人各一人宛相詰。御禮指引御横目。

一、重而御出之節、於矢天井之間遠所在住頰本復之平士・町醫師一統御目見。年寄中之内一人伺公、御奏者番披露。年頭長袴着用之人々者、尤長袴之事。

但、列之儀ハ遠所在住等に而相代、或御使等に而元日御禮不申上今日に當り候御目見人先に相立、頰・忌等自分に懸り今日御禮申上分は、列高き者に而も跡に付候事。

一、右畢而御大廣間ゟ御出、遠所等之寺庵方御目見、年寄中助右衞門・丹三郎・大炊伺公。其外伺公・披露・引役等六日之通。

西田　國泰寺　長屋谷　傳燈寺　瀧谷 十帖一本卷數　妙成寺　御禮所如來寺等同事。

御太刀馬代　應現院　但御禮所勝興寺同事。

城端 善德寺　　瑞泉寺　　小松 本蓮寺　　羽咋 本念寺
善福寺　　鵜飼 妙嚴寺　　松波 松岡寺　　阿岸 本誓寺
所口 長福寺　　照圓寺　　津幡 弘願寺　　專光寺
高岡 聖安寺 何も十帖一本献上、御禮所國泰寺等同事。

右相濟被爲入。

正月十八日。前田吉德城内の東照宮に詣づ。

〔政隣記〕

正月十七日御宮御社參、但今日者無之。十八日に有之。御直垂被爲召、廿日御佛殿江も同日御參詣相濟。

御宮は東照宮なり

正月十九日。鏡開の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月十九日御鎧御鏡餅御例之通、御雜煮・御吸物鯨・御酒・御取肴鰑に而段階級。松之間二之間に而年寄中并助右衛門・大炊・御家老役同席に而頂戴、かよひ坊主。御禮御臺所奉行迄申達候。

段階級本のまゝ

但、若年寄者常之席に而頂戴、其外今日御城に有合候人々何も頂戴之、其節熨斗目着用。

是月は大盡なり

正月廿四日は德川秀忠の忌日

小松城番とあるは正月十五日拜賀したるものゝ他の一人なり

正月廿二日。大槻朝元その祿を加增せらる。

〔護國公御年譜〕

一、正月廿二日御加增五百石大槻內藏允。

正月廿三日。德川吉宗の贈れる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

正月廿三日御鷹之鶴、當十八日江戶發、宿繼に而今曉到來。御拜領御作法等如前々。

正月晦日。前田吉德如來寺に詣づ。

〔政隣記〕

正月廿四日如來寺御參詣無之、晦日御參詣有之。御直垂被爲召。

二月朔日。前田吉德小松城番等の拜賀を受く。

〔政隣記〕

二月朔日御表宜旨月番より申上、九時過御居間書院ゟ御出役儀被仰付人々等被爲召、畢而於御小書院小松御城番等、且又頬等に而年頭不罷出頭分御禮。年寄中助右衞門・丹三郞・大炊伺公、其外瀧之間御緣頬伺公、去十五日之通。右相濟於矢天井之間、遠所在住之平士幷頬等に

而年頭不罷出人々一統御目見、御奏者番披露、年寄中之內一人伺公。右相濟於御大廣間、出仕之面々一統御目見、御用番披露、御意有之。座上之者御挨拶申上候。

但、年頭御禮人者長袴等年頭之服。其外年寄中・御奏者番等初、何も服紗小袖・布上下。

二月朔日。金澤城門の警固として大組足輕を當らしむることに改む。

〔政隣記〕

二月朔日、河北・石川・橋爪之三御門番人、從御先代定番足輕勤候處、御城中外諸番所を定番足輕之勤番に被仰付、右三御門者當分大組御持方十組より代々爲勤候樣被仰付、今日より右之通勤之。小頭も代々相廻り候筈。但正月三ヶ日・四日・六日・七日・十二日・十五日、幷二月朔日者兩御門幷三之御丸、暨御玄關之警固大組御持方十組より足輕幷小頭をも指出候樣、享保十一年正月被仰渡、今以其通勤來候處、今日より本文之通被仰付。

二月廿四日。取揚高の作除米上納の勵行を命ず。

取揚高とは事故により百姓より沒收したる田地をいふ

〔日曆抄〕

諸郡村々之內取揚高等之分、其村之肝煎・組合等に預置候高、作除米代每年可指出儀に候處、不指出所々茂有之候、年々之分當時一時に取立候而は可及難儀候條、元文五年迄之分可令用捨候。去年より之作除米代銀、當七月迄之內勝手次第段々改作所迄可指出候。是以後右之趣、

今年より時々申渡間敷候間、作除米代銀年切に可指出者也。

戌二月廿四日　改作奉行　印

三月朔日。加藤庄助の子宇右衛門、山本又九郎の小者を斬る。

〔政隣記〕

三月朔日暮頃、三浦左京組御馬廻山本又九郎家來小者嘉内与申者、用事有之向溝口舍人組御馬廻加藤庄助方（所は古寺町也）ゟ使に遣候處、庄助門内に庄助息宇右衛門（于時十六歳）出有之候處、右又九郎小者嘉内宇右衛門に對し慮外之仕形有之、其上過言を申に付、不得止事を宇右衛門切懸候處、手疵負ながら門外ゟ逃出、又九郎之門内ゟ入候處を、宇右衛門追懸切留申候。又九郎息源太夫罷出、家來儀慮外仕候上者尤存念も無之候間、とくと仕廻候樣及挨拶、宇右衛門若年ながら無滯趣双方頭ゟ相達候處、双方より公事場檢使を乞、手討之趣に双方頭より相達、翌二日檢使相濟候。其夜庄助泊御番之處、せがれ若年に付樣子無心許由に而、頭舍人彼宅ゟ罷越候。左京儀は罷越不申候。同三日右之有增舍人より半剪紙に覺書調候而、月番主膳殿ゟ相達之。左京よりも又九郎存念無之趣承届、其段覺書に調、是又主膳殿ゟ同日相達之。

但、手討者月番ゟ届不申候得共、他之家來、殊に門外に而切留候事故相達置候由也。

〔大野木克寛日記〕

今夕松本員昌・明石某等計ざるに入來閑談數刻、五更の頃に各退出訖。員昌雜談の中、去頃加藤氏息宇左衞門、山本又九郎家來殺害之首尾前後物語あり。宇左衞門十六歳未微若に候へ共、始末一段宜、第一よく切れ申よし。脇指之由に候。關の孫六一尺九寸計有之身の由に候。加藤氏・山本氏各御馬廻組の由也。

三月廿五日。田地の施肥を充分ならしむる爲諸郡に無利息貸銀を行ふべきを告ぐ。

〔筒井舊記〕

覺

一、八十貫八百目	能美郡
一、百二十九貫四百目	石川郡
一、九十九貫目	河北郡
一、六十二貫目	羽咋郡
一、六十一貫七百目	鹿嶋郡
一、四十一貫三百目	鳳至郡
一、二十二貫目	珠洲郡

決しては必すの方言

一、百七十六貫五百目　礪波郡
一、百十八貫七百目　射水郡
一、百四十八貫六百目　新川郡
〆九百貫目

右近年諸郡共に、末々小百姓等に至候而は致難澁、何与仕候而も養手入等存程に行屆不申、假令天災等無之年に而も取劣り申候有之躰に付、拙者共段々詮議之上、御才覺銀之内九百貫目致拜借、借渡樣に仕度旨、拙者共より相達御内聽候所、願之通被仰渡、其上右利足之儀者御上より御償可被下段被仰出候。重々結構至極、拙者にも忝次第に存る儀に候。尤右銀子之儀は、御才覺之内を以貸渡申儀に付、いか樣成儀有之候而も、當十一月切に決而返上可仕候。是以後每歲ヶ樣に申付儀に而は無之、格別之趣を以今年に限り如斯申付儀に候條、其方共一統其心得に而、銀子貸渡不申以前百姓共ゟ茂可申聞置候。一郡之内組々割符、幷一組之内村々强弱、一村之内に而も百姓之貧福、此等之趣其方共精誠令詮議、少茂不順之儀無之樣に相しらべ、委曲書記、早速改作所ゟ内々に而可差出候。其上に而猶更可及指圖候。今般之儀は、諸郡一統作仕入等丈夫に爲仕申ため如斯申付儀に候間、其所を相考、第一末々小百姓共は割符茂多相懸り、養手入等も丈夫に行屆候樣に、精誠可遂詮議候。尤當十一月返上之所不指支

様、兼而可相心得候。段々御上にも御難澁之御時節柄に候處、過分之利足御償被下候段、可申上様も無之難有儀に候條、此等之趣末々迄具に申聞、猶更農業等情に入相勤候様に可申渡旨也。

戊三月廿五日　　改作奉行　連印

諸郡御扶持人・十村中

四月十五日。前田吉德先に參議に任ぜられたるを祝し、能を興行して諸士に觀覽せしむ。

〔政隣記〕

四月十五日參議御拜任之御祝儀御能有之。依之當八日諸頭以上依召登城之處、御任官爲御祝儀御能被仰付、各儀見物被仰付、御料理も可被下候。右之節御拜領之御鷹之鶴御披も被仰付候、此段可申聞旨御意之由、月番安房守殿演述。依之布上下に改、爲御禮年寄中等宅へ參出、御能等相濟候翌日爲御禮登城、年寄中等宅へも可致參出旨。當日熨斗目・半袴に而可致登城旨御横目を以被仰聞。

四月十八日。繁姬及び喜代姬の婚儀と前田宗辰の結納との終れるを祝し

櫻田御前は喜代姫
廣尾御前は繁姫

能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

四月十八日櫻田・廣尾御婚禮相濟、且又佐渡守樣御結納被爲濟候御祝儀、今日御能被仰付、例月出仕以上之面々九十人餘見物被仰付、御料理被下旨被仰出候條、熨斗目・布上下着用、六半時登城。

五月十一日。前田吉德能を興行し大槻朝元をして道成寺を演ぜしむ。

〔護國公御年譜〕

一、五月十一日御能被仰付。

道成寺 大槻內藏允　立田 同　通小町 岡田兵太夫　外略す

一、五月廿五日御能。

國柄 內藏介　舟辨慶 同　鐵輪 兵太夫　外略す

一、五月廿七日御能。

鉢木 內藏允　紅葉狩 兵太夫　亂 權進　外略す

六月十四日。佳節朔望に登城出仕する諸士の無作法を戒む。

〔政隣記〕

六月十四日諸頭座上一人宛御城に御招、御月番大和守殿御渡之御紙面左之通。但人持幷御先手物頭・年寄中組之面々者、宅に招御申渡也。

佳節朔望出仕之時分作法躰不宜、其上御用も無之人々諸役所に入込候由被聞召候間、不作法に無之樣可申聞旨被仰出候條、可被得其意候。尤右之趣御横目にも申聞置候事。

六月廿五日。和田源左衛門の若黨擅に殿中の能を観たるを以て扶持を召放たる。

〔御年譜〕

一、六月二十五日御能之節、和田源左衛門若黨岩脇紫澤与申者、坊主を頼紛込致見物居候所、御横目方より相改、及詮議候上、紫澤御扶持被召放。御縮口番人足輕追込。若黨奉公幷刀構、暇遣。

七月十三日。前田吉德金澤を發し參覲の途に就く。

〔政隣記〕

七月十三日金澤御發駕、御供御家老等正月十五日記之通に而、圖書者一宿御跡之筈に候處、

外記煩御供斷に付、御發駕日・御着之日兩日迄御供、其外者御行列勝手次第御供与被仰出。廿四日鴻巣御泊驛暮六半時頃御立、上尾・大宮御中休、蕨に而御晝休、廿五日曉七半時過江戸御着。

七月廿五日。前田吉德江戸に着す。

〔政隣記〕

廿五日曉七半時過江戸御着。御下屋敷御立寄、宗辰公同所迄御出迎御對顏、追付御先〻御歸以後御立、御中邸〻も御立寄。夫より御上邸御着、中之口御門内〻御表向頭分以上罷出、同所より御入等前々之通。

一、翌廿六日上使御老中土岐丹後守殿御出。

七月廿八日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

七月廿八日御禮被仰上、御手自御熨斗鮑御頂戴。賴母・圖書御目見等、都而御例之通。

〔德川實紀〕

七月廿八日、月次例のごとし。松平加賀守吉德はじめ參覲三人。

賴母は本多政恒、圖書は前田貞直

八月九日。前田宗辰歸國の暇を受く。

〔政隣記〕
八月九日宗辰公ぇ上使御老中本多中務大輔殿を以、上意御國ぇ之御暇被仰出、御卷物二十(木地臺居)。御拜領、御作法相公樣ぇ御暇御老中上使之御同例。一つ燒宗辰公御持參、御重引相公樣被遊候。御濃茶宗辰公御持參、御相伴も宗辰公被遊、御盃事も御同公樣被遊。其節御腰物備前兼光(代金十五枚)被進之。初而之御暇上使故也。

八月十一日。前田宗辰登營して歸國の暇を賜はりたるを謝す。

〔政隣記〕
八月十一日宗辰公御暇之爲御禮御登城、相公樣にも御登城御禮被仰上。御下り御老中方ぇ御兩殿樣共御勤。御歸館之上御家老中於席、頭分以上左之通圖書演述。依之爲御祝詞御帳に付。
佐渡守樣爲御保養金澤表ぇ被爲入候儀、從相公樣御願被成候處、一昨九日以上使本多中務大輔殿、御願之通御暇被仰出、御卷物御拜領。從西之丸も、以上使松平能登守殿御卷物御拜領。今日御登城御禮被仰上候處、御懇之上意。其上御着座に而、御鷹・御馬御拜領被遊。相公樣にも御登城御禮被仰上候處、御懇之上意、重疊難有被思召候。此段何も可申聞旨御意に候。

八月廿三日。前田宗辰歸國の際路を東海道に取るべきことを內示す。

〔淩新秘策〕

宰相は前田吉德

委細追而新兵衞可申渡候。夫迄は先內々にて可申談候、已上。

一 今般東海道致旅行候に付、從宰相樣も種々被仰渡も有之候へ共、先手前了簡申遣候。內々心得申渡可然候はん哉。若又不入儀と存候はゞ聞捨可然候。右申渡の段々左に相記候。

今度東海道旅行の儀被仰出候はゞ、來月二日發足に候。此度の旅中何れも作法等急度可相心得候、東海道の儀は稀なる事に候へば、宿々の者共も目を付可申候。家中諸事不作法無之樣に可申付候。重て罷通候事難計候。右の段嚴重に可相心得候。

右の通にても可有之候。猶更作法の儀急度相心得可然候、以上。

八月廿三日　　御花押

青地藤太夫殿

尙以至極內々の儀に候へば左樣に可相心得候、以上。

御上封に青地藤太夫殿佐州と被遊被下之候。

八月廿四日。前田吉德、德川吉宗の昇任等を賀するが爲に閣老の臨邸を求む。

〔政隣記〕

八月廿四日公方樣御轉任、右大將樣御兼官、大納言樣御元服御官位爲御祝儀、御老中方御招

徳川吉宗の任右大臣、家重の任右大將兼右馬寮御監は寛保元年八月七日、家治の元服と任權大納言は同月十二日に在り

請之儀、今日御鐙奉行細井佐次右衛門殿を以被仰込候處、聞番御招、十月十九日各申談可相越旨御書付御渡。前々之如く同夜御老中方江御家老、若年寄衆方江は御馬廻頭御使に被遣。右御用主付御馬廻頭土肥庄兵衛・御小將頭平田外記・三輪藤兵衛江同廿七日被仰付候段、御家老衆御列座御申渡有之。

八月廿七日。前田吉德參覲交替の期を春季に改めんことを請ひて許さる。

〔政隣記〕

八月廿七日於御家老中席、頭分以上江左之通御弘。

相公樣近年別而暑氣御痛に付、御參勤御交替春中御願替、且又佐渡守樣与御立替之儀も御願被成候處、今日御願之通被仰出、重き御願之儀に候處忝被思召候。此段何も可申聞旨御意に候。

右に付頭分以上布上下着用、爲御祝儀御帳に付。於金澤は九月八日諸頭以上江御弘有之、年寄中御宅江各廻勤。但御家老中御宅江者廻勤無之。

一、右に付宗辰公來年御出府御時節、當十一月御伺之筈に候事。

一、右御交替等御願被仰出爲御禮、今廿七日御老中方御勤被遊候。

九月二日。前田宗辰江戸を發して東海道より歸國の途に就く。

〔御年表〕

是月十八日宗辰公御歸國の節御持筒三挺御持せの儀、先達而御願相済、御參勤の節も右の通御持せの儀今日相濟。

同廿四日下通洪水以後、御往來難被爲成に付、東海道より御歸國の儀御禮の處、今の御願の通被仰出。

是月廿五日公より御使三輪藤兵衛允明を以て、宗辰公へ御羽織三・鯣一箱御餞別として進せらる。

〔大應公年表〕

一、是年夏之頃信州淺間嶽の列山崩候て、同州田中驛爲洪水一宇も不殘、人馬財寶共に押流し、驛中如大山往來止之。是に依東海道より、金城金谷の離館に着居し玉ふ。是時より如舊例、先馬三疋、先弓・鐵炮各二十挺、長柄十筋、金紋御挾筥二つ、騎馬青木新兵衛大傅、持組。人其外頭分各騎馬、常式之通列す。

〔政隣記〕

九月二日宗辰公今朝御發駕、御供揃六時に而、同刻前布御上下に而御本宅に被爲入御對顔、御客衆御對顏。畢而御旅裝束被爲召、御内證に被爲入御暇乞。夫より相公樣御居間に被爲入

御對顏。此時御熨斗、御表小將配膳役磯松三郎左衞門持出上之。夫より相公樣御發駕之通、御客方等ゟ御暇乞被遊、大御式臺前より御馬に而御發駕、五時前也。御供之頭分以上、今朝相公樣御目見被仰付、御意有之。今日御表向終日布上下、御奧向者御發駕後常服。

一、爲御見送御畫休河崎迄御使、御近習頭伊藤六郎左衞門を以、生・干御肴一種被進、御直答、六郎左衞門ゟ白銀二枚御目錄を以被下之、夜六半時過罷歸。

九月十六日。前田宗辰金澤に着す。

〔政隣記〕

九月十六日宗辰公昨夜御泊小松、今曉七半時御發駕、御道筋御放鷹、不明門より金谷御殿ゟ、今日八時頃御着。年寄中等幷定番頭・御近習人持・御近習頭、同所御式臺前御白洲ゟ出、御目も罷出、其外は不罷出。切手御門ゟ御廣式御用兼帶之頭分罷出。

一、今日越後屋敷等ゟ罷出候者、御步並以上布上下着用。

一、御歸着之上江戶ゟ之御禮使、人持組前田兵部御着以前より越後屋敷ゟ出有之。御着之上金谷御殿ゟ罷出御目見之上、重而越後屋敷ゟ罷越候處、月番前田土佐守殿御書幷御口上書御渡。紗綾二卷御廣蓋に載之、御大小將湯原藤左衞門持出、土州殿會釋に而拜領。同夕發足、廿七日江戶着。十月十五日登城御目見、御卷物被下之、廿六日江戶發歸。

九月二十日。前田吉德夫人の三十三回忌法會を江戸傳通院に行ふ。

〔護國公御年譜〕

一、九月廿日光現院樣三十三回御忌、江戸於傳通院御執行。公方樣爲御代香、御奏者番堀田相模守殿正亮御出。

十月十七日。青地藤太夫、大槻朝元の非違を本多安房守に彈劾す。

〔浚新秘策〕

一、當正月廿二日、大槻内藏允五百石御加增被下、都合二千八百石餘に被仰付候。此者御先代已來掃除坊主にて、大槻長元と稱し候。御居間坊主に成候所、男色の御寵愛より稍出頭し、束髮之後傳藏と改稱し候。御徒組に入、夫より新番に移り、無程御小將組に入、遂に御使番並に成、物頭並より去々年組頭並、夫より人持組に被命候。日夜御側に相勤、御寵遇重過し、去年以來は於御國も御政務に預り候。御家老之内前田大學は、父修理以來緣者に成、玉井市正者佞諛を以取入、是が羽翼と成、御數寄之儉約を事とす。春秋御歸國以後は、一向此事のみに心力を被用候。大坂表近年之御借銀方、微妙公以來之古格舊例は透与止之、笠間安右衞門工夫を以、毎日十石充之米切手御印紙を以賣出す。是を以御借用之手立とす。凡十八・九年之内、御借銀高二萬貫目に及候。今年に到り此御返濟之筋、奉行幷年寄衆中僉議之趣者、御

長元は朝元

返濟之方へは現米二萬石振向置候而、其上諸事屹度御儉約之道を立、其筋々圖り立達御聽候處、夫は御用無之、專笠間御内々を以申上候趣を以、大槻一人之意得を以取噯候。依之鄕々の御藏へ手を付、微妙公の御時に他國扶持方用銀と包紙に爲御記置候朱封銀をも、大半に爲御取出候而、大坂表へ被遣候。松雲公在位者八十年之内終に御出不被遊候。御國内にては乾屋彌兵衛といふもの、大槻が宅邊に居住之町人主之爲吹替候。凡此銀は、至而精銀にして、當時通用之銀よりは一倍の好銀也。高德公以來被建置候大銀奉行三人之外者、御横目といへども此御藏へは入事不罷成御定にて、御用有之時は定番頭主附にて出納申談候事に付、去々年迄は遠田勘右衛門一人其趣を以勤來候所、去年御歸國以後は勘右衛門へは一度も不被仰付、悉皆大槻一人主付、其下へ組外御番頭長瀨五郎右衛門一人金銀出納被仰付候。是は松雲公御代御横目之時相勤、其事存知候者故相加申事に候。改作奉行之内行山傳左衛門と申者、大槻宅同町にて、内々心安申通候故にても候哉、此者一人相加り勤之候。然處町奉行稻垣與三右衛門・戸田與一郎言上に及候は、御代々御定にて、金銀之封印等相勤候事は、銀座之者共より外は手指難成事に御座候。乾屋彌兵衛相勤候ては御大法に相背申趣申上。依之乾屋は被停之候。

一、右之者御愛遇之餘、御廣式大奥にも被召連候。年寄女中宮崎者從御前代相勤候。近年致病死候。及末期候時、同輩之女中に申置候は、大槻被召使候樣子、何とも合點不參候。我等

清姫は喜代姫

相にて候以後に、此言葉可被思合候。畢竟は只事有之間敷候。禍起り可申旨申候。去酉の四月、清姫樣安藝の世子伊勢守樣江御嫁娶之後、爲御見舞内藏允被遣候所、御前江罷出、其上御庭へ御供に罷出候時、御前樣御手を引候旨。此儀安藝守樣・伊勢守樣御聞被成、宰相樣被仰付樣甚思召に不相叶、御噂不宜候由也。又夜中泊番被仰付、泊番之頃は大奥へ此者一人被召連、御床も一所に敷並、女中ゟ無憚其處へ被爲召候故、穢德彰聞不忍聽候事。

一、彼宅へ縁者は前田修理・前田大學父子、其外一家同事に御意を以罷越候。頭分は御小將頭三輪藤兵衞、御持足輕頭中村治右衞門・關屋長太夫、平士之内取入令出入候者共は、御右筆大村五郎左衞門内、作事奉行横井平左衞門、改作奉行行山傳左衞門 其外笠間源左衞門・池森運八、會所奉行津田林左衞門等年々數多に及。皆以公上之思召に相叶候旨也。

一、大組足輕三組、御持方足輕七組、此十組は松雲公久敷御工夫にて新に被命、平生御城番等之御用は不相勤、專弓・鐵炮稽古修練仕候迄に候。然處今年御城門三ヶ所勤番、并朔望佳節等橋爪御門等警固相勤候。ケ樣に候へば、兩役之稽古折節に罷成候故、玉樂以下自然与減少いたし候。御儉約之一つに罷成候。且割場附足輕老死之者共、立替被指止段々減少に付、其番所等江は、只今迄御城門勤番定番組足輕を引擧相渡候。新番御徒組以下御切米、地米之外三之二は小松・本吉・寺井三ヶ所御藏米を以被下候所、皆越中を以相渡候。御城内木葉其外塵

此次に奥泉金兵衛人を殺したることを載す。寛保元年冬の條に出せり

埃等、御代々掃除小者与云もの數十人有之、其者共御給銀年中四十目与定め被下候。到而小給銀に候へども、木葉・枯葉幷糞舎之糞壌を我物に仕來り、是を以妻子を養育仕候。是又去秋以來御厩方飼葉入之百姓へ相渡し、飼葉の價を引下させ候。如此之族、皆以大槻へ出入之小役人共工夫を以言上に及び仕出し候由。

一、江戸月俸之事、微妙公御定にて、小川の中の頭米を以直段相立被渡下候處、御儉約之旨にて、表向は御定之趣を以申渡、實は別段に相圖り、月俸減少相渡候。會所奉行も不存候。與力之内より直段聞役と申者兩人、（加藤清左衛門・池森軍六）内々を以勤之、減少之樣子を以爲御褒美銀十枚充被下候事。將又御在府・御留守共、御用之日傭成次第相止、其代として御家中小者日々御やとひに罷出候。食事不爲給罷歸候後、一人に鳥目三十文被下候樣にいたし候。此二ヶ條も皆以大槻手下之者共より仕出し候旨也。

一、事不珍趣に御座候得共、大槻事に付一事可申上品有之、一筆如此御座候。御貸銀所與力堀六郎左衛門・佐藤源兵衛へ爲骨折、與力裁許明地代官米一萬石之分代官被仰付候。此儀大槻奉之申渡候。六郎左衛門等御算用場へ罷出申候は、御代官之口米私共請取申筋にては無御座候。只今迄は足輕を以下代に仕來り、口米は與力請取申候。此度は町人之内角間屋惣右衛門・植木屋長助・小松屋左助与申者三人下代分に罷成、口米不殘被下候筈に候由申候。御代々町

人より代官之下代相勤候儀無之事に候。於御藏本御米納候時分、刀を帶し申者共見屆候。右町人共刀御免こ申儀可有之樣も無之事に候へば、旁御奉行中達而言上も仕、無用に仕可然与申輩も有之候處、兵庫・善右衛門兩人存寄に、御格無之筋にても大槪奉にて申談候事は、皆以御意同事之趣に候へば、御新格こ可申候。町人に大小爲帶申筋は、定而其時に到り御月番へ相伺、譯立申にて可有之候。先達而僉議に及候事は不入ものこの料簡に相聞え候。右之趣私之役筋にては可承樣無御座候。先頃已來前田源兵衛・林源太左衛門有增申聞候て、存儀も申述候は、近年大槪權勢次第々々に强罷成、御代々無之新格出來、御舊例段々破滅仕候。嘆敷事共に候。右一事は就中大切之儀、三人之町人皆大槪家へ心安出入仕候。惣左衛門・左助は能囃子之相手、長助は植木草花の取持人にて、京・大坂迄も時々罷越、種々心外之事共都鄙之批判に及候。ケ樣之者共へ代官口米被下候事、絕言語候。御奉行共より乾度各樣へ迄言上も有之候はゞ、御僉議之筋も出來可仕候所、其趣も無御座候。惣而大槪仕形、今般下屋敷被下亭出來仕候而以來は、別而諸人目を驚し舌を卷申事共に候へども、上の思召より出申儀故、其所を憚不及言上候。御年寄衆之內にも、別而諸大夫方には御思慮も可有之所、大和守殿には先年一度遠慮被仰付候儀有之に付、如何樣之事にても御料簡は不被仰上思召之旨、兼々承及候。土佐守殿には、御才發は拔群に相聞え候へども、御年若に御座候故、諸役人共未致信服

候。對馬殿には萬事御扣目にて、各見聞之通に候。只尊前樣御一人を賴母敷も存、御奥深く存罷在候。然共御遠慮がち故にも候哉、目に餘り申事共も御詰問も無御座候故、諸役人奉存程は無御座候。此度之一件御僉議之節、若其通なごゝ有之候はゞ、最早御先代以來御仕置も、此者之爲に滅却可仕候。御前之御憤は一旦之事共可申候。第一御國之ため、御先祖御代々樣御定等は大切至極之儀に御座候處、御定段々破申儀は、御笑止千萬之儀に御座候。私事は御筋目も有之、御心安き筈に候。中村典膳は御心安參上も仕候宿老にも候へば、ヶ樣之趣申上不苦事と存候。此節有心諸役人共、尊前樣御一人を賴に仕罷在候と申儀を申上間敷哉と、源兵衞發端に申候。典膳申候は、時勢粧と申事を不被存候哉、中々其所へは行立申事にては無之旨及挨拶申候。私は此兩人之助言にも不及事に候へども、右之首尾等不承及事兩人申聞候に付、驚入申事に御座候。町人を御代官被下候上口米等可被下事、たとひ町奉行所にて僉議之上を以撰出仕候て茂、不可然筋に候。況哉大槻私之念頃を以如此事を仕出し候事、言語道斷之事無所忌憚之至と奉存候。

一、彼者威權日に加り、驕泰にも罷成候故、歷々の御役人以下恥を不知人々、追從輕薄を以立身のみに心掛、士之風俗甚亂れ申候。就中諸役人之內御橫目役之者共は、ヶ樣之所に別而心を付、言上仕候にも不限、各樣へは潜に可申上之處、却而六人之御橫目各申談、去年以來は

彼宅へ、罷越、彼者も御横目宅へ罷越、互に通達之路を開申候。去年於江戸井口五左衛門を御超撰被遊、直に兼役被仰付候而より如此罷成候。但是は子細有之事に御座候。十八・九年前より御隠横目と申者数十百人、御徒列足輕・三十人組・坊主之内より被仰付、皆々口上にて大槻に迄申含、達御聽候。依之御横目之類は、皆以大槻手下之趣申成候に付、何茂其趣に相心得、追従を專と仕來候。御横目さへ如此罷成候。諸役人之内は不申及、下役人之内笠間源左衛門・堀六郎左衛門・小島彌助・行山清八等之者共は、彼家の鷹犬と相見え、其餘御郡方より十村・百姓、町方より商賣人等群を成て、あらぬ事に言を寄、御儉約申立町中へ運上之儀申渡し、辻口錢と申事に迄も及申候由。國家之大害不過之事と奉存候。蠟燭以下之事、其品々は申立候も口惜候故、相省申候。

御前は前田吉德

一、御前之御様子、最初は彼者御寵遇より事起り、中頃より御信用甚敷罷成、一兩年は御畏憚被遊、思召に不叶事にても、如何様之事も彼者次第に被仰付候体に付、御意に依託いたし諸役人を欺き、私欲を恣に仕体に御座候。御城門之押手形さへも彼者之手より出候へば、御番人共、内藏允仕事は格別之儀とて、往來爲仕候族に罷成候。御算用場奉行共さへも右之趣に候へば、御門番人等は咎るに不足候。此等之趣を以其餘は御推察可被遊候、已上。

十月十七日　　青地藤太夫

習仕はならしと訓む

安房守樣

十月十九日。閣老土岐丹後守等本鄉邸に臨み前田吉德の饗を受く。

〔政隣記〕

十月十九日、前記八月廿四日之通に付、九月廿三日より大御門・御書院等夫々御修覆に付、如前々御客衆等裏御式臺にて取次、今月六日に者御取持之御先手衆等御越、夫々御見分、御給事・御盃事之習仕も御見分。御嘉儀小笠原縫殿助殿。御前にも御出御覽。右御面々に御料理出。將又昨十八日迄に御修覆共出來、同夜より大御門番人引移、今朝より大御門披之。

前記之趣に付今日御老中御招請に付土岐丹後守殿、西御老中松平能登守殿、若御年寄本多伊豫守殿、西小出信濃守殿幷御奏者番・寺社御奉行・御大目付・町御奉行・御作事奉行・御普請奉行・日光奉行・境奉行御一人宛御出。御奏者衆等者九時前より段々御出丹後守殿等御四人者九時過御出。但御留守居・御勘定奉行・佐渡御奉行・山田御奉行は御斷也。相公樣御式臺鏡板中程迄御出向、御挨拶有之、御大書院に御誘引、敷附右之方に前田信濃守殿、左之方に細井佐次右衞門殿初、御取持御先手衆御出、御一門樣方には御廣間迄御出向、其外御緣類之方に御醫師衆御列居有之。

一、御料理三汁十菜、白木具、御引菜御持參。御酒之上、御肴伊勢守樣淺野氏御持參。

一、御嶋臺丹後守殿・能登守殿江一向宛出、御盃事御末座迄被遊候。御嘉儀御先手久貝惣左衛門殿。且御老中御盃三方に而、御家老初組頭並（御家老二人、人持一人、御馬廻頭二人、御小將頭二人、組頭並一人）、以上八人頂戴之。御挨拶細井殿、御盃取次御同朋頭原田順阿彌・山本春阿彌。何も頂戴、畢而御前御出、御禮被仰述候。其以後御納之御盃事有之。

一、弓八幡濟寄之頃御料理相濟、御老中・若御年寄衆は御休息之間江御越。御大書院御縁頬に御仕切屏風建、御奏者番衆等御出御見物。御老中等者御休息之間より直に御庭江御出、御亭江も御上り、御干菓子御提重御用意之處、御人々御取包被成候。夫より御休息之間御茶入等二三品も出御覽。羽衣之曲舞之頃、御老中等御能御見物之席江御越、御菓子・名酒等出、御能相濟七時過御退出、御前を初御送り最前之通。

十月廿二日。前田吉德、德川吉宗の昇任等を祝する爲一門以下を饗す。

〔政隣記〕

十月廿二日、右同斷之爲御祝儀、御一門樣方を初御出入衆百十五・六人御招請。御能翁立五番有之。裝束一統のしめ等御作法前々之通。且本多中務大輔殿御息美濃守殿初而御出、其外澁谷和泉守殿御家來渡邊隼太、百人組與力・御小人頭・御小人目付・御玄關番等、本阿彌家・後藤家・狩野家、御出入町醫・御目見町人共、御一門樣方御留守居等も被爲召。尤御出入之御城坊

主殿も被參候事。

十一月十五日。前田吉德その子重熈に鎧を贈る。

〔重熈公御年譜〕

一、十一月十五日龜次郎殿ゟ今日御鎧被進。右に付同十六日預玄院様より、品々御祝儀物龜次郎殿ゟ被遣候由。

十二月十五日。大槻朝元その祿を加增せらる。

〔護國公御年譜〕

一、十二月十五日御加增五百石大槻内藏允。同斷百石兒玉彌藤次。同百石充御小將組に被仰付、大槻長太夫・岡田兵太夫・不破市左衞門。

是歲。淺野川大橋の長さを減じて改架す。

〔金城深秘錄〕

一、橋長さを減られ候儀者不輕儀に而不吉、御國主に祟り有之傳來仕候。寛保二年迄淺野川橋之長さ五十間幅三間に候處、寛保二年當時之橋之長さに被仰付候。橋臺石垣押出申に付、右御用私祖父ゟ被仰渡、相勤申候。其節御不吉之趣申上候哉否相知れ不申、大槻内藏允了簡

を以すべく候樣專沙汰仕候よし。大槪は惡逆者に而、左樣不吉之儀も能存知居申出候哉、打續御凶事奉絕言語符合仕候儀、只今於私奉恐入候。

寛 保 三 年

正月十一日。淺香左京、京都詰中に失行ありしを以て閉門を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

丹羽武兵衞へ正月十一日申渡之。

淺 香 左 京

右左京儀京都に相詰罷在候內、家來橋本金五右衞門儀、江戸より到來之引替金等致引負候處、其心付茂無之、隱置候紙包之內に從神田御前樣辰君樣へ御返禮之御使書、且又政所樣附へ夫々より之書狀共も有之、右御返禮御延引に成、御勤方缺候段不念至極之仕合候。其上近年京都詰人、行狀等相愼候樣被仰出有之候處、詰之內不行狀之仕形共有之段被聞召候。依之閉門被仰付候旨被仰出候條、可被申渡候事。

一、右遠慮可被仰付哉之旨伺候處、右不念迄に而ハ蟄居可被仰付者に候。詰之內不行狀も有之段被聞召に付、閉門と被仰出、右之通也。且又同役岡田隼人も、右不念に付自分に指扣候

政所は前田綱紀の女直姬にして二條吉忠夫人、辰君はその女

はへ本の儘

様可申渡旨被仰出、其段茂申渡。

正月十一日。御算用者齋藤市太郎等指扣を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

御算用者　齋藤市太郎
稻垣曾太夫

右兩人儀諸方御土藏江上納之銀子、於御算用場請取候節、銀子疊之上にはへ有之候を見屆、御算用場取次足輕之內吉田源七・石黑圓右衞門・吉田時右衞門、夫々御かね箱江入させ、市太郞等封を付、途中宰領時右衞門指添御土藏江罷越、稻葉官兵衞等江相渡候節、銀子百目致不足候段、不念之仕合候。依之兩人共爲指扣可申旨被仰出候事。

御算用場附足輕　吉田源七
石黑圓右衞門
吉田時右衞門

右三人儀、於御算用場諸方御土藏江上納之銀子請取候時分、相改候樣橫山三郎兵衞等申渡候處、はへ成を以相改、相違無之旨申達、則受取かね箱江詰候付、齋藤市太郞等封を付、右時右衞門致宰領御土藏江罷越、はへ立候時分百目致不足候段、不念之仕合候。依之三人共御奉

公指扣候樣可被申渡候事。
右覺書、癸亥正月十一日夫々相渡す。
一、右一件夫々於公事場御吟味之處、紛失之儀不相分、疑敷者無之故右之通也。

正月廿七日。前田重熙松平氏を冒す。

〔政隣記〕
正月廿七日龜次郎殿松平之御稱號に御改、御乘物御乘用被成度旨、御家格を以御用番松平伊豆守殿ゟ、細井佐次右衛門殿を以被仰達置候處、今日聞番被召呼、御先格之通と御指圖有之。後藤瀨兵衛參出承知仕歸。依之今日より松平之御稱號に御改也。右御改之儀、御家老中御申聞之由、御横目より夫々傳達有之。但翌廿八日より、向後龜次郎樣と可唱旨被仰出。

二月十一日。德川吉宗、前田吉德に鶴を贈る。

〔政隣記〕
二月十一日上使御使番雨宮權左衛門殿を以、御鷹之鶴御拜領。
但、去年十月朔日記之通に付、去冬以來御三家樣之外は、諸御大名方ゟ例年之通御鷹之雁等不被下之候。

二月十五日。前田重熙初めて柳營に上り德川吉宗に謁す。

〔政隣記〕

二月十五日、龜次郎樣初而御目見御願書、當十一日御先手小笠原縫殿之助殿を以、御用番本多中務大輔殿江御指出置被成候處、昨十四日御老中方御連名之御奉書を以、今十五日龜次郎樣御目見被仰付候間、御同道被成、五時御登城可被成候。御自分之御禮も可被仰上旨申來、六半時過相公樣御のしめ・御半袴、龜次郎樣者御長袴に而御登城之處、於御白書院城主御禮疊に而龜次郎樣初而御目見。於御同席右之御禮相公樣にも被仰上候處、御懇之上意有之。相公樣に者御直に西御丸江御登、御老中方御勤。龜次郎樣に者兩御厩諏訪部文右衛門殿江御立寄、御半袴に被召替、前田信濃守殿御同道に而御丸江御登、夫より御老中方・若御年寄衆江御廻勤。但龜次郎樣御城御玄關前迄、上下御供御附物頭並九里治兵衛、御抱守和角平右衛門・御側小將志村平丞三人被召連候。治兵衛者御玄關より直に御間之內江御供仕候。外に物頭並由比勘兵衛者御間之內爲見習、先達而聞番同道に而罷越、直に御老中方江之御使相勤候。

今日御獻上、從龜次郎樣

公方樣江　御太刀金馬代・縐紗五卷。

大納言樣江　御太刀馬代・銀五枚。

御老中方・若年寄衆江　御太刀銀馬代・銀三枚宛。
御側衆・御奏者番衆江　同　斷・　同二枚宛。
其外御役人衆江　同　斷・　同一枚宛。

從相公樣
公方樣江　綿二十把。
大納言樣江　同二十把。
御老中方江　二種・五百疋宛。
若年寄衆江　一種・五百疋宛。
其外御側衆初被遣物無之候事。

一、龜次郎樣御歸之上、於御居間御禮被仰上、御太刀馬代銀五枚・御太刀目錄、披露・引大槻内藏允。畢而御腰物備州重眞代金十五枚被進之、右内藏允持出る。御禮相濟、御熨斗木地三方御表小將配膳役佃久太夫持出、御前江上之、御手自被進之。從相公樣龜次郎樣江、御太刀馬代黄金十兩・縐紗五卷・干鯛一箱、右内藏允を以被進之。從預玄院樣二種・五百疋、從御前樣方一種宛、御附頭を以被進之候。

寺西源太左衛門以下は改作奉行

二月十五日、月次なり。松平加賀守吉徳が次男龜次郎利安、ならびに大番の子一人初見し奉る。

二月廿九日。前田吉德の女保姫金澤に生る。

〔政隣記〕

三月七日、前月廿九日金澤於御廣式御姫樣御生之旨、今日告來。御七夜御祝之節、保姫樣与御廣式御用達原九左衛門本役御馬廻頭御名上之。

三月五日。諸郡の田畑内検地は改作奉行之を行ふことを定む。

〔日曆〕

前々より諸郡村々致検地候節は、只今迄此方ゟ不申聞、其御郡御扶持人・其支配之十村迄罷出、令内検地由に候。向後者内検地相願候村々有之候はゞ、先達而可及内達候。拙者共村廻等に罷出候砌遂見分茂、其上に而僉議次第可申付候條、可為其心得者也。

亥三月五日

寺西源太左衛門　印

丹羽伊太夫　印

横山三郎兵衛　印

芝山三郎左衞門　印
三輪清三衞門　印
他國御用　熊谷四郎兵衞
他國御用　行山傳左衞門
大塚彌五太夫　煩
小谷兵左衞門　煩

諸郡御扶持人・十村中

三月十一日。前田宗辰金澤を發して江戸に上る。

〔御年表〕
三月十一日宗辰公金澤御發駕、廿四日御着府、駒込御中屋舗へ御着。

三月十一日。前田重熙朔望佳節に登營することを許さる。

〔御年表〕
是月十一日、龜次郎君朔望佳節御登城の儀、御願の通仰出さる。

是月は三月

三月廿四日。前田宗辰江戸に着す。

〔重熙公御年譜〕

一、三月二十四日佐渡守樣、今日朝五つ七歩、御中屋鋪新御殿へ大御門より御機嫌能御着被遊。爲御待請龜次郎樣被爲入、御玄關敷付迄御出向。

三月廿七日。閣老本多中務大輔駒込邸に臨み前田宗辰の出府を勞す。

〔重熙公御年譜〕

一、三月二十七日佐渡守樣當二十四日御參府に付、今日上使御老中本多中務大輔殿御出。御門外へ龜次郎樣御出、且御濃茶御持參。

四月朔日。前田宗辰登營して德川吉宗に謁す。

〔政隣記〕

四月朔日宗辰公御參府之御禮、今日可被仰上旨御兩殿樣江依御奉書、今朝御登城、月次御禮御例之通被仰上候後、於御白書院宗辰公御參勤之御禮被仰上、御太刀金馬代銀三十枚・御卷物十被献之。御懇之上意。其次相公樣にも右之御禮被仰上於御同席也。候處、是又上意。畢而西御丸にも御登城、御兩殿樣共御老中方御廻勤。

四月十三日。前田吉德柳營に於ける作法に就いて諭さる。

〔德川實紀〕

四月十三日、此日松平加賀守吉德・松平肥後守容貞・松平安藝守吉長・松平大炊頭繼政・佐竹右京大夫義峰に、拜謁するときあまり恭敬に過て、御詞をかけられしこと御いらへも聞えあげず。さはあるまじき事なり。松平陸奥守吉村は拜謁のこともよきほどにいらへ奉れば、いづれも吉村がさまにならふべしと仰出さる。

四月十三日。前田吉德就封の暇を受く。

〔政隣記〕

四月十三日御歸國御暇之爲上使、御老中松平伊豆守殿御出。御作法跡々之通に而、御前御相伴、一つ燒御持參、是又前々之通。宗辰公御酒之上御肴御持參。尤相公樣ゟも被上之。龜次郎樣御濃茶御持參。御拜領物御例之通。從右大將樣上使松平能登守殿、御拜領物御例之通。

四月十五日。前田吉德登營して就國の辭見す。

〔政隣記〕

一、十五日御登城御禮。御手自御のし等、幷賴母・圖書御目見等都而御例通。

一、右十五日例月出仕は相止候得共、相公樣御登城に付、宗辰公に者御登城被遊候。

〔德川實紀〕

四月十五日、松平加賀守吉德・松平肥後守容貞をはじめ、就封三十四人。

四月廿一日。前田吉德初めて江戸駒込邸の新殿に臨む。

〔政隣記〕

四月廿一日御中屋敷新御殿に被爲入、大御門より御入。宗辰公御先立に而御大書院に御通、御熨斗三方出。龜次郎樣・勢之佐殿御相伴に而、御雜煮・ひれ之御吸物出。從預玄院樣被進候御肴、御吸物に御認御引替。其上に而御土器出、御盃事相濟。直に預玄院樣に被爲入、御饌別之御料理被上之候。今日新御殿に初而被爲入候に付、宗辰公に生鯛一折被進之候。御使、御先詰之伊藤六郎左衛門相兼勤之。

閏四月朔日。前田吉德江戸を發し就封の途に上る。

〔重熙公御年譜〕

一、閏四月朔日九時過相公樣江戸御發駕、佐渡守樣・龜次郎樣・勢之佐殿・出雲守樣、御大式臺敷附迄御送。

〔政隣記〕

閏四月朔日九時過江戸御發駕、御先立奥野主水、(人持組御算用場奉行、今年御留守詰。)御作法御例之通。御供御家老本多賴母・前田圖書。

閏四月四日。土清水鹽硝藏の鹽硝爆發す。

〔護國公御年譜〕

一、閏四月四日朝五つ半時、土清水鹽硝藏鹽硝碎申臼より火起、小者一人卽死、兩人怪我いたし、追而相果申候。此前三十三年以前如斯儀有之、死人同事之由。

閏四月十三日。前田吉德金澤城に歸着す。

〔政隣記〕

十三日御歸城。御作法例年之通。御禮御使中川八郎右衞門御目見等、如御例に而同日發足。

閏四月廿五日。諸士の名を掃部と稱するものを改めしむ。

〔政隣記〕

閏四月廿五日、出雲守樣利隆御嫡隆丸樣、御名掃部与御改に付、御家中同名改候樣、御月番より伺之上被仰渡、竹田掃部は內膳、岡田掃部は伊右衞門、前田監物嫡子掃部は主鈴、其外追々改之。

出雲守利隆は富山侯隆丸の掃部と改めたるは四月十四日にあり

五月十日。金澤卯辰山の潴水堤防崩壞す。

〔政隣記〕

四丁木町は今の木町

五月十日卯辰山之堤切れ水押出、卯辰八幡邊之小家流、八幡之柵も損じ、四丁木町邊水三尺餘も有之。

五月十五日。婚禮を擧ぐるもの、家に石礫を投ずるを禁ず。

〔御郡典〕

近年御家中侍中嫁娶仕候節、夜中石を打門戸も損、あやまち人も可有之躰、小身者は別而制止可申樣無之樣子相聞候。婚禮之時分礫打申儀堅不仕樣、先年も申觸候處、相背候段不屆之至に候。向後右之族之者於有之者、急度可申渡候條、此段家來末々迄嚴重申渡候樣、組・支配へ被申聞、組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣被申渡、同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月十五日　本多安房守

青山將監殿

横山兵庫殿

富田織部殿

戸田與一郎殿

今般相觸候婚禮之時分礫打不申趣、御郡方・町方之儀も可被相觸候、以上。

五月十五日　本多安房守

右之通御算用場より申來候條、寫指遣候。得其意夫々可申渡候。披見以後判形候而、先々相廻落着より可相返候、以上。

亥五月十八日　松崎少左衛門

不破忠太夫

能州四郡御扶持人・十村中

五月十九日。前田重教卯辰山觀音院に宮參を行ふ。

宮參とは觀音院に屬する社殿へなり

〔政隣記〕

五月十九日健次郎殿卯辰觀音院に御宮參、御歸に金谷御廣式に御立寄。騎馬御供、御近習御馬廻頭野村七兵衛、御廣式御用御留守居番杉江杢左衛門勤之。御留守居番長瀬五郎右衛門、爲御待請御先に罷越。其外諸事前々御二男樣等之通。

五月廿五日。越中新川郡愛本の橋梁改架せられしを以て通行を許す。

〔政隣記〕

五月廿五日越中國愛本橋近年損じ、修理之儀被仰付候得共、右橋に用候材木急に調兼候由に而、三・四年も往來止有之候處、昨日切に出來、今日より往來有之。

三御寺は天徳院寶圓寺瑞龍寺なるべし

六月五日。前田吉德、大槻朝元をして倶利伽羅長樂寺の後住を石動山東林院に命ぜしむ。

〔襍纂錄〕

一、倶利加羅長樂寺後住、石動山東林院被仰付候。六月四日以內藏允被仰出、翌五日申渡。月番助右衞門。

前々御寺方を初、寺院後住之儀、從御上御人指と申儀、御先代以來終無御座候。假令三御寺之內遷化に而遺書出候得者、殘り二ヶ寺之內へ御尋も有之上被仰付候。其餘之寺院夫々頭寺等撰候上、寺社奉行僉議に而書付指出、各決談之上達御聽、被仰付御格に御座候。殊此度長樂寺後住東林院儀は、去年以來御用に而、內藏允方ゟ東林院度々罷越之節、長樂寺之儀申出、後住被仰付候はゞ可奉畏趣、先達而內藏允ゟ申入置候由に付被仰付候。斯樣之儀決而無之筈に御座候處、如何之儀に候哉。惣樣之響不可然儀に候事。

六月十一日。德川吉宗使を發して前田吉德の暑中の安を訪はしむ。

〔德川實紀〕

六月十一日、松平加賀守吉德に驛使もて暑中の御尋あり。

〔政隣記〕

六月十五日夜五半時暑氣御尋之宿次御奉書到來。御認之上ニ土岐丹後守殿御一名、內者御連名如左。右御郡奉行岡田一平太取次、御次ニ持參、三輪藤兵衞受取上之。御請出來、藤兵衞より月番助右衞門殿ニ相渡、夫より割場奉行井上久左衞門ニ被相渡之。九半時津幡迄足輕に爲持遣之候由、久左衞門言上之。

一筆致啓達候。公方樣・右大將樣・大納言樣益御機嫌能被成御座候。將亦暑氣之節、無異在國有之候哉可相尋旨、依上意如斯候、恐惶謹言。

六月十一日

土岐丹後守
本多中務大輔
松平伊豆守
松平左近將監

松平御名殿

右に付御禮之御使、御馬廻頭金谷御廣式御用兼之原九左衞門ニ、翌十六日被仰渡。十七日御例之通御羽織一・白銀二十枚拜領。十八日晝御書等相渡り、發足。廿八日江戸着、七月朔日御目見、同日御暇、御卷物二拜領。同十日江戸發、廿一日歸着。

一、今月十二日御用番土岐丹後守殿ゟ聞番被召呼、暑氣御尋之宿次御奉書、御家之御格と有之處、其儀不存、外並之通直に傳馬町役人共ゟ、十一日亥ノ刻御渡候。御家格も有之事故御申聞之由、役人を以聞番見習河地平左衞門ゟ被仰聞候旨、同十八日金澤ゟ告來。但右御奉書到來之節、御配附寫無之哉、是に而分り候事。

附、右暑寒御奉書、御在國毎有之儀に候得共、此度者品有之に付委曲記之。

六月十一日。重ねて出合宿を營むことを禁ず。

〔政隣記〕

六月十一日月番奥村助右衞門殿より、左之通書立、寺社奉行・町奉行・御郡奉行ゟ被相渡、町方・門前地等までも、町々組合頭ゟ肝煎出席申渡之。

出合宿仕候儀者、前々より御停止に候。向後出合宿仕候者於有之者、曲事に可申付候。若左樣之者於有之者、向三軒兩隣所拂可申付候。此儀外より相知れ候はゞ、其首尾に寄り、其町之肝煎・組合頭役儀取揚可申候。

右今明日に夫々申渡有之。但町人ゟは目立候裝束不仕候樣、町奉行より申渡有之。

右之趣本は、所々金澤町端等町家に而女出合宿仕候者共多有之に付、當月二日早朝、盜賊改方高畠木工手合足輕に藤內頭等交致手配、女共召捕之、主人持は其主人ゟ預之、主人無之者

は其町ゟ預之、宿仕候者共者禁牢申付候事。

〔政隣記〕

十月二日、前記六月十一日に有之候出合宿仕候者共七人今日出牢、御城下拂。幷預置候女共者妾奉公不仕、縁付候か又は針奉公等爲仕候樣に与、高畠木工於宅、夫々呼出申渡預指宥。

六月十四日。金澤に於いて諸士の行狀を愼むべき命を傳ふ。

〔政隣記〕

六月十四日諸頭・御用番・諸役人・火消役筆頭今枝民部、其外御用番支配之頭分等、今日登城候樣、月番助右衞門殿より昨日依御紙面、各罷出候處、松之間二之間に於て、助右衞門殿・前田土佐守殿御列座、左之紙面被相渡之。

近年御家中之人々行跡不宜者共有之、第一侍に不似合參會も有之由相聞、沙汰之限被思召候。急度御糺可被成候得共、此度者先御猶豫被遊候。是以後相嗜不申候ば、嚴重可被及御沙汰事。

一、歷々之内御用之筋申談無之候而も罷成候儀を、御用事寄、或は稽古事を申立出合、夜中までも酒宴遊興之人々有之由に候。ヶ樣之儀は有之間敷儀に候所、不愼之至候。是以後右之族於有之は、急度御咎め可被成事。

一、頭分之内にも、無故繁々敷參會之者も有之由被聞召候。組・支配も有之者は、少々心得違

有之候而も、末々一統之見習罷成、組・支配不愼之基に得ば、嚴重相心得可申事。

右之通被仰出候事。

亥　六　月

此御紙面組・支配ゟ申聞候樣にと申儀無之候故、年寄中執筆迄承合候得者、成程組・支配ゟ申渡筈に候處、相洩候段申聞候事。

諸組之人々組入仕候得者、座入与名付、美食を認參會有之由に候。向後者堅右之族無之樣可被申渡事。

此紙面共、組等之人々諸組頭・支配人之宅ゟ人々相招、申渡有之事。

一、御表小將御番頭ゟも右御紙面御渡。外に於江戶御供先御表小將中作法不宜候由、大槻內藏允を以右御番頭ゟ被仰出有之由。翌十五日於御次、御表小將中ゟ右御番頭・同御橫目列座に而演述有之候也。

六月十四日。物價を低廉ならしむべきを命ず。

〔坂井氏藏文書〕

諸物直段之儀、先年より度々僉議有之樣に申渡候得共、嚴重に有之候而者却而及拂底候品可有之哉与、其處をあやぶみ被指扣候樣子にも相聞候。夫故おのづから、近年者諸色事之外高

直に罷成、御家中之人々も及難澁申躰に候間、各緜密之詮議、直段引下げ候樣可被申付候事。

一、近年町方風俗不宜、其上重立候町人之內不宜出合も有之由に候。ケ樣之儀は急度可被申付候事に候處、等閑成躰、各油斷之趣に被思召候御樣子に候條、嚴重に可被申付候、以上。

六　月

右之紙面六月十四日相渡候に付、町中へ申渡す。

六月十八日。深尾安左衛門、遠田勘右衛門の若黨の無禮を咎めて之を傷つく。

〔政隣記〕

六月十八日暮過、定番御馬廻佐久間吉右衛門組深尾安左衛門、途中（鍛冶町樋口町）に而人持組御近習遠田勘右衛門若黨木坂隼太与申者、道に而障に成、其上過言を申、不得止事を切懸候得共、無刀に而、鼻捻り樣之物持居請候處、少々手疵負候得共逃去、追懸候得共人込に而見失ひ、依之同夜安左衛門より勘右衛門方へ、以紙面申越候者、今夜樋口町に而御家來之由木坂何某と申者、途中に而障に成候に付、彼是と申罷通候處、跡に而雜言等申、不得止事候故立歸相尋候得者、御自分樣御家來之由申聞候。刀を拔切懸候得共、少々疵付逃申候。追懸候得共、人込之所に而見失申候。乍然無刀に而罷在候に付、御家來に而無之も相知不申候得共、先御

尋申入候段申越候に付、樣子相尋自是可及返答旨返書に申遣、樣子相尋候得共、右之者其夜在合不申に付、宿ゟ人を遣承候得者、右之通相違無之躰に付、勘右衞門より安左衞門方ゟ使者を以、成程自分若黨木坂隼太与申者に候。夜中之儀にも候間明日致僉議、何分に茂御一分之相立候樣可仕旨申遣候處、被入御念儀之由返答有之。扨翌日勘右衞門より、右隼太逃候處不屆之由に而殺害願候處、七月十一日願之通被仰渡、同十八日同人於宅殺害申付候事。但勘右衞門より右之者成敗被願候儀、安左衞門をぢ勝尾安左衞門を以、急度禮被申述候由之事。

六月十八日。女を抱え置き人集めすることを禁ず。

〔政隣記〕

女を抱置人集仕者多有之由に付、今般高畠木工ゟ被仰渡、急度遂吟味申筈候。向後ヶ樣之者於有之は、本人者曲事被仰付、近隣者所拂可申付旨被仰出、則町奉行等ゟ申渡候。就夫御家中侍中長屋借・屋敷守等、右之族之者無之樣急度可申渡候。且又牢人者等を家禮分に仕、借地又者借宅・屋敷守等に指置候人々も有之由に候。ヶ樣之儀は一向有之間敷儀に候處、不心得之至候。向後右之族無之樣、組・支配へ急度被申聞、組等之內裁許有之面々者、其支配へも不相洩樣被申渡、同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十八日

右諸頭・御用番ゟ御觸有之。

〔袖裏雑記〕

従前々被仰出置候得共、近年金澤廻り町方、幷寺社門前地、御郡方支配におゐて、女を抱置人集仕候者多有之由に付、今般高畠木工ゟ被仰渡、急度遂吟味申筈に候。近隣不存事者無之筈に候處、右之族不届之儀に候。向後左樣之者於有之者、本人者勿論急度曲事に可被仰付候。兩隣・向家所拂に可被申付候。尤肝煎・組合頭役儀等取放、品により急度可被申付候。

（朱書）勿論曲事に可被仰付候。兩隣・向家も急度可被申付候。尤肝煎・組合頭無油斷遂僉議可申候。若右之族於有之者、是又急度可被申付樣。

右之趣被仰出候條、嚴重に可被申渡事。

癸亥六月

町奉行

寺社奉行

御郡奉行

右被仰出之趣町奉行等ゟ申渡候處、書立之内兩隣・向家所拂与有之候。此内には奉行人も有

之候。第一與力・御徒等も罷在候處、右之通所拂と申儀如何可有之哉。且又組合頭役儀取放与有之文言、此儀は地子町に限り申儀に候。地子町大方奉公人等之故、町人は少々ならで罷在不申候故、組合頭相勤可申と申者は無之候付。町奉行より頼候而申付候樣成事に候。左樣之者役儀取放可申与申候へば、却而悅申儀に候。ヶ樣之趣に候處、此文言も相省候樣仕度旨に付、右朱書之通下書調直、重而六月七日委細內藏允を以申上候處、以同人被返下、與力等何茂御屋敷被下罷在候處、地子地に罷在候者之內には、樣子も有之躰に候間、旁先達而被仰出候通に可申渡候。町方作法之儀に候得者、格之通に申渡、御家人之儀者其節に至り、頭・支配取捌方も可有之候。

六月廿二日。豪雨の爲金澤の河川溢れ家を流し人を傷つく。

〔政隣記〕

六月廿二日夜半より之大雨に而、淺野川小橋之上ゟ水乘越。才川も餘程之高水、百姓町・竪町邊より村井主膳殿前、光岸前・筋違橋邊水付、所々之小橋共流落。野町ゟも水付、小家共潰れ、卯辰八幡・砂走せ邊・堀川・材木町・小立野一本松邊、其外所々小川に水出、常に水付不申所々に水付、八坂邊家潰れ、前田對馬守殿家來三人死、其外流死有之。委細不相知。

追而委しらべ、町奉行より言上有之。

六月。加賀河北郡池ヶ原村の田地龜裂し高低を生ず。

〔政隣記〕

覺

　　　　　　　　　　　　　　　　　　河北郡池ヶ原村

一、三百七十二石　定免五つ三歩

一、三十六軒惣家數、內三十軒百姓家、六軒頭振家。

〆

一、一ヶ寺　　一向宗　敬樂寺

外二軒　　　　　　　藤內家

〆

右私組下池ヶ原村惣御田畠幷居屋敷共に、先月廿四・五日頃より土地割れ損じ高く低く罷成申に付、水持不申候。幷用水堤二ヶ所割れ損じ申候故、水持兼申候。大損じ家は百姓次右衞門・三郎右衞門・彥兵衞、頭振仁左衞門・左次兵衞、此五人之者共家大破に相成申候。外十三軒之者共は、居屋敷割れ損じ申候に付、家も少々充損じ申候。此外藤內二軒、居屋敷割れ家も損じ申候。勿論御田地之儀は段々割れ込、高下出來仕候に付、水持不申候。御田畠者、村よりは北之方、西方寄りに多く割れ損じ申候。家は南之方より東之方寄りに罷在申候。晝夜之

内に不限、折々地鳴り申事も御座候由申候。金澤より道程六里半程御座候、以上。

寛保三年六月　　　　　　　　能瀨村　彌右衛門　印判

七月廿一日。青地彌四郎藩の許可を得てその小者を殺害す。

〔政隣記〕

六月廿日御大小將青地彌四郎鎗持何右衛門、對主人法外之儀申、其上主人前に呼出候時分、小刀を懷中仕罷出候に付、彌四郎より殺害願之通、七月六日被仰渡、同廿一日同人於宅殺害申付候。

七月廿七日。前田土佐守、大槻朝元を前田宗辰に彈劾す。

〔前田直躬內密手記〕

七月二十七日

近年大槻內藏允儀段々御取立被遊候。就夫重御取次被仰付候。前々御直に被聞召、或御親翰を以可被仰出儀をも、不殘御口上に被仰含趣に而內藏允申聞候。跡目・公事向方をも同事御座候。惣而御用向之筋、內藏允一存に而相しらべ、一通り御意を受申上候樣に推察仕儀も多く御座候。御役替之儀も前々私共・御家老役之面々打寄示談之上、直に相伺、或以紙面申上候所、近頃は內藏允覺書に相記、如此可被仰付旨御意之由申聞候。殊に急に申渡候樣に被仰出

候族も有之、打返僉議可仕間も無之程之儀も御座候故、存寄可申上筋も無御座候。私共撰擧仕候人々は都而不被仰付、あなたより之被仰出之趣に御座候。畢竟内藏允一人申上候筋を御承引被遊候故、おのづから内藏允存分之樣にも相成申哉と、氣之毒之御儀奉存候。

一、右之通御用方粗加料簡候故、於御次内藏允取捌候品難心得趣も多御座候。第一私共可相捌品をも御意と申立、夫々御役人中へ申渡候。追々其趣月番迄申聞候儀も御座候。是等之儀別而如何之儀と奉存候。殊内藏允へ出入、或少し筋目相親申人々へは、御用をも申付、或稀有に御役替等も仕族にて、自風俗も不宜、人々立身を相急ぎ申樣に相見え申候。

一、御家老役之面々、勤方別而不宜事候。内藏允へ公私とも示談之躰に御座候。内藏允よりも御家老役之面々は各新役に而、御格式等存知申人々も無之故、當座之理を以申談候故、末々相障儀も有之躰に御座候。就夫圖書儀取入候故、私共仲間にも無之御懇之被仰出にて勤仕仕候。此等之趣をも同役共と不審仕儀に御座候。

一、大和守儀内藏允へ取入候躰にて、内々示談も仕樣子に御座候。夫故大和守月番之節は、御用被仰出之趣多く御座候。彼是御爲之筋には不相聞、當時御前躰宜敷儀迄相心得候故にも御座候哉と奉存候。段々御格式も相違仕候得共、唯今其筋難相糺、外重き御取次仕人々無之故、何茂見合申候。内藏允儀、畢竟素姓之者より御取立次第に驕候族等にて、不心得千萬之

儀に奉存候。今暫相考候て申上樣之筋も可有之儀と、不及迄も思慮仕儀に御座候。彼是取沙汰之趣は可被爲聞召候得共、私共御用方之筋は、慥成儀は聞召間敷御事故、自然御心得にも可被爲成哉と奉達御內聽置候。加樣之筋御前へ申上候も迷惑仕候へ共、取沙汰迄被聞召候ては、大きに御仕置方も猥に相成候樣に可被爲思召候へ共、私共捌方には先は相違無之樣に申談候。私儀は外仲間之者と違、御懇之思召之趣青木新兵衞密に申聞置候故、乍恐何品にても御爲御心得に可被爲成儀と存付之趣は、假令不應御意候共、不奉顧憚內存可申上心底に罷在候。先は御內々申上候儀相扣候へ共、前條相調候品は新兵衞へも難申聞筋故、有增樣子申上置候。御尋等之儀御座候はゞ、先は新兵衞ゟ被仰付、申越候樣に仕度御儀御座候、以上。

七月廿七日　前田土佐守 判

上書

奉達御內聽置品　前田 上

但、青木新兵衞方迄遣之、新兵衞へ之添紙面別帳に記之。同月廿九日出に遣之。

御親翰之寫

八月十四日出町飛脚に、青木新兵衞より差越、同廿五日に相達。

前月廿七日之一紙到來、新兵衞より指越令披見候所、其方共當時は萬事勤兼候半、察候。無

別紙は九月朔日の條に出す

可爲心勞と存候。手前心底押計可申も、一事々々を承たび毎々心驚申こと而已候、此方料簡別紙指遣候、以上。

八月十三日　　　　佐渡守

前田土佐守殿

八月四日。前田重靖等大槻内藏允の下邸に臨む。

〔御年表〕

八月四日嘉三郎君・斐姫君　健次郎君、犀川柳原大槻内藏允が下屋敷に入せらる。此後度々故略之。

八月七日。組外組臼井林左衞門、家來を手討して仕損じたるを以て逼塞を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

一、組外臼井林左衞門家來小者七内与申者、七月十一日曉過言に付而手討に仕處、切洩追失候付、殺害願々之通被仰付、且其首尾不出來、其上常々家來不仁成召仕樣有之、情强に而一家之内義絶仕罷在候者も有之段被聞召に付、左之通被仰渡。

臼井林左衞門

林左衞門儀、今般家來手討いたし候處、仕損じ取にがし候段、手ぬるき仕形不調法之至に候。
依之逼塞被仰付。

〔政隣記〕

前文には十一日と在り

七月十二日組外臼井林左衞門召仕候小者過言申に付、可致手討与切懸、肩先ゟ切付候處、其儘迯出、林左衞門之頭大河原八郎左衞門宅ゟ罷越、有增申入候に付、八郎左衞門より請人呼寄付置、林左衞門も相招樣子承屆之、畢竟殺害願候處願之通被仰渡、殺害候者可申聞旨前田土佐守殿御申渡。八月六日於林左衞門宅殺害仕、其段頭八郎左衞門より月番ゟ及御屆候處、翌七日林左衞門儀家來手討仕損手ぬるき仕方に付逼塞被仰付。

附、翌年三月四日御免許。

九月朔日。前田土佐守政事に關して前田宗辰の諮問に答へ、再び大槻朝元を彈劾す。

〔前田直躬內密手記〕

本文は前田宗辰の書簡なり

左に相記申趣、手前存寄には申にくき事に候へども、不申候はでは此方心底も不相知趣故、委曲相調候。

一、近年御仕置方之樣子、前々と違ひ、御手自被遊候儀之旨、內藏允一存に而相伺、夫に付

十六郎は菊池氏

何も御指圖は無之御様子、此分手前參府之折柄も見請申事に候。惣而御加增跡目・公事場之事は、御仕置之上に第一之事に候所、近年は公事場方奉行にても何の役にも不立十六郎抔被仰付候故、自ら仕置方亂れ申与存候。大事之御知行、むだなる物に御つかひ御笑止成事は、先年より心勞存候事に候。

一、內藏允儀は何之德もなく、學文又は宜分別など申事もなく、只御心易き計之御取立之事に候に、ヶ様成重事共被仰付、自分として取計申事、年經候はゞ一事有之候半と、手前は致難儀事而已に候。夫に隨ひ、下々役人直々に取入申故、其方手前へは御詮議もなく、相濟申事多由承候。是第一之御大事と存候。去年も關屋・井口・津田之三人も、此方は不入氣者共に候。其上水島吉左衞門又は笠間源左衞門など申者共、組外に被仰付候事、みな內藏允一人之料簡と存候。ヶ様之事募候て如何と存候間、其方能々心懸可申候。これは內藏允は闡提かと存候。一笑々々。

一、御家老役・若年寄共は、手前氣入候者當時は先見當不申候。外記などは未若年之事に候に大役被仰付候。是は一度は達而御斷可申上儀と存候。其方紙面之ごとく、圖書は惣而あしきかと存候。とかく近年は片寄申勤方、手前代には如何か成行申と心勞之事に候。又其方共仲間諸大夫之人々は、大様之事は大方存候儀に候。外之兩人は何と候哉。是は實儀一篇かと

不申越候哉と本のまゝ

存候、是に付候ても勘右衞門はよきかと存候。

先手前の存寄は如此候。委申度候へ共、是にて憚、不申越候哉と申殘候。第一この起之本は、宰相樣御若年より、御學文又は御取しめ被成候事も無之御樣子故、ヶ樣に候かと存候。新兵衞存候事故、手前へ申聞候。本相公樣には、御實儀すぎさせられ、諸事御すゝみかね被成候御生付ゆゑ如此かと、はゞかりながら存候事に候。且當時其方共先三人打寄、夫に合申御家老共を引入、諫言申上可然と存候。ヶ樣之儘にては、手前代に成候はゞ御後見之事故、いやながら此儘に無之而は成申間敷候間、其時々よき程は何とぞ成可申事と存候。且手前儀は、內藏允はいやなるやつと存候へども、一ははゞかり、又は宰相樣之御氣入之者故、隨ひ顏にて居候事難儀と計存候。其上御城に而之手前樣子、以來勤にくき事共に候へども、松平左兵衞督殿(前陸奥守殿御事、隱居にて如此。)此仁之引廻にて、御城に而よき內之三人と成居申候。夫に付御城にても、宰相樣は御けつかうすぎ申事も有之。我等御城計にては、大事之事共故指出候事も度々有之候。是はよく新兵衞存候間、來年にてもいつにても直に可相尋候。とかく存付候に、今まだ諫言時ははやきかと共存候。兎角手前之心勞可察候、以上。

八月十三日　　佐渡守

前田土佐守殿

猶々新兵衞より可申遣旨、且其方事は手前へ心付候事故、一言申遣候。右之申入候陸奥殿・手前・伊達大膳大夫殿此三人と有之候。陸奥殿手前は大目付之きれ物に候。

御別紙

兎角御城も、大目付言度まゝを申候。本之ごとく我等は善惡を分申返し候故、りやうじなる事はいはれぬで、いやがるよし城之取沙汰に候。御城之風も、左近將監殿へ取入、まいないざた多く有之事、どこも同事と存候。

右三品御一封に御認。御上書。

前田土佐守殿

佐渡守

右御一封、八月十四日出町飛脚に、青木新兵衞以添紙面、同廿五日到來、新兵衞宅より指越之。

去月十三日之御親翰奉拜戴候。當時御仕置方之御様子、心付之趣達御内聽候所、思召之趣御別紙被仰下候旨、則拜見仕候。御尤至極之儀可申上樣無御座奉存候。御兩紙兩通一々奉拜上、被仰下候趣に隨ひ御請別に相認申候。私式不料簡之儀に候へば、御用に相立可申品は有御座間敷候へ共、心底之趣不殘申上候。私儀御懇之思召、難有御儀に奉存候。御親翰三通只

今可奉返上儀に候へ共、あまりかさ高く罷成候間扣置、來年御歸被遊節指上可申候、以上。

御別紙之御親翰一々奉拜上候。御請申上候品、夫に付重々申上候儀入交候條、前後仕儀も可有御座候。

九月朔日　前田土佐守

一、御仕置方御手自御捌之趣にには候へども、何も御指圖は無之樣に被思召候。去頃御參府之節も、其段御見請被遊候由。惣而御加增・跡目・公事場方は、御仕置方第一と被思召候。然所近年公事場奉行に被仰付候菊池など、御用にもさして相立不申者被仰付候故、猥にも相成候樣に被思召候旨、御尤之御事奉存候。先達而も加樣之筋之儀可申上哉とも存知候へども、御仕置方之儀に付內藏允勤方之儀申上候故、是等之趣は相扣申候。今般被成下候御親翰之趣に付、諸役存知之品々申上候。菊池公事場奉行被仰付候も、樣子も御座候。最初前田權佐・菊池十六郎・品川主殿御附被仰付候。其後いかゞ之御樣子に候哉、此面々は御除可被成候間、相應之役懸りに振替可申旨內藏允申聞候に付、菊池は小松御城番なども可然哉と申上候へ共、品川・菊池は寺社方・公事場共に被仰付候。前田は小松と相成申候。三人一所に被仰付候節之被仰立とも相違、いかゞ之儀とも奉存候。畢竟三人を御省之趣より出候事故、其筋も難相立、人々も迷惑仕躰に御座候。最初之思召と相違仕候儀近頃度々有之、別而いかゞ之儀に奉存候。

是も內藏允存寄次第にて相替り申哉と被存候。

一、內藏允儀學文等も無之、只御心易被召仕候迄にて、御取立被遊候と被思召候。年經候て何こぞ一事も出來可仕哉と御氣毒に被思召候旨、如御諚に奉存候。依之先達て內存之趣申上御儀に御座候。本素姓之者に御座候故、前後之辨無之彼是相捌候より、御仕置方御取次も就被仰付候、次第に驕申趣と奉存候。御前思召には尤應じ不申旨、左樣に可有御座御儀と奉存候。併相公樣御氣に應じ申ものゝ儀に候へば、何分にも御料簡被爲遊候て、却而度々御言葉をも被懸、御懇之趣に御座候て可然御儀に奉存候。夫故表向は御隨ひ被遊候御振に被爲入候由、御尤御儀に私儀は奉存候。往々はいか樣にも被爲成御儀に御座候。且又內藏允儀、享保十一年新知被下、去年迄十七年之間、十五度之御加增に御座候。於御當家は尤無御座候。一生之內十度と申加恩承不申候。

一、當春闕屋・井口・津田御役替、河島吉左衞門・笠間源左衞門等組替之儀、御意には應じ不申旨、御諚之通と奉存候。皆以內藏允手先之者共に御座候。河嶋は私共手先執筆に御座候所、与風取入候而、あの方にては萬事之示談相手に御座候。此者に相尋候て、私共取捌之趣を似せ申儀に御座候。井口・津田・笠間などは、佞人とも可申程之者に御座候。

一、御家老役・若年寄も、當時之面々思召に不叶旨。私共仲間諸大夫之人々は、大かた樣子も

御存知被遊候。外兩人はいかゞ候や、勘右衛門は宜敷思召候旨、御意之通奉畏候。勘右衛門儀は、元來細成生質故、被遣物等之儀に付ては不宜儀も御座候へども、各別違申儀に御座候。先年人持組に被仰付、御加增被下候節、急度斷申上度趣等、內存之紙面も出し置候。內藏允へ相障、僉議も無之様に罷成申候。相障申儀を本意と存候儀と奉存候。當時は何之御用も不被仰付、私共より相伺候も、一通り之儀御取次仕候へども、其所に貪着仕者にては無之、御次にては此者と野村七兵衛は慥成者に御座候。三浦左京を初外之者共は、御用にさして相立可申とも不被存候。皆以內藏允に隨ひ申者迄に御座候。私共中間之儀、大和守儀先達ても如申上候。內藏允へ手入仕候。第一賄賂之氣味も相見え申候。御役人撰申にも、依怙も有之躰に御座候。猶又末に相調申候。安房守儀は至極實躰にて、急なる儀はもとほり兼申儀も御座候。近年は疳氣之指引も有之、初て其樣子見請候ては、いかゞと存者も可有御座候。內藏允と一致仕了簡は無之候。安房守組へ內藏允被仰付候節も、殊之外當惑仕躰に申聞候。對馬守儀は、且て御用に相立可申様には不奉存候。終に一分之存寄申儀承候者、仲間之內には無御候。いづれにても時々可然方へ付、當時は圖書と緣者旁以懇に仕候故、御家老役之風俗にも似申儀御座候。主膳儀は近年病身に罷成、中々本復可仕躰に無之、病氣も一通り之様には無之と何も申儀に御座候。夫故月番も御免被仰出候。此儀は、私共示談之趣內藏允へ咄置候へ

共、御免被仰出候。助右衛門儀、成程生質宜敷御座候。未年若に候故、捌方手に入不申候。末々宜相成ものと奉存候。大和守儀近き間柄に候へ共、御用之儀さして示談仕躰は無之、事々私へ示談仕候に付、夫々申談爲相勤候。

一、御家老役等之面々、御氣に可入者は無御座候。以之外風俗不宜、氣毒成儀と各散談仕候。賴母はさして働無之候へども、當時にては御家老役と申候ても苦ヶ間敷哉と奉存候。物每落付申候。藏人は一向申上に不及者に御座候。いかゞ之儀にて御家老役被仰付候や、私儀は合點參不申候。圖書儀は先達て申上候通に御座候。市正は不宜所有之生質に御座候。人々いやがり申候。大學儀は不都合ものと申にて可有御座哉。前後表向之差別なく、御用に付候てもおどけまで申候。其上仲間にては功者顏仕候。殊に藏人儀、右申上候通中々御用に立申ものにて無之、一向御用方合點仕得不申ものに御座候を、何かと難儀なる儀申懸、御用もつかへさせ申族、輕き者共之すり立などゝ申樣なる風俗にて、いやしき事共に御座候。內藏允緣者ゆゑ、何事にても申聞候躰に御座候。隼人儀、若年寄相應と奉存候。然所今日御家老役被仰付、來年江戶御供被仰付候。大學儀も御供被仰渡候。若年寄は兩人兼帶にて相濟、別に不被召連旨被仰出候。此儀皆以內藏允被仰出、此儀別ていかゝ之儀に奉存候。藏人・賴母・市正罷有候に付、此內一人に大學被召連候へば宜御座候へども、市正儀近年首尾合不宜、打續江戶御供被

決しては必ずの意

仰付候所、此前より御差除候。頼母儀去年之詰不首尾に相聞え申候。此儀も圖書專に相勤申より右之趣にて、近年は江戸相詰候者、決て一人は不首尾に相成申候。頼母儀は其身働も無之故、內藏允へ取入不申に付、右之通と奉存候。藏人儀は先年相詰候節、不興之樣子之旨御座候。左候へば御役被仰付候面々も、前後御考等無之故、少相勤候而樣子相知候へば、御用に相立不申樣に相成、別て大切成儀と奉存候。隼人儀も、御家老相應とは不存候へ共、外之面々に合候へば宜御座候。外記儀如御諚年若、中々相勤り申儀にては無之候へ共、贔負を以勤申と被存候。御家老役・若年寄・御表向、人持中に相應之人品之者も有かね申候。

一、宰相樣御若年より、御學文其上御取しめ被遊候御儀無之故、加樣之儀に罷成候と被思召候由、如御意と奉存候。恐多儀に候へども、前々御直之御意等之趣を以相考候所、御叮嚀至極成御生質故、申上候儀を押返され候儀は難被遊、形之如き御樣子之樣に奉恐察候。當時私共三人打寄、夫に合申御家老役申談、御諫言可申上哉、しかし時節はやきかとも思召候旨、別而御尤之御賢慮と奉存候。三人と被仰下候は、安房守・對馬守・私と奉存候。前段にも相調候通り、對馬守儀中々大事之儀は難申談御座候。安房守儀は志も有之候間、宜折柄安房守申談候て、何分にも申上樣も可有御座儀と奉存候。只今申上候時節とは不奉存候。卒爾に申上候ては、却而いかゞに候。御前之御爲に相成申樣に仕度儀に御座候。

一、御仕置方、御捌之時節に相成候ては、只今之振にても、其節は筋も御立可被遊思召之旨、如御諚いか樣にも可被爲成儀与奉恐察候。憚多儀に候へ共、私式儀御用に相立申間敷候へども、御先代之御格式等は粗奉承知候間、御手傳も可罷成哉と奉存儀に御座候。兎角當時は御孝敬之思召第一之御時節と奉存候。不顧憚申上候。且又御城にても、何角御勤被遊にくき趣御座候へども、左兵衞督殿被仰合候故、其筋御立被遊候。相公樣には御結構に被爲入候故、度々御指出ながら被仰上儀も御座候由。此儀別而左樣に可有御座儀と奉存候。新兵衞も能奉承知候間、可相尋旨奉畏候。於殿中御前・左兵衞督殿・大膳大夫殿には、大御目付衆も手をひかれ候由、奉恐悅儀に候。殿中も左近殿ゟ御取入賄賂之沙汰と被思召候由、千里同風之時節と奉存候。併左近殿には御職分、旁以之御事と奉存候。大槻は大きに違候事かと奉存候。御老中方は、御役功次第に彼是御捌之由に候へば、少は御尤かとも存候へども、退て相考候へは、御大家之御職分には決而有之間敷儀と乍恐奉存候。御請之分は是迄に御座候。從是末曾て存寄之品申上候。

一、相公樣には、御手廻之者宜敷と申上候儀を、其通と被思召候より、內藏允儀も御心易被召仕、御意に應じ、御爲大切に存知候とまで被思召遊候故、御まかせ置被遊候儀と奉存候。此者元來素姓にて、御家中をも渡り奉公仕族之者に御座候へば、御取立を難有と奉存相愼可

申儀を取失ひ、並も無之結構に被召仕候を幸と我儘をも仕儀、沙汰之限之儀と奉存候。尤何品を取用ひ可申程之分別無之故、手先に夫々親み付候て、方々承合候て相捌候故、御用方輕々敷御座候。第一依怙贔負にて役人にも申付候。御廣式向之取沙汰も不興なる仕形と承り申候へども、慥成儀不承故不申上候。寄々承合可申上候。內藏允方へ出入いたし候輕き町人等へ取入相賴候て、其者より內藏允へ申込候族にて、少々役儀など罷成候者も有之躰に御座候。別而いかゞ之儀と奉存候。

一、前條に相調候大和守儀は、金銀取捌候儀數寄にて、御貸銀方之儀にも、何とぞ勝手に罷成候筋も有之躰と奉存候。御貸銀方之儀は、奉行高畠金左衛門儀何之御用にも相立不申ものに御座候。其下にて與力共之內畑六郞左衛門本多賴母與力、此者內藏允に取入、何かと御內々御用と申立候て相捌、大和守にも申談候。

一、右六郞左衛門せがれ久米之助儀は御附に被仰付候。此者被召出候時分之樣子など、色々其品有之儀に御座候。其節新兵衛まで六郞左衛門儀へ申遣置候。畢竟六郞左衛門などは往々樣子も可有之儀と被存候。久米之助儀御心易被召仕候や、其段不奉承知候へども、親六郞左衛門至而不行狀等にて惡敷者に御座候間、何か御思慮も可被遊御事と奉存候、御附被仰付候節、樋口次郞左衛門儀取組申趣も有之候儀、粗承置申候。其品只今に至申上候ても無專儀故、

相扣申候。

一、近頃は御親翰にて被仰出候品一向無之候。去年も公事場方就御用、近年は永き御紙面御調被遊かね候故、内藏允に御代筆被仰付候旨被仰出候。其以來御親翰無御座候。是等にて相考候へば、次第に加樣に仕なし候と奉存候。御役替等も内藏允調持參仕候。志有之人々は御用に相立不申、大槪にさへ氣に入候へばはやく役儀も被仰付候樣に相見え、次第に御國之風俗も不宜、氣毒成儀に奉存候。

一、御先代には、前田美作守・奥村丹後守儀最初御近習被召仕、別而御心易故、年寄役被仰付候ても、御名染有之者共ゆゑ、世間之御うはさ其外取沙汰はなしなどをも、承次第申上候由に御座候。年寄共之内には一兩人、加樣に有之度ものと奉存候。當時は御氣に入候もの丶申上候儀は御取上之御樣子に御座候。殊に御手廻には足輕等之せがれ共迄罷有候故、宜筋は不承者共ゆゑ、末々之事迄を被聞召候御樣子に候。御近習と申もの共には、當時御譜代之子共は一人も無之、御笑止成儀に御座候。

一、御先代貞享年中に被仰出候、年寄共初若年寄迄之名目之記有之候。加樣之品結句只今は御存知被遊間敷やと奉恐察候。名目迄之儀に候へども、當時に御引合被遊候ては各別成儀と奉存候。且又御家老役・若年寄之本列と申儀も有之候。私共家列と申儀も御座候。家列之外

之儀は、仲間之内にもとくと存知候者は無之躰に御座候。私儀は手先之御用帳之分大かた見申候故、書抜も仕置申候。御考合之ためにも候間入御覽可申哉、奉伺候。

一、私儀能々心懸相勤可申旨、難有御儀奉存候。私儀年若に御座候故、中々御用に相立可申程之儀も無御座候へ共、何分にも相愼、不及迄も相勤可申覺悟に御座候。私儀元來氣短に御座候間、所存に應じ不申儀は、乍恐多儀御前之御意にても、卽時に申上候存寄に御座候へば、卒忽而已可有御座哉と奉存候。御底意之趣不殘被仰下候儀、私式過分之至奉存候。先達ても如申上候、私儀仲間とも違候へば、御爲に可相成筋等は無遠慮可申上存念に罷有候。度々申上候儀、當時は御爲にも罷成不申候。御尋之儀は尤存知限は可申上候。新兵衞儀は各別之者に御座候へば、大かた之儀は新兵衞より申越候樣に仕度儀、此段は奉願候、以上。

九月朔日　前田土佐守　上

徳川吉宗轉任等のことは寛保元年八月にして、その祝賀の爲閣老を招請したることは同二年八月四日に在り。

九月十九日。徳川吉宗の昇任等を祝する爲金澤城にて能を興行し諸士に観覽せしむ。

〔政隣記〕

九月十五日

一、今日月並出仕之面々に御目見前、於竹之間左之趣月番前田對馬守殿演述。

公方様御轉任、右大將樣御兼官、大納言樣御元服御官位爲御祝儀、來る十九日御能就被仰付候。各儀見物被仰付、御料理も可被下候。此段可申聞旨御意候。

一、御近習頭ゟ者、於松之間右之趣對馬守殿被申渡。

一、出仕以上之面々者、右爲御禮今日中年寄中・御家老中宅ゟ相勤、御能濟候而も右之通相勤可申候。御近習之面々は右前後御禮、年寄中席ゟ罷出可申聞旨被仰聞候由、御横目中申談有之。

十九日右之趣に而今日御能有之、御能御前後御目見被仰付。年寄中御奥書院に而御料理被下、御出御意、御酒之内御使御近習頭。人持・物頭以上於御大廣間二切に御料理被下、御使幷御馳走方前々之通。裝束頭分已上熨斗目、平士以下服紗小袖・布上下。其外御作法寛保二年四月十八日同斷。

一、御能翁立に而五番有之。

十月二日。淺野川小橋下に一文橋を架するの許可を得んことを請願す。

〔加州郡方舊記〕

乍恐申上候。

一、淺の川小橋之下、永井多宮樣前かうごより、同向ゟ壹錢橋を懸申度奉存候。右之橋上下

かうどは河戸

一錢は一文なり

薪栗は薪船なるべし

養船は肥料船

五間宛、兩向〆二十間之內川除修覆可仕候。但夜中大事等之砌挑灯立、勿論錢取申間敷候。常は朝六半時より、暮六つ時迄往來爲致、一人壹錢宛取可申候。右橋懸申度段、六ヶ年以前書付を以奉願上候所、御聞屆不被遊、右書付御返し被下候得共、何卒右之趣奉願上、假橋此度懸申度奉存候に付奉願上候。尤川除薪栗・筏引上げ申候節、少も相障り不申樣に可仕候、若相障り申候はゞ急度被仰付候。御慈悲を以被爲聞召上、此段御普請會所へ被爲仰遣被下候はゞ、難有忝可奉存候、以上。

寬保三年十月二日　　西御坊町　島屋吉兵衞

町御奉行所

淺野川小橋之下壹錢橋懸申度旨、西御坊町島屋吉兵衞奉願、書付指上申に付、御郡方へ差支申儀も無之候哉与御尋被爲成候。御郡方より養船・薪船・筏等少も相障り不申樣に仕候得ば、指支申儀無御座候。右壹錢橋百姓往來之刻は、右賃錢取不申樣被仰遣可被下候。

亥十月

田井村　吉兵衞

淵上村　源五郎

御所村　長次郎

森下村　金右衞門

御改作御奉行所

十月廿七日。幕府より交附せられたる朝鮮人參二十根を金澤に送致す。

〔兎雞綱〕

朝鮮人參二十根從公儀相渡候に付、澤村源之丞に相渡爲植候樣に被仰出候に付、以中飛脚差越之候間、早速源之丞に可爲御渡候、以上。

寛保三年十月二十七日　遠田勘右衛門

横山兵庫殿

奥村彈正殿

前田源兵衛殿

十一月。彗星見はる。

〔政隣記〕

十二月朔日

一、頃日西之方新星出る。四半頃には西に落る。常之星より色薄、四・五尺計も上に花相見に候。但此星次第に光强く成、餘光長く、花も次第に廣く成。今月末には餘光五間計見え候。後には明方東之方に見え候。北國・關東に而見ゆ。右星有澤惣藏考。客星に候。しうはく星に似

凌新秘策に十一月末よりとせり十二月十日の條參照

候得共、しうはく星に而者無之、新星に御座候。瑞星与奉存候。花の先開き候歟、亂れ候得者凶事に候得共、先き燃火之様に含候故、吉星に候。是は天文之方、吉凶之見様習に候由言上。

生母は醫師畠山玉隆の女

十二月朔日。前田吉德の子喜六郎金澤に生る。

〔政隣記〕

十二月朔日夜金谷於御廣式、若子様御誕生、御生母　　　。八日御七夜御祝候節、御名喜六郎殿与原九左衞門（御馬廻御廣式御用）より上之。

十二月十日。青地藤太夫、大槻朝元を青木新兵衞に彈劾す。

御發駕は前田宗辰のことに係る

〔浚新秘策〕

一、當春御發駕前於御宅被仰聞候御意の趣、尤以難忘奉存罷在候。況や去秋一度御親翰も被成下候私事に候へば、一日も忘却不仕候。但私心底には、何こぞ御身の上に關り候程大切なる事歟、又は社稷の御爲に相預り申程の事は格別、並々の事にては指扣申方可然事こ奉心得候故、終に一度も不申上候。當夏相公樣御歸藩以後、御政務の筋格別に違ひ、上下驚申事共有之体に候へ共、私役筋に無之事故、其事の實否難決、巷說同然に付指扣申候。然處段々事實も慥なる樣子の儀、件々左に書記申候。

一、彼者御寵遇超過いたし、當夏下屋敷拜領亭出來の後は、別して威權日に加り、驕奢に罷成候故、少心も有之御前代の御餘風を相守り申者は格別、左も無之恥をも不知人々は、歷々の御役人以下、只追從輕薄を以立身にのみ心掛、士の風俗大に取失申輩甚多くに相見え申候。其人の姓名大半相知有之候へ共、其段は態と指扣申候。就中御横目役の者共は、加樣之處に別して心を付言上も仕可申處、却て彼家の鷹犬と成、宋の王荊公が時の護法善神の類と相見え申候。役儀の本意を失却仕、六人の御横目各申談、去年以來は彼宅へ罷越、彼者も御横目宅々へ罷越、互に通達の路を設申候。去年於江戸井口五郎左衞門を御超撰被遊、直に兼役に被仰付候が、以來如此罷成候。但是には本子細有之事と奉存候。十八・九年前より御隱横目と申者數十百人、御徒列足輕・三十人組・坊主等の内より被仰付候て、此輩皆以口上にて大槪迄申含達御聽候。依之御横目の類は、皆以其身の手下の趣に申成、言上の書付は内見も御免の体に申候て、其身の非分は自然と上達無之趣に成來候。御横目役さへ如此罷成候故、諸役人の内は不及申、小役人共の内數十人彼家へ取入、於私門御政務の筋を取捌き申も、多此輩の手より出申体に相聞候。御郡方よりは十村・長百姓、町方よりは商賈の徒、群を成てあらぬ事共を御儉約の筋に言寄申立候て、諸運上の儀を建立いたし、御代々無之諸物に新運上幷辻口錢与申事迄も申付候。堂々たる御大國にして、下民と利を爭はれ候事、御笑止千萬絕言語候。

御前代にも運上の儀甚御嫌被遊候故、御算用場幷町會處共運上相願候者共の書付は、奉行共手にも取不申相返候旨常々申聞候。當春以來は此願を第一に爲願、若奉行共不取擧候へば、大槻方より承届申渡候樣に成來候。所々には運上取立候番所を設け、札を改させ、新關同然の趣。依之富山領より只今迄持込來候諸商物、あなたより停止に申付、往來爲相止候。御領同然の富山・大聖寺物さへ如此に候へば、越前・越後・美濃・飛驒隣國への風聞甚不可然事に奉存候。前年松平故越中守殿、於勢州桑名、爲勝手困窮諸物に運上を被取立候事、公儀へ相聞え首尾不宜、俄に所替被仰付候事有之樣に承及申候。

一、御儉約奉行の內前田源兵衞・林源太左衞門兩人、去頃私迄申聞候は、御貸銀方與力堀六郞左衞門・佐藤源兵衞等へ、爲骨折與力裁許明地代官米一萬石計の代官被仰付候。此儀は內藏允奉之申渡候。但代官の口米の內を以、只今迄は足輕を以下代に召抱置候て爲勤候處、此度は町人の內より角間屋惣右衞門・植木屋長助・小松屋左助など〻申者三人下代分に仕、口米此者共へ被下之、兩堂形御藏本へ罷出相勤申候。御代々、町人より代官の下代相勤候儀無之事にて、御納米の節刀を帶し申者見屆申格に候。右町人共刀御免と申儀に可有之歟。加樣之事に候へば、御算用場奉行より達て其趣言上も仕、町人共より相勤候儀無用に仕可然事と心附申者共有之候處、兩奉行料簡は、御格無之筋にても、近年は內藏允奉にて申談候事共は、皆以

御意同事の趣に候へば、是を以御新格と可仕事に候。彼此と僉議に可及事とは不存候旨にて、其趣に罷成候。近年大槻權勢次第々々强罷成、御代々無之新格出來、御舊例段々破滅仕候。就中此一件は大切の儀、三人の町人共皆彼家へ心安出入仕候。惣右衛門・左助は能囃子の相手、長助は植木草花の取持人に候。殊に京・大坂へ迄も時々罷越候者共にて、種々心外の事共都鄙の批判に及候。加樣の者共代官の下代被仰付候事絕言語候。たとひ町奉行所にて急度相選、奉行共僉議の上を以被仰付候ても不可然筋に候處、彼者私の念頃を以如此申付候儀、誠に無所忌憚仕合と奉存候。右三人御扶持人同事に罷成候てより、別して百姓町人の內より彼門へ出入仕、手入賄賂いたし、種々の申立己れが利を計候。加樣の事共風說迄にては難申上事之處、幸兩人慥なる事共申聞候故、如此に御座候。

一、至て恐多き事に御座候へ共、私見聞の趣を以申上候時は、最初は彼者御寵愛の餘りより事起り、中頃は御信用甚しく、諸事一人に御聞屆被遊、二・三年以來は御畏憚被遊候御樣子と相聞え申候。御畏憚被遊に至ては、彼者主威を掌に握り忌憚る處無之、御意無之事をも御意の趣に矯申事居多に付、諸役人甚恐怖仕候。依之諂諛追從の者共、彌以公儀を借て私曲を取計申候。歷々御譜第の執政中さへ、一向萬端不知ものゝ体にもてなし、一言の詰問も無之旨に御座候。御代々無之儀、又は御格違の事共有之時、其筋の御役人罷出相達候へば、是は內

藏允奉りにて候哉と相尋候節、尤内藏允申聞候と申候へば其分にのみ罷成相濟申候。私存寄には、去々年獅子の御藏より朱封生銀被爲召出候節、御算用場・御儉約兩奉行共不殘連判を以申上候趣は、御勝手御難澁に付、高德院樣以來爲御軍用御貯置被遊候朱封銀御取替被遊候事、決して不入御事と奉存候。此代りに加樣々々の筋に被仰付、大坂表御借銀御返濟被爲成候はゞ、御家中より免御借不被遊候ても、五・六年の内には御勝手相直り可申事と僉議仕候旨、書付を以申上、年寄中も此趣に被仰付可然存候旨、一同に及言上候時、一々御承知被遊、何れも詮議の筋成程尤に被思召候。乍然此度の事は內藏允へ被仰付候趣にいたし、此者申旨に任置可申旨被仰出、夫より朱封銀は不殘內藏允手より、或は町人或は百姓等、又は京・大坂の町人共へ相渡り、悉民間に零落仕候。しかも御勝手直り不申、萬人の笑に罷成候。此時以來年寄中は口を噤申事と推察仕候。

一、大學の卒章に、國家に長として財用を務る者は必小人による。小人使之治國家則災害並至る。雖有善者無知之何と相見え申候。近年御家老の內兩人、御儉約を主付候旨にて收斂を專とし、瑣細鄙猥の至分釐を爭申事、諸人爪彈きを仕候。且又大槻於私門運上の法を設け、細民の利を分ち、御得分之處へ迄心を用候故、御國政の衰廢無此上相見え申候。

一、前月末より西南の間に新星出現いたし、其光芒一尺計にも見え、東北の方を指申候。去

々年冬於東都、東北の方に新星出現、其光芒西南の方を指申とは反覆仕候。孛星とは不相見候。何れにも妖星の屬と奉存候。有澤惣藏へ承合候へば、新星には紛無之候。但孛勃の類にては無之候。是は聖人の代に出候瑞星の類にて、目出度例に候。則御尋に付其段申上候旨申聞候。惣藏は天象に委しく、其名を得申者の事に候へば、定て申處尤にて、瑞星にても可有御座候。私の存寄は、此星天下一同に相見え、京・江戸等にても天文に委しき者も左様に申候はゞ、其通にも御座候はん歟。萬一東都・西京へは見え不申、北國筋迄見え申事に候はゞ、御國は北陸にての御大藩に候へば、妖星の出現如何と奉存候。事理を以參驗仕候處、瑞星・慶星等可有出現時節に無御座候。凡天象を考申事は、人事を第一に仕儀と奉存候。人事失其道則天象亦失其常申筈。其事何の疑も無之候。形邪曲に候へば其影必邪曲に見えるが如く、天鏡至明可然事に御座候。私犬馬の齢七十に及申候。殊當四月以來重病に付、今日に至迄全快不仕候。押て勤番等は仕候へ共、畢竟永く人間の者とは不奉存候。此度星變に感じ、右件々言上仕候。韓退之の詩に、欲爲聖明除弊事。肯將衰朽惜殘年。と申置候事存出候。又家隆の歌に、世の中のかく成〳〵のはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん共承申候。只何こそ、高德院様以來御代々御英明にて御長久の御國、彌以無御別條御繁榮の様にと奉祝候外無御座候、已上。

亥十二月十日　　　　　　　　　　青地藤太夫

青木新兵衞殿

追啓、御近侍の内に、大槻氏の者共幷堀六郎左衞門せがれ迄も相勤罷在候。此輩見聞に入不申樣に仕度御事に奉存候。易に君不密則失臣云々共相見え申候。公私共可備鑒戒事故乍恐申上候、以上。

一、金銀を以諸人親附仕候樣に仕候事。

近年以來其人の貧富も不辨、頭・支配へも不達、其身眼前へ每々罷出候者共迄へ銀子貸渡候。夫故借請候者も緣銀と名付申事。今年に至りては御算用場を限り、奉行・御横目以下小役人末々迄も願次第貸渡候。御奉行松原善右衞門・御横目前田次郎右衞門以下皆々借用、頭へは不申聞候。是皆私恩を以人をなつけ申謀候事。

一、愛妾八人有之事。

一、犀川橋より下海口に至迄、獵師の外諸殺生甚御禁制に付、每歲其趣御大年寄衆廻狀被成候。然處當八月、香魚の簗を大槻下屋敷の内に設け、香魚數千を捕、御子樣方・御女中不殘被成御座候。九・十月に至り鮭の簗を設候事も同斷。御横目の内其外も、常に心安相通候者共へは、此兩品を以相贈候。

一、堀六郎左衞門新宅出來遷移の夜、大槻罷越能興行の事。

十二月十日。前田吉德の女保姫歿す。

〔政隣記〕

十二月十一日保姫樣御卒去。實は昨十日に候得共、寒氣御尋御禮之御書、今十一日御日付故、今日晝過御卒去之御披露有之。御法號幻空院殿電光知照禪童女、御當歲如前記。

〔重熙公御年譜〕

一、十二月十四日幻空院樣電光知照禪童女、保姫樣之御儀 於寶圓寺御葬式、龜次郎樣御代香九里治兵衞勤之。

十二月十五日。大槻朝元その秩祿を加增せらる。

〔護國公御年譜〕

一、十二月十五日御加增五百石都合三千八百石大槻內藏允。御加增百五十石宛大槻長太夫都合四百五十石、岡田兵太夫同斷、大槻七郎左衞門二百五十石、不破市左衞門四百五十石、不破丹下二百五十石、兒玉彌藤次合千八十石。

十二月廿一日。前田重熙叙爵して但馬守と稱す。

〔政隣記〕

十二月廿一日於江戸、亀次郎様御叙爵被仰出、但馬守様（于時御年十五）与御改之旨、廿三日早飛脚、廿九日金澤に着。翌晦日出仕以上之人々御召に而、左之通御用番大和守殿御演述。

亀次郎様當廿一日御叙爵被仰出、御名も但馬守様与御改被成、難有被思召候。此段何も可申聞之旨御意に候。

右に付為御祝詞、御年寄中等加判之面々御宅へ廻勤。

〔徳川實紀〕

十二月廿一日、また諸大夫十人を命ぜらる。戸田徳次郎氏英は釆女正、松平加賀守吉徳が次男亀次郎利安は但馬守、一柳隼人末榮は土佐守、酒井大助忠大は大和守、松平出雲守利隆が子掃部利幸は主計頭。下略。

十二月。田地に施すべき肥料買入の方法を諭す。

〔司農典〕

近年田地養干鰯等拂底に而、直段も高直に罷成、小百姓躰之者別而養不調之由相聞候。養之儀者作仕附第一之事に候。此事常々申渡候得共、御扶持人・十村中得心不仕躰に相見候。依之御郡々御扶持人詮議之趣、一郡切為書出遂熟覧、則拙者共詮議之趣左に相記申渡候。

一、御郡々浦方に而取揚候生鰯并干鰯共、組切十村中縮仕、惣而獵師共より商人共に賣渡候

儀不仕様、急度可申付候。其浦々に而捕揚候生鰯之分何程与申儀、不相洩様相改、帳面に記置縮可仕候。尤少分之儀に而、養に不罷成程之儀者格別之事。

一、御郡々浦々に而捕揚候干鰯迄に而者、難行届可有之候條、一郡切慥成者二・三人程相極、誓詞等も申付置、自・他國共不依何品、随分爲承知、下直に養相求候様可仕事。

一、自・他國共爲主附候買人相向候而も、現銀に爲買不申候而者下直に者難相調可有之事に候間、假令草高百石に付取立米一ヶ年に何程宛与相圖り、五ヶ年相懸り毎歳圖り高取立、畢竟五ヶ年目に至り何程之米高与相極、養代与名付毎歳爲相調可申候。尤村々强弱相計、取立米多少之儀者格別に候事。

附、右取立米之儀毎歳十一月十日を限、組切取立之員數相極、其年々米相場致詮議相場を取、代銀に而十村中手前江取立可申候。勿論養買調相渡候代銀、并其年新に取立米代銀与、打重取立可申候。尤今年之儀者餘日も無之候條、今暮に取立候分者、來春取立養爲相調、新に取立候分与打重、來暮取立可申事。

一、右養代米取立之儀、組切御扶持人共承届、精誠遂詮議、組切取立之米高并代銀書記、一郡帳面一冊に相調、改作所へ相達可申候。拙者共見届之付札いたし相渡可申候。尤人別に取立候米高・代銀共帳面に相調、組切十村中相廻、印形見届可申候事。

一、養爲相調候者共之儀、精誠人柄相撰、一郡書出可申候。就夫右養買人共爲骨折料、一ヶ年一人何程宛与相圖り、養代銀一包に付何程与相極、相渡可申候事。

附り、前段之通五ヶ年に而取立米も相濟申に付、五ヶ年に濟不申內者、年々養代銀相增候に付、骨折料代銀一匁之當り年々相減じ可申儀に候事。

一、右養代米每歲十一月十日切取立申に付、翌年養相求候迄者間も有之候條、組切慥成者に預置、何卒銀高も相增候樣相考可申候。併養爲主附相調候者共に申付、冬中より翌春迄之內、下直成養相求候趣も有之候はゞ、勝手次第爲相調可申候事。

一、養代米五ヶ年之間段々米高も相增申圖には候得共、養之儀は過分之事に候得者、取立米迄に而者行屆可申樣無之候條、御扶持人共より爲主附候者共に申渡、何卒銀子爲致才覺候樣可仕候事。

一、養買人共相調候養之分、不依何買切手を爲取、一郡切に御扶持人共見屆取置可申事。

一、養配當之儀、御扶持人共其組十村精誠人別相撰、畢意養順道に相渡候樣可仕候。勿論養渡方之儀者、村切・組切持出候銀高に應じ、養爲受取可申儀に付、尤人別に至り候而者、身上見計、自分に養相調申程之者共に者、至而少分相渡申歟、又者指除申樣にも可仕候。一村當り養之外、相增貸附候はゞ而は難成所々有之候はゞ、各詮議之上、其組に而餘村當り之內を以

相増貸付可申候。若銀米之内を以請取度有之候共、一向承届申間敷候。勿論養相渡候人々請取、組切帳面相調人々爲致印形、御扶持人共方へ受取置可申事。

一、土屎仕立之儀、百姓共持高に應じ、用水江筋之内ごみ溜り掘、並居屋敷廻り内ごすいを爲掘、且又蒸屎者、田地之内空地・畦抔に相仕立候様可仕候。尤一村切、其組之十村者不及申に、廻口御扶持人令詮議致見分、數極書記、組切に改作所へ可相達之候。相極候員數、三ヶ年之内不殘爲致出來可申候。御扶持人・十村之儀は不及申に、一ヶ村切其組合之肝煎等附居候様爲致可申候。勿論拙者共村廻罷出候節、相廻候村々者見置可申候。其外見分人指遣し爲見届可申候間、一ヶ年切出來之員數、是又改作所に相訴可申候。何卒右土屎之儀多出來候様、逐一遂詮議可申候。山方等之内草屎相用候村々者、右之趣に順じ夫々可申付候事。

右養調様等之儀、ヶ條書を以申渡候條、一郡切御扶持人・十村打寄詮議、夫々相極候様可仕候。尤他之御郡承合申に者不及儀に候。今般拙者共詮議之趣有之、如此申渡候儀に候。若等閑に相心得候者有之候はゞ、不念に可罷成候。ヶ様之儀者御扶持人・十村心服次第、末々迄全爲致得心候様可有之儀に候。縱宛之儀に者候得共、養代米取立等有之に付、彼是難澁を申立候百姓等有之候はゞ、急度可申付候條、此旨末々迄嚴重可申付候、以上。

亥十二月　　改作奉行

二月朔日。大阪より齎せる蠟の實を御算用場に納む。

〔加州郡方舊記〕

一、蠟之實三駄到來仕候に付、則金澤野町鶴來屋吉兵衞、幷大坂和田万助・和田三治与申者、明廿九日御場ゟ罷出居申候間、近付に罷成候樣、子正月廿八日田井村喜兵衞・村井村與三右衞門ゟ、芝山三郎左衞門樣・横山三郎兵衞樣被仰渡候。

右は田井之留帳に覺書有。寫置候也。

大坂　和田万助

和田三治

右之者大和守殿被仰渡、御用之品有之、當場ゟ呼出申候。爲御心得申達候、以上。

正月廿八日　御算用場

戸田與一郎殿

稻枝與三右衞門殿

外に一俵入大和守殿ゟ指出す。

一、三十俵　但一斗入蠟之實

內一俵　但八升入

右二月朔日於御算用場、鶴來屋吉郎兵衛幷大坂和田万助・和田三治召寄、田井村喜兵衛・村井村與三右衛門差出、蠟之實相見候上爲相改、右之通に候。

大坂　和田万助

和田三治

右兩人旅宿、金澤野町三丁目北川屋豊右衛門。

一、蠟之實漬候池見分仕度物に有之由、和田万助・和田三治申に付、詮議之上石川郡泉野村・横川村兩所可宜旨、田井村喜兵衛・村井村與三右衛門申に付、子二月二日右兩人見分爲致候樣申渡候に付、支配之十村野々市村少左衛門・押野村宇右衛門手代爲案內申候處、泉野村百姓甚右衛門居屋敷之內に在之池可宜旨、万助・三治見分之上申旨、與三右衛門・喜兵衛相斷申候。

一、金澤野町鶴來屋吉郎兵衛儀、石川郡泉野村領之內千歩一作下し請込、蠟實蒔立可申旨に付、年貢幷入用吉郎兵衛方より指出可申旨。左候得者先達而申渡、田井村喜兵衛・村井村與三右衛門方より圖り指出候通、吉郎兵衛方より相渡申趣に有之候。

一、右吉郎兵衛一作請地、蒔付之蠟之實一斗入七俵請取申度旨申斷候得共、一斗入五俵相渡

申筈に罷成申候。

一、右吉郎兵衛ゟ相渡候蠟之實、二月五日五俵相渡申候。同日吉郎兵衛幷和田万助・和田三治泉野村ゟ罷越、蠟之實漬樣、吉郎兵衛一作請之場所見分仕候樣申渡候に付、則押野村宇右衛門幷手代罷出致案内候所、泉野村百姓甚右衛門屋敷之內に有之候堀ゟ、吉郎兵衛より五俵、幷石川郡十村御扶持人ゟ相當り之蠟之實六俵共に、十一俵漬申候。

覺

一、四俵　能美郡　　一、六俵　石川郡

一、二俵　河北郡　　一、一俵　羽咋郡

一、三俵　鹿嶋郡　　一、三俵　鳳至郡

一、一俵　珠洲郡　　一、四俵　礪波郡

一、二俵　射水郡　　一、五俵　新川郡

〆

外五俵　　金澤　鶴來屋　吉郎兵衛

子二月

覺

一、蟻種池前方に掘浚置、渴不申様に仕積可申事。
一、種俵之上水ひたひたに有之様に仕候事。
一、種漬之以後、暫時も川水切申儀惡敷候事。
一、種池は勿論、種積置候川上に而、あらあらそゝぎ申事決而成不申事。
附、あらあら毒物に而痛候種は、蒔付節相見へ候得ども、前方より此段能々念に入可申事。
一、日覆におよび不申、日を請之儀宜候事。
一、種漬候而十日計相立、種之俵上下は返し漬可申事。
附、種にごみ懸り候はゞ、すゝぎ漬可申事。
一、種漬より日數凡廿日計に而種揚候事。
附、漬候日數少し見合加減有之事。
一、種揚候而一兩日乾かせ蒔付可申事。
附、右之種晝は日に當て、夜は筵に包置可申事。
但、俵成に而日に當る也。如此仕候事一兩日にて宜候。
一、種揚候而俵開候迄、手荒取扱仕候儀甚惡候事。
一、種蒔付候畠地、眞土砂交宜候。勿論小石等無之土地宜候事。

はさこ本のまゝ

一、濕地惡敷候事。
一、うね者幅三尺計に而、はさこ往來自由に候程廣く仕候事。
一、地拵隨分土細に、麻畠同事に可仕事。
一、種蒔樣は平蒔に仕、種隱候程に手に而土を碎、一遍懸可申。尤むら懸無之樣可仕事。
一、手土仕候上、松葉薄く散し可申候事。尤外之物を蓋候へば、苗生立之節蓋取候砌、苗痛申候。松葉は取におよび不申事。但枯松葉宜候事。
一、種蒔仕候節、はえ立養用不申。汐風當り候筋不宜候事。
一、種蒔付候畠、犬・狐等入不申惣廻り垣、幷鳶鳥おどし可仕候事。

子二月六日

二月五日。昨今兩日前田光高の百回忌法會を天德院に取越執行す。

〔重熙公御年譜〕
一、二月五日當四月五日陽廣院樣百回御忌之處、御取越、昨今於天德院御法事御執行。但馬守樣御代香、御附物頭並九里治兵衞勤之。於江戸廣德寺同日御茶湯、佐渡守樣・但馬守樣御參詣。

二月十一日。前田光高百回忌法會終るを以て天德院等の僧を請待す。

〔護國公御年譜〕

一、二月十一日今般御法事相濟候に付、天德院始御寺方御招請御能被仰付。

翁　宮　門　三番叟　茂　助　九世戸　權　進　賴　政　三　藏

源氏供養　宮　門　舟　辨　慶　宮　門　祝言高砂　權左衞門

庖丁婿　幸　助　かうじ　權五郎　宗　論　九郎兵衞

二月廿六日。本多安房守、前田吉德の諭告により末家本多賴母と輯睦す。

〔吉德公の記〕

今年本多安房守殿と本多賴母と不和之趣御內聽に覺書を以て達せられ候事、此間に色々詫言あり候得共無承引。然所二月に至り賴母內藏允ヘ逢、一卷の儀御聞可有と存候。安房守中々和申躰無之、迷惑至極に存候。何分にも詫仕度候。何方へ賴候ても埒明不申、此段御存辨、如何樣にも料簡偏賴申由申達、甚迷惑至極の樣子無紛相見え候に付、達御內聽候由、內藏允申聞られ候。夫に付御意被成候は、もはや以來愼不申儀は有間敷候間、若以來不心得の儀候はゞ、其節は役儀を指除候とも、安房守存念の通に可罷成候間、先此度は何とか致料簡、其分に仕候樣遂內談可申由御意に候。押て御意被成御事には夢々無之候、思召の程可仰聞やと有之に付、私存念被聞召屆被下、後代の儀も無心元候處、尤の儀無據事に被思召候。從先達も

內藏允は大槻

私は本多安房守

藤太夫は青地禮幹

奉承知、難有儀に奉存候。同役共の内にも何かと可申聞体の者も有之候へども、未不申聞候。何程申聞候ても、此度存立候儀一旦の儀に無御座候間、承引可仕所存無御座候。然ども分てヶ樣の御内意、無味に御請不申上儀も迷惑仕候。いかに御内意に御座候ても、御内々の儀故人々存知候者は無之候。最早此間は誰彼も存候体に御座候。ヶ樣の所にても迷惑仕候。此上惜成儀賴母眞實迷惑仕、以來相鎮、後代に至候ても存念ヶ間敷儀無之證據を得申候はゞ、其上御内意彼此にて、此度は先其分にも可仕候由申達候へば、其儀はいか樣とも私所存の通可罷成事に候由に付、近頃私の口より申兼候得共、遠慮仕居申候ても譯も立不申候。左候はゞ賴母筆にて迷惑仕趣、以後愼等の趣委相調、眞實右之通に存儀に候はゞ、神文を指添御自分迄指出、則被入御覽、御内意を以被仰渡儀に候はゞ、責ての證據に紙面等取請置、此度は先其通にも可仕候。去共此儀賴母少も不同心の儀に候はゞ、一向望に無御座候。此所不實にては何の專らも無之儀、却て如何敷存候由申達候處、其段申上候得ば、賴母神文、當役にて御用の外に神文難仕趣に候へども、安房守儀は家本の儀、各別思召候。神文爲相調可申由御意に候旨。左樣に候はゞ奉畏候旨房州御請也。私曰、此は藤太夫へ房州より之狀也。日附は二月廿四日。

二月廿六日御内意被仰出、和順相調申候首尾、左に相調申候。

一、賴母神文内藏允見屆相濟、其後御居間書院二の間にて、下拙・賴母一所に罷出、別紙の通

御内意の趣内藏允演述、頼母神文入御覽被渡下候に付、御内意之趣謹而奉承知候。今般之一卷私存念之趣聞召屆候。誠以來之儀をも御内意之趣難有儀奉存候。頼母紙面等入御覽被渡下、頼母へも以來急度相愼候樣委細被仰出候。頼母紙面等之趣熟覽仕候。此上何かと可申上樣無御座候間、此度之儀は先其通可仕候旨及御請候。

一、頼母へ被仰出は、安房守へ御内意の趣、其方承知仕候通に候。對本家へ聊疎略無之筈之儀に候處、不心得の儀と被思召候。以來急度相愼可申候。且又家來仕置方等の儀も、入組申品は家本に相伺、指圖を受可申儀に候。家風の樣子不宜樣に被聞召候。此儀迄にも不限、諸事其心得を以て指圖を受可申候。安房守家風を心掛、用不申候はでは難成事と思召候。右頼母奉承知、委御内意の趣難有仕合冥加至極に奉存候旨及御請。

一、元來今般之趣達御聽申儀にても無御座候。近頃御難題之儀被聞召及、夫々御内意の趣難有次第に奉存候由御禮申上、頼母儀も准之御禮申上退座。

頼母手前の儀に付、安房守數年存寄之趣達御内聽、安房守後代の儀をも無覺束存候處、尤の儀無據事に被思召候。内存寄は被聞召屆候。以來の儀頼母急度相愼可申儀与被思召候。左候へば此度の儀は先其通に致料簡候樣にと被思召候。若以來不心得の趣有之節は、安房守存知の通可罷成儀と被思召候。

神文の寫

御自分樣思召之趣御座候に付、以來御疎遠可被成趣被仰聞、其節迷惑に奉存候趣御答に可申上筈御座候處、不覺悟成御答申上、唯今に至行當迷惑至極に奉存候。御家本之儀に候得者、聊麁略に可奉存樣無御座候處、數年來其心附無御座、今般思召之樣承知仕候に付而、存付申候趣一向申譯も無之儀、迷惑千萬可申上樣も無御座候。只今迄之儀は幾重にも御容赦被下候樣仕度候。此以後思召に不應儀も候はゞ、幾重にも畏可申候間、御異見被下候樣相願申候。勿論御後代に至候而も、御家筋之儀不存忘、諸事私意を立候儀堅仕間敷候。此等之趣一通に申上候而者、心底實儀にも御聞被下間敷儀も可有御座哉と、神文を以如此御座候。

右之通聊相違無御座候、以上。

寬保四年甲子二月廿六日　　本多賴母政恒　血判

安房守樣

二月。羽咋・鹿島二郡の十村等施肥に關する諮問に答申す。

〔司農典〕

御郡方田地養之儀に付、今般御書立を以被爲仰渡候趣、末々迄心服仕候樣、猶更私共詮議之品御郡切可申上旨、委細に被仰渡候。御ヶ條之内羽喰・鹿嶋兩御郡之趣左に書上申候。

屎はこえと訓む

一、御郡々浦々に而捕揚候干鰯迄に而は、難行届可有之候條、一郡切慥成者二三人宛相極、誓詞等も申付置、自他國共承合、下直成養相求候樣可仕候事。

但、此御ヶ條之趣詮議仕候處、羽喰・鹿嶋兩御郡之儀者、干鰯は土地に相應不仕候。且亦所口町之外家數多所も無御座候故、買屎可仕樣無御座候に付、第一野土・蒸屎・草屎・厩屎・堀土を以養申候に付、屎買人相立申儀者指止、植付之內一ヶ月兩度充五ヶ村組肝煎中互に見分仕、土地に應じ候養不足無御座樣せり込、勿論其組十村并手代等、月に幾度に而も切々相廻り見分仕候樣仕度奉存候。

一、自他國共爲主附候買人相向候而も、現銀に爲賣不申而者下直に難相調可有之候間、假令草高百石に取立米一ヶ年に何程宛与相圖り、五ヶ年間每歲取立米仕、畢竟五ヶ年目に至り米高相極、養代与名付、年每に養爲相調可申候。尤村々强弱相計、取立米多少之儀者格別に候。

附り、右取立米十一月十日を限り、組切取立之員數相極、其年之米相場を取、代銀に而十村中手前に取立、勿論年々新に取立候分は打重、前年之趣を以五ヶ年之間同樣に取立可申事。

此御ヶ條之趣詮議仕候處、米に而取立候而者百姓不勝手之所も有之、且亦失却之品も可有御座、其上人々强弱之儀精誠詮議仕候而も、撰所に萬一行屆不申儀も御座候得者、末々之者得心も薄く罷成可申儀与詮議仕候間、兩御郡之儀者草高百石に五匁宛定打銀仕、五ヶ年

之間毎歳十月十五日切取立、一郡切御扶持人・十村連判に而取立、帳面相添銀子御改作所に奉預、二月返被下、夫々貸し渡候樣仕度奉存候。貸渡樣左に申上候。但、貸渡樣之儀詮議仕候處、前段に申上候通に而、外より買屎可仕樣無御座、野土・屎草・堀土・厩屎等を以養申儀に御座候に付、屎に而渡し可申樣無御座候。然者百姓手弱に相成候得者、乃至十駄入べき田を八駄ならで入不申樣に罷成候間、兩御郡之儀は銀子に而貸渡候樣仕度奉存候。左候得者貸渡、且亦屎配等、五ヶ村肝煎其組十村見屆候上、右帳面廻口御扶持人受取置、村廻仕刻見置仕候樣仕度奉存候。

右今般御書立を以被仰渡候趣拜上仕、奉得其意、則私共詮議之趣書記奉窺候、以上。

寛保四年二月

中嶋村　與　一
荻谷村　七左衞門
武部村　彌　兵　衞
三階村　源　五
堀松村　彌　五　郎

御改作御奉行所

三月十一日。改元の報江戸より金澤に達す。

此の改元は二月廿一日に在りしなり

〔護國公御年譜〕

一、三月十一日、年號延享と改元之旨二月二十九日出江戸より申來。

三月十八日。前田吉德の側室を大音厚固に嫁せしむ。

〔政隣記〕

三月十八日喜六郎殿御袋之方、江戸出生也。人持組大音主馬厚固江被下之旨、二月十九日被仰渡置候處、今夕彼宅江被罷越。但主馬初岡嶋□病死後、前田土佐守妹再婚之處、去年依病死に也。

三月十八日。金澤大樋町に災あり。

〔大野木克寛日記〕

三月十八日八半過、大樋町かなくさり橋邊之小家より出火。折節風强及大火、類燒之災八十四軒、七時比鎮。

三月廿九日。前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

三月廿九日金城御發駕、八半時前。御供御家老前田大學知久・西尾隼人長恒。御作法前々之

通。

四月十一日。前田吉德江戸に着す。

〔政隣記〕

四月十一日昨夜鴻巣御泊、今日大宮御晝休、蕨御中休、御下屋敷へ御立寄。同所に宗辰公爲御迎御出、御對顏相濟、追付御先に御歸。其以後御立、御中邸に御寄、預玄院樣に御對顏、御熨斗迄御祝。暫被爲在御立、追分御門より中之口九時前御着。翌十二日上使御老中格松平右京大夫殿御出、御料理御相伴被遊、一燒御持參、御引肴者但馬守樣、御濃茶者佐渡守樣御持參。御三方樣共御門外に御迎送被遊候。其外御例之通。

四月十五日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

十五日御參勤御禮、御下りに西丸にも御登御老中方并松平右京大夫殿御勤。且大學・隼人御目見等都而御前例之通。

四月十九日。會津侯保科正容の女常姬將に前田宗辰に入輿せんとするを以て道具を駒込邸に搬入す。

十五日は四月
大學は前田知久、隼人は西尾長恒。

〔政隣記〕

四月十九日。當廿二日就御婚禮、今日從肥後守様御中邸江、辰之刻常姫様御道具被遣之。依之御中邸へ出雲守様・主計頭様・前田信濃守殿等御心易御旗本衆御出。於御大書院御料理出。相公様にも被爲入、新御殿御溜之間に而御吸物等被召上、御廣式且預玄院様江も被爲入。但、御上邸江も御出之方有之候得者、御料理出候筈之處御出之方無之候。

附、本書に御道具御行列等記無之。

四月廿二日。前田宗辰駒込邸に於て婚儀を擧ぐ。

〔大野木克寛日記〕

延享元年四月廿二日快晴。

佐渡守様御婚禮、午之刻御入輿。御先江女中乘物五十挺計。惣御行列昌平橋より本郷邊迄相續候事。

御行列

一、御先女中　一挺

一、御召替　一挺

一、御弓・矢　御歩行持

ねりの袋入葵御紋附

一、御挾箱　しゆちん

一、御長刀　猩々緋

一、御立笠　同斷

一、御乘物　覆右同斷

一、御貝桶　二對

一、供馬　十九疋

一、供鑓　卅九本

一、供挾箱　五十二

一、供輿　七挺

一、御迎　南部修理大夫樣・前田大和守殿

一、御送　阿部飛驒守殿・松平宮內少輔殿

一、御輿　武川源助渡、奧村助右衞門請取

一、御貝桶　北原采女渡、前田大學請取

御輿舁　八德着用

御貝桶持　子持筋
御挾箱持・御長刀持　幸菱

右頭書如斯御座候、以上。

四月

〔政隣記〕

四月廿二日宗辰公御婚禮、本郷御邸大御門前通、御中邸大御門より御廣式御式臺へ、九時頃御輿入。御待上﨟總姫様。御迎修理大夫様南部氏・前田大和守殿。御送阿部飛驒守殿・松平宮内少輔殿。御輿渡御家老武川源助、請取奥村助右衛門。御貝桶渡北原釆女、請取前田大學。御客安藝守様等。幷御出入衆御取持小笠原縫殿之助・溝口孫左衛門殿。御囃子高砂・東北・猩々。相公様に者少々御不快に付八時御出、御中邸に被爲入候。御客衆御披以後に候。於御溜御附青木新兵衛・樋口次郎右衛門・村田半助被爲召、御意有之候。但馬守様に者朝より御出、御客方と御盃事も被遊。惣而今日者相公様爲御名代、御引菓幷御供之武川源助御目見も被仰付候。

一、御上邸にも御客有之候得者、御料理・御嶋臺も出申筈之處、御客無之候。御附使者者有之候。

一、右御祝儀頭分以上於竹之間御帳に付候。同夜御上邸御居間書院於三之間、奥村助右衛門等幷大槻内藏允ゟ御吸物・御酒被下之、給事新番、御使御近習頭勤之。將又御近習頭・御用人・御臺所奉行・聞番・同見習、同於四之間御吸物等被下之、給事坊主。御表之頭分者長いろり之間に而、右之品坊主給事に而被下之。平士も在合候分者、御臺所常々頭分ゟ御賄被下候席に而頂戴之。

一、御居間書院於上之間、御手役者御細工人に而御囃子被仰付、在合候御奥表共、望之者ハ罷出承候樣被仰出。

一、御婚禮御行列等本書に記無之。

廿三日、右御婚姻相濟候爲御祝儀、從西御丸御内證御使有之。從公方樣相公樣ゟ、御廣式番之頭小林權太夫殿を以二種・一荷御拜領。御中邸御殿に而。御新造樣ゟ杢左衛門殿を以二種・一荷但御中邸新御廣式に而御勤。右大將樣より相公樣ゟ、御廣式番之頭生野彌三郎殿を以二種・一荷、佐渡守樣ゟ同近藤助八郎殿を以一種・一荷御拜領。御中邸新御廣式に而御勤、右兩御邸共、夫々御菓子等出る。御新造樣ゟ之上意者、御附高木小左衛門取次之、御請者上﨟之方被申述。御披前宗辰公御出御挨拶、御退出之節少御送り被遊。

一、相公樣にも御上邸御使相濟、御早乘に而被爲入候得共、相濟候事相知れ、竹町より御歸

館。

一、右御禮、御兩殿樣共御老中方御勤。

一、右御使に付御作法、寛保元年四月廿三日喜代姫樣御婚禮相濟候爲御祝儀御使之節御同例。

廿四日、御新造樣江、從相公樣御使御近習頭鷹栖左門を以、蓬萊一箱・御樽重一組・包のし被進之。左門無地熨斗目・同上下着用勤之。

一、昨日御拜領之御肴御吸物に被仰付、御拜領御酒・御取肴年寄中初奥表頭分以上へ、於御料理之間に頂戴被仰付。見付之方年寄中等、御大書院之方後に仕、御近習・人持頭分、御勝手之方後に仕、御表向人持・頭分列座頂戴仕。御歩頭勝尾半左衛門罷出、御拜領之御酒、御肴頂戴被仰付候旨申述。御給事御大小將・新番、指引御大小將御番頭・同御横目、御酒之上御近習頭伊藤六郎左衛門を以、緩りと御酒給候樣御意有之。御禮者懸り之物頭迄申達。

廿五日、御婚禮爲御祝儀、佐渡守樣江從相公樣、御使御近習御馬廻頭野村七兵衛を以、御卷物五・干鯛・昆布・御樽代五百疋被進之。七兵衛江御目六を以綿三把、從佐渡守樣被下之。同日御新造樣江も白銀百枚・三種・二荷、御近習御馬廻三浦左京を以被進之。從御新造樣左京江、御目錄を以白銀二枚被下之。

廿七日、御新造樣より御使者酒井五郎兵衞を以、年中大奥に之御献上之品、上使に之被遣物之品、從相公樣諸事御嗙可被遊旨被仰進、忝思召候。且又御婚禮被爲濟候に付献上之品、御老中方御指圖之趣青木新兵衞より申上、難有御仕合思召候旨被仰上。

廿八日、先達而小笠原縫殿之助殿を以、御婚姻之御禮被仰上度旨御用番迄御願置之所、昨日御老中方御連名之御奉書御兩殿樣に依御到來。今日宗辰公御登城、於御白書院御婚姻之御禮被仰上、上意有之。相公樣に者少々御不快に付、御名代前田信濃守殿を以、於御黑書院御禮被仰上。但御名代故上意者無之。宗辰公・信濃守殿にも西御丸にも御登、御老中方御廻勤。今日右御禮に付御献上物、從相公樣公方樣に緞紗二十卷・包のし、右大將樣に白銀十枚・包のし、從宗辰公公方樣に緞紗十卷・包のし、右大將樣に白銀五枚・包のし。

一、御新造樣より女中御使を以被上候儀御願、昨日相濟。則左之通。

公方樣にさゐや十卷紅白・干鯛一箱・御樽一荷。

一、宗辰公より御婚禮濟、今日御禮も就被仰上候御祝御持參之旨、樋口次郎右衞門を以御卷物三・御箱肴被上之。追付御對顏、御禮被仰上候。

一、御前號被進候儀御聞合之處、向後何方にも御前號被遣候儀者、御止被成候將軍之思召に候。只今迄唱來候分者格別との儀也。當時御前號被進置候方者、松平左兵衞督殿（仙臺中將

吉村朝臣）御内室、伊勢守樣（藝州四品宗恒朝臣也）御内室樣迄也。

一、御婚禮被爲濟候に付、於金澤御弘者五月六日頭並以上に有之。爲御祝儀年寄中・御家老中宅々に參出。

〔大應公御年表〕

延享元年四月廿二日松平肥後守容貞之御妹御入輿、稱御新造、駒込邸内に在す。同年大家大奥より奉文を以、御内々に而御前と稱候樣に命せらる。依而大奥幷御一門樣方に、是より以來御前樣与披露す。

四月廿九日。前田宗辰歸國の暇を受く。

〔政隣記〕

四月廿九日宗辰公御歸國御暇之上使、御老中本多中務大輔殿御出、宗辰公・但馬守樣御門外迄御迎送り御先立。宗辰公、御拜領物綿紗二十卷、從右大將樣縮緬十卷、先達而來、御大書院に飾置、上意御拜聽、御拜領物御頂戴被爲入、御のし三方出之。重而御出、御挨拶之上、御小書院に御誘引、宗辰公御相伴に而御料理出、一つ燒・御濃茶御持參、但馬守樣御肴御引、御嘉儀小笠原縫殿助殿に而御盃事被遊候。相公樣に者頃日少々御不快に付御出不被遊。依之前田信濃守殿を以上使に御挨拶被仰述候。

今日上使に付御表向者一統熨斗目に候得共、相公樣御身當之上使に而無之、其上御表ゟ御出無御座候故、御近習向者一統常服。

五月朔日。前田宗辰登營して歸國の賜暇を謝す。

〔政隣記〕

一、五月朔日御登城御暇之御禮被仰上、於御白書院也。御着座、御鷹・御馬御拜領。相公樣ゟ御登城に候得者、右御禮も被仰上筈之處、時氣御當り今日御斷。但宗辰公今日御暇之御禮に付、一統布上下に候故、御次廻平士も布上下着用候樣、昨夜福田新左衞門申談置候。于時今朝野村七兵衞被爲召被仰出候者、今日御近習之面々何ゟ布上下着用罷出候。御前にゟ御登城御斷之儀に候得者、其儀に及間敷候。昨廿九日佐渡守樣ゟ上使有之節、御次廻何も常服に而罷在候。今日も其通可然旨御意に付、七兵衞より何も申談候事。

今日於御家老中席、左之通前田大學頭分以上へ演述。

佐渡守樣ゟ昨日上使本多中務大輔殿を以御國ゟ之御暇被仰出、御卷物御拜領、西之丸よりも御卷物御拜領。今日御登城被遊候處、御着座、其上御鷹・御馬御拜領、重疊忝御仕合被思召候。此段何もゟ可申聞旨御意に候。

右恐悅於竹之間御帳に付候。

五月二日。前田宗辰會津侯保科正容の邸に臨む。

〔政隣記〕

五月二日朝肥後守様ゟ五百八十之餅被進之。御使御部屋附之御小將頭村田半助、子持筋褐熨斗目・同斷半袴着用勤之。従肥後守様も右之品被進之。御使者日向三郎左衛門罷越、樋口次郎左衛門取次之。御答奥村助右衛門。右何も装束半助同斷。

同日宗辰公御夫婦様、今日肥後守様へ御招請。御相伴修理大夫様・前田信濃守殿・前田大和守殿・前田帶刀殿・小笠原縫殿之助等也。相摸守様ゟ御立寄、御揃候而段々御越處、御新造様御供之者へ従肥後守様拜領物夫々被仰付。相公様者就御不快御斷。依之従肥後守様御使者を以御檜重一組・鯛一折被進之候。宗辰公ゟ今日従肥後守様御盃事之上被進候御腰物御刀備前國宗代金十五枚・御小脇指來國俊代金同上、右御大小御上邸迄以御使者被遣、物頭挨拶に出、御菓子等被下之。宗辰公御披以後之御使者も御上邸迄來、御大小將布上下着用誘引、村田半助褐無地熨斗目・上下着用罷出取次之。

五月十一日。會津侯保科正容駒込邸に臨む。

〔政隣記〕

五月十一日御中邸ゟ肥後守様為御舅入御招請。依而相公様も被為入、御相伴阿部飛騨守殿・梶

川三丞殿・保科主水殿、御勝手𛂞左衛門尉様・前田信濃守殿・主計頭様・前田大和守殿幷御醫師衆三人、御取持小笠原縫殿之助殿・久貝惣左衛門殿・前田帶刀殿・齋藤長八郎殿・本多左膳殿也。御斷者阿部豐後守殿・修理大夫様・安部攝津守殿・大嶋織部殿。御進物者從肥後守様相公様𛂞御太刀金馬代・二種一荷、佐渡守様𛂞御太刀金馬代・卷物二十。且又御兩殿様𛂞右飛驒守殿・主水殿・三丞殿御太刀馬代御持參。右之外預玄院様初、從肥後守様夫々に御進物有之。

一、相公様𛂞御家老武川源助・北原采女より箱肴一種宛献上、宗辰公𛂞御太刀馬代献上之。御目見被仰付、横山內記殿相伴に而御料理被下之。御盃頂戴之上、御腰物源助𛂞尻掛代金七枚五兩・采女𛂞三原代金六枚之御太刀被下之。尤御盃・御刀從宗辰公被下候也。

一、御盃事之內御囃子老松・東北・猩々有之。肥後守様御持參に而御盃之節、宗辰公𛂞御刀左定吉・御小脇指來國光被進之。

十三日御新造様𛂞御祝儀物被献候に付、今日前田大學・西尾隼人𛂞御新造様より紗綾二卷宛被下之。

一、前月廿五日左之通從御新造様拜領被仰付。

卷物三・御箱肴　奧村助右衛門・青木新兵衛・大槻內藏允。

卷　物　三　前田大學。

同　　二　西尾隼人。

巻物二宛　樋口次郎右衛門・村田半助・半田主鈴。

五月十六日。前田宗辰初めて夫人の爲に能を興行す。

〔政隣記〕

五月十六日宗辰公御表新御殿に、今日初而御新造様御招請、御能五番・狂言三番被仰付、寶生大夫幷御手役者勤之。宗辰公亂被遊、預玄院様も被爲入。右に付從相公様、宗辰公に御使者を以御肴被進之。

五月十九日。前田宗辰その夫人と共に本郷邸に臨む。

〔政隣記〕

五月十九日御上邸宗辰公幷御新造様御招請。櫻田・神田兩御前様にも被爲入、初而御新造様に御對顔、御庭御縮に而御出、御表にも御出。御居間書院御縮に成、御手役者に而御囃子有之。御近習頭者無地布上下着用。御新造様御迎御送之御使、御近習組頭三輪藤兵衛勤之。

五月廿五日。前田宗辰江戸を發して金澤に向ふ。

〔政隣記〕

五月廿五日宗辰公今日江戸御發駕に付、五時過御上邸ゟ被爲入、御居間書院於三之御間御料理被進之。但馬守樣御相伴幷御引菓も被遊候。御酒之上、御肴は勢之佐殿御引被成候。御土器出、御前御初に而御盃事被遊候。畢而御奥ゟ被爲入。其以後御居間ゟ被爲入御暇乞之節、御手自御のし被進之。夫より御見立之御一門樣等ゟ御逢、御出入之面々ゟ御目見、御附使者ゟ御直答。直に御大式臺より四時前御發駕。御式臺箱段之上迄相公樣御送、安藝守樣初御式臺迄夫々に御送。都而相公樣御發駕之節御作法御同事。

一、青木新兵衛初御附之人持頭分、御前ゟ被召出御意有之。誘引御家老役、但去々年者此御儀無御座、今年如斯也。御附之平士者御目見不被仰付。

一、御中屋敷ゟ御近習頭之内御附使者可被遣旨被仰出。伊藤六郎左衛門罷出候所、從御上邸御歸、於御居間御前ゟ被召出、御直答被仰渡、九半時頃從大御門御發駕被遊候。御玄關敷附迄但馬守樣御見送、六郎左衛門幷預玄院樣・御新造樣御附使者御白洲ゟ罷出候所、御意有之候。惣御供者板橋口御門より段々繰出し、御供仕候。蕨御中休迄三浦左京御使に而一種被進之、御直答。

〔政隣記〕

六月七日。前田宗辰金澤に着す。

親翰は寛保三年九月朔日の條に在り

六月七日。宗辰公御道中川々滿水、今日夕七時頃金谷御殿に御着。江戸に御禮御使多賀典膳同日發足等前々之通。御着爲御祝儀、人持・頭分月番大和守殿宅に參出。

六月十日。前田土佐守、前田宗辰に書を上り時事の益々非なることを告ぐ。

〔前田直躬内密手記〕

去秋被成下候御親翰三通、御上包共奉返上候。

一、右御親翰被成下候以後、猶更相考、何とぞ相公様へ申上候品も可有之哉と奉存罷有候へ共、惣て以紙面は何品にても不申上趣に相成、皆以内藏允迄御取次仕候。一向御親翰之被仰出抔は且て無之故、以紙面申上候儀も難仕候。假令私儀に候へば、申上候品不宜候とて急度被仰付候儀を厭申儀にては勿論無御座御儀に候へども、急度被仰付候て其筋相立、御爲に成申儀に候はゞ尤忝儀に奉存候。併當時之御様子は、右様之所へは參り不申、先達而も申上候通、元來私儀内藏允と不相口に御座候故、其所より申上候様に相公様に被聞召届候ては、無詮儀に奉存候。如御前筋目を御糺被遊下御儀に候へば、唯今迄延引は仕間敷所存に罷有候。右御親翰にも被仰下候趣に候へば、仲間或御家老共之内可申談儀にも御座候へ共、最早只今は安房守などもとかく内藏允に相隨ひ申族。加様之儀に御座候へば、私一人之存寄にては中

々難參屆、今迄は何とも難申上候。此段從御前被仰下候趣を、等閑にも仕候樣に可被思召哉と、迷惑至極可申上樣も無御座儀。唯今に至候ては、最前寸志之儀申上候儀も、思召如何と兎角難辨罷有候。幾重にも此段は被聞召屆候樣仕度御儀に奉存候。且去年以來御在國中之趣、可申上樣も又無御座程之御事共に御座候へ共、一々筆上に難申上候。新兵衞へ申聞候て不苦品は、相達置申にて可有御座と奉存候。右之趣申上度、御歸を奉待罷有候。兎角私一人之迷惑可奉申上樣無御座候、以上。

六月八日　　　　前田土佐守　判

右之一封、六月十日金谷御殿へ土用入御機嫌伺に罷出候節持參、新兵衞へ逢相渡候。

六月十四日。前田重煕持鎗二本を携ふることを許さる。

〔御年表〕

六月十四日。今朝小笠原縫殿助を以て、但馬守御持鎗二本御持せ成らされ度旨御願書御出被成候處に、御用番本多中務大輔殿御請取、同日夕聞番御招、御願の通被仰渡、重き御願の筋に候間、但馬守殿には御老中宅に御勤可被成旨御差圖有之。但備後守利章公、御敍爵以後も御持鎗一本に候故、此度の儀先例無之旨にて、去年御願の時分は松平伊豆守殿御聞屆無之、御願書先御扣置、此度伊豆守殿卒去旁、中務大輔殿御用番に付、御願の通御聞屆也。

六月廿三日。御馬廻組頭原田又兵衛城門の勤番中酩酊するを以て蟄居を命ぜらる。

〔政隣記〕

知行高五百石　御馬廻頭 御用番支配　原田又兵衛

右今月廿一日橋爪御門晝番に罷出、酒に醉罷在、不都合成仕形有之、相番共鎮め候得共しづまり不申、土肥庄兵衛組江加番に候故、庄兵衛方江も致内達、庄兵衛儀御番所江廻り懸り之躰に而罷出、其内靜に成、晝番仕廻罷歸候處、氣分も滯、其後御番引。右等之趣御馬廻頭より御城代江相達、奉達御内聽にも候處、六月廿三日被仰出之趣。

五月廿一日橋爪御門於御番所、不都合成仕形達御聽、病氣等に而取上り不都合成儀有之とは品も違、專不愼故、大切之御番所に而右之仕形重々不屆被思召候。依之急度蟄居被仰付候。

右之通横山大和守殿土肥庄兵衛江被仰渡候處、又兵衛滯御番引中に付、又兵衛宅江庄兵衛并御用番小堀左兵衛同道に而罷越、申渡之。

六月廿七日。老臣前田土佐守月番並に加判の職を免ぜらる。

〔袖裏雜記〕

御官名は宰相

前田土佐守儀、此度月番幷加判指免候間、是以後は朔望佳節迄登城、平日不及出勤候。家柄にも候間、追而者存寄之趣も有之候間、此段土佐守ゟ可被申聞候。右被申渡候以後、村井主膳ゟも此趣可被申聞置候、以上。

六月廿七日　　　御官名 御判

横山大和守殿

本多安房守殿

前田對馬守殿

奥村助右衛門殿

右七月九日晝到來に付、御用番安房守宅ゟ大和守等參出之儀、以紙面申達、同夕各拜戴。翌日不時出座之上、土佐守ゟも江戸表より被仰下候御用之儀御座候條、追付越後屋敷ゟ御出可被成旨紙面遣之。出座之上右御親翰拜戴申談、主膳ゟも出仕之事紙面遣候處、當病に付御親翰寫、對馬守御宅ゟ持參拜戴申談。御家老中ゟ者口達に而申談。

〔前田直躬內密手記〕

七月十日。前田土佐守その職を免ぜられたることを前田宗辰の侍臣に告ぐ。

私儀、今日月番并加判之御用被指除候。行當迷惑仕候。佐渡守樣より兼々段々御懇之趣ども、難有仕合可申上樣も無御座候。去年以來存寄之品も申上置候所、只今加樣に罷成候上、御仕置方等一向不承儀に候へば、如何樣に奉存候ても其詮も無之候。自然非常之御用等之儀有之節は、如何樣にも相勤申度內存に御座候間、此段御自分迄申遣候。且又此度御親翰之趣、佐渡守樣不被聞召儀も可有之哉と寫置候に付、寫候而御自分まで相達申候。事之御次手も御座候はゞ、宜御達御內聽候樣仕度儀に御座候、以上。

佐渡守は前田宗長

御親翰は前田吉德のなり

七月十日　　前田土佐守

青木新兵衛樣

七月。金澤に風邪大に流行す。

〔大野木克寛日記〕

七月四日　晴

頃日風邪流行、家々なやまざる者一人もなし。其內まぬかるゝ者まれ也。十日程平臥、其後本復。享保十八年ごろい初秋如此と人口に在り。

八月廿五日。加藤清左衛門、前田利常の日光東照宮に献納せる燈籠磨直監督の任に當れるを以て賞賜せらる。

本文は八月十九日日光東照宮の修繕成り九月六日正遷宮を行はんとするを以てなり

〔政隣記〕

八月廿五日日光山ゟ、承應二年微妙公御献納之御燈籠、今度磨直被仰付候に付、先達而爲見分御步横目被遣候。其後與力加藤清左衛門被遣之、罷歸、白銀五枚被下之候。右清左衛門於日光、御先代御献上之三具足繪圖申付、六枚差上申候處、金澤御書物奉行ゟ可差遣旨被仰出候。右繪圖指添在之候紙面之寫左之通。

力士附御三具足御銘書

中御香爐に、

奉献鍮香爐

下野國日光山

大猷院殿　尊前

承應二年四月廿日

加賀中納言菅原利常

左右御燈籠に、

奉献鍮燈籠

下野國日光山

大猷院殿　尊前

承應二年四月廿日　　加賀中納言菅原利常

右御香爐一　御燈籠二

力士三躰共天下一御佛具屋　福岡吉兵衛　越後守德入作

唐金之御三具足御銘書

奉納銅香爐

日光山

大猷院殿　尊前

萬治二年十月廿日　　加賀中將菅原綱利

右御三具足之作書無御座候。

八月十八日

十一月十日。本鄕邸に於いて初めて猿廻に廐の祓を行はしむ。

〔政隣記〕

十月十日御馬段々煩躰候に付、御門外之馬遣、城所八十右衛門与申者申上候に付、猿廻し被召、今日於御廐祈禱仕。向後正・五・九月有之筈。只今迄於金澤者有之候得共、於江戸者今日

初而に候事。

十二月廿一日。前田重熙前髮除去の儀を行ふ。

〔重熙公御年譜〕

一、十一月廿五日但馬守樣御前髮御取被成度旨御屆之御書付、今朝聞番を以、御用番酒井雅樂頭殿へ御內談被成候處、夕方聞番被召呼、御勝手次第御願被成候樣御指圖有之由。

一、十二月二十日但馬守樣御前髮御取候儀、今日聞番を以御用番に御屆有之。外々よりは御願之由に候得ども、こなた樣には御先例を以御願不及、御屆迄に而相濟候由。

一、同二十一日但馬守樣今日御前髮被爲取候。依之干鯛一箱、御使御近習頭伊藤六郎左衞門を以被遣候。但馬守樣よりも干鯛一箱、御使御附物頭並九里治兵衞を以被上之。御廣式より右御祝御行器一荷・交御肴一折、御用達湯原平左衞門を以被上之。

但馬守樣御前髮御取、四時過御居間に被爲入御對顏之節、御のし三方配膳役磯松三郎左衞門持參上之、大槻內藏允御取合申上候。但右之節御次廻之平士は一統常服。右御祝之赤飯・御吸物・御酒・御取肴、御家老中・御近習頭於席々被下之。御用人・御臺所奉行は、御居間書院御勝手二の間に而頂戴之。

但馬守樣より白銀三枚宛、聞番後藤瀨兵衞、見習井上久左衞門・青木伊右衞門に、御用向骨折

本文は江戸にての記事なり主計頭は前田利幸

候由に而、御目六九里治兵衛を以被下之。

一、同二十二日但馬守様今日之御勤より騎馬御供相止。但御嫡之外は御前髪御取以後は成不申由之事。御登城之節御間之内へ只今迄は御附之者一人宛上り候へども、是以後者此茂不成由之事。

十二月廿六日。富山侯前田利隆卒去の報本郷邸に達す。

〔政隣記〕

十二月廿六日。出雲守様利隆君於富山御滯之旨申來。當廿三日富山江御使御大小將山森市右衞門被遣、廿四日御大切之旨申來。依之御醫師松浦昌順老御願之通被仰渡、爲御看病主計頭様富山江御越被成度儀も御願之通被仰出。主計頭様今廿六日爲御暇乞御出。就夫俄に相公様にも主計頭様江御見廻。其後西尾隼人御使者に被遣、物頭一人宛爲御附使者被遣置。出雲守様江宿次以御奉書御達も有之。然處當廿日辰之上刻御卒去之由告來。依之鳴物三日遠慮被仰渡。金澤に而も鳴物等三日遠慮也。

御法號　大龍院殿。御歳五十五。

廿八日主計頭様江上使御奏者番秋元攝津守殿を以、御香奠御拜領。依之從此方様も、爲御禮御老中方江聞番御使に被遣之。

延享二年

正月四日。前田治脩金澤城に生る。

〔政隣記〕

正月四日金澤二之御丸於御廣式若子樣御出生。江戶に者同月十七日告來、御名時次郞殿与被稱。

正月廿三日。前田吉德その子重熈と共に歸國するの許可を幕府に請ふ。

〔重熈公御年譜〕

一、十二月二十八日來春御歸國之節、但馬守樣御同道被遊度之趣、當二十五日御先手久世忠右衞門殿を以、御用番松平左近將監殿へ御內意被仰込候處、同二十六日夕方聞番被召呼、後藤瀨兵衞參上之處、御付札を以御勝手次第御願被成候樣申來候。

十二月は延享元年なり

一、正月廿三日但馬守樣、御歸國之節御同道被遊度旨御願書、今日御用番本多中務大輔殿に、小笠原縫殿介殿を以被差上。

正月廿四日。前田吉德の子喜六郞、家中大音氏を相續す。

〔御年表〕

是月廿四日喜六郎君、故大音主馬厚岡跡御相續、主馬遺領四千三百石内三百石與力知を領せらる。但喜六郎後見、御馬廻頭原九左衛門元慶幷に寄合加藤圖書・御馬廻組黑坂左兵衛仰付らる。此兩人は大音家筋目有に依てなり。

〔護國公御年譜〕

四月朔日金澤に而喜六郎殿大音家は御移り。御押騎馬遠藤紋太夫相勤候。

二月十六日。前田利和射初・乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

二月十六日勢之佐殿御射初、御射手澤村喜左衛門御指南申上候。且又御乘馬初に付、御馬浦山新村鴾毛、御使御近習頭鷹栖左門を以被進之、左門のしめ着用勤之。御直答、御手自御のし左門は被下之。御馬役武村仁右衛門御馬に副罷越、御繻上之。喜左衛門は絹二疋、仁右衛門は染物二反、御目錄を以被下之。

二月廿六日。富山侯前田利幸家督を相續したるを以て本鄉邸に來りて之を謝す。

〔政隣記〕

一、同年二月十三日主計頭樣、御用番酒井雅樂頭殿於御宅、御家督御相續被仰渡、御名御願之通出雲守樣与御改。

一、同年同月廿六日御家督之御禮被仰上、御家老四人御目見。此方樣江も被爲入、御太刀馬代・二種・千疋御持參之趣を以、先達而御使者持參、於御居間書院御對顏之節、御太刀披露、三輪藤兵衞御持參与唱之、御挨拶有之。引之、御のし出、出雲守樣御長袴、御前御のしめ・御半袴、幷披露役者のしめ・半袴、其外ふくさ小袖・布上下。

三月五日。回國の遊行上人金澤玉泉寺より出發す。

〔護國公御年譜〕

一、三月五日、去年十一月十四日より玉泉寺に逗留有之候同國遊行上人、金澤發足也。

三月十一日。前田重靖金澤を發し廿三日江戸に着す。

〔政隣記〕

二月六日於江戸、當三月嘉三郎殿御出府之儀、御用番本多伯耆守殿江御屆書、以聞番被指出、三月十一日朝於金澤御發途、騎馬御供彌兵衞・多宮一人宛代々、御持筒二挺、御駕籠、歩御供者御抱守より四人に而二人宛、其外歩御供新番八人に而四人宛相勤之。御行列外逸角、御跡より彌四郎御供、御大小將より御供無之。廿二日御着府之筈に候處、川々滿水、廿三日晝江

戸御着、御上邸御廣式に被成御座、四月四日より御居宅に御移。

三月十五日。前田宗辰金澤を發し廿六日江戸に着す。

〔政隣記〕

三月廿六日。宗辰公金澤御發駕、今月十一日与被仰出候得共、雪有之御延引、十五日御發駕之處、千原崎川舟橋出水に而切れ、富山に御廻り、昨夜大宮驛御泊。今日蕨御中休迄、御近習頭鷹栖左門を以生干鯛一籠被進之。今朝五時過御中邸に御着。御附使者御近習頭福田新左衛門御白洲に罷出、九時過御上邸に被爲入。御首尾去々年之通。御着御祝儀鯛一折、御近習頭竹田金右衛門を以被進之。但御老中方御廻勤有之。

〔御年表〕

是月十五日宗辰公金澤御發駕、廿六日御着府、廿八日上使酒井雅樂頭殿参出、四月朔日御登城。

〔上田舊記〕

一、延享二年三月大應院様御出府之刻洪水仕、新川郡千原崎假舟橋切流申に付、高岡御泊り所より不時に富山御通に相成。俄なる儀に御座候間、富山驛馬等指支可申哉与、御扶持人大白石村又太郎・東海老坂村五兵衛帶刀に而富山に罷越、夫々御用相達可申旨被仰渡。彼地に

而右兩人列之儀御尋被成候はゞ、如何相答可申哉与、御郡奉行葭田六郎左衛門樣ゟ申上候處、御伺被成候得者、御徒小頭列与相答可申旨、飯田金右衛門樣を以被仰出候段、葭田六郎左衛門樣より被仰聞候に付、帶刀仕富山御役所ゟ罷出、御通御用相勤申候。

三月。郡方に於いて勸進をなし又は之を周旋するを禁ず。

〔司農典〕

一、御郡方諸勸進之儀、跡々より御停止之品に候處、近年次第に猥に相成、寺僧・社人其外遊藝之族迄も、村中ゟ立入令勸化、剰其所々表立候者を相賴、權柄を以銀・米等過分取候旨相聞候。都而諸勸化之儀者、百姓費之基に付、改作御法において從往古重き御停止に候處、件之趣不屆至極之儀沙汰之限に候。最以後諸勸進之族、村方ゟ立入候而も、不依多少に勸化に入申間敷候。尤被相賴取持等仕者於有之に者、急度越度に可申付候條、右之趣嚴重相心得、末々迄不相洩樣早速申渡、請書付可指出者也。

丑　三　月

寺西源太左衛門
山本長太夫
吉岡理太夫
小谷兵左衛門

行山傳左衛門
三輪淸左衛門
芝山三郎左衛門
橫山三郎兵衛

羽咋・鹿嶋御扶持人・十村中

四月朔日。前田宗辰江戸着府の後初めて登營す。

〔德川實紀〕

四月朔日、月次の朝會例のごとし。八講により西本願寺より使もて一種一荷を献す。松平加賀守吉德の子佐渡守宗辰はじめ參覲三人。

四月十六日。前田吉德就封の暇を受く。

〔政隣記〕

四月十六日御歸國御暇之上使松平右京大夫殿。從右大將樣上使松平能登守殿。御拜領物前々之通。

四月十八日。前田吉德登營して就封の辭見す。

〔政隣記〕

十八日御登城御禮、御手自御のし鮑等御拜領。前田大學・西尾隼人御目見等、都而前々御例御作法等之通。

同日相公樣御登城に付、宗辰公にも御登城被遊候。

四月十八日。前田重熙就國の暇を受く。

〔政隣記〕

四月十八日但馬守樣にも、昨日御老中方御連名之御奉書松平左京將監殿より、徒者を以被遣之。明十八日御用候條御登城被成候樣依被仰越候、則御登城之所、於御白書院御老中方御列座、御暇被仰渡、御卷物十御拜領、從右大將樣も御卷物五御拜領。於御同間御目見被仰上、御懇之上意有之。但御禮之御列、城主之次、無城主之上也。惣而城主に者、御暇之御禮之節上意有之御格与云々。

但馬守は前田重熙

〔政隣記〕

十九日。但馬守樣今般初而金澤に之御暇被仰出御同道被遊候に付御祝被成、初雪之御馬栗毛被進之。御目錄指添。御使御近習頭鷹栖左門爲率罷越、御手綱御仲間小頭より左門受取上之候處、御頂戴御直答。

四月廿一日。前田吉德及び重熙江戸を發す。

〔政隣記〕

四月廿一日江戸御發駕、御供揃六時過に而、同刻過大御門より御發駕、御作法前々之通。御家老御供前田大學并西尾隼人者、今度但馬守樣御同道御人數多に候故、御發駕并金澤御着之節迄御供、其外者一宿御跡より罷越候樣被仰出。御中邸・御下邸ゟ御立寄、但馬守樣に茂大御式臺より御發駕に而、御中屋敷・御下屋敷御立寄、御供揃等御前御同事。御泊等者、小驛に而指支候所者御別泊、不指支所者御同驛に御泊、御晝・御中休者折々御別、多分者御一所也。但馬守樣御供頭分者、御馬廻頭に而聞番後藤瀨兵衛、御附物頭並九里治兵衛、御抱守五人、(定番御馬廻組外新番也。)御側小將役四人、(組外新番也。)御小將役七人、(新番也。)并加人二人、(御馬廻組御表新番也、)御歩小頭一人、同橫目二人、御歩八人、(内一人御手廻支配兼。)御細工者一人、御膳方與力一人、御料理人三人、御居間方坊主五人、(内一人は勢之佐殿御居間方より加人。)惣御人高四百五十二人。内雇者百六十六人。外三人後藤瀨兵衛家來御跡より相越。外御附御歩一人御先ゟ御返し。一人御手廻支配兼役御歩、馬渡之御用。七疋御馬、内六疋御召、一疋御使馬。外に二疋瀨兵衛乘馬、四十五疋驛馬也。

一、御道中洪水、越後鍛冶屋敷に一日、糸魚川に二日御逗留、并松代ゟ茂御廻り有之。

一、今年御道中より、御先代之通新番二人之御供相止。於野間者右御先供之所ゟ、御歩之内

より引下り御供相勤候事。

一、但馬守様御道中御行列左之通。

足輕 足輕　御馬　御馬　御中間 御中間　手替 手替　沓籠　手替　御鐵炮　同　同　手替

御弓　同　同　手替　玉藥箱　手替　御矢箱　御馬柄六人　同六人

御具足櫃六人　御武具宰領　足輕二人並　合羽掛五荷　手替五人　押 押　御挾箱 御挾箱

手替 手替　御鑓 御鑓　手替 手替　御鑓　手替 手替　御竪傘　御臺傘　手替 手替　御刀筒 御刀筒

手替 手替　御長刀　手替　御步 御步　同 同　同 同　同 同　野間にても御步二三人御駕不離御供可仕候。　侍 侍

御駕　侍 侍　同 同　同 同　御手廻支配御步 御步小頭　御持鑓　手替　御手廻小頭代　足輕

御草履取 御草履取　御陸尺　手替　御馬上之時分者、御茶辨當之上に御乘物可有之候。其次次に御陸尺、何人並と無之打込罷越候。

御菅笠持　御嚢箱持荷　手替　荷御挾箱　手替　同　手替 手替 手替　御茶辨當 手替 御茶辨當添足輕

御提灯裁許
但御提灯燈候内此所　御馬　沓籠　御使馬　沓籠　手替　押押　歩御供

之者草履取　騎馬 九里治兵衛　騎馬 後藤瀨兵衛　若黨　鑓　挾箱

合羽掛　五荷　手替五人　押押

但御附之新番何も鑓爲持候。依勤柄也。後藤瀨兵衛者對之挾箱・竪傘爲持候。御道中奉行者、相公様御道中奉行三輪藤兵衛・窪田主馬相兼之。

〔大野木克寛日記〕

廿一日　江戸　平尾御中休　蕨御中休　大宮泊。

廿二日　大宮　上尾　鴻巣　吹上御畫休　熊谷　深谷泊。

廿三日　深谷　本庄　倉ヶ野御畫休　板鼻　松枝泊。

廿四日　松枝　坂本御畫休　輕井澤　追分泊。

廿五日　追分　四ッ屋　海野　鼠宿　逆木泊。

廿六日　逆木　矢代　丹波嶋御晝休　善光寺　平出　室飯泊。
廿七日　室飯　野尻御晝休　關川　關山　荒井泊。
廿八日　荒井　中屋敷　長濱　名立　能生泊。
廿九・朔日・二日・三日朝迄御逗留。
五月三日　能生　糸魚川御晝　青海　境。
五月四日　境　舟見　三日市　魚津　滑川　東岩瀨泊。
五　日　東岩瀨　下村　小坂　高岡　今石動泊。
六　日　今石動　津幡　金澤御着城。

五月二日。前田宗辰駒込邸に於いて能を演ず。

〔政隣記〕
五月二日宗辰公新御殿ゟ預玄院樣・御新造樣御招請、御能有之。宗辰公西行櫻・融被遊候由申來。

五月六日。前田吉德及び重煕金澤に着す。

〔政隣記〕
五月六日朝五時御歸城。但一昨日御着之御圖りに候處、前記之通御逗留に付、今日御着也。

本文は前田重煕の事に係る

御例之通御馬に被爲召、御大式臺より被爲入。御先達若年寄前田外記。御直に御居間ゟ被爲入、御熨斗三方配膳役磯松三郎左衞門上之。都而御作法前々之通に付略之。嘉三郎殿御式臺鏡板迄御出迎、斐姬樣・健次郎殿者御居間書院御廊下迄御出迎。御歸國爲御禮江戸ゟ御使、今枝民部直道御目見、幷拜領物御例之通に而今日發足。但馬守樣に者九時前直に金谷御殿ゟ御着、暫有之御登城被成候樣被仰出、同半時頃松坂通御大式臺より御上り。御先立御近習頭に而、鷲之御杉戸・松之間通り、御居間書院二之間に御溜、御登城之段達御聽候處、御居間ゟ御出被成候樣、大槻内藏允を以被仰進。於御居間御對顏、御熨斗三方配膳役三郎左衞門上之、追付御奥ゟ御通り被成候。嘉三郎殿ゟ者於御居間書院、其外御子樣方に者於御居間、初而御對顏被成候。八時前最前之通御近習頭御先立等に而、金谷御殿へ御歸被成候。但御附物頭由比勘兵衞幷御側小將一人、御大式臺より御溜迄御往來共御供仕候。右御出・御歸之節、在合候頭分御白洲ゟ罷出候事。

〔謙德公年表〕

一、延享二乙丑五月六日護國公御歸藩に列而、初而本藩金谷離舘大應公御出府前被成御座候次之間に入居也。追付御居宅城外シルタレ坂之上奥村中務隣屋敷（但奥村故織部跡小源太同姓内匠跡相續に付屋敷上之。）奥村小源太上屋鋪に造作不成内、公之凶事に付、七月十五日金澤首途、同廿五日東武に着府也。

五月七日。前田吉德病に臥す。

〔政隣記〕

相公樣御旅中より御浮腫被成御座御不快に付、御着城翌七日池田玄眞・林玄潤・南保玄伯幷小宮山了意ゟ診仰付、玄潤御藥上之。御道中にては玄伯御藥上之候。久保壽安御道中以來毎日御鍼上之。右何も診被仰付。

五月九日。前田吉德病むを以て恒例の天德院參詣等を廢す。

〔大野木克寛日記〕

五月九日。晴、及夜陰月好、夜半折々曇。

今日御寺御參詣無之。江戸已來且御道中時氣に御當被遊、少々御不豫之御沙汰有之。尤南保玄伯・林玄順・池田玄眞、御鍼醫久保壽安等、御到着より毎日奉窺、御藥者江戸已來玄伯奉調進と云々。

但馬守樣天德院御拜參。寺社奉行青山將監豫參。已來者不及其儀、今日者初而御參詣に依也。是備後守樣、寶永六年松雲院樣御同道に而御國ゟ被爲入候時分之御例也と云々。尤未大聖寺御相續不被遊已前之儀也。

但馬守は前田重煕

五月十八日。是日以後前田吉德の病大に漸む。

〔政隣記〕

五月十八日中村正伯・佐々伯順・小宮山全柳診被仰付、其以後伯順ゟ毎日奉診。今日より玄潤人參一分入御藥上之。十九日七厘入、廿日一分入。同夜より御匕者定泊、玄眞・玄伯・伯順三人与して一人宛泊番勤之。廿一日より人參二分入。廿二日より玄眞御匕仕、人參三分入上之。是以後玄眞定泊、玄潤者玄伯・伯順に加り一人宛代々泊。壽安者毎日御針之處、十八日より毎日兩度宛御針仕。

廿五日能勢玄達幷大和守醫岩脇碩庵、安房守醫原田玄格、町醫小林意仙・奥田宗信ゟ診被仰付、今日より玄眞人參五分入、御藥上之。廿六日夕方より三分入、廿七日は二分入上之。

廿七日より伯順御匕、人參不入上之。外にキンキ順氣丸上之。今夜より伯順定泊等如前。廿八日より、玄眞・玄潤・玄伯・正伯・玄達・全柳六人として二人宛晝夜相詰。

一、今日江戶表ゟ以早飛脚、大高東元早速參候樣、大槻內藏允・遠田勘右衞門より青木新兵衞迄申遣。

一、今日年寄中より京都詰人ゟ早飛脚を以、在京之醫師之內山脇道作・生駒玄說・辻祐安三人之內、宜者一人罷越候樣可致旨申遣。

廿八日夜前より、毎朝夕年寄中御家老役一人宛、伺御機嫌之趣に而罷出、久保壽安今夜より

定泊。

廿九日晝より、小宮山了意指圖に而同仝柳御匕仕、人參入一分五厘御藥上之。依之仝柳定泊等如前。

晦日宗辰公へ御容躰被仰進候。御使御表小將神保權五郎へ、内藏允・助右衞門取計に而申渡、御目六を以白銀十枚、御内々よりも同斷拜領。今夜早打に而發出。

同日諸大夫大和守・安房守・土佐守・對馬守より温飩一組・御肴上之。

六月朔日奥村助右衞門・村井主膳よりへい切杉重一組・鯛一籠上之。二日長九郎左衞門・奥村内記・前田大炊より、麪類杉重一組・鯛一籠上之。三日御家老本多賴母・横山藏人・前田大學・玉井市正・西尾隼人、若年寄前田外記より蕎麥切杉重一組・御肴一籠上之。十日諸大夫衆四人より、重而御肴幷杉重さへき上之。十一日助右衞門・主膳より御肴杉重・御菓子上之。御挨拶時々遠田勘右衞門等内罷出申述。

六月朔日出仕之面々へ年寄中被謁、御不快に付御出不被遊段、月番對馬守殿演述。依之伺御機嫌退出之事。

二日小林意仙再診、奥田宗安初而診被仰付。今日より五日まで毎日御針被仰付。

同夕小豆飯・御煮染・御肴、但馬守樣御持參被上之。

三日京都町醫辻法眼祐安到着、町宿に被指置。旅宿に而今日幷歸發之節者、弟子當地町醫渡邊道順相伴に而、二汁五菜御料理、御茶後菓子迄被下之。逗留之内は一汁五菜之御料理被下之。登城之度々旅中同道罷越候。御算用者幷右道順指副、大御式臺より罷上り、町同心出向、御大小將致誘引候而、虎之間ゟ通し、町奉行出挨拶。其後政所樣附物頭並服部五郎左衞門知る人に候故挨拶に出。夫より瀧之間に而年寄中挨拶、畢而於矢天井之間に池田玄眞・中村正伯御容躰申演候。以後御居間書院廊下迄五郎左衞門誘引、同所御廊下ゟ御近習頭出向有之、御居間書院ゟ通し置、追付遠田勘右衞門誘引に而、御前ゟ召診被仰付。相濟、重而御居間書院ゟ相通し、御醫師中不殘大槻内藏允も罷出、御容躰考之樣子承之。其節茶たばこ盆坊主給事に而出之。其後於瀧之間、年寄中御容躰等被承之、於矢天井之間玄眞相伴に而御菓子等被下之、町奉行を以醫按上之。左之通。

加州宰相大君。從孟夏至中夏連綿不瘥。小水短少腫脹漸甚。診其脉左微弦而无力。右似滑良帶數文。垣孫子謂是脾脹乎。靈樞有六腑之脹。此症頗是爲脾脹可哉。僕雖固辭無免。不得已投一方。

平胃散　加猪苓・澤寫・蘇葉・大服皮。

管見如斯、良工幸質。

辻法眼祐安謹識

四日辻祐安登城、加減平胃散一貼調合上之。但診等之御作法都而如昨日也。調合相見御近習頭。御藥者御三方に載之、配膳役持參、御近習頭指添上之。於御居間書院調合也。尤御醫師中も其席に出有之。御藥臺者坊主小頭、御藥等坊主持出。昨日之通祐安に、茶・たばこ盆坊主給事に而出之。此以後登城之度々同斷、於矢天井之間御菓子麪類之内等被下之、玄眞・正伯挨拶。

右調合之御藥者不被召上候。此間之通小宮山了意指圖に而、同仝柳調藥被召上之也。

一、祐安右調藥之外に、御臍に被爲張候得者御通じ有之藥之由に而、於矢天井之間認上之。御張方者能勢玄達承上之。

五日辻祐安登城、御藥一貼上之。

一、奥田宗傳致上京有之候處、町奉行より呼に遣し、今日歸着診被仰付、御針上之。御療藥存寄無之旨申上候に付、此後不被爲召候。奥田宗安も、今日より診等不被仰付候。

同夕祐安に診被仰付候處、御大切至極与奉存候由に而、御藥上候儀御斷申上候得共、强而調合申談、一貼調合上之。

同夜從宗辰公、相公樣御容躰爲御窺、御附御大小將御番頭並杉江助四郎被遣。當二日晝九時

江戸發、今夜九時到着、直に御次ゟ出、御口上御近習頭三輪藤兵衛取次、達御聽候處、助四郎ゟ御意被仰出、則申聞候。御進物之品者、

龍眼肉一箱　糟漬蚫一桶　御目錄

右御品者、いまだ到來不仕候。

但馬守樣初御口上、幷年寄中・御家老中・若年寄中・遠田勘右衛門・大槻内藏允・御近習頭中・御醫師ゟも御意之趣有之。翌六日夫々勤之。但、助四郎江戸表發出前、判金一枚・御羽織一被下之。重而宗辰公御前ゟ被召出、判金二枚・御帷子被下之。

六日八時前大槻内藏允誘引に而、助四郎儀御前ゟ被召出、預玄院樣・佐渡守樣初ゟ、先御替も無御座今日之御容躰与御意有之。退候處、於御次遠田勘右衛門を以御返答被仰出、助四郎ゟ判金一枚・御羽織一被下之。夕方發、又早打に而江戸ゟ歸。

一、大高東元江戸ゟ呼に被遣候處、今晝着直に診被仰付候處、御重き御病體と申上、存寄候者クカウ圓と中丸藥調合仕、今夜より上之。煎湯を指上候樣御意に付、ソウケン湯に人參一分入上之。煎湯に指上候御藥いまだに煮付不申候得共、御意に付先右之御藥指上候由申聞候事。

七日辻祐安今日御暇被下之候に付、旅宿ゟ御使御使番和田源左衛門を以、白銀百五十枚・八講布五疋・串海鼠一籠被下之。祐安翌八日發足歸京。

一、宗辰公江、相公樣大高東元御藥被召上候以後之御容躰爲可申上、御使御馬廻組恒川清左衞門江、今日月番對馬守殿被申渡、白銀十枚拜領、翌八日早打に而發出。

一、相公樣御所勞伺、頭分以上月番御宅江常服に而相勤。

一、今日東元御食可被爲進御爲とて、大安丸と申丸藥上之。夜より御煎湯に者人參三分入上之。壽安御鍼今日より度々上之。

八日朝東元振出粉藥上之、御煎湯も加減、人參不入上之。此後又人參を加、又去、樣々に仕上、暫時宛に色々御藥轉方仕上之。

同夜九時、從宗辰公御使御馬廻組御抱守加人伊澤兵衞被遣。當五日曉天江戸發、右刻限着。御進物有之候得共不致到着。相公樣就御所勞消除被爲行候由に而、御札被上之。山崎次郎兵衞御手傳仕之由。津兵衞發出前白銀十枚、御內々金十兩被下之候由。但馬守樣奉初御口上、并年寄中江も御意有之。御答以後津兵衞江白銀十枚被下之、翌九日晝過發出、江戸江歸。

十日從政所樣相公樣御見廻御使河內山仲太夫、當七日京發、今晝到着。

同日夕年寄中　御家老中等、不殘爲伺御機嫌登城。

十一日前月晦日發之神保權五郎、今月四日八時過江戸着、宗辰公奉初江之御使勤之、白銀五枚、從御新造樣御たばこ入御拜領。五日夕方江戸發、千曲犀川滿水、福島に七日夜より九日

朝迄逗留、今朝五時過歸着。

一、今日江戸造酒丞樣・出雲守樣より、爲御見廻早打御使物頭到着。

一、同夜大和守、誘引大槻内藏允に而御居間江被召出。

十二日曉但馬守樣・嘉三郎殿御前江御出、尤是迄每日度々御兩樣共御出也。

同日朝五時前大和守・安房守・對馬守・助右衞門一所に、遠田勘右衞門誘引に而御居間被召出。

〔大野木克寛日記〕

五月二十日。曇晩雨。

一昨日佐々伯順・中村正伯・小宮山全柳被爲召、御容躰御窺被仰付候由。御藥者、最前之通玄順上之候由御沙汰也。

廿三日。快晴。

今日四時過より出仕、八時退出。昨晩より池田玄眞御藥調進、人參三分充加之調進之由。最前人參五りん、其後七厘、其後二分に相增候處、又昨日夜中より右之通三分に相增候由。御表向御沙汰一向に無之。然共御同篇に而已被成御座候故、年寄中より佐渡守樣江密々中飛脚を以注進有之候由申ならし候。

廿五日。快晴。

一昨日は十八日なり

今日町醫師原田玄覺・奥田宗眞、大和守手醫者岩脇碩安、町醫小林意仙被爲召、御寛被仰付候。各內藏允以紙面申遣所也。右之內玄覺者安房守手醫師之由。及晚端氏入來。今日より御藥人參五分宛に成、三帖被召上候由、御沙汰之旨申聞候。

廿七日。折々雨降。

今日予四時過出仕、八時退出。

一昨廿五日より御同篇之內御快方に而、御浮腫も少御減少、御小水も御快通被遊、御食も被召上候御樣子に候處、昨夜より又御指引も被成御座、夜中も御寢不被遊、夫故惣体御疲も被爲見得候由御沙汰、各惱丹府斷腸。雖然御表向一向密々之御儀故難及口外、諸寺諸山被行御祈禱、或者私に一七日御祈禱相勤輩も有之。所謂明王院等也。昨日佐渡守樣ゟ從但馬守樣、中飛脚を以御書被進。是頃日之御樣子被仰上候。尤老中よりよりも及言上ㇾ云々。

今日より佐々伯順御藥可被召上旨被仰出、御藥奉調進候ㇾ云々。

昨日土佐守樣爲窺御機嫌登城、是加判御免後者每日登城無之に依也。今日九郎左衞門・內記・大炊登城。是又常に登城無之故、右之通也。此面々登城者昨今初而之事歟。

今日在江戶御手醫者大高東元可被爲召旨に而、早飛脚揚鞭ㇾ云々。

廿八日。晴天、夜中雨降雷鳴。

昨夜寺社奉行菊池武敬（今月御用番）因召登城、月番大和守言達之趣。依御病惱不日に御平愈之御祈之儀申渡之。所謂白山・石動山・倶利伽羅也。武敬下宿之後、件之三所に早飛脚を以相達と云々。（御祈禱方は御城代奉仕之事也。大和守月番等主附旁奉仕と云々。）御同篇之御沙汰と云々。

廿九日。朝曇、晝後晴、及晩又曇。

今日四時過出仕、八時過退出。

公邊御沙汰御同篇に被成御座候に付、今日より小宮山了意御良藥指上候。人參一分五厘加味と云々。伯順最前御窺被仰付候節は、大補之御藥に而無之候はで成間敷歟と申上候由。然處一昨日より御藥指上候節者、人參者一向加味不仕候由也。

一昨日於老中席、政所樣御附屬之輩被召集、於京都良醫之名有之面々撰定、其大体三人被載紙面、此内早々參向候樣に、京都河原町御屋敷當時在京役人長谷川大學等に、早飛脚を以被相達と云々。

右御容躰爲言上、早飛脚を以江戸表に注進有之候　云々。

從政所樣、御樣体御見舞中飛脚今到着と云々。

晦日。曙天甚雨、卯頃止、晝後晴。

明朔日御門方指引可有之歟と、四時過より出仕、八時過退出。

公邊御同篇、昨廿九日より今朝迄御小水五勺御通じ被遊候由。今朝より晝過頃迄二勺計御通。赤豆飯廿三夕被召上候由御沙汰也。昨今御祈禱勤行之神社佛閣、各御目錄被下之。菊池十六郎に御用人相渡、於十六郎宅渡之と云々。

佐那武大明神・能州一宮・長福院、御祈禱令勤行と云々。

六月朔日。折々雨。

今日出仕如例。御帳前予・御横目津田五郎兵衞・村田吉左衞門出座、五半時御帳引之。四半時出仕之輩御座間列居、老中出座。頃日御滯之御容体奉承知、乍恐奉窺御機嫌度旨座上之人持津田玄蕃惣代に言達之。月番對馬守挨拶有之、各退出。此儀先達而右之通奉窺御機嫌候樣、御横目より以紙面、今日出仕之人々相揃候上傳達之。且病氣幼少に而登城無之面々には、月番對馬守邸以使者可奉窺御機嫌候。此段向寄より可傳達旨、是亦御横目申達。右之通に付、御奏者番も列居、井口五郎左衞門本役御持頭御横目兼帶も列居、奉窺御機嫌所也。

三御門當番足輕大將、且御廣式等に而御用有之出仕無之分者、其通に見捨に可仕旨、對州御横目迄言達之。今日御容体奉伺候者、月次出仕之頭分以上迄也。今日迄窺御機嫌御沙汰無之は、江戸表御屆等未無之故、先表向御沙汰無之分。然共頃日段々江戸・京都にも御飛脚參候に付、先今日出仕之輩迄右之通と云々。

昨夜表御小將神保權五郎、早追御使東武ゟ揚鞭。是頃日御病惱之御樣子、佐渡守樣奉初上々樣御聞被遊、御氣遣に可被思召候條、頃日之御樣子委細申上候樣に被思召、御近習之者を以被仰進候御沙汰也。昨夕權五郎首途前、早飛脚之注進も有之候。

昨夜より今朝迄御小水七勺餘御通じ被遊候。御飯八十目被召上候御沙汰也。

今日者惣体御快方に被成御座候。御小水晝頃迄一合計御通被遊候。御飯も十九匁被召上候。

但赤豆飯之由に候。

昨日波着寺御祈禱相勤、今日結願。仍而御札・守・卷數上之。寺社御用番青山將監持參之、大槻內藏允を以上之候。

春日神主高井周防守・卯辰八幡神主厚見紀伊・卯辰永久寺、各御祈禱を奉修度旨夫々相願候趣、內藏允迄將監及示談候處、夫々可申渡旨申候に付、願之通勤行可仕旨、於將監室申渡之と云々。

二日。晴。

今日御同篇。夜中より今朝迄御飯九十目。但赤小豆御粥之由共申候。御小水二合二・三勺御通被遊候由御沙汰に候。

今日造酒丞樣御家老山崎權丞登城、月番對馬守對談。是頃日御病惱之儀大聖寺へ相聞、御容

子江戸江為可致註進、參上之由也。今日予在宿。
三日。折々曇。
四時出仕、八時退出。
京都醫師辻祐安法眼今日到着。則京都より指添罷越候御算用者同道、九時過登城、表御式臺より罷出。取次御小將出迎、虎ノ間上ノ間江相通着座。町奉行戸田與市郎罷出挨拶。京都に而政所樣御所江も參上候者之由。因之政所樣御附物頭服部五郎左衛門も罷出挨拶之上、取次御小將上月四郎左衛門誘引に而、瀧之間江相通、老中各對話。夫より御座之間江罷通御目見、御容子奉窺退出。於御居間書院但馬守樣御容子御聽被成候。尤御近習之輩御醫師群居。御重病之旨申上候由。尤醫案之趣御醫師中と對談有之。矢天井ノ間江退出、御餅菓子出之。池田玄巽相伴。都而かよひ御徒勤之。奥に而坊主かよひ之樣子。右御菓子相濟、其後退出仕候由に候。京都江老中より被相達候醫師、山脇道作・生駒某・辻祐安三人之由に候。山脇・生駒は禁裏御用、天脈も伺候に付、御所司江屆無之候へ者他國江難罷越候。左候へ者遲滯に罷越候故、先祐安申談下向候由に申候。此外に加川多仲と申大儒、大醫之由に候へども、異風成療藥用申候由に付、是者被指除候由。但右多仲、京都・大坂近國當時之名醫之由申慣候。
昨晩町醫師奥田宗安宗傳弟被為召、御鍼治被仰付候處、御快被思召、其上御小水も四勺計御通

被遊候由。今朝も罷出候由に御座候。宗安兄宗傳可被召候處、先月參宮、夫より上京、大坂邊へも罷越候由に付、段々召に被遣候由申慣候。
昨晩小林意仙も被召候由。先日罷出候已後初而之由に候。
能州一之宮神主櫻井監物、御祈禱之御札・御守上之候。
同瀧谷日蓮宗妙成寺、千卷ダラニ御札上之候。
小松天神梅林院、御札・御守上之候。各寺社奉行御用番將監持參仕、大槻內藏允を以上之候。
四日。折々雨、晝後止、及晩又雨降。
今日祐安四時罷出候樣に被仰出候處、晩程罷出候樣に重而被仰出、其段御用番對州より被相達候由。
出雲守樣御家老村隼人登城。是御容体奉承知、江戸へ注進可仕ために罷越所也。月番對馬守對談之由也。
今日四時過登城、九時過退出。
五日。折々雨。
昨日及晩祐安登城、御容体奉窺候已後、御藥調進、方組は平胃散之由に候。奥田宗傳も罷歸、則罷出奉窺候由。畢竟少々之了簡者雖有之、衆醫御重病之旨申之、群臣惱丹府所也。今日御

容体、御同篇被成御座候御沙汰也。四時過祐安罷出相窺。其後於矢天井間御菓子被下、相伴池田玄眞。昨晩も麵類被下候、相伴中村正伯罷出候由。

明六日爲窺御機嫌、月番對馬守邸ゟ、頭分以上可參上旨被相觸所也。

但、常服に候へども、布上下着可然旨申人々も有之、其心得之輩も有之候。

右御機嫌伺、當病幼少之面々は、使者を以可相窺御機嫌旨、被相裁所也。

右之通布上下可然と申儀に候處、前々之通可爲常服と御横目より月番ゟも相達候に付、一統常服に罷出候。

今日予四時登城、八時過退出。

六日。朝甚雨、晝止、折々雨。

今日之御容体御同篇に被成御座候。御飯十七匁、御小水五勺御通被遊候由。

今日朝六時より四半時迄、右之通被成御座候由。

今日下拙四時過對馬守殿ゟ參上。夫より登城、右御様体奉承知、追付退出。

大高東元召に被遣候處、于今遲滞。其子細者、其身駕籠乘候事不自由に付、驛馬に駕候故遅く成候よし取沙汰也。

右之通申慣候處、當二日被仰渡、同日未刻發出、早打尤乘用に而今日午後刻到着、直に御城

ゟ罷出、早速奉窺御藥上之候。

杉江助四郎今日御容体書等、夫々於御城受取候内東元到着。猶又東元伺存寄、御容体書受取、未後刻頃江戸ゟ罷歸候。尤早打に而罷越候。

七日。朝雨晝時止。

今日四時出仕、八時退出。

御容体御同篇之内、少御快方に被成御座候旨也。昨日東元御藥莊滅湯上之候。此外なつめにふくべの中の種に付る申皮と合、麥門冬をせんじ出し、是を以御呑汁に仕上之候處、御小用も御通、御大用も御通被遊候。右兩品今晝頃迄指上、又夫より外之御煎藥上之候由。補劑者一向只今者難指上候由申候。御飯も廿匁被召上候由に候。

從佐渡守樣御祈願、石動山・白山・倶利伽羅三所ゟ、二夜三日之御祈禱被仰付候旨、月番對馬守、寺社奉行御用番將監ゟ言達之。則夫々ゟ早飛脚を以申遣す。

越中岩峅寺・芦峅寺に而も、御祈禱勤行之由に候。

辻祐安御暇之儀奉願、最早御用も無御座に付、今日御使番和田源左衛門を以、願之通御暇被下候。因之白銀百五十枚・白布五疋・くしこ一籠被下之候。

佐渡守樣ゟ早追爲御使、御馬廻恒川清左衛門被仰渡、明八日發足之由、右清左衛門申聞之候。

八日。折々雨。
今日四時過登城、九頃退出。於御城布上下着用、天德院拜參、夫より令歸宿畢。昨夜中御小水度々御通被遊候由。今朝に至り御小水四勺御通被遊候由。御食氷餅七つ歟被召上候。今朝より大安丸と申御丸藥、東元上之候御沙汰に候。
出雲守樣御家老村隼人登城、造酒丞樣御家老一色五左衛門登城。右月番對馬守に謁、各御樣体伺也。
九日。折々曇。
今日四時出仕、八時退出。
御容体御同篇、昨今御疲も被爲見得候由、御食わり御粥、又氷餅被召上候。
十日。天陰。
今日予不快、不能登城在宿。御同篇之御沙汰也。
十一日。晴、漸暑氣催。
御容体御同篇之內、次第御食減少、御通も少く、御疲之御樣子密々御沙汰、只惱丹府之外無之。
從造酒丞樣御見舞御使者木村九左衛門、御物頭知行四百石と云。早打に而去六日江戶出足、今日到着、則

神護寺は城内東照宮の社僧

登城、予執奏之。其式如恒例、御返答予申遣す。但前々者御近習頭を以、御口上應候而可申遣被仰出候得共、今日月番對州被申聞、則及示談申遣す。

從出雲守樣同御使者堀江權馬令登城。但相公樣ゟ之御口上者無之、但馬守樣ゟ迄御使者。仍而御奏者不及執奏、但馬守樣御附屬由比勘兵衞及取次等、右兩御使者ゟ月番對馬守及對話、御容体書等相渡、御使者退出。

今日東照宮神護寺御祈禱之御札・卷數上之、長暢・大槻內藏允を以執奏之。

今日予六時半時出仕、八半時過退出。

六月十一日。能登鳳至・珠洲二郡に於ける職人の工料を定む。

〔郡方古例集〕

覺

一、一匁四分　家大工　　一、二匁五分　舟大工

一、一匁一分　木挽　　一、一匁一分　桶師并屋根葺

一、一匁一分　檜物屋　　一、一匁一分　ぬしや

一、一匁　かべぬり　　一、二匁　石切

右珠洲・鳳至兩御郡諸職人手間料銀、今般相改書上申候間、右之通被仰付可被下候。尤賄之外

何によらず、少茂取遣不仕候樣に仕度奉存候。爲其書付を以申上候、以上。

延享二年六月十一日

大澤村 內記
粟藏村 彥丞
鹿野村 恒方
中居村 三右衞門
馬場村 喜右衞門
折戶村 次右衞門
鵜川村 六藏
走出村 加右衞門
稻舟村 藤太

不破忠太夫殿
松崎少左衞門殿

六月十二日。前田吉德金澤城に卒す。

〔大野木克寬日記〕
六月十二日。折々曇、夜半甚雨。

相公樣御病痾御大切之御樣子に付、今日申刻人持頭分惣登城可奉窺御機嫌旨、俄に被相觸所也。

今日予四時過登城、七半頃歸宿。

御横目津田五郎兵衞對州ゟ申達、追付老中出席、月番對馬守演述之趣。

相公樣御氣色不被爲叶御療養、今十二日未刻御逝去被遊候。御存命之內御前ゟ拙者共被召出、不相替佐渡守樣ゟ急度相勤候樣に御意に候間、可被得其意候。

右之御樣子組支配之面々ゟも可申達事。右之趣奉承知、群臣失聲。對馬守演述訖而老中退座。

〔政隣記〕

一、左之通表向頭分以上ゟ御觸有之。

相公樣御氣色御指重り被成、御大切之御樣子候條、今日七時登城可被伺御機嫌候、以上。

六月十二日　　前田對馬守

――――殿

右之御樣子、諸組ゟも頭々より相觸之。

一、右御樣子に付、今日宗辰公ゟ御案內之御使早打御大小將成田幸右衞門、今晝頃從御城直に發出。白銀十枚拜領。

右に付御醫師御願も可被成哉と、年寄中より申上候御使御大小將村田判太左衛門、同比過右同斷。
同日未之刻相公樣御逝去、御享年五十六。但今曉寅之上刻御逝去に候得共、江戶表之御首尾御都合有之に付、御隱密に而夕七半時過御披め有之。
一、今日登城之頭分以上ゐ、年寄中列座、月番對馬守殿左之趣御申演。
相公樣御氣色不被爲叶御療養、今十二日未ノ刻御逝去被遊候。御存命之內御前ゐ拙者共被召出、不相替佐渡守樣ゐ急度相勤候樣御意に候間、可被得其意候。右之御樣子、組・支配之面々ゐ茂可被申聞事。

六　月

一、今日八時大和守・安房守・對馬守・助右衛門御居間ゐ被出、相濟、土佐守・長九郎左衛門・奧村內記・前田大炊罷出、相濟、本多賴母・橫山藏人・前田大學・玉井市正、若年寄前田外記罷出。誘引遠田勘右衛門幷當番御近習頭伊藤六郎左衛門。
左之通御用番對馬守殿より諸頭ゐ夫々御觸有之。
相公樣御氣色不被爲叶御療養、今十二日未ノ刻御逝去被遊候段、幼少・病氣等に而登城無之面々ゐ者、向寄より早速可有傳達候事。

正智院は大聖寺侯前田利章

一、佐渡守様爲伺御機嫌、頭分以上之面々、今明日中御用番宅迄可有參出候。幼少・病氣等之面々者、以使者可申越事。

六月十二日

一、但馬守様御居殿、最前正智院様被爲在候御殿跡に被爲建筈に而、御歸城以後御近習御持弓頭丹羽澤右衛門奉に而、段々頃日迄に地形等出來懸り候處、御凶事に付相止之。

一、御逝去に付宗辰公江年寄中より言上之御使御使番和田源左衛門、并副使御馬廻組森十左衛門、今日八時過早打に而發出。從但馬守様右御様子宗辰公江被仰進候御使、御抱守安井半右衛門早打に而同刻發出。年寄中より政所様江右御様子御案内申上候御使、御馬廻組成田宇左衛門早打に而同刻過發出。

一、大正持御關所江物頭古屋傳右衛門、境御關所江割場奉行寺西五右衛門、足輕召連明日罷越候様、今夜被仰渡候。

一、御持方足輕町廻、此節之事に候間晴雨無構、晝夜繁々相廻候様、御用番被仰渡候事。

一、相公様御法號左之通。

護國院殿故參議正四位下行左近衛權中郎將佛鑑法性大居士

十三日御葬式御法事惣御奉行本多安房守殿、右諸事御用御近習御馬廻頭野村七兵衛・三浦左

京・同御持弓頭鷹栖左門可相勤旨、御用番對馬守殿昨夕被仰渡。

一、相公樣就御所勞、從宗辰公勢州へ御代參組外御次番中村四郎兵衞へ被仰渡、江戸より勢州へ早打に而罷越、直に今晝早打に而金澤へ着、御祓等遠田勘右衞門受取、坊主方へ相渡之。御存命に而御頂戴も被遊候得者、御容躰も伺、直に江戸表へ早打に而罷歸筈に候處、御凶事に付二・三日致休息歸候樣、遠田申談候事。

一、相公樣爲御見舞、從預玄院樣御附御用人、從御前樣御附用人役、櫻田・神田・廣尾御前樣方、左衞門樣・出雲守樣・造酒丞樣・高辻少納言殿・相模守樣より、今日より十五日迄に早打御使追々參着、御馳走方等如御例。

十四日御馬廻頭兼聞番後藤瀨兵衞へ、江戸表聞番方御用も多可有之候條、追付可罷越旨今日御用番被仰渡。十九日發、鑓一本上下十一人に而、馬者爲牽參候。

十七日成田幸右衞門朝六時過江戸着。依之御指重之儀、御用番本多中務大輔殿へ、聞番河地平左衞門御屆御使相勤。右に付御尋之宿繼御奉書、本多殿於御宅聞番御招御渡、申中刻發出、金澤へ廿一日巳上刻到着。

同日晝過御大切に被爲成候趣、聞番河地を以重而本多殿へ御屆有之。

十八日御先手久世忠左衞門殿を以、御醫師御願之儀、并宗辰公爲御看病御暇御願之儀、御用

番ゟ以御紙面被仰込。依之御願之通被仰出候者、早速御發駕可被遊旨仰出、御道中奉行御部屋附御小將頭村田牛助・同御先手宇野武兵衛ゟ被仰渡、御宿拵宿割相兼御大小將二人、御旅舘取次御大小將一人、今日申渡有之。御醫師御途中指添、御大小將赤井傳右衛門ゟ是又申渡有之。

同日晝頃宗辰公ゟ、本多殿より御剪紙を以御越被成候樣申來。追付被爲入候處、右御兩樣共御願之通被仰出候儀、幷相公樣御所勞爲御尋金澤ゟ上使、御使番興津帯刀殿を以被進物も有之候條、御指急御越候樣にと、御用番本多殿於御宅被仰述。御醫師者井上俊良老ゟ被仰渡候由も被仰聞。右に付爲御禮直に御老中方御勤、御上邸ゟ被爲入、御客方へ御對顔に而御暇乞被遊、追付御中邸ゟ御歸、右之趣金澤ゟ御案内早打御使成田幸右衛門ゟ押返被仰渡、白銀十枚拜領、追付發出之筈に候處、御逝去之儀相知れ御用無之。

一、右之趣に付明曉八時御發駕と被仰出候處、暮前和田源左衛門幷森十左衛門參着、十二日未刻御逝去之段、西尾内膳を以言上仕に付、御用番本多殿ゟ爲御屆青木新兵衛被遣之、聞番代堀平馬指添罷越候。

一、右大將樣よりも御所勞御尋、宿繼御奉書松平能登守殿ゟ聞番被召呼御渡、今日申之中刻發足。

一、御國ゟ之上使興津帶刀殿最早御發出之由に付、右御指留之御使御大小將村田判左衛門ゟ仰渡發出之處、戸田渡場に而御出合申、御口上申述御立歸之事。

一、御醫師井上俊良老に指添候赤井傳右衛門、旅裝束に而右俊良老御宅迄七時過罷越有之、追付御發足之躰に候處、御指留之御使御大小將中村次太夫右御宅ゟ罷越、俊良老御逢御口上申述、御發足相止、傳右衛門も歸候事。

一、宿割御小將を以早飛脚呼返之所、下鴻巣に而同夜七時出合、指留候に付翌晝歸候事。

一、十九日相公樣御所勞爲御見廻、從宗辰公早打御使御抱守加人大場三左衛門、十五日晝過江戸發、今朝六時參着。同斷早打御部屋御用御先手物頭武田杢左衛門、十七日晝九時前江戸發、廿日夕七時前到着、御用番御宅迄罷越、直に御城ゟ出、大槻・遠田ゟ御意之趣於波之御間御廊下申述、當番御近習頭ゟも御意之趣於同所申述。夫より金谷御殿ゟ罷出、但馬守樣等ゟ之御使相勤、暮前御返答承、直に從御城發、江戸ゟ歸。是御指重に付御見廻之御使也。

一、同日於江戸爲伺御機嫌、頭分以上竹之間に而御帳に付、尤常服之事。

一、村田判左衛門御用無之候間、相返候樣被仰出、江戸に而も骨折候に付、晒布二疋拜領。翌廿日發出歸、廿八日金澤着。

一、政所樣ゟ之早打御使森十左衛門ゟ被仰渡、京都より直に金澤ゟ歸候筈に而、今夜江戸發

出。和田源左衞門は今日發、金澤ゟ廿三日歸。
一、廿日上使御奏者番三浦志摩守殿を以、御香奠白銀五十枚御拜領。御玄關敷附迄宗辰公御迎送、於御大書院上意御拜聽、卽座に御請被仰上。尤御茶等出不申、其外御作法前々之通。
一、御凶事に付、佳節・朔望・廿八日共平日之通、不及布上下等着に旨、御留守居番申談之由、御横目より觸有之。
一、廿一日。前記十七日に有之通、宿次御奉書今日金澤到着に付、持參之宗辰公ゟ指上候指急御使御馬廻組津田左源太、今晝發。從右大將樣之宿次御奉書前記十八日之通に候處、廿二日四時過金澤到着。是又右同樣之御使御馬廻組里見次右衞門今日發出。
一、廿二日。江戶御式臺向、十八日より今日迄平詰。
一、廿五日。横山大和守・横山藏人・西尾隼人用意出來次第、江戶表ゟ致發出候樣、今日御用番前田對馬守殿被申渡、并執筆河崎吉左衞門罷越候樣被申渡。

〔續漸得雜記〕
一、護國院樣御逝去前二・三年以前之金澤流行歌のはやしに、ごん十六かや合点かやとうたひしが、延享二年江戶より御戾り後御落命被遊、御年則五十六に被爲成とは不思議也と、老人の咄也。

前田吉德行狀

若狹守は前田吉德
備後守は弟利章

〔前田御家雜錄〕

一、寶永年中於御上屋敷御能有之、備後守樣小督を御舞被遊、其小皷を若狹守樣被遊也。御相手に御細工人加藤勘左衞門被仰付候處に、勘左衞門申上候は、御兩君樣之御相手に被仰付候儀、身に餘り難有奉存候。併備後守樣之御能に心を寄候へば、若狹守樣之御皷の方疎畧に罷成申候。御皷之方へ心を寄候得者、御能之方疎畧に罷成申候。此儀迷惑に奉存旨御斷申上候處、若狹守樣達御聽被聞召屆、小督の御皷は被止、賴政の皷被遊、勘左衞門を御相手に被仰付候也。

本文は享保四年の事に係る
嗣君は前田吉德

〔淩新秘策〕

一、戸左衞門方に、ふがはりのほじろ、時鳥の聲を其儘に鳴候黒つぐみ、數年致所持候。何方より參候哉相尋候へば、嗣君より拜領仕旨申候。惣而禽獸之類、常に替候ふがはりなどは御嫌被遊、御側に不被爲置候。人に而候はゞ、かたわか又癩病などの樣成ものとの御意にて、戸左衞門に被下候由。戸左衞門性得異風者に而、髮月代を始め、衣類大小迄も常躰にて無之候。乍然近年小頭役被仰付候に付、某戲に申候は、嗣君思召之趣扨々難有御事共に候。台德院樣平生花を御數寄被遊候。或人寒牡丹を献上いたし候へば、一段見事成花と上意迄に而、

御花入れ御生けは不被遊与云事申傳候。同じ思召与存候。人にも其思召に候得ば、戸左衛門小頭役には不被仰付筈に候。又其所には思召も有之与相見候。別而難有事と存候旨申候へば、近頃之事承候とて、戸左衛門喜び笑申候。

〔咄隨筆〕

享保十年の仲夏隣家に作善事有之、能登屋吉兵衛宅父之忌。年頃むつまじき人々、亭の佛前に並居て各饗應あり。酒數篇の後折にふれたる咄二つ三つ云出せるうちに、座上の上宮寺西本願寺末寺の内。當住慶長咄し給ふは、今年國主吉治公御歸國の後、御鷹野に度々御出の內、或時誰とはしらず、武家方の子息にても有やらん、刀を帯し、女中など引連れ、町端野邊に毛氈敷き、御鷹野を遠々と見物してゐられしが、次第に御歸近付き、町端にて御拳ありしに、御鷹鳥を取組み、右人々の見物して居たる所へ來れり。女中を初め各わつと云て迯散りける時に、太守公中川式部殿を召して、あの見物仕る者を拂候へ、組名を尋るに不及よし御意にて、皆拂被申たりとかや。誠に難有御意、愚なる口には申がたく。下略。

〔續漸得雜記〕

一、若狹守樣与奉申時、御供揃之內青木新兵衛如何に候哉遲參、度々御尋之所いまだ參り不申段申上候へば、不揃候へば其段申上事濟申儀に候。誰揃不申与御尋候はゞ格別、人を指可

享保十九年江戸に於ける ることに係る

申上候事沙汰之限りに思召候。新兵衞儀は、幼少より御前之御心を能存候者により、麁末の事を申上候とて御叱之由。

〔護國公年譜〕

一、七月廿五日夜火事に付、東御門續より會所續之御長屋へ御人數揚候樣被仰出、何茂揚り申候。然處追而御横目坂野藏人申上候は、御意に付右御やねへ何茂揚申候。先年被仰出有之、瓦ぶきに被仰付候以後は、やねへ揚り不申筈に候。此段御自分迄物語仕置候由、御近習頭羽田傳左衞門迄申達候。則右之趣傳左衞門達御聽候處、成程先年左樣被仰出候。迚も瓦やねへ揚り候而は、働も成不申儀候。今夜は急に御出被遊候故、先年柳原殿火事之時分、東御門續長屋へ御人數揚候事を不圖思召寄、何茂揚候樣被仰出候。向後も不斗加樣に被仰出儀も可有之旨。右節は右被仰出置候故を可申上旨、何茂へ申談置候樣被仰出候。

〔大應公年表〕

一、宰相樣御凶事以後、前田信濃守殿御出於殿中、此間每度御席々に而、唯相公樣之御噂而已御座候。御健に御見え被成候處、急に御變事に御座候。寔に御貞實成御德儀御備り被成候御威風、又外に可有樣も無御座、天下之御餝にも被成御座候處、御老中方於御席も御噂御座候。

前後の文段を略す

本文は在江戸の前田宗辰に上りたるなり

六月十六日。前田土佐守、前田吉徳の病中に於ける大槻朝元の非違を彈劾す。

〔前田直躬内密手記〕

一、御病中之内内藏允仕形不届至極成儀共に御座候。晝夜相詰可申處、左樣之躰も無之、漸十日頃より泊りも仕候躰に御座候。加樣之御凶年に罷成候御樣子に候處、至て御輕き趣に申なし、此儀ハ小宮山了意・同仝柳・能勢玄達、此等申談候趣に相見え申候。林玄潤・久保壽安儀ハ筋能相見、存寄も申由に候へ共、中々行届不申由、兩人共潛に私に申聞候。御表向に而は、井口五郎左衞門幷河島吉左衞門・笠間源左衞門など申談候而、彼是取つくろひ申躰に相見え申候。三人共早速御役儀指除申度者共に御座候。五郎左衞門儀は、先御横目役御除も可被遊哉与存候。且年寄中にも、御病中には一際其處相糺可申儀共奉存候へ共、中々左樣之儀成工面に仕懸候故、少は不及是非儀も有之躰に見届申候。

六月十六日　　前田土佐守

六月十八日。徳川吉宗、前田吉徳の病を訪ふ爲使者を發せしむ。

〔徳川實紀〕

吉徳が子佐渡守宗辰云々は衍なり

六月十八日、松平加賀守吉徳封地にて重く煩ふよし聞えければ、使番興津帶刀忠通をつかはされ、糟漬鯛を賜ふ。また吉徳がこふにより、奥醫井上俊良方正治療のためにつかはさる。吉徳が子佐渡守宗辰は看侍のため暇賜はりてかしこに赴く。

〔徳川實紀〕

六月十九日、松平加賀守吉徳卒せしよし注進によて、使番興津帶刀忠通途よりかへる。

六月二十日。徳川吉宗、前田宗辰に香銀を贈りて吉徳の卒去を弔す。

〔徳川實紀〕

六月廿日、松平加賀守吉徳が子佐渡守宗辰がもとに、奏者番三浦志摩守明次もて香銀五十枚をたまふ。

六月廿六日。前田吉徳の葬儀を寶圓寺に行ひ、次いで野田山の塋域に移葬す。

〔政隣記〕

廿六日護國院樣御遺骸、今曉丑ノ上刻御城御出館、於寶圓寺御葬式相濟、直に野田山ニ御移。御廟所者松雲院樣御廟ニ向左之方也。

附記、本書に御葬式一卷御行列等之記無之、不能書寫。

丸の中に高字は高張、□は提灯なるべし

〔中川氏藏文書〕

延享二年六月廿六日護國院様御葬式御行列、従者を除きて四百人許りにて、寳閒寺より野田山に被爲入候事。

御先乘　前田土佐守　此間一丁計　㊅　㊅　足輕　足輕　足輕　足輕　足輕　此間十間計　□　□

大明松　足輕持參　手替　御歩小頭一人　山森惣太夫　本御持筒小頭　御鉄炮　同　同　御鉄炮　同　手替　手替　□

矢籠立　矢籠立　御弓足輕　御弓足輕　手替共　二人　二人　足輕小頭一人　玉藥箱一荷　手替　二人

矢箱一荷　手替　二人　御臺笠　手替　御立笠　押足輕　押足輕　竹内惣兵衛　藤田團左衛門　□　御徒

横目一人　此間十間計　□　御鷹三居　山崎八郎太夫　竹内八之丞　廣御伴五　□　御鷹方　一人

山崎七左衛門　佐田十郎左衛門　□　□　御挾箱　御挾箱　手替　手替　御徒　御徒　御徒　同　同　同　同　同　同　御徒小頭　一人　□　□　御鑓　御鑓

手替　御目印鑓　三人　手替　□　新番池田權丞　新番森權五郎　□
手替　手替　新番山田左次馬　新番菊田與左衛門
手替　新番小幡五兵衛　新番湯原七郎左衛門

御長刀　手替　□　御具足櫃　御武具方足輕　二人　御式具奉行　加須屋和齋門
同　菊田七太夫

御香爐　御香合共　三十人小頭四人　御花籠持參人御徒　御燈籠　手替　同　手替
遠田勘右衛門　御花籠持參人御徒　御燈籠　手替　同　手替

□　御順道之時分　表御小將四人　御幡足輕　二人　吉田彌五郎
役人二行に並　御幡足輕　小嶋喜兵衛
木作足輕　井田武右衛門

御幡　御茶湯方足輕　御幡　奧附御横目　御幡　上に同　三十人小頭
御幡　御鳥飼足輕　御幡　御湯殿方　御幡　上に同

□　御近習頭　□　御表小將原權左衛門　御表小將久世權三郎　□
御表小將野村豐助　御表小將三宅權左衛門

□　御位牌　奧御納戸奉行　山岸瀨太夫　吉田平右衛門　四角　□
森惣太夫　奧田次郎左衛門
磯野小膳　指添　石丸紋太夫
□　二口林右衛門　杉本彌左衛門　四角

出家十四人

◯　但御棺ノ御先　□　御　棺　御脇指　山村善左衛門　代
(高)　御跡御左右に並　□　　　御刀　三浦　左京　代

中村　新平　磯松次郎左衛門　大槻長太夫　□　鷹栖左門　(高)
御手木足輕　不破　丹下　脇田佐左衛門　□　野村七兵衛　(高)　御天蓋
神保權五郞　三十人方共　七十二人
兒玉彌藤次　遠田平太夫
不破市左衛門

三十人組者　四人御棺居四人弁　手替　御扶持方大工　御持鑓二人　手替共　□
大槻內藏允　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御床机二人　同

御表御小將　水越八郞衞門　御表小將橫目　武田半太夫　奥御步橫目　武藤淸衞門
御表御小將　永井淸太夫　御表小將橫目　竹田金左衛門　三十人頭　伊東戸衞門
御表御小將　淺加左兵衞

□　御大小將　同　□　御大小將御番頭　大久保四郞左衛門　此間三四間計
御大小將　同　御大小將御番頭　齋藤三左衛門
御大小將　同

□　御橫目　丹羽織部　御步橫目　曾田彌衞門　御居間方坊主小頭　御茶湯方
□　御橫目　村田吉衞門　御居間方小頭
御居間方坊主十三人

御唐油箱　手替二人　御小人頭　南保津左衛門　御小人小頭　御草履取　御六尺
御草履取

三十人組小頭　押足輕　古澤彌太夫　□
右同斷　押足輕　中村才衞門　□　御馬　口附御中間／御厩小頭一人　御馬奉行　笠間與三衞門

沓籠　手替　□　笠籠　五荷　□　押足輕　中西津左衞門
□　押足輕　石川庄右衞門　騎馬　本多賴母

御跡乘　横山大和守　此所御供ノ家來五人並　□　□　御步横目　押足輕　野村圓八
押足輕　松井宅衞門　此間一町計

御名代　前田對馬守　但□菊菱御紋五張

七月朔日。前田宗辰の本多安房守に與へて城中の留守を嚴にせしむるの書金澤に着す。

〔大應公年表〕

一、七月朔日原宗兵衞到着、以御親翰本多安房守政昌に被成下大意如左。（御文段省略。）

今般代替に茂候間、城中之儀念を入可被申付候。此節之儀故不致指圖候。猶々大和守儀此地に出府之事に候。其方一人役之儀、尙更嚴重に可被申付候。（但房州・和州前々より假御城代勤之なり。）此趣を以、御城中御番人曁諸役人に、安房守嚴重に可相勤之旨申渡す。

七月朔日。是日以降金澤寶圓寺に於いて前田吉德の中陰法會を執行す。

〔政隣記〕

七月朔日より三日迄二夜三日、於寶圓寺護國院樣御中陰御法事、御奉行等前記六月十三日之通。

委曲之儀本書に記無之、三ケ日江分け、御目見以上與力迄拜禮被仰付。惣而御作法等松雲院樣御葬式御法事御同例。

七月二日。前田宗辰の政務に關し老臣に諭したる書を披露す。

〔政隣記〕

七月二日。御先物頭兼御部屋御用人原宗兵衛江、從宗辰公金澤年寄中江之御使被仰付、六月廿一日江戸發、今日到着。年寄中江御意之趣、於越後屋敷申述、御一封相渡之。御仕置之儀等也と云々。大槻・遠田江も御意有之。

今日到着は昨日到着にてその披露を二日に於てなしなるべし

〔袖裏雜記〕

乙丑七月二日原宗兵衛、越後屋敷江罷出申述候御意之趣如左。但土佐守江者別に御口上有之。

此年寄より之御請は、七月四日宗兵衛迄申上る。

年寄中江可申聞趣、

先達而も被仰下候通、今般之儀無御了簡御仕合、兎角可被仰樣も無之候。各にも嘸難儀可被存と思召候。其表之儀、此砌諸事別而無油斷被申談候樣にと被思召候。依之原宗兵衞を以被仰下候由可申聞候。

九郎左衞門・內記・大炊へも御意之趣各より可被申聞候。

御親翰之寫

猶以村井主膳へも可被申聞候、以上。

今度代替之儀候間、彌以家中幷領分在々迄も、靜謐之樣萬端仕置可被入念候。當時何事も其方共次第に候間、先格之通嚴重可相守候、謹言。

六月廿日　少將　御印

橫山大和守殿
本多安房守殿
前田對馬守殿
奧村助右衞門殿
本多賴母殿
橫山藏人殿

前田大學殿
玉井市正殿
西尾隼人殿

七月二日。本日より江戶廣德寺に於いて前田吉德の中陰法會を執行す。

〔政隣記〕

七月二日・三日江戶於廣德寺も御中陰御法事有之、頭分以上白帷子長袴、平士者染帷子・半袴、御目見以上拜禮。宗辰公兩日共御參詣。惣奉行青木新兵衞、主附者御小將頭樋口次郎右衞門・御步頭大河原八郎左衞門、前月廿四日被仰渡。會所・割場・御作事三奉行にも同日主附被仰渡。且詰人、御用人・物頭・御近習御番頭（御步小頭等詰所指引相兼）御橫目・聞番一人宛、取次御小將五人、御香奠請取役御大小將二人、御給事役御小將七人、（此內に今度御使に參候御馬廻組里見治右衞門・津田左源太指加）、御篩方御用御大小將二人（中村治太夫・田尻善太夫）御右筆一人、御步小頭一人、御帳付與力四人、御步橫目二人、詰御步三人、給事御步六人、御香奠請取役下裁許御步一人、坊主小頭一人、坊主五人。

七月二日。前田重熙將に江戶に發向せんとするを以て道中奉行等を命ず。

〔政隣記〕

前田重煕の發駕は七月十五日に延べらる

七月二日。但馬守樣今月十三日御發駕、廿五日江戸御着。御道中奉行御小將頭平田外記、御附物頭並九里治兵衞、其外御附之人々に御供被仰渡。且御醫師大高東元・能勢甚達、御旅館取次御大小將二人、宿割御宿拵兼同二人、歩御供同四人、御右筆久能吉太夫に、夫々四日に被仰渡。

七月二日。前田宗辰の生母を淨珠院と稱せしむ。

〔大應公年表〕

一、七月二日御生母、淨珠院樣と稱候樣に被命旨、於金澤年寄中申渡す。是より前は御袋之方と御家中一統稱申候。

七月六日。前田宗辰使者を金澤に發して老臣に出府を命ず。

〔袖裏雜記〕

猶以今般出府之儀、暫間も可有之と先達申遣候。然所當時北國人少に候。家督御禮等相濟候はゞ、早速御暇をも可被下御樣子之旨承候之間、本多中務大輔殿へは未及內談候へども、急成事故舊格之通申遣候。何れも來月二日迄に此表に相揃可被申候。尤途中召連候人數隨分減少、諸事輕く被相心得尤に候、以上。

以飛札申達候。此度家督被仰出候者、早速御禮可被仰付御樣子候間、用意出來次第、來月二日迄に出府可有之候。爲其如此候、謹言。

七月六日　　　　少將宗辰印

横山大和守殿
前田對馬守殿
奥村助右衛門殿
本多類母殿
横山藏人殿
玉井市正殿
西尾隼人殿

七月八日。前田吉德の卒去以後月額を剃らざる日數を定む。

〔政隣記〕

七月八日月額日數之儀、御近習幷表向頭其外與力以上者、六月十八日より三十五日、御歩並之者共者同十八日より三十日。

但、御居間方坊主も同事。

右奉伺被仰出候條、夫々可申談旨、靑木新兵衛・木田主鈴より觸有。

七月十五日。前田重熙金澤を發し廿六日江戸に着す。

〔政隣記〕

七月十五日。但馬守樣當十三日御發駕之筈に候處御延引、今日御發駕、廿七日御着之筈に候處、早く御着候樣御途中迄以早飛脚被仰進、牟禮より御急、廿五日御着之筈に候處、烏川幷神名川出水、暫宛御逗留。依之廿六日晝過御中邸迄直に御着、只今迄宗辰公被爲在候御居間仕切御渡御居住、夜に入御上邸に被爲入御對顏。

〔政隣記〕

七月廿六日。前記今月十五日に有之通、今日晝過但馬守樣御着府。但昨日御着之筈に付、御晝大宮迄御進物御使御表小將淺加左兵衞昨朝發足之所、烏川等出水御逗留有之、今日御着に相成候段、御飛脚昨晝來。

〔謙德公御夜話〕

一、延享二年丑四月護國院樣御同道金府に御越被遊、金谷御殿に被爲入候。同六月護國院御逝去に付、早速江戶表に御出府被遊候樣、佐渡守樣より早打御使を以被仰進、七月十五日御發駕被成、江戶に御越被遊候。

七月十五日。前田宗辰駒込邸より本鄕邸に移る。

〔政隣記〕

近々御移とあるは七月十五日前のことなるべし

七月十五日宗辰公從御中邸御上邸に御引移、萬端今日より御在府之趣に相成候。

〔大應公御年表〕

一、七月十五日、東都本郷邸に駒込邸より近々就御移、御居間及御廣式御住居替御普請在之候。御小將横目田邊新五左衞門一人に付、和田兵左衞門最初より御附屬之御小將横目なり。御上屋敷に移勤之候。最前淨珠院様御用主附和田兵左衞門被仰付置候所、右之趣故爲代伊藤津兵衞・大場三左衞門相勤候。且又本郷・駒込兩邸内小屋筋、近年竹藪付候所、思召に不相叶候條、先規之通簀垣等に被仰付、御小屋茂不足候條、御中屋敷之小屋を引、御上屋鋪に建候由御普請有。

七月廿四日。金澤寶圓寺に於いて前田吉德の四十九日忌の法會を繰上げ執行す。

〔政隣記〕

七月廿四日。護國院様御四十九日御法事御取越、今日於寶圓寺御執行。

七月廿五日。前田宗辰登營して家督相續の命を受く。

〔政隣記〕

七月廿四日八時頃左之通御奉書到來。

猶以忌被成御免候間、被致月額可被罷出候、以上。
御用之儀候間、明廿五日四時可有登城候、以上。

酒井雅樂頭
本多中務大輔
松平右近將監

松平佐渡守殿

〔政隣記〕
七月廿五日曇、晝弁夕方少時雨。今日五半三歩奥之口より御出御登城、御下り西之丸江も御登、御奏者衆江被謁御退出。夫より御老中方・若年寄衆不殘御勤、九時過御歸館。御城江上下に而御供、組頭三輪藤兵衞、御使番和田源左衞門、御刀持野村源左衞門、聞番青木伊右衞門也。御供數之外、御表小將水越八郎左衞門被召連、御家督被仰出候旨、早馬に而御屋敷江歸演述。夫より一統布上下致着用候事。
一、向後御登城御他出等之節、御使者江之挨拶、御帳脇付、御先々代被仰出候通、御先代之趣を以相心得可申哉之旨、御大小將御番頭より伺之通被仰出。
一、今日之御普爲聽、御側衆江之御使組頭可相勤旨に而、小堀左兵衞相勤候。然共一人に而

者勤兼候に付、御用人中僉議之上、元文五年參議御拜任之節之趣を以、物頭も罷出候。

一、年寄中席ゟ頭分以上被相招、左之通大和守殿・藏人殿列座、大和守殿演述。

御忌御免、今日御登城可被成旨、昨日御老中方より御連名之御奉書到來、御登城被成候處、於御座之間御家督被仰渡、種々御懇之被爲蒙上意、其上御忌御免之儀者外に無御座御儀、別而難有御仕合被思召候。此段何も可申聞旨御意に候。

右に付爲御祝詞、頭分以上今明日之内御帳に付、年寄中・御家老中御貸長屋ゟも相勤候。右に付諸組平士等も、頭・支配人御貸長屋ゟ御祝儀に罷出候樣申談、追々罷出候上、其趣大和守殿等ゟ頭々より以紙面相達。

一、御表向平士、今日より來月朔日迄布上下着用、御勝手向平士者、今日より廿七日迄布上下着用与被仰出候段、大和守殿御横目ゟ迄被仰渡、夫々申談有之。

一、御次廻者、享保八年之御例に而、御表向御用無之候へ者、翌廿六日より常服に候事。

一、今日御家督被仰出候節、種々御懇之上意之趣。

一、家督申付候、年若にも候間隨分政務方之儀可心懸候。

重而、三ヶ國と申者大き成事に候。在府も長かるべく候間、於此元國之政務可致隨分候。

重而、加賀儀者、存之外急成事、腫に而有之由。病中難儀に而可有之、嘸御手前殘念に可有

之候。身も同事に殘念に存る。

一、伊勢守樣等ゟ御歸館前に御料理上之、御歸館之上追付御出御對顏。

一、八時過御中邸ゟ被爲入、夜に入御歸館。

〔德川實紀〕

七月廿五日、加賀國金澤城主松平加賀守吉德が原封百二萬五千石餘、その子佐渡守宗辰につがしめ、加賀・能登・越中三國を領せしめらるゝむね、御みづから命ぜらる。

七月。前田吉德の側室等落飾す。

〔大應公年表〕

一、七月御舍弟樣等之御生母方落飾、願之通勝手次第与被命由。

總姬樣御生母此御腹勢之佐殿等四人	眞如院殿
嘉三郎樣御生母	善良院
斐姬樣御生母	法泉院
健次郎殿御生母	實生院

八月二日。金澤寶圓寺及び江戶廣德寺に於いて前田吉德の法會を執行す。

〔政隣記〕

八月二日護國院様御百ヶ日御法事、今日御取越、金澤於寶圓寺御執行被仰付。
同日護國院様御四十九日御相當に付、於江戸廣德寺従淨珠院様御茶湯御執行。淨珠院様本御行列に而、初而御參詣。

八月二日。金澤東本願寺別院に前田吉德の追弔法會を行ふ。

是月は八月二日

〔大應公年表〕
一、是日・翌日兩日、於東末寺法會を執行有り。是より先西末寺にも執行す。是則爲護國公追善也。松雲公之御時も如斯なり。一宗にて重き法事となり。

八月三日。金澤に於いて諸士に前田宗辰の家督相續を命ぜられたることを告ぐ。

〔政隣記〕
八月三日於金澤、頭分以上之面々二之御丸江御招。前月廿五日御家督之儀、大和守より以早飛脚申來候。誠以恐悅之御儀、先爲承知申達候。御祝儀被申上候儀者、追而委細之御様子被仰下候上に而可申達由、年寄中等御列座、月番安房守殿御申演。今日者何も常服に而罷出。
一、今月八日諸頭以上江御意之趣可申演條、布上下着用登城候様、前日以御紙面御招。於御

大廣間御年寄中等御列座、左之通り安房守殿御演述。

前月廿四日御老中方御連名之御奉書到來。御忌御免被成候間御登城被成候樣申來。翌廿五日御登城被成候處、於御座之間御懇之上意、御家督御相續難有御仕合思召候。御忌御免之儀者外にも無御座、別而忝被思召候。此段何も可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事、以上。

右に付爲御祝詞、今日中年寄中宅ゟ相勤候樣、御用番より以御横目御指圖有之。

八月三日。大槻朝元表向の勤務に轉じ朔望登城を命ぜらる。

〔大應公御年表〕

一、八月三日大槻内藏允表向朔望登城。三浦左京・野村七兵衞・鷹栖左門表向本役可相勤。山村善左衞門御用番支配。幷御近習に只今迄相勤候人々、夫々先組ゟ各加り、表向可相勤旨仰渡。

八月四日。前田宗辰佐渡守の稱を改めて加賀守と稱す。

〔政隣記〕

八月四日。

一、御名加賀守樣与御改被成度旨、御先手小笠原縫殿之助殿を以、御用番迄今朝御願之處、夕方聞番被召呼、御願之通被仰渡、今日より御改稱、翌五日御横目より諸向ゟ申談有之。

前田信濃守より前田土佐守に當たる書面は訃音弔慰の外に加賀藩の政治を前田綱紀の狀態に復すべきを勸告せるなり

八月十日。前田宗辰書を前田土佐守に與へてその言行を愼むべきことを諭す。

〔前田直躬內密手記〕

前田信濃守殿より別紙兩通之通御申越候。本紙は今度之御樣子に付訃音被申越候。信濃守殿儀、先年江戸御供に罷越候節、御用筋申談候以來懇志に御申聞、其後文通仕來候。依之此度も私切に被申越こと奉存候。松雲院樣格別之御懇之趣共有之、御居間へも被相通候由に御座候。則直々咄御座候。御爲之儀至極大切に被存候より、如此密々御申越候と奉存候。書中之趣は尤至極之樣に私は奉存候。公邊之儀別而御大事之儀、筋宜敷樣に仕度御儀と奉存候。紙面之趣、私心付に而申上候樣被申越候へ共、大切之存寄、何廉御心得にも可被爲成哉と、則奉入御內覽候。返書は、委曲承知、勘辨仕、心付之趣にて可達御內聽旨申遣候、以上。

七月四日　　前田土佐守　判

來狀二通添紙面共小笥に認封印仕。

令披見、信濃守殿被存も尤に候。とかく遠路之儀と今は思直し暮し候。右紙面披見候間返し遣候。信州殿は成程宜人ながら、少と我意之多所に而、不圖不宜筋も顯申仁に候間、重而より之返書等は、あまり不申顯、心を含候文躰に而遣し候へば、其樣子被相考に而、卒爾に無

之宜候。いつも此方より之文通如此に候。
一、其方は家柄も重き事に候間、隨分氣質可相愼事に候。餘り指出候故、却人々ニ不和成趣。
一人之了簡がちニ過申候。隨分々々愼可申事に候。家督之儀も段々首尾能相濟、有難悅入候、
以上。

八月十日　少將

前田土州殿

被成下御親翰謹而拜戴仕候。信濃守殿より之紙面被遂御覽、被返下之奉落手候。信濃守殿宜
御方に候へ共、我意之多所有、不圖不可然筋も顯申御方に候。重而より文通之節、不打顯心
を含候文躰に而申遣可然と被思召候。御文通之節も左樣に被遊候旨、委曲被仰下之通奉畏候。
以後其心得可仕候。
一、御家督之儀も御首尾宜敷、有難御慶被爲思召候旨、恐悅至極之御儀、不過之御事奉存候。
御並も勿論無之御樣子、重々奉恐悅候。御樣子先達も別に御書被成下、又候哉委細被仰下、
重疊難有仕合奉存候。且又私儀家柄之儀にも御座候間、隨分氣質可相愼儀に被思召候。餘り
指出候故、却て人々不和成儀も有之、一人立候了簡過申樣被思召候。隨分相愼可申旨御紙上
之趣、逐一に奉承知候。先以無存懸御懇之御意、誠以徹骨髓難有仕合、可申上樣も無御座候。

愚意心底に相うかゝみ候へば、其分に難仕存寄故、指出申方にも相成候哉ニ奉迷惑候。加樣之被仰出之上に御座候へば、生涯氣質進退共隨分相愼勤仕可仕候。御事多內、私身上之儀迄被仰下候御儀、御懇至極之仕合、幾度も恐多乍奉存御禮申上候。御親翰は奉拜受候。御封紙奉返上之候、以上。

八月十八日　　　　　　　　前田土佐守　敷

八月十一日。前田宗辰入國の際諸士の行裝を華美ならしめざるべきを命ず。

〔政隣記〕

今般御道中御供之人々成程事輕に相心得、武器之分者不殘相揃、武備之不欠樣に相心得可申候。衣服幷近來鎗持抔奴を召連、形粧を餝候人々も有之、如何敷被思召候。且諸物新に調申樣成儀、一圓有之間敷候。馬具等之儀者見苦敷無之樣に仕、儉約を專に相心得可申候。御入國与申所に人々心付、美麗を好申儀不應御意候。兎角近年護國院樣御往來之御時分よりも、猶以事輕に相心得、武器之外見苦敷儀御貪着不被遊旨被仰出候條、被得其意、萬端事輕に仕、花麗之儀無之、儉約を專一に相心得候樣、組・支配等人々ゟ急度可被申渡候、以上。

八月十一日　　　　　　　　横山大和守

八月十一日。前田宗辰登營して先に家督相續を命ぜられたるを謝す。

〔政隣記〕

八月十一日御家督之御禮被仰付候間、今日五半時御登城被成候樣、昨日御連名御奉書、以御別紙御家來七人被召連候樣、御用番酒井雅樂頭殿より申來。依之六半時御供揃、御長袴に而五時頃御出、上下御供御小將頭平田外記、御馬廻小堀左兵衛、(御供初而に付爲見習御使番之御供所に出。) 御刀持御側小將辻織人。御別紙之趣に付横山大和守貴林・前田對馬守孝資・奥村助右衛門修古・本多頼母政恒・横山藏人正從・玉井市正貞衡・西尾隼人長恒被召連、七人共半時計御先に登城。同道聞番青木伊右衛門、御家老中廻勤同道は聞番代御大小將湯原藤左衛門。宗辰公御黒書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。於御同間大和守等七人御目見被仰付、御先格之通大廊下御部屋に被爲移、且又御先例之通御献上物等左之通。但聞番後藤瀨兵衛指添。

公方樣に　御太刀一腰、御馬二疋、越中新川郡内山村出栗毛六歳五寸一歩、同斷新屋村出鵇毛三歳一寸八分。白銀百枚付臺、綿五十把包のし、縐紗二十卷包のし、御目錄、御刀一腰青江貞次代金二十枚、御目錄。

右大將樣に　御太刀一腰、御馬一疋、越中新川郡内山村出栗毛七歳。白銀百枚、綿五十把包のし、御目錄、御太刀一腰和州則長代金二十枚、御目錄。

右御刀御拵付、御馬拵方并指添人等享保八年六月廿八日之通也。
右大將樣ゟ被上候御馬者、戸田淡路守殿迄爲牽罷越、山王長田馬場御厩に而田中主膳殿ゟ相渡等之處、主膳殿煩に付、諏訪部八十郎殿右御厩ゟ御越御受取。兩所共聞番指支、代御使番和田源左衞門・小幡藤左衞門指添罷越。且御馬醫以上、御貸馬に乘罷越候事。
一、大和守等七人献上物、享保八年六月廿八日同例。
一、御老中方・若年寄衆・御側衆ゟ被遣物右同斷、聞番御使者に而被遣之。御側衆ゟ者聞番代御大小將御番頭大久保八左衞門相勤。
一、御城相濟、四半時御下り、西丸ゟ御登、夫より直に御老中方・若御年寄衆御廻勤、九時過御歸館。夕方重而御出、御中邸ゟ被爲入。
一、御一門樣方等御出、御歸館之上御對顏。其節御熨斗三方出之、御料理も出之。御引菜但馬守樣御持參、御前御盃事被遊候。御客都合二十人計有之。
一、年寄中・御家老中御前ゟ召、今日之御樣子被仰聞。依之頭以上年寄中席ゟ御招、御七人列座、大和守殿左之通演述。
今十一日御家督之御禮被仰上候樣、昨日御老中方御連名之御奉書并御家來七人可被召連御別紙到來。今日御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被蒙上意、御手自御のし

鮑御頂戴。其上御家來御目見被仰付、忝仕合被思召候。此段可申聞旨御意に候。

右拜聽以後御帳に付、恐悅申上。尤今日一統布上下着用、平詰之事。但十三日迄御表向布上下着用平詰。大御門は與力一人布上下着用相詰。足輕は合紋羽織着、御餝は無之、中御門足輕も合紋羽織。

〔德川實紀〕

八月十一日、臨時朝會あり。右大將殿のみのぞませ給ふ。松平加賀守宗辰襲封を謝して、青江貞次の刀・銀百枚・卷物二十・馬二匹を獻ず。

八月十三日。金澤の町民前田宗辰の家督相續を祝して盆正月を行ふ。

〔政隣記〕

今月十一日、十三日金澤町中盆正月仕候樣、町奉行より申渡、躍り・相撲等所々に有之。

八月十四日。前田宗辰當分就封せざることに決す。

〔政隣記〕

八月十四日。此間聞番後藤瀨兵衞を以、本多中務大輔殿に、御歸國御暇之儀御願可被成儀に候哉之旨御示談之趣被仰遣候處、家督以後者三ヶ年在府之御格に候。乍然無據儀有之御願被成候事者各別、先者難成儀に候。有無之儀明十四日中被仰越候樣昨日申來。依之今日前田美

濃守殿・前田帯刀殿御招、段々御直談も有之處、御國へ被爲入御仕置被遊度旨之儀に而者、御暇御願者難被成事と御示談一決仕。今夕瀨兵衞を中務大輔殿ゟ被指遣、仰之趣御承知被成候。左候者來々年迄御在府之趣に御心得可被成旨被仰遣候。右之趣本多殿に而、瀨兵衞紙面をも取置被申候旨也。

右に付十七日、於御横目所御横目田邊新五左衞門より諸頭ゟ、御前來々年春迄御詰延被遊候由、大和守殿被仰聞候旨演述。今月三日・七日・十一日に御入國御供等被仰出有之儀者、役人中心得違申上候故也。

八月十六日。越後市振の民、越中との領境に關し協議せんことを求む。

〔國事雜鈔〕

一、當八月十六日越後市振村與四兵衞・善七、私方ゟ罷越申聞候。大平村ゟ對し、市振村・荒澤村・玉木村より御領境之儀に付申達候。御自分は御役人之儀に付、定而委細及御聞可被成与存候。六月廿三日御公領地御代官近藤萬五郎殿下役人御兩人、越後・越中御境目御見分之上、境川半分より北越後御領、半分より南越中御領与、往古より江切・川切に筋境御立置、元祿十四年にも江戸表より御代官御三人御國境御改に御越被成、則加賀樣より御奉行御三人其外附役人御出、双方御立合被爲成、右境目境川切に而御双方御證文御取遣之儀、則御自分之宅に

而御調被成、私共所持仕罷有候間、此上は御自分御扱を以、下に而和睦穏便に致度旨申聞候に付、此方にも猶更穏便に致度候間、左樣に候はゞ其方衆より、只今迄之通り申分無之旨之一札被遣候樣に申候得共、兩人之者共申候者、左樣成扱与申儀に而は無之候。最初より申候通、彌境川切に仕、下に而扱可申旨申聞候に付、左樣に而者一向埒明不申候。既往古より御境目立居、大平村持山に而畑作幷薪木呂伐苅仕來り候。勿論此方に慥成書等有之候。今更其方中より改り候趣難心得旨申聞候處、兩人之者共申候者、境川切に候へ共、荒澤村は小村に而、山稼に參候而も多勢に無勢に而、そこ／＼に致來り、私共在所より其上商賣方仕申故、右之通に成來り候處、今般御役人御見分之上、不屆之族之旨に而、市振村久左衞門乍暫御縮被仰付置候趣に候間、何こぞ扱人連可申旨申候に付、私申候者、縦寸尺之地は勿論、茅一本に而も、此方御領より越後御領に相渡申儀は、御大切之筋之旨申聞候處、兩人之者罷歸り、右双方口上之趣書記上之申候、以上。

延享二年八月廿四日　　境村　六郎左衞門

杉浦權佐殿

藤掛多門殿

〔政隣記〕

九月十五日金澤より之飛脚來着、越中境目越後市振村等四ヶ村計、御領大平村与御境目山論出來、改作奉行吉岡理太夫・新川御郡奉行一人同道、越中泊町迄御縮方に罷越候樣、安房守殿被仰渡、今月朔日理太夫儀金澤發出之旨申來。

〔大應公年表〕

一、此年六月頃越中新川郡上路村・大平村御領分之所、越後州御代官近藤萬五郎殿御支配市振之者、右兩村山境御領分之方山へ入込、材木等伐取候。御領分之者制之候得共、承引不仕候に付、東岩瀬郡奉行杉浦權佐へ相斷、其旨金澤御算用場へ訴候處、改作奉行小谷兵左衛門罷越、境目見分之以後、同役片山傳左衛門十村（新川郡天正寺村重右衛門、能美郡今江村源助）召連、杉浦權佐申談、越後川浦御代官近藤萬五郎殿陣屋へ罷越、段々先規之境目繪圖を以申達候所、市振之者非分に相極、御利運に罷成候。先年牧野飛騨守殿御領之節、境目論有之候。則取替繪圖も有之に付、今般も双方取替繪圖仕、事濟候。

八月廿二日。前田宗辰當分就封せざるを以て在江戸の諸士を減ず。

〔政隣記〕

八月廿二日來々年迄御在府に相成候に付、御近習頭・表向頭分・平士等御減少、御國に之御暇被下、御目見被仰付追々發歸。且御先代御近習・平士等夫々御表向可相勤旨、江戸・金澤に而

追々被仰渡有之。

九月十三日。幕府前田吉德の女總姬を富山侯前田利幸に嫁せしむることを許す。

〔政隣記〕

九月十三日四時御登城被遊候樣、昨日御老中方依御奉書、今日五半時過御登城之處、當六日御先手小笠原縫殿之助殿を以、御用番本多中務大輔殿ゟ御指出被成候、總姬樣出雲守樣ゟ之御緣組、御願之通今日被仰出候。依之西丸ゟも御登、御老中方御勤、御歸館之上、如御例頭以上ゟ御弘有之、御表向一統布上下、右爲御祝詞頭以上御帳に付候事。

九月十八日。前田宗辰諸場・諸役人に儉約の勵行を命ず。

〔政隣記〕

九月十八日諸頭・諸役人ゟ、大和守殿別紙御渡。但御表向は御馬廻頭、御奧向者青木新兵衞、其外御横目・御臺所奉行幷諸役人ゟも一通宛御渡、夫々傳達候樣被仰渡。

御儉約之儀、御先代段々被出仰候趣共有之、諸場・諸役人油斷無之儀に候得共、年々御不足之上、今年別而被指支候處、今度之御入用共に折重り、彌御要脚御指支、當然之御運も被辨兼

候。依之畢竟格別之被仰付樣も無之候ては者難被爲成候條、御役人者勿論之儀、末々之者は致和順、御儉約之筋相立候樣相互に可致僉議候。御代替に候とて、人々心得違に有之間敷候得共、尙更右之趣一統嚴重に可相心得段之被仰出に候事。

九　月

代替は本年九月廿五日に在り

十月朔日。前田宗辰登營して德川吉宗・家重の代替を祝す。

〔政隣記〕

十月朔日御代替御禮、六時過御供揃に而、同半時比御出御登城。於御白書院御禮被仰上、御太刀・御馬被献之、被遊御着座候。西丸にも御登城。今日者年頭之通に付、御直垂被爲召、布衣・白丁、御步小頭以上熨斗目、御步以上布上下。右に付神田御前樣ゟ御立寄、御裝束御直し、御老中方御勤。

一、御献上之御馬裸背、東尾嶋村鹿毛三歳二寸。若御年寄衆ゟ爲牽之。

一、大御所樣ゟ者、御太刀・金馬代御献上之事。

十月十五日。前田宗辰老臣等に書を與へ、大組足輕の職務に就いて諭示す。

〔袖裏雜記〕

當夏爲雇大組持方之足輕共、一組より十二人充割場ゟ指出候樣に其方共より申渡置候處、今以不相止、其通に而指置、故障之代人迄も爲指出候樣に承候。其方共如何之存寄に候哉。其上石川・河北門等之番所も有之候樣成儀に而、大組持方之作法一圓無之。大切之兩組に候間、稽古相定置候通、何とぞ無怠慢相勵候樣に、是以後可被相心得候。前々より在府中は雇も無之所、近來左樣に成行候樣子に候。旗本第一之足輕之儀に候間、向後之儀稽古に不相障候樣、雇之儀も申渡可然候。此度は何とぞ不足之割場手合者致樣も可有之候間、兩組者引揚候而も可然候。是非指懸り之人不足に候はゞ、其時々切に申渡、用事過半相濟次第引揚、全爲致稽古候樣可致候。當夏之儀者急成事故、手前ゟ不被申聞筈に候。是以後右兩組手前、指圖を請候以後夫々可被申渡候。其方共心得違之趣、雇申渡候而數日之儀候間早々申遣候、以上。

十月十五日　少將

横山大和守殿

西尾隼人殿

十月十八日。前田宗辰左近衞權中將に任ぜらる。

〔政隣記〕

十月十八日。今日五半時御登城被遊候樣、昨日御老中方依御奉書、則今日御登城之處、御白書院於緣頰、被任中將候旨被仰出候由、御用番酒井雅樂頭殿被仰渡。依之西丸にも御登、御老中方・若御年寄衆にも御勤。從御城御轉任之御儀、御表小將神保權五郎早馬に而罷歸、大御門より入申聞。夫より一統布上下着用。於年寄中席大和守殿、頭以上に演述左之通。

昨日御老中方御連名之依御奉書、今日御登城被成候處、於御白書院被任中將候段、御老中方御列座、酒井雅樂頭殿御演述。御家督御間も無之處、御拜任別而難有被思召候。此段何茂に可申聞旨御意に候。

右拜聽之上、爲御祝儀御帳に付、御年寄衆・御家老衆御長屋に今明日に相勤。

右御普爲聽、姫君樣方・御三家樣・御側衆に御使組頭之處、不足之分物頭より爲組頭代相勤。

〔德川實紀〕

十月十八日、松平加賀守宗辰中將に昇進す。

十月廿八日。前田吉德の近習たりし遠田勘右衛門隱居を命ぜらる。

〔遠田日記〕

十月なり

一、廿八日天氣好。昨夕内膳殿より明廿八日四時過登城可仕候由被仰下、せがれ三郎太夫儀も明日罷出候樣、高畠善太夫へ申渡候條、同道候樣に被仰越候。三郎太夫儀は朝番に罷出、

於松之間内膳殿御申渡如左。

遠田勘右衞門
遠田三郎太夫

勘右衞門儀、護國院樣御部屋住已來、久々御近習御用精に入、全相勤及極老候に付隱居被仰付、三郎太夫へ被下置候知行三百石爲隱居料被下之、三郎太夫へ家督無相違千五十石被仰付。且又護國院樣御代相願置候樣在之に依而、願之通り三郎太夫儀前田七郎兵衞等並に被仰付、座列は前田主馬上に被仰付。重而御前へ内膳殿誘引、段々御懇之御意在之、退出。其後九里治兵衞を以、折々御次迄直に罷出、相伺御機嫌候樣に被仰渡候。依之常服之儘御用番内膳殿へ罷越す。前田對馬守殿・勘解由殿へも罷越候。此外不相勤候。

半切　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　焉　　　　哉

私儀隱居就被仰付剃髮仕、右之通り改申度奉存候、以上。

十月廿八日　　　　　　　　　　　　遠田勘右衞門　判

奥村内膳樣

十月廿九日。前田宗辰中將轉任の口宣等受領の爲使者を京都に發せしむ。

十月廿日、中將御拜任に付、京都口宣之御奉書持參之御使、御大小將佐藤久右衞門ゟ被仰渡置候處、廿九日御奉書・御姓名書・口上書等相渡發出、木曾路より京着。且口宣請取御役人持組本多右門者、從金澤十一月廿六日京着。廿八日口宣請取、御官物等指上、口宣久右衞門ゟ渡之。十二月十三日久右衞門江戸ゟ歸、口宣等上之。但、久右衞門ゟ渡之。十二月十三日久右衞門江戸ゟ歸、口宣等上之。但、久右衞門儀十一月十三日京着、十五日京都詰人奥村萬右衞門（附令一人者小堀金五右衞門、兩人共御馬廻組也。）罷越、奉書等上之。同日御使人本多右門早速上京候樣牧野殿御指圖に付、急飛脚を以金澤ゟ申達候處、廿六日右門參着。翌廿七日牧野殿幷町奉行等ゟ、萬右衞門同道相勤。同夜從牧野殿、右門・萬右衞門御呼出、明巳ノ刻久我大納言殿於御亭、口宣可相渡條、其刻可罷出旨被仰渡。依之廿八日辰ノ上刻、中宿蛤御門之外粉紅屋与申町家ゟ、右門幷久我殿ゟ誘引人奥村萬右衞門、禁裡ゟ附添人小堀金五左衞門、久我殿ゟ指添佐藤久左衞門、久我殿ゟ御官物に添參候御算用者堀江宗左衞門、禁裡ゟ御獻上物に添候御算用者寺田豐左衞門、宰領足輕（二ヶ所に付四人）二人宛、小者四人、御座之者三十四人、平田内匠・後藤勘兵衞・大森三郎兵衞・山本清十郎・木具屋九兵衞・同善左衞門、御雇者裁許千丸屋作兵衞罷越。右右門・久右衞門・萬右衞門・御算用者等、御官物爲持久我殿ゟ罷越、雜掌森但馬守・小嶋一學

等江御官物渡之候處、久我殿御出座、雜掌披露に而右門罷出候處、口宣・宣旨御渡之。受取右門致封印、久右衛門江相渡、御屋敷江持參。夫より右門・萬右衛門同道に而、御所司江罷越御案内仕。右相濟、右門・金五左衛門同道に而、禁裡長橋奏者所江御献上物爲持罷出、御板緣に伺候。御附武家衆田中出羽守殿・三枝伊勢守殿御出、雜掌披露、右門御太刀臺共持參、追付傳奏衆江可相達旨に而退く。傳奏久我殿御出、田中殿御披露、追付可遂奏達旨御申述退く。勅答は明日巳ノ半刻久我殿に而可申渡旨、田中殿被仰聞。右相濟、直に御所司・御附武家衆江御案内に罷出。

同日准后之御所江、右門・金五右衛門同道に而罷出、御献上物上之。諸大夫藤木備中守出、上﨟之方迄指上候處、御返答者明日久我殿に而可申渡旨被申聞。廿九日巳ノ半刻久我殿江右門・金五右衛門罷出候處、久我殿・葉室殿御列座、勅答左之通被仰渡。

中將轉任に付、目錄之通献上、御機嫌之御事に思召候。准后之御方御同樣に被仰出候。

右相濟、直に御所司・兩傳奏・御附武家衆江、御案内に參上相濟候。

附、御献上御官物委曲御先代同斷に付略。

同日中將御轉任に付、御祝儀物者御一門樣方初堅御斷被仰遣、御内々に而も御受納無御座候事。

十一月二日。前田宗辰登營して徳川家重の將軍宣下の儀に列す

〔政隣記〕

十一月朔日月次出仕止、明日將軍宣下に依て也。且明二日就將軍宣下に御登城被遊候樣、御老中方御連名之御奉書到來。

二日將軍就宣下に、御束帶に而六時御供揃、同刻過御出御登城。布衣御供三人幷御先に聞番一人布衣に而罷越、素袍御供四人、御輿舁八德、御手廻白丁、參内傘、御馬厚總、御歩小頭以上のしめ、御歩以上上下着用。

右御出之節大和守、物頭分以上御目通に可罷出旨、昨日被仰出、中之口御廊下に朔望等之通罷出御目見仕。但馬守樣にも昨夜半より當御邸へ被爲入、御束帶に而御前より少御先に御登城之節も、頭御目通に可出旨被仰出、罷出候處御會釋有之。

十一月二日。儒者由美希賢新知二百石を以て召抱えらる。

〔政隣記〕

新知二百石、御儒者に被召抱。今月二日也。十二月廿七日初而於御前講釋被仰付。

浪人　由美彌次郎

〔大野木克寛日記〕

今月は十一月なり

十一月九日快晴、暖氣。

今日村瀨氏入來、雜話之內和州手醫師岩脇碩安來狀に、由美彌次郎と申儒者、新知二百石に被召出候。此仁只今迄東武の隱士に而、奥州弘前之侯津輕家より二十人扶持合力有之由。貝原篤信始筑前之侯黑田家之儒臣、後致仕京師に遊居と云々。門弟、則貝原氏むこ之由。由美はよしみと唱候旨、是亦碩安申越候由也。又一說には、於京師伊藤仁齋門弟、東武に而荻生惣右衞門が徒に而、朱子學に而は無之候。由美はゆびと唱候由。是者深山壺峯加州笹島織部與力。申由、村瀨氏話。

〔大野木克寬日記〕

十二月二日。今夕克成、昨日於靜明寺津田織江爲見候由に而、由美氏詩文之寫爲見候に付寫之。

乙丑仲冬二日奉拜北藩侯恩命敬賦。

禮樂久聞周大藩。文明瑞氣照朱門。北溟鯤浪潛鱗躍。東閣官梅初日温。存志遂酬懸弧事。寡才深愧筑臺恩。從今喜仰風雲色。野父偏思献負暄。

北藩文學　由美希賢

十一月十三日。一條宗基本鄕邸に臨む。

〔政隣記〕

十月廿五日。二條樣就御招請、今日より御大書院等御修覆有之。十一月十三日御成辰下刻、歸御戌ノ中刻。御饗應三汁九菜、組頭以上御盃頂戴。御能五番、內舟辨慶者御前被遊候。尤翁立。御持參御太刀馬代・綿十把・二種一荷、幷立聞三懸詠歌大概。御前樣江一種・五百疋幷十二月花鳥和歌。但馬守樣江御太刀馬代五百疋、幷八代集秀逸。大和守以下歌書・綿。人持組頭江色紙・綿等被下之。從此方樣被進、御掛物松榮筆三幅對・御硯箱・御文臺、從御前樣御使者西村甚太夫を以、御杉重二組・鯛一折被進之。同朝彌被爲入候樣、御使御小將頭平田外記。

一、御小書院俄に御上段被仰付。

一、御料理御相伴、相模守宗泰公・伊勢守宗恒公、右之外御作法前々御招請之節御同事。

十五日御發輿御歸洛、御附使者組頭小堀左兵衞、御一宿江御見送御使番小幡藤左衞門被遣。

〔政隣記〕

十一月十五日。徳川家重自ら將軍宣下を祝して物を前田宗辰に賜ふ。

一、十一月十五日。今度就將軍宣下爲上使御奏者番松平紀伊守殿を以、時服二十領・一種一荷賜之。同日從大奥以上使純子類十卷・一種一荷御前樣江賜之。但女上使に而無之候。

〔大應公年表〕

十一月廿五日。越中新川郡と越後との境論解決す。

〔政隣記〕

十二月十六日。前記九月十五日に有之山論之一件に付、前月十八日新川御郡奉行杉浦權佐に改作奉行行山傳左衞門指添、十村等召連、越後御代官所川浦迄罷越、同廿五日御代官近藤萬五郎殿役所に出對面仕、段々今般出入之趣双方之樣子申合、此方樣御繪圖も萬五郎殿賴に付見せ、前々之樣子委細申述候處、萬五郎殿とくと承知宜被聞合候躰、多分萬五郎殿了簡を以取噯、其以後越後市振村等之者申處者非分、越中方之者申通に落着相濟候。

但萬五郎殿取噯に而濟不申候得者、江戸表茂罷越候筈之處、萬五郎殿噯に而、市振之者も得心仕、右之通濟候由、權佐等より之言上今日到來。

是月は大盡なり

十一月晦日。前田宗辰夫人逝去す。

〔政隣記〕

十一月晦日。御前樣御腹孕之處御滯に付、今月十四日夜橘宗仙院診、御藥被上之。十七日非上俊良老・原賀玄純老被診、且宗仙院も御越。上野於見明院御祈禱被仰付。廿三日より俊良老御藥に被轉、廿四日武田叔安老診。廿六日より玄純老御藥に被轉。廿七日夜御小產、廿九日晝より御指重、今晦日朝より御大切に付、御大小將早馬御使に而、御醫師中被仰遣。御一門樣にも御案內。會津にも御大小將（前夜被仰渡）津田求馬早打に而被遣之、白銀十枚御目六を以被下之。今朝五時半時過御逝去之御弘有之。會津に御悔旁御使番小幡藤左衞門早打に而

妙清は紹源の誤

被遣、歸り者常道中与被仰出、御目六を以判金一枚・御羽織一被下之。

御逝去に付廣德寺ゟ御案内御使、御表小將水越八郎左衛門被遣之。今日より三日平詰、御表向月代勝手次第、伺御機嫌頭以上御帳に付。朔日頭以上布上下不及着用、平士袴迄。普請・鳴物遠慮小屋觸有。

御逝去之御屆、聞番を以御用番ゟ被仰達。暮頃廣德寺御出、御城坊主衆溜ゟ御通、桂香院等被伴、同二之間ゟ相通、御奥ゟ被通、御讀經有之。夜中於御表御料理出、相伴桂香院。但上之間は組頭、二之間は物頭御挨拶罷出る。

御葬式惣御用幷御法事奉行西尾隼人、右御用主付御近習御小將頭樋口次郎右衛門、同物頭武田杢左衛門、御附物頭並西村甚太夫被仰付、會所奉行・割場奉行・御筋方會所奉行相加り候而、御大小將兩人夫々被仰付。

御前樣御戒名左之通。

梅園院殿心操紹源大姉

〔大應公年表〕

一、十一月晦日巳上刻御前樣御卒去。御棺之上に姓源氏松肥後守女。名常子。松平加賀守室。但依命由美常賢記之。十二月九日於廣德寺葬る、號梅園院殿心操妙清大姉。金澤ゟ者十二月六日訃音、普

請・鳴物三日、諸殺生十九日遠慮。但御忌中十九日まで。

十一月。前田宗辰江戸に在勤する諸士の華美を戒む。

〔典制彙纂〕

近來江戸詰之者共萬事華美に相成、火事裝束幷常々衣裳に至迄殊外結構に候は、頭共不心得成儀候。是以後者急度遂省略、勝手取續御奉公を可心掛事候。且又地・他國共、年若成人々抔者、度々之參會無益之費も有之由に候。何れ茂遊參を好、文武の學問に志無之故、おのづからケ樣の事に候。旅行之樣子は先達而も被仰出候得共、近年年若成者も、駕籠乘用多候。ケ樣之儀者頭・支配之人々不心得故に候。是以後無油斷可相心得候。右之通急度可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配等之人々に嚴重に可被申渡候。尤組等之內――。

右之趣可被得其意候事。

以上

十一月

十二月九日。前田宗辰夫人の葬儀を行ふ。

〔政隣記〕

あさぎは服色なり

十二月九日御前樣御遺骸、今曉寅上刻御供揃に而、卯上刻御出棺、御廣式御門より東御門、天澤寺前、上野廣小路、山下通廣德寺ゟ御移。御葬式相濟、同所寺中ゟ御納り。御供幷御寺詰人裝束熨斗目・淺黃上下、頭分者淺黃長袴。

一、御附使者御一門樣等より來。造酒丞樣御使者之外者、御出棺之節御通筋ゟ不指出。

一、今曉桂香院幷伴僧五人罷越、讀經相濟御料理出、御棺之御供。

一、御見送之御使者、肥後守樣等より有之。何も御行列外に御供仕候。

一、御殿向御出棺迄熨斗目・布上下。御邸內警固井上三太夫組召連罷出。

一、御出棺之節、御近習頭幷御用人者、御廣式御門之外ゟ罷出。御表向頭分者不罷出候事。

一、御出棺御行列。最初菊菱提灯二張、足輕二人二行、御先乘騎馬人持青木新兵衞熨斗目・長袴着用。夫より白張丸子提灯二あさぎ、足輕三人あさぎ上下、白張二淺黃、色懸挾箱二、手替二人淺黃、御步九人淺黃上下、白張丸子あさぎ、色懸御長刀、手替あさぎ、白張丸子二あさぎ、御香爐侍幷持人御步三人、白張丸子二あさぎ、侍六人、白張高提灯二張持人あさぎ。此末同斷。出家四人、侍二人、白張高提灯二、御棺、御左右御用役二人、御用達一人、舁者三十人いろ着用（御身附御手廻より十二人、御廣式定小遣より十二人、割場より六人）、色懸御刀・脇指、持人御用達二人、白張高提灯二、侍四人、白丸子二、御橫目田邊新五左衞門、御棺舁手替三十人、白丸子

同上は御廣式なるべし

一、色懸御傘、手替、色懸御挾箱二、手替二人、御歩小頭二人、御歩横目二人、御提灯裁許足輕小頭二人、白丸子一、御茶辨當指添御歩二人、手替。御廣式取次足輕三人、淺黄上下着用。此末足輕都而同。白丸子一、御棺居二、手替二人、御棺臺持者六人、手替、御乘物舁者六人あさぎ、御大工棟梁二人、御乘物舁者六人あさぎ、白丸子二あさぎ、押足輕二人、菊菱提灯一、御供乘物七挺、舁者四人宛、左右足輕二[]宛、あさぎ上下、先菊菱提灯一宛。惣草履取足輕三人、騎馬高木小左衛門、騎馬西村甚太夫、菊びし提灯一、押足輕二人、惣若黨、惣挾箱、菊びし提灯一、惣鑓、惣馬、御醫師のしめ・淺黄十德大庭探元、菊びし提灯一、押足輕二人、合羽籠九荷二人懸、笠籠八荷二人懸、菊びし提灯一、押足輕二人、小者小頭二人黑羽織着用。騎馬横山大和守、蔓臺二棹、宰領二人宛、持人四人宛。

御輿舍より龕前堂、夫より御廟懸御行列。

白張丸子二、御香爐御用達持之、花籠二御身附御歩持之、御燈籠四同上、御幡四御表御歩より持之、紙花西村甚太夫、白高提灯二御廣式足輕持之、御位牌高木小左衛門、鈴・小鞁・大鞁・小鈸・大鈸以上僧持之、衆頭僧、僧四人、高提灯持二人同上足輕也。御棺、御脇指御用達持之、御刀御用達持之、御天蓋御用達副之、持人御棺舁之内御手廻より二人、白高提灯二持人足輕、同上武田杢左衛門・樋口次郎右衛門、御横目武田判太夫。

一、今曉御跡祈禱、駒込長元寺被參。中之口より新番部屋に而伴僧共に御料理出。坊主かよ

ひ。

一、今朝於廣德寺御燒香之次第。

中將樣御代香横山大和守、肥後守樣御代香神保內藏助、但馬守樣御直香、其外略之。相願自分之拜禮神保內藏助。

十二月十二日。前田宗辰夫人の中陰法會を江戸廣德寺に執行す。

〔政隣記〕

十二月十二日梅園院樣御中陰御法事、於廣德寺御執行。十三日昨日同斷。但昨日者施餓鬼圓通懺法等、今日は頓寫御執行也。今日御法事過、中將樣御參詣御燒香、畢而於御前和尚に白銀三十枚被遣之。披露御大小將勤之。尤長袴着用。但馬守樣も御參詣御燒香。其外出雲守樣等御參詣、御法事中に御燒香、段々御歸。齋藤長八郎殿等、利倉善佐等御取持有之。但閏十二月四日御三十五日、十八日者御四十九日、十九日御百ヶ日御取越に而夫々御茶湯御執行。

十二月廿一日。德川家重、前田宗辰に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月廿一日御鷹之鶴上使、御使番木下右近殿を以、御當代初而御拜領。御作法等御先代之通。且御披閏十二月二日有之。御一門樣等御出、御盃之內小謠、御料理後御所望に付一調仕

廻等被仰付。

延享三年

正日七日。前田宗辰初めて人日の登營出仕を許さる。

〔政隣記〕

正月七日御登城、於西御丸、大御所様・大納言様江於御座之間御目見被仰上。但今日御登城者御三家様溜り詰迄也。御先代・御先々代にも、人日御登城者參議御拜任以後より有之候處、今日之御登城別而結構成御儀与何も奉恐悦候。

附、舊臘本多中務大輔殿より御同意就有之、御指出之御紙面左之通。

私儀、七種之御祝儀未登城不仕候。父加賀守儀者參議被仰付候翌年より、右御祝儀致出仕候。祖父肥前守儀者參議拜任不被仰付以前より、右御祝儀致出仕候に付、此度相伺申候條、御指圖被成可被下候、以上。

閏十二月　　　　　　　　御　　　名

御附札

伺之通可遂出仕候。

先例

松平肥前守

元祿三年正月四日戸田山城守樣御宅ゟ家來之者被召呼、七種御祝儀登城之儀申上置候通、登城可仕旨被仰渡候。

一、同人元祿五年六月十二日戸田山城守樣ゟ家來之者被召呼、御嘉祥前々致登城候得共、今年より不及出仕旨被仰渡候。

松平故加賀守

元文五年十二月七種御祝儀登城候儀相伺候處、同月廿九日此方樣ゟ家來之者被召呼、來年始若菜爲御祝儀登城可仕候。且又嘉祥如先例不及出仕旨、御書附を以被仰渡候、以上。

（此方様は本多中務大輔）

閏十二月　　御名家來

河地平左衛門

右御指出之處、其以後聞番御招、右に有之通之御付札を以被仰渡候。御嘉祥之儀相知れ不申候に付、役人迄相尋候處、御先例書之通に候條、來年御嘉祥前御伺可然旨、千馬郷右衛門申候事。

正月十一日。富山侯前田利幸結納を前田吉德の女總姬に贈る。

〔政隣記〕

正月十一日従出雲守様御使者御留守居山田五左衛門を以、當二十二日總姫様ゟ御結納物被進候御吉刻之儀被仰進。右五左衛門參上之節、取次御大小將服紗小袖・布上下に而、御廣間二之間ゟ誘引、聞番出挨拶、組頭も出挨拶。御茶・たばこ盆出、西尾隼人無地熨斗目・上下に而出、御口上承之。組頭挨拶、御料理出、相伴聞番。御料理之内御使御近習頭。畢而大和守・隼人并組頭も出挨拶、隼人を以御答被仰進。御使者披候節、聞番・取次御大小將送候。今日携候人々迄布上下、御給事新番、出口指引御大小將御番頭、并新番支配者御使番。

一、廿二日指副山田五左衛門、御家老富田筑後を以、左之通被進之。

御結納物御祝儀物。御小袖二重・御帶二筋・御末廣二本、雉子一折二十・鯉一折二十・鹽鯛一折二重・鯣一折二十把・昆布一折二十・柳樽二荷・御目録。

中將様ゟ、御太刀一腰・御馬一疋（代黄金十兩）・昆布一箱・干鯛一箱・御樽代千疋・御目録二。

但馬守様ゟ、御太刀銀馬代。

預玄院様・淨珠院様ゟ、紗綾三卷・干鯛一箱・御樽代五百疋宛・御目録。

右御口上承候御家老褐子持筋熨斗目・同長袴。御目録受取候御附物頭並西孫八郎も同斷・半袴。御三方様ゟ之御口上承候御附物頭並褐無地熨斗目・同半上下。筑後ゟ中將様御盃被下、御

刀（代金五枚）、小堀左兵衛持出被下之。

右之外諸事御作法、元文五年九月廿二日繁姫様江御結納參候節御同事。出雲守様江御答之御使者、西尾隼人に聞番河地平左衛門被遣。

正月十一日。前田宗辰太刀仕初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月十一日六時揃に而御太刀御仕初有之。但馬守様にも御つかひ、幷横山大和守・平井外記・樋口次郎右衛門・九里治兵衛・原求馬、其外御小將等江も、於御前被仰付、終りに山崎次郎兵衛江も被仰付。

青木與右衛門・水越八郎左衛門・寺西左源太者、御斷申上不罷出候。

畢而大和守江御意、幷外記江も御意被成下候。御前・但馬守様御熨斗鮑御祝。御目通に而大和守頂戴、御居間書院四之間に而山崎次郎兵衛頂戴。其後外記初仕初被仰付候人々、何も頂戴之。且次郎兵衛江綿三把、青木新兵衛を以御目録に而被下之。右何も熨斗目着用。

正月廿七日。前田宗辰、德川家重の將軍宣下を祝する爲閣老を本鄉邸に招請す。

将軍宣下は延享二年九月廿五日に在り

〔政隣記〕

正月廿七日將軍宣下御祝儀、今日御老中御招請に付、御老中堀田相模守殿、若年寄水野壹岐守殿・堀田加賀守殿、御奏者秋元攝津守殿・松平伊賀守殿、此外御役人衆六人、都合十一人御越。御勝手ゟ者、御一門樣幷御出入御旗本衆等三十餘輩。惣而御作法前々之通に付略之。但、右等御招請之儀被仰達置候處、今月十二日松平能登守殿ゟ聞番御招、來る廿七日晩各申談可相越候。御家督爲御祝儀御招請之儀者、追而御參勤之上儀に被成候樣御紙面御渡。其砌御禮使者被遣候儀、廿三日御取持衆等御越、御給事習仕御見分等、其外都而前々之通相替儀無之。

右御祝儀、二月二日御一門樣方初御客百人餘。尤御能有之、輕き面々御目見町人等ゟも見物、御料理被下之。同七日右御用懸り之人々ゟ、御意之趣等も都而前々之通也。

二月十四日。金澤淺野町に災あり。

〔大野木克寛日記〕

二月十四日、昨夜四半頃淺野町小家より出火。折節風烈及大火、三十軒計炎焼。定火消之外前田多宮・前田勘解由・横山木工等增火消罷出候由。九半頃鎮。予者金谷御文庫ゟ人數迄出之。出馬は見合候内鎭、不及其儀。將監者出馬之由、口上申來る。

三月朔日。前田宗辰の家督相續と中將陞任祝賀の爲物を献じたる諸士に書を與ふ。

〔政隣記〕
三月朔日御家督幷御轉任御祝儀、頭分以上献上物仕候に付、御書被成下。金澤に而者今月十五日月番對馬守殿御渡、御禮年寄衆等廻勤。在江戸之面々ゟ者、今日大和守殿被相渡。御禮、格別之儀に付、御近習頭も大和守・隼人御長屋へ參出候樣御指圖也。

三月八日。五ケ年間儉約の令を傳へ、諸士も亦之を勵行すべきを告ぐ。

〔政隣記〕
三月八日御儉約之儀被仰出、五ヶ年之内嚴重御儉約可被成旨之御書立相渡。御家中儉約之儀も被仰出、御書立相渡。享保十四年相渡候御書立に、付札を以年寄中被相渡。

〔本多氏舊記〕
家中之面々甚及困窮申者茂有之躰に候。此砌一々相救候上、儉約之儀茂嚴重可申渡儀候得共、難及其沙汰之段心外之事候。但無謂及困窮候段難心得候。勝手無力いたし候はゞ、猶以諸事相省取續候覺悟可有之所、無其儀風俗超分奢侈之躰、甚不愼に相聞候間、自今以後頭たる面

々より覺悟を相改、萬古來質素之風俗に立歸り、勝手取續致奉公候樣可相心得候。衣服之品を始、從前に申渡有之儀に候得者、今改而不及其沙汰候條、武役之外者萬端致省略、行狀相愼候樣、頭等より急度可申渡候。若不心得之者茂有之候者、同役申談加異見、不用者は無用捨可及言上候。又家中之儀者、主人々々より可申渡候。

〔又家中は藩の陪臣〕

一、借銀等之儀、筋宜連々可致沙汰候。聊も無理非法之儀有之間敷候。

一、百姓・町人等怠家業、奢侈甚鋪作法不宜躰相聞候間、町奉行・郡奉行等無油斷可申付候。町人者利潤を以生計仕儀勿論に候得共、貪高利候儀堅有間敷候。

右等之儀跡々申渡有之、當座相愼候得共、末々令忘却躰に候。此度申渡之趣、一端之事与心得申間敷候。自今以後嚴重可相守候。

以上

二月

〔坂井舊記〕

勝手方連々困窮之上、去年以來別而入用指つごひ、是以後之續手段も有之間敷段承候。如斯に而者仕置等に茂相障可申候得者、甚急成事に候。依之五ヶ年之間嚴重儉約申付候條、一統可存其旨事。

一、一類を始音信贈答、從前々及斷といへども、內々に而取遣も有之候。是以右年限之內は一統堅可及斷候。且又使者取遣をも斷可申事。

一、外邊右之通候得者、廣式向之儀、猶以儉約之筋嚴重に可相心得事。

附、伊勢守殿初、內所方附之者共茂、右に准じ可相心得候。

一、此表幷國元においても、諸場·諸役人末々迄和順いたし、費之筋無之樣可相心得候事。

右之趣一統可相守候。委事者年寄中より可申渡候條、得其意、急度可相心得候。

以　上

二　月

〔坂井舊記〕

御勝手方連々御難澁之處、去年以來猶更御入用御指つどひ、ひしと御指支に付、五ヶ年之間嚴敷御儉約可被仰付趣、御別紙御書立之寫之通被仰出候條、可奉得其意候。段々御儉約被仰付候上之儀に候得者、容易に被相心得候而者、御入用減申筋有之間敷候條、右年限之內者、少々御格被改候而茂不苦候間、少に而も御儉約に可成筋者、諸場·諸役所御役人中綿密に被遂詮議可被書出候。此度之御儉約者、唯今迄之振与者違申儀に候之間、可被得其意候。依之逐一書立相渡不申候條、其手先々々に而無油斷可被遂詮議候。尤組·支配之內役儀有之人々に茂、

不相洩樣に御同役中被申談可被申渡候事。

以上

丙寅三月

三月十八日。總姫將に富山侯前田利幸に入輿せんとするを以て之を饗す。

〔政隣記〕

三月十八日總姫樣ゟ御餞別御料理被進之。依之御敷舞臺御能被仰付、白頭是界寶生太夫勤之。御婚禮方御用勤候頭分・與力等迄御料理被下、見物被仰付。并在合候侍以上見物被仰付。

三月。江戶詰諸士の從者を減ずべきことを令す。

〔典制彙纂〕

今般御儉約に付而、江戶詰之人々從者、知行當りより人數減少被仰付候。別紙之通相極候條、交代等に而江戶ゟ罷越候人々、從者減少召連可申候。於江戶御供等之節は、御貸人有之筈に候事。

一、道中知行當り之人數に而指支候面々有之、雇者召連候儀に候はゞ、其趣年寄中ゟ可被申聞、承屆候上可申渡候事。

一、京・大坂等他所ゟ相詰候人々は、只今迄之通に相心得可申候事。

右之趣被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。且又組等之内――

丙寅三月

〔典制彙纂〕

江戸詰人當分

一、頭分四百五十石以上都而　上下十一人、馬一疋

但、四百五十石より内知行當り之人數。

一、物頭三百三十石以上都而　上下十一人、馬一疋

但、手替足輕右人數之外。

一、御歩頭四百五十石以上都而　上下十二人、馬一疋

但、四百五十石より内者知行當り人數。

一、組頭四百五十石以上都而　上下十二人、馬一疋

但、四百五十石より内は知行當り之人數。

一、同千五十石より二千石迄　上下十四人、馬一疋

一、平士之馬持都而　同　九人、馬一疋

一、同　二百石以上　同　七人

一、同　二百石より以下都而　　同　五人
一、新番百石以上上下四人、夫より以下三人。
一、惣小頭并御料理頭等與力、知行高無構、都而上下四人。
一、道中往來者知行當之通可召連候。且又御國より江戸表へ御使に被遣候節は、道中并在留中知行當り人數。
一、年寄中相詰候節は知行之高下により、其時々蒙僉議申筈に候事。

五千石以上

一、五千石之當り　　御家老役

但、五千石より內者知行當り之通。

二千五百石以上

一、二千五百石之當り　　若年寄衆・平人持

但、二千五百石より內者知行當り之通。

以上

〔政隣記〕

一、三月廿六日就御儉約、當分江戸詰人被減候。依之御家中從者、五月朔日より減少候樣被

御出、四月十五日右從者減少之儀に付、重而御書立出。先日出候よりは平士之從者相增、大躰平均之割合に成候。

三月。巡見上使將に來らんとするを以て金澤に於いて通行の道筋等を議す。

〔大應公年表〕

一、來る四月巡見衆就御越、如先規御用主附、御馬廻頭土肥庄兵衛・御小將頭北川久兵衛江州ゟ、御小將組宮井平兵衛、其外宿拵爲御用馬廻組より二十人計所々ゟ罷越、道筋等之趣如左。

巡見衆萬一御城中御見分も有之候得ば、河北御門より石川御門御通、しるたれ坂より公事場前通、奥村主税前より大手前ゟ御通之趣に候間、御通筋侍屋敷之儀、其心得候樣可有御申談事、別紙覺書之通、幷土肥庄兵衛等紙面之趣、被得其意、相組同役之内煩等に而不罷出面々ゟ者、其筆頭又は同役より可被申談候、以上。

三　月　　　前田對馬守

地黄煎町・野町・犀川橋・片町・香林坊橋・石浦町・南町・堤町・袋町・博勞町・尾張町・掛作・淺の川橋・森下町・金谷町・春日町・高道・大樋。（付札にて、博勞町・御算用前・大手先御堀端・尾張町・中町。）右之通萬一御通筋に茂可有之哉。

右巡見上使御道筋如斯御座候。右御通筋横町侍中居屋敷、御見通之所程遠くはきと見え不申所者、掃除等及貪着不申候得共、程近き所掃除、幷長屋・塀等大破見苦敷所々者、加修理候樣に被仰渡可然奉存候に付、此段申上候、以上。

二月二十六日

土肥庄兵衞
北川久兵衞

本多安房守樣

四月朔日。女二宮の薨去を弔するが爲江戸より使者を發せしむ。

〔政隣記〕

三月廿八日當月廿三日女二宮樣薨去之旨、今夕方申來、鳴物今日より朔日迄三ケ日、普請は今日一日遠慮之旨、御小屋觸有之。但實者當月十三日薨御に候へ共、親王宣下近々に付御隱密与云々。右御所勞御見舞使成瀨内右衞門御大小將被仰渡候處、發足無之内御凶事申來、御悔使則内右衞門ゟ被仰渡。四月朔日江戸發、御使仕廻直に金澤ゟ歸候樣被仰渡。御先手靑木彥太夫も御使被仰付。四月七日發、御使勤直に金澤ゟ歸候樣被仰渡。詰中骨折候に付、於御次御内々銀十枚拜領被仰付。

四月朔日。儉約實行につき享保十四年の令に基づき更に細目を示す。

本文を四月朔日とするは次條四月二日に掲げたる前田直躬内密手記に昨日とあるによる

主文は享保十四年七月十日發布の令なり

〔本多氏舊記〕

御家中倹約之儀、今般御書立を以被仰出候付而相渡之候條、奉得其意、嚴重に可相守候。倹約之儀享保十四年委細書記相達候紙面に、猶更附紙を以相渡候。御上に茂御勝手御難澁に付、五ヶ年之内嚴重御倹約被仰付候間、嚴密相心得可申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゑ急度可被申含候。組等之内裁許有之人々は、其支配ゑも申渡候樣、是又可被申聞候、以上。

丙寅四月

御家中之面々之事

一、衣服之儀先年より御定有儀に候所云々。

付札に。衣類之儀、紗綾・綸子・縐紗等重き品者、江戸・御國共有來候分は、當年中を限用ひ、來春より着用堅無用に候條、本文之通可相守事。

同斷。衣類之儀、本文之趣に候へども、近年次第に相緩み候條、猶更嚴重に相守、絁服着用可仕候。紗綾・綸子・縐紗等之品は堅く着用仕間敷候。

同斷。衣類之儀、おし立候節は絹紬着用可仕候。平日御歴々を初、御小將・御馬廻等諸役人も、御番所・役所抔も綿衣着用可有之候。羽織も絹・紬等、袴も奥嶋類・小倉嶋等之外着用無用

に候。夏日之着服も冬向に准じ、麁品を相用可申候。假令さらし・ちゞみ着用候とも、至而下品を相用、平日は御番所・役所などに、布・きびら・八講嶋之類を着用可仕候。勿論紗・絽・紗綾・縐紗等堅く着用仕間敷候。且又近年者上下に紗綾・縮緬等幷龍紋致着用、却而勝手に宜敷儀も可有之候へ共、奢侈之風躰に候間無用に可致候。

同斷。武具・馬具に無用の金銀をちりばめ、其外結構を盡し候儀堅く指止可申候。火事裝束もことの外花麗に相成候間、至而麁品を相用ひ可申候。

但、御停止之衣類・頭巾・袖へり・巾着・合羽之ゑり等に相用申間敷事。

一、於江戸御供・御使・御給仕等相勤候御徒並以上云々。

付札。於江戸御供・御給事等相勤候御徒並以上之人々茂、隨分麁服を用ひ、京羽二重等惣而唐糸織之類は堅無用に可仕候。其外之詰人者猶以之事に候條、絹・紬之外は一向無用可仕事。

同斷。江戸表御式臺を初、御表向都而綿衣等麁服可致着用候。御見廻懸之御客等は、御給事にも綿衣等御貪着無之候間、勝手次第可致着用候。足輕以下は御門外たりとも綿衣着用、刀・脇指拵金銀相用申儀者可爲無用旨、明和九年御參勤之節以來、度々被仰渡候得共、何となく緩候條、右之趣尙更嚴重に相守可申候事。

一、近年男向は麁服茂着用之人々少々相見に候得共云々。

付札。本文等之趣彌相守可申候。近年者別而女中之衣類以之外花麗に相成候條、絹・紬より宜敷品者着用爲仕間敷候。帶等も唯之麁品を相用候儀堅致間敷候。櫛・かうがい等宜敷品を相用候儀無用可仕候。召仕候女共之儀、猶更嚴重に可申渡候。

一、町人百姓は奉行支配人より嚴重に申渡候躰には候へ共云々。

付札。町人百姓近年別而花美に相見へ、妻子等者勿論之儀に候。ヶ様之儀無之樣、奉行支配人より急度可申渡候事。

同斷。本文等之趣猶更相守、町人等之妻・娘等衣類を初、別而花麗に候間、向後は紬・木綿着用可爲仕候。絹類を帶に用ひ候儀は各別、其外堅御停止候條、町奉行等より嚴重可申渡候。

但、惣而紗綾・ちりめん等を初、唐糸織之品々商賣不爲仕、且衣類にも不限、かんざし等に金銀之細工不爲致樣、其外櫛・かうがい等も、結構成品々爲致商賣申間敷旨、町奉行等より申渡等に候。

一、饗應之菜數之儀雖爲歷々之面々、押立候振廻は云々。

付札。婚禮を初、祝儀事等參會不仕候而難叶儀は各別、其外之儀者勝手取直し候迄者、當分參會遠慮可有之事に候。但菜數之儀、本文より者猶更輕く可相心得事。

同斷。本文之趣當分饗應樣之儀者可致無用候。御用に而寄合候とも、可成程は食事相調候而

參出可致候。若時刻移可申躰に候はゞ、湯漬飯指出可申候。尤稽古事等に而參會之儀者猶更之事に候。右之通に候へ者、濃茶出候樣成儀無之段は勿論之事に候。

一、小身並輕き人々者、假令家督婚禮等之重き祝事に而茂云々。

付札。本文之趣大身小身とも家督等幷婚禮等之都而祝事に而、一類等祝儀に罷越候とも、のし・吸物・酒・取肴迄に而相祝可申候。若時刻移候はゞ、湯漬飯迄指出可申候事。

一、押立たる茶之湯之參會可有遠慮事。

付札。前條付札之趣に候間、此參會猶更當分遠慮可有之候事。

同斷。本文付札之通當分遠慮可有之候。

一、家作之儀茂前々御定有之儀に候云々。

付札。家作幷修覆之儀、隨分質素に可致候。當時家作者麁相に候而も、居間等勝手向に丁寧を盡し候人々も有之躰に相聞え候間、外見のみに不拘、內外麁相に可申付候。

一、一通り之音信贈答一向無用云々。

付札。音信贈答之儀、家督婚禮等之外は、身近き親類等に候とも、當分は堅く指止可申候。右之節祝儀物取遣不致候半而難成砌は、本文之通輕き干肴迄贈答可致候。

一、婚禮之支度、去辰年年寄中申談候趣茂候得共云々。

付札。本文之通猶更可相守候。近年は婚禮にも不限、養子に遣候にも、部屋料等遣候者も有之躰に候。か樣之儀堅く無用可致候。此儀は頭・支配人兼而相心得、嚴重に可申談候。

一、三月之雛・破魔弓、五月之菖蒲甲云々。

付札。雛・破魔弓・菖蒲甲等、只今迄有來候分は各別、新に買求候儀可爲無用候。尤親類等之内に、雛等相贈候儀當分無用可仕候。

但、上方等より雛取寄爲致商賣申間敷与、商人共に申渡候樣、町奉行に申渡候。

一、年頭之規式を初、五節句等之祝儀云々。

付札。本文之通、規式之儀隨分省略可致候。勿論年頭・佳節・歲暮祝儀物、親子兄弟たりとも當分指止可申事。

一、葬送法事等茂至而輕く云々。

付札。本文附札之通猶更省略可致候。寺院にも兼而比樣子申聞候樣、寺社奉行へ申渡候。

一、群集之邊、其外爲遊興寺社方・町屋等をかり相越候儀云々。

付札。本文之趣堅無用に候。爲遊興寺院幷町屋等堅くかし申間敷旨、寺社奉行・町奉行より申渡候筈に候。

一、人馬は身代相應に所持可仕儀に候得共云々。

付札。本文之通相心得可申候。且又長柄傘之儀、以前者爲持候者茂少く候處、近年者多相見え候。ヶ樣之儀者無用之費に候間、人々遠慮可有之事。

同斷。人持之面々、火消當番は各別、其外者馬爲牽不申筈に候處、近年は猥に罷成候躰に候間、御定之通相守可申候事。

同斷。御供道中常旅行之節、近年人多に召連候躰に候。向後一統、身上より者成次第人數減少召連可申事。

同斷。本文幷付札之通相心得可申候。且又小身之人々は頭分たりとも、當分時により鑓爲持不申候而も不被及御貪着候。平士等之内至而小身之面々は、是又御番所役所ゟ無僕に而致往來候儀有之候而も不苦事に候條、か樣之儀は人々勝手に相任せ可申候。

一、鷹所持仕度存候者は云々。

付札。鷹所持之儀本文之通に候處、近年小身之人々茂所持仕候躰に候。向後小身之者共者勿論、大身に而茂不勝手之面々は、鷹所持之儀遠慮可仕候事。

同斷。本文幷付札之通可相心得候。近年は小身之面々之内にも、かり鷹与名付け、兩三人申合鷹所持候人々も有之躰に相聞候條、堅く可爲無用候。且又陪臣之儀者、猶更嚴重に無用に候。

一、他國往來之節爲餞別參會、又は發足前音物云々。

付札。本文之趣近年猥に相成候條、猶更當分無用仕事。

一、人持を初、高知之面々近習に召仕候輕き並之者有之云々。

付札。給銀之儀、享保十四年閏九月相觸候趣彌相守、高給銀に召抱申間敷事。

但、女給銀之儀、近年別而猥に相聞候。不都合之至に候間、高給銀等遣候儀無之樣急度相心得可申事。

同斷。本文之趣、近年者自然与衣類等迄も宜敷、彼是与餘情有之候故、給銀・給米等高直に有附不申而は難成樣に罷成候。主人さへ平日綿衣を着用仕儀に候へ者、家從之儀者不及申事に候條、麁服を爲致着用可申候。給銀前々より之御定も有之候。當時者猶更世柄惡敷、勝手難澁之時節に候間、右御定より高給銀召置申間敷旨、可申渡候。陪臣之儀も同樣に可申渡候。

〔坂井舊記〕

今日人持中を初一統申渡候趣に付、御請之儀年寄中一組切物頭迄連名、月番之充處に相調、越後屋敷ゟ可有持參候。幼少病氣等に而登城無之面々者、其組筆頭より御書出等之趣相達、且又一列に御請相調可被申候。幼少に而判形も難成人々者、代判人より別紙に御請可被指出候。諸組頭等之分も右之趣に被相心得、組・支配之人々御請之儀は其頭々ゟ被取置、其趣右御

請書載可被申事。

御家中儉約之儀今般御書立を以被仰出候に付御渡、謹而奉拜見、且又享保十四年被仰出候儉約之儀此度御付札之趣、幷各御別紙委細奉得其意、急度相守可申候。此段支配之人々にも嚴重に申渡、御請私共方に取置申候、以上。

丙寅四月五日

戸田與一郞

稻垣與三右衞門

奥村助右衞門殿

四月二日。前田土佐守儉約の實行に關して書を前田宗辰に上る。

〔前田直躬內密手記〕

今般以御書立、儉約之儀を初風俗之儀迄被仰出、則昨日何茂申渡有之、奉承知候。誠に御結構成被仰出、一統難有儀御座候。就夫何とぞ仕候而も、年寄中存寄行屆不申儀粗相見え申候。兼而も奉達御內聽置候通、畢竟年寄中幷私式より、內外行狀不及迄も相愼不申候はでは、組中及末々迄風俗も行屆申間鋪哉と、乍恐多儀奉存候。私儀組をも御預被遊候儀に候へば、何とぞ組中も心服仕候て、何廉違背不仕樣に仕度心底に罷在申候。今度被仰出に付ては、私身之上之儀は、各別に質素に仕度儀內存御座候。併大和守等を初組頭之面々、衣服等も左程に

無之所、私一人立之儀も却て我意之樣にも相見え可申哉難計奉存候。何とぞ組中等へも風俗推移度儀奉存候。此儀不奉得御内意候半では、粗我意之仕形に相聞候ては、其詮も無之儀に御座候。並を越候程にても、風儀宜筋は不苦思召に御座候得者、何分にも存寄之通に仕度儀奉存候に付、乍恐奉得御内意候、以上。

四月二日　　　　　　　　　　前田土佐守　判

四月二日。總姫富山侯前田利幸に入輿す。

〔政隣記〕

四月二日。總姫樣今日出雲守樣に就御婚禮、昨朔日從御中邸御上邸に御移、今日四半時頃御出輿、大御門より本鄕通出雲守樣御上邸御廣式に御入輿。御輿渡御家老西尾隼人、御貝桶渡人持組御近習富田次太夫、此外騎馬御近習組頭富永數馬、御先手御近習原宗兵衛、御附頭寺西彌八郎勤之。御迎前田大和守殿、御送柳生但馬守殿、御扣一柳土佐守殿也。右之外御行列幷御作法等、元文五年繁姫樣御婚禮御同格に候事。

四月四日。富山侯前田利幸本鄕邸に聟入の儀を行ふ。

〔政隣記〕

四月四日。甘子餅御取遣御作法も、多分元文五年之御例也。

同日御聟入、奧方樣御鄕披、御作法是又右同斷に而、出雲守樣ゟ盃之節、御刀備前助守代金十枚、御脇指備前政光代金六枚、鞍置馬栗毛足春日山、例澤村、新川郡嘉五才二寸五分。被進之。御供御家老富田筑後、御用人生田藏人御料理被下、太刀馬代献上、御目見被仰付、御盃被下。其節筑後ゟ祐定代金五枚、藏人ゟ高田代金三枚五兩之御刀被下之。從出雲守樣御盃、大和守・隼人・新兵衞・次太夫ゟ被下之。將又五百八十之餠御雜煮大和守等ゟ被下儀等、御作法も都而元文五年之御例也。

一、御聟入に付、從出雲守樣被進物左之通。

中將樣ゟ御太刀馬代金一枚・二種千疋、預玄院樣・淨珠院樣ゟ二種・五百疋宛、但馬守樣ゟ御太刀馬代銀三枚・一種、勢之佐殿・揚姬樣・斐姬樣ゟ一種・五百疋宛、眞如院殿ゟ一種・三百疋。

一、御里披に付從奧方樣被進物左之通。

中將樣ゟ御卷物十・二種一荷、預玄院樣・淨珠院樣ゟ二種・五百疋宛、但馬守樣等御四方ゟ一種・五百疋宛、眞如院殿ゟ一種・三百疋。

一、筑後等に指副來候山田五左衞門儀、御目見被仰付、紗綾二疋、奧方樣御供之頭分兩人も同斷白銀三枚宛被下之。其外寬保元年正月十八日繁姬樣御里披等之御同格に候事。

〔政隣記〕

四月六日。前田宗辰富山侯前田利幸の邸に舅入の儀を行ふ。

舅入を行ひしは前田宗辰にして總姫の兄なり

四月六日御舅入に付、出雲守様江九時前より被爲入、但馬守様幷前田信濃守殿・前田帯刀殿・徳山五兵衛殿・横山内記殿御相伴也。

御持參に而被進候御道具、御刀延壽國泰（代三百五十貫）、御小脇指信國（代金十枚）。

一、大和守等四人被爲召、參上之處、御料理・御盃左之通被下之。

縮緬三卷　横山大和守

御刀平國（代金五枚）　西尾隼人

御刀兼有（代金三枚）　富田次太夫

紗綾二卷　河地平左衛門

一、就御舅入に、御使者闘番河地平左衛門を以左之通被進之。

従中將様、

出雲守様江、御太刀馬代金一枚・二種・千疋・御目録。

奥方様江、紗綾十卷・白銀十枚・二種・一荷・御目録。

お降様・お薬様・お藝様江、一種・五百疋・御目録宛。

但馬守様より、

出雲守様江、御太刀馬代銀三枚・一種・御目録。

奥方様江、一種・五百疋・御目錄。
勢之佐殿・楊姫様・斐姫様より御兩方様江、一種・五百疋・御目錄宛。
眞如院殿より御兩方様江、一種・三百疋・御目錄宛。
一、御舅入に付、御兩方様江御使者御附物頭並を以、從預玄院様・淨珠院様も二種・五百疋宛被進之。
一、御披以後、御禮御使者御歩頭大河原八郎左衛門被遣。
右之外可記儀可有之處、本書に無之。

四月十六日。儉約勵行につき一門間に使者の派遣進物の贈答を廢せしむ。

〔政隣記〕

四月十六日。
一、當分嚴敷御儉約被仰付に付、御一門様初御使者御斷被仰達、御進物御内々たり共御斷被仰遣候。御書之御禮或者年頭抔は格別、其外者堅御斷に而、聞番より奉札に而相濟申筈に成。
今日より夫々聞番より奉札に而被仰遣候。

四月十六日。幕府前田治脩の出家を許す。

〔政隣記〕

四月十六日。

一、御國許に被成御座候末之御舍弟樣御出家御願之儀、此間御用番に被仰込候處、御願之通相濟。

末之舍弟は前田治脩、當時の名は時次郎

四月廿三日。幕府の巡見上使金澤に着す。

〔大野木克寛日記〕

四月廿三日。今日巡見上使大久保堅兵衞殿・筑紫宇兵衞殿・山岡五郎作殿當地御到着、萬端舊例之通に候。地黃煎町より御越、爲御迎年寄中・御家老役以下夫々役人中各差向、當町菅波屋三郎兵衞・紙屋九郎右衞門・かねや九兵衞家に御止宿。小松御城巡見不被成候由、定而當御城も下見分は被成間敷候。然共御城内物頭・聞番等之事、夫々内ならしは有之候。委細追而可記候。

〔大野木克寛日記〕

四月廿四日。今日辰下刻頃段々上使御發足、今晚津幡に御止宿之由。御迯申候儀昨日御迎之儀に准候由。委細追而可記候。

四月廿五日。堀多仲太その父大小將組堀治部左衞門等を殺害す。

〔政隣記〕

四月廿五日於金澤。今晩御大小將知行高二百石堀治部左衞門嫡子多仲太、不行狀者に付、先年其節之頭承屆押込置候處、縮所家ねを破出、治部左衞門帶刀を以、治部左衞門夫婦并當時嫡子に願置候二男豐次郎を切殺、治部左衞門妾にも深手負せ、下女・小者にも少々宛手疵負せ候處、若黨并長屋借逃出、同苗與一右衞門ゐ及案内候に付、一類共罷越なだめ、帶刀を取番を附置、其内頭勝尾半左衞門其外御小將頭・御番頭中罷越、口書等爲仕、夫々取噯、爲檢使御横目笹嶋市右衞門・澤田忠太夫參出見屆。死骸共爲取置候儀者、御月番御指圖に而相濟。多仲太儀者、逆罪之者に付牢揚屋ゐ被入、縮駕籠に乘せ、一類堀萬兵衞・片岡七左衞門指添、公事場ゐ相越之。妾・下女・小者は夫々請人共ゐ相渡候樣、御月番御指圖に而相濟。但御吟味之上多仲太六月四日より禁牢。

六月廿二日御親翰の內。

〔袖裏雜記〕

前には多仲太に作る

堀他忠太

逆罪至極之者に候間、生胴申付者也。

六月

他忠太近き續小塚隼太遠慮、他忠太娘二人門外ゐ不出樣堅可申付旨被仰出。七月八日申渡。

堀與一右衛門茂此一類に見えて、同日指扣被仰付。委細之首尾不見。

〔政隣記〕

七　月

堀　與一右衛門

右今月八日與一右衛門儀、堀治部左衛門前々より不所存亂行之樣子被聞召候、與一右衛門儀者役儀も被仰付置候者之儀に候得者、急度可加異見處及猶豫候故、加樣之大變元來右之一品より事起候樣子、旁不似合事被思召候。急度可被仰付候得共、遠類之儀故其儀無之候。自分に差扣罷在可申旨被仰出候條、此段與一右衛門に可被申渡旨、支配頭・寺社奉行に御月番仰被渡、則申渡。今年十二月十六日指扣御免許。

〔政隣記〕

多仲太の處刑は前文に六月とあり

十月十三日於金澤、堀故治部右衛門跡御貸着被遊間敷旨、月番前田對馬守殿御小將頭に被仰渡。附、治部右衛門せがれ多仲太、於公事場今月廿六日生胴に被仰付。

四月廿八日。前田治脩越中古府勝興寺の住職に定めらる。

〔政隣記〕

今月は四月

時次郎殿古府勝興寺御住職之儀、今月廿八日於金澤、右寺家臣野呂要人等に、月番年寄中よ

り申渡有之。五月朔日出仕之面々ゟ茂右之段月番御演述。

四月廿八日。儉約につき當分一門來邸の際その從者を饗應せざることに改む。

〔政隣記〕

四月廿八日今般御儉約に付、御一門樣御出之節、御供人ゟ御料理不被下。御旗本衆朔望等御料理之内、御酒之上御吸物當分相止。

四月廿八日。領内の鄕村高辻帳を幕府に上る。

〔諸事留帳〕

一、御領國鄕村高辻帳四冊　一箱

右御帳面秋元攝津守殿ゟ持參仕、役人大澤九郎左衞門ゟ御領國鄕村高辻帳之旨申述、下帳共相渡候處、扣候樣申聞、重而罷出、攝津守儀只今以之外御用取込罷在候。御帳面四冊、下帳共請取置申候。得与しらべ候而相違申に而可有御座候。若御尋申品茂御座候はゞ、追而可得御意旨、九郎左衞門申聞候。途中御城使御徒高橋甚兵衞差添持參仕候、以上。

四月廿八日　河地平左衞門

四月、町民に對し儉約の實行を令す。

〔坂井舊記〕

今般御書立を以御家中儉約之儀被仰出候。就夫近年町人共家業に怠り、奢侈甚敷作法不宜躰被聞召、自今急度相愼可申候。町人は以利潤生計仕儀勿論に候得共、貪高利候儀堅仕間敷旨可申渡由、是亦被仰出候間、急度相守可申候。

一、商賣物之儀隨分下直に相成候樣相考、賣買可仕事。

一、破魔弓・菖蒲甲、前々申渡候通麁相成を賣出し可申候。金銀之箔を用候破魔弓・甲・作物・人形等、何方より誂候共仕間敷候。勿論商物拵置申間敷事。

一、呉服物幷雛・扇子・たばこ入、女中之櫛・かうがい等之類、結構成を商賣に仕間敷事。

一、町人共嫁娶之儀、衣類・道具等に至迄不相應之樣相聞え候。是等之儀者別而奢たる事に候。急度相愼可申候。若承及候儀於有之者、嚴敷遂詮議可申事。

一、衣服之儀、侍中歷々之面々に而も、絹・紬以下用申儀に候間、假令身上宜者にても、ふし絹・紬以下之麁服可申候。輕き町人共召仕候手代・下女之類者、木綿・布之外一切着用仕間敷候。但妻・娘衣類之儀者、右に准申儀に候。帷子も縫・寄金之類勿論着用仕間鋪候。若宜品、かぶきたる衣類致着用徘徊仕候はゞ、町廻足輕承屆申筈に候事。

一、神事・開帳等群集之邊、爲遊興寺庵等借罷越候儀、堅仕間鋪候。右群集之邊町屋見世等貸申候儀堅仕間敷事。

一、町醫師之儀、前々衣類紗綾・綸子等用來候處、唯今改候儀、輕き醫師抔難澁におよび申儀に候條、有來候分者いつ迄も用ひ可申候。自今拵候品者、絹より上之品は可爲無用、妻・娘等之儀は可爲町並之通事。

但、座頭之儀も可爲同前事。

一、役者共之儀、侍中押立候祝儀事に而役儀相勤候時分、絹小袖等着用可爲勝手次第候。平生之儀は、一統之通相心得可申事。

右今般町中ゟ申渡候趣如此御座候。此等之趣嚴重に相守候樣可申渡候、以上。

四月　　　　戸田與一郎

　　　　　　稻垣與三右衛門

奥村助右衛門樣

四月。小堀左兵衛等三人に儉約方御用を命ず。

〔典制彙纂〕

小堀左兵衛・原宗兵衛・和田平左衛門儀、御儉約方御用被仰付候付而、別紙被仰出之趣被得其

意、組・支配之内役懸等之人々江可被申談事。

四　月

今般御儉約之儀嚴重就被仰出、心附候儀追々御近習頭などへ及示談候人々茂有之候旨被聞召、尤之儀被思召候、從前被仰出之通、猶更何茂致和順僉議可仕候。和順無之候而御爲に成申間敷候之間、頭々は一組切と不相心得申合、詰人も相減御用辨候樣可致示談候。割場・會所・御作事所等も、其場切之僉議迄に而者行屆兼可申候間、指寄相互に致熟談、御入用分減候樣可仕候。たとへば於割場、足輕・小者等渡方も、末々之勤方知兼候を無味に減可申などと申候而者、調申間敷候。申談は無之候共、今般之御儉約に付、其手々々に而當分相省、つかへ申節は又及示談申樣に無之候半而は難成事に候。侍詰人之儀も、一度被減候而者、重而難相增とは相心得申間敷候。つかへ候者相伺相增申儀も可有之候。惣而此度就御儉約僉議之趣、重而伺替候儀は御聞屆可被遊思召に候條、其所無泥幾重にも熟談仕、小堀左兵衛等迄可申聞候。

右之趣一統可申聞旨被仰出候條、諸場・諸役人者勿論、其餘之面々茂一統得其意可申合候事。

於江戸小堀左兵衛等御儉約方御用主附就被仰付候、別紙之通被仰出候由に而、大和守等より到來に付、則寫兩通相達候條、御當地之儀も江戸表之趣に可被相心得候。尤組・支配役懸等之

人々にも、夫々可被申談候事。

五　月

四月。先に越後と加賀藩領越中との境界の爭議交涉に關し功ありしものを賞す。

〔大應公年表〕

一、四月。去年越中越後上呂・大平木山御境目公事之刻、罷越候杉浦權佐・行山傳左衞門、於越後屋敷白銀五枚充拜領被仰付候。於御算用場白銀一枚御算用者金子源太夫、同二枚充能美郡御扶持人今江村源助・新川郡御扶持人天正寺十右衞門、黄金一兩奥山廻太田本江村惣兵衞各被下之。

五月十二日。百姓の行狀に關して令す。

〔上田舊記〕

覺

一、諸郡百姓妻子末々頭振迄茂、改作之御法忘失不仕筈に候處、年々ゆるかせに相成、心得不宜者茂有之、別而金澤廻り幷小松・高岡等、其外附近村々之百姓共、町人或は遊人之躰を見習、次第に風俗惡敷相成、百姓不相應之趣多、殊更不謂公事沙汰を好み、手筋を求め諸役人

之名をかり、右手入之儀を申立、小百姓をたぶらかし、賄賂を取渡世にいたし、宜敷百姓之心立をも馴そこなひ候者有之段相聞候條、諸郡御扶持人幷十村等嚴重に遂僉議、右不屆之族於有之者、早速其段可及斷候。若不吟味にいたし置、此方より呇候はゞ、其組裁許廻り口迄も可爲越度候條、自組之儀は不及申、他組之儀も相互に相糺可令穿鑿事。

一、諸郡百姓頭振迄用事有之、御當地へ罷出候刻、其組之裁許十村へ相斷、十村より其節之改作所へ相達候樣申渡置候處、今以無斷潜に御當所へ罷出居申も有之由相聞得候條、組々遂詮議、右之族無之樣急度可申渡候。勿論金澤旅人宿へ、切々押者共足輕相廻し、委細承屆、若疑敷者有之候者、召捕可遂吟味候間、諸郡とも此趣令承知、猶更嚴重可相心得事。

一、無謂諸勸進に入儀、跡々より御停止之儀に候處、近年別而漫に相成、人に被賴勸進之取持いたし、令馳走者有之由に候。依之去年も嚴重申渡置候處、又々所に寄諸勸進立入候處も有之旨相聞、沙汰之限りに候。急度遂詮議、右之趣無之樣可制禁事。

附、心得違之者も有之、俗人之身として佛法を語り人を勸め候ものも有之由、不屆至極之儀に候。向後寺庵道場之外、俗家に而人を集、農業之障を致すもの於有之者、急度遂吟味曲事可申渡候條、此段末々迄不相洩樣に申渡、令吟味、非法之儀無之樣に可相心得事。

一、御郡等諸請負人之儀、百姓分者不相成儀に候所、近年漫成族茂有之に付、毎度心得違之

族無之様申渡候處、御郡方今以密々請負いたす者有之、表向は町人・頭振之名に而、内々者百姓相勤候もの有之由相聞候條、組々急度遂吟味、不屆之者無之樣に可相心得事。

一、改作奉行幷御郡奉行には勿論、其外御郡ゟ罷出候諸役人家來等ゟ對し、百姓・頭振末々迄、彌以不作法慮外之仕形無之樣に、急度可申渡候。且又諸奉行等之家來共、主人之威をかり驕り申族も有之由、且又飯米・野菜等相求め候代物、幷宿賃・駄賃錢等、其主人々々より相渡候を中に而押掠、夫々不相渡者も有之樣に相聞候。右不作法之族有之刻、たとひいづれ之奉行役人之家來等に候共不及遠慮、早速其段裁許之十村ゟ有躰に可申出候。十村よりも其段早速拙者共ゟ可及內達候。末々に而右躰之族有之候而も、其奉行人を憚り、又者後難を恐れ、無是非不申顯ものも有之躰に候間、無遠慮有躰に申聞候樣可申渡候。此等之趣末々迄能合点いたし候樣、委細可申渡候事。

右之趣嚴重に申渡、請書付可指出者也。

丙寅五月十二日

山本長太夫
吉岡理太夫
小谷兵左衞門
熊谷四郎兵衞

片山傳左衛門
上使御用 寺西源太左衛門
同 斷 三輪清左衛門
在大阪 横山三郎兵衛
同 斷 芝山三郎左衛門
諸郡御扶持人・平十村・山廻り中

五月十二日。犯罪に對する刑罰の裁量は寶永以前の例に據るべきことを令す。

〔前田貞幹手記〕

五月十二日御夜詰、外記・隼人。

一、御用有之候間、暫見合退出不仕樣に、杢左衛門演述に付、五打暫見合罷在候處、以同人被仰出候趣は、向後公事場御吟味物先例、寶永年中より已前之趣に而相伺可申候。以前に而見當り不申候はゞ、近例も考可申候。此儀今般赦被仰付候者共以後、此通心得候樣に可申遣旨被仰出、奉畏候旨御請に及。

五月廿六日。京都紫野芳春院に前田吉德の位牌を置き石塔を建つることを許す。

〔袖裏雜記〕

紫野芳春院より、護國院樣御位牌幷御石塔御造立被成下候樣仕度之旨書付――松雲院樣御時分ゟ御一周忌之節御造立被仰付、御勝具等も出來、爲御供養料白銀十枚被遣候旨等、五月十一日伺之處、松雲院樣御時分之通と同月廿六日被仰出。

六月六日。前田治脩名を尊丸と稱す。

〔前田貞幹手記〕

時次郎殿御名之儀、勝興寺代々兒名之通、尊丸殿と稱候樣仕度旨、幷今年中御入院候樣仕度趣、野呂要人書付兩通、寺社奉行紙面相添出候付、進之候條可有御伺候。御名替之儀被仰出候者、其段以原九左衞門等時次郎殿江可申上候。且又御入院之儀は被仰出次第と奉存候、以上。

五月七日　安房守

三人樣

右致承知、御紙面等入御覽相伺候處、御名之儀は御勝手次第、御入院之儀者御幼少に候故、御附人等無之候ば而者成申間敷哉、原九左衛門等遂僉議、追而相伺可申旨被仰出候條、被遂御詮議御伺可被成候、以上。

五月廿一日

右三人

安房守様

大和守

〔大應公年表〕

一、當六月二日御城中御番人に年寄中被仰出之旨申渡す。如左。

時次郎殿、今般勝興寺後住職に付、御城中御通之刻、寺格之通可相心得旨被仰出候。

〔政隣記〕

今月六日より時次郎殿御名尊丸殿と御改。

今月は六月

六月七日。能登越中に砂を降らす。

〔政隣記〕

六月七日越・能之内砂降木の葉に溜り候程降、其砂炭の如く鼠色也。

〔大應公年表〕

本文は政隣記と日附を異にせり

一、六月六日能美に砂降所有り。砂味焔硝ゝ香有与云。越中にはゝ毛降所有与云。

六月八日。前田宗辰諸士の諱として用ふべからざる文字を示す。

〔袖裏雜記〕

御當家通字故只今も指除候樣に承候。

家

家光公以來今以右之通と承候。

光　長　常　高　紀　德

右之七字者、家中之人々實名に可指除事に候。公儀に而も右之通に而、我等も共趣に候。家中之者共代々之名乘に附來段者、不敬之樣被存候。此段國元へも可被申越候、以上。

六月八日　　宗辰

前田外記殿

西尾隼人殿

〔續漸得雜記〕

家　光　長　常　高　紀　德

猶以此紙面も國元へ可指遣候、以上。

右七字は、御家中之人々實名に指除可申儀之由被仰出候條、夫々可被申談候事。

寅　六　月

先達而被仰出候實名之儀、唯今迄用ひ來り候通り字之分は不及相改候由、重而被仰出候條、夫々可被申談候事。

寅　六　月

六月十三日。金澤新堅町に災あり。

〔加越能故事問答〕

延享三年六月十三日才川新堅町安江屋と云酒屋之後町より出火、足輕町・新堅町九十七軒燒失。一向宗德榮寺も延燒す。

六月十八日。前田宗辰、有栖川宮の養女と婚約したることを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

中將樣御再緣之御儀、從有栖川宮樣御緣組被爲在候樣に、從政所樣御內々被仰進に付、宮樣御領承被遊。依之西園寺前左府樣姬君樣御養君に被爲成、御緣組可被爲在候由、宮樣仰之趣、諸大夫中より拙者共迄申來。則達御聽候處、忝被思召候段可申達旨被仰出、諸大夫中迄申遣候。右之趣各へも相達候樣にと御內意に付、如斯御座候、以上。

前田宗辰の前室は延享二年十一月晦日逝去したるなり。再緣の婚約は未だ實行せられずして前田宗辰卒去せり

六月十八日　　外　記

大和守初九人様　　隼　人

六月廿七日。諸士の困窮を救濟する爲除知を以て上納及び借銀返濟等に當てしむ。

〔政隣記〕

今月廿七日諸頭筆頭越後屋敷に被召呼、御月番左之御紙面御渡。

御家中之人々一統困窮に付、御救も可被仰付御時節に候得共、御上にも御難澁に付而其儀無之候。依之上納等御用捨、先年之趣を以書上に被仰付、町方等より之借用銀幷買懸銀之分も書上被仰付、右上濟爲返濟之、今年より除知も被仰付候。委細別紙之通候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々にも、不相洩樣可被申渡候事。

右之趣可被得其意候、以上。

寅六月廿七日　　前田對馬守

覺

一、御扶持方代等返上銀事。

一、會所銀知行當り、幷増借、且又去年不時江戸表江罷越候節、七百目當貸渡候會所銀共之事。
一、五斗除御貸銀幷三石除續銀之事。
一、御歸國之節通人馬貸銀之事。
一、元文二巳年以後町方等より之借銀幷買掛銀之事。
右上納等今月晦日迄之分書上に被仰付、此上上濟爲返濟之、今年者先知行高百石に付、草高十石宛之圖り除知被仰付候事。
但來年之除知高追而可申渡候事。
一、聖堂銀・祠堂銀・馬借銀者、右除知之外を以人々只今迄之通返濟之事。
一、向後町方等より銀子借用之節者、頭支配奧書を以借用可仕候。若奧書無之證文を以貸渡候者、返濟滯候而も及貸着申間敷旨、町奉行等江申渡候事。
一、享保十年書上之以後、上納幷借銀・買懸銀等無之人々者、尤只今迄之通五石宛之除知之事。
一、今般百石に十石宛之除知仕候者は、先年五石宛之除知者被指除候事。
一、書上之致方者、享保十年之趣に可相心得事。

一、右之趣に付而、借銀分者不殘當七月藏解有之樣に、町奉行等に申渡候事。

一、右之通上納等書上に相成候に付て、他國等に罷越候人々者、會所銀新に借用指支不申儀候間、此分者格別、是以後御貸銀者貸渡不申候事。

右之趣被得其意、上納幷借銀等之員數一組切に可書出候。享保十年書上以後上納幷借銀等無之人々者、尤其段可書出事。

寅 六 月

六月。能登に於ける幕府領にして加賀藩に預地となり居るもの、納租の慣習に關し上申す。

〔御預地方御用勤方帳〕

松雲院樣御代享保七寅年御預所に被仰渡、御代官日野小左衞門殿より引渡有之、取噯其節相伺候處、御附札を以其趣を以取噯仕申候。御預地方役人勤方之儀、每歲御年貢之內江戶御廻米高相極、御勘定所幷大坂船改御代官衆に申遣、大坂より空船着岸次第、兩積湊柘植儀太夫等之內一人宛・御徒横目一人・御算用者一人・足輕三人宛罷越、米相改船積申付候。江戶着之上御勘定所に相達、淺草御藏所に相納申候。納方御用爲主附、御歩横目一人・御算用者一人・御横目足輕兩人宛、御藏所に罷出申候。儀太夫等詰合之內折々見廻り申候。納相濟候上、御

本文に、幕府領が加賀藩と異なる檢見法を用ひたるを知るべし

藏奉行衆請取手形請候事。

一、江戸御廻米之外者金納に付、如御定十月より翌三月迄に皆濟申付、江戸御金藏へ上納仕、御金奉行衆請取手形申請候。右上納之金子は、江戸會所より御取替に罷成候而、村方より取立、金澤會所へ返納仕候事。

一、毎歳稲出來之上、歩刈爲御用、儀太夫等三人幷御算用者三人・足輕九人、御扶持人・十村召連罷出。仕形之儀は、御勘定所より被仰渡之趣を以、村々相廻り、稲出來善惡之樣子精誠遂吟味、免相極、村方より帳面取立、御勘定所指出申候事。

一、年中御年貢上納拂方等之趣、勘定仕上帳指出、於御勘定所に算用當り有之上、右帳面に御勘定御奉行衆、御吟味方幷組頭與書印形に而相渡り申候事。

諸帳面書付等指上候時節、相極有之指上申候事。

一、村方御普請等有之節者、御算用者一人、御横目足輕・御預地方足輕一人指遣、爲見屆申候。

一、村方不時成儀、幷變死人等、且又火事有之節、御預地方足輕兩人宛指遣、爲見分候而、其段御勘定所へ申上候事。

一、能州府中村に御貸屋有之、爲縮方足輕兩人充、小者一人充、爲相詰置申候事。

一、村方之内庄屋・組頭等、其村之内可相應者相撰、年寄中へも相達候而申渡候事。

一、御所務金之儀、口米石に付三升宛、幷小物成銀百目に三匁宛、毎歳取立、會所御土藏ゟ預ヶ置申候。不殘取立候上、年寄中ゟ相返候事。

一、右爲御用、御算用者六人主付相勤候内、兩人充江戶ゟ爲相詰、一人は御勘定所ゟ罷出、一人は會所方御用爲相勤置申候。

一、御廻米運賃金、幷御普請有之御入用金等は、江戶御金藏より相渡り申候に付、御算用者請取申候。其節御預地方足輕一人相添差出申候。

一、村方御用爲取曖、十村四人主附申渡置候。右四人之者ゟ者、代官口米相渡申候事。

右御預所方等之儀、有增如斯御座候。且又享保十七年差上候帳面扣上之申候、以上。

六月　　　　奥野主水

七月朔日。前田宗辰老臣等に政務を愼むべき内意を告ぐ。

〔袖裏雜記〕

一、新兵衞七月廿二日江戶より歸着、越後屋敷へ罷出、御年寄中・御家老中ゟ密々可達覺書。

先頃以來不當理伺之品共有之候。御政事ゟ懸り候儀者、別而大切成儀に候間、向後隨分被入念僉議有之可被相伺候。諸事各ゟ被仰渡候上は、一つとして洩申儀者無之事故、晝夜心勞与被思召候間、旁隨分御用捨之御心得に候へ共、品により其通難被指置儀も可有之哉と、此所

御氣之毒に被思召候間、能々心を被付候樣にと被仰出候事。
右之趣にて急度被仰出候儀も難被成候處、幸此度私罷歸候付、密々被仰聞候。たとへば古格有之儀者、古例をとくと相糺、當世に引合潤色之程了簡第一之儀と被思召候御樣子に候、各御了簡覺悟次第、御國中一統心得違可申筈に付、日夜此所御心を被爲置候。若各手前御尤とも有之候而者、御爲甚不可然儀故、至而密々被仰聞置候旨御意に御座候、以上。

七月朔日

七月二日。大槻朝元を本多安房守の邸に招きて蟄居を命ず。

〔大應公年表〕

一、七月二日大槻内藏允（三千八百石人持、本多房州の組。）本多安房守宅へ召寄、横山大和守幷小將横目笹島市右衞門・澤田忠太夫立合、蟄居被仰付候旨、房州申渡す。

〔袖裏雜記〕

大槻内藏允儀、安房守宅江相招、來月御用番大和守申談、御横目澤田忠太夫同席にて、左之通右同日申渡。

御手前儀、去年護國院樣御病中之仕方、數年之忘御厚恩、不屆至極被思召候。依之急度蟄居被仰付候旨被仰出候。

右申渡候席に而、左之通安房守演述。

右之通被仰出事に候へば、一通之蟄居と被存候而者、御氣然にも應申間敷候間、萬端被相愼、閉門被相心得尤に候。此段者尙更爲心得申達候。

大槻內藏允儀、今日於安房宅來月御用番大和守申談、御橫目澤田忠太夫同席に而被仰出之趣、別紙之通安房守申渡候處、蟄居被仰付候段者奉畏候。大和守・安房守迄申聞度旨に而、今般之被仰出、護國院樣御病中之仕形、忘御厚恩不屆至極之仕合与御座候段、被仰出之儀には御座候へども、私儀段々結構に御取立之儀に御座候へば、御病中者尙更御氣然に應じ申樣奉心得候而、私幷不破丹下等四人御側をはなれ不申罷在、御大便等之御またじ迄も仕候。御病中御近邊に者、右之者共之外者、三浦左京抔を初罷出不申候。右之存寄故、彼是与諸人被存入候處、不顧候而拋身命奉御看病罷在、萬端御用を承り、不奉背御意樣仕候。預玄院樣より御病躰御尋之御使者之時分も、私に委細御樣子承候樣、御使者へ被仰渡之由に而、私に逢申度旨に候へども、右之趣に而罷出候儀不仕候。其外誰彼私に相尋申度旨申面々有之候へども、罷出不申候。御病中之御儀においては、右申上候通諸人之存入批判且而貪着不仕、奉應御氣然心底迄に御座候。於此儀者何分に被仰出候ても、一々申分御座候。畢竟右之雜說を被聞召候而之儀与奉存候間、急度御吟味被仰付被下候樣仕度候。常々御用之方之儀者、不應御意儀も

またじは處理の義

不奉顧再三申上候。右之通申上、情強成儀申上候とて、頭を御たゝき被遊候儀も有之候。御用之事においては、思召に不應儀不顧申上候。私身分之事においては、如何樣之儀に而も奉應御意候樣に仕候。近年御時節柄に候處、度々之御加增、難有ながら何共迷惑至極仕候へども、何角与申上不應御意時者、却而如何に奉存候故、是又人口不顧其度々御請仕候。右之存寄に御座候處、今般之被仰出にては當惑仕候。此座を退不申覺悟にて罷在候間、右存寄之趣を僉議候樣再往申聞候付、段々申分之通には候へども、御上雜說抔に而可被仰出樣者無之候。如何樣之趣被聞召候哉、其御樣子は難計儀に候。右申分之通は、拙者共承り置申儀に候間、先被仰渡之趣奉畏、急度蟄居可仕旨、私共兩人申聞、澤田忠太夫儀も右之趣申聞。早速御請仕可然候。いつ迄申達候ても事濟申儀に而無之旨申聞候へども、覺悟相極罷在儀故、八つざきに被仰付候ても、其儀者少も不奉顧候間、遂僉議候樣にと申聞候付、何分に申聞候ても、只今彼是与申儀は罷成不申候。奉畏段速に御請申上可然候。蟄居之儀には候ても、右之存寄者紙面に相調、組頭迄追而相達候而も成可申儀候旨申渡候處、紙面指出候儀者如何奉存候。とくと了簡仕候へば、ヶ樣に被仰出候も、護國院樣之御儀奉抛身命候而之致方に付而之被仰出に御座候へば、是又御奉公之其一つと奉存候間、被仰出之趣何分奉畏旨申聞退出仕候、以上。

七月二日　　安房守

七月四日。前田宗辰武術の師範等に賞賜す。

〔政隣記〕

七月四日御近習に召仕候前髮有之人々八人、小判十兩宛被下之。山崎次郎兵衞御太刀御指南申上、每度御稽古御用罷出、骨折太儀思召候由御意之趣、於御次富田次太夫等申述、御内々白銀十枚被下之。御打太刀御用相勤候御步渡部彦太夫にも、白銀二枚被下之。高桑五兵衞御馬術御指南申上候に付、御内々金五兩・御袷・縮被下之。中嶋小兵衞御鉄炮御指南申上候に付、御内々晒布二疋被下之。

七月廿五日。前田宗辰寶生大夫より翁傳授を受く。

〔政隣記〕

七月廿五日翁御傳授被遊候。當日迄之御請也。寶生大夫幷寶生彌三郎・松井十左衞門・波吉宮門・同三藏早朝より罷出。武田杢左衞門御前伺候。山岸彌三太夫・久田清次郎に千歲傳授被仰付。

八月四日。清水次郎太夫不行狀を以て能登島に流さる。

〔袖裏雜記〕
別紙之通可申付候。文法ニハ先右之通ニ而も候半哉、猶更加了簡候樣、國元へ可申越候、以上。

八月四日　宗　辰

前田外記殿
西尾隼人殿

清水次郎太夫

先年不行狀之儀有之候へども、其品被及用捨、長病之趣に而縮所に罷在候所、忘其高恩不愼之儀數多有之旨相聞ニ、依之能州嶋之内ニ遠嶋申付者也。

清水市之助

父次郎太夫儀不行狀之儀有之、先年より縮所に罷有候處、不愼之儀有之旨相聞ニ、左候はゞ急度相諫、不埒之儀無之樣に彌可相守所無其儀、法外之趣共、其上兩刀も取失候仕方、背士道中段不届至極候。依之越中五ヶ山へ流罪申者也。

八月五日。貸銀裁許堀六郎左衞門の職を免じ遠慮を命ず。

〔大野木克寛日記〕
八月五日。御貸銀裁許與力堀六郎左衞門、昨日與力裁許青山將監宅ニ召寄、御貸銀裁許勤方

不宜に付、右役儀御取放遠慮被仰付候旨申渡之。右六郎左衞門は、本多圖書與力知行百石、近年右役儀に付種々奸曲之仕形、分限不相應家作等、奢侈之様子普人口に有之候。

八月十二日。藩侯に對する献上物の手續を簡易にすべき令金澤に達す。

〔大野木克寛日記〕

一、昨十二日御觸到來、左に寫之。但御儉約年限とは、當春被仰出候五ヶ年の間之儀也。

御吉事之砌至而重儀者各別、一通り之儀に者年寄中を始、惣代使者幷飛脚を以獻上物に不及、幸便に御祝儀可申上事。

但、唯今迄惣代使者之分飛脚指出、惣代之飛脚分者幸便を以可申上候。人持中も右に准可申候。

一、年頭幷家督・役儀・婚姻等御禮、前々以使者獻上之分者使者不及、於金澤表可有献上候。但員數者可爲只今迄之通候。箱肴者代金百疋、諸方御土藏ゐ可有上納候。家督等御禮江戸表へは、紙面目錄迄可差上候。

附り、前段々之通使者之分は飛脚を以、飛脚之分は幸便之事。

右今般御儉約被仰出候其年限之內、右之通可相心得旨被仰出候條、可被得其意候事。

寅　八　月

八月廿六日。前田宗辰家督相續を祝する爲閣老等を招請す。

〔政隣記〕

八月廿六日。御家督爲御祝儀御老中御招請、御作法前々之御格。御老中堀田相模守殿・西尾隱岐守殿、若御年寄本多伊豫守殿・堀田加賀守殿、此外御役人十二人。御自分御祝に候故、白洲見物者不被仰付。御大書院御舞臺左之方木之下に捨石二つ居る。御休息之間御庭に、石燈籠幷石之御手水鉢居る。如例御庭江も御出可被成哉与御用意有之候得共御出無之、於御休息之間に御慰に出候御道具者御覽有之。

一、竹田權兵衞出府有之に付、祝言御能勤之。御樂屋間札之儀段々僉議有之處、彌三郎初御手役者は內々張候得ども、權兵衞者家本同事各別之譯有之、間札外に張之。尤公義大夫之並に者無之、御手役者之上に而、外に張之。御干菓子被下之。公義大夫江者御檜重被下之。

一、今朝今日之儀に付、御老中酒井雅樂頭殿より、以御使者鯛一折御贈越之事。

一、堀田殿等九時過御出、八半時頃御退出。御跡能相濟御一門樣等御退出者七半時頃也。

一、翌日御用主付富永數馬・平田外記・三輪藤兵衞其外頭々等江、御首尾能相濟御喜悅之旨、御家老を以被仰出。前々之通。

九月二日。前田宗辰の命によりて國境に關する諸規定の寫を上つる。

〔國事雜抄〕

御定書類不殘寫候而、其役々より差上候樣に被仰出候由被仰渡、奉畏候。直に御近習頭中迄上之可申旨、委曲御紙上之趣奉得其意候、以上。

八月十七日　　津田右膳

横山大和守樣

御定書類寫

一　番。御關所通人御定書。

二　番。津出津留之御定書。

廿一番。通鷹御書。

廿五番。江戶へ鐵炮通候紙面。

廿六番。同斷。

廿七番。同斷。

十二番。遠所御門通手形之趣紙面。

十五番。御關所忍人之趣紙面。

四十四番。御關所往來并火事之砌窺紙面。

八　番。目安上様御定書。
廿四番。境百姓居屋敷年貢御用捨之紙面。
四　番。百姓衣類等之御定。
六　番。不受不施日蓮宗御觸。
七　番。境成立之儀に付願書面。
五　番。人宿幷牛馬之儀御覺書。
十七番。境附足輕鐵炮稽古之御定。
四十五番。宿無之者御觸紙面。
右御定書之類不殘寫上之候樣に、御月番横山大和守殿被仰渡候に付、則寫上之申候、以上。
丙寅九月二日　　津田右膳判
御近習御頭衆中

九月二十日。前田吉德夫人の廿七回忌法會を江戸傳通院に執行す。

〔德川實紀〕
九月廿日。こたび光現院御方（常憲院殿御養女松平若狹守吉德妻）廿七回の周忌法會により、香賫の銀廿枚を奠せられ、奏者番秋元攝津守涼朝代拜として傳通院に參る。

九月二十日。前田宗辰家督相續を賀する爲一門を招請す。

〔政隣記〕

一、九月廿日爲御家督御祝儀、御一門樣幷松平土佐守殿・藤堂和泉守殿・小笠原右近將監殿等、萬石以上之御大名二十餘輩御招請。其外御旗本衆百人餘、坊主衆其外百人組與力・同心等七十人計被爲召、白洲見物被仰付。御出入町人五百八十四人。(如前々御菓子・御酒被下之、不殘札持也。)

一、同日御客五時過より段々御越、七半時前御退出。御上客方御能之内御所望に而御庭御見物。御能五番。翁權兵衞勤之。

一、同日一統熨斗目着用。

十月十一日。前田宗辰、德川家重より領國の判物を受く。

〔政隣記〕

十月十一日。御用之儀候間、御熨斗目御半袴に而、今日五半時御登城被遊候樣、昨日御老中方御連名依御奉書、則御登城、於御黑書院御敷居之内三疊目御判物御頂戴之、其上御懇之上意。附、外中將・少將之御方も御同所、十萬石以上者御敷居之外に而御頂戴、十萬石以下者御老中上意演述、御朱印御渡也。

造酒丞は大聖寺侯前田利道

右於殿中間番見習宮崎小右衞門ゟ御渡、御封も御渡に付、則御箱に入御封を付、上箱に入鎖おろし、御長持に入、小右衞門指添、大御門より入、御長持共御居間書院御床之上に置之、御家老衆ゟ相渡、御大小將兩人宛勤番。

一、今日御習仕も有之に付、御揃より一時計早く御出被成候樣に与御目付衆御申談に付、六時過御出。上下御供は服紗小袖着。

一、九時相濟、西御丸ゟ御登、御奏者番ゟ被謁。夫より御老中方・若年寄衆御勤。御歸館以後御判物御拜見、但馬守樣にも御拜見。畢而御家老中を召、御城之御樣子共被仰聞、御判物拜見被仰付。依而外記・隼人熨斗目着用罷出。

一、御判物小右衞門持參之節、如御先例敷付ゟ御家老役、白洲ゟ頭分熨斗目着用罷出、御式臺當番之御大小將等、服紗小袖・布上下着用。御玄關より御歩布上下着用に而持之。從御大書院・御小書院御廊下前記之通也。

一、造酒丞樣も今日御印物、御名代前田靫負佐殿に而御頂戴。此御禮享保之例に而從此方樣者無之。在國在邑之萬石以上、翌十二日以名代を夫々頂戴被仰付。御作法前日之通也。

十月廿五日。前田宗辰、將軍宣下及び己の家督相續を祝する爲再び一門を招待す。

〔政隣記〕

十月廿五日。今日將軍宣下、此方樣御家督・御轉任爲御祝儀、廣尾御前樣・眞田伊豆守殿御内樣・但馬守樣・楊姫樣・勢之佐殿・八十五郎殿御招請、御料理被進上。御能六番有之。嵐山・松風は御前、野守者但馬守樣被遊候。

十月廿七日。御馬廻組玉木彦左衞門その妻及び姦夫を殺害す。

〔政隣記〕

十月廿七日於金澤。今月[二]日御馬廻組玉木彦左衞門妻儀致出奔候に付、行衞所々相尋候處、今日大衆免町邊に在住之前田對馬守殿家來栗田久丞宅に有之。密夫浪人若黨田中圓六(最前玉木方に召仕候者之處、致密通在之、彦左衞門曉天殺生に參候跡に右圓六連退候也。)も一所に有之。追付其處も兩人共立退候躰に付、一所に連越、妻幷圓六兩人共彦左衞門手討に致之。妻之檢使者御横目、圓六之檢使者公事場より申乞、事濟。

〔袖裏雜記〕

心付候故此段も申遣候。尤主膳・助右衞門幷家老共江見せ可被申候、以上。

玉木彦左衞門儀忌引申渡候樣承候。彌其通候哉。忌引申渡候儀實事に候はゞ、是者筋違と存候。彦左衞門妻密通之儀露顯殺害候上は、夫婦之緣者離れ可申候。譬者離別之妻之服忌者請

中事に候哉。右之首尾にてはゝ離別より甚事に候。不埒成詮議に候。忌引に而罷在候はゞ、忌服之儀者貪着に及間敷事に候也。

十一月廿四日　　宗　辰　御朱印

横山大和守殿

本多安房守殿

前田對馬守殿

猶以――

玉木彦左衛門妻令逐電候所、早速尋出妻幷密夫、於彦左衛門宅斬罪之趣は成程令首尾候。乍然元來彦左衛門儀家內縮方不宜故、ケ樣之變出來と思召候。近年者家中之者共、家內之縮一體不沙汰に相成候故、彦左衛門儀も不心懸故不埒之次第に候。其分に指置候而者、家中之風俗彌以猥に相成候間、彦左衛門儀急与指扣可申付候。則申渡之趣は荒增別紙に申遣候也。

十一月廿三日　　中　將　御朱印

横山大和守殿

本多安房守殿

前田對馬守殿

村井主膳殿
奥村助右衛門殿
本多圖書殿
横山藏人殿
前田大學殿
玉井市正殿

彦左衛門申渡候大概、尤得と遂示談、文法等引直可被申渡候。

今般之趣被聞召、兩人共尋出致殺害候迄之首尾は、成程ケ様可有之儀と被思召候。然共右之一事は、彦左衛門儀家内締方不宜候故事起、其上彦左衛門一分之慎行届不申に付、締方も自ら猥に相成候与被思召候。不心得之儀、依之急と指扣可罷在旨被仰出候。

被成下御親翰奉拜戴候。玉木彦左衛門——奉得其意候。忌引之儀頭共相尋候付、私共遂僉議候者、離別之儀者縁切れ申候。今般彦左衛門儀者妻女之事故引寄殺害仕候へば、離別とは違縁は切れ申間敷候。縁切れ申候而者、殺害仕候儀も彦左衛門心任せには難成儀に奉存候。其上先年與力吉田與兵衛妻密通仕候付而、妻幷密夫共與兵衛殺害仕候。其節與兵衛忌引仕候。ケ様之例も御座候故、旁忌引之儀何も示談之上及指圖申候。——以上。

十二月十一日

大和守
對馬守
安房守

彥左衛門指扣之儀も、被仰出之趣に十二月十一日申渡。

十一月二十日。越中高岡の瑞龍寺火災に罹る。

〔大野木克寛日記〕

十一月廿日。今日越中高岡より飛脚到來、昨夜より高岡町家より出火、段々及大火、町家大半燒失、就中瑞龍寺炎燒之由注進と云々。尤追々飛脚到來之由、委細之儀者未相知候。

〔大野木克寛日記〕

十一月廿一日。昨日高岡火事、町家者炎燒無之。瑞龍寺回廊續浴室より出火、釋迦堂幷回廊・山門燒失。本堂・庫裏・御靈堂者御別變無之由注進と云々。

今日四半過二之御丸に罷出、八時過退出。右瑞龍寺炎上に付、寺社奉行品川主殿今朝揚鞭、彼地に罷越と云々。

〔大野木克寛日記〕

瑞龍寺炎上寺社奉行に指出之書付寫之。

草堂は僧堂なるべし

覺

一、火本大風呂屋。
一、回廊、大庫裡取付之所より北東南衆寮入口迄。
一、山門、佛像不殘。
一、鐘樓堂　太鞁は出申候。
一、七間淨頭　明王之像出候。
一、禪堂　聖像之像出候。
右燒失仕候。
南は衆寮廊下之所に而火留申候。北は大庫裡取付之所より火留申候。
一、佛殿
一、大方丈
一、大草堂
一、大庫裡
一、衆寮
但、入口廊下幷禪堂取付之回廊壞申候。

一、小方丈幷書院
一、小庫裡幷土藏米藏等
一、作事藏幷小屋
一、雪垣藏
一、兩御門
右異變無御座候。
御位牌早速繁久寺ゟ御遷座仕候。小道具等紛失、相調追而可申上候、以上。

十一月廿日　瑞龍寺

青山將監殿
菊池十六郎殿
品川主殿殿

十一月廿七日。德川家重鶴を前田宗辰に贈る。

〔政隣記〕
十一月廿七日。御鷹之鶴、上使御使番雨宮權左衞門殿を以御拜領之處、中將樣當廿四日朝より少々御腹痛、八十嶋貞庵御藥被召上、八時後少々宛御吐食、夜五時餘程御吐食、其後御發熱御快

被成御座、今少々御熱指引も被爲在候に付、右上使御名代但馬守樣諸事御勤御作法等如前々。但、御拜領之鶴御玄關迄之先立聞番可仕候處、今日初雪に付伺御機嫌等に罷越有之不足に付、御大小將御番頭津田五郎兵衞鶴先立勤之。且御前御不快に付御名代但馬守樣御勤之旨、上使江於御門外御先立之聞番河地平左衞門申演之。今一人御門外江出候聞番代津田五郎兵衞罷出。上使与御盃事も有之。

十二月七日。前田宗辰の病狀稍漸む。

發病の十一月廿四日にあることは前に見えたり

〔政隣記〕

十二月七日曉より、中將樣前月廿七日記之通御腹痛、八十嶋貞庵・久保壽安奉診。大津長悦も初而奉診、御ひねり被仰付。大高保竹曁東元も奉診、示談、御藥劑度々替指上候處、御痰水も少宛度々御吐、夜八時頃一升餘も御吐。

十二月八日。前田宗辰卒し、未だ喪を發せず。

〔政隣記〕

十二月八日六半時强御痞、横井元泰診、御大切之旨に而御藥指上、獨參湯も上之。橋宗仙院晝頃御診、重き御事に而者無御座旨御申、御丸藥・御煎湯も被上之、林玄潤も奉診。然處七時頃御大切之御樣子に付、御一門樣・御醫師衆江も早乘御使を以被仰遣。追々御出、曲直瀨養安

院・武田叔安老、平賀玄純老御越。幷前田信濃守殿・前田帶刀殿等、齋藤長八郎殿等之格別御出入衆江も可申遣哉と、御客方組頭より御家老衆江示談之上、以手紙申遣候處追々御越。

一、聞番井上久左衛門、暮過御用番御老中堀田相模守殿御宅江罷越、御病躰次第不輕御樣子に候。依之彌差重候者、明日に而も御屆可申上候。先右之趣申上候由、役人中迄申達歸候事。

一、御病躰御差重に付、御容躰被相尋候方々江可申入趣、左之通申述候樣御次より申談。

先月下旬より寒熱差引有之、痢相も不宜候處、手醫師藥に而段々快方に罷在候。然所今曉より腹痛、痰氣病症不輕躰に相見え候に付、橘宗仙院・御醫師中申遣候。

　藥。今朝一貼に人參三分、五夕獨參湯。

食事者今朝少々湯漬飯給被申候。

一、淨珠院樣より勢州江爲御祈禱、早折御使御大小將富田宇兵衛酉之下刻出立。從但馬守樣同斷、關澤與左衛門戌の上刻出立。於江戸山王も御祈禱被仰遣、於御國茂御祈禱之儀御家老中より申遣。

一、追々御早馬に而安藝守樣・肥後守樣・修理大夫樣御出。於御小書院但馬守樣御對顏。御居間江但馬守樣御誘引に而中將樣御對顏。畢而造酒丞樣・前田信濃守殿、是又但馬守樣御誘引に而御對顏。養安院・叔安老・玄純老追々御脈被診之、叔安老御療藥に被轉之。且河野道安老と

申御醫師呼に遣候樣、久世忠左衞門殿・齋藤長八郞殿御申聞、御家中ゟ相達候上申遣。道安老御出御脈被診。肥後守樣思召に而、御手醫御客方組頭より兩人呼に可被遣旨に付、但馬守樣ゟ申上、御家老中ゟも相達、則兩人罷出候に付、御廣間ゟ相通置、御脈奉診。此席に而御料理差出候事。右之外渡部元明与申町醫、是又從肥後守樣被仰遣罷出、御脈奉診、是又御廣間溜に而御料理出之。

一、靱負佐殿にも御早馬に而御出。且安藝守樣等御四方、於御小書院御料理出之。夜九時頃迄御詰御退出之事。

但、御出入衆も於御勝手座敷御料理出之、右同刻頃迄御詰被成候。

一、御大切に付御家老中も御前に被召出。

〔富永數馬覺書〕

一、延享三寅年十二月八日申刻大應公御逝去被遊候。但馬守樣言之外御追慕之御樣躰、奉見上候に茂難忍御儀御座候。其節御附之頭九里治兵衞は御國に罷在、由比勘兵衞在江戶之處、折柄腹相惡敷押而相勤、御傍に相詰申儀茂仕兼、御抱守とても御人少なに御座候。

〔政隣記〕

十二月九日。德川家重使を遣はして前田宗辰の病を問はしむ。

十二月九日御所勞之儀、御大小將山崎次郎兵衞を以金澤ゟ從御家老中被遣。白銀十枚拜領。
金澤に居留候答也。今日發出。
一、御用番堀田殿ゟ、聞番宮崎小右衞門今朝罷越、彌御指重之旨御届申候事。
一、今日左之通御次より申談。
昨夜以來同篇之内次第に不相勝、食餌も一向給不被申候。武田叔安老御療治に而、煎湯者一
貼に人參五分宛、外參附湯ゟ用申候。十二月九日。
一、安藝守樣等御四方早朝より御出に付、朝之内御菓子、晝頃御料理、夜に入候迄御詰に付、
重而御菓子出之。御供之御家來中ゟも晝及暮、中御門續饗應所に而夫々御料理出之。
一、前田信濃守殿・久世忠右衞門殿等も、夫々御席に而御料理出之。
一、御醫師中ゟ今朝より迎之者差遣、養安院・森元琳老・玄純老・村田長庵老・河村玄東老・叔
安老・望月三英老御越御詰に付、朝之内御菓子、晝御料理、及暮麵類出之。宗仙院ゟも迎差遣、
御越候得共、晝頃御歸被成候。
一、御所勞爲御尋、上使御奏者番永井伊賀守殿を以上意、大御所樣・大納言樣よりも御懇之
上意。都而御名代但馬守樣御勤。御作法前々之通。
但、御老中方ゟ御禮勤之御名代は、前田信濃守殿ゟ御賴也。上使前ゟ安藝守樣等も御出御

挨拶御退。御詰醫師中茂不殘御出、御病症之御様子委細被申述。

御料理可被召上哉与久世忠右衛門殿御挨拶之處、御斷に而御菓子出之。御相伴前田信濃守殿、御重引但馬守様御持參上使ゟ御引。其處ゟ横山內記殿被出、御重被受取之候而、信濃守殿ゟ者內記殿御引。御盃事は無之候事。

一、上使御退出之節、安藝守様・肥後守様者鑑板迄御送。修理大夫様・靱負佐殿・信濃守殿・造酒丞様等者、敷付迄御送り。

今夜より組頭之內一人、物頭之內一人泊番可相勤旨、前田外記殿御申渡有之。

〔德川實紀〕

十二月九日、松平加賀守宗辰病にふせしかば、奏者番永井伊豆守直陳御使して其さまをとはせ給ふ。大御所大納言殿よりも御使をもかねたり。

十二月十日。前田重熙を以て養嗣子とせんとの願書を閣老に提出す。

〔政隣記〕

十二月十日今日より村田長安老御療藥に被轉。

一、武田叔安老・村田長安老を以、但馬守様幷御家老中ゟ御內々上意有之、深く御隱密。

一、安藝守様等四時過より追々御出御詰。御料理・御菓子等出候儀此間之通。但御詰無之內

者、晝夜共御附使者有之。是又御料理等出之。

一、御出入衆・御醫師衆被詰候儀等も此間之通り。

一、御一門様方御示談之上、但馬守様御養子御願書御判本爲御見届、御大目付衆之内御招之趣に相成、水野對馬守殿ゟ後程御出被下候様にとの御使、聞番相勤之。追付御出被下候様にとの御使、夕七時過御使番和田源左衛門勤之。

一、御容躰書左之通御次より申談。

加賀守病躰同篇之内次第不宜候に付、今晝より村田長安老御藥に轉申候。一貼人參五分宛參附湯、此間之通用申候。食餌は書載候程之儀に無御座候。

十二月十日

一、七半時前御大目付水野對馬守殿御出、御式臺鑑板ゟ物頭幷御大小將一人罷出、物頭御先立御大書院ゟ御誘引仕。追付但馬守様御出御挨拶御退。安藝守様・肥後守様・修理大夫様・靱負佐殿・造酒丞様・前田信濃守殿御出御挨拶被成。久世忠右衛門殿・久貝惣左衛門殿御取持、其外横山內記殿等にも御出。畢而被詰候御醫師中不殘被罷出、御容躰被申述候而、御料理出懸り候處、何方に而も就役儀參上之節は、御茶・たばこ之外一向御斷申候由御申聞に付、御料理等出不申。但御料理二汁五菜黑塗膳に而出申趣、且御菓子も御用意有之候處、右之趣に付出不

申候。追付御奥に御通之節、三輪藤兵衛御居間書院之後御杉戸際迄御先立仕、夫より富田次太夫御先立仕。其節安藝守様・肥後守様・修理大夫様幷前田信濃守殿も御越、久世忠右衛門殿も御跡より被參。御家老中御願書付持出之、御判御見屆之御様子に候。追付御退、最前之通御先立、御大書院に御復座。御醫師中者御居間書院に列座、御書付等御熟覧、畢而御歸。其節但馬守様階上板之間迄御送、物頭・御大小將一人宛最前鏡板に御送申候。

一、御いとこ以上之御書立、御詰醫師中書立御容躰書、御勝手に御詰之御一門様方書立、何も一通宛久世忠右衛門殿御指出之所、對馬守殿御熟覧之上、重而忠右衛門殿に御渡。對馬守殿御跡より、忠右衛門殿御老中御用番御宅に御持參被成候。

〔政隣記〕

追付御願書安藝守様御持參、前田信濃守殿御指副、御用番堀田相模守殿御宅に御越被成候事。

但、安藝守様思召に者、御書付納り候者、其段又御出候而可被仰述由に候得共、御老人之儀にも御座候間、御老中御門前に聞番被附置、其者に被仰聞被下候得者宜旨、達而御斷被仰達候處、御指副被成候信濃守殿に委細被仰含、安藝守様に者御老中より直に御歸。信濃守殿者重而御越被成候而、肥後守様初幷外記・隼人に、御書付御受取之段御申演被成候事。

一、御一門様方初、御取持衆幷御詰醫師中、夜五半時頃御退出被成候事。

〔大應公年表〕

一、十二月十日御養子御願之砌、御近習御人拂、肥後守樣御側に被成御座、相模守殿・忠右衛門殿御出、御遺書御判御見届に候。肥後守樣、御判之手に添手被成、御調被成候。其節相模守殿等御挨拶に、御顏被冷不可然候間、御面へ物を懸可然之由被仰由に候。或曰、御三家ゟ御遺書御所存之通御調被上、御判見届之沙汰無之候。御三家並之御格式に候條、此度之御判見届如何与申候。御家代々ヶ樣之御急變も無之故歟と云。

十二月十一日。徳川家重再び使を遣して前田宗辰の病を訪はしむ。

〔政隣記〕

十二月十一日御一門樣方等四時以後より直に御出之儀等昨日之通。今日御容躰書左之通。

加賀守病躰昨夜以來相替儀無御座、次第に大切之躰に御座候。藥者村田長安老御調合、參附湯此間之通用申候。十二月十一日。

一、今日八時頃村田長安老・武田叔安老御脈被伺候事。

一、今日重而御病躰御尋之上使、御小將御番頭阿部出羽守殿御出、御拜領御箱肴千鯛、御徒目付幷御小人目付三人、新組頭並裁領・持參人新組八人指添先達而來。於敷附御歩受取之、御廣間上御緣頰御杉戸之内迄持參。夫より御大小將受取、御大書院上之間之頭御上段際一疊除二疊目より三疊目に懸直之置。但馬守樣敷附迄上使御出向、御大書院上之間に御誘引。御刀

二之間御床に直之。上意御名代但馬守樣御拜聽。御箱肴際に御立寄御頂戴。畢而御勝手に御退、箱肴御勝手に引之。上使二之間に御下り、御熨斗木地三方出之。安藝守樣・肥後守樣・小笠原伊豫守殿・造酒丞樣・靭負佐殿御出御挨拶被成。相濟、被詰候御醫師中何も被罷出、御容躰被申述、畢而御料理之儀御取持久貝惣左衞門殿御挨拶之上、二汁五菜外御引菜。御相伴惣左衞門殿、(御先手也。)上使之儀相知、御家老衆より申參。久津見又助殿・佐野次郎太郎殿に者、御客方平田外記・三輪藤兵衞より申遣。)但馬守樣御引菜御持參、御相伴に者久津見殿御重受取に御出向、御給事役に被相渡、受取同人引之。御酒之上、御重肴者御給事人勤之。御吸物之上、上使御初(其時御肴被遣。)に而但馬守樣と御盃事有之。但松雲院樣御所勞御尋上使之節舊記相考候處、御盃事御座候例相見不申に付、今日も御盃事者無之趣相極置候得共、最前者御料理御斷に而御菓子等出候に付、御盃事無之候而も其分御座候得共、此度上使者、御本復被成候樣に御祝被成候而、御料理まゐり申趣に而御料理出候處、御盃事無之も如何に付、御取持衆に御示談仕、御盃事御座候事。

右畢而夫々相濟、御請御名代但馬守樣被仰上、上使御退出。最前之通御誘引、敷附迄御送り、安藝守樣・肥後守樣御使者之間御緣頰御杉戶之內迄御送り、小笠原殿・造酒丞樣・靭負佐殿者敷付右之方に御送り、御取持衆者左之方に御出。右之外御作法前々之通。但小笠原伊豫守殿

者、上使少前御所労爲御見廻御出懸りに付、御小書院に右御誘引候處、右之通上使前にも御出被成候。且御勝手に御詰被成候御一門樣方等書立可差出由、上使御申之段久貝殿御申聞に付、一昨九日上使之節同趣に相認、小笠原殿も靭負佐書加、則久貝殿迄御渡申候事。

右相濟、御拜領物に差添來候御步目付は御廣間溜、御小人目付等者御使者之間に而御料理被下候。裁領・持參人中御門續饗應所にも御菓子・御吸物等被下。

御一門・御老中方に之御勤、御名代者靭負佐殿御賴之事。

〔徳川實紀〕

十二月十一日、又松平加賀守宗辰が病をとはせられ、小姓組番頭阿部出羽守正甫御使して、生干鯛を賜ふ。

十二月十二日。前田宗辰の卒去を公表す。

〔袖裏雜記〕

中將樣御容躰——去六日にも御表に御出被遊、御客に御對顏被成候處、七日より少々御滯之御樣子に候へども、表向に曾而御沙汰も無之、八日晝頃より御指重り之由に御座候處、俄同日夕方御指詰り被遊候御樣子に候へども、御養子樣御願之儀に付而、御大目付衆御出之儀等段々御樣子有之候故、御日柄相延、今十二日に相極り申候。——以上。

外記
隼人

十一月十二日

大和守樣
安房守樣
對馬守樣
助右衞門樣

御親翰

一筆令啓達候。然者先達而之通、今般之御儀絶筆紙、此方心中可被相察候。各にも嘸可爲難儀与存事候。將又今日堀田相模守殿へ久世忠右衞門殿被相招、拙者儀中將樣御逝去之日より、五十日十三ヶ月之忌服受候樣に被仰渡、乍此上難有儀に候。扨又道中樣子次第御出棺之御事候。左候へば此表之儀指支候付、各內一人被申談可有出府候。雪途之儀別而大儀之至候へ共、支度出來次第追付可被相越候。猶外記・隼人方より委細申達候樣相含候。恐々謹言。

十二月十二日　松平但馬守利安　御判

橫山大和守殿
本多安房守殿

本文は前田重熙の事に係る

〔富永數馬覺書〕

十二日御逝去之儀御老中へ御屆無御座内は、唯御茫然と被遊候御樣子、御笑止迄に御座候。右御屆御座候而、同日御養父樣之御服忌被爲受候樣申來候而者、諸事御用御家老中より但馬守樣ゟ伺申候。然共勘兵衛腹相惡敷、やう〳〵と押而勤申躰。伺事は御家老中直に罷出申上候へ共、只今迄御部屋住之御儀、何か御存知不被遊、私儀折々被爲召御尋等之儀も御座候。先安房守・大和守内早速致出府候樣、前田外記・西尾隼人ゟ被仰渡可御宜と申上候處、其申遣樣如何調可申哉、書付爲見候樣にと御意に而、御燈いかげに而調上申候。常々御弱御生質、御のぼせつよく、折から嚴寒に御座候へば、御火鉢近く上置候茂不御宜、一度上候儘に而炭をつぎ申者も無御座樣成事、燈などちら〳〵といくつにも見ゆる樣成なとゝ御意、難忘御事共に御座候。大應公八日御逝去御沙汰なしには御座候得共、其御儘に而久敷奉置候御儀も難被爲成、御内々に而常々に引替色々迷惑成御事ともに御座候。次に者御手廻之御紙面・御道具等御しらべ、富田治太夫・富永數馬・武田杢左衛門に御横目前田源五左衛門加勤之。次太夫・杢左衛門は御遺骸御供被仰付候。數馬儀茂殘念可存候得共、江戸表に被指殘候旨御家老中を以被仰渡、大切成御時節いづれを相勤候茂御奉公に御座候へば奉畏候。但段々年罷寄、物覺も無御座候間、明年御入國之上は御役御赦免之儀、只今より奉願候旨前田外記ゟ申達。其

後は次太夫・杢左衛門と同様御亡君様御用勤ながら、晝之内但馬守様御用茂相勤申候。

〔政隣記〕

十二月十二日。御病躰御指重に付、今曉七時頃武田叔安老・養安院に迎之者差遣、早馬御出。御一門様方にも御使を以、從但馬守様被仰遣候處、肥後守様者御早馬に而御出、其外追々御出。前田信濃守殿等に者御案内平田外記より申遣、追付追々御出被成候。

一、御療養不被遊御叶、卯之後刻御逝去。

一、肥後守様御居間書院に三輪藤兵衛御先立仕、御家老前田外記・西尾隼人罷出御逝去之段申上。叔安老・長安老茂被出候而、段々御様子被申上候。肥後守様追付布上下に被召替、但馬守様に御對顏、御悔被仰述。前田外記・西尾隼人御招、肥後守様段々御意有之、御退出。但馬守様御送不被遊候事。安藝守様も右同斷。

一、右に付御老中御用番堀田相模守殿に、爲御屆御家老西尾隼人、副使聞番井上久左衛門勤之。御一門様・御前様方にも、從但馬守様以御使御逝去之段被仰遣。

一、御家老衆席に諸頭御招、中將様御逝去之段御弘、前田外記殿演述。

一、廣德寺に御案內御使、御大小將國澤彌兵衛勤之。

一、金澤に早打御使、御使番大橋作左衛門被遣之。白銀十枚・御羽織一拜領、今日發出。但十

七日朝六時過金澤着、十九日六半頃金澤發、廿五日朝六半時頃江戸に歸着。

一、桂香院并伴僧兩人參上。平士、坊主衆席に相通、御居間に之先立御近習頭之內仕、讀經有之。畢而右於溜御料理出之。當番之物頭折々出致挨拶候。今日以後晝夜桂香院并首座代々一人宛、伴僧兩人宛詰切。晝夜御料理指引者御步小頭、給事御步之事。

但、當分坊主衆席者、御勝手座敷三之間に相極候事。

一、火事之節遠板者指除申趣に僉議有之候處、重而遠近共平生之通打申等に相極候事。

一、久世忠右衛門殿御用之儀有之由に而、御用番に御招、左之通御書付御渡に付、直に御越。但馬守樣御逢可被遊候處、少々御勝れ不被成に付、御家老中兩人被出御挨拶被申、追付忠右衛門殿御歸之事。

松平但馬守

松平加賀守卒去之日より五十日十三年之忌服可被請候尤忌服書付可被出候。

右に付御請之御使、御用番堀田相模守殿に聞番相勤、并水野對馬守殿にも御使勤之。右之趣横山內記殿・前田了齋老・同帶刀殿・本多帶刀殿・同左膳殿等に、御客方平田等より申遣。

一、御服忌被爲請候樣被仰渡有之以後者、伺事等申上候事。

一、淨珠院樣より富永數馬迄、御夜食被下候段御臺所・與力何も頭分に申聞、致頂戴一統御禮

數馬ゟ迄申述候事。
中將様御戒名、大應院殿故正四位羽林中郎將梅觀雪峰大居士。宗辰公御年二十二。
今十二日の卯の後刻御逝去と御弘に候得共、實は八日申之下刻也。
十三日御小將頭平田外記、御近習組頭並武田杢左衞門、於御居間書院溜但馬守様御前ゟ被召出、今般大應院様御國ゟ被爲入候に付御供被仰渡候由御意有之。乍難有儀、不宜御供被仰付奉迷惑候由御請申上退候所、於御家老席御道中奉行諸事御用被仰付候由、前田外記殿御申渡。割場奉行中川十左衞門、但會所方相兼御供被仰付、小拂方與力多田庄太夫・櫻井與三兵衞被仰付。
右に付、御客方三輪藤兵衞一人に付、御歩頭大河原八郎左衞門ゟ御客方御用相加り可相勤旨、外記殿御申渡。
一、左之御人々ゟ、今般就御凶事御音物御斷之趣、組頭より奉札を以可申遣旨、御用人申談。
前田了齋老　同帶刀殿　本多帶刀殿　同左膳殿
横山內記殿　齋藤長八郎殿　德山五兵衞殿
一、預玄院様より御夜長但馬守様ゟ被進候付、何れも頭分ゟ被下候由、御横目村田吉左衞門申聞。頭分何も致頂戴、御禮三輪藤兵衞迄一統申聞、同人より由比勘兵衞迄申述。

一、但馬守樣今日より當分御居間書院溜に被成御座、三之間御次に相成候事。

一、大應院樣御近習頭者、何も御棺之御供被仰付候。其内富永數馬・竹田金右衛門者御供不仕殘念に可存候得共、御無人に付被指殘候由被仰出候。

十四日福島助六郎殿より御悔之趣紙面到來、追而可相達旨及返答。

一、御貸長屋支配三輪藤兵衛御小将頭・牧彥左衛門御用人可相勤旨被仰出候由、前田外記殿御申渡。但是迄江原宗兵衛・武田判太夫・伊藤津兵衛也。

一、御悔幷御香奠白銀五十枚御拜領之上使、御奏者番井上遠江守殿御出。敷附に但馬守樣御出向、御大書院に御誘引。上意御拜聽、御拜領物御頂戴、御勝手に御入。御香奠も御勝手に引之。追付安藝守樣御出御挨拶。其處に久世忠右衛門殿被出、此節之儀故御茶・たばこ盆も出不申由御挨拶之處、追付御請をと被爲仰聞。其時但馬守樣御出御請被仰述、上使御退出御送等最前之通。其外御作法前々之通。尤御小人目付來、一統布上下。上使濟尤常服。且上使之節、安藝守樣御玄關まなたら戸際迄御出向、御退出之節者鏡板に御送被成候事。但御香奠附臺幷銀子箱者、井上遠江守殿御家來指添罷越。御歩罷出、附臺兩人に而御大書院取付之間迄持行。夫より御大小將兩人に而、御大書院上之間頭之疊御上段際より堅疊二疊除三疊目頭に餝之。銀箱者附敷より御歩一人に而持之、御使者之間に誘引、聞番河地平左衛門出受取、則平

左衞門受取紙面相渡、受取歸。右銀箱御步持之、竹之間之方御勝手ゟ引之、御家老衆席ゟ則御步に爲持、平左衞門指副罷越御渡申候事。但今日御勝手ゟ御出御座候御方御名前書、幷御禮勤之御樣子書、右御家來請取候而罷歸候事。右相濟、爲御禮但馬守樣御老中方不殘御勤被遊候。若御年寄衆ゟ者聞番以御使御禮被仰達。

一、御用之品取次、新番御近習藤田十左衞門・志村平丞・河内山七左衞門ゟ被仰付。

一、段々年寄中初、追付出府之面々有之に付、御貸長屋御修覆之儀は、此節の儀ながら無構可申付旨、御家老衆より三輪・牧ゟ御申談有之。

一、御側小將・御表小將・御近習番・御膳奉行・御居間方等御棺之御供被仰付。

一、中將樣就御逝去に御忌懸之御方之儀、外々より尋有之調遣候紙面寫。

兄之忌　松平伊勢守殿　奥方
同　南部信濃守殿　奥方
同　松平出雲守殿　奥方
同　佐竹次郎殿　緣女
をひの忌　二條故關白殿　政所御方
同　酒井左衞門尉殿　奥方

をぢの忌　信濃守殿御嫡南部三郎殿
いとこの忌　准后御所
同　辰君御方
同　松平相模守殿
同　安藝守殿御嫡　松平伊勢守殿
同　相馬因幡守殿奥方
同　左衞門尉御嫡　酒井鍵五郎殿
同　松平下總守殿奥方

以上

一、淨珠院樣より、今夜御殿に在合候人々ゟ温飩被下之候。
一、御出棺御日限、當月廿八日・廿九日之内与被仰出候事。
十五日大御門開不申、頭分裏附上下、平士袴迄、御忌之内者嘉節朔望等右之裝束与、昨日御横目より申談有之。
一、御棺御供仕候人々、乘馬雪中に付爲牽候に不及旨被仰出候。但人々持馬御厩に建置、相對を以拂候儀、幷雪消次第御國ゟ爲牽候儀勝手次第と相極。

一、闕澤與左衞門儀、當八日晩發勢州江御使に被遣候處、御用有之候間可罷歸旨、由比勘兵衞より早飛脚遣候處、佐野郡日阪之驛に而出合、夫より立歸、今夜五時過江戸江歸着。
一、組外田中三郎太夫・新番玉川十郎左衞門、當分奥御納戸御用被仰付。
一、大應院様御近習之諸士、但馬守様等御近習之面々、今日御尊骸江拜禮被仰付。
十七日今明日朝晝与四切に、與力以上年頭御目見仕候人々御棺江拜禮可被仰付旨、昨日被仰出。頭分は熨斗目・長袴、平士者熨斗目・半袴着用。御禮疊左之通。

組頭
頭分
平士
與力

附、松雲院様之御時分者何も白帷子也与云々。
一、安藝守様・肥後守様今日八時前後追々御見廻。於御居間書院御對顔、且御家老中御呼、於御閑席御逢被成、追付御歸之事。
一、尾張様より御使番頭玉木小平太を以、御香奠白銀十枚被進。取次御返答共三輪藤兵衞相勤、御香奠者御家老衆席江指出。十八日從水戸様同斷。
一、淨珠院様より御到來之御菓子、詰合之人々江被下之。
一、大應院様御中陰御茶湯、於廣德寺御執行之節御用主付、御近習御馬廻頭富永數馬、御小

將頭三輪藤兵衞に被仰付候旨被仰出候由、前田外記殿御申渡。小役人十八日夫々被仰付。

但、正月十二日・十三日に御執行也。

覺

一、普請幷高聲等遠慮之事。但日數之儀者、護國院樣之御時分之通可相心得事。

一、諸殺生無用之事。但日數之儀右同斷。

一、御家中之人々さかやき可爲遠慮候。又者は不及其儀事。但與力以上一統十二月十二日より御三十五日迄、御步幷御步並之者者十二日より三十日遠慮可仕候。此外右之通指支候者有之候者、護國院樣之御時分之通相心得可申候。御棺御供仕候者之儀者、金澤において一統觸之通相心得可申事。

一、此砌之儀に候條、火元別而入念可申事。

一、肴賣御門出入可指留事。但日數之儀者、護國院樣御時分通可相心得事。

一、表向裝束可爲常服事。

右之趣被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配にも申聞候樣、是又可被申渡事。

右之通不相洩樣可被申觸候事。

右前田外記殿等御渡之由に而、昨十六日御横目中より觸有之。
一、富田宇兵衞前記九日に有之通、勢州ゟ御代參、十三日曉勢州山田福井土佐方迄參着、今亥ノ下刻江戸歸着。廿日に從淨珠院樣、後藤平八郎を以御懇之御意有之事。
一、御表小將之内磯松三郎左衞門・水越八郎左衞門・中村藤右衞門者、御尊骸御供相仕廻次第、江戸ゟ立歸候樣被仰出。
一、御國ゟ被仰遣候人々者、本多安房守・横山大和守内一人早速可罷越候。外年寄中・御家老中都合六人。
九里治兵衞・神保權五郎、御馬廻頭・御小將頭・御先手物頭・御臺所奉行・割場奉行一人宛、御大小將十七人、其外御右筆一人等より坊主迄都合廿七人。
十八日、御次御用取次富永數馬・由比勘兵衞・竹田金右衞門勤之。奥取次者十四日被仰付候。藤田十左衞門等三人相勤候樣被仰出候。
一、御出棺御日限來る廿八日与被仰出。
一、御所勞爲御見廻、出雲守樣從御在所早打御使、當十三日富山發今日着。御使番、御大切に付同斷御使、十四日發今夕着御使勤之。御指重に付同斷、十五日發十九日着。
一、但馬守樣御前ゟ被召出、御病中骨折候に付、御納戸御在合を以被下之候由御意に而、左

之通拜領。

判金二枚・御羽織一 御家老役 西尾隼人

判金一枚宛 御近習人持 富田治太夫

同 御廻馬頭 富永數馬

同 組頭並 武田杢左衛門

一、左之八人、今度御病中骨折候由に而、於御次由比勘兵衛を以左之通拜領。其後御前に被爲召、御意有之。

小判十兩宛 御近習御先手物頭 原宗兵衛

同 同斷 武田判太夫

同 物頭並 伊藤津兵衛

白銀十枚宛 御奥小將御番頭 竹田金右衛門

御表小將御番頭 小倉伊右衛門

同 御橫目 前田源五左衛門

御近習御使番 青木與右衛門

同斷 原求馬

一、御表小將之內、奥御納戸御用相勤候水越八郎左衞門・三宅權左衞門江者、白銀五枚宛被下之。
一、御近習番御膳奉行江者白銀五枚宛被下之。
一、右之外夫々右に准じ被下之。
一、廿一日御側小將中江金廿兩宛被下之。
十九日、從嘉三郎殿御所勞御見廻御使、御抱守村上左源太被上之。當十四日金澤發今朝着、染物三反拜領被仰付、翌廿日朝發出歸。但旅用金不足之由に而願候に付、金一歩五十切拜借。
一、年寄中より爲伺御機嫌、御使番岡田主稅差越、當十四日金澤發今朝着。同夜暫相殘り候樣被仰渡、家來をも呼に遣候處、同廿日御暇被下、勝手次第歸候樣御家老中被申渡、其夜御棺致拜禮、翌廿一日朝發出。
一、御尊骸御供に罷越人々江、末三ヶ月分中勘御扶持方代被下候旨、西尾隼人殿今日夫々御申渡有之。
廿日從二條樣御飛脚足輕一人罷越、御書被進候。右足輕旅宿無之、直に歸候由に付、於饗應所御料理被下候段申渡候處、被下間敷旨申に付、其分に仕置、金二百疋被下之。手日錄御帳付與力に爲相渡之候。且箱根御關過書渡候樣にと申に付、御家老衆江平田等より御達申候處、

會所奉行ゟ被仰渡、過書調越候に付、渡遣之。
一、預玄院樣より被進候御夜長之由に而、今夜在合候頭分・平士ゟ被下之。
廿一日、御所勞依御大切金澤年寄中申渡、御馬廻組平岡善八郎去る十六日未中刻金澤發足、今卯上刻到着、染物三反御目錄を以拜領。
一、從政所樣御所勞爲御見廻、御使役神戶傳藏御使早打に而被遣之。去十四日夜京都發足今午ノ刻到着。從准后樣・內府樣・辰君樣御傳言有之。從政所樣、預玄院樣・淨珠院樣・但馬守樣ゟも御口上有之。富田治太夫・富永數馬・武田杢左衞門ゟも御意之趣有之。從准后樣御傳附之品も有之。傳藏儀御尊骸ゟ拜禮被仰付、白銀十枚御目錄、外に寒氣之節大儀に被思召候由御意を以、染物二反御目錄被下之。翌廿二日發足歸京。
一、御尊骸御行列に、御持筒五挺爲御持之儀御願相濟、御留守居衆ゟ御手判之儀被仰遣候に付、丹羽近江守殿ゟ聞番御使勤之。但御部屋住之節者三挺爲御持、御家督以後いまだ御旅行依無之也。
一、御所勞御指重之儀承知仕、若年寄御近習御用靑木新兵衞、年寄中ゟ相達出府之處、御逝去之儀越中三日市に而承に付、金澤ゟ被罷歸候。
廿二日、御尊骸金澤ゟ就被爲入候、碓永・關川兩御關御手判、御留守居衆ゟ今日聞番を以被

仰遣。

一、御所勞爲伺御機嫌、金澤年寄中より惣代之使者前田土佐守家來今日御殿に出、御勝手座敷三之間に而口上御家老中に申述。奏者方に而三輪藤兵衛出座、金澤年寄中御機嫌伺ひ惣代之使者、土佐守家來今村清太左衛門与唱之、口上申述退。指引御横目、使者裏附上下着用勤之。廿五日返答被申述、白銀二枚使者に被下、目錄藤兵衛渡之。

廿四日御尊骸御供人宿割、御大小將朝立一番二人、晝立二番二人、御宿拵相兼發足。

白銀十枚・八丈二端　　御小將頭　平田外記

右富永數馬を以、永々情に入相勤骨折候。其上此度俄御尊骸御供被仰付、大義に被思召候。依之御在合之品、御内々を以被下之由、御意之旨申述、於御次御廣蓋を以被下之。

〔大應公年表〕

一、十二月嘉三郎殿御詠歌之由。

をしまじこたれも命を君がためかゝるをりにしかふる世ならば

〔大應公年表〕

一、松雲公近臣護國公御代定番頭中村典膳克正、致仕已柄与號す。七十歲三百石賜ふ。

丙寅臘月十二日於東武、羽林菅公宗辰君世をはやうしたまふ。

悲歎の至に堪へず。心の奥を描き言の葉につらね。

梅の花惠の露を含みしにほころびずして散るぞかなしき

明暮に待し此花かひもなく春をとなりにかゝるかなしさ

日の出るおもひをなせし君まさで越路は暗き心地こそすれ

給はりし御筆の跡を拜みつゝ涙にくれて言の葉もなき

七旬におよびゐれば

ながらへて恥おほしとはことはりや今身のうへにしられてし哉

以下十四條は寛保二年より延享二年に至る言行に係る

前田宗辰行狀

〔大應公御夜話〕

一、軍書之講談仕候に付ては、古今武將の批判仕事に候。然者於御前申上候事故、御當家或は御家の儀にても、少も無遠慮褒貶可仕候。左樣に無之ては御稽古に不被爲成候。尤無御遠慮御許可被遊旨被仰出候。

〔大應公御夜話〕

一、官位の事に付、昔は公家・武家共に補任ひとつにて御座候故、武家の官位も後世に相殘り申候。御當家御治世に成候ては、公家補任・武家補任別に成候由。依て武家にて何々の官位に

罷成候ても、公家に指合申事無御座候由。是は武家の威勢强きに御座候得共、畢竟御當家の武家補任ゆゑ、後世他家より天下を治め候得ば、又武家補任を改候故、只今迄の補任は反古に成、後世へ殘り不申候由申上候處、成程其通に候。當時武家の官位は御當家きりにて、後世へ殘り不申候。然共公卿補任ひとつに候得者、御三家などは將軍家の庶流故、御家などより上へ立申事成不申候。御家などは最初より、權現樣內大臣の節大納言の御家に候。其節御三家は無之候。御三家と申候は、御當家御治世の後に出來申候。公卿補任ひとつにてはか樣の事を致吟味候に付、一向官位の事は公家·武家別格に無之候ては指つかへ申故と被思召候由御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、關ヶ原合戰の節、初八月三日利長樣金澤御首途、大正持の城御責落、越前金津迄被爲入候。然共一度金澤へ御引入の儀、何ゆゑと申事說々有之儀申上。重而利長樣九月十四日金澤御立被遊候。關ヶ原合戰は九月十五日故、勝敗を御見合と申にては無御座、其上大正持の城御落に付、加州能美·江沼の兩郡御手に入申候。右の節金津より御引返の儀無御座候はゞ、越前半國は御手に入可申と、其節の者共批判仕候由承傳申旨申上候所、三ヶ國の上に越前半國共御領分に成候ては、京都へ近く、江戶向より氣遣成ものに候。三ヶ國迄にてさへ諸侯の一

番ニてむづかしがり候。此上越前半國御領に候ては、色々の事申懸、或は所替遠國へ遣候歟、只は置申間鋪候。只今にては三ヶ國之方増ニ被思召候。如何存候哉の旨御意にて、富山・大正持へ被爲分候儀、且又新川郡御領分に成候儀、能州土方領の事など御意有之候。

〔大應公御夜話〕

一、公方様の御威勢は盛成事に候。御前へ御出被遊候ては、中々御頭も上り不申候。殿中にて輕き事にても、少も宜事も被仰出候へば、御同席の御大名方何れも、是は公方様の御心より出候儀ニ御申候。少にても不宜事に候得ば、是は老中の內誰の分別にて可有之ニ批判に候。最此筈にには候得共、眞實如此に候。然者御威勢の強く、諸大名の心も能治り候ゆゑ、いまだ天下の危き儀は無之と御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、公方樣の人を御仕ひ樣、表向にては中々誰にても頭も上り不申候。老中方など御前ゟ出候ては難儀被致由に候。又御內々にては、諸役人を被爲召罷出候節は、いかにも御心易く、御言葉も多く候て、諸事申上能樣に有之由に候。如此內外自由に無之候ては、天下の儀細かに上達無之筈と思召候由御意に候。

〔大應公御夜話〕

刑部卿は宗尹

一、公方様御近邊被召仕候者、不宜事有之候へば、御内々にて御叱り、或は當病仕に引込候て罷在候様にと被仰出、日數過候て、病氣宜候はゞ罷出可然旨御噂有之、罷出候。是にても直り不申者は、兩三度も右之通にて、其上にて老中へ被仰出、或は役儀被召放候歟、或は閉門歟、御格の通に成候由。先御内々にて御叱り候得ば、表へ立不申、其身心底改候儀仕易く、迷惑人多く無之被遊様、御尤成儀と御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、公方様御召の馬至極の過ものにて、御馬役の衆も乘申事成不申、御手乘に被遊候由。其馬に被爲召候に、何の曲も不仕、其上奇妙成儀は、兩耳の間へ鐵炮を御載御打放候ても、少も驚き不申候。馬と御威勢に恐れ申歟と沙汰の由申上候者有之候得ば、成程其通りに被聞召候。然共いかに上様にても、耳の際にて鐵炮御放候に驚き申間鋪様無之候。假令驚き不申馬にても危き事に候。馬術之家に習有之候て、耳の中へ詰申物有之候。又御馬役も手に合不申馬にても被爲召候は、俗にいふ手馬に手綱なしと云味ひに候。必ず是等を御名譽などゝ申程の事にては無之候。馬術を家業に仕候者、必ず下手にても無之害は勿論の事のよし御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、刑部卿様物荒き御生質にて、御手討など御座候由。後々天下の害に可被爲成歟と申なら

右京大夫は松平輝貞

右衛門督は宗武

竹千代は徳川家治

公方樣は徳川家重

し候由申者有之候處、成程其通に候。其故度々御異見も有之候得共、御承引無之に付押籠可申由上意有之候所、松平右京大夫殿達而御詫言被申上、御諫言被申、其以後少御直りに付、御前へも御出被遊由に候。殿中にても、誰々も刑部卿樣にはおそろしがり、寄付不申樣に仕候由に候。何程御剛勢にても、如此人の和無之候ては、天下の益に成申程の事は無之候。右衛門督樣は御學文も有之、人のなつき申御生質の由に候。是等は御器量有ことゝ申ものと被思召候。何と存候哉と御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、竹千代樣御生付凡人にて無之由、御威勢自然と御備り被遊候。御幼少樣故、出仕の御諸大名屯りの所ねも被爲入候。何も頭をさげ候に、誰も御面色をしかと奉見者無之候。公方樣御隱居被遊候ても、今十年被爲入候へば、もはや天下に危き事は無之と御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、孫子九變に役諸侯者以業と云に付て、昔は御普請御手傳御賴み候へば、忝がり相勤申候由。入用多く懸り申事故、今は課役の樣に成申候。此味ひも有之儀と申上候所、成程時節により、又は其品により候て、當時にても實の御懇にて御賴みの事も有之と見え申候。天主臺御手傳此方樣へ御賴みなど、御本丸の內、殊に裏の方故、至て御心易く被思召候を以て御賴

みの味ひにて候。又外構の御手傳などは實の課役も有之躰に候。然れば御普請御手傳御賴みも、其時によりて心を付申事と御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、軍法之卷に人を見知と有之に付、信玄の人の見知樣慥成事に候。百姓の子を取出、高坂彈正に相成候。戰國の事ゆゑ武功を以致立身候は不珍候。高坂は慥成武功も無之者を侍大將に被致、越後の押へに迄成申候。其身に器量有之候ても、戰國武功の士共能其下知を請たる事に候。尤戰國ゆゑ、侍大將に成ては其功も有之候。夫迄の間を能つかひ被申候。信長公の太閤樣を御取立も、權現樣之本多佐州を御取立も、皆此味ひに候。此見知樣と申は無之筈に候。當時治國に候故、猶更侍の心知兼候ゆゑ、高坂彈正の如きの者はたとへ有之候ても、可取出樣無之と被思召候。如何存候哉と御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、大名にても皆々遊びてばかりは居不被申候。尤大名の馬に乘候は、公家之歌を讀と同事に候得共、松平越前守殿(今の陸奥殿なり)など馬術達者に候。其外も馬術達者の大名多く有之候。學文に數寄被申衆も多く有之候よし。誰々などゝ御意の上、松平大學頭殿は鐵細工數寄之由、刀・脇指之拵に異樣成事有之候は、皆々自分の細工にて、近習の者へもさらせ被申故、近邊供廻

りの者迄も八角の大鐔など指申候。刀をも打て見被申候得共、是は小細工と違ひ成不申もの
に候。地色黑く成候て、何の役にも立不申と、殿中御屯りにて久敷御待の間に色々の咄有之、
此通被申候。然れば伊達正宗の刀を打被申などは、又器量各別の所有之と被思召由御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、諸大名の官位順列調候御手鑑拜見被仰付候て、違候へば每度付札押替被仰付候。此通り
に一冊、是は小さく被遊、御懷中被遊候。其子細は、參覲の後或は病氣などにて、久々にて
登城の衆在之時分、其間に官位昇進の衆有之候へば、先列の所へ列し候ては違申候。其時何
方へ列し可申やと示談有之候。夫を慥に誰と誰の間と被仰付候へば、夫にて相濟候歟、品に
より何方に列し候と大目付へ達し候迄にて埒明候。若又何方にて可有之哉不慥に候へば、大
目付を呼寄被相尋候。其時大目付の心得にて指圖成不申に付、老中尋候て及返答候ゆゑ、彼
是一時程懸り、夫程出仕遲く相濟候。其ため御手帳御懷中被遊候。是は早く御下り可被遊と、
御手廻しにて候と御笑ひ被遊候。

〔大應公御夜話〕

一、公家より武家を賤しみ候へども、武家の威勢盛成事に候。傳奏衆は大納言・中納言、老中
は侍從にて候へども、殿中にて老中に逢候ては、兩手をつき被申候。老中は中々手もさげ不

方達は實達

今般の御凶事は前田吉徳の卒去をいふ

少將は前田宗辰

去六月は延享二年

申候。是程の違に候と御意に候。

〔大應公御夜話〕

一、或夜昨日御鷹野に御出被遊、粟ヶ崎御亭の二階より被遊覽候へば、白山より續き、越中筋の山々、能州方達山迄見え、雪を帶たる景氣、湖水を前に請至極の景色に候。江州瀬田邊より、叡山を見る湖水の景氣に似たる由に候。其通りに候哉と御尋に付、成程相似たる景氣に御座候。然れ共江州は湖水大きにて、山も遠く候。京邊故名所多く、古歌も御座候。私共旅行の中に一見仕候。され共故郷故歟、粟ヶ崎の景色江州よりも相增候樣に奉存候由申上候へば、雪の景氣は北國故京邊よりはすぐれ候事と被思召候由御意に候。雪峰の御別號存當り候へば、是等の思召にも候歟と今更奉恐察候。

〔大應公年表〕

一、今般之御凶事に付、預玄院樣御剃髮被遊度旨、少將樣に御願之處に、如何樣共思召次第に可被遊候。併御剃髮以後御精進等之儀に候哉。左候はゞ思召も御座候旨被仰進候處、御平生御精進与申に而は無之由。依之御剃髮被遊候由。

〔大應公御年表〕

一、去六月詰人御扶持方不相渡候者如何之儀、金澤年寄中より申越候哉御尋有之候所、御要

脚指支候間不相渡旨申上候。左候はゞ兼而役人共指支不申樣に可仕儀に候。足輕・小者等可及難儀候。早速渡候樣に被仰出、六月廿六日夜を掛而渡之。

〔大應公御年表〕

一、奥村助右衞門修古妾腹に男子出生、名豐次郎と早速達御聽候所、宗辰公御意之趣、豐次郎出生之儀何故早速達御聽候哉。內存に仕置、五・七年も相過可達御聽儀与思召候。何卒本妻腹に男子出生候樣に被思召候由、御意有之由に候。

十二月十四日。徳川家重、前田宗辰の卒去を弔して香銀を贈る。

〔徳川實紀〕

十二月十四日、松平加賀守宗辰卒去しければ、其弟但馬守利安がもとに、奏者番井上遠江守正敦御使して、香火の料銀五十枚を賜ひ弔慰せらる。

十二月十四日。前田宗辰罹病の報金澤に達す。

〔大應公年表〕

一、十二月十四日寅刻、江戸より早追山崎次郎兵衞を以、中將樣御氣色御滯被遊候間、年寄中迄申來、即刻越後屋敷ゟ、御醫師佐々伯順・中村正伯早追に而發足、御使番岡田主稅早追に發出。同日午刻相願、靑木新兵衞・御醫師池田玄眞、嘉三郎殿より村上佐源太發足仕候。御所勞

越後屋敷への次脫字あるべし

之趣、先月二十二日安藝守樣鷹御拜領に付、御拔き就御饗應被爲入、御歸館之後御食滯に而、其夜數度御嘔吐被遊候。御快氣、當月三日興德寺御參詣、四日御馬場御出、段々御宜被成御座候所、七日又御滯食之御容子、八十島貞庵御藥上候得共御快からず候故、横井元泰奉伺御藥上之、御大病至極与申上る。御吐き之內黑き煤之樣成物御吐被遊。八日御塞り御ひらき、七時過御粥被召上候得共、其後御ふさがり、御正氣付不申之由。次郎兵衞は九日江戸表發足仕候由。依之諸頭以上御機嫌伺、月番大和守宅へ罷越す。

十二月十六日。前田宗辰危篤の報金澤に達す。

〔大應公年表〕

一、十六日巳刻早飛御到着、十一日酉の刻出、御大切至極に候爲伺御機嫌、諸頭中越後屋敷へ罷出る。同夜御使番大橋作左衞門、十二日發出に而到着なり。十二日卯後刻中將樣御逝去之旨、年寄中ゟ演述、群臣失聲。但馬守樣物頭九里治兵衞被爲召、卽日發足。金谷より馬廻組平岡善八郎此日發足。年寄中、惣代村井主膳遣す。

十二月十七日。金澤に於いて諸士に前田宗辰卒去のことを告ぐ。

〔大應公年表〕

一、十七日觸之事。

爲伺御機嫌、今明日中御用番宅迄可有參出候。病氣等之面々者、以使者可申越候。且又今日不罷出人々者、演述之趣夫々向寄より可有傳達事。

平士よりは相窺御機嫌候に及不申事。

御先祖樣方御忌日に御寺に參詣、且又自分之先祖寺へ參詣之儀も當分指扣可申事。

頭分已上之人々は、此砌之儀に候間、屋敷之大門を立小門より出入、小門無之者は大門をたて寄置候而可然候。年寄中等も右之通之事。

横山大和守

一、十七日、中將樣御氣色不被爲叶御療養、去十二日卯後刻御逝去被遊候旨、江戸御家老中より大橋作三衛門を以今日申來候。御病中御間も無之御急變之段、奉絕言語候事御座候。此段組・支配之面々に茂可被申聞事。

右之御樣子に付御養子御願書附茂、御用番へ御指出被成候旨、先使に申來候。

十二月十九日。金澤に於いて前田重熙が前侯の繼嗣たるべきことを告ぐ。

〔大應公年表〕

一、十九日、中將樣御氣色御指重之節、當八日前田外記・西尾隼人御前へ被爲召、今般之御容躰何共御計難被遊候。然者御實子樣不被遊御座候に付、御養子之儀兼而但馬守樣御内存に被

遊置候。御急變茂被爲成御座候はゞ、御相續之儀但馬守樣御願被成候條、御願之通被仰出候はゞ、御家中之人々、不相替但馬守樣へ御奉公相勤候樣に可申聞旨御意之由、外記等より申來候條、可被得其意候。右之御樣子組・支配之人々ぇ茂可申聞事。

一、中將樣今般之御樣子に付而、御養子之儀、但馬守樣御願置被成候所、中將樣御逝去之日より、五十日・十三ヶ月御服忌可被爲請旨、御用番堀田相模守殿、久世忠右衛門殿御招被仰渡候。此段何茂へ可申聞旨被仰下候。右之趣組・支配之人々ぇ茂可申聞事。

今日頭分已上へ申聞候趣、幼少病氣等に而不罷出面々ぇ者、向寄より早速可有傳達事。

十二月廿四日。葬儀に與る諸士の服裝を定む。

〔大野木克寛日記〕

前々御葬式等御用に携候人々等は、淺黄無地上下着用候得共、今般者大應院樣御在世之節御意之趣有之候付而、藤鼠色石餅無地布上下着用之筈に候。十德色相も右同事に候事。

右之趣御葬式等御用に携候人々、其心得有之候樣に可被申談事。

但、小袖色相之儀は追而可申談事。

十二月廿四日　　　本多安房守

御横目中

〔大應公年表〕

十二月二十六日

御尊骸江戸表より被爲入候節、御迎に罷出候人々服之儀、常之小袖常之上下之事。

御法事之內拜禮に罷出候面々熨斗目・小紋上下、頭分長袴之事。

前々御葬式等御用に携候人々、淺黃無地上下着用に候得共、今般者大應院樣御在世之節御意之趣有之に付、藤鼠色石餠無地上下着用之筈に候。十德色相も右同事。

但小袖色相之儀追而可申談候事。

十二月廿四日。家中諸士の遠慮に關する規程を定む。

〔大應公年表〕

一、十二月二十四日御家中普請御三十五日過候はゞ不苦事。

諸殺生鳴物五十日過候はゞ不苦候事。

鐵炮稽古之儀右同斷。

御家中精進五十日たるべき事。

年寄中且又御近習之人々者月代五十日、其外は御三十五日過候はゞそり可申事。

頭分以上之人々居屋敷大門たて候儀、當二十三日迄に而、二十四日よりは常之通可有之事。

一、二月朔日迄例月之出仕、尤年頭登城、無用之事。

十二月廿五日。前田宗辰の武術師範たりし諸士に賞賜す。

〔政隣記〕

十二月廿五日。大應院様御稽古御用相勤候御異風中嶋小兵衛に染物二反、御歩渡邊彦太夫・三橋七郎平・大組付與力杉安右衛門に金小判一兩。但七郎平・安右衛門は三百疋宛、從但馬守様御内々を以拜領被仰付。

十二月廿七日。前田重煕政務に關する心得を老臣に示す。

〔袖裏雜記〕

十二月廿七日於御前、助右衛門・外記・隼人に被渡下候御親翰寫。

但、隼人今般持參、於御寺被相渡候付、主膳・圖書にも相達事。

前々より之家法少も相違無之樣可被相心得事勿論候。大應院様被仰付置候儀者、別而輕品迄も聊違不申樣にと存候。此方可預加樣之政務事誠無存寄儀、況弱年之事故無覺束候。心得違之事候はゞ尤無遠慮可被申聞候。此旨隼人金府致着候はゞ、安房守始同席可有演達候。右各にはは中入に不及事ながら、申含可然役人に者密々可被申談候、以上。

十二月廿七日

舊臘拙者共儀――御親翰之内へ、申含可然役人には密々可申談旨御文言に有之候付、此思召に御座候へば、諸役人ゟ一統急度可申聞趣に御座候へ共、御政務与有之趣に候へば、今少被仰渡御延引も可有御座哉之旨、御前ゟ罷出相伺候處、左候はゞ各迄承知可有之候。追而者一統被仰出も可有御座御樣子に御座候。――以上。

正月は延享四年なり

正月四日　　奥村助右衛門

前田外記

西尾隼人樣

十二月廿八日。前田宗辰の靈柩江戸を發す。

〔政隣記〕

明日は廿八日なり

一、明日者歲暮之登城日に付、今夜中御出棺之筈に此間相極。今夜四半時御供揃に而、曉天八時御出棺之筈に付、今曉四時頃より爲御見立段々御出。御附使者者暮前より段々來候事。

〔政隣記〕

廿八日快天、曉八つ打追付御出棺、追分御門之内迄但馬守樣御送、勢之佐殿者御中邸御門前ゟ御出。

一、大宮驛御泊迄御送之御使、御馬廻頭御近習富永數馬被遣之。

松雲院様之御時分者、御家老役本多圖書被遣候處、此度者御僉議之上右之通。
一、門火御僉議之上相止候事。
一、御行列先ゟ聞番兩人御中邸之末迄罷越、途中御馳走人等御歩に爲記候。河地平左衛門、今一人不足に付、聞番代御使番和田源左衛門勤之。
一、中之口御玄關前、御玄關与内腰懸与之内、御近習之頭中・御用人横並に居。其前ゟ御一門様方幷前田大和守殿御附使者不殘、御出棺前聞番井上久左衛門致誘引、何も並居。其次御前様方より之御附使者並居。中之口御門外御臺所御門之方ゟ、奥村助右衛門・前田外記罷出。同外腰懸之前ゟ組頭・物頭・聞番・御大小將番頭・御使番・御横目・御醫師罷出。但御客方爲御用、三輪藤兵衛一人は殘り出不申候。
一、中之口御門内警固、御先手物頭津田林左衛門、同御門外より追分口御門迄之警固、御持筒頭井上三太夫・御持弓頭進士齋宮勤之。
一、御廣式向筋空地ゟ造酒丞様御出、東御門前會所奉行一人、御扶持被下本阿彌・後藤・狩野家之者罷出。東御長屋角より御作事所角迄空地之所ゟ御大小將・御馬廻・定番御馬廻・組外・同並・寺社奉行支配・御射手・御異風・御厩方・三十人頭・御儒者・諸組小頭・新番・同並・與力罷出。御作事所前ゟ御作事奉行、割場前ゟ割場奉行、火消道具臺所隅より、年寄衆御長屋之前御厩

之隅迄空地之處江、御歩・同並・御茶堂小頭・同並・坊主小頭・御大工罷出。八筋御長屋切通之方より四筋目之丁頭江會所奉行一人・御手役者罷出。其會所奉行等之前江寶生大夫・同新次郎・同新丞・金春三郎右衞門罷出。八筋切通之方より三筋目之丁頭江御目見申上候町人共罷出。地藏堂之相角江御納戸奉行罷出。追分口御門之外警固、割場より相立之。造酒丞樣より之警固も追分口御門外に建立、出雲守樣より之警固も右同斷。頭分より御歩並迄一統服紗小袖・布上下着用之事。

一、前條に有之、從肥後守樣之御附人大屋武左衞門大御門より罷出、外通追分口御門之外江相廻御供仕罷越候。右に付被指添候足輕・小者、大御門受取之頭永原勘左衞門江聞番中より申達、大御門より一集に出し遣候事。

一、御通筋江罷出候人々、御通棺近く成候者、面々提灯前江置之、草履取者爲退申筈に前廉相極。

一、御番并御用に而御殿江相詰候面々者、尤右之所々江出候に不及筈之事。

御遺骸御道中御行列帳寫

押足輕　提灯四張　小頭三人手替九人　持者手替共四人
押足輕　御持筒三十挺　但立樣頭之心得次第　玉藥箱二荷　御持筒頭
押足輕

武田判太夫　從者數不定　合羽三荷　押押　御持弓 提灯三張 廿挺　小頭二人 立様頭之心得次第 手替六人

矢箱二荷　持者手替廿四人　御持弓頭　伊藤津兵衛　從者數不定　合羽二荷

押押　御長柄　提灯三張 廿本　小頭四人　手替六人　立様頭之心得次第

御長柄奉行　淺加九兵衞　從者數不定　合羽二荷　押押　御中間小頭　御馬

同　同　手替手替　沓籠一荷　本御持筒小頭　御鐵炮三挺並び　同　二挺並び

手替手替　本御持弓小頭　矢箱矢箱　立御弓立御弓　手替手替　玉藥箱一荷　持者手替共二人

矢箱一荷　持者手替共二人　御長持一棹　足輕一人 持者手替廿四人　同　同　斷

御具足櫃　御步御步　合羽九荷　押押　三十人組小頭三十人組小頭　御挾箱御挾箱　手替手替　御持鑓御持鑓

手替 手替　御持鑓　手替 手替　御立傘　御着笠　手替 手替　御刀筒三筒並　卅人組小頭

三人並　御薙刀　手替　御歩三人並び　同　同　同　御歩小頭 御歩小頭　御香爐

二口林左衛門差添　新番 新番　御先角 御先角　新番 新番　御　棺　御右御小將三人 御左御小將三人

御表小將 御表小將　御先角代 卅人頭池田善左衛門　御歩横目 御歩横目　御持鑓 御床机　手替 手替　卅人組小頭三人並

御草履取二人並　御陸尺　手　替　御手木足輕　御　棺　臺　御幕箱 かけや　同串 のろせ

御挾箱 御挾箱　手替 手替　御合羽箱 唐油箱　手替 手替　三十人組小頭 三十人組小頭　御茶辨當　手替 手替　御小人頭

御提灯持候内此所　御中間小頭　御　馬　同　手替 手替　沓籠一荷　御小人小頭

御小人三人並　同　斷　押 押　步御供之者草履取　騎　馬　青木與右衛門内 原求馬　押 押

若黨　鑓　挾箱　合羽五荷　押押　御使馬二疋　但大宮驛御泊より江戸ゟ歸る　沓籠一荷

押押　御横目　前田源五左衞門内　中村新平　御番頭　小倉伊左衞門　富田治太夫

御家老役　西尾隼人　御歩横目三人並び　御道中奉行且又御近習組頭　物頭

御番頭　御横目　當日御用有之面々并御醫師

一、御道中爲御牽之御馬　松陰鹿毛、桂鴾毛、藤袴栃栗毛、南部鹿毛、時雨青。

一、御泊附左之通。

廿八日　大宮　廿九日　鴻巣　卅日　深谷

正月朔日　倉ヶ野　二日　坂本　三日　追分

四日　海野　五日　榊　六日　善光寺

七日　野尻　八日　關山　九日　荒井

十日　中屋敷　十一日　夕立　十二日　糸魚川

十三日　境　十四日　三日市　十五日　若瀬

十六日　高岡　十七日　津幡　十八日　金澤

右之通に候處、九日荒井御泊止、直に同日中屋敷御泊。但荒井は御晝休に成。十日荒に而、居田下り口赤岩邊高波に而損候に付、同日一日御逗留。十一日名立御泊等右之通。

一、十四日三日市之御泊止、直に岩瀬御泊に成。三日市者御晝休に成。依之十五日高岡、十六日津幡御泊に成、十七日金澤御着棺。

延享四年

正月八日。前田重熙火災に際して出馬する時の行列を定む。

〔政隣記〕

正月八日

一、當分火事之節御行列左之通相極。

騎馬假御横目　玉川七兵衛　和角平左衛門内

足輕　同　小頭　○日印　使役足輕
足輕　同　小頭　　　　　使役足輕

拍子木役　○○　騎馬　九里治兵衛　由比勘兵衛内　御使番　御纏添足輕　○○
拍子木役　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御纏添足輕

御纏　鑓　手替　○　御歩　同　同　新番　新番　御長刀　御近習番
御纏　鑓　手替　○　御歩　同　同　新番　新番　　　　　御近習番
　　　　　　　　　　御歩　同

御先角　御大小將　御駕　藤田十左衛門　河内山七左衛門　御大小將
御先角　御大小將　　　　神保權五郎　　志村平丞　　　　永原忠兵衛

御大小將　御手廻小頭代　拍子木役　足輕　○　御鑓　手替　御草履取
御大小將　御歩横目　　　御頭巾掛持　足輕　　　御鑓　手替　御草履取

御挾箱　手替　御茶辨當　手替　御居間方　御使番　○　御召替一疋
御挾箱　手替　　　　　　　　　御横目足輕

○　押足輕　又草履取　三人並び六人　○　御使馬一疋　若黨三人並
　　押足輕

鎗三本並　騎馬　竹田金右衛門　○　押足輕
　　　　　　　　　　　　　　　　押足輕

正月十二日。今明兩日前田宗辰の中陰法事を江戸廣德寺に行ふ。

〔政隣記〕

正月四日

一、大應院樣御中陰御法事、當十二日・十三日於廣德寺御執行に付、惣御奉行今日於御前被仰

奥村助右衛門

渡。

右御執行之儀、御使御歩頭大河原八郎左衛門を以廣德寺に今日被仰遣。但十二日午刻施餓鬼、十三日卯中刻法善頓寫与、從廣德寺追而申來。

一、五日會所奉行高田知左衛門儀、廣德寺に御中陰之御法事料白銀五十枚目錄持參。但出家中賄料共也。

〔政隣記〕

正月十二日、前記之通今明日於廣德寺大應院樣御中陰御法事諸役人朝五時揃に付、各六半時より罷越。

惣御奉行、奥村助右衛門。

詰人、横山大和守・前田外記。

本堂詰諸事御用、富永數馬・三輪藤兵衛。

諸事御用人一人役故不相詰、牧彥左衛門。

本堂詰人、大河原八郎左衛門・進士齋宮・井上三太夫内一人依願詰。但御給事指引兼、丹羽澤右衛門・和田源左衛門・大橋橋作左衛門内一人。

所々見廻諸事指引、丹羽織部・柿田吉左衛門内一人。
本堂式臺取次、御大小將三人。
御香奠裁許、御大小將二人。
御給事、御大小將・新番六人。
御帳付、與力二人。
本堂階下、御歩小頭一人、御歩横目一人、御歩二人。
御香奠受取役下裁許、御歩一人、足輕一人。
詰人所々用事達、御歩小頭一人、足輕五人。但御備物等上げ候儀相兼。
方丈諸給事幷火之番相兼、御歩一人。
大門、山村善左衛門、與力三人、足輕。外に御使者等案內、足輕二人。
裏門、足輕二人。
御飾方諸事相渡御用、高田知左衛門。
御飾方、村田源左衛門・福島武左衛門、御料理頭、御料理人、板本小頭並、小者。
物頭中より差出候外警固足輕・小者、幷御提灯指引、所々掃除等可申付、寺西勘右衛門。
御作事方、菅野覺兵衛。

女中相詰候指引、但女中ゟ菓子等出候節指引相兼、足輕三人。
御臺子たばこ盆幷坊主指引、坊主小頭一人。
所々御臺子幷給仕等、坊主五人。
方丈之内相詰所々見廻、押足輕三人。
寺内火消、但晝夜一人宛桂香院に相詰、火消道具右同斷指置、足輕五六人、小者も應じ御大小將二人夫々召連寺内相廻可申候。
御賄方、與力二人、此所御料理人は御飾方御料理人より相兼。御横目足輕二人、同心、板本、小者。

於德雲院

御大小將指引、御大將御番頭一人。
御使者取次、御大小將三人。
御帳附、與力二人。
下番、足輕二人。
御給事、御歩四人。
御臺子、表方坊主二人、

一、廣德寺和尚江今朝御檜重一組・御茶一器・紅葉海苔一箱、御使番大橋作左衛門を以被遣之。
一、御先詰竹田金右衛門、御刀持等に藤田十左衛門・河内山七左衛門罷越、御法事始り少前に御案内申上候樣被仰出。則初り前に御奉行助右衛門より御案内申上候處、其内九時より御法事初り、同刻過御參詣、割場より二ヶ所附人出置、段々告來。從表式代御上りに付、鏡板江惣御奉行助右衛門、御法事御用主付之數馬・藤兵衛罷出、敷付江者御先立之金右衛門幷十左衛門・七左衛門罷出。且御近習頭澤右衛門も鏡板江罷出、階上疊之上江大和守・外記罷出。大書院御溜江被爲入、其後御聽聞所江も暫御出被遊候。
一、前田帶刀殿等五人御參詣。於御小書院御料理出、於同所御逢被遊候。御前御燒香後、拜禮燒香被成候而御歸。
一、御法事相濟、御燒香御拜席御内陣拭板之外横疊二疊目也。長老三人出座御會釋有之。勢之佐殿御參詣無之、御代香御抱守、拜席横疊四疊目也。
一、但馬守樣御歸之節御送、最前御迎之通。代僧鏡智院鏡板江被出、御會釋有之。大和守・外記江も御會釋、助右衛門江御意有之。
一、御城坊主衆利倉善佐等三人被詰、小書院二之間に而御料理幷御菓子等出之。
一、御代香幷御附使者、於德雲院御菓子御料理出之、宜時分聞番より通達、本堂玄關階下に

爲扣置、御代香御順書仕置、間番階上に罷在、御次第之通呼出、御代香爲相勤候。御順造酒丞様・安藝守様・左兵衛督様・相馬因幡守殿御新造様・前田大和守殿御内様・藤堂和泉守殿・松平攝津守殿・同右膳殿也。御附使者は御法事濟、於德雲院齋藤三左衛門致挨拶相返候。從御前様方等爲詰人御用人被遣候に付、御賄爲給之候。

一、廣德寺和尚煩に付、代僧寺内之長老鏡智院被勤之。僧数今十二日者三十五人、内長老四人。十三日者三十七人、役僧報首座・鞭首座。

一、御法事相濟、御家中御目見以上之人々、今明より勝手次第拜禮罷出。頭分長袴、平士熨斗目・半袴。諸役人歸候而、七時打淨珠院様夕方御參詣に付、警固足輕六人殘置。

十三日廣德寺ゟ諸役人曉七半時頃より段々罷越、但馬守様御供揃六時に而、五時頃助右衛門より御案内申上、同刻少過御參詣。其節御前後共昨日之通、鏡智院今日者御迎にも被出候。暫有之頓寫始り、長者四人之寫水は但馬守様御つぎ、水次報首座被上之、鞭首座御取持被仕候。其外惣出家中之寫水者、助右衛門・外記次之。

一、廣德寺和尚ゟ今朝福野乾瓢一箱・胡麻餅一箱、御使御大小將石川次郎左衛門を以被遣之。

一、齋藤長八郎殿五時比より御越、於小書院御料理等、前田帶刀殿等六人御菓子出之。造酒丞様小書院緣頰に屛風圍御溜、長八郎殿御相伴に而御菓子出之、尤御對顏。修理大夫様頓寫

半に御參詣、小書院に而御對顏、頓寫濟御燒香御歸、其節爲御名代造酒丞樣御送被成候。

一、御城坊主衆三人被詰、御料理等昨日之通。

一、九半時過御法事相濟、但馬守樣御燒香、長老四人ゟ御會釋御溜ゟ被爲入、追付御歸。其節今朝之通各罷出、大和守・外記ゟ御意、鏡智院ゟ御挨拶、和尙ゟ之御一傳被仰入、助右衞門ゟ分而御意有之。

一、但馬守樣御燒香相濟、追付預玄院樣初御代香、拜席内陣拭板之外横疊四疊目。

一、造酒丞樣御燒香御歸、前田靱負殿等も御燒香或御拜禮御歸。夫より德雲院に相詰有之御代香等御使者、昨日之通。

一、左兵衞督樣・肥後守樣・靱負佐殿御參詣、御燒香御歸。於小書院御菓子帶刀殿御相伴に而出之。肥後守樣者大和守等三人ゟ御逢、段々御意有之。

一、八半時過諸役人相仕廻歸。

一、上野常照院・富士瑞泉院納經有之、前田了齋老より心經一卷、自筆に被調昨日被備之。

一、勢之佐殿八半時過御參詣御燒香。

一、御出入御役者後藤家、御手役者、御目見町人拜禮に出。

一、御歸舘後肥後守樣・左兵衞督樣被爲入、御對顏之上追付御歸。

正月十七日。前田宗辰の靈柩金澤に着す。

〔大應公年表〕

一、御道中本陣々々に而、御棺に向蹲踞して其宿之名を申上、御棺御本陣へ舁入候。御馳走人罷出候所々、御存生之時御道中之通、御棺に蹲踞仕、富田治太夫等ゟ通達す。金澤御城大手先尾坂中に、御棺臺に舁乘候而、富田御棺に向ひ、金澤御城に而御座候与申上。夫より御棺舁上、奧村主税前通り、石浦町觸託札を右にして、奧村助右衛門・大音前通り天德院へ御着。御道中晝御休等は、宿中に白幕打、御棺臺に居、各伺公。

〔日記頭書〕

一、正月十七日金澤天德院へ御着棺。御供御家老西尾隼人。同十九日御葬式。

正月十七日。前田宗辰の卒後初めて與力以上の諸士に月代を剃らしむ。

〔政隣記〕

正月十七日、與力以上今日月代剃之、御病中以來之御返禮御使今日より被遣之。且年寄中等者御忌御免迄長髮之筈に候得共、御一門樣方ゟ一通御禮使之外に、安房守樣・肥後守樣・修理大夫樣ゟ者、彼是御取持之爲御禮、今日大和守爲御使者被遣。依之大和守者今朝月代そり被申候事。

正月二十日。前田宗辰の葬儀を行ふ。

〔大應公年表〕

一、延享四丁卯正月二十日卯刻、於天德院御順導、辰刻寺内御發引、野田山高德公御廟之邊に藏。御享年二十二、廟號大應院殿故正四位羽林中郎將梅觀雪峯大居士。

〔大應公年表〕

都而御葬式御法事、他國御使者御香典、御施行、引導師・惣出家布施等に到迄、護國公之御時御作法之通故略す。但御寺日提・野田山日陰共、并假番所等不殘於野田山燒失に候。御忌鷹は三居、外七居於野田山放之。御召料御馬、石川郡御扶持人村井村與三右衞門に被預下。

日提・日陰本のまゝ

正月廿六日。前田重熙家督相續を命ぜらる。

〔政隣記〕

正月廿六日、昨日之依御奉書、今朝五半時前奧之口より御出御登城、柳之御間に御溜之處、於御座之間、大應院御願之通御遺領無相違被進之、其上御懇之上意有之。御退、直に松之御廊下より御先々之御部屋に御入。御登城之節御供數は是迄之通被召連、御下り桔梗御門外より御先代之御供數被召連。粒子山形之御鎗、金紋御挾箱、（但是は二ッ共内に而替る。）御牽馬、御供人之鑓數等も、御先代之通被召連筈に付、暫御猶豫、神田橋之内酒井左衞門尉樣御廣式方迄何茂日立

梅輪内は梅鉢なり

不申樣遣置、御城表御左右承之、早速相揃、其段申上候而御下り也。御玄關迄御供御小將頭勝尾半左衞門、御使番大橋作左衞門、新番組に而御表小將見習之藤田十右衞門也。無劒梅輪内御紋之御小袖・御上下に而御登城、其儘御老中等も御勤。

一、西之御丸江御登城、御奏者番衆江被謁、追付御下り、御老中方・若年寄衆不殘御勤、九半時過御歸館。

御供人之外、御大小將一人被召連、御城之御樣子可被仰下旨昨夜被仰出、成田幸右衞門罷越有之。早馬に而御大門より入、御吉事之趣申述。九つ三歩比也。夫より御殿詰人熨斗目上下着用、且御中邸御一門樣方江御案内。

〔袖裏雜記〕

昨廿五日御老中方連名之奉書到來、忌御免被成候間、致月額登城候樣申來。今廿六日令登城候處、於御座間、中將殿家督無相違被仰付候旨、段々御懇之上意重疊難有仕合候。忌御免之儀者外にも無之儀、別而忝存事候。右之段爲可申聞、以大河原八郎左衞門申達候。承知之上頭分以上何も可被申聞候。猶申含口上候、謹言。

正月廿六日　　　　　　　　但　馬　守　御字　御判

本多安房守殿

村井主膳殿
本多圖書殿
西尾隼人殿

延享三年十二月廿七日の條參照

〔德川實紀〕

正月廿六日、松平但馬守利安制中にあれども、起復して御前にめされ、兄加賀守宗辰の封加賀・能登・越中百二萬五千石餘をつがしめらる。

正月廿九日。前田重熙、諸士に先代の家法を恪守すべきことを諭す。

〔袖裏雜記〕

御書出等一統江左之通申渡。

先代よりの家法少も相違無之樣可相心得事勿論候。就中大應院殿被定置候儀者、別而輕品迄も聊違不申樣、家中之人々江一統可被申聞事。

正月廿九日　御朱印

一統可申聞趣。

今般以御書出被仰渡之趣、寫相達候條、拜見候而可奉得其意候。古來より之御家法、御先代相改りし諸役所格式、且又御家中之面々儉約之儀等、去年大應院樣被仰出之通萬端省略、古

來質素之風俗に立歸相愼可申段者、委細其節申渡置候通候故、只今分而者不申候間、去年被
仰出之趣彌急度相守可申事。
右之趣被得其意、組・支配之人々に可被申聞候。組等之内裁許有之人々江、尤夫々申渡候樣、
是又可被申聞候、以上。

二　月

〔遠田日記〕

別紙は前出のものなり

一、二月廿五日四時過越後屋敷へ罷出候樣に、安房守殿被仰下候。罷出候處別紙御渡。（略）

二月四日。前田重熙但馬守を改めて加賀守と稱す。

〔延享四年公私覺書〕

二月四日
一、御名加賀守樣与御改被成度趣、今朝小笠原縫殿助殿を以御願被成候處、今晩御願之通被
仰出候旨、大和守等へ數馬等より以紙面御貸長屋へ申來に付、大和守より今晩御夜詰に罷出
候而々へ演述也。依之在合候分まで、以數馬御祝詞申上候事。尤服は御夜詰の裝束也。

二月十二日。前田重熙登營して家督相續を命ぜられたるを謝す。

〔日記頭書〕

一、二月十二日御家督御禮被仰上候。前日御老中方御連名之御奉書到來、御家來七人御目見可被仰付旨也。

横山大和守貴林・前田對馬守孝資・奥村助右衛門修古・横山藏人正從・前田修理知久・前田中務貞幹・玉井市正貞衞。

御本丸御献上物

御太刀一腰、御馬裸脊二疋、綿五十把、縐紗二十卷、白銀百枚、御刀一腰青江代金二十枚。

大御所様ゐ

御太刀一腰、御馬裸脊一疋、綿五十把、白銀百枚、御刀一腰長谷部國重代金二十枚。

大納言様へ

御太刀一腰、御馬裸脊一疋、綿五十把、白銀百枚、御刀一腰光則代金二十枚。

御本丸へ年寄中三人より紗綾五卷、御太刀銀馬代充。

同　　御家老役四人より紗綾三卷、御太刀銀馬代充。

大納言様へ年寄中・御家老中共、御太刀銀馬代まで。卷物なし。

大御所様へ年寄中等より献上物無之。

於御黒書院御目見、御懇之上意、御手自御熨斗御頂戴之。

二月十九日。前田重熙正四位下左近衞權少將に叙任し、前の諱利安を改

む。

「政隣記」

二月十九日、御一字可被下旨被仰出候間、明十九日五半時可有御登城旨昨日依御奉書、今朝五時過御出御登城之處、於御黒書院御一字重之御字也。依之重煕公与御改稱。御拜領、正四位下少將に被任、御懇之上意、御盃・御腰物三原代金二十枚。御頂戴。九時過御下り、西之御丸にも御登、御奏者に被謁、夫より御老中・若年寄衆御勤、御歸館之上年寄中等に被仰聞、於御席左之通前田中務諸頭に演述。

加賀守樣今日御登城被遊候處、於御黒書院御一字御拜領、被任少將、御腰物御拜領、其上御盃幷御肴御頂戴、御懇之上意難有御仕合被思召候。此段何茂可申聞旨御意候。

一、御任官に付御獻上左之通

御太刀一腰、御馬裸脊一疋、越中新川郡下飯野村栗毛六歳、三寸五分。黄金五枚、綸紗十卷、御目錄。御刀、盛景代金十五枚。

御目錄。

大納言樣に

御太刀一腰、御馬裸脊一疋、能登國字出津山分村□毛五歳、一寸七分。黄金五枚、御目錄。御刀一腰三原代金十五枚。、御目錄。

大納言樣に

御太刀一腰、御馬裸脊一疋、能登國字出津山分村□毛五歳、一寸七分。黄金五枚、御目六。御刀一腰三原代金十五枚。、御目六。

大御所樣に
御太刀一腰、御馬裸脊一疋、能登國鳳至郡繩又村栃栗毛五歲、三寸三分。黃金五枚、御目錄。御刀一腰靑江秀次代、金十五枚。、御目錄。

〔德川實紀〕
二月十九日、松平加賀守利安正四位下の少將にのぼせられ、御名の一字に三原の御刀賜はりて、重熙と改め稱す。よて重熙よりも盛景の刀献りて謝し奉る。

二月廿三日。能美郡小松町に災あり。

〔政隣記〕
一、二月廿三日小松町より出火、百七十九軒燒失之旨、追而告來。

〔大野木克寬日記〕
去廿三日夜上口にあたり遠火之体相見候。一昨廿四日取沙汰、小松城下町屋炎燒之由に候。

二月廿五日。前田重熙任官の口宣受領の爲に使者を江戶より發せしむ。

〔政隣記〕
二月廿四日、今度御任官に付口宣之御奉書、今日御用番に聞番被召呼御渡に付、京都に持參之御使當廿日被仰渡有之、御大小將組石川次郎左衛門翌廿五日晝江戶發。但御使濟直に金澤に歸筈也。従金澤

久我大納言は傳奏なり

人持組永原將監京都に越有之、三月廿六日於久我大納言殿御亭口宣御渡。次郎左衛門廿八日京發、四月四日金澤に口宣持參。月番年寄衆より御大小將中村市郎左衛門に御渡、同日金澤發、同十二日江戸着、御家老衆に相渡被指上。御頂戴、御服紗袷・布御上下。被爲召市郎左衛門者、直に江戸御留守詰也。

三月四日。前田重熙諸士の子弟を庶民とする事に關して令す。

〔謙德公年表〕

一、御馬廻組内藤九郎左衛門子數多有之に付、一人商家に遣度旨、其組頭原九左衛門迄書付指上候處、今般以御親翰相組頭丹羽武に被成下、且又組頭等可申談之旨被仰下に付、一統頭中に通達之事。御文言に曰。

内藤九郎左衛門子を輕き者にとらせ候儀に付、年寄共に指出候紙面致一覽候。譜代之勇士之卑賤に下候事甚歎敷候。然共今停止候而者、小祿之者指支候事不便に候間、向後者潜に達内聽候樣に可心得候。此旨其方より頭共に可申談候、以上。

丁卯三月四日

三月廿五日。山崎只右衛門能登島に流さる。

〔政隣記〕

三月廿五日

與力　山崎只右衛門

先年亂心井村十太夫を切殺候に付、久々深美治部に御預置之處、今月□日遠嶋被仰付。但井村も與力也。

四月朔日。前田重熙弟勢之佐に利和の諱を與ふ。

〔政隣記〕

四月朔日、勢之佐殿に御名乘利和（トシカヽ）与御折紙に被記、御手自被進之。

四月四日。前田重熙家督相續を祝する爲閣老等を招請す。

〔政隣記〕

四月四日御家督爲御祝儀御老中方御招請、御老中酒井雅樂頭殿・松平右近將監殿、若年寄堀田加賀守殿・戸田淡路守殿、此外御奏者衆御兩人、其外御役人衆都合十二人御越。御作法都而御先例之通に而、御庭にも御出。御自分御祝故、白洲見物不被仰付。御老中御盃頂戴、御家老前田中務、人持前田兵部、御馬廻頭富永數馬、御小將頭三輪藤兵衞・勝尾半左衞門、御近習物頭並九里治兵衞。御跡祝御能等も、御作法も如御先例。依而御退出後御老中・若年寄衆に之御禮御使、中務一人に而不殘勤之。

〔政隣記〕

四月十五日。前田重煕就封の暇を受く。

四月十五日、諸侯參勤御禮に付、今日月次出仕止、御登城無之。今日上使酒井雅樂頭殿を以、御國許へ之御暇被仰出、如御例白銀百枚・紗綾三十卷御拜領、御作法都而前々之通。但初而之御暇に付、是又如御先例、上使へ御盃事之節御腰物備前近景代金十五枚、久貝惣左衛門御持出被進之。右御退出後、從大御所樣上使西尾隱岐守殿、從大納言樣上使松平右近將監殿、御同道に而御越、從大御所樣綸紗廿卷、從大納言樣紗綾廿卷御拜領、御作法如前々之に而、隱岐守殿へ御腰物信國代金十三枚、右近將監殿へ御腰物寶壽代金如上、大久保甚五左衛門殿・久貝惣左衛門殿御持出被進之。

右に付御發駕、來る廿五日ゟ今日被仰出。

四月十九日。加賀・越中の鳥見等に前田重煕の入封を國境に迎ふべきを命す。

〔前田貞幹手記〕

當御入國之砌、在越中之御鳥見共境迄、毎歳之通御迎に罷出可申候哉。享保九年七月護國院

様初而御入國之節、未御鳥見共不被召抱候故罷出不申候。尤境迄御迎鷹も御座候。同十年月御參勤之節、越中境迄御鷹被召連、御鳥見も夫々御供仕候。今般茂御鷹不被仰付候得共、御鳥見共は境迄罷出、御當地之御鳥見は加州境倶利伽羅坂迄罷出候様に可被仰渡候哉奉伺候、以上。

卯四月六日

大槻長左衛門
松宮清左衛門
青山　判
山崎七左衛門　煩

圖書等七人様

一、御入國に付加州・越中御鳥見共御道中に罷出候事。
但、左之紙面十八日到來、以勘兵衛入御覽相伺候處、返書之通指出候様に被仰出候事。
御入國之刻御迎鷹者無之趣候へ共、越中御鳥見ども は例之通境迄罷出、加州御鳥見共は倶利伽羅迄罷出候様に可有之哉之趣、御鷹方より次ども別紙之通申聞候。一往御伺候而可有御申越候、以上。

四月七日　大炊等七人

中　務　様

追而松雲院様御入國之節之儀者相知不申候由、取次共申聞候、以上。

右致承知、御紙面等入御覽相伺候處、御入國之刻越中御鳥見共境迄、加州御鳥見共ハ倶利伽羅まで罷出候様に被仰出候間、可有御申渡候、以上。

四月十九日　　　　中　務

大炊等七人様

四月十九日。前田重熙登營して就封の辭見す。

〔徳川實紀〕

四月十九日、臨時朝會あり。松平加賀守重熙始め就封三十五人。加賀守重熙・松平薩摩守宗信・上杉大炊頭重定は始めてなり。加賀守重熙に正廣の御刀・鷹・馬を下さる。

〔政隣記〕

四月十九日御暇之御禮被仰付候間、今日五半時御登城被成候様、昨日依御奉書幷御別紙を以御家來兩人被召連候様申來。今朝五時前御出御登城、於御黒書院御禮被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。御鷹・御馬・御腰物相州三原（代金廿枚）御拜戴。前田中務御目見御卷物拜領。横山大和守者眼氣痛、今日御城御供不被召連候。其段昨夕聞番を以御屆有之。右相濟、西丸

ゟも御登、御下り御老中方・若年寄衆不殘御勤、御歸館之上中務被爲召、段々御普爲聽、諸頭中ゟ御弘中務演述左之通。

去十五日上使酒井雅樂頭殿を以、御國老許ゟ之御暇被進、白銀・御卷物御拜領、從大御所樣上使西尾隱岐守殿を以御卷物御拜領、被爲蒙上意、從大納言樣上使松平右近將監殿を以御卷物御拜領被爲蒙上意。昨日任御奉書、今日御登城被遊候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴被成、御鷹・御馬御拜領。其上中務御目見、御卷物拜領重疊難有被思召候。此段何もゟ可申聞旨御意に候。

右拜聽、於竹之間爲御祝儀御帳に付。且今日御殿向五時過揃に而、一統熨斗目不及、平詰之旨御横目中申談候事。

廿日昨日御拜領之御馬鹿毛・栗毛、今朝御用番堀田相模守殿より爲牽御差越、御作法如前々。依之晝過御居間御庭ゟ布御上下に而御出、右御馬御手綱、御近習富永數馬布上下着用に而上之。御頂戴。畢而御袴被爲召重而御出、兩疋共御馬役絹川源兵衞・齋藤龍左衞門に爲御乘御覽。其次兩疋共御召被遊、前田中務ゟ茂拜見被仰付。右御手綱御頂戴之儀、護國院樣初而御暇之節、御馬御拜領之節之御例与云々。

四月廿五日。前田重熙江戸を發し就封の途に着く。

〔政隣記〕
四月廿五日江戸御發駕、前日御老中方御勤、今朝六時御供揃に而六七歩頃本郷御發駕。御供横山大和守・前田中務。津幡驛迄奥村助右衞門御迎に罷出御供。

五月六日。前田重熙金澤に着す。

〔政隣記〕
五月六日卯刻過津幡御發駕、五半時過御入國之御着城。喜三郎殿御大式臺階下迄御出迎、年寄中等前々之通。御供人御歩以上御料理被下之、足輕・小者ゑは赤飯・御酒被下。年寄中・御家老中等御膳下御料理被下候儀等如御先例。御旅裝束之儘に而、於御居間書院年寄中・御家老中被召出、御布上下に被召替。右御間ゑ誘引奥村助右衞門に而、前田大炊（是迄若年寄）被爲召、御家老役幷若年寄兼帶被仰渡。重而大炊被召出、御入國爲御禮江戸ゑ之御使被仰渡、御例之通拜領物被仰付、今日發足。附六月廿五日歸着。

一、二之御丸勤番所之內、矢天井之間御射手御番被指止。依之實驗之間に、御射手・御異風隔日に勤番仕候樣被仰出。

一、御使番二之御丸泊番御用捨被仰出。附、御人數少き故歟与云々。

八日天德院・寶圓寺且野田御廟參。桃雲寺ゑも御立寄。御供御駕籠際御表小將、御先供御大小

村御印は一村の田租及び小物成の定額を記したる文書本令は本年十一月四日を以て復舊せらる

將六人、其御先新番七人・同小頭一人被召連。都而松雲院樣御供立之通也。

十三日御家督・御入國・御任官彼是之爲御祝儀、組頭以上御太刀馬代、頭分以上鳥目獻上之。

依之九月朔日如御先例御書被成下。

〔由美希賢詩稿〕

五月六日敬奉賀玉駕新入城府二首。

行程直指計芒邊。千里金城天府堅。草木朝陽新雨露。封疆盤石舊山川。玉珂聲躍五驄入。雲霓望傾萬戸懸。扈從一時賜恩饌。珍羞如坻酒如泉。龍駕從來地勢雄。山高水淨送威風。九衢如底行周道。雙闕出雲壓漢宮。愛憶緇衣迎改造。製多美錦待成功。畊々騋牝三千色、共喜明時賢路通。

丁卯夏五月　　侍講官臣由美濬　稽首書

五月十日。村御印の交付を改作奉行の取扱とすべきことを令す。

〔改作方雜留〕

村御印若致燒失候歟、又は雨漏等に而損じ申節、御算用場へ相達候へば、右場印書替相渡り候儀御存知之通に御座候。此儀は私共同役より取捌仕筈に御座候所、中古御郡奉行衆より取次御座候御郡茂有之候。是以後は一統私共より取唹仕候間、兼而左樣御心得可被成候、以上。

卯五月十日
岡田・永原一通　松崎・不破一通
千秋・菅野一通　杉浦・藤懸一通

五月十一日。前田重煕その弟嘉三郎に利見の諱を與ふ。

〔政隣記〕
五月十一日嘉三郎殿に今日御實名被進、利見と御折紙に御調、御手自被進之。

五月十六日。原宗兵衛の小者金澤十間町に於いて斬らる。

〔政隣記〕
五月十六日、頃日夜中町中提灯を燈し踊候處、今夜何者やらん御先手原宗兵衛小者を於十間町に切、此後踊等止。

五月。金澤大乘寺及び鹿島郡永光寺の所屬本寺を定めらる。

〔政隣記〕
五月
一、去年九月十七日記之通、金澤大乘寺・酒井永光寺本寺附之儀に付、關東三ヶ寺より呼寄被

直候所、大乘寺者越前永平寺之末寺与成、永光寺は公儀思召有之に付、惣持寺之末寺に被仰付候由被仰渡旨、兩寺より被申上候事。

六月十一日。寶圓寺に於いて今明日前田吉德の三周忌法會を執行す。

〔謙德公年表〕

一、六月十二日護國公御三回忌御法事、於寶圓寺、奉行前田對馬守十一日十二日御執行。兩日共御參詣也。諸士拜禮、但遠所侍、御用に付遠所に罷出候人々、幷與力は拜禮無之。且又就御法事、諸殺生は七日遠慮、普請鳴物は十日より十二日迄。於玉泉寺、施行米百石。

御參詣は前田重熙

六月十八日。前田重靖の抱守才所三郎太夫等遠慮を命ぜらる。

〔謙德公御年表〕

一、六月十八日嘉三郎殿御抱守之內才所三郎太夫・村上左源太・別所和多右衞門各遠慮被仰付候。外に年寄女中山澤下宿、御扶持唯今迄之通被下之、御中﨟一人・御次一人御暇被下候。

六月十九日。前田重熙石川郡粟ヶ崎及び宮腰を巡見す。

〔遠田日記〕

一、六月十九日粟ヶ崎へ初而御行步に被爲入、四半時過御出、暮頃御歸城也。粟ヶ崎より大野

十八日は誤なり

迄御舟に被爲召。初而御出故、夕方御機嫌伺に被出。

〔謙德公御年表〕

一、六月十八日栗ヶ崎筋爲御巡見、晝九時頃より御袴に而御馬上、御供人羽織・袴着用、嘉三郎殿御同道被遊候なり。郡奉行・改作奉行御供仕候。栗ヶ崎御亭に而、御居間前竹藪有之候所、即時に伐除候樣被仰出、三十人組手明幷御供人共伐除申候。夫より御船に被爲召、宮の腰ゟ被爲入、御通筋不被仰出、思召之儘何方町に而も御通に付、其搆無之裏町筋周章申候。御供人は、御船に召候与、陸通り宮の腰ゟ罷越候。但郡奉行・改作奉行野外に御出之節御供之儀者、松雲公御代御放鷹之砌も、郡奉行一人・改作奉行二人御供仕候所、護國公・大應公太田筋より潟之內御放鷹、栗ヶ崎へ御舟に而被爲入候刻、郡奉行一人山崎久兵衞罷出、改作奉行不被召連候。最前改作奉行御供之節者、御召船幷御供船等夫々支配仕候。護國公太田ゟ御越之節、御供船指引十村共仕候。（淵上源六、上野十右衞門なり。）

〔大野木克寛日記〕

去十九日栗ヶ崎ゟ御出之時分、嘉三郎利見君初豫參之輩詩歌。前田孝規投與寫之。

栗ヶ崎の御亭にて見え渡るけしきを

利見

みえわたる千里の末は宇都し繪のふでもおよばぬ遠の山の端

夏日陪玉駕過粟崎亭卒賦

郊原千里對江流。避暑涼風聚遠樓。轉酌香醪陪瓊宴。大淸湖上興悠々。

九里祥甫拜

所の名を句の上に置てよみ侍る

あつき日をわするゝ計川水にさゞ波よするきしのゆふかぜ

竹田昌忠

涼しさは類ひも夏の高樓に千とせの風をふく無萬都かせ

夏ふかくしげる其方の海づらを吹いだす風の木間すゞしき

茂りあふ笹の草木刈あとに野山みえゆく庭のすゞしさ

舟中にて

こぐ船のゆくともしらぬ波の上に移るきし根は見さへとゞめず

恭陪從玉駕巡郊外。過粟崎別舘敬賦

江天一色望無窮。萬頃滄波阿堵中。瀚海長廻日本外。名山久鎭朝鮮東。豈探魚目羨明月。將奉帝心振德風。從來遊豫諸侯度。爲識省耕繫玉驄。

謹應敎賦洗竹

樓前蓊欝竹千竿。多少勝景看不看。晝出青山兼綠水。電光一揮一刀間。

中村忠直拜稿

粟崎避暑舘前洗竹。敬奉應嚴敎

脩竹玉樓下。蓊然竦萬竿。洗枝牽遠水。穿翠入連山。朗吟横脾睨。高興對闌干。豈翅乘遊賞。和作省耕看。

由美潛敬書

六月廿五日。加賀に毛髮を降らす。

〔謙德公御年表〕

一、六月廿五日未下刻俄に大雨降候處、其雨之内に白毛降、城下一統之内小立野天德院別而多く降也。毛の太さ髮毛程にして、長さ一寸計より一尺計迄、跡先細く、白き雪の如く、引て見るに強き馬の尾の様也。試に焚くに臭き鳥の毛を焚く如く、但倶利伽羅峠の邊は黑き毛も有、一方は割れて獅子のいかり毛の様成と云。但是年入梅の頃快晴に而、土用に成て雨降、物の濕り梅雨の如し。土用終り之日より甚暑し。或曰、延寶八庚申年七月四日白き毛降事有、長六寸に不過なり。

六月廿九日。前田重熙金澤の郊外卯辰山を巡見す。

〔謙德公年表〕

一、六月廿九日未下刻、卯辰山邊爲御巡見、御袴・御羽織御馬上に而御出被遊候。御道筋大手御門より彥三一番丁、小橋通り、鬮助馬場之內より波吉宮門前通、森下町。卯辰村に御從者大半殘り、山形御鎗・御挾箱・蓑箱・御茶辨當抔迄に而、春日山庚申塚邊御遠目鏡御用、毘沙門山に御幕打暫被成御座、卯辰村ゟ御歸。夫より金屋町、森下町淺野川橋邊、味噌藏町、九人橋より紺屋坂御門通り、申下刻還城。

〔大野木克寬日記〕

八時過卯辰邊御順見、暮頃御還城と云々。卯辰邊惣而鳥井は御通不被成候由、先達而被仰出。是者未御服被成御座候故かと恐察の所也。

七月十一日。前田重熙、向後每月父兄の忌日に當り菩提寺に參詣すべきを告ぐ。

〔日記頭書〕

一、七月十一日護國院樣・大應院樣御忌日、向後每月御參詣可被遊旨被仰出。但此儀御用番より寺社奉行ゟ申渡有之。

本文は十八日のものと異なるが如し

七月十八日。前田重煕射手の技を覧る。

〔謙德公年表〕

一、七月十七日之夜、明十八日御射手中的御覧可被遊旨被仰出。翌十八日未ノ刻三ノ丸稽古所之内、松雲公御覧之節之御假屋御作事に有之所、建之被爲入。御射手十四人次第三立御覧被遊。其次七八並射込五十建立射之。御近習番小西半左衛門七步二厘、原八郎兵衛三步八厘、而々此内高下有。御機嫌能御意も有之由。

〔遠田日記〕

一、七月廿日七時より御射手中的於稽古所御覽被遊、我等儀も相願見物罷出、御射手中り付。

卅二本	小西半左衛門	廿七本	石黑平左衛門
廿七本	中西傳左衛門	廿五本	久保平左衛門
廿二本	板倉善助	廿一本	富田庄太夫
廿本	奥村定兵衛	十八本	毛利妻之助

二番

廿八本	大窪藤右衛門	廿三本	河縁宇左衛門
廿二本	大久保喜三太夫	十六本	矢嶋聞平

十五本　原　八郎兵衛　十一本　柹崎藤九郎

以上

七月廿四日。高岡町奉行澤田治兵衛等知行を召放さる。

〔謙德公御年表〕

一、七月二十四日、先是寺西萬之助・横山木工ゟ御預置之高岡町奉行澤田治兵衛五百石、渡瀨彌次右衛門四百五拾石御知行被召放、追放之刑に被仰付、せがれ無御構勝手次第之旨、一類遠慮御赦免、兩人家屋敷被召上候。寺西・横山宅へ兩頭御横目相越、連座に而命を傳一件。澤田治兵衛家來令自害候刻、申掠不及言上、御吟味之上致白狀、侍に不似合仕方、急度可被仰付候得共、御入國之砌大赦に付而、御知行被召放、御追放之刑に被仰付候條、一類之宅に禁錮可仕之由。

渡瀨ゟ茂右に等歟。

〔謙德公御年表〕

一、八月二十日最前御知行被召上候澤田治兵衛嫡子某に祖父源太夫遺知之內二百五十石被下之、父治兵衛家屋敷被下候。渡瀨彌次右衛門嫡子某、右同事に候。二百五十石被下之候。併當日は母之忌中に而忌明に被召出候。

七月廿八日。前田重煕石川郡打木濱に散策す。

〔謙德公年表〕

一、七月廿八日打木濱筋御巡見に被爲入候。

七月晦日。前田重煕徒士の遊泳の技を覽る。

〔謙德公年表〕

一、七月晦日御徒川立爲御覽、大桑村向穴淵に而御覽被遊。夫より焔硝庫へ被爲入候。此時御道筋石川御門通坂下水手御門、柿木畠矢部唯丞前、荒町通、百姓町覺源寺前通。穴淵之川原に御暇亭出來御休足也。尤御幕御紋附也。御歸城之節御道筋、寶幢寺前より經王寺廣小路、奥村助右衞門下屋鋪前通、與力町、直に寶圓寺前、馬坂、材木町、釼先辻より紺屋坂通被爲入。

是月は大盡なり

七月。前田重煕老臣の馬術を覽る。

〔謙德公年表〕

一、七月堂形於御馬場、奥村助右衞門・前田土佐守・前田大炊等馬場乘馬上御覽被遊候。是以前御家中所持之馬共を御覽之事茂有。

八月六日。前田重熙金澤の郊外大乘寺山に散策す。

〔謙德公年表〕

一、八月六日大乘寺山御見物、夫より久保之橋邊ゟ御出被遊、御床几に被成御座御遠見也。八時過御出、七半頃還城。唯今迄御供醫師御番醫に候處、御代に成、御匕醫中村正伯・横井泰代ル々御供也。

八月十三日。前田重熙河北郡黑津舟に散策す。

〔謙德公年表〕

一、八月十三日黑津舟邊御巡見御行步に御出被遊候。

八月十五日。前田重熙儒者由美希賢等を召して作詩を命ず。

〔謙德公御年表〕

一、八月十五日夜依召登城、與力味山加右衞門、醫師中村正伯・横井元泰、外料矢田養安、御馬役高桒五兵衞、儒者由美彌次郎、御次番稻垣兎毛七人、爲御慰題を被下、詩作被仰付候。稻垣出來之由。高桒は辭退之由。

八月十九日。金澤淺野川及び犀川漲溢す。

〔謙德公年表〕
一、八月十九日金澤雨風強く淺野川洪水に候。越中富山大北風大雨、前代未聞之大荒に而町中も滿水、いたち川切込、此川筋橋落家土藏押流、田地損毛夥敷候。先是七月十日雨之中に白毛或は白黑斑成毛黑毛など降る。各二三寸より五六寸に至る。金澤は六月廿五日毛降る也。

〔政隣記〕
八月十九日・廿日諸國雨風強、川々滿水、損毛等夥者追々相知。金澤も兩川水出、才川も橋桁迄水付、橋杭二本流失。越後筋別而水災多与云々。

八月廿八日。銀子借替擔保の爲に金澤城內獅子土藏に貯ふる慶長小判を出さしむ。

〔遠田日記〕
一、八月廿八日今日獅子御土藏へ大和守殿御越、拙者・九里治兵衞・御横目山口六郎左衞門龍出、慶長小判三萬兩出之、大銀奉行へ預け置。右金子を以、當地町方・御郡方御借銀三千貫計一步之利足之方、右金子を町方へ預け置、五朱之利かり、一步の利の銀子の替りに遣す圖り也。

八月。領國及び江戶・京・大阪に於ける藩の經費を豫算す。

〔永井不陳覺書〕

延享四年八月仕立之御領國・江戸・京・大坂御入用中勘圖帳。

○御領國中御入用大概圖

一、三千二百六十貫目計

内

三十貫目　御次御用

但、御在國御留守平均如斯大概圖り。

二十五貫目計　御妹子様方御用

右同斷。

四十貫目計　御廣式方御用、但御姫様方御用共

但、御在國御留守平均如斯大概圖り。

一貫五百目計　年寄中席

右同斷。

三百目計　御用所

右同斷。

二貫五百目計　御用人受取御進物御用
右同斷。
四百目計　御茶道方
但、御留守には御入用無御座候。
三百目計　御横目所
但、御在國御留守平均大概如斯。
一貫五百目計　御右筆方
但、御留守には御入用減可申候。
二百目計　御書物所
但、當時御入用大概如斯、次第相增可申候。
十匁計　南御土藏
七貫五百目計　奥御納戸
但、御在國御留守平均大概如斯。
一貫目計　表御納戸
右同斷。

二百目計　御能幷御謡初之節御用
但、御歸國年には御謡初御用無御座候。
百六十貫目計　御參勤御道中御用
但、御歸國之年は二十貫計之御入用に御座候。
百貫目計　御厩方御用
但、御在國御留守平均大概如斯。
十五貫目計　御鷹方御用
但、當時大概如斯。
三貫目計　御飼鳥方御用
右同斷。
一貫目計　御露地方御用
但、御在國御留守平均大概如斯。
二十貫目計　寺社奉行手合御用
百九十目計　御奏者幷御進物方役所御用
但、御留守には御入用減可申候。

七貫目計　御祈禱料等
右同斷。
八十目計　宗門改方役所
五十目計　御儉約方役所
二百目計　御城中着到方
四貫五百目計　坊主頭手合
但、御留守にはゞ御入用少々減可申候。
四百目計　御武具土藏
五貫目計　御弓土藏
八十目計　三之御丸御射手御異風稽古所
一貫七百五十目計　土淸水御鐵炮藥藏
十八貫目計　御細工所
但、御留守には御入用少々減可申候。
四貫目計　火矢細工人手合
四貫五百目計　所々御番所幷越後屋敷共

二十目計　大銀御土藏
百五十目計　諸方御土藏
三百目計　小拂所
百貫目計　御臺所
但、御留守には二十貫目計減可申候。
十四貫二百目計　堂形
三十七貫目計　惣足輕中稽古所
百八十目計　御小人頭手合
但、御留守には御入用減可申候。
六貫七百目計　公事場
三貫目計　御算用場
八百目計　御預地方
五貫八百目計　加州御郡奉行手合
二百五十貫目　定檢地奉行手合
百貫目　大坂爲御登米

十五貫目計　夫銀
七貫目計　年賦御返濟御元入金幷雜用五百目計に而被下候節之入用銀共
七百目計　町會所
二貫二百目計　會所
三貫六百目計　會所取次品々
五十五匁計　役銀所
五十目計　御料紙所
二百貫目計　江戸・京・大坂ゟ指遣絹布・料紙等品々代
但、御在國・御在府平均大概。
五十貫目計　御旅裁許手合
右同斷。
五百目計　御服所
十五貫目計　御仕着代
但、御在國・御在府平均大概如此。

六百五十貫目計　地他國御扶持方代御供人共
但、御歸國には三百五十貫目計減可申候。
二百十貫目計　御給銀
但、御在國御在府平均大概如斯。
五十貫目計　御家來等被下方
但、御留守には減申候。
五貫目計　御荷物認料
六貫目計　御作事所
七百目計　御作事奉行手合
七十貫目計　御普請奉行手合
十五貫目計　金澤廻道橋方
七百目計　薪裁許手合
五百五十目計　魚津郡代
四百五十目計　遠所諸奉行
五十目計　他國難船御用

百五十目計　御鹽運賃
七十目計　御荷物駄賃銀
二貫五百目計　御領國中定渡船
七貫八百目計　御郡方荷物改所
三百目計　里子飯米代
三十貫目計　非人小屋の用
七十五貫目計　御平生方之內惣而不時御入用

〇江戶御入用大概圖り

一、六千貫目計
內
三十貫目計　御次御用
但、御在國御在府大概平均。
百五十貫目計　預玄院樣御用
但、御印章幷被遣被下方共。
百三十貫目計　神田御前樣御用

右同斷。
百三十貫目計　　　　　櫻田御前樣御用
右同斷。
百三十貫目計　　　　　廣尾御前樣御用
右同斷。
百　貫　目　計　　　　出雲守樣奥方樣御用
但、御入用高未得与難相知御座候に付、中勘如斯相圖り申候。
九貫七百目計　　　　　寶林院樣御年賦銀
二　十　貫　目　計　　御兄弟樣方御用
二十五貫目計　　　　　本　郷　御　廣　式
但、淨珠院樣御入用籠申候へ共仕分がたく御座候。
二　百　貫　目　計　　御献上幷御遣物方
百五十貫目計　　　　　御　歸　國　御　用
二　十　貫　目　計　　年寄中等爲御用受取
但、御在國には減少可仕候。

二十貫目計　　兩御納戸

一貫目計　　御鷹幷御飼鳥方等御用

但、當時江戸表には御鷹・御飼鳥御入用無御座候へ共、御拜領之御鷹等暫に而も被指置候へば御入用有之に付、中勘圖相記置申候。

五貫目計　　御馬被召上

但、御在國には御入用有御座間敷候。

二貫五百目計　　御祈禱料幷御最花銀等

三千百貫目計　　一統詰人四千二百五十人計、乘馬六十疋計、御扶持方米石二百目圖にして、馬大豆石六十八匁計にして。

内

御在國には千貫目計可減。但人數二千七百五十人計、馬二十五疋計。

四百五十貫目計　　惣樣男女御給金銀等

但、御在國御在府大概圖り。

二十貫目計　　御仕着代銀渡り

右同斷。

十貫目計　聞番役儀入用銀

二百貫目計　御臺所方

但、御在國には百貫目計御入用可有御座候。

三百貫目計　會所方

但、御在國御在府大概平均。

二十五貫目計　割場日用銀

但、右同斷。

一貫目計　御露地方

但、右同斷。

七貫目計　深川御廻米方幷御藏元かみ代共

但、増減有之に付大概平均。

五十貫目計　所々御荷物賃銀

右同斷。

十二貫目計　爲替銀御利足

一貫目計　一歩切賃小玉歩合等
三百目計　上野時鐘撞料
七貫目計　八丈嶋ゟ被遣物代
但隔年。
十貫目計　猿樂配當米等
三貫五百目計　牢屋賄代。但過料銀代小拂渡
八十貫目計　惣而御平生方不時御用

○京都御入用大概圖り

一、七百八十貫目計
内
十二貫目計　爲替銀御利足
五十貫目計　御國幷江戸品々調上物代
二十五貫目計　預玄院樣・淨珠院樣御用品々調上物代
三十貫目計　神田御前樣御用右同斷
二十三貫目計　櫻田御前樣御用右同斷

二十三貫目計　廣尾御前樣御用右同斷

二十三貫目計　出雲守樣御奥方樣右同斷

六十貫目計　御兄弟樣方御國江戸御用

二百五十貫目計　政所樣御用

五十貫目計　御合力金銀

二十五貫目計　於京都御遣物方御用

百八十貫目計　惣樣御扶持方代

五貫五百目計　河原町御屋敷諸事御入用

一貫五百目計　大津兩御屋敷御用

二十五貫目計　惣樣不時、但江州御知行所幷芳春院御修覆等品々御入用

〇大坂御入用大概圖

一、二百六十貫目計

內

三十貫目計　御國幷江戸御用品々調上物代

百貫目計　町籠御借賃幷惣而懸り物代

十五貫目計	江戸御國に御銀指越候節賃銀等
二貫目計	中之島御屋敷品々入用
三十貫目計	詰人御扶持方代
三貫目計	分算被遣銀
三十貫目計	御かり銀方口入銀御かね改賃等品々
十二貫目計	御拂米代懸賃米代
十八貫目計	江戸御廻米運賃銀
二十貫目計	惣様不時

合一萬三百貫目計

八月。前田重熙、中村典膳を召して綱紀の世の政務を問ふ。

已朽は中村典膳の隱居名

〔謙德公年表〕

一、八月中村已朽御前に被召出、松雲公御代之年寄共之勤方如何に候哉御尋被遊候處、御請には何之心付申品も無御座候。但其頃御寺に御名代に罷越候刻者、前日或は當日朝被仰出候而も、右御用相勤直に登城仕歸宅仕、出席之刻限又致登城御用相勤候。護國公御代御用捨被遊候歟、今程は御代參相勤直に歸宅、出席之刻相勤候段及言上候。

九月六日。前田重熙使を京都に發して桃園天皇の即位を賀し奉らしむ。

〔政隣記〕

八月十一日、來月廿一日御即位に付京都江之御使、今日人持組津田玄蕃江被仰付。九月六日金澤發上京、十月四日御使勤、同廿四日歸着。但御官位無御構、於關東之御格之通、御三家様幷御嫡方・姫君様方御使者之次江此方様御使相勤。外御大名方は別日に相成。玄蕃布衣着用勤之。且御使之爲御用水嶋右近茂致上京有之、十一月六日に歸。

一、右御即位之砌より、准后様御儀大后様と奉唱由云々。

一、九月廿二日右御即位相濟候段相知れ次第、江戸表江御祝儀之御使御馬廻組駒井治部左衛門可被遣旨被仰渡。

九月十九日。前田重熙金澤城內を巡見す。

〔政隣記〕

九月十九日御城中御巡見、十月廿一日与兩日に而相濟。御供人之外に有澤才右衛門被召連。

九月晦日。不作なるを以て諸士の本納拂米を見合すべきことを命ず。

〔謙德公年表〕

是月は大盡なり

改作奉行無之は人數不足の意なるべし

一、九月晦日本多安房守諸頭に申觸紙面之寫。

今年御領分一統不作に付引免相願候得共、改作奉行無之故、唯今より免切に罷成候而者、時節もおくれ申に付、先御收納米を以償、追而者村々に割符引免に相成可申候。就夫連々御勝手御難澁之處、去年以來別而御指支に付、右引免米御引足被下樣茂無之候間、御延引被成に而可有之候。然者來月入々本納拂申御格に候得共、右之趣に候間、一統收納相拂候儀先見合可申候。右之趣可被得其意候、以上。

本多安房守

九月。風邪大に流行す。

〔政隣記〕

九月廿日前後より風邪流行諸國一統也。金澤諸方御番人も無之程也。上之方より段々煩、後には下奥州之方に行くと云々。江戸殿中御番人、長髮・羽織・鉢卷御用捨に而勤番。今月廿日御即位御弘惣出仕登城之御大名十八人計、十月朔日出仕之御大名五人之由也。

十月四日。諸士の本納拂米を許す。

〔謙德公年表〕

一、今年御領國過分之御損毛に付而、御家中免御借可被成哉之儀遂僉議相伺候處、難澁之時

本源寺とは本願寺の訛なるべし

節に付其儀者指止候樣に被仰出候。依之本納拂候儀先見合候樣に先達而申渡置候得共、無構相拂可申候旨、十月四日奧村内膳申觸る。

十月十日。前田重熙老臣を蓮池亭に會して觀楓の宴を開く。

〔政隣記〕

十月十日夕蓮池御亭年寄中・御家老中・若年寄迄御菓子・御酒等被下之。紅葉見物仰被付。但十三日・十九日夕三度に而相濟。

〔續漸得雜記〕

蓮池考

蓮池(レンチ)は古來よりの名に非ず。御塹の名に蓮池(ハスイケ)有。其邊りにある地なる故後人蓮池と音にて唱へ、蓮池と其名を分つよし也。蓮池の名は、極樂橋などいふ類にて、その古へ本源寺尾山在城の頃よりの名也。其頃は今の樣に水なく空壕也。寛永九年微妙公辰巳水道御開通より水塹となるよし、關屋政春古兵談に記せり。此蓮池の地、天德夫人御入輿以後、江戸町とて關東より御附の人々の小屋此所にあり。又古圖に此處に作事場と記せるは、御年譜等に萬治二年七月作事所を改め建つと載るものにして、卽ち故作事の遺號是なり。又菅家見聞集には、萬治二年七月御作事所を奧村河内榮清が門前の明地に被爲建とあるも、是と同所也。是は此時の河内居宅、いまだ今の學校の地にありし時の事也。此地を退くは元祿九年にあり。按るに此作事所出來の頃は、最早關東

よりの御附小屋を御取拂の後の故なるべし。蓮池御殿は延寶四年九月の舊傳に、故作事所に御座敷建させらるる、其時奉行金子安左衛門・中村兵左衛門とあり。按るに今の御作事所の地御作事所となるは、此時此御座敷御造營に付轉地被仰付と思はるゝ也。是卽ち此蓮池に御造營ある起本にして、是を後に御殿とも稱せし成べし。其頃は未だ何事も質素の時節故御座敷と唱へ、又貞享の頃迄も以前の遺名にて江戸町御亭と唱へ、押立蓮池御殿などゝは不稱躰也。されば御殿と唱ふるは是より後の事なるべし。改て御殿後に御用に無之たゝませらるるといふ事は舊記に見當らず。今の御亭共は皆々寶曆の火災後の御立物と云。貞享三年八月十五日御拜領の駿足を大老以下蓮池の御亭にて見物被仰付、且御拳の鷹の雁を賜食被仰付事、年表に見えたり。又一舊記に、夜に入大夫以下風雅の輩に命じて明月の詩歌を献ぜさせらる。奥村庸禮子の詩暢美、公賞し給ふとあり。しかれば蓮池の御馬場も既に其頃ありしと思はるゝなり。元祿九年八月十一日松雲公江戸より御歸藩の節、直に蓮池御殿え御着駕、年寄中と御商議ありて、同十七日三州今年大飢饉故御倉廩を盡く開かせられ、窮民を賑給あり。此事の詳は年表等諸書にあり。此時此御殿え御着駕あるは、元祿七年六月より金城二ノ丸に御造營あるを以て也。此御造營大なる事にて、同十年二ノ御丸へ御移徙也。按るに是迄は、今の學校の地に横山山城・奥村河内・横山右近の三屋敷あり。此屋敷共今年御所望轉地被仰付は、蓮池御殿の御用屋敷に成りたると察せらるゝ也。同十年五月三日此御亭に而、御射手十九人の的御覽あり。姓名度付等略之。此後延享四年十月十日、謙德公此亭に於て年寄衆四人横山貴林・本多政昌・前田直躬・奥村修古。紅

葉見物被仰付、嘉三郎樣御詠歌及び年寄衆詩歌あり略之。同月十三日・十九日にも追々有之。是より後年に折々此事あれどもこゝに略す。

卯五月晦日　　富田癡龍翁考

十月十七日。遠田勘右衞門等知行の一部を上りて藩費を補はんことを請ひて許さる。

〔遠田日記〕

一、十月十七日同席富田・富永・武田・九里・由比・拙者、先頃知行之内少宛差上申度候旨、連名紙面を以願候處、御喜悅被思召候得共、先御借被遊間敷之由被仰出候得共、重而申談、安房守殿まで相願候處、又格別之願之趣に候條可指上候由被達御聽候由、今日御申聞候趣。各知行之内少々宛當分被差上度旨重而願之趣に付達御聽候處、願之通与被思召候。且又江戶御供之年は差上申間敷旨被仰出候條、可被得其意候事。

拙者は遠田勘右衞門

十月十九日。領內不作なるを以て引免せし額を幕府に屆出づ。

〔御年表〕

一、十月十九日、今年御領國引免高現米十二萬石餘与御屆有之旨之事。

十月二十日。前田重熙銃手の射的を覽る。

〔御年表〕

一、十月廿日御異風中鐵炮於三ノ丸御覽可被遊候事左之通。

一番玉數十宛、長筒五寸角。

中り十内六星飯沼源太左衞門、六星中村十郎左衞門、十内三星豐島新左衞門、七つ内三星平田宇右衞門、八内三星今村恒右衞門、八内二星岡田作兵衞、七つ内五星井上宇兵衞、八つ内二星牧甚五左衞門、五つ内一星吉田貞丞・六分部清太夫。

二　番

中り九つ内三星武藤清右衞門、五つ内一星今村平兵衞、四つ内二星池田權左、五つ内一星廣瀨兵助、七つ内一星岡野判兵衞、七つ内二星齋藤金兵衞、七つ内二星三島津左衞門、七つ内一星不破武兵衞、四廣瀨治太夫、九つ内一星大脇兵左衞門。

〆二十人

十月廿一日。前田重熙金澤城内を巡視す。

〔大野木克寛日記〕

十月廿一日。今日四半時頃二之御丸御櫓等御巡見。大御式臺より御出、右御巡見御供大和守

初御城附役人。尤御近習頭等、御普請・御作事兩奉行等御供也。御鑓、御持鑓十文字迄。御挾箱持一人、御草履取一人、此類之者少々御供。尤三十人組頭・御徒等御供。右御出に付、表御式臺白洲階子邊に、詰合御奏者番・組頭・御用人・御使番・御横目各罷出る。二之御丸・橋爪二之御門・御櫓御順見。夫より裏御式臺前御通、玉泉院樣丸等御見分相濟、九半時頃御歸被遊候。

十月。大聖寺侯前田利道の求に應じて金子を調達せしむ。

〔遠田日記〕

十月。造酒丞樣御用銀百五十貫目町方御才覺之儀申來り候得共、此節相調兼候。押而申付候はゞ此方樣御用銀に差支候に付、安房守殿・大和守殿より被渡置候文金小判二千六百兩計、大銀奉行手前に有之候。先右之金子引替相渡候趣に達御聽、御算用場奉行斷次第に相渡候樣に被致候樣、御兩人へ申達す。

十一月四日。村御印再交付の請求は從前の如く郡奉行の取扱とすべきことを令す。

本年五月十日の條參照

〔杉本氏小留帳〕

諸郡村御印若致燒失候歟、又は雨漏等に而朽損候節、當場より書替相渡候儀有之節、只今迄

各取捌有之候得共、自今改作奉行取捌に可仕旨、右奉行中より紙面之趣先頃相達候得共、前々之通各可被取捌儀与重而致詮議候條、只今迄之通り可被相心得候、以上。

十一月四日　　御算用場

藤懸多門殿
金森忠太夫殿

右村御印之儀前々より拙者取捌に候處、自今改作奉行中致取捌筈に候旨、當春御算用場より申來候。然處向後前格之通り申來り候に付、寫相越候條得其意、自今村御印取捌之品有之節は、心得違無之樣拙者共役所へ可及斷候。承知之驗令印形早々先々遣、落着より可相返候、以上。

卯十一月廿七日　　藤掛多門
金森忠太夫

御扶持人・十村中

十一月九日。諸士の妾を妻とすることを禁ず。

〔國事雜鈔〕

今日御用番前田對馬守殿、兩通之別紙御渡致順達候樣被仰聞候に付相廻申候。御留より私迄

御返可被成候、以上。

十一月九日　　　　遠藤紋太夫

丹羽武兵衛樣

御家中之人々妾を妻に仕候儀、只今迄年寄中ゟ相達置候分者可爲其通候。是以後者右之族無之樣に被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可申聞置候事。

十一月十一日。今明日天德院に於いて前田宗辰の一周忌法會を執行す。

〔御年表〕

一、十一月十一日・十二日於天德院、大應院樣御一周忌御法事御取越御修行。諸事前々之通。僧數百五十八、御奉行奧村助右衛門、諸事御用寺社奉行青山・菊池・品川、會所奉行多胡嘉藤次、改作奉行國澤太次兵衛、大小將御飾奉行中村才記・原十郎右衛門・嶺內右衛門、同御香奠裁許佐藤五郎左衛門・三輪齋宮・村田判太左衛門・陸田孫六、同披露役不破伊織・半田權佐・根來九兵衛・淺井和兵衛・矢部權佐・仙石要人、右之外詰人前に同。

一、御家中一統十一日・十二日拜禮被仰付。但與力以下無之。

一、兩日共御參詣之事。

一、於玉泉寺十一日女。十二日男。御施行二百石。右奉行永原勘左衛門・半田圭鈴・關屋長太夫。

十一月廿八日。本日より江戸に於いて前田宗辰夫人の三周忌法會を行ふ。

〔御年表〕

一、十一月廿八日より晦日まで、於江戸梅園院樣御三回忌御法事に付、鳴物等三日遠慮之事。

〔日記頭書〕

一、十一月卅日、梅園院樣御三回忌御法事、江戸於廣德寺廿九日・卅日御執行。依之今日天德院に御參詣。

十二月四日。儉約の爲嚴に音信・贈答・餞別を廢せしむ。

〔典制彙纂〕

口上に而申達候趣

御家中之人々儉約之儀、御先代段々被仰出之趣有之候付而、何茂其心得仕體に相聞候處、音信・贈答・餞別等之儀表向に而は指止、內々に而者相止不申樣にも沙汰有之候。若左樣之儀有之候而はいかゞ敷候間、右被仰出之趣彌嚴密に相守可然候。此段各爲心得申達候事。

右同年十二月四日御用番奧村助右衞門殿被仰渡候趣也。

十二月十八日。大槻朝元に流刑を命じ當分成瀨內藏助の邸に禁錮せしむ。

〔袖裏雜記〕

内藏允ゐ可申渡趣

護國院殿御代段々不屆之趣有之、大應院殿思召甚不應候。然共未御三回忌も不相濟事故、先蟄居被仰付置候思召に候。於手前御同事に存候。依是此度遠嶋申付候。罪之儀一々に申出候而は、急度不申付候而は不相叶候へども、時節柄之儀に付令宥免、右之通申付候。尤於彼島締申付候。依之先人持ゐ指預候。

右之外申渡方等之儀、段々以御親翰被仰出、即日（十二月十八日）安房守宅において助右衞門列座申渡候處、奉承知候。大應院樣御代被仰渡候時分、私存寄各樣迄申上候付、御聞屆被遊御吟味とも可被仰付哉与奉待候處、御早世被遊候故、迚是に而朽果申儀と覺悟仕罷在候處、御當代樣御同意之思召に而遠嶋被仰付候段、此上何かと可申上樣も無御座、奉畏候由申聞候旨。内藏允は成瀬内藏助へ御預也。

朝元が成瀬邸に移されたるは翌朝に在り

〔謙德公年表〕

一、十二月十八日四時頃、大槻内藏允居屋敷を足輕四十八人取卷、出入者相咎、但假名を承り内ゐには入る。家内之者は一向不出之候。組頭本多安房守より紙面を以、私宅ゐ罷出候樣に申渡、罷出候處、奥村助右衞門・横山大和守幷御小將横目丹羽織部連座に而、房州申渡す。御知

行被召放、居屋敷御取上、成瀬内藏助宅に禁錮、追而五ヶ山に流罪之旨申渡、内藏助請取使者に相渡也。居宅跡闕所、御小將横目村田吉左衛門、内藏允出宅以前より罷越、前田修理・深美治部・庄田舍人彼方に可相越旨申渡に付、卽刻罷越、諸道具等相改、吉左衛門封印す。男女子共七人母共不殘、一族幷右三人之緣者に御預、從弟以上不殘遠嶋、内藏允家屋敷其日・翌日切に取毀明屋敷と成。諸道具之内御紋附有之分者、不殘御取上之由。

〔御年表〕

一、十八日夕方本多安房守宅に、人持組三千八百石大槻内藏允召寄、奥村助右衛門幷御小將横目澤田忠太夫・丹羽織部・中村新平。

不屆之品有之候。依之遠嶋被仰付。夫迄之間成瀬内藏助に御預被成候由之事。

一、追付宅には御横目等罷越、夫々見屆、諸道具等封印に及、母子共一門中に引取、家來共夫々分散之事。

前田修理・深美治部倅吉郎・庄田舍人・大槻長太夫・園田兵太夫・大槻七郎左衛門・大槻長左衛門・大槻三左衛門・大槻長次郎。

右内藏允一門中遠慮、夫々頭宅に而被仰渡候事。

〔大野木克寛日記〕

十二月十九日、昨十八日夜安房守邸江大槻内藏允相招之、御吟味之品就有之、成瀨内藏介江被召預之旨申渡之。其節御用番助右衞門出席之由。此外御横目丹羽織部・中村新平・村田吉左衞門等出座。右之趣言達相濟、內藏允家財闕所に被仰付候に付、御横目新平儀內藏允宅江罷越候。此外內藏允緣者前田修理罷越、新平相見に而家財相改候由。右內藏允儀自宅罷出候時分より、駒井與兵衞手合足輕五・七人宛、大門・裏門・大門續小門口々相固め、出入等急度相改候由。成瀨藏介江大槻御預之儀、暮六時過御用番助右衞門より用意次第、早々受取候樣に申來候由。因之夜中縮所等夫々出來、今朝六半過に、安房守邸迄人數指出引取候。前田修理儀、內藏允宅江昨夜罷越、今日も罷越、夫々支配有之。今日者自分に指扣、登城無之候。內藏允娘、深美治部息吉郎江緣談、護國院樣御代願之通被仰出候而、未婚禮無之、內藏允手前に罷有に付、治部手前引取候由。庄田舍人儀、右同前に付是亦引取候由。此外子供、修理・大槻長太夫・同長左衞門・同七郎左衞門等江段々引取候由。右內藏允緣者同姓等之一類、各自分に指扣候。內藏允遠流被仰付配所者、越中五ヶ山之由密々申慣候。

十二月二十日、昨日土佐守邸江修理相招、指扣罷有候樣に言達。庄田舍人儀も組頭助右衞門邸相招、右同然言達。深美治部者其儀無之由に候。是者治部せがれ吉郎緣者に而、一段續遠候故右之通に候。內藏允上屋敷・下屋敷闕所に罷成候に付、御横目中封印有之。右兩家番人

者、修理・治部・舍人申合、家來指遣護之候由也。

〔政隣記〕

十二月十八日夜、本多安房守組人持大槻內藏允朝元（三千八百五十石、年四十五。）儀、於安房守宅流刑被仰付候旨申渡有之。男女之幼少身近き方江引取、いとこ以上親類不殘指扣被仰付。

〔政隣記〕

前記十二月十八日に有之、大槻內藏允越中五ヶ山之內江流刑被仰付、配所普請出來迄當分人持組成瀨內藏助江御預。卽日內藏允居宅江御横目中村新平被遣之、諸道具闕所被仰付。且又內藏允母幷子共、夫々一類之者江相渡之候。左之通。

大槻七郎左衞門江　嫡子直之助　娘よつ　　大槻長太夫江　三男伊三郎

大槻長左衞門江　養母惠正院　二男榮次郎　　中村喜三太夫江　實母光凉院

深美吉郎（治部せがれ）江　娘でん　但、御先代奉願緣組申合置候。

庄田舍人江　娘ひさ　但、同上

前田修理江　娘すぎ　　園田兵太夫江　娘きよ

一、內藏允下屋敷家來之居宅は、夫々家主江被下之、追付取毀候事。

十二月廿九日。徳川家重、前田重煕に贈る所の鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

十二月廿九日御鷹之鶴宿繼御奉書を以御拜領、御禮之御使御小將頭三輪藤兵衞に被仰渡、翌年正月二日金澤發足。

但、鶴御拜領御在國隔度御恒例之事故、此以後不記之。

寛延元年

正月十日。金澤卯辰妙泰寺燒失す。

〔大野木克寛日記〕

正月十一日、昨十日夜八時頃、卯辰村日蓮宗妙泰寺炎上。折節風も無之、餘煙他に不移、早速鎭。尤火消番段々驅付候由也。

二月朔日。是日以降三日まで前田利家百五十回忌法會を金澤寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

二月朔日・二日・三日於寶圓寺高德院樣百五十回御忌御法事御執行、三月御相當を御取越也。御法事奉行橫山大和守に被仰付置候處、煩に付代奥村助右衞門に被仰付。於玉泉寺御施行、

諸士拜禮其外如御先格。三日共御參詣有之。從南部樣御代香御使者來、四日登城。

二月十一日。前田重熙その入國を祝するが爲め是日以降屢能を演じて士庶に觀覽せしむ。

南部樣は盛岡侯

謙德公年表等に本件を延享四年五月廿一日以降とするは誤なり

〔大野木克寛日記〕

正月廿六日。近々御家督御入國御慶賀之御能被仰付候。其節風流開口・要脚廣蓋之御規式有之候。開口之儀、神道歌學之家田中平丞に被仰渡候。則作進之寫、或人投與寫之。右平丞者田中一閑子左源太、其子平丞。

開口

夫瑞圭は福祿を永く傳へて、北の海浪も長閑に、賀をくはふる家の春なれば、代々のさきがけ此花の、榮え久敷國とかや。

〔政隣記〕

二月十一日、舊冬十一月廿三日被仰出候通、今日御家督等御祝儀御能有之、要脚廣蓋・開口風流被仰付。但當四日、御家督御入國之御祝儀、來る十一日御能被仰付、其節各見物被仰付、御料理茂可被下候。舊臘御拜領之鶴御披は、別日可被仰付与思召候得共、御日柄指合候故、右之節御披も被仰付候間、何も頂戴可仕旨主付年寄中ゟ被仰出、奥村助右衛門・奥村内膳よ

權兵衞は竹田、宮門は波吉、權之進は諸橋氏
鳥目は前に謂ふ要脚なり

り夫々被申達趣等、都而如御先格。

十五日・十八日・廿一日・廿三日に茂御能被仰付、御歩並迄見物被仰付、御料理被下之。廿七日には御家督御祝儀且百五十回御忌御法事相濟候に付、旁御寺方御招請、十一日以來廿七日迄百姓町人芝居見物被仰付、都而御作法如御先格。

〔遠田日記〕

一、十一日五半頃より雨降、今日御入國御家督御祝之御能被仰付、御規式護國院樣御時代之通之由。人持・頭分幷子供拜見、御料理被下之候。去暮御拜領之鶴も御披、御料理前御吸物・御酒一篇被下之、御料理与引替也。御中入前要脚御廣蓋を以、御時服被下。大夫權兵衞・宮門・權之進・寶生彌三郎四人、唐織一共に三つ也。此外御扶持被下候御役者二十四人之由也。のし目一・下着一二つ宛被下之候。鳥目は三百貫之由。畢而御中入御料理被下之。御料理二汁五菜也。

翁　毘沙門風流　開口　老松　麻生　田村
粟田口　東北　張良　花折　祝言　呉服

右相濟、御膳奉行を以、御到來鴨一羽拜領す。

右御能見物之御禮、表向當十六日登城。夫より先日之通御禮相廻り申筈之由。

一、十五日天氣快晴暖氣也。御能在之に付惣出仕無之。今日は十一日御用之頭分・御小將・諸役懸りの面々等。

翁　難波　煎じ物　八島　花子

江口　融　若菜　祝言金札

一、十八日天氣好、南風暖氣也。御祝之御能爲見物、五時過より出。

加茂　昆布柿　兼平　靭猿　松風

道成寺　河原太郎　祝言志賀

一、廿一日天氣快晴、今日御祝之御能有之。見物に五半頃出。

氷室　唐人相撲　忠度　木六駄　羽衣

石橋　釣針　祝言養老

一、廿三日天氣宜、今日御祝之御能有之候。

淡路　歌仙　賴政　釣狐　野々宮

阿漕　首引　祝言右近

一、廿七日今日御祝之御能、先頃寶圓寺御法事相濟候御祝之儀被相兼、諸事御寺方御料理御振廻也。

翁　弓八幡　三本柱　簓　通　圓
葛　城　熊　阪　財　寶　亂
以上惣様暮頃相濟。
瀧谷妙成寺當病斷、白山長吏等も出。出家數三百七・八十之由。
〔大野木克寛日記〕
今度御能見物之惣御人高引しらべ候處左之通。
初　日　二百十六人
二日目　四百十二人
三日目　五百六十人
四日目　三百八十八人
五日目　三百六十一人
六日目　三百六十六人
都合　二千三百三人
御白洲見物書立。
初　日　町奉行支配　四百三十二人　御郡奉行支配　百九十八人

二日目	町奉行支配	四百二十五人	御郡奉行支配	百八十人
三日目	町奉行支配	四百二十三人	御郡奉行支配	百九十人
四日目	町奉行支配	四百二十五人	御郡奉行支配	百九十人
五日目	町奉行支配	四百二十二人	御郡奉行支配	百七十人
六日目	町奉行支配	四百二十四人	御郡奉行支配	百六十六人

惣人數　町奉行支配　二千五百五十一人
　　　　御郡奉行支配　千八十八人
都合　兩奉行支配　三千六百三十九人

〔日曆〕

本文は百姓町人御能拝觀の心得なり

覺

一、若雨天に而候はゞ、草履取合羽爲着可申事。
一、御城中杖突申間敷事。
一、印籠・巾着・扇子無用之事。
一、雨天に候共、今般之儀は橋爪御門より内は草履はき可申事。
一、御能拝見仕刻、笑・高聲仕はやし申間敷事。

附、あくび仕間敷事。
一、草履取共相詰有之候而、高聲わらひ等仕間敷樣に、前廉主人より能々可申付候事。
一、御白洲に相詰候內大小用調申儀、人々作法能立居可仕事。
附り、鼻紙等取散し申間敷候。
一、御能拜見罷出候前晚より食事氣遣可仕事。
一、御白洲に罷在候內、菓子等懷中仕、罷出給申間敷事。
一、御中入之時分、二・三十人宛指圖次第罷出、御赤飯等被下候はゞ本之所ゟ歸り可申事。
一、小用等に相立候儀、御能一番一番之間考、罷立候樣に相心得可申事。
一、御能相濟候共立騷申間敷候。五人指圖次第、下の方より罷立可申事。
一、御中入亦は御能相濟候時分、御酒被下候間、十人ゟ一樽充頂戴仕候樣に十人充組合、於御算用場相渡申筈に候。此儀十一日朝御算用場聞合可有之事。
一、草履取人數相減候樣に被仰渡候。天氣能候はゞ、三ノ御丸橋爪より猶更草履取相減、御白洲御門前迄召連候者共、無作法無之樣念を入可申渡候。何も御算用場腰懸迄相返置、御能相濟候時分、五人之草履取之內御算用場腰懸迄致案內候はゞ、三ノ御丸橋爪幷御白洲迄迎に呼寄申筈に候。御白洲御門前に片寄罷在、無作法無之樣に主人により可申渡候。且亦傘は內に

名札附置、替り申候はゞ追而取替可申事。

一、御能番附致懐中、拝見所に而取出申間敷事。

一、衣類・脇指等之儀、前々之通相違無之様に相心得可申事。

一、足袋はき申儀無用之事。

右御能之時分、拙子共指引可仕旨被仰渡候間、覚書之趣夫々御心得、被罷出候人々へも各より御申談可被成候、以上。

辰二月十日

田井村　喜兵衛
村井村　與三右衛門
田中村　三右衛門
今江村　源助
大澤村　内記

諸郡御扶持人・十村衆中・新田裁許・山廻・魚津町年寄中・堺町年寄衆中・小松安宅町年寄衆中・宮腰町年寄衆中・松任町年寄衆中・湊肝煎衆中・所口町年寄衆中・今石動氷見町年寄衆中・城端高岡町年寄衆中

二月二十日。大槻朝元の兄大槻七郎左衛門病歿す。

〔前田直躬覺書〕

大槻七郎左衛門由緒一類附

一、二百八十石　本國奥州生國御國　歳五十七　大槻七郎左衛門

七右衛門儀、寶永七年十二月平田故清左衛門組御持弓足輕に召抱、其以後足輕小頭申付候處、護國院樣御代段々御取立被爲遊、享保十九年十二月廿七日新知百三十石拜領仕、新番組御徒被差加御近習番被仰付、寛保三年十一月十五日組外被仰付、御加增知百五十石拜領仕相勤罷在候處、護國院御逝去以後、延享二年八月十四日御近習番一統御用無御座、御表向相勤可申旨被仰出候。同四年十二月十八日大槻内藏允儀不屆之品有之、遠島就被仰渡候翌十九日より差扣罷在候處、同五年二月廿日病死仕候。

一、高祖父之父　伊藤備前

奥州四本松右馬頭幕下にて、大槻与申所に居城仕候處、爲仙臺政宗沒落仕、せがれ三人御座候處、散々に相成、嫡子は越前ゐ罷越候。二男は相馬家ゐ罷越、今以同苗罷在候。三男は佐竹家に罷在候由傳承仕候。

一、高祖父之母　相知不申候

一、高　祖　父　大槻玄徹

備前嫡子に御座候處、越前ゟ罷越醫者に罷成、其後御國ゟ罷越。本苗は伊藤に御座候處、大槻に相改候。死去仕候年限傳承不仕候。

一、高　祖　母　　　　　　相知不申候

一、曾　祖　父　　　　　　大槻半左衞門

浪人に而御國罷在、寛永十三年病死仕候。

一、祖　　父　　　　　　　大槻長左衞門

徹妙院樣御代御鐵炮之者に被召抱、數十年相勤、元祿十五年病死仕候。

一、祖　　母

元祿四年十一月病死仕候。

一、父　　　　　　　　　　大槻七左衞門

松雲院樣御代、御持弓足輕小頭役數年相勤罷在候處、寶永五年病死仕候。

一、母　　　　　　　　　　上田喜兵衞　娘

一、外　祖　父　　　　　　上田喜兵衞

喜兵衞儀、別所故三平家來御座候處、寶永七年病死仕候。

一、外　祖　母

寳永六年病死仕候。

一、弟　　　　御徒小頭並　大槻長左衞門

一、同　　　　　　　　　　大槻內藏允

一、內藏允儀人持組罷在候處、不屆之品有之遠島被仰付候旨、延享四年十二月十八日被仰出候。

一、妹　　　御馬廻組　園田兵太夫　母

一、を　ひ　御馬廻組　大槻長太夫

一、同　　　　　　　　大槻長四郎

一、同　　大槻長𧦅門せがれ　大槻七之助

一、同　　大槻內藏允嫡子大槻長左衞門方に引取申候　大槻尙之助

一、同　　同人二男右長左衞門方に引取申候　大槻榮次郎

一、同　　　　　　　　園田兵太夫

一、め　ひ　大槻內藏允娘人持組深美治部せがれ　深美縫殿　妻

一、同　　同人娘人持組　庄田舍人　妻

一、同　　同人娘前田修理方に引取申候　一　人

一、同　　同人娘園田兵太夫方へ引取申候　　一　人

一、同　　大槻長左衛門娘　　一　人

一、父方いとこ　　新番組御徒　大槻三太夫

一、同　　新番組御徒　大槻清左衛門

一、同　　定番御徒　中村喜内

一、同　　御鷹方御徒横目　中村左衛門

一、同　　御徒横目　中村喜三太夫

一、同　　組外　吉田藤藏妻

一、母方をひ　　御臺所奉行支配　大矢兵左衛門

右大槻七郎左衛門由緒一類附、延享五年四月十日御番頭より出之。

二月廿二日。前田重熙小將組の士の風俗を改むべきことを諭す。

〔御眞翰等扣〕

延享五年二月二十二日組頭三輪藤兵衛・高畠善太夫、於御居間書院御前へ被召出、右兩人退候而、齋藤三左衛門・津田五郎兵衛・上月四郎左衛門・津田求馬・山森多宮、右一所に被召出、御意之趣。

一、小將相替品無之哉与御尋に付、先相替儀無御座旨、三左衛門御請申上候。然處惣而御小將中風俗不宜被思召候。大應院樣段々儉約之儀嚴重被仰渡候へ共、若者共之内には未心服不仕者共も有之樣被聞召及候。假令衣服之儀、綿衣樣之輕き品致着用候而も、心底實儀を專に不仕候而は不宜被思召候。外組には少々裝束も改候樣に被聞召候得共、御小將共之内には未相改不申者も有之躰に被聞召及候。さゝい成事に候へ共、參會等之時分も、當時は事輕趣に而茂、以前之華美有之時分よりは、都而費も有之躰に候。其方共も度々申談躰に候得共、年若成者之内抔には得と信服不仕者も有之躰に候。惣而風俗餘情に掛、進退迄を第一に仕儀に而者無之候。給事等之儀、松雲院樣御代は段々御吟味も有之事に候得共、其時代は人々一分之儀相濟候上、進退等之所に心付申候。當時は時風も違申事に付、第一實儀を專に心附候樣に可申談候。其上に而進退之所宜候得ば尚更宜事に候。假令ば於江戸使番代火本見分抔申付候時分、勤方に仕損じ有之候而も、其儀は左而已にも不存、給事抔致損候得ば殊之外迷惑に存樣子に候。ヶ樣に而は有之間鋪事に候間、棟取候者共に得と申含候はゞ自相改可申候。御留守にも成候得ば、町廻り迄に而隙之事に候間、武藝等之稽古猶更心掛候樣申談可宜旨御意に付、段々被仰出之趣奉畏候。着服等之儀は他組とは違、御小將組は一樣に揃申樣成風儀に而、何と仕候而も裝束等他組之樣には相見不申候。假令御停止之紗綾・縮緬等は着用仕候而も、

心底は綿衣着用仕趣に、萬事相心得候樣に仕度儀与、毎度同役共申合候儀に御座候。且又指引之儀も、御意被遊候ごとく老輩棟取之者に申聞候得ば、外之者共に之縮にも相成申候儀故、其儀は前々相心得罷在申候。又參會之儀も、御小將組之事は御用相勤申候組柄之儀故、ひしと指止候儀も成兼申候。隨分事輕く出合候樣に毎度申聞候儀に御座候。何ご仕候而も大勢之儀に御座候間、萬端急には風俗も直り兼申儀与奉存候。一々御意之趣奉畏候旨、同役一統御請仕候。重而御意被遊候は、組頭共にも申聞候間、隨分申談指引可仕候旨、御意御座候事。

三月朔日。前田重煕高松侯松平頼泰の女と緣組を內約す。

〔政隣記〕

三月朔日、少將樣御緣組之御內談相極。前月十八日松平讃岐守殿に聞番青木伊右衞門被遣、あなたよりも御留守居高見淸兵衞被遣、御料理出候由從江戶申來。

三月七日。前田重煕金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

三月七日六時御供揃に而、同半時過御發駕。御供御家老前記之通前田勘解由・西尾隼人、御跡より若年寄靑木新兵衞。魚糸川御逗留。

三月二十日。前田重煕江戸に着す。

〔政隣記〕

三月二十日江戸御着。廿七日上使酒井雅樂頭殿御出。

三月廿八日。前田重煕登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

三月廿八日、臨時朝會あり。尾張中納言宗勝卿參覲せられ、水戸宰相宗翰卿・紀伊宰相宗將卿・尾張中將宗睦卿にも拜謁せらる、尾の家司等皆見え奉る。松平加賀守重煕始參覲八人。

〔政隣記〕

三月廿八日御禮。隨駕前田勘解由・西尾隼人、御目見等如御先例。

四月六日。金澤に於て諸士に前田重煕の江戸に着せしことを告ぐ。

〔大野木克寛日記〕

四月六日今日因召、人持・諸頭常衣に布上下介着、辰刻より段々登城、巳刻頃竹之間に各列居、土佐守・助右衞門・內膳・大炊・藏人出座、大炊演述之趣。

加賀守樣御途中無御恙、前月二十日御着府被遊候處、同廿七日以上使酒井雅樂頭殿被爲蒙上

意、且又翌廿八日於御黑書院御參勤之御禮被仰上、殊御懇之上意。前田勘解由・西尾隼人御目見被仰付、重疊難有被思召候。此段何茂可申聞旨、以御書被仰下候。
右之趣口陳、各恭悅之段奉賀退出。
〔政隣記〕
四月四日、於金城頭分以上ゟ御弘、爲恐悅月番御宅ゟ相勤。是初而御參勤故也。二度目よりは出仕席に出仕以上之人々迄ゟ御弘、當座に恐悅申述相濟。

四日とあるは誤なるべし

四月十日。朝鮮聘使を迎ふる爲馬匹・馬醫等を金澤より遠州舞坂に向ひて發せしむ。
〔政隣記〕
四月十日朝鮮人迎馬六十疋、御馬醫等附、御横目丹羽織部指添、今日金澤發、遠州舞坂迄罷越。御先手等者先達而江戸ゟ參有之。則津田林左衞門・水野助三・與力神戸貞右衞門・吉田勘右衞門・櫻井金左衞門・足輕・小者、十四日に江戸發舞坂ゟ罷越。

四月十七日。前田重煕朝鮮人江戸着の際淺草日音院に於いて觀覽すべきことを告ぐ。

〔正德至天保雜留〕

一、四月十七日、朝鮮人來朝に付、右之節於淺草日音院御見物可被遊候間、右御用主附相勤候樣、前田兵部を以被仰出候。江嶋屋太郎次より日音院へ萬端申通、急度立寄相心得可申候。是以後伺等之儀、直に相伺候樣兵部申聞候。依而二十日會所奉行・御作事奉行申談、日音院へ罷越樣子見分いたし、御物見所、先年松雲院樣被爲入候節、五尺計に四間の御物見有之。右四間之内二間には有之、殘而二間はすだれ計有之。則見分之委細申上候處、四間に九尺計之御物見所に拵候樣被仰出候。且又御女中樣方等にも被爲入候得者、御供女中之面々も見物仕儀に候はゞ、今一ヶ所見物所明けさせ可申哉之儀も相伺候處、其通与被仰出、三間物見爲明、六尺之懸戸爲致、惣廻り爲御縮簀垣爲致、御かん所一つ、幷門内につなぎ五疋建に爲致、玄關脇かん所一つ出來爲致候。

四月十八日。大槻朝元を配所越中五ヶ山に赴かしむ。

〔政隣記〕

四月十八日大槻內藏允儀、去年十二月十八日遠嶋被仰出、成瀨內藏助へ御預置之處、今朝內藏助宅へ公事場奉行松平玄蕃・富田織部、場附御横目竪御大小將横目村田吉左衞門・吉田孫助、御步横目罷越、五ヶ山之內祖山村へ流刑、縮所に被入置、三人扶持被下之旨申渡。御請

判形取置、直に發出。途中御歩横目二人・御歩一人・足輕三人・小者二人指添。祖山村迄何も罷越、縮所ゐ入候を見屆、廿一日罷歸。右之外御郡奉行も一人罷越。縮所は九尺四方、番人は所之者二人被召抱、三町計脇に番小屋懸り、食事者右番人認之爲給申筈也。

〔大野木克寛日記〕

四月十八日、今日大槻内藏允配所越中五ヶ山ゐ赴く。則公事場奉行松平玄蕃・富田織部、御横目村田吉右衞門・吉田孫助、公事場附横目兩人、成瀨内藏介宅ゐ罷向ひ、内藏允引出し、配所五ヶ山ゐ被遣候、於配所も縮所ゐ被召籠置段申渡。訖而御徒横目等夫々指副へ、赴配所と云々。

四月廿九日。徳川家繼の三十三回忌法會を金澤如來寺に行ふ。

〔大野木克寛日記〕

四月廿九日、今日有章院樣三十三回御忌御法會、於如來寺御執行。因之御法事奉行奥村内膳幷村井主膳・横山藏人・西尾隼人、寺社奉行青山將監・生駒右近、御奏者番余、定番頭以下夫々役人中、寅下刻より參出。卯刻・巳刻御法會。右相濟、和尚幷塔頭信入院・攝取院被下物等有之。訖而各退出と云々。

五月八日。今明兩日金澤天德院に於て前田綱紀の二十五回忌法會を行ふ。

〔遠田日記〕

四月廿七日

一、松雲院樣二十五回御忌御法事、來月八日・九日於天德院御執行有之候に付、三ノ御丸御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事初前日より御法中可差止事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、七日より九日迄可有遠慮事。

一、普請作事之儀、七日より九日迄可差止事。

但、指急申普請等之儀は不及遠慮事。

右御法事に付拜禮刻限。

八日未刻より申下刻迄　各

前田大炊

橫山休山侍者

〔政隣記〕

五月九日松雲院樣二十五回御忌に付、於天德院昨今御法事、惣御奉行前田大炊、諸事如前々。

五月十六日。大槻朝元の一門前田修理等遠慮を免除せらる。

〔大野木克寛日記〕

五月十六日、晴、風無殊閑也。今日前田土佐守邸ゟ前田修理被召呼、遠慮御免除、役儀御家老役・小松御城代各被指除候。御表向出仕可仕旨、御旨之趣言達之ど云々。庄田舍人、是亦遠慮御免之旨、奥村助右衛門邸ゟ被呼、御旨之趣言達之ど云々。右之外大槻內藏允餘類各落着被仰渡候由也。

五月廿一日。前田重熙淺草日音院に於いて朝鮮人の來聘を觀る。

〔正德至天保雜留〕

一、五月二十一日五時御供揃に而御出、日音院へ被爲入、御見物相濟、八半時頃御歸被遊候。

一、御近所頭・御居間方幷御表小將之分は、次三間之物見所に而見物仕候。其時會所奉行初御表向之人々、日音院相詰候役人は、門內二間之物見所拵置、此所に而見物。

一、勢之佐にも被爲入、御前御見物所御一所に御見物被成候。御供中も、御前御供人一所に指置候。

一、徒者之分は、御物見之時左之方へ何も指出候。

一、朝鮮人品川泊に付、前日聞番青木伊右衛門より飛脚遣置、朝鮮人幷宗對馬守殿供揃申越候樣、物頭津田林左衛門・水野助三へ申遣置候事。

一、四半過宗對馬守殿御物見前御通、朝鮮人には九半頃罷通候事。

一、御見物所御次へ、若年寄青木新兵衞初、前田兵部・富田次太夫・武田杢左衞門、此外御近習頭二・三人、御居間方よりも三・四人相詰、右之處に而見物仕事。
一、次之物見に而は御近習頭・御表小將・奥取次・配膳役幷惣表御小將・御居間方御醫師・當番之御茶堂役・奥御步横目一人、勢之佐殿御附之内よりも一兩人罷出候。
一、門内之物見所、勢之佐殿御附物頭初、御側小將・會所奉行等罷在候事。
〔謙德公御年表〕
一、五月二十一日、朝鮮人來聘に付爲御見物、少將樣淺草日音院ゟ被爲入に付、御近習頭等御供見物被仰付候。其外御家人不殘、所々通筋へ罷越見物仕候樣に被仰付、御門往來勝手次第罷出候。

五月廿八日。前田重熙朝鮮人の曲馬を宗對馬守邸に見る。

〔謙德公御年表〕
一、五月廿八日宗對馬守殿に而曲馬下乘有之、中將樣被爲入御見物。御家來は御徒以上見物す。是御家・御三家之外者大名衆不成也。

六月朔日。前田重熙登營して朝鮮聘使謁見の儀に參列す。

〔政隣記〕

六月朔日、朝鮮人信使登城御禮就申上候、御衣冠御帶劒に而御登城。於御白書院御目見、御着座被爲蒙上意。御規式之内大御廣間西之御縁頰に御着座。於竹之間御三家樣御同席に而御菓子御頂戴。

六月朔日。淨珠院等淺草日音院に於いて朝鮮人の登城を觀る。

〔正德至天保雜留〕

六月朔日朝鮮人登城に付淨珠院樣・櫻田御前樣被爲入候節之事。

一、前御用御附物頭大場三左衞門致同道、御間圍等之儀致示談置、五月晦日御間圍申付候節、櫻田樣御用人丹羽佐々左衞門致同道、尙更御縮申談候。

一、朔日明け七時より日音院𛀁罷越、御縮爲致、六半頃淨珠院樣等被爲入候。五時過朝鮮人登城相濟。四半頃淨珠院樣には御步行に而淺草へ御參詣、追付御戻り被遊候。見物之儀、最前之通御供中町屋、御はした之分は町屋一軒へ指出候。

一、右御用奧附御横目足輕一人、表方より三人召連、内外縮り爲致候。尤會所奉行宮崎も相詰候事。

一、表方坊主二人・御扶持人大工等相詰候。一統人數は成だけ減少いたし候。九半過御戻り被遊候。御往來路次口二枚開に相成、御縮り之内往來之男、承屆出入爲致候。

〔謙德公御年表〕
一、朝鮮人登城之砌、右日音院へ淨珠院樣幷櫻田・神田兩御前樣御見物に被爲入。御家中見物之儀は、來着日は人々宿賃指出町方等借り候所、登城日・歸國日は頭分之面々に御借屋被仰付、見物に罷出候。就夫御歩以上頭分迄其家へ罷越見物す。御門は無切手前夜亥刻より出候に付、三度之出人相究、御門に改人足輕小頭等罷出候。又者は主人より御横目所に人高書出、印鑑を以見合出之也。

六月三日。前田重熙登營して朝鮮人の曲馬を觀る。

〔政隣記〕
翌二日右御規式相濟候爲御祝儀御登城被遊候處、當三日於吹上御馬場朝鮮人曲馬上覽之節御見物之儀、酒井雅樂頭殿を以被仰出。則三日御登城、御三家樣御同席に而曲馬御見物。

六月五日。淺野川・犀川暴溢す。

〔大野木克寛日記〕
六月五日、自今晩甚風雨、至日中不止。淺野川・才川滿水。就中淺野川洪水に而小橋落流。其餘小橋共皆落流、在鄕馬二疋流、死亡人一兩人、溺死之者も有之由。所々水損多、及晩休止。凡小橋落申儀、享保五年五月洪水に而流落、寛保元年某月洪水に而流落、又今日流落三ヶ度

也。

六月八日。本郷邸内の與力小屋より失火す。

〔大野木克寛日記〕

六月十九日、當月八日夜五時、山の内與力小屋より出火、三軒燒失。尤外より人數も入不申、御人數に而早速消留申候。朝鮮人逗留之内に付、町中火之元之儀嚴重に被仰付置候砌に付、御屆有之。御書付御用番松平右近將監殿御受取、追而可被及御返答旨。九日七時頃迄御返答無之旨に候事。右御屆已後は、御謹被成御座候由に而、大御門・御作事御門も立、小門より往來。御成之節之通、御用人より之切手を以、御家中之人々往來仕候。

閉門　火元　與力士　五十嵐清右衛門

兩隣に付自分に指扣　同　關源進

同　渡邊孫左衛門

七月九日右之通に被仰付候。

〔大野木克寛日記〕

六月廿三日、當八日夜本郷御屋敷之内出火之儀に付、同夜御扣可被遊哉之旨、御老中兩人被仰達置候已後、表御門大小共に立、御客等者二枚開より往來、御作事方御門・大御門立、小

門より往來。其儀御成之節同事。尤三御屋敷共に普請・鳴物遠慮可仕旨御觸有之候。御老中方より者追而可及御返答旨に而、九日・十日御答無之、十一日に至り不及御扣旨被相達候由。

〔謙德公御年表〕

一、五月八日夜於江戶、與力五十嵐清右衞門小屋出火之所、雨天風なく一圍切に而火鎭る。其夜之內御老中ゟ御屆、御屋敷普請・鳴物相止候。明九日御成之筈、第一朝鮮人來聘之前火之用心嚴敷所、旁以不敬之仕合、淸右衞門閉門、隣小屋與力關源之進遠慮被仰付。御上にも三日御遠慮被遊候所、夫には及申間敷旨上意之由、御老中より申來、御指扣無之趣に而相濟候。

本文五月に作るもの非なり

六月十三日。楊姬等淺草の町家に於て朝鮮人の江戶出發を觀る。

〔正德至天保雜留〕

六月十三日朝鮮人歸朝に付、楊姬樣・八十五郎殿御見物に御出之事。

一、六月十三日歸國に付、日音院へ被爲入筈之處、頃日致遠慮候旨前日申來。依之御見物所之儀致詮議、町屋之內ゟに而も可被爲入哉之旨相伺候處、指支不申候者、見分之上御縮可申付旨被仰出。依而會所奉行・御作事役人申談、御用達之內齋田權佐致同道、見分之上假御縮所申付候。右町屋は、御家中之ため爲御借置被遊候、淺草並木町宮井庄右衞門と申者に而、前口四間計之家、二階致御縮、下に御はした等之居所もしつらひ、十三日七時其趣だん／＼御

用意申付候處、六半頃御二方樣幷眞如院殿被罷越、九つ時過朝鮮人通り相濟、八ツ時頃御戻被遊候。

一、裏口無之に付、みせ先より御輿被爲入申候。みせ先に者殘の罰交之幕爲打候事。

一、表方坊主等前々之通召連候事。

六月廿一日。前田吉德の側室眞如院その子八十五郎と共に江戸を發し金澤に向ふ。

〔政隣記〕

五月十九日、八十五郎殿御儀、村井主膳長堅方に養子に被遣候思召に付、此度御國に御越被成候段、今日御用番堀田相模守殿に御屆有之。廿一日右被仰出有之。六月廿一日江戸御立、御道中御供頭分御先手物頭津田林左衞門・高山善左衞門、御横目丹羽織部幷新番六人・御步都合十八、御步横目共也。七月十一日御着、直に金谷御廣式に御住居。但八十五郎殿、御着迄者前田に候處何も下座、御着之上者村井に被致候に付、下座に不及旨被仰渡有之。

但、御道中御供御迎町醫師兩人御雇。

〔日記頭書〕

七月十一日、八十五郎殿・眞如院殿六月廿一日江戸御發足、兼而は八日に御着之筈之處、於道

中眞如院殿滯にて逗留有之、今日着。直に金谷御廣式に御住居。八十五郎殿御着迄は前田に候故何茂下座候而、村井に被改候に付不及下座。

本文は昨延享四年の事に係る

六月廿五日。前田重煕と高松侯松平頼泰の女との婚約許可せらる。

〔袖裏雜記〕

以數馬被仰出候者御緣談之儀申來候方有之候得共、思召候樣に無御座候故、此方樣よりも御聞合被成候處、松平讃岐守殿御息女樣御九歲に被爲成候御方被成御座候。右之御方可被仰合と被思召候。あなたは十二萬石に而御小身故、謙退之趣に候へども、御家柄肥後守樣より御家高故、右之思召に御座候。大和守等如何存候哉与御內意被仰聞候由、被仰出候付而、先以恐悅奉存候。重き品に付金澤年寄中等にも被仰聞、存寄も御聞被遊候者宜有御座候へ共、早速御極可被遊思召に候はゞ、其儀にも被及間敷与奉存段及御請。

但數馬申聞候者、右御息女樣餘り御幼少に奉存候段申上候處、御前には是より御幼少にても宜敷思召、御婚禮曾而御急之儀者無御座候へども、御緣組之儀者御極置可被遊思召之由演述之事。

〔政隣記〕

金澤年寄中等にも可申遣旨被仰出、其返書抔もあり略之。

五月廿一日御緣組松平讚岐守殿御息女与御内談極候儀、前記三月朔日記之通に候處、彌被仰合候段今日小笠原縫殿之助殿、從讚岐守殿は倉橋内匠介殿を以被仰談相濟、御願書は同廿五日縫殿之助殿等を以、御雙方より御用番に御達置之處、六月廿五日前日之依御奉書御登城之處、御白書院於御緣頰御老中御列座、御願之通与被仰渡。西御丸御登、夫より御老中・若御年寄衆御勤。御歸館之上從讚岐守樣御家老中川半之丞被遣、御直答御料理被下之。從此方樣も前田勘解由被遣。廿七日讚岐守樣に初而被爲入、御太刀御持參、御料理被召上御盃被遊。右御弘、於金澤者七月六日頭以上に有之。加判之面々に恐悦廻勤等、都而如御前例。

七月朔日。前田重熙登營して朝鮮より献上せし鷹を下賜せらる。

〔大野木克寛日記〕

七月十一日、今日因召、人持頭分布上下着用、五半時登城。しらべ御帳出之、玄蕃出座と云々。出仕之輩御廣間列居之上、老中出座、月番對馬守演述之趣。

加賀守樣當朔日御登城、於御黑書院月次御禮被仰上候處、御懇之被爲蒙上意、今度從朝鮮献上之御鷹御拜領被遊、思召掛も無御座御儀難有御仕合被思召候段、拙者共に以御書被仰下候。

右之趣可申聞旨御意に候事。

七月十二日。金澤に隕星あり。

光岸寺は高巖寺

〔政隣記〕

七月十二日夜六つ時過、金澤に而東より西之方へ光物出、其跡如雷鳴。此光物見候人々色々之説有。天より中天迄は大き成火之玉落、夫より西之方に飛行、其内二尺計之玉方々へ落、光岸寺邊平田外記庭へも落、ふら〱して又上がる。材木町谷七郎左衛門庭へ者、落て暫有之消る。惣じて二尺計の火綿に火の付候樣成丸き物、ふわ〱と燃候由。畢竟大き成火は本吉浦に落、其後鳴と云々。天火之類歟。

〔謙德公年表〕

一、七月十二日酉ノ下刻、寅卯の方より三尺計之圓成光物出、申酉之方に奔走す。是を奔星と云由。其奔星之跡布を引樣に光る。其光勢草葉の筋まで明らかに見る。又十五日右刻限稲妻の如く巳午の方光り、其度毎に星之樣成物落て人の頭などに當る。火の如し。帷子の上に當りてもあつく覺る。

七月十七日。前田吉德の側室眞如院を金谷御殿に幽す。

〔謙德公年表〕

一、七月十一日八十五郎殿金澤に御着、當日御番人布上下着用下座之事。金谷御殿に直に御入、御供人者、物頭津田林左衛門、御番頭高山善左衛門幷御附屬之面々、外新番六人・御徒

十六日とあるは誤なるべし

おには毒味の意なるべし

六人・足輕小者等也。眞如院殿同道。同月十六日於金谷、御留守居物頭長瀨五郎右衛門を以眞如院殿手前御吟味之趣有之、金谷之内板圍に入、勤番定番御徒守之。召仕之女共は於公事場御吟味也。

大應公御急死之趣に付張本人之故とて、同類女中於江戶御吟味白狀之上、御國許に來、御貸屋に禁錮す。以後竊に害す。

〔大野木克寛日記〕

七月十九日、一昨日未後刻頃、去十二日申刻江戶揚鞭早飛脚到着、急に御用番對州越後屋敷に出座、定番頭富永數馬（當時御近習頭御國に罷在候。）同職遠藤紋太夫、御留守居番物頭長瀨五郎右衛門・杉江杢左衛門・宇野武兵衛等之御廣式向勤仕之輩急に被召呼、夫々御用之儀被仰渡候体に而、各急々に御廣式に參出。眞如院方縮所に入、其外眞如院附之女房共八人、一所に縮所に入候。其事之起者、當十一日本鄕御屋敷御廣式に而、少將樣御茶被召上候時分、給事之女中御前に持參上之可申と仕候處、外之女中罷出、いまだおに相濟不申間、不被召上樣に及言上候。其節御給事之女中行當り不進退、是より毒藥之體顯然に付、段々御吟味候處、眞如院日來所爲無紛白狀之由。因之右女中尤縮所に被入置、右之趣申來るによつてなり。先君大應公御病症、何と哉らんあやしく、其節も區々に取沙汰も有之候處、今度之惡逆之儀に而考之候へ者、是

亦右之仁可爲所爲かと、衆人申之。然者御徼運之程、今更奉惜所也。右之儀に而も有之歟、昨十八日越後屋敷ゟ、對馬守・助右衞門・內膳・大炊不時之出座有之由。一昨十七日未下刻頃より、縮所出來に付終夜大工數十人罷出、先假之縮所出來。因之金谷御門・七十間御長屋御門御番人、御廣式御番人等何茂夜通し、假之縮所に在之內者、番人半時替之由に候。只今本縮所者、外に引離出來之由也。右毒藥之事に付、御近習頭武田杢左衞門大小將組頭事何かと申、おに仕候に付毒にあたり煩出、大應公御病症に似寄候體。夫より事あらはれ申由申慣候へ共、左樣に而者無之、當夏より脚氣押而相勤候處、當十日血症に而難抱、十一日に一生之御禮も申上候。此儀十二日出足之飛脚に傳附に申越候。因之此儀を取交申慣候。

〔日記頭書〕

一、今月十二日江戶出足之早飛脚同十七日到來、同夜金谷御廣式に假縮所出來、眞如院御不審有之入、御用達晝夜勤番之所、事致落着候哉、同廿一日朝本縮所へ入、定番御步晝夜二人充勤番之。

〔前田直躬內密手記〕

於江戶も當十二日淺尾と申若年寄、本鄉御廣式御長屋續に而縮所出來入候由。毒の取あつかひ之儀に依て也。

眞如院一件并大槪事

寛延元戊辰年六月二十六日、淨珠院様御臺子いつも御次女中相勤代合の節、改て御試いたし請取候。此日御次女中きくと申候もの晝代に出、御臺子請取、例のごとく御湯試候へば、以之外匂ひあしく候故、卒度森田を扣、此御湯御試可被成旨申て、森田御試いたし候半と口へ入候へば、嘔吐の氣味甚故其儘吐、きくへも穩便にいたし候へと申渡、御臺子の湯捨、御臺子の釜損候て難用旨、大場三左衛門へ斷、則大應院様の御臺子持來取替置候事。

一、右の趣淨珠院様御聞被成、兎角穩便いたし置候て御糺可被成との御事に候事。

一、きくは右の湯呑込候故餘程滯、森田も口中へ入候故歟、少々あてられ候故、早速中村正伯御召被成候て、右の趣仰聞され療治仕候。きくも隨分押て相勤心得に候へども、二日半引籠、森田は押とほし相勤候。中將様へも先申上ざる様に、淨珠院様被仰付候よしの事。

一、正伯右のおもむき承り、兎角其分に難成、早速富田次太夫御小屋へ參、委細申達候へば、其儘御殿へ出言上之躰也。

一、正伯おし付御召被成、御前へ被召候て様子段々御尋、何とぞ早速御吟味被仰付度候、延々に有之候て者如何に思召との御事。正伯申上候は、御尤千萬に奉存候へ共、淨珠院様思召の通今暫御見合被遊旨申上候へば、夫までの內御氣遣は有間敷哉、其方請合候やと御意に付、

御請合申上候旨申上候へば、重て眞劒を以何とぞ計候儀は有間敷やゝ御意に付、聊御氣遣被遊間敷候。森田番罷在候故、一向左樣の御事は有間敷旨御請合申上置候よしの事。

一、七月四日御能有之、御廣式女中罷出見物、御料理御下も淨珠院樣より被下候にて、御次女中も被下、此御禮申上に何も罷出候跡へ、御臺子懸り候御間へ淺尾立廻り候躰、森田心付候て押付參見候へば、最前明候所には無之、外の所明、御緣通に人影見え候故、彌無心許、御臺子見分いたし候へば、最前の通惡臭甚候故、則御釜の下ひそかに除置候よしの事。

一、翌日正伯を淨珠院樣召て、右の釜の湯水に成候を見分被仰付候。御釜の底きら〱いたし候。扨かぎ見候へば惡臭甚、二度かぎ、三度めにはもはや嘔吐も可致程故相止候。毒物入候儀爰にて決し候事。

一、右毒物入候もの、前方より森田などは、淺尾と心付も有之躰也。則中將樣へ正伯を以段々仰上られ候。御直談をも前方相知候砌より遊され度候へども、御奥方へ御前入らせられ候へば、楊姬樣御出、御附の者ども罷在候故、御密談難成故、段々正伯を以仰進られ候て、淺尾御吟味の筋に決談仕候上にて、正伯申上候は、是迄段々御使相勤申候而、御吟味に決定仕候。左候へば正伯申上候而より此儀に相極候儀、大切至極の御事。品により人多にも相成可申御儀奉存候間、何とぞ淨珠院樣へ御直談被遊候樣仕度旨申上候へば、最初より御直談被遊

度思召候へ共、何廉〻指支候故御延引被成候。最早如此相極候上に者、其儀に不被及儀に思召候。何とぞ御直談可被遊趣思慮仕置候哉と御尋に付、成程御直談被遊樣思慮仕置候。明日御庭御縮可被仰付候。左候はゞ楊姬樣御出被遊候樣に可被遊候。幸明後日金澤飛脚出日故、淨珠院樣には御文御調かゝり被遊おもてむきにて、楊姬樣先御出被遊候樣仕、其段達御聽候而、御直談可被遊旨申上候へば、それと御意にて、淨珠院樣へも申上置候事。

一、八日御縮にて楊姬樣先御出遊ばし、其段御案内有之、中將樣御奧江被爲入、淨珠院樣江御直談相濟候事。

一、十一日楊姬樣附中老淺尾儀、疑敷趣共有之に付、まづ幾田・森田を以、淨珠院樣より御吟味被仰付候へ共、曾て不申顯。其内に、何ぞ眞如院に被賴て左樣の事もいたす樣に、何茂思召候哉と云。其言葉に付、成程此事に候。被賴て毒物あつかひは不致哉と段々尋候得共不申顯故、其段達御聽。然ば御表より可被遣とて、富田次太夫人持・牧彥左衞門御吟味被仰付、淨珠院樣附物頭大場三左衞門指添七時より夜中。差つめ吟味。就中彥左衞門申候は、其方一人の口上にて不及白狀時は、金澤江被遣、公事場にて嚴敷御吟味可有之候。左候へば眞如院殿も同事に御吟味も可有之候。公事場にて白狀の上に候へば、眞如院殿腹の御子樣方は何も御役に御立不被成候。今其方及白狀候へば、御内々の御事ゆゑ御子樣に御難も不付事候へば、大勢の御

子様方い御爲を存候て、眞如院殿被頼たるとも可申事のよし、段々計策を以申候へば、わつこ泣出し、大勢の御子様方御爲と仰せられ候間可申上候。成程眞如院様御頼にて御座候。中將様・淨珠院様ゟ毒を上候様にとの事にて、藥を被渡候へ共、大事の儀故ひたすらに斷申候へば、承引不致候はゞ祈殺し候半と被申、藥を懷へ押込被申候。二十七日・四日には氣もうか〳〵こいたし、御湯の内へ藥を入申候。二度にて藥も無之、右之通少も僞不申旨及白狀候故、早速御廣式之内縮所出來、被入置候事。

一、右之趣に付、早飛脚を以金澤年寄中へ御親翰を以被仰下、七月十七日到來、富永數馬・長瀬五郎右衛門承にて、眞如院不屆之儀有之禁錮へ被入置候、夫迄御廣式に縮可仕旨被仰付事。眞如院少々不快に罷在候。其所ゟ數馬・五郎右衛門罷越候て、縮被仰付旨申渡、其夜ゟ御廣式御用達共付添罷在候事。

一、眞如院召仕候年寄分高田と申者を初、下女共一所に差置、尤縮は無之事。

一、縮所出來之上、從御廣式駕籠に乘、御用達等差添、縮所へ入置、定番御徒番に付居候事。

一、眞如院手前御吟味は、數馬・五郎右衛門主付被仰付、段々及吟味候處、申まぎらし、毒物差上候事は一向不申、大槻內藏允と密通之段は明白に初日より申顯候。一兩度御吟味い內、毒物取捌の儀申候へ共、其後毒物差上儀は僞の旨申候て一向不申出。畢竟內藏允密通い事而

已申出、外にも密通いたし候ものも有之趣等も、委細に申出候由の事。

七月十八日。前田重煕登營して改元の令を傳へらる。

〔政隣記〕

七月十八日、前日大御目付衆依御廻狀御登城之處、年號寛延に改元之儀被仰渡、如例御祝儀も仰上御退出。同日御能有之。於金澤は廿五日に有御觸。

この改元は七月十二日に行はれたるなり

〔大野木克寛日記〕

七月廿七日、觸文到來、左に寫。

年號寛延与改元之旨、當月十八日被仰渡候條、可相觸由被仰出候段、從江戸表申來候間、被得其意、御組中等江可有御觸候。且又御組之内裁許有之面々は、夫々相達候儀可有御申聞候、以上。

戊辰七月廿五日　　前田對馬守

奥村助左衞門殿

七月廿七日。足輕井村源兵衞、眞如院の密謀を助けしを以て禁牢に處せらる。

〔日記頭書〕

八月十二日。前月廿七日井村源兵衞与云足輕禁牢。是は眞如院被仕候御廣式小遣小者之處、御先代願にて足輕に被仰付候者にて、惡事存立之祈禱事、諸方へも使勤候者之由也。

八月十三日。前田光高の子萬菊丸の百年忌法會を江戸廣德寺に營む。

〔政隣記〕

八月十三日桂香院樣百年御忌に付江戸於桂香院廣德寺塔頭なり。御茶湯御執行、御代香前田勘解由。鳴物今日一日自分に扣候樣江戸に而觸有。

一本、御代香御大小將御番頭津田求馬相勤と有之。非なるべし。

八月十六日。前田重煕家督相續祝賀の爲本鄕邸に能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

八月十六日御家督爲御祝儀、御一門樣幷御心安御大名方・御出入衆御招、御能仰付。御出入町人芝居見物被仰付。御菓子・御酒等如前々被下之。御給事人に帷子一・布上下一具宛拜領。其外如御前格。十九日にには預玄院樣等・御前樣方御招請御能有之、且壹岐守樣も御出也。御家老衆・若年寄衆にはは御膳下御料理被下之。奥・表頭分に者御菓子・御吸物等被下之。段々先例等御僉議之上如斯被仰出、御作法如御先格。

芝居は白洲の義

八月廿二日。前田土佐守、眞如院等の處分に關して前田重熙に意見を上申す。

〔大野木克寛日記〕

八月十五日、一昨日年寄中・御家老役越後屋敷ゟ不時出座。昨十四日土佐守・主膳迄重而不時出座。今日出仕相濟、越後屋敷ゟ年寄中・御家老役不時出座。尤三日共に御横目不殘相詰候由。右御用密々之御事に而、表向御沙汰一向雖無之、大體眞如院惡逆之趣、御仕置方之御用之旨、末々申慣候。

〔前田直躬內密手記〕

八月十三日

一、富田次太夫爲御使被遣、去二日江戸發足、今日參着。直に越後屋敷へ罷出、年寄中へ御意相濟、土佐守へ御意之趣。殘暑之節候得共益御機嫌能被成御座候。且又御自分無爲相達、一段之儀被思召候。此度爲御使次太夫被遣候。御達之趣承知可仕旨御意之由申述。御親翰相渡之。拜戴之上、段々之樣子委細申聞候事。

御親翰

今般眞如院手前之儀、委曲富田次太夫可致口達候。此儀に付勿論取噯之趣、其許存寄承度候

條返簡待入候、以上。

八月朔日　　　　　　　　　　少　　將

前田土佐守殿

次太夫左之覺書を以段々申聞に付寫之。

一、嘉三郎殿御内存に御極被遊候。依之嘉三郎殿いつ頃御出府、勢之佐殿いつ頃金澤へ御引越被成可然哉之事。

一、是以後勢之佐殿へ御對顏之儀、且又勢之佐殿御一生御暮方之儀如何之事。

一、八十五郎殿儀、是又如何之事。

一、御女子樣方之儀、出雲守樣奥方樣幷楊姫樣之御儀之事。

一、眞如院殿之儀、一生禁錮にて相濟可申哉。幷淺尾手前落着之事。

一、今度淺尾白狀之趣は、六月二十六日以來毒藥取扱仕候までに候。眞如院殿にはとても白狀は有之間敷候。御吟味は是きりにて可被指置哉之事。

以　上

御親翰奉拜戴候。今般眞如院手前之儀。委曲富田次太夫口達可仕候。就此儀御取扱之趣、私式存寄可申上奉畏候。委細治太夫申聞承知仕候。次太夫覺書を以申聞候品々、則存寄一々相

調申候。其内紙面にては紛敷品等、幷存附之品々覺書仕、次太夫へ相渡候。且又眞如院毒物取扱候外、大槻內藏允と密通仕候段申顯候。左候へば事二品に相成申候。密通之儀は前以沙汰も御座候へ共、兩人之內より不申顯內は、其分に被指置候ても、先其分に御座候所、其身より申顯候上は、內藏允儀も其分には難被指置御儀に奉存候。依之就此儀內藏允手前御吟味之筋等、不被仰下品に候へども、兩樣共不申上候はでは、存寄都合不仕候付、此段も別紙を以申上候。いづれにも此上御吟味之樣子により、又存寄之趣も出來可仕候哉。今般書上候趣は、次太夫口達幷此表にて眞如院手前一通御吟味之筋承候趣を以、落着之儀は相調申候。御吟味之方へ不相懸品は、調上候外存寄之筋無御座候。先以私式大切之御用筋被仰下候儀、別而忝仕合奉存候。別紙二通、文法等不行屆儀も可有御座与奉存候。筆上に難及品々、委敷次太夫へ申談置候。

一、御親翰御上包共返上仕候、以上。

八月廿二日　　前田土佐守　判

一、嘉三郞殿御內存に御極被遊候。依之嘉三郞殿いつ頃御出府、勢之佐殿いつ頃金澤へ御引越被成可然哉之事。

嘉三郞殿御出府之儀、追付御出府被成候樣に奉存候。御出府之上、御目見も早速御願被遊候

樣に可有御座儀と奉存候。勢之佐殿金澤へ御引越之儀も、是又追付御越被成可然奉存候。いつ迄其表に御暮被成候ても、其詮も無之儀に奉存候。其上其表に御暮被成候而、自然御心得違など有之候ては、別而如何敷奉存候間、旁以追付御越被成可然奉存候。御病氣被仰立、御内存も相替申儀に御座候へば、此表へ御越之節は、誰か重き面々之内御同道仕譯にて、御宿札等も入不申趣と奉存候。尤御牽馬等も無之筈と奉存候。

一、是以後勢之佐殿へ御對顔之儀、且又勢之佐殿御一生御暮方之儀如何之事。

御對顔可被遊御儀とは不奉存候。左候はゞ眞如院今度就惡事、御前奉初預玄院樣・淨珠院樣、其外御兄弟樣方、是以後御對顔被遊間敷候。急度御愼被成御暮被成候樣に被仰進にて可有御座哉と奉存候。且又御暮方之儀は不及申、至極御穩便に御住居被成、御手廻御遣被成候ものも二・三人に過不申樣奉存候。御附人等之員數も、諸事年寄中より取計ひ申味にて可有御座候。御知行等被進候には尤及申間敷候。能程に取計申にて可有御座候。御手廻御遣被成候者は、尤御目通は指扣申にて可有御座候哉。此御附人人柄之儀、別而御撰可有御座儀と乍恐奉存候。心得違御座候ては、末々如何敷儀も出來可仕候。先以年齢之者被指置候樣に奉存候。於此表も金谷に御暮とは不奉存候。輕く御しつらひ、丹後屋敷・女中屋敷之内与奉存候。御間數も二間には過申間敷と奉存候。折々年寄中之内見廻申樣に可有御座と奉存候。御貸小屋之

内などしつらひ申も可宜哉与心附候へ共、是はあまり手遠に御座候て、却而御縮方に不宜事も可有御座哉与奉存候。

但、眞如院儀大應院様へも毒薬差上候に白状仕候ほど、勢之佐殿等も右之通之御暮には不奉存候。年寄中等之内へ御一生御預、平生側御遣被成候者二人程御附被成候様可有御座候。年寄中等之内御預之儀には、御賄料は被下候様可有御座哉と奉存候。

一、八十五郎殿儀是又如何之事。

八十五郎方、主膳方へは最早難被遣御事と奉存候。是以勢之佐殿同事之御暮方と奉存候。主膳方へも、八十五郎方不被遣迄にても相濟申間敷候間、健次郎殿被遣可然奉存候。惣而勢之佐殿・八十五郎方にも御互に對面は無之様奉存候。御心得違など有之而は如何と奉存候。

一、御女子様方之儀、出雲守様奥方様幷楊姫様之御儀之事。

出雲守様奥方様にも御對顏は難被成奉存候。御病氣被仰立、御引取之外は御座有間敷候。出雲守様にも眞如院一事御聞被成候ては、最早御出生等は不被為在筈と奉存候。此一事は別而六ヶ敷所と奉存候。委細次太夫へ申含候得共、大概左之通御座候。

一、御間柄至て御宜儀に御座候へば、とかく御引取より外は御座有間敷候。

一、御味にてあなた様にて御一生御暮被成候様に可被成候へとも、出雲守様とても御對顔

不被成趣に候得ば御宜儀にも奉存候。併とても御前御對顏無之儀に候へば、御廣式之方に御勤可被遊樣も無之候。左候へばいつまでも出雲守樣へ被爲入候度每此儀出申と申ものに御座候へば、往々とても如何敷奉存候。出雲守樣思召幷御家老共如何存寄罷在候哉、其段承度儀奉存候。就夫瀧川玄蕃儀は、私儀緣者之筋目有之候間呼に遣、私心得之樣に仕相尋見可申哉。年寄中より御家老中呼に遣候はゞ、事重にも相聞可申、乍併御內輪之儀に候へば、其段も苦ヶ間敷哉とも奉存候。いづれにも出雲守樣御在所に被成御座候內、相濟居不申候はでは如何に奉存候。

楊姬樣之御事とても、御婚禮は難被爲成儀奉存候。左候へば御病氣被仰立、御斷之外は無御座御儀奉存候。

一、眞如院殿之儀、一生禁錮にて相濟可申哉。幷淺尾手前落着之事。

決而は必ずの義

眞如院一生禁錮にて相濟可申儀とは不奉存候。私儀は決而死刑と奉存候。眞如院落着之儀は、年寄中幷私式より相極奉伺可申儀と奉存候。御上よりは、毒藥不被召上候へば、一統御宥免にて一生禁錮と被仰出ても、何分にも願上死刑に相極申度奉存候。眞如院元來御國之人に候へば、一類迄も死刑難遁奉存候。段々御吟味之上、大應院樣へも毒物指上候に相極候はゞ、一段重く相成申儀と奉存候。殊眞如院儀、數年大槻內藏允と密通仕候段其身申出候。御血緣

之筋目を亂申儀、重々可申樣も無之不屆ものに御座候。密通一通にても死刑可被仰付ものに御座候所、毒物之儀相顯候上は大罪至極之者、死刑難遁奉存候。數年內藏允と密通仕、如何樣之儀申合も難計奉存候。前代未聞之御儀奉存候。淺尾儀毒藥取扱までにても無之、既に兩度迄御湯之內へ毒藥入候儀、本人同事奉存候。於其表死刑可被仰付儀と奉存候。

淺尾事此表へ被遣、眞如院と對決も可宜と奉存候得共、最早是には被及間敷候。公邊へも毒物取あつかひ候儀相知居申躰、齋藤長八郎殿咄之趣も承知仕候。御穩便之方に候はゞ、淺尾被遣候儀は御指止可然哉与奉存候。双方爭論迄之樣に相成申間敷ものにも無之候へば、其詮無御座儀奉存候。

一、此度淺尾白狀之趣は、六月二十六日以來毒藥取扱仕候までに候。眞如院殿にはとても白狀は有之間敷、御吟味は是きりにて可被指置哉之事。

淺尾事御吟味も相濟申と奉存候へ共、猶又申談候者、且御先代樣之儀存知不申哉之趣御吟味も可有御座候哉。眞如院儀其身覺悟相極居申躰に御座候故、中々白狀は難計奉存候。第一其身御吟味之筋も是切と存居可申哉。畢竟公事場等へ出不申と存可申候間、中々白狀之段へは參申間敷哉と奉存候。當時乍禁錮御廣式之端に被指置候儀、御慈悲之御儀と奉存候。乍然大惡至極之者、御城外郭之內に候へ共、御圍之內不敬之者被指置候も如何に奉存候間、先御貸

小屋之内罷遣候樣にも可有御座候。左候はゞ其身後々いか樣可被仰付も難計と心附候はゞ、其所にて白狀可仕哉。白狀仕候而其罪輕み可申樣無之段覺悟仕筈に御座候へば、白狀不仕筈と奉存候。頃日は御吟味之節、彼是与申掠候由御座候。とかく白狀不爲仕候はでは難叶儀に奉存候。尤眞如院事に候故、御内々を以御尋故、富永數馬等へ被仰付儀に御座候得共、唯今に至候ては露顯之上に候間、此上年寄中之内兩人程主付、數馬差添御吟味被仰付候はゞ可宜と奉存候。惣て御吟味之儀は、以之外手之入申儀も御座候而、度々御吟味にも懸候者は、相尋候にも其樣子有之事御座候。富永等はあまり嚴敷事も難申儀も可有御座候哉と奉存候。前段にも申上候通、落着之所も年寄中等相願申趣に被仰付儀に御座候へば、猶更年寄中直に吟味仕候へば、落着被仰付候にも都合宜候と奉存候。眞如院にて無御座候はゞ、公事場奉行吟味にても苦ヶ間敷候。月次公事場に於ても、其品により年寄中直に相尋申儀も度々有之儀、私式前々覺有之候。一二往は最初より相懸候年寄中罷出、落着之節は年寄中幷私式も罷出候樣仕度御儀に御座候。決而公事場奉行罷出候儀与は不奉存候。

眞如院御貸小屋へ被遣儀に御座候はゞ、足輕番人にて可宜候。尤御徒横目二人程縮申付、富永等内每日見廻可申候。年寄中へ吟味被仰付儀に候はゞ、落着迄は每日見廻申にて可有御座候。至極嚴敷御縮方と申趣にて可有御座儀と奉存候。

右私存寄之趣此外無御座候。一存に御座候故、行屆不申儀共多可有御座こ奉存候、以上。

八月廿二日　　前田土佐守　無判

大槻内藏允事、眞如院と密通仕候段眞如院申顯候。然上は内藏允儀其分に難被指置御儀奉存候。此儀前以御存知之御事に御座候へ共、内藏允手前一向何等之御吟味も無之故、不申顯内は先其分之儀に御座候所、眞如院申出候へば最早露顯こ申ものに御座候。内藏允儀段々不屆至極之者に御座候間、手鎖・繩懸にて早速引出、於公事場禁牢可被仰付儀こ奉存候。

一、眞如院儀毒藥取扱仕候儀も、何こぞ内藏允と深く申合候筋も有之儀かこ奉存候。然ば毒藥之方へも内藏允荷擔仕間敷ものにても無御座候。併いづれにも眞如院白狀不仕故難決奉存候。旁以内藏允儀密通之儀、一通相尋候ても陳じ可申候半哉。左候はゞ拷問仕而白狀爲仕可申候。右毒藥之儀も拷問仕候節相尋候はゞ可申顯哉。いづれにも指詰申御穿鑿にて無之候は而は、行屆申間敷哉与奉存候。内藏允御吟味被仰付候ても、公事場奉行之取捌こは不奉存候。先年岡島釆女御親翰似申砌、其節月番亡父近江守・組頭奥村故伊豫守御吟味に相懸申候。内藏允御取立者には御座候へ共、人持迄にも罷成申候間、年寄中之内可被仰付儀にも可有御座候哉。但御近習頭之内より可被仰付候哉。

一、内藏允儀數年密通仕罷在、殊に段々我儘之仕形重々不屆、可申樣も無御座、極罪之者に

御座候。毒藥之取扱之儀此者一向かゝはり不申候ても、死刑無疑者に奉存候。生胴より輕くは難被仰付儀と奉存候。

一、内藏允儀右之通於被仰付は、落着迄は去年遠慮仕候者共、尤遠慮可被仰付儀と奉存候。

一、前田修理儀、御同姓にも御座候所、妹指遣候段は不屆至極に奉存候。内藏允不行狀不義之儀不承と申儀は無之筈に候所、其分に見通申儀、御役相勤申者には別而不相應に奉存候。當時御役儀御免除之上には御座候へ共、内藏允密通露顯之上禁牢被仰付儀に候へば、重而修理儀も遠慮仕にて可有御座候。左候へば修理、重て落着之節は急度御知行をも被召放、追而萬之助に新知被下候樣にも可有御座哉。蟄居等被仰付、一生罷在候樣にも可有御座哉。兩樣之内には可被仰付樣に奉存候。

一、深美治部儀せがれ故縫殿へ、内藏允娘緣組申合候。全治部所爲に御座候。侍不似仕形共に御座候。此者も急度逼塞等にても可被仰付哉。庄田舍人儀、其身幼少故外より申旨にまかせ申儀には御座候得共、指當聟之儀に候間、閉門等可被仰付哉。

一、大槻長太夫・園田兵太夫儀、其身於御廣式不作法之沙汰も有之候。一往此段御吟味も可被仰付哉。畢竟此者は、内藏允不義不作法之段見聞仕ながら押隱し、護國院樣不達御内聽にも段、別而不屆者共に御座候。其身において不作法之儀御座候へば、内藏允同罪之者共御座候。

御吟味於被仰付候は、富永數馬等歟或若年寄中被指加候樣にも可有御座候。表向之御吟味には不奉存候。

一、內藏允儀、段々極罪に御座候毒藥之方へ荷擔仕候はゞ、忌懸之分は尤死刑と奉存候。毒藥之沙汰決定無之趣に候はゞ、忌懸之分死刑には被及間敷候。併何も輕き者共、內藏允仕形に荷擔之志などに有之候ては如何に奉存候間、一統流刑被仰付可然哉与奉存候。內藏允末葉之者共迄、御城下に指置申儀如何敷奉存候。

一、內藏允へ心安申通候者共之儀、尤御役人等撰にも、書出不申樣に可被仰付儀に奉存候。今以內藏允取噯宜敷と心附罷在候面々、歷々にさへ相見え申候。輕き面々には猶更有之躰に御座候。畢竟內藏允へ附屬之者迄も深く不被制候は而は、以後々々自然御邪魔も可有御座哉と奉存候。

右內藏允落着等之儀、如此にても可有御座哉。存寄之通奉言上候、以上。

八月廿二日　前田土佐守　無判

九月六日。浪人高桑政右衛門、大槻朝元の配所に赴かんとしたるを以て禁牢に處せらる。

〔日記頭書〕

本文の記す
る所は前記
日記頭書と
異れども恐
くは非なる
べし

九月六日、浪人之者共大槻内藏允五ヶ山配所ゟ罷越候沙汰有之、高桑政右衛門・松本八郎太夫・窪田四郎右衛門、頃日町奉行より組合之者ゟ預け置候處、今日於公事場御吟味之上、政右衛門儀籠之渡罷越候儀致白状禁牢。其外は無貪着候由也。

〔大野木克寛日記〕

八月廿三日、頃日大槻内藏允家來何某与申者兩人申合、五ヶ山内藏允縮所ゟ罷越安否を尋、且又銀子等持參遣之候由。因之右兩人共に其町ゟ被預、縮之儀町奉行より申渡候由取沙汰有之候。此儀に付眞如院一卷彌種々申慣候。

八月廿五日、大槻家來縮之儀者、町奉行に而者無之、公事場奉行より申渡候。尤公事場ゟ召出、吟味も有之候。

九月朔日、今度大槻内藏允配所越中五箇山之内祖山村与申所ゟ罷越候者は、内藏允家老相勤居申候高桑政右衛門と申者せがれ伴之丞と申者に候。此者去年十二月十九日より當正月下旬頃迄、笠間與三左衛門に相勤候者之由。與三左衛門所に而不宜筋有之、暇遣申候由。然處流浪者之躰に相成、右之所ゟ參候由。配所ゟ罷越候は當五月之事に而、五ヶに而あなたこなたに徘徊いたし、七月中旬より逐電仕候由。右之儀彼地十村共より注進之樣子に而、右伴之丞親政右衛門等之餘類御吟味之體也。元來政右衛門父子町人に而有之、内藏允召抱奉公人に罷

成候。右内藏允圍有之所者、則右祖山村と申所之由也。

九月十二日　大槻朝元配所にて自殺す。

〔謙德公年表〕

一、寛延元年五ヶ山に流罪す大槻內藏允、秋頃食を持來る百姓之內方便、金澤表遠慮仕有之大槻長左衞門、園田兵太夫方に預罷在候母等に文通する。其取次小松屋佐七也。返書之刻、金銀初たばこ・きせる・硯などの類ひ、百姓取次獄中へ入、其金子を以百姓を僞り與之、小刀を求め、九月小刀に而獄中に自害す。依之兄大槻長左衞門禁籠、母幷園田兵太夫母共に禁牢也。兵太夫・大槻長太夫は人持寺西市正・篠嶋織部に御預け、其外一類緣者共嚴敷遠慮する也。

〔日記頭書〕

一、九月十二日大槻內藏允儀、配所五ヶ山祖山村禁錮之內にて相果候、血見え候由注進有之。爲見分御步橫目中村藤兵衞・杉本忠右衞門罷越候處、小刀にて自殺。右小刀は所にて打候小刀之由。柄は圍之內板をよき程に切、三枚合等にて卷候由。白帷子着用。外に八つ口一つ有之。此內に遣殘りと見え、金一步四切有之由也。

〔大野木克寬日記〕

九月十五日、大槻內藏允儀、配所越中五ヶ山祖山村に而變死仕候由。今日彼地に、死骸見分

御徒横目罷越筈之由。委細不知、追而可記。珍事也。

九月廿九日、大槻内藏允於配所死去仕候に付、小杉奉行千秋三郎太夫・御徒横目罷越、見分候處、變死無紛、鳥之まるぐり小刀に而自害仕候。因之配所番人五ヶ祖山百姓、彼是疑敷者八人縮申付、昨廿八日三郎太夫御當地居屋敷ゟ牽寄吟味之上、公事場ゟ牽渡候由。右内藏允縮所之内、成瀬内藏介より着用致させ遣候衣類之外、着類有之。其外金一歩三十切杉原に附有之。廿七切者取遣候哉、金子之附候跡迄有之。三切者殘居申候由。三郎太夫・御徒横目十五日御當地罷立候處、本道よりは道遠候故、間道より指急候へ共、十五日已來雨風甚、川々滿水、一日逗留も有之、彌見分遲々に罷成候。内藏允死骸者、鹽漬に罷成候旨申慣候。

〔前田直躬覺書〕

内藏允、實者御持弓足輕小頭大槻七左衞門三男にて、眞言宗波着寺に草履取にて奉公致し、出家に可成趣之處、をぢ大槻長兵衞聟養子にいたしぬ。夫より掃除坊主に御召出、朝元与申候。（朝元と云名室新助被付候由。元日に生れたる由にて被付たるとぞ。）護國公御部屋住之節、御次坊主加人ゟ參り、夫より御氣然に應じ、御入國後段々御取立之處、御厚恩を忘却致し我儘を盡し、御年寄らせてより、猶又御政事の事をも上を掠て取計、專御廣式向ゟ取入、不義不行狀之事有之といへども、上にも聊不被知召事にて、御上をも諸人彼是申合ぬ。延享二年御歸國之頃、御道中より御滯、御快氣も

被遊たる上には、如何可被仰付旨難計程の御事侍れ共、御逝去ゆゑ、此世上之雜言も一向に云出し൜。內藏允人となり鈍にして淫亂大酒、おのれが權を取て、年寄中とひとしき程にも思ひたる風躰にてありぬ。後世內藏允人と成りをも不知、同時の人もすくなき時は、色々に云ならし侍らん。予は時を同敷して其事々をも知り侍ぬる故、あらく〳〵と書置൜。

○元祖伊藤備前

奥州四本松右馬頭幕下に而、大槻与申所居城仕候處、爲仙臺政宗沒落仕、せがれ三人御座候處、散々に罷成、嫡子は越前ゟ罷趣、二男は相馬家ゟ罷越、今以同苗罷在候。三男は佐竹家に罷在候由傳承仕候。

○大　槻　玄　徹

備前嫡子に御座候處、越前ゟ罷越、醫師に罷成、其後御國ゟ罷越、本名は伊藤に御座候處、大槻に相改候。年號傳承不仕候。

○大槻半左衞門達年

浪人に而罷在、寛永十三年病死仕候。

○大槻長左衞門貞祇

微妙院樣御代御鐵炮者に御召抱、數年相勤、元祿十五年病死仕候。

○大槻長兵衞久敬

松雲院樣御代、父長左衞門爲代御鐵炮者に被召抱、其後小頭被仰付、護國院樣御代定番御徒組に被仰付、元文二年定番御徒小頭被仰付、新知百石拜領仕相勤罷在候處、寛保三年病死仕候。

○大槻内藏允朝元

實者御持弓足輕小頭大槻故七左衞門三男に御座候處、父方をら大槻長兵衞婿養子罷成、松雲院樣御代享保元年七月四日被召出、護國院樣御部屋附御居間方被仰付、同九年十一月束髮被仰付、同十一年正月十六日御加增二十俵被下、都合三十俵三人扶持被下置、同年御徒並被仰付、御切米五十俵被下置、御奥小將御番頭支配被仰付、同年十二月廿一日新番組被仰付、新知百三十石拜領仕、同十四年閏九月廿四日組外被仰付、御加增知百石被下。其後度々御加增被仰付、同十九年正月十六日物頭並仰付、御加增知百石拜領被仰付。其後度々御加增被仰付、元文三年八月朔日組頭並被仰付、同六年二年廿六日御加增知二百二十石被下之、人持組被仰付、御用番支配罷在候處、寛保二年二月御加增知五百石拜領仕、組入被仰付、同十二月御加增知五百石拜領被仰付、都合三千八百石罷成申候。

右内藏允系圖之寫、去年一統御取立之節差出扣、奥村修古方に寫有之、寫之。

新知　百三十石　新番組　享保十一年十二月廿一日

御加増　百石　組外　同十四年閏九月廿四日　都合二百三十石

御加増　百五十石　同十五年十二月十五日　都合三百八十石

御加増　百石　御大小將組　同十七年正月十六日　四百八十石

御加増　百石　同十八年七月十八日　五百八十石

同十九年五月十三日　物頭並役料百五十石

御加増　二百石　同二十一年二月廿四日　七百八十石

御加増　二百石　元文元年十二月廿日　九百八十石

御加増　二百石　同二年八月朔日　千百八十石　組頭並外役料二百石

御加増　二百石　同三年六月十五日　千三百八十石

御加増　二百石　同四年七月朔日　千五百八十石

御加増　二百石　御馬頭並　同五年正月廿一日　千七百八十石

御加増　三百石　元文五年十二月三日　二千八十石

御加増　二百二十石　人持組　寛保元年二月廿六日　二千三百石

御加増　五百石　同二年正月廿二日　二千八百石

御加增　五百石　人持本列　同年十二月十五日　三千三百石

御加增　五百石　同三年十二月十五日　三千八百石

右従享保十一年丙午、至寛保三年癸亥凡十八年之間、十七度新知御加增也。

初朝元。束髪被仰付、傳藏。後改内藏允。

○延享三寅年七月二日於安房守宅、大和守列座、護國院様御病中不屆之趣有之に付蟄居被仰付、同四卯年十二月十八日於安房守宅、以御書立、御先々代段々不屆之品就有之遠島被仰付、彼地に而縮被仰付候。夫迄人持ゟ御預之旨奥村助右衛門列座申渡、成瀬内藏助ゟ翌日御預也。同五辰年四月十八日發足、十九日五ヶ山に而祖山村において禁錮被仰付。但内藏允四十七歳也。

内藏允儀、同年九月十二日禁錮之内に而、以小刀自殺相果候事。

小舅 前田修理
兄 御歩小頭並 大槻長左衛門
いとこ 新番 大槻三太夫
いとこ 御鷹方御歩横目 中村左衛門
いとこ 神田足輕小頭 上田源左衛門

聟 庄田舍人
をひ 御馬廻 大槻長太夫
いとこ 新番 大槻清左衛門
いとこ 御歩横目 中村喜三太夫

兄 組外 大槻七郎左衛門
をひ 御馬廻 園田兵太夫
いとこ 定番御歩 中村喜内
いとこ 御臺所奉行支配 大矢兵左衛門

右之人々、内藏允御預に成候内指扣罷在候處、翌年五月十六日御免許。修理儀は御家老役幷小松御城代御差除。長太夫・兵太夫儀は御免許無之事。

一、實母　惠照院
一、養母　光證院
一、嫡子　四歳　大槻尙之助
一、次男　四歳　大槻永次郎
一、三男　二歳　大槻猪三郎
一、娘　十歳　てん
　　六歳　ひさ
　　五歳　すよ
　　四歳　よつ
　　二歳　きさ

家來

一、給八　○高桑政右衞門　○松本八郎太夫
　○松島彌藤兵衞　○小寺藤馬

橋本左太夫　窪田四郎右衛門

一、侍分　〇野村源太夫　〇中越平太夫

山本佐次兵衛　〇秋山重藏

〇石黒圓六　〇高桑汲江

〇福井傳六　〇赤木嘉藤次

藤田彌三左衛門　〇小寺和兵衛

溝落牧太　〇岩田沖右衛門

窪田惣左衛門

一、醫師　金子玄庵

一、若黨　吉竹清右衛門　土屋九兵衛

〇小泉吉左衛門　〇池田磯右衛門

一、足輕　〇淺見小兵衛　〇吉川七兵衛

和田關右衛門　廣田安左衛門

土屋市左衛門　中山喜兵衛

〇赤田五右衛門　〇澤田甚平

堀　源七　坂内清七

一、役小者　市郎右衛門　吉兵衛　惣兵衛　甚吉

一、小者　九助　荻助　佐五右衛門　吉助

彌助　又兵衛　紋内　六兵衛

與四内　左吉　久助　關内

元助　只平　六藏　市助

八助　次平　紋助

一、女房　増田　たみ　みほ　そわ

ちよ　ゆか　ひも　そへ

よん　たの　たを　そで

一、乳持　きく　はな　やす　くみ

きつ　さん

一、下女　松がえ　そめ　くり　しか

八千代　あふぎ　よし　さゝ

きち　りく

上下都合九十五人。
帳面上書大槻内藏允家内上下九十五人。
○印之分は家中在宅と肩書に有之也。

九月廿九日。大槻朝元の自殺に關し小松屋佐七を逮捕す。

〔金澤町會所留記〕

大槻内藏允、今般於配所相果候付、番人等手前遂吟味候處、御當地才川河原町小松屋佐七与申者方ゟ致書通、其節兩刀帶候者罷越、通書並菓子袋持參仕候旨申顯候間、佐七手前相尋可申旨、御郡奉行千秋三郎太夫より申越候付、卽刻佐七召寄遂吟味候處、當八月二日・同廿四日兩度祖山村十左衞門与申者罷越申聞候は、内藏允最前召仕候老女増田与申者方ゟ、内藏允より之書狀致持參相屆候樣賴申候。右女大槻長左衞門方に罷有候故、佐七持參仕相屆申候。其後兩度共長左衞門佐七方ゟ相越、返書之由に而致持參、右十左衞門ゟ長左衞門直に相渡申候。右之外致通路候儀は無御座旨佐七申聞候に付、今晩縮仕置、明日より禁牢申付候。長左衞門手前御尋之趣も可有御座哉与、早速右之趣申上候、以上。

九月廿九日

戸田與一郎

篠原六郎左衞門

惠姓院は惠照院

十月二日。大槻朝元の母惠照院その他禁牢せらる。

〔大野木克寛日記〕

十月三日、昨二日公事場式日、今度大槻藏允變死に付重々遂吟味候。五ヶ山より牽寄候八人之百姓禁牢、御當地に而町人鳥屋左七、此者内藏允扶持人に而罷有候好を以、内藏允母惠姓院より書通取次、且又音物も仕候由吟味之時分申顯候に付入獄。惠姓院幷大槻長右衛門内藏允兄、御次膳取御徒、去冬内藏允御預之節より遠慮候處、當五月御免、最前之通御膳取次相勤罷有候。揚り屋へ入申候。此外内藏允妾團子屋と哉らんむすめ。彼是此餘類都合六人禁牢申付候由。公事場御用番及極晩相濟、各退出之由也。

十月十二日、大槻内藏允子共男子兩人各五歳に罷成候由。娘五人内一人去年病死。當時六人之内、深美治部手前へ娘一人、庄田舍人へ娘一人、去年内藏允沒落之時分引取。今一人娘、是者前日修理ゐひに付、修理手前へ引取、殘而男子二人・娘一人以上三人者、内藏允老母と一所に大槻長右衛門手前へ引取置候處、今度老母幷長右衛門獄に下候に付、男子一人修理へ、同一人舍人へ、娘一人治部へ引取申由に候。園田兵太夫妻幷子共者、松崎庄左衛門手前へ引取候由。長左衛門妻子、大槻長太夫等へ引取候様子に候。

十月七日。園田兵太夫御預に處せらる。

〔御預人之記〕

園田兵太夫、四百五十石、御馬廻、三十一歳。寛延元年十月七日篠原織部清任（二千百石、内二百石與力知。）ゑ御預。同二年九月廿一日奥村主税敬忠（二千七百石、内二百石與力知。）ゑ御預替。寶暦元年六月六日於同所病死。

十月七日。園田兵太夫の母法山院禁牢に處せらる。

〔大野木克寛日記〕

十月七日、昨六日不時公事場寄合、大槻餘類等召出吟味、園田兵太夫母法山院と哉らんも揚り屋ゑ入申由。是者内藏允兄弟に而園田理左衞門と申足輕之妻に候。理左衞門子今之兵太夫之由。今般之儀に付、内藏允類家之者共遠慮いたし候由。

十月八日、昨七日園田兵太夫公事場ゑ召出吟味有之。其上母揚り屋ゑ入申儀に付、笹嶋織部ゑ兵太夫御預之趣、御用番奥村内膳より申渡之。昨七日夜九時頃に織部ゑ引取申由。因之役人中八時過公事場退出之由に候。

十月九日、園田兵太夫御預に罷成候に付、緣者松崎廣右衞門指扣罷有候。

十月十四日、園田兵太夫家來兩人吟味之筋有之、昨日公事場ゑ罷出遂吟味候處、不屆之筋有之、兩人共に獄に下候由に候。

十月十一日。幕府の寺社行奉大岡越前守、往年白山に關する加賀・越前交渉の記錄を徵す。

〔政隣記〕

十月十一日、白山社出入之儀に付、寺社奉行大岡越前守殿ゟ聞番御呼。承應年北國白山三社出入有之候、右落着いかゞ濟候哉承度由御覺書渡り、白山一卷一長持御書物奉行ゟ御預之內に有之、從金澤御取寄御家老中ゟ渡、又返上。

承應年は明曆元年の誤
一卷はいちまきと訓む

十月十三日。老女岡田、金谷御殿にて自殺す。

〔大野木克寛日記〕

十月十四日、昨十三日於金谷御廣式、八十五郎方介抱年寄女中岡田自殺。此者江戸より罷越候者也。是亦惡逆之徒たる故かと申慣す。

〔日記頭書〕

一、十月十八日八十五郎殿附岡田与云女中歲六十四、金谷御廣式雪隱にて自害相果。

十月十四日。眞如院の侍女淺尾江戸より金澤に着す。

〔大野木克寛日記〕

〔日附前書と異り〕

十月十四日、今日惡逆之徒年寄女中淺尾江戸より到着、直に御貸小屋縮所ゟ罷越候由也。

〔日記頭書〕

十月十一日、淺尾与申女中、今般御國へ被遣筈に候、道中縮籠網懸にて罷越候筈之旨告來。右女中十月四日江戸發足、同十八日金澤着、御貸小屋縮所へ入る。

十月十六日。大槻長太夫その組頭に召預となる。

〔大野木克寛日記〕

十月十六日、今日公事場不時出座、是大槻一卷之由。園田兵太夫、幷妻女則父松崎庄左衞門召連罷出候由也。大槻長太夫儀今日松平外記ゟ被召預候。尤内藏允族長左衞門せがれ御馬廻組に而、九里治兵衞組、知行四百五十石之由也。

十月十九日、今日公事場不時寄合、大槻長太夫も出候由也。

〔御預人之記〕

大槻長太夫、四百五十石、御馬廻。寛延元年十月十六日松平外記康久二千石、内五百石與力知。ゟ御預。同二年九月二十一日葛卷賴母昌陽二千石ゟ御預替。寳暦四年正月廿一日前田式部矩豊三千石、内千石與力知。ゟ御預替。同年閏二月二日五ヶ山之山内流刑被仰渡、同年三月廿八日赴配所。

十月廿八日。江戸に於て前田利和附御横目足輕荒木吉郎太夫金子を詐取

したるを以て入牢を命ぜらる。

〔政隣記〕

十月廿八日於江戸、今月七日勢之佐殿附御横目足輕荒木吉郎太夫、大坂屋仁兵衞に勢之佐殿御内用に候間、金子千兩兩替之儀申付、取寄請取、追分口御門より逃去候處、在所知れ、即刻割場より足輕遣、捕來入牢。右に付新番野坂忠太夫、いとこ故指扣被仰付。但翌年三月廿一日於江戸、右吉郎太夫儀殺害被仰付。

十一月十一日。今明兩日金澤天德院にて前田宗辰の三回忌法會を行ふ。

〔日記頭書〕

十一月、來月十二日大應院樣御三同忌之處、御取越十一日・十二日於天德院御法事御執行。惣御奉行奥村内膳、御代香前田對馬守。衆僧百口、御家中拜禮如每。與力は無之、於玉泉寺前御施行有之。

〔政隣記〕

十一月十二日大應院樣御三同忌來月御相當之處、昨今に御取越、於寶圓寺御執行。御奉行奥村内膳。江戸於廣德寺も今日御茶湯有之、御參詣。但寶圓寺に而衆僧百口之外如前々。

寶圓寺とするものは誤なるべし

十二月六日。前田綱紀の女榮君薨ず。

〔政隣記〕

十一月十五日、政所樣御氣滯御見舞使御近習番稻垣兎毛被仰渡、今日江戸立。早打に而者無之、日振詰參候樣被仰渡、白銀十枚、御内々右之外十枚被下之。廿二日京着御使勤之、廿四日京立、十二月朔日江戸ゟ歸着。十五夙之參附湯上之候得とも、次第に御つかれ之旨也。十二月五日頃御大切之旨十一日江戸ゟ相聞、御見舞早打御使御大小將矢部權佐同日罷越。同六日薨去、十二日江戸へ聞え、御聞懸御悔御使御小將淺香九兵衞十四日發、八日振に而罷越。廿三日御代香之御使於金澤人持組織田右近ゟ被仰渡。

一、御用番ゟ御屆左之通。

實父方をば半減之忌服

忌　十　日　　十二月六日より同十五日迄

服四十五日　　十二月六日より正月廿八日迄

右二條政所方當六日死去に付、忌服如此御座候、以上。

十二月十二日　　　　御　名

普請・鳴物御忌之內と於江戸觸有。金澤ゟは九日夜告來。十日・十一日之內御用番御宅ゟ爲伺

御誕辰は徳川家重のことに係る

御機嫌、頭分以上相勤。普請者九日より三日、諸殺生・鳴物者七日遠慮。十五日之出仕は御機嫌伺に相成。

一、御中陰御茶湯、従此方様も京都芳春院に而有之、御位牌も芳春院にも可被建旨被仰出。御法號、泰眞院従三位政所菅原氏尊儀。嵯峨二尊院に御移。

十二月六日。徳川家重、前田重煕に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月六日、御鷹之鶴、上使御使番戸田彌十郎殿を以御拝領。翌年二月朔日御披。附、御在府之節鶴・雲雀御拝領御恒例之事に付、是以後不記之。

十二月廿一日。前田重煕左近衞權中將に陞任を命ぜらる。

〔徳川實紀〕

十二月廿一日御誕辰、餅・酒たまふ事例のごとし。この日松平加賀守重煕中將に任ず。

〔政隣記〕

十二月廿一日、前日依御奉書今日御登城之處、被任中將に。且又重而御同席は御出之處、御家來諸大夫兩人御願之通被仰付。右爲御禮御老中・若年寄衆御勤、其外都而御先代御轉任之節御同例。御轉任之儀者早飛脚を以被仰下、正月朔日金城に而御弘。

〔政隣記〕
十二月廿八日、御轉任之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意。右之後御居殘、歳暮御祝儀被仰上。來年頭御着座之儀且御相伴も可被仰付旨、松平右近將監殿御演述。依之御立歸御禮被仰上、御老中方ゟ御勤。

一、今日御轉任之御禮に付御献上之品々等、御先代之通。

一、御轉任口宣御奉書、今日御用番於堀田相模守殿御渡。京へ持參之御使御大小將青木治右衞門、翌廿九日發足。於御次内々金小判三十兩拜領被仰付。但去廿二日御使之儀被仰渡。

寛延二年

正月朔日。前田重熙登營して年頭を祝す。

〔政隣記〕
寛延二己巳歳元日御登城。於御白書院御禮被仰上、御着座、御引渡等出、御盃・御時服御頂戴。西御丸ゟ御登城。御歸館之上、諸事年頭御作法如御先代。同日御中邸ゟ被爲入。二日増上寺御參詣、御老中方御勤。三日上野・廣德寺・御三家樣等。五日傳通院・長元寺御參詣。

正月朔日。金澤に於いて諸士に前田重熙の昇任を披露す。

〔大野木克寛日記〕

正月朔日、今日辰上刻より頭分以上熨斗目・半袴着用登城、其式如恒例。於御廣間人持・頭分列居之上、土佐守・對馬守・助右衞門・主膳・內膳幷御家老役出席、年賀之御祝詞申上。御緣頰御奏者番・御横目伺公。訖而年寄起座、重而出席、御披露之趣御用番內膳書立を以演述之。

舊臘廿一日御登城被成候樣、御老中方御連名之御奉書到來。則御登城被成候處、被任中將候段御老中方御列座、堀田相模守殿被仰渡、有難御仕合被思召候。此段何茂可申聞旨、以御書被仰下候事。

正　月

右之趣演述相濟、一統恐悦之旨奉賀、年寄中各起座、於出仕之輩退出。

右出仕相濟、横山齋宮（人持二千石）中將御轉任に付、京都ゟ御使被仰渡旨、御用番內膳言達之。發足之儀者不相知と云々。

正月朔日。江戸に於いて半田權佐の若黨等騷擾す。

〔政隣記〕

正月二日、昨夜御大小將半田權佐若黨一人・小者五人、酒狂之躰に而御小屋之內に有之、小道具等其外諸物鍋等迄打割及騷動。依之御番頭兩人、幷近邊之御小將中も罷越取縮置、御番頭

津田求馬御殿ゟ出言上、右六人共禁牢。權佐ゟ小者五人當分御貸渡、御使火事役相勤。追而右六人共借牢願、權佐於御長屋度々遂吟味、棟取之若黨早川要藏・小者關平・元助、殺害願之通被仰出。三月廿一日右要藏等三人於牢屋敷殺害、殘小者三人は御國ゟ返、奉公構暇遣す。權佐儀御暇被下、三月廿五日江戸立、四月七日金澤ゟ歸着之處、十一日權佐ゟ、江戸於御貸長屋家來共及騷動候節、始終不都合之致方に付、御大小將組被指除、御馬廻組ゟ被加候段被仰渡。

正月朔日。人持組永井多宮の息傳七亂心して人を傷つく。

〔政隣記〕

一、正月元日人持組永井多宮息傳七郎亂心。女五人に手疵負はせ、依之押籠之置。

正月七日。前田重熙初めて人日に登營す。

〔三守御譜〕

寛延二己巳年正月七日若菜の朝あり。

〔大野木克寛日記〕

二月十日、中將樣當春御登城、御白書院初而御着座被遊候。人日にも御登城被遊候。段々結構成御樣子自江戸申來る。誠以恐悦之御儀也。護國公御代初に者、人日御登城者無之由。大應公にも御登城無之樣に申候。猶追而識者可問也。

〔大野木克寛日記〕

二月十九日。今日因約束淺加氏之家に參入。中略。彼是雜話之内、去夏嘉祥之時分、未少將樣に而被成御座候へ者御登城に不被及旨に而、御登城不被遊候。然處當春人日に者御登城被遊候。結構成御樣子に候。其已前松雲公、參議御昇進迄者嘉祥御登城、人日御登城者元祿二・三年頃初而御登城。尤護國公、御部屋住より參議御昇進迄嘉祥御登城、人日御登城も御家督之砌者無之由。大應公に者人日御登城者無之由に候。都而嘉祥に者宰相以上御登城無之、中將以下御登城。去共御三家樣者、假令中少將に而も御登城無之御樣子に候。然者宰相に而御登城無之者、其御官位に付而御登城無之と相聞申候。御三家樣は其並に而無之故、中少將に而も御登城無之御樣子に候。然處當公去夏之頃者、未少將に而被成御座候へ共、御登城に不被及旨に而御出不被遊候者結構成御樣子、當春人日御登城者別而結構成御首尾と奉恐悅御儀に候。人日御出仕者、御三家樣・御連枝迄に而、外御役人者格別御登城者無之由に候。嘉祥御登城者さのみ御規模之御樣子に而者無之、一統之御出仕之由に候。護國公御代御交替御願替、四月に成候事者近頃殘念成御事、八月之御替を往古のごとく四月に御願替者成安、四月を秋御替と申儀は、並大躰に而者難被爲成事之由に候。

正月七日。奧村助右衞門・本多主殿二人叙爵を命ぜられたる報金澤に達

有澤才右衛門江戸より金澤に着し登城せしなり

す。

〔大野木克寛日記〕

正月七日、今日辰半刻有澤才右衛門登城。其趣者、兼而諸大夫御願置被成候處、舊冬御願之通被仰渡、忝被思召候。因之奥村助右衛門・本多主殿叙爵被仰付候旨、夫々年寄中・御家老役ゟ被仰下候。尤助右衛門・主殿ゟも被仰渡、助右衛門は丹後守、主殿は安房守と稱候樣に是亦被仰渡候由に候。右諸大夫御願之通被仰渡候御披露者、今日無之。其委細者、御番頭以下月次出仕無之面々、俄に登城成がたく候故相延候。

正月十三日、今日因召人持・頭分熨斗目・布上下着用登城、於御式臺出仕之輩交名御帳に記。五半過御廣間出仕之輩列居、年寄中・御家老役出座、御意之趣月番内膳演述、書立左之通。

舊臘廿日從御老中方依御奉書、翌廿一日御登城被遊候處、於御白書院御老中御列居、御願之通御家來兩人諸大夫被仰付旨、御用番堀田相模守殿被仰渡、誠以難有御仕合被思召候。依之奥村助右衛門儀丹後守、本多主殿儀安房守与御改被成候。此段何茂可申聞旨御意候事。

正月七日。前田重熙を呼ぶに中將の官名を以てすべきを告ぐ。

〔大野木克寛日記〕

正月七日、今日於御城、御横目より相達候紙面。

今般中將御轉任に付、前々之通御官名相唱申筈に候。此段寄々可被申談事。

右は御用番內膳より、御横目方へ被相渡候紙面之由に候。

正月十五日。使を京都に發して二條吉忠夫人榮君の薨去を弔せしむ。

〔日記頭書〕

一、正月十五日、舊臘政所樣薨去に付、京都へ御代香之御使者織田右近人持被仰渡、今日發足。二尊院に而御代香相勤。於芳春院御法事、此方樣より御執行に付、御代香相勤、二月七日歸着。

正月廿三日。前田重熙先に中將に任ぜられしを以て口宣受領の使者金澤を發す。

〔政隣記〕

一、正月元日。人持組横山齋宮江、中將御轉任に付口宣受取之京都江御使被仰渡。廿三日發足、二月廿二日歸。

正月廿五日。使を日光東照宮に遣はして前田重熙の昇任を謝せしむ。

〔政隣記〕

正月廿五日、中將樣御轉任に付、日光御代參之御使人持御近習富田次太夫先達而被仰渡、御

使濟、金澤ゟ直に罷歸候樣被仰出。御使に付、御懇命を以品々拜領物有之。今日發出、御步等被指添、二月十日金澤歸着。

正月。改作奉行より諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻の執務に關して戒告す。

〔日曆〕

一、諸郡御扶持人幷十村を初、末々百姓・頭振迄近來風俗惡敷、改作之御法年々忽に相成候に付、去寅年書立を以申渡置候。然共今以風俗改り不申、末々心服不仕躰に候。畢竟御扶持人等相愼諸事、取噯之儀勿論、作躰僉議之節は猶更仲間致懇談、和順を以可相勤儀に候。且又新田しらべ方等之儀も、其組之十村幷に新田裁許之者共ゟも、得与爲示談可申處に、人により末々心服不仕儀も、權を以押而申渡候族も有之躰に候事。

附、新田裁許之者共は、新田しらべ方之儀、猶更相役得与申談、十村ゟも爲示談、其上を以免相等可相極事に候。か樣之儀も人により、其心得違も有之躰に候條、急度相愼可申候。

一、近年諸郡共に、御扶持人等惣躰分限を越、花麗に相成候。准之夫々小百姓・頭振躰迄も次第に奢出來、百姓之行儀を取失候。殊に遠所之十村等金澤ゟ罷出候節、御用に事寄せ數日致逗留、種々不行儀之族茂粗相聞候。近年段々被仰出之趣有之、其上此儀に付舊臘御算用場御

奉行中より、拙者迄内々に而示談之品も有之に付、此度分而申渡候條、自今之儀猶更嚴重に可相心得候事。

一、組下之内人柄不宜者も有之、外より相顯曲事にも可成儀を、其裁許之十村一圓不存、其通に仕置候儀は油斷之至に候。向後右躰之族、隨分心を附可申候事。

一、年若成十村等は、改作方之御法得与承知不仕儀茂可有之候間、年來相勤候者江承合可申事に候。其身之料簡を以、勝手次第に取捌候輩有之躰に候。年來功者之輩与申談、萬端間違無之樣可相心得事。

一、御郡之用水之儀に不限、輕き出入之品者、十村・廻り口夫々相曉、樣子により御扶持人江も申談、可成程は穩便に可相捌候。勿論何事に不依拙者共へ相達、指圖を請候儀は通例之事に候得共、乍然輕重之差別も無之、ひたすら相達候而は、品により輕き儀も事立候樣に相成、末々すたり候樣に成行候間、其程心得可有之事に候。或は手代等爲取曉、互に相募り理不盡之仕形も有之躰に候。是等之儀甚不可然候間、隨分綿密に相心得、少も偏頗なく、双方致得心候樣に可取計事。

一、諸郡百姓等用事有之、金澤江罷出候節は、其裁許之十村江相斷可罷出儀は、毎度申渡置候處に、今以無斷密々金澤江罷出、長逗留いたし、町人共と取組方に手入仕、色々願事等仕

躰に候。且又百姓分之儀は、請負等之願一向不仕御法に候處、か樣之儀も猥に相成候條、嚴重に可申渡置事。

右ヶ條之趣、前々より申渡置儀候得共、拙者共承及品茂有之候に付、猶更改而申渡候。人別に申聞候儀者令用捨、一統申渡候條、此旨相心得、急度可相守候。尤末々へも申聞、請書付可指出者也。

寛延二年正月

塚本伊左衛門
國澤太次兵衛
吉國理太夫
平野安左衛門
大地新八郎
加賀屋和左衛門
在大坂 小谷兵左衛門
山本長太夫

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻り中

二月十一日。奧村丹後守、本多安房守その叙爵を前田重煕に謝する爲金

澤を發す。

〔政隣記〕

二月十一日叙爵爲御禮、奥村丹後守修古今朝金澤發足、上下二百二十八人。本多安房守政行今晝發足、上下二百六十八人。

廿二日兩人共江戸着。但四時頃より八時頃に參着也。御貸小屋ゟ兩人共御近習物頭御使被成下。爲御禮罷出、即刻於御居間書院御目見。御裝束裏付御上下被爲召、且口宣拜戴。三月三日叙爵御禮被仰付、御料理・御盃・御刀一腰宛被下之。七日御近習物頭御使を以、御國ゟ之御暇被仰出、御羽織二・判金三枚宛被下之。爲御禮罷出候處、御手自拜領物被仰付。十日江戸發、丹後守廿二日、安房守廿三日金澤歸着、都而御作法前々之通。

但兩人共乘物乘用御免、且雨天之節御屋敷之内乘用御免等も如前々。

二月十五日。前田吉德の側室眞如院歿す。

〔大野木克寛日記〕

二月十八日、當十五日とも哉らん眞如院致病死候。死骸は日蓮宗經王寺に而取置候由。寺迄者常躰年寄女中など往來之通。寺に而遺体認之、葬式相濟候旨申慣候。

〔日記頭書〕

一、二月十五日眞如院先頃より煩之所、今朝金谷於縮所死去。今井屋敷へ頃日縮出來移し申筈之處、煩にて如此也。夕方經王寺之寺内に葬候時分、御留守居物頭長瀨五郎右衞門幷御廣式御用達御歩、橫目、都合五人罷越候由。經王寺番神堂橫畠中に埋。

〔前田直躬內密手記〕

眞如院相果候儀、追而長瀨五郎右衞門申聞候は、眞如院賴によつて、五郎右衞門手に懸、首を縊相果させ候旨申聞候事。

二月廿八日。前田重熙會津侯保科容貞を本鄕邸に招請す。

〔政隣記〕

二月廿八日肥後守樣御內々御招請、四半時頃御出、夜六半時頃退出。御庭於御亭御花見、夫より於御居間書院御饗應、重而坂下御馬場に御出、御客馬有之。御前にも被爲召候。御所望に而御相伴之前田靱負殿・前田帶刀殿・齋藤長八郎殿も一疋宛御乘、幷御馬役之外、御近習頭青木與右衞門・國澤彌兵衞、御表小將加藤勘太夫にも爲御乘、此度出府之丹後守・安房守幷御表組頭御用人・聞番・同見習にも見物被仰付。

今日之御相伴等者、靱負佐殿・壹岐守樣・前田信濃守殿・長八郎殿・齋藤三六殿・帶刀殿・平賀玄純老・松平善甫老。但壹岐守樣等は御勝手に而御料理被下之。

二月。猥に百姓の金澤等に出てゝ奉公を爲すことを禁ず。

〔改作方雑留〕

諸郡百姓共之内改作不精もの有之、収納米令不足候はゞ、其村々肝煎・組合頭等遂僉議、十村ゟ相斷指圖を受、様子次第家内之男女奉公に指出し、其給米を以不足米爲取立、追而力付次第引込候様に先年申渡置候。是者収納米令不足候節之儀に候。其外にも無據儀に而奉公に罷出度者は、其趣十村ゟ相斷、十村指圖之上に候。然處近年諸郡共に男女作方無情にいたし、金澤を先として、所々宿々ゟ奉公に罷出候儀も專心懸、十村ゟ無斷密々に罷出る躰に候。依之作人致不足のみならず、作人に召抱候男女給米高く相成、下々難儀彌增に候間、右趣村役人共ゟ急度申渡、向後之儀猥に無之様に嚴重に可申付候。但如斯改而申渡候に付、當時町方等に數年在付有之者も、一時に呼戻候様にいたし候而は、又指支申儀可有之候間、此所も能相心得、可成程は呼戻候様にいたし、第一向後之儀嚴重に可申付候。惣而此一事に不限、諸事か様に猥に相成候儀は、村役人共常々裁許不行屆故に候。是以畢竟其方共油斷より如斯に候間、惣別之儀急度可相心得候。

一、其方共養子・縁組願指出候節は、拙者共ゟ致内達指圖を受、其上を以御郡奉行ゟ表向申達等に候所、心得違、兩方一時に相達候輩も有之候。向後之儀彌先規之通可相心得候、以上。

寛延二巳二月　　　　　　　　　　　塚本猪左衛門

國澤太次兵衛
吉岡理太夫
平野安左衛門
大地新八郎
加須屋和左衛門
在大坂 小谷兵左衛門
山本長太夫

諸郡御扶持人・十村中

三月朔日。前田重煕、三條西實稱を下谷廣德寺の旅宿に訪問す。

〔政隣記〕
三月朔日。三條宰相樣御下向、昨日御着。淺草廣德寺境內永壽院に御旅宿。諸事御先例之通。此方樣より御取旁公邊ゟ御屆之上、今日御見廻、御長袴被爲召、御表小將者不及御供。同七日御招請、御囃子等被仰付。狩野家相詰候得共、遲く相成、席繪不被仰付。御太刀御持參、披露御家老。外に御持參品々被進物有之。從此方樣、探幽筆三幅對・御硯箱被進之。
四日。近衛樣御下向に付、公邊ゟも御屆相濟、明五日御勤之筈に候處、御痛所に付御延引。

本文は前掲のものと異り暫く疑を存す

三月十一日。前田重靖金澤を發して江戸に向ふ。

〔日記頭書〕

一、三月十一日嘉三郎殿今朝御發途。御道中騎馬御供富田彌兵衛（主附御用物頭並）・山森多宮（御大小將御番頭）一人充替々。御持筒二挺。歩御供は御抱守より四人にて兩人充、新番八人にて四人充也。御行列外一木逸角（御小將頭）、御跡より青地彌四郎（御小將横目）、御大小將より御供無之。廿二日江戸御出府之筈之處、御道中川々滿水にて廿三日九半頃御着。

〔謙德公年表〕

一、四月十三日、嘉三郎殿金谷御發途赴東都。但勢之佐殿離邸ゟ御着之頃首途也。

三月廿一日。前田利和に屬する留書荒木吉郎太夫死刑に處せらる。

〔日記頭書〕

三月廿一日。勢之佐殿附留書荒木吉郎太夫（千兩金子取逃候。）今日於江戸殺害被仰付候。

四月朔日。前田重熙脚疾に罹るを以て登營の際杖を用ふるを許さる。

〔政隣記〕

四月朔日、於江戸御痛に付、御城中御杖御用之儀前廉御用番ゟ御屆置、今日御登城より御用

被遊候。

四月十一日。前田重煕脚疾を以て就國賜暇の上使を受くる能はざることを屆出づ。

〔政隣記〕

四月十一日、御痛所御勝不被遊、近々御暇之上使御座候而も、御間之內御步行も難被成趣御用番へ御書付、今日久世忠右衞門殿御持參。今日より武田長春院御療治之趣也。且御歸國御發駕、今月廿一日・廿三日之內に前月廿二日被仰出候得共、五月二日御發駕同十三日御着城可被遊旨、四月三日被仰出。但御足痛所、今月朔日押而御登城後不御宜、從最前中村正伯御藥上候處、今月十五日より横井玄泰に被轉、且望月三英老・藤井貞三・勝田養元にも診被仰付、廿日より人參一分入玄泰上之。表向者長春院御療養之趣也。

四月十三日。前田利和金澤に歸り石川郡上野の別邸に錮せらる。

〔謙德公年表〕

一、四月十三日勢之佐殿金澤に御着。上野村領大和守下屋敷之續に、自是前に離邸を立、當日直に淺野川橋より小鳥屋町・材木町・馬坂より與力町通り御入、禁錮也。御抱守幷組外番頭

等御用を辨す。御門には御徒横目勤番、門内へは従者等不入、取次出向諸事取捌す。

〔大野木克寛日記〕

四月十三日、勢之佐殿當二日江戸發足、今日御到着。淺野川橋より小鳥屋町・材木町・馬坂通、小立野經王寺後通、上野御居宅ぇ御着之由。尤道通夫々掃除不及、御居宅參出之面々常服着用之由に候。一説八十五郎殿待受に御越、直に御同居之筈ニ申慣候。此儀者虚說に候。

五月廿八日。前田重熙再び脚疾を望月三英に診せしむ。

廿八日は政隣記記載の日附なり

〔政隣記〕

五月廿八日、中將様御足痛に付、去十八日重而望月三英老御招、御診被仰付候處、御快方には候得共、急に御宜は有間敷候。當秋中、今年中も得与御養生可然与被申上候に付、御僉議之上、御供立之外、或者御前後に罷歸人々等、去廿日御暇被下。但中興之御例歟、御臺所奉行も御暇被下候。

五月十八日。河北郡三坂附近に降雪あり。

〔政隣記〕

五月十八日、金澤下口三ツ坂邊に雪二・三寸計降積。

五月廿三日。前田重煕の脚疾大に輕快す。

〔大野木克寛日記〕

六月五日、中將様御容躰段々御快然、只今に而者御痛之方少く御成之旨、先月廿三日公儀御奥醫師武田長春院法印幷横井元泰口上之趣承知之旨、先月廿四日日附に而榊原平右衞門書狀昨日到來、誠以奉恐悦所也。

五月廿五日。大聖寺侯前田利道就封の途金澤に宿泊す。

〔政隣記〕

五月廿五日、壹岐守様初而爲御入部、當月十五日江戸御立、今日金澤御着、金屋九郎兵衞方に御泊。前田主稅御旅宿に參上之處、御盃・御刀被下之。御縁者に依被成に也。今日寶圓寺・天德院に御參詣。翌廿六日野田御廟參。桃雲寺に御立寄候而御裝束被召替、直に御發駕、小松御泊、廿七日大聖寺に御入部。依而爲御祝儀進物御使、御馬廻頭高畠木工六月朔日相勤、十一日歸着。

五月廿八日。諸郡百姓の宿方に住するものに限り請負業を營むことを許す。

〔加州郡方舊記〕

諸郡百姓分之者は、諸事請負不仕候樣、前々申渡置候得共、今般詮議之趣有之、宿方之分は高持候ても、請負可仕勝手次第に。勿論宿方之外は決定不罷成候間、只今迄之通に可相心得者也。

巳五月廿八日　　吉岡理太夫

加須屋利右衛門

諸郡御扶持人・十村中

六月十七日。新番組菊田與左衛門追剝の容疑を得て自殺す。

〔大野木克寛日記〕

六月十五日、頃日卯辰山に而開帳有之、夥敷群集候處、御直勤新番菊田與左衛門、前田多宮家來高桑矢尾次等、彼是四人連に而罷越、酒狂仕、甚亂行之事有之。矢尾次儀者、主人多宮方に而縮申付置候由。委細追而可記。笹嶋織部家來何某儀も右同所に而酒狂之上、百姓躰之者疵付候由。是亦縮所申付置候。委細追而可記。

前田多宮家來高桑等一卷、最初者右之通取沙汰有之候處、左樣に而者無之、當八日夜高桑矢尾次・山中久左衛門若黨何某・菊田與左衛門小者、彼是三人申合、淺野川橋近に而追はぎ仕、

御徒横目某家來小者脇指をうばひ取、其外町人手代紙入をうばひ取盗賊之仕形。右與左衛門小者、橋番人見知り罷有。右騒敷時分見留、其手筋を以段々相知、井口五郎左衛門手合足輕、右之小者召捕委細相知。久左衛門若黨も召連可申と、久左衛門宅へ罷向候處、其儀何といいたし右若黨承候哉、已於部屋自害仕候。扨右小者口書之趣を以段々相知候。因之多宮家來、五郎左衛門より多宮へ預置候由。當八日にも、かならず度々か様之事有之候由申慣候。其上菊田與左衛門も同類に候旨専申慣候。

十八日、新番御徒菊田與左衛門儀、頃日取沙汰之通、盗賊高桑將曹（矢尾次事先立而名改。）同類之由。則與左衛門小者申顯候に付、五郎左衛門より新番頭鷹栖左衛門へ通達も有之、左門宅へ與左衛門相招、小頭立合、段々様子相尋候處、彼是口上分明ならず。尤於宅も一類共相尋候處、口上申かすめ候躰に付、與左衛門縮方之事故、彼是左門等示談有之候由。然處今般の首尾のがれがたき事を覺悟候哉、昨十七日與左衛門宅に而自殺仕候。因之檢使御横目丹羽織部・宮崎小右衛門罷越候由。右之躰に候へ者、賊同類無紛者と致取沙汰候。

〔政隣記〕

六月十八日於金澤、新番菊田與左衛門於自宅自殺相果、爲檢使御横目兩人罷越。是去七日淺野川於大橋之上に、御歩中村彌左衛門小者之脇指を奪取候儀に依而、盗賊改方より同類夫々

召捕候故也。

六月廿四日は前出の如く早飛脚の着したる日附

六月廿四日。江戸よりの飛脚金澤に着し前田重熙の病狀を告ぐ。

〔日記頭書〕

一、六月廿四日夜、當月廿日江戸出足之早飛脚到來。

〔政隣記〕

六月廿四日。中將樣御氣配御指引被爲在、指而御重き与申程之儀に而者無御座候得共、第一御肝胃腎之御虛損。去廿日前より益氣湯人參一分五厘入二貼、外に獨參湯五分、八味丸細に丸じ廿粒宛被召上。其後七分宛之獨參湯二貼宛、廿日より一匁宛之單參湯二貼宛、廿二日より一匁五分宛之單參湯二貼宛、廿三日より一匁五分宛之單參湯二貼宛被召上候。從御國佐々伯順被爲召、道中不及指急に、常步に而罷越候樣被仰出。金澤廿五日發出。但廿五日より淸操湯に參一分宛入上之。

六月。諸郡の川入山崩等に檢地を行ふべきことを告ぐ。

〔改作方雜留〕

諸郡前々より川入・山崩等に而地不足出來檢地相願候所々、當分檢地代引免等申付置候得共、僉議之趣有之、當秋より檢地可申付候間、先一郡に二ヶ村宛可書出候。自今不詮議之所有之、

追而相知候はゞ急度可相咨候條、精々遂詮議可申聞者也。

巳六月　　　　御用番兩人

諸郡御扶持人中

七月二日。藩醫佐々伯順江戸に着し前田重熙の病を診す。

〔政隣記〕

佐々伯順七月二日夕江戸着、早速御診被仰付候處、不輕御容躰与申上、段々御醫師中御僉議之上、四日より伯順に被仰付加減、理中湯に參五分宛入三貼宛上之、八味丸は上之、單參湯は差止。十一日より八味丸も指止、大防風湯に參一匁宛入三貼宛上之。

〔大野木克寛日記〕

七月十九日、佐々伯順當月二日着府、直に公舘へ參上、御樣躰奉窺退出。四日より御藥奉調進、人參五分宛入、御藥三貼宛上之候。御同篇に被成御座候旨也。右之趣、當九日出之町便に申越候旨、伯順せがれ正益より以手紙密々申越候。內々伯順着府已後、公邊御樣子密々申聞候樣願置、約諸によつて也。右御同篇に被成御座候旨に候得者、御藥御相應之兆と恐察。然者一統恐悅之御儀奉存所也。

〔大野木克寛日記〕

七月廿八日、中將樣御容躰、佐々伯順御藥奉調進以後、御指引無御座、御同篇之内御快被成御座候。御足之御痛者、未爾与者不被成御座候へ共、去十四・五日之頃か、得与御着座被遊御試被遊候。御痛已後如此之儀者初而之由、密々御沙汰之由。試以恐悦之所也。

七月七日。犀川・淺野川暴溢す。

〔政隣記〕

七月六日・七日金澤大雨、兩川水出。小川も水增、別して天神町高水溢れ付、小立野與力町之方山崩れ、天神町之家五軒潰れ、八歲・十五歲之男子、往來之女都合三人死。

兩川は犀川淺野川

七月十一日。德川家重使を遣はして前田重熙の病狀を問はしむ。

〔德川實紀〕

七月十一日、松平加賀守重熙病により、奏者番鳥居伊賀守忠意を御使としてとはせらる。

七月。大槻朝元の長子直之助病歿す。

〔大野木克寬日記〕

七月二十日、當十五・六日の事にや、前田修理手前に引取置候大槻内藏允せがれ直之助病死。死骸御横目丹羽織部罷越見分有之由。

寬延元年九月十二日の條には直之助を尙之助に作れり

八月朔日。幕府に太刀を獻上する使者の格式を改む。

〔政隣記〕

八朔御太刀御獻上之御使、先年は間違に而御家老役被相勤候處、今度御僉議有之、舊例之通御馬廻頭後藤瀬兵衞に被仰付。

八月五日。前田重熙、大庭探元をして病を療せしめ爾後快方に向ふ。

〔政隣記〕

八月九日、中將樣御容躰段々御快、七月廿四日より參二分宛減、同廿九日より一分宛減、一貼二分宛加、三貼宛被召上。是佐々伯順存寄を以如此。御痛者御同篇之處、指而御替も無御座に付、當五日より大庭探元御藥被召上候處御快、九月十日に者御庭ゟ御出、十二日に者御居間前御馬場へも御出。

八月九日は五日までの病狀を金澤にて如り得たる日附なるべし

〔大野木克寛日記〕

九月六日、中將樣御容躰御同篇に被成御座候故か、先月五日より大庭探元御藥被召上候。御藥之內ゟ人參五分宛相加、二貼宛奉調進候。其節外御醫者共、何かと指圖がましき事申間敷候。御療治之儀に付存寄も候はゞ、直に人々より可申上旨被仰渡候由。且又當月十日に、御庭ゟ御出被遊候。一段御快被成御座候。十一日御廣式ゟ被成御座候。尤御杖御用無御座候。

近頃無御座御足さばきに而被爲入候。只今迄は御つゝたて被遊候樣に御座處、御こぶらい御筋被爲直候哉、御平生之通御步行之御沙汰に御座候。

八月廿一日。大槻朝元の次子永次郎病歿す。

〔大野木克寛日記〕

八月二十日、前田修理歿後、御預置之大槻次男七歳之由。當十四日深美治部に御預之由。右せがれ、先頃已來相煩候由。

〔大野木克寛日記〕

八月廿三日、頃日深美治部に御預之大槻次男、日來病氣之處、一昨日こ哉らん病死仕候。死骸見分、檢使吉田孫助・宮崎小右衛門罷越候由。

八月廿二日。小松に於いて城番三田村左京の用人水島太郎左衞門、給人野口助太夫と鬪諍す。

〔政隣記〕

八月廿二日、小松御城番三田村左京在小松之處、用人水嶋太郎左衛門与給人野口助太夫口論致喧嘩候處、太郎左衛門深手負ひ養子伴七を呼り候處、伴七出合助太夫を切殺候。其時太郎

左衞門申候は、深手に而以之外致難儀候、迚も助り不申候條致介錯候樣に与申に付、其儘太郎左衞門之首を切申候。依之小松御馬廻より兩人檢使も有之候。然處左京より右伴七助命願之處、早速致殺害候樣、今廿二日月番對馬守殿宅に而被仰渡。翌廿三日左京頭村井主膳殿宅に而、安房守殿立會、御橫目兩人出席、今般左京取𠮷願之趣茂不宜に付、急度指扣被仰付、爲代小松ゟ者點先前田權佐被遣。但十一月十五日左京指扣御免許。

迚は向なり

九月六日。前田重煕復望月三英をして病を診せしめ本年の就封を止む。

〔政隣記〕

九月六日望月三英老御招被診、御氣色者隨分御宜候、御痛は御果敢不被遊等。今年中補血之劑幷八味丸被召上置、春御痛之御療治可然候。陽氣に御迎候はゞ御藥功も相見え可申候。御急候得者不宜旨被申上。是より御歸國御供人御用無之旨御僉議有之。同廿三日御道中奉行より伺候處、御道中方御用相仕廻候樣被仰出。依之御供爲御用交代留り居申人々等、翌廿四日より追々御暇被下罷歸。爲御留守詰罷越候前田兵庫等も御暇被下之。

十月廿一日。大槻朝元の餘黨淺尾を殺害せしむ。

〔大野木克寛日記〕

十月廿三日、去年已來被召込置候淺尾と申女中、一昨廿一日御貸小屋縮所之前に而、殺害被

小遣は小使なるべし

仰付候由。其已前、毛利惣次郎殺害被仰付候。其通に候旨申候。

十月廿五日。藩の政務に關する費用は從來の半額に節減すべきを命ず。

〔政隣記〕

十月廿五日、人持以下諸役人迄、今日越後屋敷被召呼、御入用方只今迄之萬事半分与相心得候樣被仰渡。但此以來僉議有之候哉、會所は小遣減候由に而、江戸來狀不屆之人々より取に越候樣申談有之。割場よは諸方江懸渡候足輕・小者之指替紙面に無宛所に指越。將又御儉約奉行等江は先達而被仰渡有之、年頭之御規式をも被止候間、其心得を以萬端御儉約方之儀可申談旨被仰渡有之。

〔坂井舊記〕

近年打續御損亡等に而、勝手御難澁に付、今般猶又嚴重御儉約之儀被仰出候。當時御勝手之御樣子に而者、御儉約之內當分御格をも可被替候。夫に付各手合御入用方之儀、綿密に被遂僉議、大抵唯今迄之半減程に而相濟候樣被相心得、詮議之趣御儉約奉行へ可被申達候。猶更御儉約奉行より、委細申談候筈に候事。

巳十月

右於越後屋敷、御勝手方御主附丹後守殿・市正殿御列座に而、諸役人中へ御渡被成候。道橋

方・火矢方へも可申談旨、別に小紙御紙被成候事。

十月廿六日。前田重煕の脚疾輕快し服藥を止む。

〔政隣記〕

一、十月廿六日より熱海湯御汲寄、御入。御藥者被指止。

〔大野木克寛日記〕

十二月九日、中將樣御痛段々御快然成御座、去頃より御服藥は被爲指止、相州熱海海温泉より汲湯被仰付、毎日一度宛御入湯被遊候。夫故歟、御足之御筋引つり申所御和被遊候。御機嫌者御平生、御膳も御快被爲召上候。右之通御痛所御和被遊、御快被成御座、一統奉恐悅旨、江戸より申來候。

十月。諸郡檢地の際に要する繩張人を定むべきことを命ず。

〔加州郡方舊記〕

御領國諸郡共に近年檢地不被仰付候故、繩張人も無之、其上繩張人縮方之誓紙も相洩候。今般より繩張人、於檢地所縮誓紙申付候間、郡々に而十村中人柄を撰、遂吟味相定申人々書記可差出、誓詞可申付候爲其申渡候、以上。

巳十月　　　　田邊次郎兵衛

吉田又右衞門
福岡三郎左衞門
奥村勘太郎
横山平太夫
高橋新五左衞門
瓜生善太夫
上木政右衞門
大村友右衞門

諸郡御扶持人・十村中

十一月四日。金澤に於いて諸士の風俗華美なるを戒む。

〔政隣記〕
十一月四日御家中士風不宜、去年來別而花美不相止旨之書立御用番對馬守殿諸頭・御用番に御渡。

〔典制彙纂〕
御家中士風不宜、去年以來別而不愼之族も有之、其上每度被仰出儀に候へども、于今華美之

族不相止故、ひしと勝手向指支、見苦敷爲躰茂有之由被聞召候段、拙者共迄被仰出之趣有之候條、組・支配之内不心得之人々在之候者、急度加異見、相愼候樣可被申聞候。尤右之族見聞於有之者、各油斷も有之間敷候得共、猶更爲心得、右之趣申達候事。

十一月

十一月四日。前田重熙の脚疾全快を祈る爲江戸より使を伊勢大神宮及び北野天滿宮に發せしむ。

〔政隣記〕

十一月四日、勢州ゑ御神納判金五枚、御使御表小將野村源兵衞、北野ゑ御神納白銀三十枚、御使御大小將組奥御納戶奉行明石源兵衞、御內々被遣旨當朔日被仰渡、今四日發足。兩人共白銀十枚宛、御內々に而又十枚宛被下之。明石は廿日に歸府、野村は廿二日歸府。是中將樣御痛御快方には候得共、猶更御全快御祈之爲也。御國大社に而も御祈禱有之。

十一月十五日。前田重熙江戶詰の小將組及び聞番の風儀を改むべきことを諭す。

〔御眞翰等扣〕

相詰候小將共、去年以來別而勝手難澁におよび申段承候。小將組之儀は諸役勤方多く、彼是費之筋も可有之候。然共去年より度々申渡候趣急度相守、平生儉約第一に心掛候はゞ、左程には有之間敷處、未其旨行屆不申、衣服抔も以前より輕き方には相成候得共、未全相改り申に而も無之候。假令當地に而綿衣着用致候共、其心底に而無之候而は、一切取つゞき之筋相立申間鋪候。且又仲間參會仕候節も、萬端先年よりは品輕く仕躰に候得共、表向は其趣に而、内々は且而相改不申、如以前不益之儀も有之躰に候。加樣之儀も番頭共などは、猶更委細見聞可仕所、乍存其分に致置候哉。但不存事に候へば甚以油斷に候。猶又小將組申付、初而當地ゐ相詰候者をば、功者成者共引廻し、如何樣にも勤易候樣可仕所、却而左樣には無之、不案内を貶り、彼是筋不宜樣にも相聞ゐ候。尤先年程には無之躰に候得共、今以參會之節など、古き者共より無益之費有之樣に態与致掛候に茂相聞ゐ、風俗不宜候。ケ樣之儀も、小將組以前より之風俗と相心得、等閑に致置申儀、難心得次第に候。其上當秋暇申渡罷歸候者ども、旅用にも指支候程之者も相聞候。困窮は一統之儀に候へ共、仕抹宜上之儀は不及是非事に候。只今之躰に而は、此表より罷歸候砌、當地町人共手前拂方抔も不埒に仕者可有之哉に存候。若左樣之族有之時は、常々之仕置ゆるかせ之樣に外々には可存候。然時は支配仕其方共は勿論、此方においても落度候。畢竟兼而其心當有之はゞ、ケ程には指支申間敷候處、不覺悟之事に

候。此分に致置候而者、連々難澁におよび可申候。且交代之節抔に至り申渡候而者、何程嚴鋪申渡候とも其詮有之間鋪候條、兼而其心得致、嚴重に申渡、番頭共へも急度可申含置候。

一、聞番見習之者共、取分難澁に及申躰に候。此者共之儀は、公邊勤方等事多に相勤申儀には候得共、結句其儀に事よせ、衣服等花美を好み申族も有之。門外ゟ罷出候節は、召連候者どもも迄他屋鋪之風を似せ、何か飾せ申躰に候。此等之儀、皆以當時之事に候得ば、一通り見苦敷無之程に候得ば事調申儀に候條、向後其儀急度申聞置可然候。右之儀に不限、萬端可准之候。且表立候使者等之外、門外ゟ罷出候儀、前々より有之段承候。此儀も萬端聞合等之ため、稀々には可有之儀に候得共、毎度不罷出迚も可相濟事に候處、去年以來は度々外々ゟ罷越候躰に候。毎度罷出申內には、心得違之族も出來可申哉と存事に候。虛實は難計候得共、兩人見習之者共、折々遊所ゟも罷越候樣致沙汰候段承候。是等之儀は、毎度門外ゟ罷出候故、自ら諸人不審を立及沙汰候と存候。重き勤之者、件之風說に合候而は、其身之爲旁不可然候間、急度制止置可然候。

一、番頭共之事、小將共ゟ加異見申儀も、其身不正しては皆々信服不仕事に候間、萬端急度相心得尤に候。支配仕者之儀は、何れも見習申儀に候得者、大切之事に候。當時番頭共は隨分心得罷在躰に候得共、尙更申聞置可然候。

十一月十五日

十二月三日。徳川家重、前田重熙に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月三日、御鷹之鶴、上使御使番木下内匠殿を以御拜領。御痛に付、御名代前田信濃守殿諸事御勤。

寛延三年

正月朔日。前田重熙病後なるを以て登營拜賀を廢す。

〔政隣記〕

正月元日江戸表五寸計雪降、金澤者快晴雪無之。今日御太刀御献上之御使前田大炊。中將樣去夏以來御痛有之御登城無之に付、在江戸之人々年頭御禮不被遊、諸頭分以上は御居間書院四之間に列居、御家老中に謁。御意之趣隼人演述。

一、御家老江者鶴御膳下御料理被下之。御近習頭者今年より御料理御止め、鶴御吸物・御酒等迄被下之。御近習平士、鶴御吸物被下來候得共、今年より御止。

正月二十日。前田吉德の女喜代姫歿す。

〔政隣記〕

正月廿日、於江戸櫻田御前樣御卒去。但御懷姙之處、此間少御滯、昨晝過御指引之旨に付、御表小將早打に而被遣、數馬幷御近習頭被遣被附置、御表小將度々御使被遣、御醫師追々御家老も被遣之。富士瑞泉院に而御祈禱被仰付、御札等被進。今日未刻御塞、直に御卒去也。依之翌廿一日御用番に御屆、養父方伯母之忌服、忌二十日正月廿日より二月十日迄、服九十日

正月廿日より四月廿一日迄、右松平伊勢守妻昨夜中致死去候に付、忌服如此之旨被仰達。右に付藝州に御大小將岩田勘次郎早打に而被遣。御法號寶仙院殿。廿五日御出棺、青松寺に被爲移、其節大炊御使に被遣。二月八日於同寺、從此方樣も御茶湯有之。御用主付御馬廻頭後藤瀨兵衞、御用人堀與一左衞門。

廿五日、御朦中御尋上使御奏者番阿部飛驒守殿御出、御名代前田大和守殿諸事御勤。御作法前々之通。

廿七日、從江戸之早飛脚今日金澤に到着。右櫻田御前樣御卒去之儀告來。依而頭分以上、月番年寄中宅に爲伺御機嫌相勤。來月四日迄日數七日普請遠慮、不押立普請者三日遠慮、諸殺生二月十日迄遠慮。

廿八日、御朦中故於江戸着服之儀如何可有之哉と、御家老中より伺有之候處、梅園院樣・泰眞

院様御逝去之節は、常服之由被申上候處、松雲院様御代之儀も御尋之處、とくと相知不申。其段被申上候處、向後者御忌之御輕重に不依、御朦中は嘉節・朔望常服に相心得可申旨被仰出。其段御家老中にも被仰出、今日二月朔日も常服之事。

〔大野木克寛日記〕

伊勢守様御前様と中將様御續兩様也。實御妹、只今に而は御養方御をば、いづれに而も二十日之御忌、來月十日迄也。享保十七年壬子四月十二日於東都御出生、御生母鈴木氏女。元文元年御縁組相極、寛保元年四月廿二日御婚禮、于時御年十歳。今年十九歳に被爲成。誠以御凶變奉恐入所也。

二月朔日。前田重熙、徳川家重の初老を祝して物を献る。

〔大野木克寛日記〕

二月十五日、公方様今年四十歳に被爲成御賀御祝儀、當月朔日夫々御進献之由。其御面々に者、御三家様・中將様、并薩摩中將殿（大隅守、當時者御隱居。）・仙臺中將殿（宗村）・會津公（少將容貞）・讃岐侯（少將頼泰）・彦根侯（中將直定）・松平於義丸殿（越前福井）・姫路侯（酒井雅樂頭忠知）、此御面々に候由從江戸申來候。

二月五日。金澤觀音山崩壞す。

〔大野木克寛日記〕

二月五日、雨。今日晝過、長谷觀音院坂下藥師堂之邊後の山欠崩落、小家四・五軒潰申候。人あやまちは無之候。因之町奉行等夫々參出、彼是下知を加、潰家掘出し候由。

二月十日。郡奉行等、能美郡今江村源助がその女を嫁せしむる際不都合ありたるを以て十村の職を褫奪すべきことを議す。

〔改作方雜留〕

能美郡無組御扶持人十村

今江村　源助

右源助儀、大聖寺御領一向宗本善寺ゟ去年九月娘差遣候節、過分之仕形に御座候由、各御聞及に付、舊臘私共ゟ樣子承合候樣に被仰聞。依是承合候處、爾与相知不申候に付、彌承合追而申聞候樣申渡候處、未陰聞役之者共より不申聞候內、及月迫申候。春ゟ越候而者事延々に相成申に付、先風聞之趣を以追込可被仰付旨私共ゟ被仰聞、人支配之方に付御郡奉行より申渡、追込に御申付被成候。源助儀、去春本善寺へ娘緣組仕度旨、私共迄申聞候得共、元來十村等役人之儀者、一向寺・町人と養子・緣組取組不申樣、前々より申渡置申候。其上御領違之儀に付、猶更難承屆旨申渡置候處、左樣候はゞ、右緣組取持人願勝寺儀者、高方に而九藏与申百姓分に御座候間、九藏与申名目に而、娘願勝寺養女に相願申候。最初より九藏に爲取申儀

九藏は願勝寺が田高を所有する百姓としての假名なり

に御座候得ば、其分にも奉存候得共、本善寺ゟ縁組之儀主意に付、是以難承届旨再往申聞候處、段々無據趣申立、達而相願申候。依是不得止事、か樣之類前々より口達を以承置候儀も折々は有之候に付、其例を以右九藏ゟ養女之願口達を以承置申候。右之趣に付、表立承届候儀に者無之候故、娘願勝寺ゟ爲取、追而願勝寺より本善寺へ遣候共、一年茂立候而萬端穩便に相心得可申旨再三申渡候。然處去年九月本善寺へ嫁娶仕、出立之時分願勝寺へ爲立寄申迄に而、始終源助手前より指遣候段、陰聞役之者共茂人々其通申聞、其上從者も大勢に而、帶刀之者も指添、諸事花麗之躰各御聞及之通御座候。右源助仕形不届に奉存候。其上行跡等も不宜躰承及申候。か樣之者役儀仰付置候而は、惣樣御締方に不可然候間、役儀被指除、御扶持高被召上候樣に与詮議仕候、以上。

午二月十日　　九　人

前田・小堀・稻垣殿

九人は郡奉行なり

二月十四日。前田重熙老臣に書を與へて士風の荒怠を戒め匡救の急を諭す。

〔袖裏雜記〕

次第春暖相成候。彌無恙被在之珍重存候。手前所勞日々得快氣候條可心易候。

一、家中一統困窮之上、去年已來別而指支申由承候。先達而申述候如く、從先代被申渡趣急度相守、儉約專に心懸艱難に相くらし候はゞ、ヶ程には有之間敷ところ、表向は質素に相見候族も、內々之驕奢て不相止、結句以前よりは遊樂に長じ候段、言語道斷に候。然るに、頭たる者之心得肝要なるは此時に候處、一圓其氣色不相見、組・支配之儀踈役之段、沙汰之限に候。組・支配之者善事をも敢て不賞、又惡敷者猶以强て不懲故、偶有志之輩も皆當世之風俗に蔽はれ、よき事は無之候。此分に捨置候ては、畢竟士風之衰に可罷成、國家太儀不可過之候。最早當時さへ、心外之行狀間々有之躰に候。追而は士中急度令穿鑿、就中亂行之輩は嚴敷可申付存念に候。然共皆以從下起り候風俗のみとも不被存候。諸士已下多く頭・支配人を目當に仕候處、如只今頭役人行狀不熟なるに比候ては、未一統之風儀者左程みだれ不申と存候。兎角上立候者の覺悟より、諸士風儀善惡とも推移可申候。此時節各心得大切之事存候間、旦暮被致思慮、仕置方之儀可被出情候。去秋も諸士之儀頭役人に可被申談旨、前田兵部罷歸候節申遣候。猶又裁許等閑に無之樣に、組頭其外諸役人へも寄々可被申聞置候。尤各組中之儀無油斷可被相心得候。

一、右如申述候、家中一統困窮、當時相應取續候者は至て少く、大半可及極難躰に相聞候。右困窮之基は、前條に如申不覺悟之至に候へども、此分にては一兩年中必至与差詰り、日用を

も辨兼如申可有之候。元來左程之難澁におよび不申內可相救ところ、其期に至候ては可爲國家之恥辱候。然上は只今之內爲續、銀土藏銀之內少々差出、頭々ゟ相渡夫々貸渡、當年中にも先急難相救申度存念に候。此儀彌可然との示談に候はゞ、渡方等之儀とくと詮議候て可被申聞候。若各存寄有之、不可然趣有之はゞ、此外可准之助力之品被致僉議可被申聞候。兎角ヶ樣之沙汰も、今年より來春迄之內と存候。其期を過候ては、假令何樣之助力申付候とも行屆不申、取續之筋一向有之間敷と、手前存事に候。何れにも只今之內、續銀にても不相渡候ては難叶候。右助力申付候上は、家中儉約之儀猶又急度申渡、其上にも不心得之者は曲事に可申付候。此上之仕置、色々存寄も有之候へ共、此儀者右之一件僉議一決之上可及示談候。以前も申聞候通り、此方餘力も候はゞ此節急度可相救ところ、今程難澁各存知之通故、心外に相過候段可顧察候。

一、丹後守へ申入候。右續銀之儀尤時節柄に候へども、士中困窮之儀は政事之眼目に候故、不顧其儀右之存寄に候。彌可然候はゞ、員數渡方等之儀詮議候て可被申聞候。若此儀不可然子細も候はゞ、前條に如申述候可准之助力之品、同席中示談之上可被申聞候。

一、當時相勤罷在候頭奉行之內——

一、士中博奕之沙汰粗及風聞候。よも眞には有之間敷候へども、何樣似寄たる集會も依有之

令沙汰候哉いぶかしゝ。且又元來停止に候へども、伎藝に類し候者も稀に令徘徊候哉、是以浮說承候。前條に心外之行狀とゝのへ候は此事に候。是等之儀若於實事は、國政四民之禍不過之候。多半可爲虛說候へども、件之風說起候も皆士風不宜故に候。如此時節、頭役人少時茂油斷候ては仕置立不申候。惣而頭共之行狀、一統之鏡にも如相成不心得候ては非職分候。然るに外邊へ罷出節は麁服を着し、平生者却而美服餘情を構申樣之儀、皆其職を取失に似たる事に候。夫故諸士之所業甚柔弱にのみ相成、以の外に候。ヶ樣之大切之折節に候條、各にも能々被相心得、萬般厚重に可被沙汰候。我等覺悟猶以大切之儀に存候。仕置方之儀、及平生之行狀被存寄儀は、每々も申候如く押かへし可預評諍候。幾重も賴入事に候。將又各心得之儀聊存寄候趣次に申述候。

一、各鷹數寄被申儀、政事之暇野邊へも放鷹候へば、何より以保養にも可相成、一段珍重候。併數度被罷越儀は、用捨も有之可然存候。其謂は今程鷹持間敷小祿之者、借鷹と名付、實は所持候て野行之族も相聞、且人持幷其已下高知之人々も、分限不應鷹數所持之人々も有之躰、此時節別而不都合之事候。畢竟勝手無謂困窮およびしも、か樣之事より起り申儀と存候。是以各每度放鷹も候へば、自從下學び候樣成行候間、其心得有之樣にと存候。家老役・若年寄之儀も同事に候間、此儀各より可被申談候。尤ヶ樣に申候へばとて、一向被指止儀は無用に候。

折々は被罷越樣に致度儀に候。勿論鷹にも不限、諸事如此意味可有之間、其段可有顧察候。是等之儀存寄之事故、任序申入候。か樣之儀申入候も、若年之我等其恐不少候へども、存寄を殘候儀は隔意ヶ間敷、却て心外候故、不得已申入候。未申達度儀數多に候へども、病中長筆難叶餘意書洩候、以上。

二月十四日　　　　中將重煕判

前田對馬守殿
奥村丹後守殿
本多安房守殿

二月廿七日。前田重煕の病癒え床拂を行ふ。

〔政隣記〕

二月十九日、御痛御宜方に付、御下邸に御行歩に御出被成度旨、御用番に今朝御伺之處、御勝手次第之旨同夕方御指圖有之。三月二日・四月十八日にも爲御行歩御下屋敷に被爲入。

一、同月廿七日御痛御宜御床被爲拂、御一門様より御祝儀物被進。

二月晦日。宿方の馬借困難するを以て家中の諸士等にその非行を戒む。

是月は大盡なり

〔日曆〕

私共支配之郡宿方馬借、近年商人荷物致減少、傳馬荷物次第に多罷成、馬借持共幷宿方荷問屋、必至与潤色無御座難儀仕候。依之馬借おのづから致不足、或弱馬に成、宿方御用勤兼申躰に罷成候。元文三年に茂宿方之儀、闘屋佐左衛門・林源太左衛門相勤候節及御斷、一統被仰觸候。馬借困窮仕候に付、御貸米奉願、御貸渡被下為取續、宿方御定之馬數丈夫に指立候處、近年宿方荷物之様子猥に罷成、宿方に馬借難成候。此通に御座候而は、次第に馬借減少可仕旨奉存候間、左に相調一統被仰度奉存候。

一、近年加・越・能所々御藏米、引免御引足米・御下行米・侍中飯米等藏出之時分、侍中假名を以傳馬に而駄數多差出、此内金澤町人共方へ差屆候様に申渡、搗屋・酒屋或は米問屋等ゟ過半為差屆候故、町人共侍中之假名を以、商米に附寄候哉紛敷御座候。是以後侍中飯米に而茂、町人方に直々差屆おろし申米は、駄賃商人荷物同事に為請取可申候。尤紛敷米は、駄數茂其日馬在合次第為屆可申候。且又大豆・小豆等茂、右同事に御座候。近年馬飼料之大豆幷米等茂、身上不相應之員數一度に為附寄、直に町人共方ゟおろさせ申候。紛敷茂御座候故、宿方馬借及難儀候段、毎度相斷候得共、とくと相しらべ候様に申渡置候處、一兩年別而米・大豆駄賃多罷成申候。依之商荷一向に致減少、馬借おとろへ申候。

一、小松より疊表・莚籠等、御作事方御用与申差出、金澤荒物屋共方ゟ爲差屆申候。此儀茂御作事方御用町人共請負申儀に候得ば、商荷物之駄賃相渡可申筈に御座候所、傳馬に而取寄申候。向後請負申儀に御座候はゞ、御作事所ゟ附屆申分は、傳馬駄賃請負方ゟ直々爲附屆申分は、商荷之駄賃爲請取可申候。

一、赤板類・木綿繰綿・菜種・煎茶等によらず、侍中或は寺庵之名を以、町人裁許に而傳馬を取、金澤町人共方ゟ爲附寄申候。惣而何品によらず、侍中・寺方等之名に而、町人共方ゟ爲附屆申分は勿論、寺方ゟ直々爲附屆候共、不相應之品或は過分之荷物は、紛敷儀に御座候間、商荷之駄賃爲請取可申候。

一、近年小松炭商致減少、傳馬炭多御座候樣子承候所、小松町人共同所侍中或は足輕共侍中家來之名判之送りを添、金澤侍中ゟ差屆申候。先年与違、毎日數十駄之儀に而、馬數不足致候得ば、人足持馬致候得共、中々差屆申儀難成程に候故、時節により宿方に而一夜茂留申儀も有之候。毎日過分之儀、傳馬指問人足等も出、以之外難儀仕候。然處に炭目不足在之旨に而、馬方は勿論、馬肝煎迄度々其屋敷ゟ呼寄、彼是及詮議申に付、馬肝煎は宿役茂指問、馬方は馬借指問申候。炭之儀、外之荷物とは違、宿に而差おろし仕儀故くだけ、薄き俵より拔荷申に付、四・五百目位之儀は目立不申故、宿々繼來申儀御座候。侍中身上不相應過分之傳馬

に而炭爲附、商荷致減少、宿方難儀仕候上、又候哉少々目不足有之候得ば、毎度馬肝煎・馬方等呼寄、彌及難儀申候。向後侍中ゟ附寄申炭には、急度裁領指添不申候者、馬有次第爲差届、尤目不足在之、馬肝煎等呼來り候共、罷越申間敷旨申付置候。

一、金澤より京都中使所荷物、往來六度、先年より一度に本荷二駄、輕尻一疋宛出申所、近年に一度に五六駄・二十駄程宛附通申候。且又菜種屋・太物問屋等より爲登銀之荷物に、侍中之指札に而、傳馬に致罷通候由に御座候。依之先年より有來り候爲登銀之荷物、近年一駄茂無之、其上傳馬に御定之貫目より以之外重荷附出之、馬借共事之外致迷惑候間、中使荷物等向後重荷附出不申、爲登銀に侍中之指札不仕様に、急度被仰渡候様に仕度奉存候。此上重荷、或は爲登銀に侍中之名札指通候者、傳馬に而は附通不申様に申渡置候。

一、能州・越中より鹽鱈・鹽鰤等侍中ゟ取寄申候所、身上柄よりは過分之駄數差寄申人々茂在之。か様之儀馬借持共及難儀申候。是等品茂先年与は違、近年過分に成申候。向後侍中取寄申儀に候者、急度裁領指添候様に仕度候。無左藏宿等より指札迄に而附越申分、商荷駄賃爲請取可申候。裁領に茂、町人或は紛敷疑敷荷物を宿におろし置、及斷候様に申渡、末々とくと爲承合村屆可申候。

一、能美郡・石川郡山方に而出來之たばこ、鶴來村等より附越候儀茂、右同様に御座候。此外

右に準申品々有之、疑數荷物之分、是又宿々に指置、及斷候樣に可申渡置候、以上。

庚午二月晦日

岡田一平太

永原半左衞門

前田對馬守殿

當國御郡奉行支配之郡宿方馬借、近年商人荷物致減少、傳馬荷物次第に多罷成、馬借持共并宿荷問屋、必至与致難儀候由。依之御郡奉行書附指出に付、相達之候條、御郡方其外侍中之儀茂、心得違無之樣夫々可被申談候、以上。

二月晦日

前田對馬守

前田式部殿

小堀牛右衞門殿

稻垣三郎兵衞殿

三月二日。前田重煕平尾邸に散策す。

〔大野木克寛日記〕

三月朔日、中將樣御痛段々御快然。因之平尾御下屋敷に被成御座、御行歩被遊度之旨御願候處、御願之通被仰出候由。昨日外御用に而御飛脚到來、其御便に申來候由。誠以恐悦至極一

先月は二月

統奉賀所也。

九日、中將樣御痛御快然に付、先月廿七日平尾御屋敷江可被成御座旨御沙汰候處、雨天に付而御延引之由江戸より申來。

十四日、中將樣御痛段々御快然、先月十九日御行歩御願、但御屆迄之御樣子歟、卽日相濟申候。其後廿七日御出御沙汰に候處、雨天に而御延引、當二日快晴風も無御座、四半時頃より御下屋敷江被成御座、暮過本鄕之御屋形江御歸被遊候。尤御往來御乘輿、平尾者御庭へ度々御出、又者御乘輿も御用に而、御順見被遊候由御沙汰に御座候。逐日御快然恐悅之御儀、御同然奉存候。當月御登城之御沙汰御座候。然共當十五日者勅答之御時節、一統被出仕相止可申候。廿八日も今月者御出仕無之月に御座候由。左候へ者四月朔日御登城可被遊候与御沙汰に御座候。御登城已後春・秋之内御歸藩と申慣候。

三月十九日。大聖寺侯前田利道參觀の途次金澤に着す。

〔大野木克寛日記〕

三月十九日、壹岐守樣御來府に付、今曉御當地へ到着、今日御寺御參詣。夫より御旅館へ御歸。追付御發出之由。

四月二日。前田重熙の病癒えたるを以て隔日御居間書院に政務を見る。

〔政隣記〕
四月二日。御居間書院に御出、年寄中等御前に罷出、御用御直に被聞召候段、此間仰出。御氣色いまだ御勝不被遊故、今日より當分隔日御出、五月七日よりは毎日御出也。
但、此間年寄中等御前に被出候節、脇指取被出候。是以後帯候而被出候樣被仰出、若年寄にも其段申達。丹後守被申候は、一統罷出候節之儀与奉心得候。一人宛罷出候節も帯可申哉与被申候に付、御用に付而一人被出候節々も帯可被申事と申入、其段達御聽。
此條は御歸國之上に被仰出こ相見え候へ共、本書之儘爰に記置。可考。

四月二十日。徳川家光の百回忌法會を金澤神護寺に執行す。

〔大野木克寛日記〕
四月二十日、今日於天台佛閣北叡山神護寺、大猷院樣百回御忌御法會御執行、一宗之僧徒等集來令勤行。惣御奉行安房守、寺社奉行生駒內膳を初、役人中曉天より令參出、御法會中相詰。御法會訖而、御導師相勤候西養寺初役僧御被物被下。

〔政隣記〕
四月廿日大猷院樣百回御忌に付、於日光山御法事有之、諸國より御名代御使者出。從此方樣も御服中に候得共、御靈屋之儀無御構旨、堀田相模守殿御指圖に付、從金澤玉井市正罷越、

從江戸は聞番見習成田長太夫出向候。公儀御名代は松平讃岐守殿、高家より前田信濃守殿御越、如前々神護寺金澤に而も今日御法事有之。

四月廿五日。前田重熙病癒えたるを以て閣老を歴訪す。

〔大野木克寛日記〕

五月四日、先月廿五日中將樣御痛御平癒に付、御老中方江被成御座、御歸館已後彌御快然之旨、御飛脚を以申來候由。誠以恐悦至極之御儀也。猶追而可記。右廿五日已前、平尾之御邸江も被成御座候由御沙汰あり。

中將樣御痛逐日御平癒被遊、今日御老中方江御勤御出被遊候。右御出之時分、頭分以上御目通伺公の樣に大炊殿被仰渡、御出之節御廊下通伺公、久々に而御目通江罷出、殊御意も御座候而難有仕合奉存候。

四月廿五日、右紙面者或頭分中飛脚に傳附到來紙面寫也。

五月十五日。前田重熙病後初めて登營し德川家重に謁す。

〔政隣記〕

一、五月十五日、前日御老中方御奉書を以、明日御病後御禮可被仰上候、箱肴可被指上旨申來に付、則今十五日五時御登城、於御白書院御禮被仰上、御懇之被蒙上意、西御丸へも御登、

御老中方御勤、御歸之上御家老召、御城之御樣子被仰聞、頭分ゟも申聞候樣御意。則御弘有之。金澤ゟ以中飛脚年寄中等ゟ御書被成下、廿三日到來。廿四日頭分以上ゟ於御城御弘之趣、月番安房守演述。依而爲御祝儀、安房守宅ゟ各參出。右爲御祝儀、在江戸御家老中兩人、强而願御肴献上。

〔大野木克寛日記〕

五月廿四日、今日因召頭分以上辰刻より段々登城。巳上刻御廣間に各列居、老中出座。對馬守不參。丹後守列より進出、覺書を以御意之趣演述之。

中將樣倍御快然被成御座、當十四日御老中方御連名之御奉書到來、御病後之御禮可被仰上旨に而、翌十五日御登城被成候處、於御白書院御首尾克御禮被仰上、其上御懇之被爲蒙上意、難有御仕合被思召候。此段何茂被可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候。

五月十八日。前田重熙江戸より使を發して櫻町上皇の崩御を奉悼す。

〔政隣記〕

四月廿七日、仙洞樣去廿三日崩御に付、江戸者今日より五月二日迄普請・鳴物御停止。廿八日は惣出仕に候得共、中將樣には御病後御禮不濟候故、御用番ゟ御尋之處不及御出旨御指圖有之。京都ゟ之御使御持筒頭半田圭鈴ゟ被仰付、五月十八日發六月九日歸着。

申來は金澤へなり

〔遠田日記〕

五月五日終日曇。先月廿三日仙洞御所崩御之旨、從江戸昨四日申來り候條、昨四日より當八日迄、日數五日普請・鳴物遠慮之由、安房守殿より申來候事。

五月廿二日。前田重熙幕醫竹田長春院を招きて之を饗す。

〔大野木克寛日記〕

六月九日、公儀御奥醫師竹田長春院御藥調進被致、段々御快然被爲成候に付、當廿二日長春院幷御息季全御招請、其外御醫師衆・御取持衆御出に御座候。長春院御盃事之上、御脇指（相州秋廣、代金六十枚。）御拵者鮫白。目貫（印籠巾着、金銀色繪。）縁皮。小柄（金くりから龍。）鍔（無地赤銅。）各折紙極有之候御道具被遣候。御表向迄之御療治、今般之大功御醫師者大庭探元に御座候と取沙汰仕候。夫故先達而御承知之通、御醫者夫々拜領物被仰付候時分、探元者白銀三十枚・御袷羽織被下候。其外十枚或五枚・三枚・二枚、御羽織相添被下候。

五月廿六日。前田重熙今年初秋を以て就封の暇を賜はらんことを請ふ。

〔政隣記〕

五月廿六日、御國許江御暇御願書、御用番堀田相模守殿江久世忠右衞門殿を以御差出之處、首尾能御受取。御書付左之通、幷御付札之趣も左之通、六月五日忠右衞門殿御持參。

右金澤に中飛脚御書に而被仰下、六月十六日諸頭以上に御城に而御弘。爲御祝儀御用番御宅に參出。
中將樣去春御痛に付、御國許に之御暇不被仰出內御參勤に相向、久々御滯府に付、今年御歸國被成御仕置被仰付度、且御保養御湯治をも被成度、旁先規之通、當七月中御暇被仰出候樣被成度旨之御願書付也。
御付札。願之通當年七月中御暇被下に而可有之候。尤向後共此通可被相心得候。且又國許之溫泉に入湯之儀者、可爲勝手次第候。

六月八日。天德院の靈廟に前田宗辰の畫像を揭ぐ。

〔政隣記〕
六月八日、金澤天德院御靈屋に大應院樣御影掛る。諸士拜參之人々拜之。從淨珠院樣被上之。筆者、御馬廻組渡邊與左衞門也。
〔大野木克寛日記〕
六月十二日、兩御寺拜參、兼而者今日御廟拜參之心得に候處、雨天に付不能其儀。天德院大應院樣御堂拜參、御影御位牌之後へ被爲掛。此儀去々年已來淨珠院樣爲御沙汰此儀あり。右之筆者彼是御撰候處、上坂平兵衞妹聟渡邊與左衞門御馬廻組、祿七百石。幼年より書を好、甚工なり。仍

式舞臺は敷舞臺なり

而入稱之。右與左衞門に從淨珠院樣被仰付畫之と云々。御影者正四位上中將御束帶之畫、右御裝束彩色段々被遂御詮議と云々。

七月二日。前田重熙病氣平癒を祝し能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

一、七月二日御本復爲御祝、預玄院樣・淨珠院樣御招請、御式舞臺に而御能被仰付。備後守樣にも御押懸之趣に而被爲入。御家老中・御近習頭・御近習平士・御右筆・高桑五兵衞・由美彌次郎・御醫師、且年寄女中等にも御料理被下之。表向御歩並以上望之者は見物被仰付、無息之子共へも見物被仰付。此日寶生大夫、望月勤之。

七月廿七日。前田重熙就封の暇を受く。

〔大野木克寛日記〕

七月廿七日、爲上使以老中佐倉侍從堀田正亮、本藩に之御暇被命、白銀百枚・卷物三十卷御拜領之。從大御所公・亞相公爲上使、以老中河越侍從秋元涼朝、卷物御拜領也。

七月廿八日。前田重熙登營して就封の辭見す。

〔大野木克寛日記〕

七月廿八日御登城、於御黒書院被遂拜謁、御懇之上意、其上御鷹・御馬御拜領之。前田大炊孝昌・西尾隼人克明御供被召具候處、是又如例奉拜謁、御卷物拜領焉と云々。

八月十一日。前田重熙江戸を發して歸國の途に上る。

〔政隣記〕

八月十一日、江戸御發駕五時過、御作法如前々、前田大炊孝昌・西尾隼人克明御供。

〔日記頭書〕

八月十一日江戸御發駕、同十八日糸魚川滿水に付半日御逗留、境之御晝休へ暮六時過御着、泊之御泊り宿へ四時頃御着。

八月十三日。金澤に於て御近習頭武田杢左衞門等四人指扣を命ぜらる。

〔大野木克寛日記〕

八月十三日、御近習頭武田杢左衞門(御大小将組頭)・丹羽澤右衞門(組頭並)・牧彦左衞門(同上)・和田源左衞門(御徒頭)四人、御用番丹後守邸江被召呼、對馬守列座、御横目出座。右面々御近習被指除、急度遠慮可仕旨被仰出候旨、丹後守言達之由。但右之内杢左衞門儀者、頃日氣滯役引罷在、丹後守邸江不罷出候に付、丹後守・御横目同道、杢左衞門宅江參入、御旨之趣言達之由に候。其品尤不相知。昨日と哉らん、江戸より中飛脚到來之由。右之儀申來候御飛脚歟と申慣候。大變と申

沙汰に候。

十四日、今般武田杢左衛門等四人之輩、御勘發甚。尤其品者不相知。被仰渡者、思召有之、何茂本役幷御近習共に御指除、急度指扣可罷在旨、被仰渡候由に候。

八月十八日。珠洲郡小木村の百姓牛舌判金を發掘す。

〔御年譜〕

一、八月十八日能州珠洲郡小木村百姓彦助末子七与申者、村之祭禮前に付道作り候故、小高き所を鍬に而掘候所、牛の舌金四枚掘候所、不殘槌目有之、上の字一字充有之。小振成金三十六匁有之由。右之趣二十六日十村より御算用場へ指出、入御覽被返下候。通用金にして五十兩計の由。

牛舌金は藩初通用せし判金

八月廿二日。前田重熙金澤に着す。

〔大野木克寛日記〕

八月廿二日、今日中將樣長途無御恙、昨夜御泊津幡驛より、巳刻倍御機嫌克御馬上に而御着城、誠以奉恭悅至極所也。先達而御用番丹州より觸文に而御着御早候はゞ、卽日人持・頭分登城可窺御機嫌旨也。依而各登城、於御式臺謁御奏者番退出。都而御着城御待請之式如恒例と云々。御歸國御禮御使成瀨內藏介、御着城已前より登城。御着已後御前に被爲召、且拜領物

等例之通。彼是御用相濟、從御城直に揚韆と云々。

〔政隣記〕

八月廿二日、昨夜津幡御泊、今朝六時過御立、四時御歸城、御作法如前々。江戸ゟ御禮之御使成瀬内藏助、御目見等如前々。組頭以下二御丸詰番、此前之通御使番七人有之候得共、不及泊番旨被仰出、四時より八時迄二人、八時より七半迄一人相詰候等。

八月廿三日。先に徳川家光の百回忌法會を擧げたるを以て赦を行ふ。

〔大野木克寛日記〕

八月廿七日、御着城翌廿三日より御居間書院御出座、御政務被聞召候。廿三日者御赦之儀被仰出、夫々出牢之者有之候由。是者大猷院様御法會之時分之御赦歟。右之外御算用場奉行廿三日御前ゟ被召出、其以後毎度被爲召候由也。

八月。大槻朝元の母惠照院病歿す。

〔大野木克寛日記〕

八月九日、大槻内藏允老母、去々年已來禁牢仕罷有候處、五・六日已前牢死仕、死體於公事場鹽漬に申付。右老母菩提所寺ゟ被相渡候旨申慣候。

九月四日。前田重煕、高岡瑞龍寺にある前田利長の墓に年中四次代參を派すべきことを定む。

〔御年譜〕

一、九月四日、向後高岡御代參前田氏人持、正・五・九月幷盆中可被遣旨被仰出。但只今迄者正月与盆中也。

前田氏は人持組の中前田氏を冒すものをいふ

九月十四日。前田重煕諸士の窮乏を救ふ方法を講ぜしむ。

〔袖裏雜記〕

家中一統困窮に助力之儀、當春大炊被申聞申越候通に候。然共極難之人々者、中々少分之儀に而は行届間敷存候。夫に付今程町方借銀幷上納とも爲書上、一歩之除知申付、最前之除知とも二歩に申付べく候。左候はゞ當分難儀之族可有之候間、右之通申付候上、土藏銀之内を以少々續銀相渡候はゞ可然存候。右之上は一統彌質素之覺悟に相極、取つゞき候樣無之候ては不叶儀に候間、此制度可被致工夫候。將亦此方勝手難澁に付、家中知行借免之儀各數度被申聞候へども、右申述候如く、何も困窮至極之儀、此節急度助成申付候へ共、此方難澁に付不任意候間、助成行届候程者難計候ても、右之通家中借銀書上、除知申渡、續銀可相渡存寄

に候。

一、先日も對州江申聞候通、家中風俗連々不宜、不行儀之者多く、第一勝手放埒に取みだし候躰に候。此仕置ゆるかせにては行届間敷存候。愼儉約等之儀、頭々以來嚴重に裁許候樣、追而諸頭等も以紙面尙亦相示、其上不相愼輩者、應輕重無用捨可及裁許外無之存候。何れも譜代之人々、急度仕置等に申付候儀甚心外之至に候へども、不覺悟之者多く候ては、次第士風之衰に可成候間、一人を懲萬人之助に相成候利可有之候。彌各思慮いたされ、存寄可被申聞候。此儀江戶發足前、酒井左衞門尉殿江無急度申達置候趣も有之候。委曲對州江申含候。

一、諸頭等江申渡候紙面、只今下書致し置候。追而書改め可差越候。

一、前段に申候家中借銀書上之儀、若風聞におよび候はゞ町方噪動せしめ、家中當然に難儀之族も可有之候間、表立申渡候迄者堅く可被隱密候。於各席も隨分濟に可被遂熟談候、以上。

九月十四日　　　　中　　將

前田對馬守殿

奧村丹後守殿

本多安房守殿

前田大炊殿

〔袖裏雜記〕

家中續銀返上之儀、今般之除知之外急に取立候ては、却而可及難儀候間、今般之除知相濟候以後、以年譜返上之趣可然存候。右之通に候へば、除知之年限も短く、返上之筋も宜相立候。各替存寄無之候はゞ、彌此通可然候、以上。

九月廿日　　中將

前田對馬守殿
奥村丹後守殿
本多安房守殿
前田大炊殿

十月廿一日。前田重熙初めて金澤の郊外に放鷹す。

〔政隣記〕

十月廿一日、御代初而大豆田筋に御放鷹、九半時過御出。御拳に而小鳧一・鷺一、御異風今村恒右衛門雁一・鳥一打。但御射手・御異風中り善惡無構、向後御供可被召連旨被仰出。十一月朔日・四日にも御放鷹有之。

〔謙德公年表〕

四年十一月は三年十月の誤

今村平兵衛の事は前文に見えず

一、寛延四年十一月廿一日初而豊前より大豆田筋ゟ御放鷹、暮頃七ッ屋口より御歸城。御拳小鴨一大鷹内藤作進預り。・弟鷹一隼松宮清太夫預り。舊例之通御射手・御異風小頭添御供に被召連候。御異風今村恒右衛門・今村平兵衛也。菱喰一恒右衛門打之、鳥一平兵衛打之。御餌柄淨珠院樣ゟ小鴨、預玄院樣ゟ弟鷹、西尾兵庫ゟ菱喰、富永數馬ゟ鳥被下之と云。先是御鷹野之節御供醫師、町端に殘り居申候處、野邊共に可被召連旨被仰渡候處、大庭探元・佐々伯順不行歩に付野行御斷申上候處、駕籠に乘用仕、細袴着用可仕旨被仰出候。

十月廿八日。前田重熙家中の士の風儀を改むべきことを諭す。

〔御親翰幷御請之寫〕

一、寛延三年十月二十八日於松之間、御年寄衆御列座、御家中之人々行狀不愼之儀に付被仰出之趣、御書立を以諸頭中一統被申渡候。則御書立御渡候事。

家中之人々風儀不宜、其内にも就中不覺悟之輩者、常々之所業遊樂を專とし、參會等之節亂行之仕形茂有之躰聞及候。如斯に候而は、雖爲譜代舊功之家筋、不得已加嚴制候樣可相成儀、甚以心外に候。依是此度改而申渡候間、是以後之儀急度相愼可申候。當時可相糺不法之者も先無貪着、一統如此申渡候條、此旨令承知、自分之儀速可相改事。

附、無息之輩に茂不行狀之者聞及候。是以父兄之不覺より如此候間、人々子弟成立肝要に

可相心得事。
一、儉約之儀度々雖申渡、今以しかと不致得心、内外不都合之族茂相聞、不了簡之至候。是以後急度相守、萬事加勘辨、勝手取つゞき候樣可相心得事。
右之趣人々能令得心候樣可申聞候。組之内支配有之輩ゟも不相洩樣可申談候。畢竟かやうに風儀不宜儀は、常々頭共裁許不行屆故に候間、隨分無油斷致指引、不心得之輩者幾度茂加異見、其上に茂於不致承引者速可達聽候。自然乍存等閑にいたし置候者、其頭共に可爲越度候。頭役申付置候面々之儀者、猶更人々身持等萬端相愼、勿論先代より被申渡置候趣、彌無違失急度可相守者也。

庚午十月二十八日

右諸頭中一列に拜見被仰付、各何茂追付御前被爲召筈に候間、左樣に可相心得旨對馬守殿被仰聞、各其處に罷在候處、御横目中指引有之列相立、其並々五・七人宛列居、終而奥御書院ゟ御出、右一列に御前ゟ被爲召御意之趣。
以別紙年寄共申渡候。家中之人々今以亂行之趣不相止候。何茂譜代之者共に候。無是非曲事に申付候事、近頃心外に存候。其方共度々加異見、人々得心いたし候樣に可相心得候。
直に御意有之、座上より御請被仰渡之趣謹而畏、組・支配之人々ゟ嚴重可申渡と御請申上、末

座より段々に退出、松之間江如元列居可仕旨御横目中指引。押付安房守殿被罷出、御親翰に候條何茂拜戴可仕旨御演說、一列に奉拜戴候。拜借仕寫取申度旨座上より相願候處、左候はゞ明日罷出可申旨對馬守殿被仰聞、則二十九日一列一人宛罷出、於矢天井間寫候事。

別紙を以尚更申聞候。何れ茂譜代之者共候處、其身不覺悟より行狀取みだし、依是曲事に申付候儀甚非本意候に付、當時不法之者どもに先令用捨、加樣に改而申渡候。此所人々能令得心、是以後之儀急度心付相改候樣精誠可申聞候。幷に勝手儉約之儀、無內外相守候樣可申渡候。且又頭・奉行人、組・支配之ため不惡樣可取計儀者勿論に候。然共組・支配之者共手前相尋、子細有之節無難に事濟候を詮と致し、有躰に不申聞候ては、甚政道之障に相成候條、此儀兼而可相心得候。但相尋品或は間違等に而、如在無之儀に候者、其分は可申聞候。左樣之趣に茂無之、ひたすら組・支配の惡事を取つくろひ候者、其頭共に可爲不屆事。

庚午十月二十八日

右寫仕廻人々罷歸、追而日限相極、組・支配人宅江呼寄、今般被仰渡之趣、御年寄衆最初御渡之御書立寫を以嚴重に申渡、人々手前より御請取集め、頭々より御請紙面、人々江申渡候趣調差出候。

但、御直に御意之趣、幷に御親翰之趣者、頭々了簡を以其趣を嚴重に書立申渡。御親翰等

寫は尤組・支配ゟ者爲見不申候事。

逝去は六日なり
森岡は盛岡
信濃守は弓
姫の夫南部
利雄

十一月六日。前田吉德の養女弓姫歿す。

〔政隣記〕

十一月十一日夜、廣尾御前樣今月五日御產後御滯之由申來、御大小將組御近習番嶺內左衞門江戶ゟ早打御使被仰渡候處、御卒去之由申來、右相止。大膳大夫樣ゟ御悔御使御馬廻組永原是太夫、奥州森岡信濃守樣ゟ之御悔御使御大小將安達猪太郎被遣之。兩人共常步よりは少詰候樣被仰渡、普請三日・鳴物七日・殺生廿五日迄遠慮。公儀御屆者御養父方御をば之御服忌、御忌二十日等云々。十三日爲伺御機嫌頭分以上登城。御法號玉臺院殿。芝金地院に而從此方樣茂御法事有之、御代香御使御先手村木工右衞門但組頭は指合候故也。被指遣。

〔大野木克寬日記〕

十一月二十五日、廣尾御前樣御卒去御朦忌御尋之御奉書到來。爲御禮御使御馬廻組頭稻垣三郎兵衞被仰渡、明廿六日發出。今日迄御忌故明日首途。

十一月廿五日。堀久五郎等在江戶中非行ありたるを以て役儀を除き遠慮を命ぜらる。

〔大野木克寛日記〕

十一月十五日、堀久五郎・成田長太夫被仰渡之趣者、兩人共に勤方不應御意候に付、役儀御差除、御馬廻組に被仰付、遠慮可仕旨也。一說に者、在府中御用之由に而每度御門外、及夜陰罷歸候事數ヶ度。且又借金・買掛等夥敷候故、町人に對し非義之仕形も有之たるとの事。か樣之儀に而右之通被仰付候由申慣候。

十二月朔日。德川家重の使金澤に着して前田重煕に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月朔日宿繼御奉書を以御安否御尋、其上御鷹之鶴御拜領。右御禮使等如前々。

十二月十一日。金澤の城下に於て猪を捕獲す。

〔大野木克寛日記〕

十二月十一日、頃日猪徘徊、昨晝小立野與力町に而追廻し、伴八矢與力吉田勘右衞門留之候由。深雪故出申体に候。

十二月十二日。前田重煕自今放鷹を廢すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

正月は寶暦元年にして政隣記に記載の日附
斐姫入輿せずして寶暦四年二條宗基薨ず

十二月十二日、御在國中思召有之、先は御鷹野御出被遊間敷旨被仰出。

〔袖裏雜記〕

左之御覺書年寄中へも相達候樣被仰出候由、兵部・隼人・新兵衞・兵庫へ可申聞趣。

一、思召之趣有之に付、御在國中先は御鷹野に御出被遊間敷候。然上は御拜領之御鷹之外者、御用に無御座候付、御拂に被仰付候。御儉約之筋抔に而御鷹御拂等に被仰付候に而は無之、外に思召之趣有之如此被仰出候。此段各承知有之候樣にと被思召候事。

一、朝鮮鷹をも御拜領被成候儀、其上御當代御翕被成候鳥未被獻候間、鶴御翕被成被獻候思召に御座候。依是來春に至、能美郡鶴御鷹野に者御出可被遊候。若鶴御手に入不申候者、兎は時節も過可申候間、地廻に而梅首鷄にても御翕被成可被上思召に候。此段も兼而承知有之候樣にと被思召候。重而被仰出次第夫々可申談候事。

十一月廿五日。前田吉德の女斐姬二條宗基に緣組を許さる。

〔政隣記〕

正月九日、御國許之御叔母斐姬樣御緣組、二條右府樣へ被仰合度旨之御願書、舊臘十一日小笠原縫殿助殿を以、御用番松平右近將監へ爲被御指出置之處、同廿五日御願之通御名代備後守樣へ被仰渡。

正月は寶暦元年

申來は金澤へなり

十二月廿七日。富山侯前田利幸の江戸邸火を失す。

〔政隣記〕

正月九日、舊臘廿七日曉七半時、出雲守樣御廣式御乘物置所より出火、茅町兩頰百五十軒計池之端之方ゟ燒拔、御附御用人以下之下小屋も類燒、御附物頭並福田新左衞門御貸長屋は殘、朝四時頃鎭火。依之出雲守樣、廿九日迄三日御指扣。

出雲守樣御屋敷町屋之方は、從此方樣廿七日切に板圍被仰付、御附等御貸長屋類燒之人々、割場向枕小屋八筋、廣町御居宅之方ゟ懸仕切渡し、二枚開より往來有之。

右に付此方樣にも御屋敷步數內之事故、御扣可被成候哉与御用番左衞門尉樣迄御屆有之候處、廿七日暮過不及御扣旨申來候段、今日申來。

右に付福田新左衞門儀、今月十七日急度遠慮被仰付、翌二月廿九日御免許。是從出雲守樣御挨拶に依而也。

十二月廿八日。明年頭に於て藩侯に供奉する新番並に御步の綿衣を着することを定む。

〔政隣記〕

十二月廿八日、新番幷御歩來年頭御供裝束、尤綿衣着仕に而可有御座候。御宮御參詣之節者、御挾箱持等白丁着仕候間、右人々茂絹衣着用にも可有御座哉与伺之處、何れと申儀も無之候間、綿衣に而可有之旨御意之事。

寶曆元年

正月朔日。前田重煕金澤に於て諸大夫裝束の拜禮を受く。

〔政隣記〕

元日、諸大夫裝束之御禮被爲請候。御作法如御前格。於江戸御太刀御献上御使、御小將頭勝尾半左衞門勤之。

正月三日。前田重煕金澤寶圓寺に詣でゝ轉倒す。

〔政隣記〕

正月三日寶圓寺御參詣、山門にて御轉び可被成与被爲成候。此後御寺御參詣無之。

〔日記頭書〕

一、同三日寶圓寺御參詣。山門にて御ころび被成候。此後御寺御參詣無之。

正月十七日。前田重煕、中村佺安をして病を診せしむ。

〔政隣記〕

正月十七日、中將樣御診、中村侔安并町醫奥田宗安に今日被仰付。二月九日重而宗安に被仰付。

正月廿一日。進物裁許與力等私曲の嫌疑あるを以て指扣を命ぜらる。

禮錢は諸士の年頭に献上したるもの

〔政隣記〕

正月廿一日御進物裁許與力櫻井金左衛門・池森勝左衛門・高木庄太夫・神戸傳太夫指扣被仰付。御禮錢之内紛失之事に依而也。其後於公事場四人共御吟味有之、一門に御預之處、七月十一日庄太夫私曲有之に付御知行被召放、殘三人は一門御預御宥免、如元勤仕被仰付。

正月廿六日。町人の妻女等紅裏の絹服を着すべからざるを令す。

〔大野木克寛日記〕

正月廿六日、町人共男たる者は、其家々亭主以下各綿衣着仕候。妻子者途中往來之時分、今以絹・羽二重を着仕候。是以綿衣着可仕候。何こぞ無據絹類着候はゞ、紅裏着仕間敷候。足輕を廻し相改可申候由、夫々町々觸廻候。

正月廿九日。降雪赤色を帶ぶ。

〔大野木克寛日記〕

二月朔日己巳、雪二尺計降積。自今曉至晝暴風起寒威甚。昨今如嚴寒。一昨廿九日朱染紙色の雪降、人之見者多。予者御城往來の節も不見留、慥に朱染紙の如くには無之。至て薄色に見候由人口に在。

朱染紙は銀子の包封に用ふる赭色の紙

二月朔日。十村等柳之間に於て前田重煕に拜謁を許さる。

〔日　曆〕

御先代樣之内、私共年頭之御禮御間之内に而被爲仰付候儀も有之候哉、年號等書上可申旨被仰渡、奉畏候。

松雲院樣寛文元年御入國被爲遊、同三年より延寶之頃迄御間之内に而御禮被爲仰付候所、如何之御詮議に御座候哉、延寶年中より御式臺に而被爲仰付候旨、私共先祖之者共申聞候、以上。

寛延四年正月晦日

若松村　八兵衞
波佐谷村　紋兵衞
田中村　喜兵衞
村井村　六左衞門
野々市村　小左衞門

田井村　吉兵衛
淵上村　源五郎
南森下村　金右衛門
御所村　長次郎
大熊村　伊兵衛
南中條村　理左衛門

御改作御奉行所

右之通相調、加州三郡一紙にいたし、正月晦日御改作所ゟ上之申候。御郡所ゟも致寫、無判に而差上申候。

〔政隣記〕

二月朔日、十村・山廻等、今日於柳之間御通懸御目見被仰付。

但、例年は正月十二日御寺御參詣之御歸に、裏御式臺に並居御目見被仰付候得共、今年御參詣無之に付右之通被仰付。

二月八日。前田吉德の側室壽清院歿す。

〔政隣記〕

二月八日夜、斐姫樣・尊丸殿御實母壽清院病死。先年妙閑存生之內、御廣式ゟ尼呼候例に而、尼呼候儀伺之筋有之候得共難成、十二日寶圓寺ゟ移し葬式有之。中陰より百ヶ日迄銀五十枚、幷葬式入用、従御姫樣被遣之。

二月廿四日。前田重熙諸醫をして病を診せしむ。

〔政隣記〕

二月廿四日、中將樣御容躰八十嶋貞庵・南保玄伯・端玄泉ゟ御診被仰付。翌日重而右三醫幷安房守醫原田玄格・横山求馬醫岩脇碩安・町醫原田玄味御診被仰付。三月四日より御匕佐々伯順に被仰付、六日より御休藥。

三月十六日。前田重熙乘馬にて蓮池庭に遊ぶ。

〔政隣記〕

三月十六日、中將樣蓮池御庭ゟ御往來御馬に而被爲入、此後度々被爲入。

三月廿一日。前田重熙今日より大庭探元の調劑を服す。

〔謙德公御代日記〕

三月廿一日、御好之藥法に而大庭探元御匕被仰付。

四月朔日。今秋參覲の際隨行の家老を命ず。

〔日記頭書〕

四月朔日、前田兵部孝起・中川八郎左衞門惟忠、當秋御參勤御供被仰渡。

四月二日。前田重熙當分隔日に居間書院に出で政務を視ることを告く。

〔謙德公御代日記〕

一、四月二日、御痛御勝不被遊内は隔日に、明後日より御表に御出、御用可被遊候。寺社奉行・公事場奉行・御算用場奉行・町奉行は御内聽に相達品は、右之節罷出、御直々伺候樣被仰出。丁日御居間書院に御出也。

四月十七日。前田重熙城内東照宮社參の服裝に就いて令す。

〔政隣記〕

四月十七日、御社參、御狩衣・貫白之御指貫・御足袋も被爲召、御小さ刀御帶し、御太刀は爲御持。御刀者御駕籠之内へ御入、御直垂に而御參詣之通取捌申筈に被仰渡。

社參は城内東照宮へなり

四月廿五日。地震により下街道の往來閉塞す。

〔政隣記〕

四月廿五日夜强地震、其後度々輕き地震有之。越後高田邊・名立邊は大地震、山崩れ家潰死人多。依之下海道往來止、町飛脚其外御家中之人々江戸往來も中仙道に成。同年十月より如元下通りに相成。先頃出府之田邊半五兵衞等茂立歸候而、木曾路より罷越候に付、未百五十日分御扶持方代拜借。

一、江戸無御心許候間、早飛脚可遣旨被仰出、下海道・木曾路通兩方より遣之。御家中往來之者無御心許候間尋に可遣旨、月番迄被仰出、足輕小頭一人・足輕五人金子少々可渡遣旨。若異變之者有之候ば、小頭取捌候而、足輕を以早速言上候樣申渡候旨、對馬守言上。

〔謙德公御夜話〕

一、寬延四年四月廿五日越後名立山邊大地震に而、山崩れ高水人死も多有之と言上有之候得ば、三十人小頭並共之內兩三人遣し爲見候樣被仰出。則指遣罷歸候而、相違無御座候段申上、樣子一々言上仕候處、當月十五日より廿四・五日迄之內、金澤出足之人々御尋、夫々申談候處、年寄中よりは廿日出足人有之旨言上。則割場奉行支配之者廿二日出足、御臺所廿三日發足之人有之。其趣言上有之候得ば、右三日之內出足者共怪我人無之哉、早速爲見に遣候樣被仰出候。偖又路銀指支申者無之哉難計候間、金子爲持遣候而、若路銀支申者有之候はゞ、相渡候樣被仰出。割場附足輕小頭等金子持參候得共、其內漸岩傳罷通り候者も有之、又御國ね

立歸候者も有之候て、右之金子請取候者無之由。其節は御家來之内末々迄も怪我人無之哉こ御出、御心に掛られ候御樣子に候。飛脚歸り怪我人無之事委細申上候へば、御安堵之御樣躰也。何茂難有儀と奉申上候。

〔謙德公御年表〕

一、越後路當春大變に付損じ申所々宜成候に付、十月十四日町飛脚より下道往來。尤御家中人々も往來有之事。

四月廿六日。前田重煕、放鷹によりて獲たる鶴を德川家重に贈る爲脚夫を發す。

〔政隣記〕

四月廿六日、御拳之鶴五つ宛公方樣・大御所樣ゟ御献上に付、今朝中飛脚に而被遣之。鶴・梅首鷄、此文字兩樣之內、江戸御右筆衆ゟ承合候而調候筈也。右に付、當廿一日大豆田口より粟ヶ崎迄御放鷹、御拳之鶴十二有之。

五月七日。前田重煕自今日々居間書院に於て政務を見る。

〔日記頭書〕

五月七日、今日より毎日御居間書院へ御出、御用御聞被遊。

五月十九日。前田重熙近習頭の士の勤務に關して諭す。

〔袖裏雜記〕

五月十九日、富永數馬初左之通、大炊・丹後守・安房守誘引御前へ被召出、後に記候御親翰之趣御直々被仰渡。

大炊誘引、富永數馬。丹後守誘引、窪田主馬・進士齋宮・青木與右衞門・由比勘兵衞・竹田金右衞門・原求馬。安房守誘引、澤田忠太夫・水越八郎左衞門・河内山七左衞門。大炊誘引、山口六左衞門・福島武左衞門・中村次右衞門。

右相濟、左之御親翰年寄中席に而四切に拜戴爲仕候處、不苦候はゞ拜寫仕度旨申聞候付、御親翰數馬へ相渡候。

近邊之儀者、諸向作法之基本に候へ者、萬端急度有之度儀に候。手前若手に候へば、所存之程、制度不行屆事も可有之候間、何れも申談、嚴重に可正之候。時節柄に付、省略之品は有之候とも、其相應を以作法相立候樣可心得候。然共如此申聞候とて、諸事窮屈に心得候而者、却而用向可及遲滯候。惣而近習者平生之事とて、作法をも等閑に存候より自猥に成行候間、此所忘却いたすまじく候。今程近邊之儀存寄不相叶品雖有之、先其分にいたし置候。自今連

々を以、先規之通申付にて可有之候條、此段可相心得事。

一、近邊にて私之格式名目をたて候儀、堅く有之間敷候。近來富永數馬等相勤席を用部屋と名付、相伺之品も先此席之人々に懸內談、其上此方に申聞候族も有之候。畢竟政事をもおづかり候役儀と心得違候故如此に候。向後役筋之儀者、同役示談之外、他之存寄を借用べからず候。同役無之人々は、尙更一存を以可伺之候。不及相伺品も同事に可相心得候。暨自此方定置候品、重て不相伺改候族も有之候。前々より申渡置候儀、以來指支趣有之ば、時々得旨候上可改候。私之差略聊不可有之事。

一、何事によらず自此方申渡候儀、存寄有之ば一往申聞候上、重而可受指圖候處、曾而左樣には無之、人々不致心服儀をも枉而任其旨候段、皆以氣然を計、諸事相泥候より事起、却而失實儀申族も有之候。向來指圖之儀にても難辨品者、不殘心底存寄之通可申聞候。其上可及裁斷事。

一、双方近習之人々緣談申合候儀、前々より其制雖無之、別而側を相勤輩者、依時宜人々勤仕に斟酌之儀茂可有之候條、別紙之役儀相勤ものは、公私に付可致遠慮事に候。双方粗相談之上、得內意候節に至り申聞候ては、乍內々變約之筋に相成候段、氣毒に存候故、兼而申聞置候條、可得其意事。

附、近邊之者より緣談申合置候外樣之人々、依其人用捨をもつて近邊に召加、同事に相勤罷在候族は、各別に候事。

一、養子之儀は、以由緒相願事に候へ者不及貪着候。然共同姓一類之內可相願もの無之、他人養子に相願候節は可爲同前事。

一、一門之外通路參會之儀無據族は、前廉得內意候樣、去卯之年申渡置候へども、向後不及貪着候條、勝手次第可相心得候。然共參會仕人々儀者、以來とも一往可達聽置候。是又指圖不及相待候事。

附、師家之儀は申聞におよばず段申渡置候得共、自今他人參會之儀は都而可申聞事。

右近習頭之人々江相含候條々、認指越候間、尙更可被申談候也。

五月十九日

富永數馬初近習頭

表小將番頭

表小將橫目

近習取次役

配膳役

右之人々互之縁談可有遠慮候。此外以來新に申付候役儀にても、紙上之人々に准候勤柄之者は、同事に可相心得事。

右畢而御奥書院御縁頬に而誓詞、三切に判元大炊見屆之、指引奥之御横目之事。

六月朔日。大聖寺侯前田利道金澤城に登る。

〔謙德公御代日記〕

一、六月朔日、備後守樣四月二十八日江戸御發駕之處、越後大變に付下道難成御通、中仙道より御歸着。依之爲御對面、昨日大聖寺より御出府、今日初而御登城御對面、御料理被進、御盃之內小謠被仰付。御相伴諸大夫之內。あなた御家老山崎唯丞、御用人志村平左衛門、御近習倉知與左衛門・志村郡司御料理被下、御目見被仰付。依之月次出仕相止。同二日御歸國、同四日爲御禮、大聖寺より野口縫殿被遣候。

六月七日。大槻朝元の餘類園田兵太夫病歿す。

〔大野木克寬日記〕

六月八日、奥村主膳に被御預置候園田兵太夫、昨日病死、公事場横目爲檢使罷越、死骸相改、寺へ遣候筈之由。

六月十日。本年參覲の際木曾路通行を幕府に屆出でたる報金澤に達す。

〔政隣記〕

今月十日、越後大變後に付、下道御通行難被爲成、木曾路より御參府之御屆濟候旨、且又福嶋御關所御鐵炮爲御持之御屆等も相濟候旨、言上紙面今日到來、則夫々被仰出。

六月十二日。昨今兩日金澤寶圓寺に於いて前田吉德の七回忌法會を營む。

〔政隣記〕

六月十二日、護國院樣七回御忌に付、昨今於寶圓寺御法事、兩日共御參詣、惣御奉行本多安房守政行。於玉泉寺如前御施行。尤諸士御禮等都而如前々。

六月十五日。二條宗基の使者金澤城に於いて斐姬に結納を贈る。

〔政隣記〕

六月十五日、二條右府樣斐姬樣ゟ御結納被進候御使者北小路隼人正、一昨十三日參着、旅宿堤町角屋彌三右衞門、御馳走人御大小將佐藤久右衞門・山村嘉右衞門、取持御使番寺嶋左太夫・有澤才右衞門、諸事御用主附御馬廻頭丹羽武兵衞・松平善右衞門ゟ前月廿七日被仰付、且卽日旅宿ゟ之御使志村五郎左衞門、御近習御使番也。

今十五日登城、大紋着用之、御口上書御目錄、前田大炊帷子紺地長袴子持筋褐色着用罷出請

取之。御留守居物頭宇野武兵衞ゟ隼人正於日通渡之。武兵衞も子持筋長袴着に而取之。隼人正儀御小書院ゟ被召出、御口上御聞、於御大廣間御料理被下之。相伴安房守。先達御口上者大炊丞、御目錄者御月番奥村丹後守請取之。其後於御小書院、御盃・御腰物被下之。右御使者相濟、於松之間年寄中等ゟ御意有之。其後年寄中初頭以上ゟ、御吸物・御酒被下之。今日月並登城相止、登城上御目見、御意有之。夫より御大廣間ゟ御出、月並之通有合候頭分・御橫目以無之頭以上者、翌十六日登城御祝儀申上、年寄中謁に而退出。同日隼人正發足。夫前旅宿ゟ御使、御使番前田主稅を以、白銀二十枚・御箱肴、從婓姫樣も御使、御廣式御用並之定番御馬廻御番頭伊藤幸左衞門を以、卷物三反被下之。

六月十六日。德川吉宗罹病の報金澤に達す。

〔謙德公御代日記〕

一、六月十六日、大御所樣御不例に付、御表向より御飛札を以御機嫌伺候樣に与、當九日出之中飛脚到來、御飛札被指出候。

六月十八日。前田吉德追福の法會終るを以て諸寺の住僧を金澤城に招請す。

〔政隣記〕

六月十八日、今度護國院樣御法事就相濟候、御寺方御招請、御能は無之。兩度御目見、御居間書院に而御饗應、佛生會講式明惠上人筆等爲御見之處、謄寫願に而寺社奉行ゟ御渡、同廿四日返上。右佛生會明惠上人被執行候法御座候處、當時取誤罷在候間、板行に仕、諸國に弘通仕度由被願候處、願之通被仰出、則板寶圓寺・天德院・瑞龍寺跋を加被申候。

〔續漸得雜記〕

一、重熙公御代寬延四辛未之夏、護國院樣御七回御忌御法會御執行、寶圓・天德・瑞龍三寺之住侶を城中に招請して供養ありける。然るに法會之節は、散樂をなして是を僧等に觀せしむる御例なればとて、各其支度をなす。重熙公仰に、散樂をなして僧に見せたりとて何の益かあらん、散樂は謠聲に非ずといへども、閑雅の物にしもなし。還て寂寥を妨ぐ。且古代よりの式也とも、是をさしおきて可ならんとて、夫よりして法會に散樂を舞す事は止にけり。是に於て文庫を開きて、名僧の墨跡及内外僧の秘書を出して僧等に見せらる。僧等大きに喜び、各是を視る。其中に佛生會講式といふ物あり。明惠上人の親ら手寫せし一軸也。此講式僧家に絕て知る者なし、唯其名を聞のみ也。三寺の僧侶是を視て甚歡び、是を板にちりばめん事を大守に言上す。卽御許容ありしにより、三寺より剞劂氏に命して版行し、僧家之要錄とな

りぬ。是よりして曹洞家毎歲是を勤行し、一宗の規模となれり。今諸國に普く行はる。右の講式に三寺の住侶の跋文あり、能く人の知る事也。

書新刻佛生會講式尾

甞聞世有佛生會講式。而未見之也。蓋栂尾上人明慧辨公所述也。唯恨。相去其世五百有餘歲而不傳。法門禮樂久闕如矣。今茲辛未之夏。加越能三州大守中將菅原重熙公。遇祖父護國院殿七周年之諱景。而就于寶圓爲修佛事。且辱招請我輩三僧司、竝若干僧伽於城中。其待之禮甚重矣。偶有一軸。披而讀之。則上人親書之佛生會講式也。我輩如拾遺失。嗚呼樂哉。此式無見於法門。而今見之於城中。蓋聞之。松雲院殿治州之時。博集百家之書。辨明其眞贋。而捨其可捨取其可取。而庫中充棟者皆秘而不出也。今此講式亦其所秘。而世無副本。實希世之寶也。我輩何幸得觀之。皆是饗禮之厚以及于茲也。私竊謂祠部官。曰是國君之所襲秘而國之寶也。雖然將此一寶施諸萬方。則猶如以一燈而然百千燈。庶其暗者皆明也。若其繕寫而廣行之。則法門之禮樂必備矣。故請達之于高聽。少選祠部官報。曰國君聽許。於是乎我輩喜且感。不覺手舞足蹈也。良以國君。憂人之憂喜人之喜。不寶其寶廣布于世。可謂仁周萬物者也。昔人有謂。曰五百歲而聖人出。方今此講式五百有餘歲之前。上人辨公述之行之。而久失其傳矣。今也五百有餘歲之後。再行于世。則是曰聖人出世之端亦可也。誠不可誣也。因我輩同心緝言。

聊書顚末以付剞生。永備法寶云。

寛延四歲以辛未秋七月

寶圓宜道

天德雷洲

瑞龍普禪

六月十九日。諸士の困窮を救濟する爲藩より借銀を許す。

〔謙德公年表〕

一、御家中人々困窮に付而、今般御借銀被仰付、上納幷借銀・買掛銀書上に被仰付候段、別紙被仰出之通に候。當時御上御勝手御難澁故、於大坂等茂莫大之御借銀有之、此御運び之道も御指支に付、御家中知行免相も御借可被成御時節に候得共、其御沙汰無御座候。右之通被仰付候儀者、結構至極之儀に候間、此處人々致心服、是以後勝手取直御奉公相勤儀肝要之事に候。勿論此段不申達候而茂、其了簡有之儀に候得共、御勝手之御樣子不存面々茂可有之哉与、猶更右之趣申談候條、被得其意、組・支配之人々に茂急度可被申渡事、以上。

〔謙德公年表〕

一、寶曆元辛未六月十九日年寄中初、組・支配有之諸役人、二ノ丸に罷出、御書立を以被仰出候寫、左之通。

御家中之々人連々勝手不如意に相成候に付、享保十年御貸銀被仰付、其後上納幷借銀・買懸銀書上に被仰付、就中延享三年に茂、上納幷借銀・買懸銀書上に被仰付候得共、其驗無之、近き頃別而指支候樣子に相聞候。右之通被仰付候上者、人々儉約を用ひ、萬端致省略候はゞ、左程難澁に茂およひ申間敷儀に候。尤無據趣に而難澁之面々も可有之候得共、無謂及困窮候人々者不覺悟之仕合に候。然共其分にも被指置候而者、ひしと指支候族も可致出來躰に付、御上御餘力も有之候はゞ、此節急度御救茂被成度候得共、御要脚御指支過分之御借銀有之候に付不被任思召候。依之於大坂御才覺銀之内を以、勝手取續之ため、一統知行高百石に付五百目之圖り御貸銀被仰付候。右之通迄に而者、是以後取續候儀も成兼可申哉。夫に付先例も有之儀故、上納銀・借銀・買懸銀等之分茂書上に被仰付、除知を以返上等有之候樣に可申渡候。如斯被仰付候上者、諸事相改、隨分難澁に相暮、勝手取續候儀肝要に候。若是以後無謂及困窮候人々、可爲曲事旨被仰出候條、右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ茂可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂申渡候樣可被申聞候。右御貸銀返上年限等之儀者、別紙を以申達候事。

〔謙德公年表〕

一、今般知行百石に付五百目宛、御徒等御切米取候分者、知行五十石に准二百五十目宛御貸

渡被成候。右御貸銀者、於大坂御才覺銀之内を以御貸渡之儀故、加利足返上可被仰付譯に候得共、左候而者難儀可仕儀に付、爲潤色無利足を以、來申ノ年より十五ヶ年之年譜を以、每歲十二月廿五日切に上納之筈之事。

一、一組切に人數幷自分共交名・知行高・御切米・御扶持方、御徒並以上幷與力之分茂相しらべ、帳面に記、當月晦日切に可被指出候。但扣帳共二冊可被指出候。且又御貸銀相望不申人々者、尤勝手次第之事。

一、銀子一組切に頭々江相渡申筈に候條、夫々可被相渡事。但其人々勝手之厚薄により、右御貸銀高程望不申人々茂可有之候。且又以後々々勝手之ため之事に候得者、人々勝手之樣子次第、右銀高を以相渡樣之品茂可有之哉。ヶ樣之所者頭・支配人之手前に而僉議次第之事。

一、上納銀幷借銀・買懸銀等書上に就被仰付候。右爲返濟、先達而除置候外に、草高百石に五石宛之鬮り除知・除米被仰付、最前之十石に混じ不申遂勘定、先町方借銀等之分相渡、上納之儀者右借銀等之分不殘相濟候上、返上有之筈に候。委細之儀者追付相觸可申候。此段先爲承知申聞候事。

一、借銀・買懸銀等御先代書上に被仰付間茂無之儀に付、今般者書上に不被仰付思召に候得共、諸士を初難澁之樣子、段々御詮議之上書上に被仰付候。是以後者書上之御沙汰無御座筈

に付、此段町奉行に申渡候事、以上。

〔國平氏雜記〕

困窮御救方

利家公御代德政と言事を被命、借狀破却して貸損借德無返濟也。然るに又々諸士困窮、借銀及莫大に候に付、延寶五年公庫より金銀を出し諸士に與へ、知行之內令除知、尤上濟する事也。右にて銀主へ銀を渡し、證文をも返し破却す。上濟年限知行全收納す。然處元祿年中日本一統華麗に成り、諸國諸士困窮之處、將軍家より金銀吹替之命有之、右金銀を元之字金銀に被吹替、品下り候。米價貴く成り、因之世上寛也。又御領國に而者、商人柳橋屋彌三右衞門諸民之貯銀等を引受、諸士收納月迄之取續不足之輩は、其頃に達し、右彌三右衞門より銀子を借り候。是を續銀と言、利足を添へ、兩收納拂代にて返濟する事成しが、連判退轉人及び借延等にて延引之風俗に成り、七八步は相濟、二三步は何となく年季返濟に而捨り候樣に成り、此續銀も相止候。是は松雲公御代之事なり。享保十年護國公御代、諸士爲御救百石二百目充御貸渡し、其上に上納銀幷諸借銀等双方より書上、公に御引請、百石に付五石充之圖りを以令除知、御藏入に成り、大坂へ登せ、拂代を以上納幷町方配當割合在之、夫々被渡下候。延享三年大應公御代、右之通書上に被仰付、御貸銀者無之候。謙德公御代寶曆元年右之

通書上に被仰付、百石に五百目充御貸渡、百石に十石充令除知、右銀子は十五ヶ年賦を以、無利足返上に被仰付候。

六月廿六日。徳川吉宗薨去の報金澤に達す。

〔謙徳公御年表〕

一、六月廿日大御所様(先将軍吉宗公)薨御之旨、早飛脚に而同二十六日金澤へ告來。同廿七日御老中方御連署之御奉書到來。御病中爲伺御機嫌、金澤より早打御使仙石庄左衛門(寄合組)、御凶事爲伺御機嫌後藤瀬兵衛(御馬廻頭)、中仙道より江戸に被遣。右に付押立候普請・鳴物御法事相濟迄、諸殺生五十日遠慮。御作事方・浦方獵師、六月廿六日より七日過候而初り申事。夫迄之内町中魚物無之。御家中輕き繕り普請等、六月廿六日より七日過始る。御法事閏六月十二日より初、同廿七日御結願に付、廿八日より普請・鳴物・鐵炮等不及遠慮。奉號有徳院殿上野に奉葬、御享年六十八。御治世三十年、御辭職七年(勅號以前は奉號寛悳院殿。)

閏六月十四日。御徒木村文左衛門江戸より逐電す。

〔謙徳公御年表〕

一、閏六月十四日御徒木村文左衛門於江戸逐電。依之養父木村惣兵衛(御徒小頭)・いさこ湯川庄左衛門御暇奉願、江戸・京・大坂に尋に罷越。

閏六月十五日。諸士に儉約の勵行を命ず。

〔典制彙纂〕

御家中之人々勝手困窮に付而、今般御貸銀等段々結構被仰付候上之儀に候得者、是以後ハ統勝手取直し候樣、勘辨不仕候半而は難成事に候。就夫儉約之筋御代々御定之趣、就中去冬御書立を以被仰渡候趣、無忘却急度相守可申候。

一、衣服之事。

一、音信贈答之事。

一、婚禮之式等之事。

一、鷹之事。

一、饗應又は公私之儀に付參會之節料理等之事。

一、家作等之事。

一、一季居奉公人男女給銀之事。

右品々者儉約之基に候間、其要文を致會得、萬端約に被行候儀肝要之事に候。衣服等外邊迄飽相成品を用ひ、內々費有之候而は無詮事に候。婚禮之式なども可成程省略之儀、双方之頭々委事承屆可及指圖候。一季居奉公人男女給銀之儀、享保十四年相觸候處、其後猥に罷成候。

畢竟高給銀に召置候者有之候故猥に成行候躰、第一風流異躰に徘徊いたし候女を、高給銀に召置候族も有之由相聞、不愼之至り候條、右相觸候趣嚴重相守召抱可申候。若及違背候者有之候はゞ、公事場ゟ相斷可申候。急度遂吟味可申候。右給銀高等之儀、猶更右場奉行より茂申談候樣に申渡候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之人々ゟも不相洩樣可被申渡候事。

閏六月十五日　　　　本多安房守

閏六月十九日。前田重熙、富山・大聖寺藩の者を加賀藩の士の養子とする場合の取扱を告ぐ。

〔袖裏雜記〕

富山・大聖寺家中之者、當家中ゟ養子にいたし候儀、定は無之候へども、同姓一類は各別、續無之兩家中之者養子に相願候節者、遠き筋目も有之哉、一往其頭・支配人ゟ被相尋、其上願書可被指越候。尤此段前廉頭共ゟ被申聞置儀には無之候、以上。

閏六月十九日　　　　中　　將

本多安房守殿

前記之通とは下街道の破損したるをいふ

御寺迄は御寺のみの意

閏六月廿一日。前田重熙金澤を發し江戸に向ふ。

〔政隣記〕

閏六月廿一日金澤御發駕。前記之通に付木曾路より御參勤。四時之御供揃に而九時頃御立。朝之內天德院・寶圓寺御參詣。今夜小松御泊、明日大聖寺御晝休、備後守樣御舘ゟ者不被爲入候。此方樣御旅舘ゟ備後守樣御出に而御對顏。御家老御供、四月朔日日記之通。右之外都而御先代樣木曾路御通行之節之通也。七月六日夜蕨御泊、七日巳下刻本鄕御邸ゟ御着、嘉三郎殿中之口迄御出迎、晝過御老中方御勤。

〔大野木克寛日記〕

閏六月廿一日、今朝六時御供揃に而寶圓寺天德院御參詣、兼而野田御廟御參詣、天德院に而者陽廣院樣御廟御參詣雖有御沙汰、就雨御寺迄御參詣と云々。

今日四時御供揃、四半頃御發駕。其式如恒例。寺社奉行・公事場奉行・御算用場奉行・御奏者番・御馬廻頭以下頭分、三之御丸ゟ御見立罷出候。蹲居所、例に者御馬廻番所際井戸之邊より列居候へ共、石川御門より御發駕に付、橋爪御堀端足輕番所を後に仕列居。如例御言葉を被掛、各拜伏。橋爪橋之際ゟ横山求馬・奥村左京如例罷出候。九郞左衞門當病に而參出無之。雨天に付各手笠用意候へ共、御立之時分晴候。御供之輩も合羽を脫候程に付、手笠者用不申候。

道者不宜候故、足半用申候。御發駕已後於二之御丸、御用番房州ゟ恐悅之旨各奉賀。因之外に勤者無之候。每々右之通に候。

七月七日。前田重熙江戶に着す。

〔謙德公御代日記〕

一、七月七日江戶御着。御供御家老役、前田兵部・中川八郎右衞門。同日御老中方御勤。

〔謙德公御年表〕

一、御參府に付上使之儀、公方樣御忌中之內御參府故、上使無之御格之由。

七月十日。前田重熙前將軍德川吉宗の遺物配分を受く。

〔政隣記〕

七月十日、上使若年寄松平宮內少輔殿を以、大御所樣御遺物御脇指備前行光代金三十枚御拜領。右爲御禮今日兩御丸御登城。御痛御不出來に付、御老中方ゟは聞番御使に而御禮被仰達候。

但、右上使ゟ御茶・たばこ盆を出不申候事。

七月十日。能登諸浦に產する煎海鼠を鹿島郡所口町鹽屋淸五郞に賣渡すべきを命ず。

〔筒井舊記〕

煎海鼠商賣之儀に付、所口町鹽屋清五郎書付出候に付、御算用場より相渡候條、別紙寫指遣候。面々浦方に可申渡候。先々に相廻、落着より可相返候、以上。

七月十日　　不破次郎太夫

村上采女

乍恐書付を以申上候。

一、煎海鼠・平鮑之儀に付、去年二月從御公儀樣御觸有之、長崎俵物請負人岸八兵衛・西原市左衛門諸國相廻、去年五月八日當所に罷出、私煎海鼠商賣之筋相尋候に付、享保十三年以前より、御國法に而他國に出煎海鼠無之候處、私願を上げ諸浦に仕入銀出、初而煎海鼠獵致、二十四・五年來私一人商賣仕候趣、委細に申聞候得者、請負人共承屆、然上者能州浦々に者相廻るに不及よし申聞、私方より能州煎海鼠一手に可賣渡旨遂示談、御公儀樣より右請負人中に被爲仰渡候趣可被申傳、私方より承知書附を取、能州浦々者不相廻、直に當所より罷歸り、於金澤表御預御役所に罷出、能州煎海鼠之分、私方に一手に賣渡候樣に、御預地浦々に被仰付度旨御斷申上候書付之寫差越候。其以來長崎請負人に私相代り候趣、一統御觸渡被成下候樣に願上度与奉存候へ共、當時煎海鼠仕候浦々御領分は申に不及、御預地等迄先年より私一手

御預は能登に於ける德川領を前田氏に寄託せるもの

に買とり候に付、右長崎請負人共御役所へ御斷申上候趣、私相代り浦々に申達候而も、右之者共に私相代り候筋者承知可仕与奉存、御觸渡之願等申上候儀恐多奉存差扣、去暮私手代諸浦に相廻、右之趣浦方役人中に申聞、獵師勝手次第仕入銀何程に而も可相渡旨申達、煎海鼠出方多致出情候樣に遂示談置候に付、右に准じ御國法之御口錢・御役銀等例年より相增可申与奉存候處、當春に至り不所存之族在之、長崎請負人中より私引請相代り候趣一統御觸無之儀を申立、諸浦に私虛語申談候樣申成、去春從御公儀樣御觸以後者、誰々茂煎海鼠商賣仕候而茂不苦樣風聞爲致、却而御國法之御口錢・御役銀等相洩申筋に罷成候に付、長崎俵物請負人中より引請、私相代り候趣、御領分・御預地等迄茂一統被爲仰渡候樣奉願上候。去年從御公儀樣御觸之通り、長崎請負人同樣に、私方に一手に賣渡候儀、能州浦々に私相廻り夫々申談、煎海鼠出方多相成候樣に仕度奉存候。乍恐御算用場表に被爲仰遣被下候樣奉願上候、以上。

寬延四年閏六月　　　　　　　　　　所口鹽屋　清五郎

中黑嘉兵衞殿

右願書付出申に付上之申候、以上。

惣肝煎　忠右衞門

七月廿八日。前田重熙病を以て參覲謁見の禮を缺き使者を派して物を德

川家重に上る。

〔政隣記〕

七月廿八日、御參勤御禮被仰付候條、今日御登城可被成候、御家老兩人可被召連旨、昨日御老中方御連名依御奉書、則御登城可被遊處、御痛所御勝不被遊に付御斷被仰達候處、御使者を以御献上物被成候樣申來。依之御本丸に紗綾二十卷・白銀五十枚、西丸に白銀五十枚御献上。御使御馬廻頭九里治兵衞。御月錄者御奏者番御請取、御品は於檜之間御月番御老中左衞門尉樣御請取被成、治兵衞に被謁。御家老前田兵部・中川八郎右衞門も登城、自分之献上物上之罷歸。

西御丸之儀、秋元但馬守殿に御伺之處、御本丸御同樣との御指圖に付、治兵衞是又御使相勤。御家老中も右同斷。

七月。一季居奉公人の給銀を定む。

〔袖裏雜記〕

一季居奉公人男女給銀之事

役小者

一、九十目より七十目迄　上中下見計、此内を以可相定。

但、江戸に相詰候共、先年与違、御扶持方も割場小者等同事に被下儀に付、増銀に不及。
江戸に當座歸に候はゞ五匁、京・大坂にには三匁之増銀たるべき事。

鎗持

一、八十目より七十目迄　上中下右同斷。
但、江戸其外他國詰仕候はゞ十匁、江戸に當座歸候はゞ五匁、京・大坂にには三匁之増銀たるべき事。
附、他國詰一ヶ年に滿不申候はゞ、半年に五匁計之圖りを以可相渡事。

馬捕

一、八十目より六十目迄　是より以下上中下幷他國詰増銀右同斷。
一、乘物舁小者之儀は鑓持・馬捕に可准。

草履取

一、七十目より四十五匁迄。

平小者

一、六十五匁より四十五匁迄。

あらしこ

一、四十五匁より三十目迄。

若黨或先供等之者

一、百二十目より百目迄　上中下見計此内を以可相定。

但、江戸其外他國一年詰仕候はゞ二十目、當座歸幷京・大坂にて者十匁之增銀に限べき事。

附、他國詰一ヶ年に滿不申候はゞ、半年に十匁計之圖りを以可相渡事。

右若黨躰より級宜敷中小將抔之類

一、百五十目より百三十目迄。

但、他國詰增銀等之儀、前段之趣に准相應に可相渡事。

一、はした者等之給銀は、當時通例遣候通たるべし。

但、是以彼等には不相應程之給銀は遣し申間敷事。

しんめう或物縫等之類

年中

一、七十目より五十目迄

右者男女一季居渡り奉公人之儀候條、當暮者右半給銀之圖を以相渡可申事。

一、當春給銀、又は其以來召置候者之內最早給銀相渡候者は、此度之定より過候共不及指引、

今般申渡之半給銀相渡可申事。

一、高知之面々家來之内、譜代之者又者何とぞ舊功之筋に依而給分相增遣度存候ものは、尤各別に候事。

一、役方之用事等申付候者抔、强而給分減少之沙汰にには及間敷儀候へども、是以主人之分限にも應申事に候條、猶更其心得仕、畢竟高祿之家來者召仕不申覺悟尤に候事。

一、惣而此度之定より相對を以給銀少分に召抱申儀者、尤可爲勝手次第事。

一、出替之時節過候而、半年又は五・三月以後召抱候者も、近年は大方年中之給銀を取申候。向ケ様之筋に而は無之譯に候間、向後者半給銀、或は日割等を以召置可申事。

一、暇を出候家來請合狀、請人判形は消候共、證文は相返し不申、先主人方に指置可申候。不埒之儀出來致候節、吟味之手懸りも無之、毎度つかへ申事有之候條、向後右之通たるべき事。

一、御家中若黨下々奉公人、江戶・京・大坂等ゟ召連候人々、人請に相立居申者共、其砌公事場に相斷召連可申處、斷相洩候人々茂多有之候條、向後急度相斷可申事。

以上

辛未七月

八月朔日。諸士の風俗を戒むる爲享保十四年の令を新たにす。

〔袖裏雜記〕

一、諸士之内遊女同事之者召仕候族之者有之段被聞召、段々御僉議に付、享保十四年給銀等之儀に付申渡候趣、留帳之内書拔上、左之通。

御家中之人々幷せがれ共之内には、召仕候女を宅には指置不申、好色之ため扶持方・入用銀等差遣、其女之ゆかり之者へ預置申族も有之由相聞え候。此儀は前々御停止之圍女之筋にも可罷成候哉。左候へ者不作法千萬之儀に候條、急度相愼候樣に可仕旨、年寄中迄御意に候。且又宅におゐて女も、風流にて遊女同事に徘徊仕候者を召置候者も有之躰に候。ヶ樣之儀も一圓不可然儀候間、向後左樣之女は召抱不申樣可仕候。此等之趣は頭・支配人兼而より可申渡儀候條、可有其心得事。

一、惣而稽古事其外講談に而參會之節、輕き師匠幷あに弟子座上に差置候沙汰有之候。歷々之面々などには別而不心得成事に候。假令講談等之席に而も、夫々相應之座列之作法に而可有之事に候。且又右之品相濟候ても、無益之咄に成及長座申由に候。左候而は稽古に事よせ、人多に參會之樣にも可相聞候間、相濟候はゞ追付退出可然事。

右書立、八月朔日頭々筆頭相招渡之。

おゐての次召抱候脱歟

八月。大地新八郎上書して學問の要を述ぶ。

〔大地新八郎上書〕

去冬以來御讀書御用被仰付難有奉存候。今般御出府被遊候間、重而御目見仕候時節迄、存命仕儀茂難計奉存候に付、兼而宜御序茂御座候はゞ、私存寄之趣言上仕度奉存罷在候品々、御自分迄申上置申候。惣而學問仕儀を、儒家之輩などは各別、其外は末々迄も慰に仕事とのみ心得罷在申候。増而貴人高位之御方之御學問被成候事を、猶以御慰と迄奉存候。扨者文學を覺え、詩文章を作り申爲に仕事と心得罷在候。此儀何茂學文之本意を失ひ申事に御座候。元來學文には貴人高位之御上を第一と仕候。大學之序文にも其趣相見申候。其子細を申上候に、學文は專三綱五常之道理をはじめ、諸事之筋目を吟味仕事に御座候。(三綱は父は子の綱たり、君は臣の綱たり、夫は妻の綱たりと申儀にて、五倫の内に而其尤重き品を擧て三綱と申候。五常は勿論仁義禮知信の事に御座候。)御身之上之御をさめより、御仕置之筋迄も、不殘此三綱五常を以本と仕候。此道理みだれ候得ば、何事も透と相違仕候。此道理を吟味仕候事者、專學文に有之事に御座候。是は君上に限り不申、末々迄も同事に御座候得共、君上は國天下之事を總被成候により、其故學文は專君大夫之上を第一と仕候。然るを只御慰と迄心得候者、大成相違と奉存候。但三綱五常等之道理は、有增し知れ申通之事に候。殊に聰明才智之人は、猶以學文不仕候而も、其身之才智に而事たり申事と存候族も世に多御座候。是亦大なる心得

違与奉存候。譬へば弓馬手跡等之類も、稽古仕候而其道に達し申候。其外何事も稽古無之候而は、其術に通じ申儀は無御座候。聖賢之敎に因て、綱常等之道理を得心仕候は、人道之稽古と奉存候。弓馬等之藝術をば人々稽古仕候得共、第一之人道之稽古与申儀に心付不申、綱常道理之吟味未熟に御座候に付、依之每事心得違共出來仕候。殊更聰明才智之人、學文無之而者一分之才智にまかせ事を取曖、尙以違失多く御座候。生質聰明に御座候上に道理を心得仕候得ば、誠之聰明才智に罷成申候。殊に貴人高位之御上は、御心得違御座候而も、平人之如く外より異見を加申儀難成候故、尙以御學文を以萬事御考不被遊候而は難被爲成御儀与奉存候。當時之學文は、大抵書籍を數多見申候而廣く事を覺候。詩文章之稽古を專と仕候而、聖賢學術之本意を取失申輩多く御座候。心之付所違候得ば、大切之書籍も用に相立不申候。其故學文は心之付所を第一と仕候。

一、右之通貴人高位之御上ほど、御學文不被遊儀者、押なべて其通に御座候。就中當時之樣子を以相考申候所、只今之世は尙々御學文無御座候而は難被爲成御儀与奉存候。子細を申上候に、御家に而も微妙院樣御代之頃迄は、戰國に近く御座候故、御武威を以下を被制候。其上其頃迄は、末々に至候而は書籍之端を存知申者も無之躰に御座候。當時は大平年久敷戰國に遠く成候故、御武威を以下を可被服樣無御座候。其上只今は末々迄學文之筋を承及、町人・

百姓躰之者迄も少し生業に暇ある時は相應に書物之端をも承覺候故、古今之事を引合に而、御仕置之筋をも相考候樣に成來候。然者當時者尙以御學文御用之時節ニ奉存候。御上に御學才御座候得ば、下之奉存入所も御手厚く御座候而、大に御威光之御助とも罷成申候。昔は結句上に御學文有之候。權現樣にも御學才御座候御樣子に御座候。本多佐渡守殿などは世上には文盲成御仁之樣に申候得共、安房守家に傳來之本佐錄に而相考申候得ば、其學文之筋被相心得御躰に御座候。御家に而も御上之儀は不及申上、奧村故壹岐學文有之儀は人々存知之儀に御座候。今枝眞齋なども常々通鑑綱目を見申由に而、自身唐本に点を付候本今以有之由承及申候。

右之通鑑綱目は、御仕置方之儀に第一之心得に成申書に而、四書等に差續候而功要之書に御座候處、眞齋など職分にも別而尤成心付与奉存候。加樣に昔者上に御武威盛に御座候上に、御學才をも被兼候故、諸事御手厚く御座候而、下之心服仕所も速に御座候与奉存候。委細之儀者筆紙に難申上盡奉存候。先奉存寄趣共有增如斯御座候、以上。

八月　　　　　　　　　　　　大地新八郎

青木新兵衞殿

九月六日。富山侯前田利幸中仙道より歸國の途金澤を過ぐ。

利隆とあるは利幸の誤なり

〔謙德公御年表〕

一、出雲守樣利隆君中仙道より御歸に付、九月六日金澤御通り、野町神明宮ゟ御立寄被遊候。金澤町に而御中休無之、津幡御止宿。

九月十四日。前田重熙諸士救濟の事に關して老臣に書を與ふ。

〔袖裏雜記〕

一、御家中御取救之儀等、段々再往御僉議之趣有之候後、左之通御親翰對馬守ゟ被渡下。

家中一統困窮に付助力之儀、當春大炊ゟ申聞申越候通に候。然共極難之人々者、少分之儀に而者行届間敷存候。夫に付今程町方借銀幷上納とも爲書上、一歩之除知申付、最前之除知とも二歩に申付べく候。左候はゞ當分難儀之族可有之候間、右之通申付候上、土藏銀之内を以少々續銀相渡候はゞ可然存候。右之上は一統彌質素之覺悟に相極、取つゞき候樣無之候ては不叶儀に候間、此制度可致工夫候。將亦此方勝手難澁に付、家中知行借免之儀各數度被申聞候へども、右申述候如く何も困窮至極之儀、此節急度助成可申付候へ共、此方難澁に付不任意候間、助成行届候程者難計候へども、右之通家中借銀書上、除知申渡、續銀可相渡存寄に候。

一、先日も對州ゟ申聞候通、家中風俗連々不宜、不行儀之者多く、第一勝手放埓に取みだし

候躰に候。此仕置ゆるかせにては行屆間敷存候。愼儉約等之儀、頭々以來嚴重に裁許候樣、追而諸頭等も以紙面尙亦相示、其上不相愼輩者、應輕重無用捨可及裁許外無之存候。何れも譜代之人々、急度仕置等に申付候儀、甚心外之至に候へども、不覺悟之者多く候ては、次第士風之衰に可成候間、一人懲萬人之助に相成候利可有之候。彌各思慮いたされ、存寄可被申聞候。此儀江戶發足前、酒井左衞門尉殿ゟ無急度申達置候趣も有之候。委曲對州ゟ申含候。

一、諸頭等ゟ申渡候紙面、只今下書致し置候。追而書改め可越候。

一、前段に申候家中借銀書上之儀、若風聞におよび候はゞ町方噪動せしめ、家中當然に難儀之族も可有之候間、表立申渡候迄者堅く可被隱密候。於各席も隨分潜に可被遂熟談候、以上。

九月十四日　　中將

前田對馬守殿
奥村丹後守殿
本多安房守殿
前田大炊殿

十月朔日。前田重熙參覲の後初めて登營す。

〔政隣記〕

十月朔日御参勤後御痛に付、今日初而御登城之處、御懇之被蒙上意。依之御下り西丸ゟ茂爲御禮御登、御老中方御勤、御歸舘之上御家老中ゟ御普爲聽、諸頭ゟ茂無急度申聞候樣御意に付、翌二日九里治兵衞ゟ左之覺書、中川八郎右衞門被相渡、諸頭ゟ可致傳達旨被申聞。

昨朔日御登城被遊候處、御痛之儀御懇之被蒙上意、難有被思召候。此段何もゟ可申聞旨御意之事。

右奉承知、常服に而頭分以上御家老中席ゟ出、恐悅申述之。

十月廿九日。宗旨替及び寺替に關し舊令を守るべきを命ず。

〔高畠左門留帳〕

改宗幷寺替之儀、正德元年・享保八年兩度被仰渡、夫々御觸渡之儀に候得共、人々承知仕罷在申儀に御座候處、近年右兩度御觸之趣心得違、寺檀納得不仕內、勝手次第寺替等仕候而々茂有之躰御座候。依之諸宗檀方ゟ對し及異論、每度及斷申候。諸宗一統右之段相願可申由、兼而承申候。然處曹洞宗之寺院今般達而相願申旨、寶圓寺等被申聞候。各御僉議之上、右兩度御觸之趣向後嚴重に相心得、寺檀納得之上寺替等相願可然候條、一統被仰觸候樣仕度奉存候、以上。

辛未六月廿九日

横山木工
生駒内膳
多賀宇兵衛

前田對馬守様
奥村丹後守様

改宗並寺替之儀に付、寺社奉行別紙の通申聞候に付、正徳元年・享保八年相觸候紙面之寫相添差越之候條、被得其意、組・支配之人々ゑ被申渡、組等之内裁許有之人々に茂不相洩樣被申聞、尤同役中可有傳達事。

十月廿九日

奥村丹後守
前田對馬守

高畠左門殿
村田吉左衛門殿

十一月三日。前田重熙使者を幕府に派して改元を賀せしむ。

〔政隣記〕

十一月三日、年號改元寶暦と被付、一統御登城之旨申來候得共、御痛不被成御勝に付御斷、

御老中方ゟ間番御使勤之。於京都は十月廿七日改元、御國には中飛脚立。

十一月十七日。先に改元の事ありたることを金澤の諸士に告ぐ。

〔高畠左門留帳〕

年號寶曆与改元之旨、當月三日被仰渡候條可相觸旨被仰出候段、江戸表より申來候條、被得其意、組・支配ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣可被申聞事。

右之趣可被得其意候、以上。

奥村丹後守　印

前田對馬守　印

辛未十一月十七日

高畠左門殿　判

村田吉左衛門殿　判

年號改元之儀に付御觸之趣奉得其意、夫々申渡、御紙面各々下判形仕奉返上之候、以上。

兩　人　判

十二月廿一日

前田對馬守樣

奥村丹後守樣

十一月十八日。前田重熙淨珠院を招請し歌舞伎を觀覽に供す。

謙德公御年表に十二月十八日に作るものは非

〔政隣記〕

十一月十八日。當御在府いまた淨珠院樣江御膳不被上に付、今日御表に而御饗應、御慰に境町者被召呼、於御敷舞臺歌舞伎被仰付。右に付御近習頭主付は、御膳上り候節御縮之內被罷出相詰、富永數馬等者不罷越樣被仰出有之。右御慰物、本鄉御邸詰御步並以上見物被仰付、諸士之無息は見物不被仰付候。

十一月廿九日。昨今兩日江戶廣德寺に於いて前田宗辰夫人の七回忌法會を營む。

〔大野木克寬日記〕

十一月廿六日、梅園院樣七回御忌法事、當月廿九日於江戶廣德寺御執行。御作事御普請、三之御丸御射手・御異風稽古、諸組鐵炮稽古之儀、相止候に不及。御家中普請も不及遠慮、諸殺生・鳴物之儀者、當廿七日より廿九日迄自分に遠慮可然旨、御用番大炊諸向言達、其旨觸文到來。

〔政隣記〕

十一月廿九日、梅園院樣御七回忌に付、昨今於廣德寺御法事御執行。惣御奉行前田兵部。出家數四十四口、御布施銀百枚。兩日共御參詣。今日は御廟江も御參詣。詰人御家老中初熨斗

目半上下。但御用主付御小將頭三輪藤兵衞、御先手澤田伊佐左衞門。

十二月四日。徳川家重使者を以て前田重煕の寒候を問はしむ。

〔徳川實紀〕

十二月四日、けふ三家及び松平加賀守重煕に、御使もて檜重をたまひ、寒候をとはせらる。

十二月五日。大聖寺侯前田利道參州吉田橋架設の助役を命ぜらる。

〔謙德公御代日記〕

一、十二月五日備後守樣、御奉書を以參州吉田之橋御手傳被仰渡。

十二月十一日。取次役のものゝ勤方を諭し併せて江戸詰人の扶持方を復舊すべきことを告ぐ。

〔謙德公御年表〕

一、十二月十一日頭分以上、御家老中席において、左之通紙面前田兵部被渡候。

諸役人ゟ可申聞被仰出之趣、諸役人御用向富永數馬等席相勤候者ゟ先遂内談、夫々取捌申族も有之候。其上及内談候節、右席之人々伺申旨能程に取計、及言上候輩も有之、心得違候。元來御取次第一之役筋に候所、近年勤方致相違、右席之人々任心諸事致指引候様に成來候に

付、右席之人々にも此度改而被仰渡候間、向後右之族無之樣、急度可申聞旨被仰出候事。

右畢而重而左之通紙面被相渡候。

江戸詰人御扶持方、去寅年御減少之人等當暮相渡候御扶持方より、先規之通可相渡旨被仰出候事。

但、右之通被仰出候而も、急に家來呼寄候儀は、雪中にも候間支可申候條、知行高之不多少、御貸人先只今迄之通相渡可申候。來夏より御貸人之儀、先規之通相渡申答之事。

十二月十一日。餌指等御鷹場に於いて八寸以上の串を用ひて捕鳥したるを以て處罰せらる。

〔謙德公御年表〕

寶曆元年十二月七日御餌指福武八右衞門弟子山村與左衞門・荒木與兵衞弟但與兵衞弟子荒木傳左衞門、右兩人之者、去七日於御鷹場之內、八寸以上之串を指鳥捕候趣、不屆之仕形に付禁牢被仰付候事。

御餌指福武八右衞門・荒木與兵衞、右兩人弟子山村與左衞門・荒木傳左衞門儀、去七日於御鷹場之內、八寸已上之串を指鳥捕候段不屆に候。常々申付樣等不宜故、加樣之儀致出來候。依之兩人共追込置可申事。右之通被仰出候。

謙德公御年表に十二月廿七日に作るもの恐くは非

十二月十七日。前田重靖松平氏を冐すことを許さる。

〔政隣記〕

十一月廿七日、嘉三郎殿御目見御願被成度に付、其前御老中方ぇ御逢候樣被成度、且又松平之御稱號、御鐙二本爲御持、御乘物御乘用之儀御先例之通に被成度旨之御書付二通、御鐙之儀御別紙。御先例書二通、是は忠右衛門殿御演述趣也。久世忠右衛門殿を以今日御用番左衛門尉樣ぇ御指出。

〔謙德公御代日記〕

十一月廿七日嘉三郎殿之御儀、向後樣と唱可申旨被仰出。御横目より觸有之。

〔政隣記〕

十二月十七日、前月廿七日有之通、嘉三郎殿御老中方ぇ御逢被成度旨者御勝手次第、松平御稱號も右同樣御指圖有之。御持鐙二本之儀は御目見相濟候後、追而御伺被成候樣、御用番より是又御指圖。

〔謙德公御年表〕

一、十二月十九日より嘉三郎樣御勤始り、御老中方御勤。

十二月廿八日。前田重靖叙爵して上總介と稱す。

〔日記頭書〕

一、十二月廿八日嘉三郎殿今日初而御目見、御叙爵被仰付候。

但前日以御老中方御連名之御奉書到來、今日御同道に而御登城被遊候樣申來。御献上御太刀馬代・卷物五、西丸へ御太刀馬代・銀三枚充。中將樣より御獻上物等無之。

今日之御首尾諸頭へも可申聞旨、御居間書院へ御家老中被爲召御意有之に付、右之趣頭分以上へ被申聞。

昨日御老中方より御奉書を以、今日嘉三郎樣御目見可被仰上候間、御同道被成御登城候樣申來、御登城被遊候所、於御白書院嘉三郎樣初而御目見、御首尾能被仰上、御前にも御禮被仰上候處、被爲蒙上意、其上嘉三郎樣御叙爵被仰出、御存懸も無御座儀、忝思召候。此段何も可申聞旨御意之事。

右に付爲御祝儀頭分以上御帳に付、今日不在合人々は明日御帳に付。

一、同日嘉三郎殿御名上總介樣与御改之儀、御横目より廻狀有之。

一、同日中將樣に、於御居間書院上總介樣御禮被仰上候。御太刀馬代被上候。披露前田兵部。御家老役若年寄兼相濟御熨斗三方出、從中將樣御刀相州行光代金十枚前田兵部持出。右爲御祝儀、從中將樣御近習頭御使にて、御太刀馬代干鯛一箱・昆布一箱・御樽五百疋・御目錄。被進之。

一、同日上總介樣昨日之御首尾に付、今日も御殿向一統布上下着用。
一、同三十日上總介樣五節句月次御登城之儀、御持鑓二本爲御持被成度趣、久世忠右衞門殿を以御達置候處、今日夕方聞番被召呼、御願之通被仰渡。

寶暦二年

正月朔日。前田重熙・重靖共に登營して年頭を祝す。

〔政隣記〕
元日、御登城其外年頭御作法如御例。去々年春は御膳下御料理、御家老迄ね被下候得共、今年は御近習頭ねも御料理被下之。其外御先規之通被仰出。但御家老中御禮之内御中屋敷相圖打、其後御上邸近之沙汰等に付、追分口御門迄御出馬故、年頭御禮暮六時過に不殘相濟。右火事は小火に而早く鎮。
一、上總介樣大紋御着用御登城、年頭御禮被仰上。御流・御時服御頂戴、且御節句月次御出仕、幷御鑓二本爲御持之御禮、御老中方御勤。將又今日年頭初而御禮被仰上候爲御禮、御用番本多伯耆守殿幷秋元但馬守殿御勤。

正月六日。前田重熙火事場に於ける作法に就き諭示す。

〔中川氏文書〕

寶暦二年壬申正月朔日御中屋敷邊火事に付、御使番等ゟ被仰出之趣有之に付、相觸候段左太夫申聞る。

當月朔日御中屋敷相圖之板打、御出馬被遊候處、無程鎮候に付、追分御門之内に御馬被爲立被成御座候内、三の手御人數御前を押通し候節、騎馬之人々下馬仕、目印幷鑓を茂ふせ罷通候。右之通に而者有之間敷事に候。別而目印之儀者、ふせ候而者目印之専茂無之事に候。自今目印等ふせ不申樣に御心得可被成候。且又四の手御行列之内ゟ茂、下馬仕候人々茂有之候。寄場之儀は格段、其外に而者都而馬上之儘罷出、下馬仕に而者無之候。寄場より退散之節者、尤下馬可仕候。是等之儀に付、私共迄以御書立被仰出候趣共御座候に付、一統申觸候間、御承知被成、御組・御支配等之人々ゟも不相洩樣に御申談可被成候、以上。

正月六日

寺嶋左太夫
磯松三郎左衞門
河内山七左衞門
野村源兵衞
福島武左衞門

中村次右衛門
湯原藤左衛門　忌

正月七日。前田重靖登營して先に叙爵せられしことを謝す。

〔政隣記〕

正月七日、御官位御禮今日被仰上候樣、上總介樣ゟ昨日御老中方より御連名之御奉書到來。且西則御登城之處、於御白書院御官位之御禮被仰上、御獻上兩御丸共御太刀・馬代銀一枚宛。御丸にも御登、御老中・若年寄衆御廻勤。御歸邸之上御半上下に而中將樣御居間ゟ御出。其節御熨斗、塗三方に而上之。御叙爵濟候御禮、御太刀・銀馬代五枚被上之。若年寄中受取之、勝尾半左衛門ゟ被相渡之。

一、今日右に付、御客方御一門樣等ゟは御熨斗三方出、御料理數二汁六菜。

一、今日御居宅ゟ、御近習頭を以、御官位相濟候爲御祝儀御太刀馬代・干肴一箱・昆布一箱・御樽代五百疋御目錄被進之。

九日上總介樣今日御三家樣ゟ、前田信濃守殿御同道に而御勤。十日上野惣御佛殿御參詣、御本坊御勤、廣德寺ゟ御參詣。十四日增上寺ゟ、廿日傳通院ゟ御參詣。

正月十三日。金澤に於て諸士に前田重靖の先に叙爵せられたることを告

ぐ。

〔大野木克寛日記〕

正月十三日、出仕之面々大廣間列居、年寄中出席、御用番丹後守演述之趣。

嘉三郎樣御目見之儀、御願置被成候處、舊臘廿七日御老中御連名之依御奉書、同廿八日御同道に而御登城、於御白書院御目見、御前にも御禮被仰上候處、被爲蒙上意、其上思召掛も無御座嘉三郎樣御叙爵被仰出、重疊忝御仕合被思召候旨、拙者共迄以御書被仰下候。右之趣可申聞旨被仰出候事。

〔政隣記〕

今年正月十三日、嘉三郎殿舊臘廿八日御目見御叙爵等之御弘、松平上總介樣与奉稱、御母之方善良院殿与可唱旨被仰出候段、於金澤御弘有之。

正月十五日。前田重靖初めて月次登營を行ふ。

〔政隣記〕

正月十五日、上總介樣月次初而御登城。御下り爲御禮、御老中方・若御年寄衆御勤。

二月六日。江戸に於て横井元泰等不謹愼なるを以て處分せらる。

〔政隣記〕

二月六日左之通。

御醫師　横井元泰

不愼之儀達御聽、御匙之御用も被仰付置候處、別而不覺悟之至に候。依之遠慮被仰付。翌年正月廿五日御免許。

御大小將　淺加九兵衞

安達猪三郎

中村久兵衞

松原孝次右衞門

御國ゟ御返、翌朝發足。三月廿二日於金澤、不愼之儀有之に付遠慮被仰付、九兵衞者御馬廻組、其外は組外ゟ被加之。翌年正月廿八日遠慮御免許。

二月十八日。前田重靖叙爵の口宣を受く。

〔政隣記〕

二月十八日、上總介様今日前田信濃守殿御宅ゟ御越、口宣御受取。但信濃守殿京都ゟ爲御使御越に付、依御願御受取歸候也。右に付御老中方御勤。

二月廿五日。菅公八百五十年祭を京都北野に行ふを以て刀劍・白銀等を

献納す。

〔加藩諸事雜記〕

一、寶曆二年二月二十五日八百五十年祭、御代拜人前田左門、御奉納太刀備前師光代金二十枚、白銀二百枚。北野松梅院能作を以、百味弁に一萬燈被献。右御奉納之太刀、御在江戸に付於江戸太刀之飾等被仰付、上箱銘等書付細工奉行久田清左衛門書之。御献納之白銀者銀子一枚宛封紙を以包之、上書者京都在住之御家人平田内匠書之。臺四つに銀子五十枚宛積之云々。

〔大野木克寛日記〕

三月十一日、今日かね屋清四郎京師より之書立の由にて、爲見候に付左に寫之。

覺

一、北野社頭眞御太刀一腰備前師光

御馬代黄金二十匁

御目錄

外御寄進料白銀、二百枚、附臺

一、白銀十枚宛、附臺、各御目錄　　預玄院樣・淨珠院樣

一、御太刀金馬代、御目録　上總介様
一、白銀五枚宛、附臺、御目録　楊姫様
斐姫様
建次郎殿
一、白銀五枚宛、附臺、御目録　出雲守様奥方様
御目録　神田御前様
一、御太刀金馬代　松平備後守様

右之通に御座候。眞御太刀は、江戸より當十七日到來、御徒横目山田甚兵衛宰領、足輕二人、持人小者六人に而到着。御認木地篗箱、しめ縄はり、其内木地箱に入、唐木綿白袷服紗包、内栗色御箱淺貴打緒。前田兵部殿封。於御用所兩奉行・御徒横目立合、上認取拂、左門殿に御渡。右栗色御筥之内白羽二重袷服紗包、内黑塗御筥、金粉に而獻納之御書付有之。右者廿五日卯下刻、木地篗箱之儘木地わく臺に載之、御徒相添、北野に而御宿坊能作方において、左門布衣着用、熊谷半左衛門長上下に而社頭に同道御獻納御錺相濟候と、左門殿御名代拜有之候。

一、當十九日壹萬燈明御執行、大々百味御錺、御祈念有之候。此外之儀追而可申上候。右增之儀別紙調入御覽申候、以上。

二月廿五日

〔政隣記〕

二月聖廟八百五十年御忌に付、京都北野へ御代拜人持組前田左門被仰渡。今月七日金澤立、三月五日歸。小松天神にも萬句之連歌執行に付、御内々御代參御持筒頭御近習竹田金右衛門被遣、二月廿五日相勤之。

三月十一日。前田重熙本鄕邸に高松侯松平賴泰を招請す。

〔謙德公御年表〕

一、寶曆二年三月十一日於御上屋敷松平讃岐守樣御招請、御相伴前田信濃守殿・前田大和守殿・德山五兵衛殿・齋藤長八郎殿・武田長春院・長尾全庵老、御取持前田了齋老・谷村三育・御城坊主内田玄德・利倉善佐・鈴木林竺・高田三郎・吉田門賀、其外寶生大夫等相詰、御能三番立田・江口・融相濟、貴布根之語新丞、一調蟬丸五郎次郎、笠の段三郎右衛門、一管早笛十兵衛、御仕舞羽衣彌三郎、西行櫻讃州樣、櫻川彌三郎、卷絹寶生大夫、蟻通新丞。已上。

御客馬之次第

谷戸　越中新川下立村十一歲、黑鹿毛。　御馬乘　高桑五兵衛

曉龍　仙臺岩ケ崎十歲、青毛。　御小將　加藤勘太夫

山櫻　越中新川飯野新村出、鴾毛。　御馬役　片山久右衛門
諏　南部七戸出七歳、栗毛。　割場奉行　宮井彦兵衛
春風　仙臺鬼頭出七歳、鹿毛。　上總介様
清瀧　同宮床出、寛延三年御拜領、同毛。　久右衛門
世榮　甲州三吹出、十歳、延享四年御拜領、同毛。　勘太夫
朧　越中新川吉原出。　五兵衛
久泉　仙臺一ノ關出、河原毛。　久右衛門
浮雲　鹿毛。　五兵衛
駈　南部五ノ戸出、六歳、栗毛。　勘太夫

三月十八日。大聖寺侯前田利道參覲の途金澤に宿す。

〔謙德公御年表〕

一、三月十八日、備後守様江戸表ゟ御參勤被遊候に付金澤御止宿。御宿かね屋九郎兵衛方也。

三月廿七日。前田重煕、高松侯松平頼泰の邸に臨む。

〔謙德公御代日記〕

一、三月二十七日、讃岐守様ゟ中將様御招請に而被爲入、御馬・御鞠・御囃子・狂言有之。上總

介様には御斷不被爲入候。

三月廿九日。金澤卯辰の本光寺燒失す。

〔大野木克寛日記〕

三月廿九日、今黄昏卯辰日蓮宗本光寺出火、寺中不殘燒失。去年こ哉らん夥敷建立。是先年蓮昌寺炎上之時分類燒、其已後段々勸化等有之、去年落成之由也。燒立事之外炎强、近隣寺々半鐘を撞、尤火消番之輩馳集、段々群參防之。然共道・橋等事之外狹、甚騷危候處、折節雨降出、夫故か餘煙不移他寺、一ヶ寺に而鎭、漸戌後刻に及。

小松意仙の事は五月十四日の條に在り

三月。御算用者西澤甚五左衛門江戸より逐電す。

〔謙德公御年表〕

一、三月於江戸、御算用者西澤甚五左衛門心易者之御扶持方代請取、口入等之代掠取致逐電候。行衛爲尋、親類御徒高橋甚兵衛江戸表尋に罷出。於御國許別宮居住與力西澤某幷甚五左衛門亡妻之親分長九郎左衛門扶持醫師小林意仙、京・大坂可相尋旨、於公事場奉行中申渡候所、意仙儀違背仕候に付長氏ゟ被預置、重而公事場ゟ呼出申渡候得ども不得心故、違背之罪を以令禁牢、忰は九郎左衛門ゟ御預に候。

三宅惣三郎等は和泉流狂言師

四月十五日。前田重熙御目見坊主等をして狂言を學ばしむ。

〔政隣記〕

三月廿九日、京都御手役者三宅藤九郎被召候處、三宅惣三郎・同三平召連、今日江戸着、西小屋邊に在住被仰付。四月十五日御目見坊主共弟子入被仰付。翌年七月五日御暇被下、拝領物被仰付。

四月十七日。前田重熙、德川家治の紅葉山社參に供奉す。

〔日記頭書〕

一、四月十七日、大納言樣紅葉山へ御社參に付、中將樣にも御豫參被遊候。御當代初而也。御直垂被爲召、御供布衣白丁。大納言樣御社參、御大名方此度御豫參も初而之由也。

四月。石川郡佐那武社の請により神事能執行の費用を補給す。

〔江戸表方扣〕

四月

一、寺中祭禮能興行入用銀指支候付、寛延二年御領國中相對勸化奉願、右寄銀貸付置利潤を以、產子共打銀等引足、每歲能無怠慢興行仕趣に御座候處、勸化寄銀未相揃不申、當年入用

不足仕候間、御引足銀拜領仕度旨相願候趣、寺社奉行紙面、神主書付幷右入用圖り書、佐藤
半五衞門紙面共、都合四通。
但、願之趣無據相聞、其上例も有之儀故願之通申渡候。

四月。前田重熙脚疾を患ふるを以て就封の延期を請ひて許さる。

〔三守御譜〕
御足御痛被遊候に付、上使被爲受候儀難被成旨御屆有之、御暇不被仰出。
湯云、四月歩履を病み玉ふを以て、邸に淹留せられん事を請ひ、許命あり。

五月十四日。老臣長九郎左衞門の醫小林意仙遠慮を命ぜらる。

本年三月の條參照

〔大野木克寬日記〕
五月十四日、長九郎左衞門手醫者小林意仙御尋之品有之、昨十三日より指扣候樣に從九郎左
衞門被申渡、令遠慮候。其品區々に申候得共、とくと不相知候。
十五日、長氏家來樣子承候處、先頃御算用者西澤甚五左衞門と申者、於江戶致逐電候。甚五
左衞門妻女者、小林意仙養女に候。元來足輕某と申者之女に而、續者無之者に候。然共足輕
之女に而は、甚五左衞門本妻に難成に付、意仙親分に成嫁娶いたさせ度旨、右實父某申候に
付、其通申談嫁娶いたし候。其已後意仙・甚五左衞門對面も無之、通路も不仕候。右妻、兩人

迄子も出生仕候由。尤長氏は不被呼出已前之事に候。然處右甚五左衞門逐電仕候に付、一類共相尋候樣に可申渡旨被仰渡候。甚五左衞門出し置候由緒一類附帳に者、妻小林意仙養女と書出し置候。意仙長氏は被呼出候已後、意仙より長氏は出候由緒一類附に者、相もれ申体に候。然共甚五左衞門一類附之趣を以、一昨十三日意仙儀公事場は罷出、甚五左衞門行衞相尋候樣に、公事場奉行中申渡候處、且而承知不仕、彼是及問答、畢竟難罷成旨申切、違背之趣に付、場所をも不憚、任我意之趣甚不敬之至に付、主入九郎左衞門方は急度相預候旨、公事場奉行より相屆、前後之首尾及言上候由申慣候。意仙承伏不仕候與意、當時内外療治繁多、殊内福、町方差引金銀も有之候處、他國へ罷越候而者療治成がたく、差引方も不埒に罷成候を難澁に存附、貪欲之私意甚より、公邊大切之處も忘却仕候而之事と相聞候。

五月十六日。前田重熙の脚疾可ならざるを以て是日以後江戸の諸醫を招き診せしむ。

〔政隣記〕

五月十六日、中將樣御痛不被爲御勝、頃日御腰立兼候御容躰に付、入江廣丹・勝田養元診被仰付、十八日望月三英老、六月八日村田長庵老・森玄琳老、同九日井上交泰院・吉田元卓老・町醫師右養元再診、十日三英老御再診有之。

五月廿三日。宗門奉行等一向宗及び日蓮宗を、淨土眞宗及び法華宗と稱すへからざることを議す。

〔袖裏雜記〕

小塚左源太召仕候家來男女、當年宗門改帳、前々より淨土眞宗は一向宗、法華宗は日蓮宗と調來候へ共、寺院より指出候寺證文与宗名相違仕候付、一向宗・日蓮宗と引直帳面に難相調旨、今般左源太御斷申上候紙面、幷寺社奉行等添紙面共五通御渡被成候間、披見仕、宗門方御格之趣可申上旨奉得其意候。日蓮宗之儀者、元祿十一年十二月切支丹類族生死御屆書上り候砌より、日蓮宗与相改申舊記相見申候。其以後享保九年切支丹類族根帳改り公儀江上り候節、前帳之通法華宗与調上り候へば、先達而申談候御屆書之通、帳面も日蓮宗与相調可申旨、宗門御奉行衆被仰渡、則御帳も日蓮宗与相改り、一統其通相調來申候。淨土眞宗之儀は、一向宗与引直相調候樣にと被仰渡候舊記相見え不申候。前々より切支丹類族根帳幷御屆書等に一向宗与調上來り、淨土眞宗与申名目調申儀無御座候。御郡方幷寺庵より差出候宗門改帳面には、淨土眞宗・法華宗与調差出申候。此儀も御家中一統之通引直相調させ候樣、先役共も心付可申儀御座候へ共、江州御知行所幷能州御預け地宗門改帳には、旦那寺直に奧書印章を仕差出申候。依之御郡方之儀は不一統候故、相改不申請取來り候哉。其外淨土眞宗・法華宗与調

申候例は無御座候間、今般左源太指出候宗門改帳に限、御家中一統之格を違候而は、私共了簡を以帳面受取置候儀難仕奉存候、以上。

五月廿三日

後藤瀬兵衛
松原善右衛門

前田大炊様

五月廿六日。本日以降大乘寺に於て道元禪師五百回忌を執行す。

〔謙德公御年表〕

一、道元和尚五百年忌に付大乘寺に而五月廿六日より廿八日迄大法會執行。

六月朔日。大聖寺侯前田利道の助役を命ぜられたる三河吉田の橋梁成れるを以て賞を受く。

〔政隣記〕

六月二日、備後守様ゟ、前記去年十二月五日に有之、參州吉田之橋御手傳御普請今度相濟候に付、昨朔日御時服十御拜領、幷御家來御用掛り六人ゟ茂、白銀・時服夫々拜領被仰付。

寶曆四年四月四日の條參照

六月二日。秋田侯佐竹義眞、前田吉德の女楊姫に結納を贈る。

〔謙德公御代日記〕

一、六月二日、左兵衞督樣より楊姫樣ゟ御結納御祝儀物被進候。御使山方内匠、添使御留守居立田源太夫。

御小袖　三　重。　御　帶　二　筋。　鯉　十　二。

雉　子　十　二。　鹽　鯛　十　二。　昆　布　二十把。

鰑　二十連。　御　樽　二　荷。

此方樣より右御挨拶御使者、御家老役中川八郎右衞門被遣候。今日御祝之赤飯、御殿に在合候者は不殘、足輕等迄頂戴之。

一、同日今日より左兵衞督樣・御家内樣、御口上御双方兩殿に相極。

六月四日。組外組中村久兵衞私曲を以て御預となる。

本年六月七日の條參照

〔御預人之記〕

中村久兵衞、三百石組外。寶曆二年六月四日伊藤主馬正固（二千八百石、内三百石與力知。）ゟ御預。久兵衞御大小將小拂奉行相勤罷在處、當正月切手の内七兩の切手を百兩と直し有之分顯候に付、江戸より金澤に被返、元組之組外ゟ被指加、遠慮被仰付置處、此日於公事場御吟味之上如此。且又此日右役所懸り御算用者島田五郎右衞門等二人、幷足輕渡邊義右衞門入牢被仰付。且又久兵衞

四年四月廿六日とあるは廿八日なるべし

寶曆四年七月廿八日の條參照

同月十六日、於公事場御再往御吟味之處、五百目致借用之旨白狀す。同四年二月廿六日御知行被召放。

六月七日。大小將組鈴木萬兵衞私曲を以て御預となる。

〔御預人之記〕

鈴木萬兵衞、二百五十石御大小將。寶曆二年六月七日藤田彈正安貞二千石へ御預。萬兵衞、中村久兵衞同役之處、今年在江戶中、五月廿一日一類中指添江戶發足、六月七日於金澤御小將頭一木逸角宅へ歸着之處、公事場奉行等逸角宅に相越、藤田彈正へ御預之旨被申渡、追付彈正方より之請取人へ相渡と云。金請取切手二枚、銀請取切手三枚直し、尤根帳にも書入仕り、外之者は一向不存旨六月十六日白狀す。金百廿兩計銀三貫四百目計と云。同月十三日入牢、同年十二月廿九日牢死。

〔謙德公御年表〕

一、寶曆二年去年小拂奉行相勤候但寛延三年十月より寶曆元十月迄相勤。御大小將組鈴木萬兵衞二百五十石・中村久兵衞三百石、右手先相勤候御算用者嶋田五郎右衞門百石、留書足輕渡邊礒右衞門水野助三組申談、萬兵衞所爲を以小拂銀之内を都合二十貫目計掠取候內、五百目久兵衞に貸す。追而萬兵衞へ及返濟候。五郎右衞門・足輕へは相應に致配當遣候。其後萬兵衞相代り在江戶、久兵衞も相代り在金澤之所、

勘定請拂引合、御算用場諸方所に而狩谷彦左衛門等見咎、會所印無相違切手に、七十兩御次御用与申七之字に入筆百と直し、或は一打間違候所へ何十貫何百目抔入筆し有之切手數通見出、及斷言上、江戸表に而御小將頭三輪藤兵衛小屋に而、五月廿二日萬兵衛儀御吟味之上致白狀候に付、江戸に有合候類中勝尾半左衛門・池田善左衛門・黑坂太郎左衛門江御預け、同二十五日縮乘物に入、御徒横目津田幸左衛門・八十嶋十藏指添、六月七日金澤着、御大小將頭一木逸角宅迄到着、直に藤田彈正方江御預に成候。久兵衛儀は六月四日公事場に而御詮議之上、直に人持組伊藤主馬江御預也。右兩人一所に相勤候嶋田并足輕禁籠す。此兩人せがれ所持に付類中へ御預也。久兵衛儀は且而不存知旨申に付、萬兵衛与公事場において對決有之候節、萬兵衛申候は、日外御手前米調度旨被申、則銀子五百目於役所相渡候。則服紗を取出し包候而被歸候。追而返濟は被致候得ども、不覺とは難心得口上に候由。久兵衛口上は、申懸は樣々に可被申事に候。心外之仕合与迄申候故、奉行中双方被聞屆候得共、此外無言に付、萬兵衛其外數通之間違切手も有之族、覺違間敷事にもあらず。得与思案いたし重而可申聞候。同類有之迚罪之輕重可遁儀にも無之候。存違有之間敷事にも候はずと被申候得者、萬兵衛、ヶ樣之士法に背候儀仕候上は、刑を遁可申心得且而無御座候。先達而御吟味之上申上候品之外無之候所、强而委曲御尋に付不殘申上候由。石黑宇兵衛・萬兵衛兩人充所之切手にも入筆有

六月十三日云々は萬兵衛の事に係る
仁藏は藤內頭

之候所、宇兵衛儀且而不存事に候。私一人之所爲之段申候。去ども罪有人之口上に而は難相濟、宇兵衛も公事場へ呼出被尋候所、且而不存旨相答無異儀候。

一、鈴木萬兵衛いとこ以上之類中、六月八日遠慮被仰付、弟粟田源左衛門、をぢ本保安太夫・同長左衛門、妹婿吉岡理太夫・三階新五左衛門・いとこ澤田彌左衛門・中村太郎左衛門。六月十三日公事場に而御詮議之上、私曲之趣申顯、十三日より上り屋禁牢被仰付、申十二月牢死に付死骸仁藏方へ渡候由。

六月二十日。金澤神護寺に於て德川吉宗の一周忌を執行す。

〔高畠左門留〕

六月廿日、有德院樣御一周忌御法事、於神護寺御執行有之候。普請・鳴物不及遠慮。能拍子・押立候振廻等之儀者、御法事中自分に遠慮仕可然候條、組・支配夫々被申觸、尤同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十一日　　前田大炊

六月廿六日。寄合組小塚監物遁世せんことを寺社奉行に出願す。

〔謙德公御年表〕

一、六月廿六日、寄合組小塚監物九百石、眞言宗歸依に而、辭祿遁世之志嚮にも頭中に及斷候得ども指留候。然所是日强而書付を以、支配頭寺社奉行迄、出家仕候而高野へ引籠度旨に付、御月番年寄中迄生駒右近相達候所、罷越見屆候樣に被申渡。卽刻右近監物宅へ罷越承屆候所病氣之体に付、同役各罷越、一類等へ相預、宅に禁錮す。

六月廿七日。前田重靖袖留の儀を行ふ。

〔謙德公御代日記〕

一、六月二十七日、上總介樣御袖被爲留候に付、御料理被進候上、御刀石州綱、代金十枚。被進候。御附之侍分不殘、御居間書院四之間に而御料理被下候。御表向は常服。

七月朔日。前田吉德の女楊姬秋田侯佐竹義眞に入輿す。

〔政隣記〕

七月朔日楊姬樣今日八時過佐竹樣に御入輿。御婚禮御迎相馬彈正少弼殿・松浦壹岐守殿、御送松平河内守殿・松平兵部少輔殿、御輿前田兵部、御貝桶渡中川八郎右衞門。右に付御客御一門樣初五十輩計有之、御囃子被仰付。

中將樣に者、御痛に而今朝御登城御斷故、御表に御出不被遊候。今日御附物頭等末々迄、御

出輿前御料理被下之。御供之諸士披候而、御吸物・御酒被下之。

〔大野木克寛日記〕

六月廿五日佐竹様ゟ御道具參候節、兼而申談不宜故歟、御婚禮御用意に御土藏も建候得共、餘り御道具多、置所無御座、御家中小屋々々の前に材木をならべ、其上に塗物之御道具共を積置申候。夫々請取人も少く、彼是不都合に御座候。御婚禮後御家老指扣被仰出、畢竟聞番不念に付是も遠慮被仰付候由。

七月五日。石川郡宮腰浦に於て老臣長九郎左衞門火矢・大筒の發射を練習せしむ。

〔大野木克寛日記〕

申七月四日・五日朝四時、宮腰浦に而九郎左衞門火矢・大筒被仰付候。四日者内稽古、五日本放。

一、火矢仕掛、右からくり吉田流の仕掛、左からくり矢嶋流之仕掛、射人川嶋孫兵衞。

一、大筒打込人、定右衞門子石黑貞右衞門、百三十石。

一、大筒二放三百目玉

一、百目玉十放

一、六十目玉三十放
右給人四・五人、徒足輕三十六人。給人は細ばかま。徒足輕股引。惣人數三百五十人計。
見分給人馬に而。所々足輕三十人計。
口々船奉行給人五人計。
九郎左衞門樣御見物所三間に五間。
厩十五疋立。
以上

七月廿五日。前田重煕の脚疾尙癒えざるを以て再び就封の延期を請ひて許さる。

〔謙德公御代日記〕
一、七月二十五日、中將樣御痛御宜方には被成御座候得共、未御間之内御歩行難被成に付、上使被爲請候儀難被爲成候。御痛御宜被爲成候はゞ、御届可被仰達候旨、今朝小笠原縫殿助殿を以、御用番西尾隱岐守殿へ御紙面御指出候由也。

〔大野木克寛日記〕
八月九日、中將樣御痛御同篇之御容体に付、七月廿七日御歸濟御暇上使被進候而も、御受難

被成候故、上使御沙汰暫御延引被遊度趣、御内々に而御願も有之候哉、上使之御沙汰無之、尤御道中御用者一向御沙汰無之候由。先頃如御例御鷹・雲雀被進候上使之節、且佐竹様江御婚禮之時分等、萬事爲御名代上總介様御出、雲雀御頂戴上意拜聞、尤御迎送御勤被成候。御婚禮之節、御客前等上總介様御挨拶被遊候。右之趣故、御歸國上使者御延引御斷之御様子に而、御表向に而は一向何之御沙汰無之候。

八月十五日。前田重煕、重靖と共に名月を賞す。

〔大野木克寛日記〕

當中秋御當座之御沙汰雖有之、御内々之御沙汰故不能拜見。然處過日金屋淸四郎奉拜寫由に而、愚息克成に投与之由令拜見。仍而奉拜寫之書寫のあやまり有るべし、他日可改正之者也。

中秋御當座　　利見君

西風階度吹金波。乘興忽聽白雲歌。客思悠々明月夜。一輪流照歸關河。

中秋陪宴　　師法

月光此夜正淸明。滿席詩篇楚客聲。倶仰恩輝銀燭下。不知玉漏向三更。

復見瑤臺鏡。明河蘸月光。風來桐葉落。露下桂華香。蟋蟀樹間寂。

利見は前田重靖の前名

御は前田重熙なり

嫦娥天上海。空餘秋草色。
鴻雁呼羣過古城。戍樓海上與凄清。更聞玉笛閑山月。月影玲瓏白露生。

月前雁　　御

折しも有れ嶺越雁の一行の聲もくま有る月の一しほ

待月　　矩豐

影待て山のはつかに見る月の今宵の空を雲な隔そ

惜月　　同

稀にあふ其名思へば秋の月いるさの影や猶惜むらん

湖月　　元成

大淀の浦波かけてくまもなく見るめさやかに月や澄らん

橋月　　同

名も高き月に幾よか渡すらん秋や昔のまゝの繼橋

寄月祝　　同

世々をへてかはらぬ秋ぞ幾入か月の桂の色や増らん

矩豐

秋こそといひしが中の秋の月

翫月　　利見君

誰里もあかてぞ更す月に酔秋の情は心々に

關月

荒はてゝ人こそ住ね不破の關たゞ秋風にすめる夜の月

御當座之記猶追而可糺者也。

前月は八月

八月廿一日。足輕宮川文平獺と誤りて人を害す。

〔謙德公御代日記〕

一、前月二十一日小立野大音喜六郎邊に而、御持方足輕宮川文平(伊藤津兵衛組)、土取場町人の子(十五歲)、出家之參り懸り候を、獺と心得切殺し、依之文平禁牢す。

八月廿三日。丹羽八右衛門の妻丹羽右膳と相對死を行ふ。

〔大野木克寛日記〕

八月廿四日、昨廿三日朝丹羽澤右衛門(祿四百石。最前組頭並、當時御役御免除。)息右膳(實丹羽武兵衛末子。澤右衛門某年聟養子、某年被召出、新知百五十石、奥小將。澤右衛門御役被除候時分、組外に被仰付。)丹羽八右衛門(丹羽武兵衛養子、實丹羽平左衛門子。當時者平左衛門遺知相續、祿三百石。但八右衛門儀、實は前田故修理與力大屋理右衛門實子。平左衛門せがれ無之、理

右衛門由緒有之故、聟養子に相願相續。然處丹羽武兵衛嫡子帶刀變死、夫已前次三男何茂養子に遣、實子就之、同氏八右衛門養子に相願、平左衛門遺知相續之上、重而武兵衛養子に罷成、平左衛門後室幷八右衛門妻子共に、武兵衛家へ引移同居。八右衛門當時御大小將組、武兵衛家督相續者不被仰付候。未妻（丹羽平左衛門女に而、八右門むこ養子。）日來密通之躰に而、八右衛門居宅に而相對死。因之双方頭、幷御横目宮崎小左衛門・吉田茂平檢使に出座、見分之上に而、右膳死骸者澤右衛門宅に引取之候由。右之儀に付、或謗區々。八右衛門取沙汰別而有之候。前代未聞珍事、在人口而已也。

〔大野木克寛日記〕

九月廿三日、丹羽八右衛門今度妻女就變死之儀、急度逼塞可罷有旨、頭宅に召寄、相頭幷御横目出座申渡之候由。但當九日出町使に被仰下、一昨廿一日右之通候由也。

〔謙德公御年表〕

一、九月廿二日、丹羽八右衛門儀家内不締与思召候。依之逼塞被仰付候。澤右衛門儀は何之御咎も無之候。

前文と日附異り

八月。曹洞宗旦那御異風牧甚五左衛門の母及び妻の日蓮宗寺院に參詣することを禁ず。

本文は年表に寶暦元年に係くといへども非なるべし。同三年四月四日の條參照

〔謙德公御年表〕

一、御異風牧甚五左衛門母幷妻、甚五左衛門宗門曹洞宗大乘寺塔司東光院に候處、日蓮宗本

妙寺ゟ參詣仕に付、禪派三十二ヶ寺連印を以寺社奉行迄書付差出候趣被達御聽候所、追而被仰渡候御書立寫。

御異風牧甚五左衞門母幷妻宗旨寺之儀に付、曹洞一派之寺院連印書を以相願候趣、達御聽候所被聞召屆候。兩人共東光院旦那に被仰付旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

九月二日。德川家重使者を以て前田重熙の病を問はしむ。

〔謙德公御代日記〕

一、九月二日、中將樣御痛御尋之上使、御奏者番內藤大和守殿御出。上總介樣御名代に而上意被爲請、上使御禮、御老中方ゟも上總介樣御勤被遊候。

〔德川實紀〕

九月二日、松平加賀守重熙病ありしかば、奏者番內藤大和守賴由して御尋あり。

九月二日。衡器の檢閱に關する幕府の令を領內に布く。

〔筒井舊記〕

諸秤之儀、古來より守隨彥太郞役人相廻り相改候處、近年者私事之樣に心得候哉、諸秤數多取持致候者も、秤少々出し見せ、不宜秤者隱置、或は所持不致旨申、改請ざるもの茂在之樣に相聞候。前以相觸候通、守隨方より役人相廻改候節、諸秤不隱置、不殘出改を請候樣可致

候。尤紛敷秤者取上候筈に候。此旨急度可相守候もの也。

右之趣東海道・東山道・北陸道幷丹波・丹後・但馬都合三十三ヶ國、御料者御代官、私領は領主・地頭より可被相觸候。右之通先年相觸候得共、近年者夫々私事之樣に心得候哉、不相用ものも在之、取上に可相成秤茂、守隨方ゟ不相渡候處茂在之樣に相聞候。前々より相觸候通、西三十三ヶ國之秤者、東三十三ヶ國に而通用無之、取上に相成候筋に候秤者、守隨方ゟ急度相渡可申候。勿論諸秤新古に不限、守隨方之外に而一切賣買仕まじく候。尤諸秤、手前に而衡幷錘取遣、其上緖をも手前に而取替候者在之候はゞ、急度咎め可申付候。

右之通先達而相觸候面々ゟ、猶更可被相觸候。

寶曆二年八月

右之通可被相觸候。

九月二日　　御算用場

不破次郎太夫殿

村上采女殿

右御觸紙面等寫相違候條、各支配所不相洩樣に、急度相守候樣可被相觸候、以上。

九月十九日。今明兩日江戸傳通院に於いて前田吉德夫人光現院の三十三

御名代は將軍のなり
この御名代は前田重熙のなり

回忌法會を行ふ。

〔政隣記〕

九月十九日・廿日、光現院様三十三回御忌に付、於傳通院御法會御執行。惣奉行前田兵部、御用主付御小將頭三輪藤兵衞、御先手兼御用人青木彥太夫。中將様御痛不御宜、御參詣無之。廿日御名代寺社御奉行鳥居伊賀守殿御參詣、御香奠白銀廿枚御拜領。御目附松前主馬殿・御納戸組頭磯貝藤兵衞殿、幷御納戸衆一人、御步目付等如前例被參候。都而御名代上總介様御勤に而如前々。十月四日御痛御勝不被成に付、御前ゟ不被爲召出、時服二前田兵部、紗綾二卷宛三輪藤兵衞・青木彥太夫、其外へも如前々染物等拜領被仰付。

〔德川實紀〕

九月廿日、光現院御方（常憲院殿御養女實尾張中納言綱誠卿女松平若狹守吉德室）三十三回の法會傳通院にて行はる。よて香銀二十枚進め給ふ。奏者番鳥居伊賀守忠意代參す。松平加賀守重熙が子上總介重靖まうのぼり、香銀幷代參使を謝し奉る。これ父病に臥すをもてなり。

九月廿七日。米價下直なるを以て諸士本納の半額を御召米に供することを許す。

〔大野木克寛日記〕

九月廿七日、今秋諸國一統豐年。因之當七月半收納米價、去年と違以之外下直に而、本納に至候はゞ、彌下直に而、侍中一統可爲難儀樣子に候處、當本納半分宛御召米可被仰付旨被仰出候旨、御算用場前田源五左衛門、御用番房州迄以紙面呈之、其段夫々被相觸、皆以御仁惠之御沙汰誠難有儀也。來月二日より御召米初之候。價は十一月可被相渡候。尤御召米不上分勝手次第に候由之趣、源五左衛門紙面に載之。源五左衛門本職者御馬廻組頭也。當七月平均卅六・七匁計、夫より逐日下直に成、來月は卅匁にも成まじと人口にあり。右御召米沙汰に而、段々米價貴く罷成候由也。當時越・能大かた卅七・八匁も仕候所有之由に候。

〔謙德公御年表〕

一、米値段下直に付、侍中當本納之內半分御召米に被仰付候。地米・遠所打込、惣高之四ヶ一指上之、尤町賣勝手次第与被仰渡、御算用場より頭々に申談有之候。十月朔日より三日迄之平均値段、地米四十四・五匁、新川筋四十二・三匁、能州筋四十目位。代銀十一月渡り、平士は頭々宅に而請取候。御算用場之內に御召米役所有之、與力星山吉郞太夫・宮城宇左衛門勤之。

十一月十一日。今明日天德院に於て前田宗辰の七回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

十一月十二日大應院樣御七回忌來月之處御取越、昨今於金澤天德院御執行。御法事御奉行奥村丹後守。於江戸も今日一朝廣德寺に而御茶湯。御痛に付御參詣無之、御代香中川八郎右衞門。御目見以上拜禮、上總介樣御參詣、其外如前々。

〔謙德公御年表〕

一、十一月十一日・十二日、大應院樣御七回忌御法會於天德院御執行有之。御家中一統拜禮、熨斗目・上下に而罷出る。十日より普請・鳴物遠慮。

十一月廿三日。德川家治疱瘡に罹るを以て白山比咩神社等に祈禱を命ず。

〔大野木克寬日記〕

十一月廿三日、大納言樣御疱瘡被爲遊候。仍而御領國しら山・倶利伽羅長樂寺等御祈禱御執行之儀被仰下。夫々寺社奉行言達と云々。

十一月。前田重煕病んで就封を見合せたるを以て道中方役人に歸國を命ず。

〔謙德公御年表〕

一、中將樣當秋御歸國可被遊所、御痛所有之御見合被遊候得共、今以御爾々不被遊候に付御

備後守は大聖寺侯前田利道

滯府。依而御道中方役人等、江戸に見合罷在候者共御暇被下、十一月上旬歸着。

十二月五日。德川家重、前田重熙に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月五日、御鷹之鶴、上使御使番松平主馬殿を以御拜領。上總介樣就御風氣、御名代都而備後守樣御勤。

十二月七日。諸士に貸附する會所銀の額を改めその利子を免ず。

〔政隣記〕

十二月七日、會所銀向後百石一貫目宛御貸渡、翌年より五ケ年賦無利足に被仰渡。只今迄之高、幷利足懸り候而は、旅行之者難儀可仕与依思召に也。

十二月廿七日。前田重靖前髮を除く禮を行ふ。

〔政隣記〕

十二月廿五日、上總介樣御前髮御執之儀、今日御用番西尾隱岐守殿ゟ聞番を以御屆書付差出候處、同夕方聞番被召呼、御勝手次第之旨御付札を以被仰渡。依之廿七日御前髮御執、翌廿八日より騎馬御供止、御城御玄關上下御供は兩人に極。是近年公儀御定四品以上は三人、其以下二人与極り候に依て也。

正月朔日。前田重煕の病未だ癒えざるを以て登營拜賀の禮を廢す。

〔謙德公御代日記〕

一、正月朔日、御前御痛未御全快不被遊故、御登城御斷、無之、御家中之人々御禮無之。御太刀・鳥目ハ御目錄を以上之。頭分御居間書院四の間より蔦の間へ懸列居、御家老役ハ謁、御意有之。組・支配御祝儀献上、御喜悦之趣御家老役演述。座上之者御請申上、此段組等ハ相觸。

上總介樣御禮茂不被仰上候に付、御太刀御目錄前田兵部(御家老役)奉請取上之。

鶴庵丁茂御家老役出座に而相濟。

二月十一日。先に禪宗寺院の愬訴に對する處置を誤るを以て年寄奧村丹後守は差扣、寺社奉行及び宗門奉行は遠慮を命ぜらる。

〔大野木克寛日記〕

二月十一日、奧村丹後守儀被蒙御不審、差扣被仰渡候由。今日老中越後屋敷ハ寄合、式日其上右御使之儀依有之、年寄中・御家老役各出座。尤主馬・七左衛門參出。御隱密所ハ土佐守・安

房守・大炊・將監・藏人・市正・隼人相集、主馬・七左衞門參入御旨演述之由。

今夕對馬守邸、寺社奉行多賀宇兵衞相招之、遠慮候樣に被仰出候旨申傳之と云々。

同於安房守邸、寺社奉行横山木工・生駒內膳、右同樣遠慮候樣に被仰出候旨申傳之と云々。

同安房守邸ゟ、宗門奉行松原善右衞門・後藤瀨兵衞（兩人共本役御馬廻頭、宗門奉行加役也。）相招之、遠慮候樣に被仰出候旨申傳之と云々。

右丹後守並に寺社奉行・宗門奉行、各蒙御不審候濫觴者、御異風牧甚五左衞門母宗旨、元來禪宗に而、大乘寺塔頭高安軒菩提所に候處、日蓮宗妙典寺旦那に罷成居申候。此儀に付禪派より、往古よりの諸宗掟を申立、禪宗一味連判に而及歎訴候。此裁判不宜候旨に而、右之通役人中被蒙御不審候由。去年以來此儀彼是い御沙汰候へ共、委細之事を不存候故、風聞を以粗記之。

（寶曆二年八月の條參照）

四月三日、今日丹州之邸ゟ、御用番房州參入、御免之趣從江戶以兩使被仰下候段、傳達之と云々。退出之後、追付房州之邸ゟ爲御禮丹州參上。歸宿之後重而房州之邸ゟ丹州參入。於此多賀宇兵衞相招之、遠慮御免、職分者御指除之段被申渡之と云々。宇兵衞退出、丹後守歸宿。追付安房守丹州之邸に參入、横山木工・生駒內膳招之、遠慮御免、職分者御差除之段被申渡之と云々。木工・內膳退出、安房守歸宿。追付松原善右衞門・後藤瀨兵衞相招之、遠慮御免之旨

安房守被傳達と云々。

右宇兵衞儀者、奥村故内記跡組故、御用番宅に而被申渡候。木工・内膳者丹後守組故、自宅におゐて被申渡之。各丹後守・安房守立合候故、每度往返有之。猶相違も可有、追而可尋糺焉。

二月。能登諸郡に藩の用銀の上納を命ず。

本文は能登に關するものなれども藩内の諸郡皆同一なるべし

〔筒井舊記〕

一、九十三貫目　　奥郡

一、三十一貫二百目　　口郡

右今般御郡方御借銀就被仰付候、各支配所より指上候銀高右之通りに候條、被得其意、來月中に指上候樣可被申渡候。尤諸方御土藏に致上納候者、右奉行請取、切手當場に可被差出、見屆通帳に相記可申候條、其節通帳も可被指出候。且又御利足は段々遂詮議、今般之儀者百目に付八分御利足に相極候條、此所可被申渡候、以上。

二　月　　　　御算用場

不破次郎太夫殿

村上采女殿

追而延享五年二月八日・寛延四年六月差上候御借銀、去暮十二月迄之御利足可相渡候條、切手差出候樣可被申渡候、以上。

三月十三日。御算用者上田藤左衞門等博奕を以て禁牢を命ぜらる。

〔謙德公御年表〕

一、御算用者上田藤左衞門、去十二月聖堂銀上納間違之節より起り、御吟味之筋有之、博奕一卷にて段々御詮議有之、三月十三日禁牢被仰付面々、與力溝口八左衞門・倉知藤右衞門・五十嵐淸右衞門・せがれ源太夫、御算用者山田半太夫・木崎伴七・上田藤左衞門・土佐守家來吉村新藏、丹後守家來久能。

三月廿二日。金澤城內東照宮の外遷宮行はるゝを以て諸殺生を行ふことを禁ず。

〔高畠左門留帳〕

東照宮御修覆に付外遷宮・正遷宮幷御法事有之筈に候。日限之儀者御橫目中に可被承合事。

一、右外遷宮等御當日、諸殺生可有遠慮候。普請・鳴物は不及遠慮事。

右之趣被得其意、組・支配に茂可被申渡候。組等之內裁許有之人々は、夫々申聞候樣に被申

渡、尤同役中可有傳達候、以上。

三月十九日　　本多安房守

高畠左門殿　奉得其意候

村田吉左衞門殿　奉得其意候

以別紙申達候。當廿二日酉刻外遷宮之筈に候。正遷宮幷御法事御日取者未相極候間、追而御横目中ゟ可被承合候、以上。

三月十九日　　本多安房守

高畠左門殿　奉得其意候

村田吉左衞門殿　奉得其意候

〔政隣記〕

十八日とあるは誤なるべし

三月十八日於金澤東照宮外遷宮有之、江戸上野常照院被罷越、右御用被勤之。依而詰人年寄中・寺社奉行・定番頭・御用人・御横目・火之番御大小將四人・兩人宛替々、御歩四人茂同斷。御作事奉行・會所奉行・割場奉行・坊主頭・同小頭一人宛・平坊主三人。

四月四日。御異風牧甚五兵衞門等旦那寺のことにより遠慮を命ぜらる。

〔大野木克寛日記〕

四月五日、昨四日御用番宅ゟ御異風裁許笠間與三左衞門・村木工右衞門召寄、御異風牧甚五左衞門不埒成願書取次之儀に付、遠慮被仰付候由言達之と云々。右兩人本役御先手物頭、御異風裁許者兼役也。

御異風牧甚五左衞門、不埒成願書差出候御とがめに付、遠慮被仰渡、母・妻女共に禪宗大乘寺旦方に可仕旨被仰渡由。右甚五左衞門ゟ者何方より申渡候哉、其樣子追而尋可糺焉。

甚五左衞門母幷妻大乘寺塔頭東光院旦方に可罷成旨被仰出、其段支配より申渡之。尤瀧谷妙成寺ゟ、甚五左衞門母幷妻妙典寺旦方被指除之候段、寺社奉行より申渡、御請仕候。

四月六日。前田重熙病む。

〔政隣記〕

四月六日、中將樣今日御指引有之。翌七日町醫師入江廣丹曁望月三英老・武田長春院・森宗乙老・井上交泰院・村田長庵老御診。御藥者三英老之趣也。

右に付御氣色御勝不被成儀、御一門樣方ゟ茂御案內有之。

〔謙德公年表〕

一、同年中將樣御痛不宜、御在府被遊候處、四月六日頃より御浮腫之症に被爲成、段々御重み、町醫師入江好丹診察被仰付候處、御大病至極、大補之劑に候へども、御痛所に相障候に

付難指上旨申聞候。望月三英老御招被窺候處、好丹同樣之存寄に而御療養被斷候へ共、達而御所望に付、いかう散一貼、人參二分入調合上之。其外御醫師村田長庵老・森宗乙老・長春院等診察、御藥茂被召上候得共、同樣之存寄、次第に不宜候に付、御一門樣方ゟ茂御案内被仰遣候之由。

四月八日。前田重熙弟重靖を養子とすべきことを定む。

〔御親翰類〕

一、四月四日曉、兵部・八郎右衛門儀御前へ罷出候樣被仰出候處、八郎右衛門儀御小屋へ湯懸りに罷越不在合候故、呼に遣候處、其内兵部迄罷出候樣被仰出罷出候處、左之趣段々御意有之。此段八郎右衛門ゟも可申聞候。御氣色以之外御難儀被遊候に付兵部へ被仰聞候。右之趣紙面に調入御覽可申旨御意に付、左之通相調。八郎右衛門儀罷出申候、一所に罷出可申哉之旨申上候處、兩人共可罷出旨被仰出、罷出入御覽候處、此通にて、假御養子之儀者勢之佐殿御國へ御越之節迄に而も無之、最前假御養子勢之佐殿御願置被遊候節も、實御弟之御續にて御願被遊候間、其趣に調置可申旨御意之事。

　但此表に而は廿一日一統申渡す。

一、御前御容躰被及御大切候はゞ、御名跡之儀上總介樣御願可被遊候。當時に而は御伯父樣

之御續柄に候得共、先年勢之佐殿御國へ御越被成已後、御内存御極被遊候節被及御示談、御兄弟樣之趣に而、御歸國之節も御内存に御調置被成候。御伯父樣之御續柄に候へば、御相續之趣に御願之儀に候へ共、右之通御兄弟樣之趣故、御養子被成、御名跡に御願之思召に候間、右之通に可奉心得候。

一、御病死被成候はゞ、御家中之人々上總介樣へ御前御同事に御奉公申上候樣に、金澤年寄中等へ申達、一統申聞候樣可申遣候。於此表茂右之趣何茂へ可申聞候。

今曉拙者共御前へ被召出、御側近被爲召、御容躰被及御大切候はゞ、御名跡之儀上總介樣御願可被遊候。當時にては御伯父之御續柄に候へ共、前々假御養子御願書御指出被遊候節、御老中方へ御示談之上、實御弟之御續に而御内存に御調置被遊候。御伯父之御續柄に候へば、御相續之趣に御願之儀にて、斐姬樣御緣組御願被遊候節者、御伯母之御續にて御願被遊候得共、御女子樣之儀は末々御指障之儀も有之候故、右之通に候。御男子樣方之儀は都而御實弟衆之趣に候故、上總介樣御儀御養子に被成、御名跡に御願之思召に候間、右之通可奉心得旨御意御座候。

一、御逝去被遊候はゞ、御家中之人々上總介樣江御前御同事に御奉公申上候樣に各へ申達、一統被申聞候樣可申遣候。此表茂右之趣何茂へ可申聞旨御意御座候條、夫々御申聞可被成候。

此表に相詰罷在候人々へも夫々可申聞候、以上。

四月八日　　八郎右衛門

兵　部

丹後守初八人様　十三日早飛脚に傳附遣之。

四月八日。前田重煕卒し十二日に至るまでその喪を祕す。

〔政隣記〕

四月八日、御氣色御勝不被成儀御用番江も御屆有之。御一門様方も御出。今日より森宗乙老江御轉藥。九日より村田長庵老江御轉藥。實は今晝過御逝去に候得共、公邊江之御様子有之御隱密也。

今晝とあるは八日に屬す

九日、御氣色不輕御様子儀、今日御用番江御屆有之。

十日、中將様御所勞御尋之上使、御奏者番土岐伊豫守殿御出、御名代上總介様諸事御勤。爲御禮御老中方江者爲御名代前田信濃守殿御廻勤、且御氣色御指重之儀今日御用番江御屆有之。今日より武田長春院江御藥被轉候。今日安藝守様・左兵衛督様・信濃守様・靱負佐殿・前田信濃守殿・出雲守様・備後守様、御居間江御通。

一、御養子御願書付、今日安藝守様幷前田信濃守殿御用番江御持參、小笠原縫殿助殿御指添、

聞番青木伊右衞門も罷越。
但、大御目付衆御判元見屆に者御越無之。
一、御指重に付金澤年寄中ゟ之御使、御大小將高田庄太夫今日發出、白銀十枚拜領、早打に而十四日金澤着、居留り。
十一日、御所勞御尋上使御小將御番頭本多大學殿を以、干鱈一箱御拜領。上意上總介樣御拜聽、御菓子出、御相伴小笠原縫殿助殿。御一門樣方・御醫師中上使前ゟ御出。爲御禮御老中方ゟ者備後守樣御廻勤。同日勢州ゟ御代參上總介樣御抱守中村宇兵衞、今日七時過被仰渡、同夜發足之處、御凶事之儀以早飛脚中遣、上州坂本より歸府。

前田重熙行狀

〔謙德公御夜話〕

一、御七歲之春、江戶本鄕御上屋敷南之空地にて、いかのぼり御あげさせ被成候處、風强糸ちぎれ御屋敷之外ゟ吹行候也。御側に居候者何れも、何方ゟ吹行候やらんと各申合候事を御聞被遊、南火之見櫓番人ゟ尋候得と被仰候。則相尋候處、見屆申候は本鄕六丁目ゟ落申旨申上候。早速爲見遣候樣に御意被遊候。其日公方樣御成にて御門留故、彼是違申內時刻移り可申候、如何可仕哉与御抱守申合候儀を御聞被遊、左候はゞ廣式部屋方用事聞之庄藏を遣候樣

亀次郎は前田重煕
護國公は前田吉徳
若狹守は吉徳
備後守は大聖寺侯前田利章

にと被仰候。如何にも御意之通とて庄藏を遣候。則本郷六丁目ゟいかのぼり落、子共糸をたぐり取候由申上候。御年比御不相應之御早き御事と奉感候。

庄藏与申者は江戸町人にて、御廣式部屋方諸事用聞之青物屋にて、毎日朝六時過より暮時まで、其身か手代之内不明樣に、御廣式小遣部屋に相詰候。此事を御聞覺被爲入候と奉存候。

〔富永數馬覺書〕

元文二・三年之頃之御事に候、護國公御客ゟ御逢之時分は、いつも龜次郎樣御同道に而御出被遊候處、護國公御傍に御着座被遊候。私儀御表御客あひしらひ勤、奉見請候。松雲公御時分、若狹守樣御同道に而御表へ御出被遊候時分は、御疊之二・三疊も御引下り御着座、備後守樣（正智院樣なり。）には、又若狹守樣より一疊計も御引下り被遊候處、龜次郎樣には右之通に御座候へ共、護國公被仰談も無御座候哉、跡々之儀存合候へば乍恐如何敷奉存候に付、御抱守水野宅右衛門（頭分も未不附頃也）迄、松雲公之御時分之儀を咄、不苦事に候はゞ少御序に申上間敷哉と申入候處、其後宅右衛門申聞候者、早速申上候へば、數馬儀能申上候、跡々之御儀御存知無御座、唯今迄之通被成御座候次第に其御心得可被成旨被仰候候由申聞候。其後段々御引下り被遊候御樣子御座候。是は元文二年之頃龜次郎樣御九つ計之頃御座候。

同比とは元文二年の頃龜次郎は重熙

〔富永數馬覺書〕

一、同比之儀、御抱守玉川七兵衛申候は、龜次郎樣御聰明成御儀、此間御側之子共に、御庭にて小鳥を御捕せ被成候處、五日に茂子共無遠慮小鳥をかまへ候得ば、今日は左樣之儀仕日にて無之候。陽廣院樣等之御陰に而、我等共迄ヶ樣の結構に暮申候。五日・十二日などには左樣之儀無用と御意被遊候。能年比之御抱守共も心附不申、何茂奉感候旨咄申候。水野宅右衛門も同事に物語仕候。

〔謙德公御夜話〕

一、御部屋住居之御時、神田御前樣より温飩被進、認被仰付、當番人ゟ可被下由被仰渡候。何茂頂戴仕候。御抱守明石源兵衛罷出頂戴之御禮申上、温飩御殘り多御座候、捨可申よりは足輕・小者迄頂戴爲仕可申哉と源兵衛申上候處、捨可申ものを輕き者共たりとも爲給可申と申上候儀は、御合点難被成由御意にて御咎、申譯立兼申候。御側之人々之內、御餘計も有之候故御殘多く御座候間、足輕・小者迄頂戴爲仕可申と相窺可申處、申上違候と奉存候旨御取合申上候得者、成程左樣可有之と御意に而、犬猫之樣よりは足輕・小者ゟ可被下と申候而は、跡に承り却而腹立するもの也と被仰候。

〔大應公年表〕

一、或日、寛保三年松平相模守宗泰公御定婚、紀州中納言宗直卿の御息女御入輿之後、宗直卿を宗泰公へ御招請に付、御一門方御招。因て宗辰公被爲入筈に候處、其節御不快故御斷被成、但馬守様御越被成候。於彼邸酒井左衛門尉忠寄公、但馬守利安君に被仰候は、押付紀州殿御越可被成候。此座に而御時宜如何敷物に候。御一座之思召次第、聞番に申付候而爲承合可申哉否御相談候處、但馬守様御返答は、聞番よりは直に相模守殿へ相尋可申候條、暫御見合可然旨被仰候。則相模守様御出候處、利安公被仰候は、紀州殿御越之節此席に罷在御時宜可仕儀与存候。又は如何心得可申哉、得御指圖申度候。相模守様被仰候は、成程此儘可然候之由被仰候時、但馬守様忠寄公に御向、只今被仰聞候段、相模守殿思召、御聞被成候通に候旨被仰候由。御一席之御面々、利安君之御若年に御發明、各御感心之御噂有之候。或日聞番に御尋候得ば、大方御式臺御白洲に御出向之作法之由に候處、最前忠寄公御發端之筋に被轉候て直に御尋之故、右之通り相成よし、宗辰公被仰合与いふ。

但馬守利安は前田重熙

〔謙德公御夜話〕

一、延享二年丑四月護國院様御同道金府に御越被遊、金谷御殿に被爲入候。同六月護國院様御逝去に付、早速江戸表に御在府被遊候様、佐渡守様より早打御使を以被仰進、七月十五日御發駕被成、江戸に御越被遊候。護國院様御逝去之砌、前田土佐守直躬金谷に罷出候而、御人拂密に言上之趣有之、御指圖を請申度趣有之處、段々被仰聞、一事も御請不被成候。折々

四月とは江戸發をいふ

佐渡守は前田宗辰

同時は前田宗辰卒去の時をいふ

御聲高之儀も御次ゟ相聞候。御前退出以後、御人拂に而長々敷御書御調、江戸表ゟ早飛脚を以被上候。護國院樣御病之御樣子、御便り度に、御醫師口上、其外御樣子一々被仰上、御出府之上佐渡守樣、委細御樣子等被仰上、殊之外御喜悦之由御意御被蒙被遊候とて、御普爲聽被爲成候。

土佐守金谷ゟ罷出候事、御横目より茂江戸表ゟ言上之由。御意には身が横目共より先に言上致候ニ被仰候。土佐守申上候事は、但馬守樣御指圖被成、御使之趣に而、土佐守江戸表ゟ出府可仕儀を段々申上候得共、一向御承引不被遊候由、御意にて奉承知候。

〔謙德公御夜話〕

一、延享三年十二月大應院樣御大切之節、御次に而御詰被爲成、御藥之御詮議、御醫師被爲召御聞屆被成候。

〔謙德公御夜話〕

一、大應院樣御逝去被遊候以後、諸役人伺言上等、但馬守樣ゟ相伺可申旨、御家老前田中務申上候處、先當分御聞屆可被成旨被仰出候事。

〔謙德公御夜話〕

同時九里治兵衛（御部屋御附物頭並、此節休息に而金澤に罷在。）被爲召、早打に而江戸表へ出府、御前ゟ罷出候處、御意有

> 去々年は延享二年即ち去年の誤にて宗辰に胎死の一男子ありしをいふ

之候。治兵衞申上候は、今般之御儀奉絶言語候。此節御前御指障不被爲在、此上之恐悦に奉存候旨申上候處、御意には、今般之御儀御病中無御間、別而殘念に候。御願置之趣奉承知、近頃大役蒙仰儀に候。去々年之御出生、御早世にて今更之殘念に候。手前別而之迷惑に候旨御意被成候。

〔謙德公御夜話〕

一、大應院樣御逝去以後、奥村助右衞門後丹後守出府、於御居間書院御目見。御意には、今般之儀奉承知、近頃重き役儀蒙候。併手前に被仰付候儀、誠に忝儀に候と御意被成、夫より其身に之御意有之、道中之樣子等御尋被成候。

〔富永數馬覺書〕

一、延享三年十二月大應公御逝去、但馬守樣依召翌年正月四日横山大和守出府、同夜御前へ罷出伺度儀有之旨申上。則被召出候處、去十二月四日跡目數輩大應公被仰出、金澤へ申來候而しらべ申内、御逝去之儀相聞え、右跡目申渡扣置申候。其内に小宮山了意儀者、先年三十人御扶持に被召出、せがれ全柳儀は其後十五人御扶持に被召出罷在候。然處了意病死、爲跡目せがれ全柳へ、亡父了意御扶持方高之内十五人扶持可被下旨被仰出置候。父子共御用に茂立申者に御座候間、今少し相增被下候はゞ可宜と、安房守等詮議仕候付奉伺候旨申上候處、大

應院殿思召に而仰渡候處、只今此方之存寄に而指替申付候儀は難成事と御意、二言とも申上候事無之、すごすごと退出に御座候。始而之伺に、御尤至極速なる御意、乍恐難有儀奉存候事。

〔謙德公御夜話〕

一、御家督之御禮被仰上候に付、御登城被成候處、御奏者番中之內御部屋ゟ御越被成候て、御座之間之御樣子も御覽被成、御前に而之御進退も御手習被成間敷哉之旨御申上候處、左樣致度事に候と被仰入、則御越被遊候而、段々御前ゟ御出被成候而之御進退御申上、御手自御熨斗御頂戴之節は、此所に而御小さ刀御取被成候樣にと被申上候。相心得罷在候と被仰、御小さ刀御取不被成候。又御申上被成候得者、成程と被仰入、御帶刀に而御進退被成候へば、前田信濃殿・高家初御奏者番衆、此所に御小さ刀御取成候樣にと又御申上候得者、無刀に成候樣にと御申聞は、後刻出御之節之事に候。唯今手習之砌、各之中に而無刀に成候事は無之候。後刻之儀は相心得居申と被仰入候得ば、何れも何之御答も無之由、或時御咄被遊候に付、御強き御口上に而御座候、去共御身之上に而は御寬成儀御宜樣奉存候旨申上候得者、いやいや折々役人中咎めおかぬと、役權を取もの也。公方之御爲にも、折々役人中咎め置くが能与被仰候。後に承候得ば、當加賀殿も先加賀殿同事六ケ敷と、殿中取沙汰之由。

〔謙德公御夜話〕

一、御家督御相續被仰出候と、早速火事御裝束被仰付、御羽織すゝ竹羅紗、白糸に而影の御紋、小さき御頭巾、同色二枚しころ下しころに、白羅紗に而透菊御胸懸、同色萌黄糸に而影御紋、黑皮御石帶に金御紋、御細袴至而飾相成地に而被仰付、御部屋に而被召候。色羅紗御羽織等、大しころの御頭巾は一向不被爲召候。

〔謙德公御夜話〕

一、御夜詰話に御意被遊候は、身が部屋住之時分之事は、心に不叶仕形之者有之とて、今般家督被仰付候上取出し、其事を申出す事有間敷候。惣而部屋住居之內之儀者、未生以前之事と存候と御意被成、御部屋住居之事は、其以後一向に御意不遊候事。

〔謙德公御夜話〕

一、御入國延享四年卯五月後段々御仕置方被仰出、御先君逼塞被仰付置候大槻內藏允朝元、禁錮被仰付、家內闕所被仰付、一類等遠慮等被仰付候。其後御噺に、內藏允禁錮申付以後は、內藏允に取入追從輕薄之諸士等、殊之外なづみ強き由に付、其者共之心解る爲に、申渡間敷前田善左衛門妹緣組、願之通に申渡候得共、意味合点不仕、役儀抔斷人々有之と御意被遊候に付、難有思召に御座候。善左衛門妹之儀、私儀は不奉存候と申上候得ば、しらぬか、善左衛門妹を大槻妾に遣候て隨分取入たる者也。其後取返し候由に候。夫故今度之緣組之願も、申渡事延引

可及と存候得共、右之趣故願之通申渡たると被仰候。內藏允に取入候者之內にも、今更になり樣子を替、當時富田次太夫（時に御用部屋）等之席之者に又々取入、手段をする者有之、甚にくき仕形也。關屋長太夫は一家分とやらん申而、殊之外入懇に候由。頃日も由比勘兵衞抔と寄合之席に而、長太夫申候は、內藏允一家同事に心易申通候拙者、各御存知之通に候得共、今般內藏允爲躰扨々氣之毒成事に存候とて、聊內藏允を惡敷不申由、彼是より茂達御聽候。近くは其身役儀茂斷と申由に候。長太夫事、內藏允發向之節取入候者ながら、始終心を不違、今以惡敷不申、氣毒とのみ申由也。奇特者、善惡共心をたがへぬが侍の本意也と被仰候。定而近々役儀茂斷に而可有之と御意被遊候事。

〔謙德公御夜話〕

一、護國院樣御法會（御三回）於寶圓寺御執行之日、下御臺所火燒所屋根裏煤に火移り、其儘有合候者共屋根に上り水を懸鎮り候。二御丸御殿に者、下御臺所出火早速鎮り候と相聞達御聽候。追々言上鎮り候事も達御聽、其儘御長袴被爲召、寶圓寺に御參詣之御裝束に而御出被成、三御丸に被爲入と、御使番（二御丸當番寺島左太夫）御駕籠際に罷越候而一々言上之處、いや／＼火事に而無之と御意被遊候處、得と見分仕候、成程もえあがり申躰火事にて御座候由申上候得ば、火事に而者無之、高烟立たると聞たと御意。御歸館被遊、予に御意には、其方共役儀專一之事に候。

建は閉の意

未年は寶暦元年六月は閏六月なり

燒ぬか城外ゟも火之手見え申程に成候得ば無是非事。今日抔之樣成事は、途中に而火事無相違などゝ申聞候ば遠慮可仕事に候。夫故火事に而無之と申聞候へ共合点不致。供廻り輕き者共などへは、隨分慥には聞さぬ樣にする事也。加樣之處平生能々心懸候へと御意被遊候。今日抔は臺所奉行器量の入る處也。他役所抔之者可入込候はゞ急度咎め、入口之門も建させ、火事に而無之と申張候得ば、靜にも可相成と御意被遊候。

〔謙德公御夜話〕

一、未の年六月中仙道御參勤之節、殊之外殘暑強く候。御道中なかばにて被仰出候は、歩御供之人々大暑に候間、金澤より爲御持被遊候道明寺可被下由御意。河内山七左衞門奉り、夫々申渡候處、一統頂戴被仰付候旨申談、頂戴有之候。頂戴相濟、七左衞門御前ゟ罷出、御家老中初一統道明寺頂戴之御禮申聞候旨申上候得ば、是は家老共初一統頂戴申付候歟。扨々意味違候。此方申聞候口上承違と存る。あまり大暑歩供之人々大儀におもひ、少暑も凌可申哉と、歩供之人々ゟ爲給候樣申渡候事に候。馬、駕籠に而旅行之者は、又歩供と違申事也。意味違候と御意、御しかり被遊、奉迷惑候由七左衞門咄申候。

〔謙德御夜話〕

一、申の年於江戶、國澤彌兵衞御大小將御番頭御貸小屋厩より燃出候處、早速鎮り候。其節公儀ゟ御

屆可被成旨御意之處、河地平左衛門御聞番御屆に不及旨申上候處、御包み被成候様に而不宜候、相屆可申旨被仰出候得共、達而御屆に不及段平左衛門申上候。又被仰出候は晝之内之事、御門外之者見候事に候間、御屆可仕旨被仰出時、平左衛門申上候は、御門外之者共數多入込み、樣子得と見請候儀、一段宜御座候間、達而御屆に不及旨申上候處、平左衛門申上候儀尤に思召候。左候はゞ御屆被成間敷旨被仰出候。

〔謙德公御夜話〕

一、御足御痛段々御宜被爲入、爲御保養御下屋敷ゟ可被爲入段、前日被仰出、御供揃五半時と被仰出候を、小堀左膳表御小將奥御取次刻限承違、五時前と申談。其日予被爲召候て、今日之供揃何時と申談候哉と被仰出候故、五時前と申上候得ば、違候と被仰候故、其段御近習頭申談候處、左膳承違に而迷惑申上候。何之被仰出御咎無之候。扨御下屋敷ゟ被爲入候と其儘、御供役人食事仕廻次第庭ゟ御出可被遊候、早く可申付旨被仰出候。今朝御供揃早く候故腹中すき可申と御意被成候。食事相濟、御庭ゟ御駕籠に而御出被遊、御歸館被遊候て予被爲召候而、今一度御庭ゟ御出被成度思召候得共、炎天御供人難儀可仕と思召候由被仰出候故、少も不苦段申上候處、勤抔とは違申事、此炎天身が駕籠に乘、供之者難儀をいとはぬ様に可有之と被仰出候故、無勿躰御意御座候。一統毎度御庭ゟ御出被遊、御快御樣子奉見上事難有奉存候儀、炎天

この歸國は寛延三年八月の事に屬す

少も厭申者無御座段申上候得ば、左候はゞ供之者ども菅笠着用仕候樣被仰出、其段申談候處、ぬぎ着手廻し邪魔に御座候とて、着仕間敷と申事故、予御意味有之被仰出事に候間、着用仕候樣申談候得者、七・八人計も着用罷出仕候。御歸被遊、如何之事に而笠着不申候哉と被仰出候故、右之趣委細に不申上候はでは不相成首尾故申上候處、兎角未意味通じ兼申事也。以來必御意味有之被仰出などゝは決而申間敷候。夫に而は俗に云入佛事と申事のごとく、何にも成不申候ものなり。自ら此方より申出す意味心付申が宜と被仰、御しかり被遊候。

〔加陽諸士言行筆記〕

一、謙德公御代江戸より御歸國之節、上野板鼻御着之處、安中との間安中川洪水に而御通行指支之段被聞召、御近習頭河地才記被遣候處、罷歸申上候は、私は馬上に而相越候得共、水は鞍づめ迄相付候間、歩御供之人々は、必水大小の鞘の內ゟ入可申旨申上候處、被仰出には大小の鞘の內ゟ水入ては如何と、御滯留と被仰出。翌朝水減御通行被遊候。才記申上候樣宜敷事也。

〔謙德公御夜話〕

一、御歸國之節、越後親不知波付申段達御聽、段々御役人も被遣候て、罷越居致詮議候內餘程波付のき候由に而候。御途中ゟ丹羽織部（御小將横目）罷越候而、波餘程のき申候。御馬・御駕籠に而御通は難被遊、御歩立に而御意被遊候はゞ、下通り御通り可被爲成旨申上候得ば、殊之外

御機嫌損じ候て、山通り〳〵と被仰出、山に御廻り被遊候。境に御着、其夜御意には、先刻織部申聞たるを聞候哉と被仰。身抔が馬か駕籠に而通り難き所は支ゆると申もの也。夫を歩立に而急ぎ候へとは合点のゆかぬ口上也。織部申ならば、親不知下通も餘程波付のき申候へ共、馬上・籠乘用之人々は難相通御座候。歩立之人々は支不申と申聞候得者、又下通可參詮議今一二往も可有之に、先刻之樣に申聞候而は、下通可詮議今一往申付る事も不罷成候。能々ヶ樣之所を可相心得儀と御意御座候。

〔加陽諸士言行筆記〕

一、謙德公御家中之面々家督等御禮被爲請候節は、いつとても中ずみよりは少々脇へ御寄御逢被遊候。此旨或時御近邊衆より奉伺候處、御意に者、我庶子に生るといへども、不幸にして大應院殿御早世御子なき故、不肖ながら大國を御ゆづり被遊候へば、三ヶ國も此方が物にてはなし、暫御預り申といふ者也。然ば今眞中に座せば、庶子として勿躰なき事、御座を汚すに似たり。思へば家中之者へ對しても無禮なり。故に斯は侍りしと御意に、今大應院殿御在世ならばか樣之事も存まじきにと、殊之外御落涙被遊候。か樣之御心持故か、御露地等へ御出の節、指急御近邊の諸士御召物抔指上候得者、いつとても是は似合はぬ事をと御意にて被爲召候。是士に對しての御時宜なる事、申上樣もなき事也。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御政務之事に付段々御意共有之、御親翰數十通御調被遊御樣子に而、夜明近く成候故、御側ゟ罷出候御序有之候故、最早御休可被遊候、御痛にも御宜しかるまじくと申上候へば、御機嫌に不應躰。御意には、家は末代也、身は一代、中々身之事に無貪着と御意故、御尤奉存候。乍然御機嫌に被爲在、永く無御懈怠御政務御取捌被遊候御儀、御家之爲にも御座候間、御養生之儀も又御心懸被遊被下候樣奉願候段申上候得ば、左樣に申は下より申習にて、此方抔事は、身之爲とて家の爲を延引する事はならず職分也。此方政務に少たゆみも候はゞせり込呉可申に、無左一通り之事申は、名染之者に似合申さぬ事と御しかり被遊候。

家は末代身は一代との御意之事は數度也。予に不限奉承知人々有之候。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御咄、軍學之御咄有之、不圖御側之者瑞龍院樣には何流を御學被遊候哉と申候處、御意には、加州流御學被成候と御意。此方抔家には何流と申事無之、諸流儀を合て加州也と被仰、身が甲州流を聞候故、定而皆々甲州流を用候と可存候。夫故右之通に尋たるべし。此方共は一流を一筋に學候事は無之、大意共を聞候而は其上加州流也と御意に候。

〔謙德公御夜話〕

一、或時割場足輕江戸に而御門外仕、夜に入候得共不歸候ゆゑ、欠落之躰に付、割場奉行御次ゟ罷出候而、右之趣御家老中ゟ相達申候間、奉達御聽候處、右之者平生行跡等御尋之處、且而惡敷者に無御座候、御奉公宜相勤候者之由右奉行申上候得ば、又勝手難澁仕候哉と御尋。左候則割場に而も此儀心付詮議仕候へ共、且而難澁仕族無御座、相應に仕罷在候由申上候。左候へば御門外に而氣色相滯、罷歸候儀致遲々、夜に入候故心外罷歸不申儀も可有之候間、早速尋に出し可申由被仰出、割場より尋に遣候處、則出合候て召連罷歸候上、於割場尋候處、氣色相滯罷在、宜敷相成候に付可罷歸と存候て、御屋敷方ゟ罷歸候處、途中に而尋に出候人と出合候旨に付、其段申上候へば、養生爲仕本復之上御奉公爲勤候樣被仰出候。其身は勿論、割場奉行難有がり申候。

其後本文同事之趣に而、足輕夜に入不歸者有之。是は先日之例も有之故如何可有御座哉、先日之樣に此度も被仰出候而は何共如何有之哉と何茂申合、予罷出申上候得者、御聞被成、扨々にくき奴哉と御意。暫御思案被遊候而、御聞屆被遊候と御意被遊候。

〔謙德公御夜話〕

一、江戸御作事方御番人、松平肥後守樣ゟ之下座不仕、不調法奉存候旨、委細御家老中ゟ相達候由に付、奉達御聽候旨割場奉行言上す。御尋に者、前々もケ樣之事可有之候。其砌は右

番人ども如何申付候哉と御尋被遊候。先刻より於割場、留帳繰見候得共見當不申旨申上候得ば、御意には、身が部屋住之內、護國院樣御前に罷出候內、則肥後守殿かと覺候下座落し申段、三浦左京罷出申上候事覺有之也。年月日等被仰聞、此頃之帳面繰候樣御意。於割場繰候處、御意被成候年號月日に、肥後守樣ゟ下座不仕儀相見え、則其趣申上候。御覺之御慥成儀、乍恐一統奉感候。

〔謙德公御夜話〕

一、御近習頭席に而、何茂御前ゟ罷出候事をなづみ、我出よ人出よと申合候事、風与道成寺と申ならし、每度道成寺〳〵と申合候。其事達御聽候哉、或時予御前ゟ罷出候處、其方共席に道成寺〳〵と申事有之と聞、何事に候哉と被仰。御請當惑仕、委細不申上候而は不相成、首尾有躰に申上候へば、近習頭席などにはいらぬ事と被仰御笑被遊候。

〔謙德公御夜話〕

一、江戶御上屋敷之內長ぼへ仕犬有之、御廣式より御門外ゟ追出候樣申渡、割場より人を出し候て御門外ゟ追出す。又其頃中川八郎右衛門（御家老）御夜詰等に罷出候節、長土塀之內に而犬之ふんを踏、殊之外不機嫌にて割場奉行ゟ、餘り御屋敷之內に犬多く候。頃日承り候へば御廣式よりも犬を御門外ゟ追出候樣子に候間、幸犬共御門外ゟ追出候樣申聞候由に而、犬を追

出候。其段達御聽候哉、或日被仰出候は、犬御用に候間、御屋敷之内に居申犬之内つなぎ、御居間先ゟ牽參候樣被仰出。三十人方より一疋つなぎ御居間先ゟ牽參候處、又御用之由被仰出、又一疋牽參候處、御臺所ゟ被仰渡、御賄食相渡、三十人方之者每日爲給、御居間先に被指置候。御側之人々ゟ御意には、犬は殊之外猫と違能物也、身は犬ずきなりと御意被遊候。其内右之御樣子御廣式ゟも聞え、八郎右衞門も承り、割場奉行も奉承知、日數六・七日之内に御門外ゟ追出候事相止候。其趣達御聽候哉、犬を放候樣被仰出、三十人方より放候也。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御居間方小頭被爲召、御居間脇之空地之内草高に候、居間坊主共にとらせ可申旨被仰付。小頭奉畏退候得共、支配之御居間方に草取候樣にと申渡兼、小頭一人空地ゟ罷出草取居申候處、餘程有之、御障子を御明被遊御覽、御笑被爲遊、最早取に不及と御意被遊候。御居間方坊主共、何とやらん惣躰身分取失候躰に候故、右之通被仰付候かと奉恐察候。

〔謙德公御夜話〕

一、御噺に家中風俗、扨々身が心に不叶事、其方共存知之通也。晝夜心勞此事也。古代の風俗に歸り候はゞ、身が大慶此上有間敷候。たとへに申ごとく、重荷をおろした樣に安堵すべし、中々急に直らぬ事と被仰、殊之外御心に懸らるゝ御樣子也。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御意には、近臣之内表向に而も調子に應じ勤る者有之。其身を損じ不申樣にと計心得る故、身が氣色を考へ勤る者共多く有之。扨々見苦敷心底也と御意。右之勤方之士共は風見と申者也。何風と申事を知らぬ爲に、屋根抔之上に竹を立、其先に色々之形などして建、風に順うて廻る樣にする。今是を風見と云て、江戶抔に有之候。是と同事之士なりと御意被遊、御笑被遊候。御側之内にあれば彼風見なりと被仰、異名に折々陰に而は風見と御意被遊候。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御意に者、組頭共は身が前へ呼出候て、何角用事等相尋候に茂、何と哉らん樣子も違ひたるもの也と御意被成候。御平生、組頭は重きもの也、人持は組附也。大方七手之面々に續きたるものと被仰、身が存ずる樣には組頭共存ぜぬ躰と被仰候。馬廻頭は別而とも仰候。常々御噺に、組頭は殊之外重き儀に思召也。其職分に當りたる器量の人に被仰付儀、もとより、又年功家柄に而も被仰付故、可被仰付思召に而も、當り候や當る間敷哉と、殊之外御心勞に思召と被仰候。惣て出仕以上之者は重く思召候由御意、每度奉承知候。此御本文之趣、予に不限何も奉承知候人々多ある也。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御意に者、人々心底善惡を見樣いかゞ致し見屆申が宜と存候哉と御意に付、如何仕宜可有御座候哉、中々難及儀に奉存候旨申上候得ば、御意には、身が心に不叶事を申聞る時、其身の善を見出し、身の心に應ずる事のみ申聞候時、其身の惡を見出し候得ば、大方當る者也と被仰候。兎角此方正敷致しをり候得者、善惡はあちらから自ら見するもの也と、御意被遊候事。

〔謙德公御夜話〕

一、御噺に、家中役替・新役等申付候を、一旦の思慮に而申付ると一統存る躰也。中々左樣にはあらず。此次は誰々と申事を心當、一年・半年計も前より心を配り、其身善惡を見出し申付る也。存之外夫にてさへ後には違たると存る事有之と被仰候。當時頭分・平士の内にも、何時にても何役申付候而も勤兼ざる者三四人も心當置也。無左ては、ふと点をかく事有之候と被仰候。御家中侍中系圖帳御取上置、奥取次役に御預け置、いろは四十八字に分け被仰付置、御役替等可有之前には、右系圖帳之内誰々之系圖帳上候樣に被仰出候。御役儀被仰付候人々に者、其家柄之系圖迄も御糺被成候御樣子に御座候。

〔謙德公御夜話〕

一、御咄に、三十五・六歳より内之人に役儀申付る事は、殊之外重き儀也。其身甚器量に候。物頭以上は別而重き事也。夫故に申付るに、此方も、萬一勤兼候而は申付る專も無之、一統

人口茂有之ものの故、いかう心労すること被仰候。惣而四十より内は、血氣治り申さぬものと見ゆると被仰候。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御咄には、年頭規式等當家重き家風、夫々先代より被定置規式に而、諸大夫之人々冠服に而禮を請候也。何卒して後々は、一統素袍に而禮を請、身も冠服にて禮を請度内存也と御意。松雲院殿にも、右之思食は有之御樣子に御見出し被遊置候由、御意被遊候。

〔謙德公御夜話〕

一、火事御行列御人高御減少被仰付、段々諸手合御挑灯數等も御減少被遊、其後御行列帳可指上旨被仰出、火消方主付人より指上候處、御行列右御減少高に而調指上候處、加樣には有間敷候。最前之御人高に調候而、御減少之所付札に可仕候。無左候へば、一兩年も過候而は、最前より之行列高之樣に何れも存るもの也。御行列帳には騎馬數・挑灯數・人高、御先代之通に調候而、當時減少之分其手合〳〵騎馬所等には付札仕、當分御減少と調可申旨被仰出候。當時減少申渡候も、誠に當分之事に候。松雲院樣御代之通と存候得共、迚も是は急に行屆間敷候。せめて護國院樣御代之通に者致度事と御意被遊候。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御意に、當時勝手難澁に付、家格も替迄儉約可申と存候哉と御意に候。私式奉存候は、御家重き御格式御止被遊候事は、御氣之毒に奉存候旨申上候得ば、身が勘略之事を致詮議候へば、身は勘略を好み候樣に存じ、勘略のため家格も當分替、重き規式も當分止よと申者有之。先代より之家格法令等止よと申聞は、扨〳〵心外至極也。家中風俗も古代風儀に返し、家格法令全可相守ための事に候。身が勘略を好と存候事は、扨々心外也と御意被遊、殊之外御心を被爲痛御樣躰に奉見上候。

〔謙德公御夜話〕

一、御夜話之時分御意には、近習之者此方勝手難澁に付、知行米之內指上度旨、何も志を以知行米指上候詮議、うかと存候て任其旨候。甚有間敷事に候。夫に付相返候詮議段々有之候而、近臣之內發言之者有之に付、此者遠慮申付相返し候者、其者之所爲に成可然旨、詮議大形治定に候得共、身が其趣可然と承届候得ば、不調法人は身也、遠慮等申付候而相返に而は無之と不申渡候。身が申渡違と申趣にて相返、支申儀は無之事に候。加樣之事は能々覺可罷在候。右躰之事などは一通り詮議了簡申聞候事に無之、若此方其通り可然と存申付候而は、身一生之誤り也。且而遠慮申付る事に而なし、能々可存と御意に候。

〔富永數馬覺書〕

一、御膳を持出扣罷在候へば、御傍御取散し被成御座候書付・御書物様の物を御除被遊候故、上申候。又屹度御覧被遊候而も、御取散しそのまゝ物など御調被成御座候へば、扣罷在、御會釋にしたがひ上之申候。一向御見付不被遊事も御座候へば、久敷扣罷在、そのうち御覧、膳を持出候といへといふにと、御居間方のものへ御意之儀度々御座候。三月・五月など之御祝はよほど重く、久敷扣罷在候へばあいわく仕候而、脇刺の柄にひぢをかけ罷在様なる事も御座候。後々御給仕之節は脇ざし取候様罷成、彌あいわく仕候。御飯をかへ盛候内、もみのやうなる物見え申事有之、申上候へば、御はしにて御取、是でありたと御意。又あなたこなたと被遊候而も、もみやうの物と被存申上候而、見え不申儀も御座候節、不實を申上候様可被思召哉と、罷歸候而も難忘あいわく仕候。御湯は何時も御膳被召上濟、御箸御納被遊候へば引申候而、其次御膳を引申候。謙徳公御時分より、御箸御納被遊候へば御膳を撤し、跡に御湯を撤し候と見請申候。御刀を持罷在候は、ゆびの揃不申は見苦敷、高畠平十郎（後木工）持様手つき宜候、棒を突たてたるやうなるは惡敷と被仰出候由。御守殿ゟ被爲入御間御座候に付、ふくさに而持候様被仰出候。久敷成御座候節は、前に置罷在候様、御番頭申聞候。御内意之躰御座候。

〔謙徳公御夜話〕

一、御平生御裝束御麁服御用被成、御入國之御道中茂、至而輕き品被爲召、御入國以後綿衣御用被遊候。

〔謙德公御夜話〕

一、御炬燵に懸り有之御ふとんこげ、中一尺四方計穴あき候處、御居間方小頭より取替可申哉之旨相伺候處、右穴之所つぎ可申付旨御意。其段奥御納戸奉行へ小頭申談候處、詮議之上、つぎ被仰付候ハゝ却而御不益に候、裏まで新敷被仰付候へば御益之旨。則其段小頭共申上候處、御意に、又左樣成事申上候哉。益不益之事にては不申付候。申渡候通つぎ可仕旨御意に候。後に御意被遊候ハゝ、つぎ申付候樣申渡候得ば、勘辨故申付候と計納戸奉行存候ハゝ、扨々氣之毒也。障子抔切張申付るも、身が勘辨故申付ると可存と御意に候。惣躰之奢り之ふせぎに申付るゝ心附不申に込り入也。兎角此方之身持平生を嗜、おのづから一統其形に引付候樣致度心懸候得ば、身年若故可屆兼候と御意被遊候。

〔上田舊記〕

一、御代之内御省略被爲在候ハゝ謙德院樣也。一月之御自分御入用二貫目に而相濟候由。御炬燵ふとん木綿御用ひ、燒穴出來候所つぎ被仰付候由也。和泉村石崎市右衞門物語。

〔詠歸公孝順公へ御夜話之内拜寫〕

大應院樣は御國入無之御逝去也。謙德公は御國入も有之、御國入之御能茂有之也。謙德公の御氣質にては、左樣成儀も有之間鋪儀に候得共、御名將と申には格別、何に不依御捨不被遊。然ば役者共もはげまずして不叶儀也。謙德公思召は、簡略と云も何事もせん爲の簡略也との思召と相見え申候。謙德公後は、御國入御能と云は無之也。松雲公・護國公・謙德公御三方樣迄、御國入の御能有之也。徵妙公抔は如何、相知不申候。謙德公只今迄御在世に候はゞ、御國も長閑相成、諸士の風俗もおとなしく相成可申儀に、國家の不幸にして御早世、殘念至極也。只今世の風俗は、只上をそしり申儀、第一諸士の風俗町人同事に、己れの身迄を樂み、下の困窮貪着せざる也。謙德公の如く、御身の上は萬人の上にくるしめられ、諸人を御救、御勝手御難澁と申に百石に五百目の拜借金、中々御仁政可申樣なし。

〔詠歸公孝順公ゟ御夜話の內拜寫〕

一、謙德公、御具足其外不被仰付して不叶者、御入用御貪着なく、結構至極に被仰付候由也。

〔詠歸公孝順公ゟ御夜話之內拜寫〕

一、謙德院樣御近習の者に候哉、きせる袋を落申候所、夫は何に候や見せ候樣に御意故、無是非入御覽候所、縮緬の打ぬきのきせる袋也。夫を御覽被遊、是は茶屋或は遊所抔にて、三味せんを引時、むすんで指あてにする者也。加樣の者抔は、士は不持者と御意の由也。よく

其おこりを御存被遊候御儀、御名將と申は格別成者に候。此儀も土州樣御咄、土州公へ吉田九兵衞とやらん御咄申由也。

〔謙德公御夜話〕

一、每度本多安房守政昌御居間江被爲召、御人拂に而御示談有之。或時御意には、安房守は實躰もの也、今日心底をためし見んと、安房方ゟ至而心易出入之者、頭分之內人品不宜もの有之。此兩人事を能人品と存罷在候哉と存じ、しらぬ躰に而色々に尋、先頃以來役替事抔に事寄申出候ても、是等は無用と申候。今日押出樣子尋候へば、右之兩人人品不宜儀段々申聞候。外より申聞候と聊違無之候。此所は心得罷在候上に候得共、前々より出入之者共故心易仕置候と申也。唯今迄は右之者共にだまされ居ると存候に、扨々我を折たる事、年寄共に用に立人無之といつも申せども、此方よりの仕ひ樣惡敷故也。皆年寄共成立惡敷成候儀は此方の誤り也。此方の仕樣によりて、用に立人々も出來る事と御意被遊候。御居間に而安房守江、御手自奇南番香かく山に端物御添被下之。御懇之御事と殊之外難有がり被申候。

〔謙德公御夜話〕

一、或時御部屋住之節之御附御抱守內田伊太夫を被爲召候て罷出る。富田次太夫誘引にて御

居間に被爲召、御意被成候は、伊太夫扨々久敷て逢た、息才なか、先年之落馬之痛如何致候哉と被仰、於御前御廣蓋にて判金二枚・端物三反・御紋附御上下二具被下之候。伊太夫涙を流し難有がり候。

其後御意には、伊太夫役儀斷候も、身が強き馬にのせ落馬爲致候故也。夫故呼出逢たると被仰候。內田伊太夫御部屋住之節御抱守也。或時江戶坂下御馬場に而、橘鹿毛と申御馬爲御乘被成候處、不達者にて御斷申上候得共、是非にと御意、乘候處、合馬に驚き駈出致落馬候。其痛に而其後不宜、役儀御斷申上候。此處を被思召付候御事と奉恐察候。次には御部屋住之節、御抱守御斷申上候者餘程有之候。此者共は御當りも有之候哉と予推察仕候事。

延享四年七月の事に係る

〔謙德公御年表〕

一、御馬廻頭兼御算用場奉行御儉約奉行稲垣三郎兵衞（未與三右衞門と云。）二之丸泊番に候所、組頭泊番誰に候哉就御尋、其段申上候處、御用御座候間御前へ罷出候樣に被仰出、亥の中刻頃迄御前に罷在、詰所へ歸り御用之品調申儀有之、丑刻頃迄相調罷在申內、重而與三右衞門休息仕候はゞ爲申聞候には不及候、若休息不仕候はゞ御前へ罷出候樣に被仰出候。右之仕合に而御前へ罷出候處、今晚は暑强、御休被遊兼候間、御咄申上候樣に御意に而、御菓子等被下、寅上刻歟御暇被下退出仕候。

〔謙德公御年表〕

延享四年の事に係る

一、馬廻頭稻垣三郎兵衞・小將頭三輪藤兵衞一人宛御前へ召、一時餘御人拂御尋、御請人々申上退出。但被仰渡候趣は、諸役人撰候刻、頭共詮議之上書上候處、年寄共之席に而彼是批判仕、渠を書出可然与申に付、相改候樣に兼而被聞召候。ヶ樣に者御座有間敷儀に候。向後は左樣之儀候はゞ、頭共詮議致一決、書出候趣御次に能出指上可申候。依之諸頭・諸番頭に茂通達之事。

〔謙德公御年表〕

延享四年の事に係る

一、御算用場奉行前田式部御前へ召、御人拂御意。御尋御請等相濟、御懇之趣共、家柄も重く候得共、當役御勤させ候儀御賴の樣に御意有之。其上向後心付之通、時々伺候に及不申候之條、相唠可申候。絕而難決筋者、其時伺候樣に被仰渡候由。

〔大野木克寛日記〕

今日於御城御詠歌之由闕正仲投与之。利安と奉稱候は御相續已前也。いつの頃の御詠にやしらず。但右御歌之一帖則御眞翰之由。持明院流久田淸左衞門御手本上之候由。御自筆者初而奉拜見也。

山夕立　　利安

およびなき不士の高根はなかぞらに晴れて麓に夕立のくも

扇風

手にならす閒の扇のすゞしさは秋のかぜをや先誘ふらん

螢透簾

風にちるつゆともさすがみえわかで釣簾のへだてにほたるとぶかげ

夏月似氷

庭の面に照らすは池の氷かとみえてすゞしき夏の夜の月

〔謙德公御年表〕

一、公御庭之花御覽御詩歌。

春林有感

春風習々艷陽天。紅紫園林鬪嬋娟。酩酊酒筵花下睡。夢魂双蝶幾翩々。

仲處艸

衣手にとめばや庭のしら雪の日數ふり行くはなの匂ひを

これもまた雪の朝氣の路ならで蹈む跡をしきはなの木の下

〔續漸得雜記〕

一、謙德公御詠歌寶圓寺に有之御掛物、享和二年五十回御忌之節、右御用懸り之人々拜見寫取候。

雲霧も龍の臥すかとみえてまたあめきほひくる勢田の長はし

いく代々のやまとことの葉の不二の雪ためしをこゝにふり重ねつゝ

月前雁　同　公

をりしもあれ峯こす雁の一つらに聲もくまある月の初しほ

〔謙德公小松天滿宮奉納松梅百首〕

寶暦二年菅公八百五十年祭の際の作なるべし

松迎春新　常磐なる松のみさをもたちかへる春にあら玉の綠そふかげ

松色春久　花鳥はうつろふこゝろもまつひとり綠をふくむ春ぞ久しき

松樹遇春　霜を經し葉色はおなじ木の間よりみどり生そふ春の松がえ

松濕春色　うらわかき野田のみどりにくらべては松にぞ春のいろまさりける

霞隔松郁　まばらなる松の木の間もかすみあひて春にこもれるさとの一むら

松花十廻　さくほどのなかばゝすぎぬ松の春こゝのかへりの花もまだりかさ

松認殘雪　もみぢには終につれなき松の葉もいつまで殘る雪にそむらむ

雪消松綠　松が枝に降しく雪のきえてめてみどりをそむる軒のはる雨

松陰映水　いさぎよくみぎりを結ぶ川水にながれもあへずうかぶまつが枝

松老澗底　風になびくしづえ浪よる谷ふかみいはねの松は老木ながらに

嶺松帶雪　影しづむ夕日のあとの松風にはらひすてたる峯の横雲

松葉不失　しき島のみちもかくこそいく年の霜にふりせぬ松の木ぶかさ

翠松遶家　かげしめす松の木立のしげらずば雨もたまらぬ萱が軒端を

松風調琴　しらべぬをいさめやすることの緒の忍び音ながらかよふ松風

松風破夢　そばだてゝ吹やむほどを松の戸に夢もうつゝも風のまゝなる

松上霞　吹おろすあらしも春にをさまりてかすみこもれる峯の松が枝

松久綠　生のぼる陰高さごの松ぞなほみどり色そふはるや幾春

松爲友　君が代の千とせの友とうつし植てかげをならべむ松の行末

鶴宿松　おのが經むよはひもあひに相生の松にや宿る春の友鶴

連峰松　賤のをがかよふ妻木のみね遠み雲より雲につゞく松ばら

松臨池　かげうつす松のこずゑに風こえて千とせをたゝむ池のさゞ波

薄暮松　あめを今もよほす山の夕曇りまづ夜をいそぐ松のひとむら

江老松　松高き陰も入江に老ぬれどみづの綠の春をふかむる

遠山松　吹まよふ嵐はたえて鐘の音もみねに迷はぬ松のむら立

潮邊松　浪の上に清くうかべる松かげのしづえにかよふ志賀の浦船

山家松　山住になれずばいかゞ軒ちかきまつのあらしの夢に通はむ

閑庭松　松に吹あらしをよそに陰しめてすむはしづけき山里の庭

池上松　のどけしなうつす緑の松風に千世をふかむる池のこゝろは

故郷松　みさをのみ世を故郷に誰をかも昔の友と春やしたはむ

蕭寺松　ともし火の影も木深くほの見えて松にかくるゝおくの山寺

松嵐　枝よわきこと木は通ふ音もなしまつにぞいたく嵐吹なば

古松　子日する小松が原に陰高きおい木もおなじ緑そふらむ

栽松　所せき林を遠くうつし植ゑんかげそふ松のゆくすゑの爲

簷松　深みどりかさなるかげはふたつみつよつやの軒をおほふ松がえ

浦松　鹽ぐもり磯ぎはくらき松原にこゑのみはるゝ春のうら風

渚松　舟人もめでゝやしばしよる波もきよき渚の松たてるかげ

磯松　いそぎはゝ鹽にみち來て松が枝の緑ぞよその波にうかべる

谷松　枝高き老木も谷のふかみどりきしの小松に陰ならぶなり

巖松　おほはるゝいはほのこけもみどりなる色をあらそふ松ぞ木だかき

春松　春といへば松ひき植ゑていやしきも高きも千世の門をしむらし

夏松　しげりあふ深山の木々の若葉にも操まがはぬ松ぞたゞしき

秋松　桐の葉はさそひもあへず聲たてゝあきにはげしき庭の松風

冬松　冬枯にのこるを陰と夕がらすこの山松のねぐら訪ふらし

歳暮松　あすは又おのがはる知るひとしほのみどりを松のこし深きかげ

寄松戀　頼めまじいつはとちぎる夕ぐれのまつにかはらぬ人のことの葉

松風似時雨　吹まゝに外山づたへをゆく雲のあとにしぐるゝ松かぜの聲

社頭松風　いのるぞよ松をためしの神風になびくすぐなる國のすがたを

松有歡聲　國津民をさまる風の世のこゑをうつせる松の木陰にぞきく

對松爭齡　雲の上の松やしる人千とせともさらにかぎらぬ君がよはひは

松契千年　霜雪にのこるみさをのふかみどり松に千とせの陰やたのまむ

年內梅　くれ殘る年にもおのが春きぬと咲くや一重の宿の梅が枝

初梅　うぐひすもまたれぬがほに春きぬとまづ咲きいづる窓の梅がえ

依梅知春　咲初し色こそ雪の冬ごもりおのれはるべと匂ふ梅がえ

露暖梅開　つらゝゐし梢もむめのにほふより露も紐とく花の朝かせ

梅度年香　年のうちはうとき夜がれの梅が香もうらなくかをる黄昏の春

梅契多春　春毎にのぼる梢のはなぞみむちよも若木の梅の行するゑ

梅月嘉色　よろこびをくはふる春の色みせて日影にゑめる梅のはつ花

窓梅封雪　雪をいとひかゝげぬ窓のひまとめてはるほのかにも匂ふ梅がえ

梅花悉開　あかずこよ明日のさかりをまつこともしらぬいろ香の梅の木陰は

梅花薫簾　玉だれの内ふきかへす夕かぜにをりえてにほふ軒の梅が香

梅薫窓中　花のいろもむかふるばかり梅が香をよそに吹いる小夜の春風

梅花薫晩　しら雪にまがへし花はいろくれて霞にきえぬ軒の梅がゝ

梅芳微雨　むめがかに先うちしめりふる雨を花よりつとふしづくにぞしる

梅花襲人　咲梅の今日の色香をみぬ人にかたるやあすの契なるらし

社頭梅花　仰ぐぞよ神のちかひは越路までにほふ北野の梅のさかりを

月照梅花　夕月を木ずゑにかけて玉だれのおくまで梅のかげにとはるゝ

梅花夜多　はなも又色みぬ闇のあやなきとことわりすぐる小夜の梅が香

梅香何方　ふきたえてありかさだめよまばらなる軒端つだひの風の梅が香

梅交松芳　若みどりさしもえぬ松の木の間よりおのが春かすかせい梅がゝ

梅花不異月　月にさへさだかならぬを春の夜のおぼつかなくもむかふ梅がか

梅遠薫　もれくるはこゝにまだかき梅が香をとめ行末やかすむ山もと

梅薫庭　庭の面にちれば又さくはなに花にほひ吹あまる梅の下かせ

梅迎客　垣ほこすわか木の梅の咲ころはちぎらぬ人も尋ねてぞよる

梅間雪　咲しより香やはかくるゝ梅がえの雪こそ花にまがふ夕も

鶯鳴松　したひ來て軒に木傳ふ鶯の聲も花なる春の梅がえ

戸外梅　山風のたゝく夕の柴の戸をわれとごがほに梅が香ぞする

野亭梅　知しらず人ぞとひよる待つこなきのもりが庵も梅のさかりは

遠村梅　梅かこよ朝もくゆらず山もとのけぶりにうづむ雪の一むら

旅宿梅　花にいつ契かはしゝくさまくらむすぶ假寢の梅の下臥

古宅梅　軒をつとふこけのしづくも吹散りて梅が香しめるやどのはる風

古砌梅　とはゞやな花をみはしに移しうゑし梅のねざしの遠きむかしを

河邊梅　うつり香をいかにせかなむちらぬ間の梅の陰ゆく春の川水

隣家梅　こなたともわかぬ一枝は折る人をゆるしやすらむ梅の中垣

庭梅　とへかしなむめに契りしはるのとも庭のいろ香のさかりすごさで
籬梅　かこひぬるまがきの梅の枝こえてしろきあかきの花ぞまじはる
里梅　行きかよふ隔も見えて山ざとの垣根わかるゝむめの白妙
詠梅　なさけなくとはぬたもとの追風に往來とがむる野路の梅がゝ
岡梅　家づとに切りなつくしそ里人のはるのゆきゝの岡の梅がえ
津梅　あことめし代々の言葉も咲くやこの花にぞ匂ふ難波津のはる
梅匂　かせの上にまかする花のあだし香をまた吹とぢよ梅の木陰に
曉梅　むめがゝぞ枕にしめるあかつきの里吹とほす風の名殘を
曙梅　はなの色も今日はのこらぬさかりとぞ梅が香しるき明ぼのゝ窓
朝梅　朝露にむめがゝしめるこずゑより日影まちとる花のくれなゐ
夕梅　この夕むめがゝあかぬ水の面に梢も月も相やどりして
暗夜梅　夢うつゝさだかにゝほへ春の夜のやみにも梅のおもかげにたつ
折梅　むめのはなかざゝぬ枝も手折もつ袖にまづちるきさらぎの雪
梅花散風　棹姫の霞のそでにつゝめどもえだにたまらぬ梅の春風
落梅浮水　花のかげはよしや曇るがまゝならであだに流るゝ梅の下水

凋落梅　春も猶おくれてきえし谷かげにまた散つもる梅のしら雪
寄梅戀　一枝のなさけわすれぬむかしが香のこる袂に面影ぞそふ

四月十二日。前田重煕の喪を發す。

〔政隣記〕
四月十二日。中將樣辰之刻御逝去。御用番江御屆之御使御家老前田兵部、副使聞番。御一門樣方江早乘使、御大小將・御表小將を以御案內追々御出。右に付金澤年寄中江御使、御使番寺嶋左太夫被遣、今晝發出、判金一枚・御羽織一拜領。十六日金澤着、廿一日江戶江歸。

〔寶曆三年日記〕
故君御享年廿五歲、熟々念へば九年已前には護國公の御事、八年已前は大應公の御事あり。今茲いかなればかゝるうき事を承り奉る哉らん。日こそ多きに十二日の御事と不思議なる御事なり。實々は八日巳の刻共、又六日共末々にては申奉る。今月四日より急に御浮腫の御容躰にて、群臣を棄させ給ふ。八日とても、大應公實々は八日に御事あり。それゆゑ故君御內々にては御精進も有りしとかや。故君元來御虛弱の御生得ながら、角ばかり往し松雲公の御政務を逐ひ、日夜御政道に御意をつくさせられし御聖德に引されて、御壽命も長く轉ぜさせらるべきに、思ひよらざるけふにあふ事、誠に僕一人に限りたるにはあらねど、扨こそ命は

有る物かは、壽長ければはぢ多きと言ひしも今の身なるか。あまりのうきによしなし事を書付侍る、たゞ忙然の外他なし。

四月十二日。前田重靖、重煕の嗣として服忌を受くべきを命ぜらる。

〔政隣記〕

四月十二日、上總介樣御儀、中將樣御逝去之日より五十日・十三月之御服忌被爲請候樣にとの御書付、今日於御城御用番西尾隱岐守殿、前田信濃守殿ゟ御渡、則御持參。依之諸頭ゟ御弘有之。同夜より上總介樣御居間書院に被成御座候。

御尊骸御道中御供之頭分以上、於御前被仰渡。

四月十三日。醫師に命じて金澤より江戸に向はしむ。

〔謙德公年表〕

四月十三日、中村正伯・大庭探元昨日年寄中被仰渡、今曉早打に而發足。但正伯は五月八日歸着、探元は江戸表に御指留也。同日年寄中より爲伺御機嫌、御使番辻織人早打に而發出、同月廿四日歸着。同日人持頭分爲伺御機嫌、御用番宅ゟ今明日に罷出候樣申談有之。

四月十四日。前田重煕の病輕快せざるの報金澤に達す。

〔大野木克寛日記〕
四月十四日、中將樣御不豫に付、明十五日晝土佐守東邸ゟ首途、尤道中被指急旅行之由。御使番志村五郎左衞門、今朝早打にて東都ゟ首途と云々。明十五日朝、安房守被赴東都と云々。
申上刻頃、高田庄太夫御大小將組之内。従江戸早打に而到着、直に爲御用安房守之邸ゟ罷越。是者從上總介樣、中將樣御容躰年寄中ゟ被仰下候御使歟。
及申中刻頃、御用番丹後守より觸文到來。
猶以幼少病氣之面々者、御用番迄以使者可被申越候、以上。
中將樣御氣色未御宜候旨、江戸表より以早飛脚申來候條、各今明日中御用番宅ゟ參出、御機嫌可被相伺事。
右之趣可被得其意候、以上。
四月十四日　奥村丹後守

四月十六日。德川家重、前田重靖に使を遣はして香奠を贈る。

〔德川實紀〕
四月十六日、松平加賀守重熈卒去しければ、奏者番松平紀伊守信岑弔慰の御使して、其養子

松平上總介利見に銀五十枚たまはり、香火の奠とせらる。

五月とあるは誤なり

一、五月十六日御奏者番松平紀伊守殿を以、御香奠白銀五十枚御拜領被成候。

〔謙德公御年表〕

四月十六日。前田重煕卒去の報金澤に達す。

〔謙德公年表〕

四月十二日辰刻御逝去之旨、江戸表より御使番寺島左太夫發足、十六日辰刻金澤參着。依之頭分以上越後屋敷に被召呼、御逝去之儀、且又上總介樣御養子御願書付、御用番御老中迄御指出之儀、奧村丹後守演述之。左太夫十七日發足、江戸ゟ歸。

四月十九日。金澤にて前田重煕の遺志を諸士に傳ふ。

〔謙德公年表〕

四月十九日於越後屋敷頭分被召呼、左之通御紙面を以被仰演趣。

中將樣御氣色御指重之節、去八日前田兵部・中川八郎右衞門御前ゟ被爲召、御容躰被及御大切に候はゞ、上總介樣御儀御養子に被成、御名跡御願之思召に候間、右之通可奉心得候。御逝去被遊候はゞ、御家中之人々上總介樣ゟ中將樣御同事に御奉公申上候樣に、一統可申渡旨御意之由、兵部等より申越、被奉得其意、支配之人々ゟ茂可被申聞事。

四月廿五日。前田重熙の靈柩江戸を發す。

〔政隣記〕

四月廿五日曉九時御供揃に而、九半時御出棺。備後守様御廣式御門之向空地ゟ御出、齋藤長八郎殿・前田帶刀殿・木下平九郎殿にも右之邊ゟ御出候。中之口御門之内ゟ御一門様方御附使者出、廣德寺和尚も右御門内御廐之邊ゟ御出、上總介様にも同所ゟ御出、直に御露地口より被爲入、西小屋邊より追分口御門之内迄御馬に而御供被遊候。年寄中等者口御門之外、組頭・物頭等者同所腰掛前、御近習頭等は御附使者之後ゟ出。

同夜御跡爲御祈禱、富士瑞泉院御招、伴僧四人被召連。

同一宿御泊之驛迄、御見送御使窪田主馬被遣之。但松雲公之時は本多圖書、大應公之時は富永數馬被遣候也。

一、御棺御供之人々、御家老役前田兵部、御馬廻頭御道中奉行九里治兵衞、大組頭由比勘兵衞、御持方頭竹田金右衞門、御先手御道中奉行葭田六郎左衞門、御道中御歩支配出雲守様奥方様附物頭並福田新左衞門、御奥小將御番頭澤田忠太夫、御使番河内山七左衞門・志村五郎左衞門・野村源兵衞、御表小將横目中村次右衞門、御長柄奉行御表小將奥村五兵衞、御大小將横目代御大小將御近習番山崎次郎兵衞、御宿拵宿割兼御大小將四人。

御泊附。　桶川　深谷　倉ヶ野　坂本　追分　榊
　　　　　牟禮　關川　荒井　名立　糸魚川　泊
　　　　　滑川　高岡　津幡　金澤

右之通十五御泊に而十日御着棺、寶圓寺に直に被爲入、健次郎殿御寺に御待請被爲入、津幡迄御迎長九郎左衞門。

五月朔日。前田重靖本郷邸に移る。

〔政隣記〕

五月朔日、上總介樣今朝五半時御本宅に御引移、當分御居間書院に御居住、御臺所東之方緣頰圍み御膳所に相成。且今日より御持鎗・御纒・鎗等裏御式臺に懸之。

五月七日。昨今兩日に前田重熙の中陰法會を江戸廣德寺に執行す。

〔政隣記〕

五月七日、謙德院樣御中陰御茶湯、昨今於廣德寺御執行。出家五十口、御茶湯料白銀五十枚。御奉行本多安房守、御用主付御小將頭三輪藤兵衞、御持弓頭津田平次右衞門。昨六日午刻初施餓鬼、上總介樣御參詣御燒香。今七日は諸役人寅刻揃、卯中刻始り、五時頃上總介樣御參詣、頓寫之寫水御取被遊、都而相濟迄御詰御燒香。昨今與力以上拜禮被仰付。

五月十三日。前田重煕の葬儀を金澤寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

五月十三日於金澤寶圓寺、辰之刻謙德院殿故正四位羽林中郎將緝甫倘古大居士御葬式。畢而野田山に御移。御行列御先乘奧村左京、騎馬前田兵部、御名代村井主膳、御跡乘長九郎左衛門。御巡道之節四花西尾隼人、御位牌本多圖書、御靈供前田兵部、御棺先奧村左京、御天蓋前田式部。

一、十六日・十七日・十八日御中陰御法事、廿日御三十五日、廿二日御四十九日、廿四日御百ケ日御法事、夫々於寶圓寺御執行。

五月十四日。前田重靖命じて弟重教が老臣村井主膳の養子たるべき前約を解かしむ。

〔袖裏雜記〕

尙以御手前儀、先頃は不快之由令承知候。快候哉承度候。

一筆令啓候。先代前田健次郎儀、村井主膳方へ可被遣御內意有之候樣にも承候。彌左樣に候はゞ、手前家督之上は、近々にも健次郎當表に出府有之樣に可致候間、主膳儀外へ內存も致

置候樣に可被申談候。右之爲申入候、謹言。
五月十四日　上總介利見　御判
奥村丹後守殿

五月十八日。前田重靖、重熙の遺領相續を命ぜらる。
〔政隣記〕
五月十七日左之通御奉書、今晝八時前御用番從左衞門尉樣來、御請之御使御大小將富田主税勤之。
御用之儀候間、明日四時可有登城候、以上。
五月十七日　酒井左衞門尉
西尾隱岐守
松平右近將監
堀田相模守
松平上總介殿
猶以忌御免に候間、被致月額可有登城候、以上。
十八日五時之御供揃に而、同刻過御登城、柳之間に御溜之處、於御座之間、謙德院樣御願之

通御遺領無相違被進之。其上御懇之上意有之。御退、直に松之御廊下御先代之御部屋被爲入。但御登城之節御供數は是迄之通被召連、御下り桔梗御門外より御先代之通御供數被召連、粒子山形之御鎗、金御紋御挾箱、但二つ共内に而替る。御牽馬、御供鑓數も御先代之通被召連之。右御供相揃候儀御案内申上候而御下り也。御玄關迄之御供、御登り之節者兩人に付、御馬廻頭篠原六郎左衞門・御表小將中村藤右衞門、御跡より御使番寺嶋左太夫罷越。御下り之節は三人被召連、六郎左衞門御先立勤之、聞番靑木伊右衞門も罷越候。御着服無劔御紋、其儘に而御老中等御勤也。御下り西御丸に御登、御奏者番に被謁候而御退出、直に御老中方・若年寄中御廻勤、神田御前樣にも被爲入。但御供數之外に御大小將より伴源太左衞門被召連、御城表之御樣子被仰下、源太左衞門御館へ歸、御近習御用窪田主馬迄申演之、主馬より年寄中・御用入にも申達、夫々被仰聞。御客衆に者、御小將頭三輪藤兵衞罷出申述。夫より一統布上下着用。

一、御歸館之上年寄中等御前に被召出、今日之御樣子被仰聞、諸頭にも可申聞旨御意に付、年寄中於席諸頭に左之通安房守演述。

御忌御免今日御登城可被成旨、昨日御老中方御連名之御奉書到來、御登城被成候處、於御座之間謙德院樣御願之通、御家督無相違御相續被仰出、其上御懇之上意、難有御仕合被思召候。此段何も可申聞旨御意に候。

右之趣組・支配ゟも申聞、爲御祝詞頭ゟ相勤候樣可申渡旨申談有之、諸頭は御帳に付。
一、今日より廿二日迄五日之內、御表向布上下着用平詰。今日御持筒頭武田判太夫ゟ、御家督被仰出候御案內金澤年寄中ゟ之御使被仰付、判金一枚・御羽織一拜領。翌十九日發足、六月十三日歸府。
〔大野木克寬日記〕
御座之間巳上尅公方樣・大納言樣出御。上總介殿酒井左衞門尉忠寄誘引、跡より堀田相模守正亮・本多伯耆守正珍指添罷越。左衞門尉御前ゟ向、松平上總介こ披露之時、近く被爲召、亡父加賀守被願置候通養子申付、遺知無相違相續申渡候。右上意訖而御退座、亦重而御前ゟ被爲召、段々御懇之上意有之。御手自御熨斗頂戴に而御退座に而、重而御白書院御緣頰に而、御老中御列座、右御禮被謁、大廊下御三家御部屋之下御着座。于時上總介部屋、今日より亡父之通被進候旨上意之由、本多伯耆守直に演述。
一、左衞門尉を召、若年寄板倉佐渡守勝淸を以被仰出候。上意之趣。左之通上總介ゟ可申聞候。
亡父加賀守儀、存世之內國許仕置方宜段達上聞に候。歲若に有之候處、希之儀に思召候。其上久々病中被在之、國方仕置に被致心勞候旨、其時々達上聞、御殘多儀に被思召候。大納言

様に茂右御同様に上意之旨。

〔德川實紀〕

五月十八日、加賀國金澤城主松平加賀守重熙遺領百二萬五千石餘を、養子上總介利見にたまはり、加賀・能登・越中の國主たらしむ。

五月。前田重靖の家中に乘輿免許の者を增して十三人と定む。

〔天珠公御年表〕

一、先例上總介家來之内乘輿御免之者可爲十一人旨、享保十八年水野和泉守殿を以被仰渡候。

知行高一萬六百石遣置候。　青山將監　酉六十三歲

同　五千石。　玉井市正　酉六十一歲

右私家來乘輿爲致度相願申候、以上。

五月　御名

御付札、家來乘輿御免之儀可爲十一人所、是以後十三人御免に候條、乘輿御免之儀可申渡候由。

六月四日。前田重靖上總介を改めて加賀守と稱す。

〔高畠左門留帳〕

上總介樣御名加賀守樣与御改被成度旨御願書、去三日御用番ゟ御出被成候處、翌日御願通被仰渡候由、江戸表より申來候。此段爲承知申達候條、支配之人々ゟ可被申聞候、以上。

六月十五日　奥村丹後守

高畠左門殿

村田吉左衞門殿

六月五日。前田重靖登營して家督相續の恩を謝す。

〔政隣記〕

六月五日、御家督御禮被仰付候間、今日五半時御登城可被成候。御別紙に御家來七人被召連候樣、前日御老中方御連名之御奉書依到來、則今日御登城、於御黑書院御家督御禮被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、於同所御献上如御先例。但五時前御供揃に而、五時御出也。

安房守等七人御目見、献上物左末に記之。但安房守者帶刀に而御目見前格之通、袋人之傘被持之。

一、御下り御老中方・若年寄衆御廻勤、直に廣德寺ゟ御參詣。

御献上物左之通

御太刀一腰・御馬二疋裸背内山栗毛四歳四寸八分・黒澤鴾毛五歳三寸二分・綿包のし五十把・縐紗包のし廿巻・白銀百枚付臺・御目録・御刀備前景光銘有代金二十枚・三所物通乗作・御目録。

西御丸ゟ、御太刀一腰・御馬一疋裸背石田黑七歳三寸七分・綿包のし五十把・白銀百枚付臺・御目録・御刀青江長次・御目録代金二十枚・三所物壽乗作。

御本丸年寄女中ゟ、銀三枚宛。同御表使四人ゟ銀二枚宛。

右之外、御老中方初御役人中ゟ之御進物御先例之通。

御太刀銀馬代・縐紗五巻　本多安房守政行

同　斷　紗綾五巻　前田大炊孝昌

同　斷　同　斷　横山求馬隆達

青山將監聚暢

同　斷　同三巻宛　横山藏人正従

玉井市正貞衞

中川八郎右衞門惟忠

右面々長袴着用、従御前半時計御先ゟ登城。安房守一人ゟ聞番見習中村市郎左衞門、外は三人ゟ一人宛、聞番代御大小將伴源太左衞門・青木作右衞門指副。且右七人御目見之御禮は、御

前・御老中ゟ被謁、大納言様ゟは安房守等三人は御太刀銀馬代献上之、御家老將監等は献上物無之。

一、今日より七日迄、御殿御表向平詰、布上下着用。

一、御歸殿之上、今日御城之御樣子、年寄中・御家老中ゟ御直命、諸頭ゟも可申聞旨御意に付、於年寄中席左之通前田大炊演述。依之爲御祝儀於竹之間御帳に付、御年寄衆・御家老衆御小屋ゟ相勤。

今五日御家督之御禮被仰上候樣、昨日御老中方御連名之御奉書、幷御家來七人可被召連旨御別紙到來。今日御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、其上御家來御目見被仰付、忝御仕合被思召候。此段可申聞旨上意に候。

右御弘、於金澤は六月廿八日有之。年寄中等御宅ゟ頭分以上廻勤。

〔德川實紀〕

六月五日、臨時の朝會あり。日門御對面せらる。松平加賀守利見襲封を謝して拜謁し、備前の國景光の刀に銀百枚・卷物二十・綿百把・馬二疋を奉る。

六月十日。前田重靖老臣をして德川家重の賜馬を觀覽せしむ。

〔謙德公御代日記〕

御前は前田重靖

一、六月十日、年寄中等・御家老・若年寄、依願御拜見被仰付、御殿於席御菓子被下候。夕方御居間先御馬場に而、御馬爲御見、御前江も被爲召、何茂馬術御覽被遊候。大炊・將監は御斷、其外は人々持馬を乘之。

六月十二日。前田重靖前名利見を改め正四位下左近衞權少將に敍任す。

〔政隣記〕

六月十二日、御一字被下候間、其御心得に而五半時御登城被成候樣、昨日如例依御奉書、今朝五時過御登城之處、於御黑書院御一字（重之御字なり。）御拜領、正四位下少將に御轉任、御懇之上意、御盃・御腰物（来國實代金二十枚）御頂戴。九時頃御下り、西御丸江御登り、御奏者番江被謁、夫より西丸下御厩江御立寄、御上下被召替、御半袴に而御老中方・若年寄衆御勤、八時過御歸館。但御供數之外、御表小將土肥右膳被召、右之御樣子被仰下、早馬に而罷歸。

御轉任等に付御獻上物左之通。

御太刀一腰・御馬（裸背鹿毛四歲二寸三分）・黃金五枚・綸紗包のし十卷・御目錄・御刀一腰（阿州氏吉代金十五枚）・御目錄。

西之丸、御太刀一腰・御馬（裸背鴇毛四歲三寸九分）・黃金五枚・御目錄・御刀一腰（備前盛光代金十五枚）・御目錄。

一、今日より御實名重靖公と被稱。

一、今日年寄中等御前江被召出、御城之御樣子被仰聞、何もへ茂可申聞旨御意に付、年寄中

席ニ諸頭被召呼、大炊左之通演述。

加賀守樣今日御登城被遊候處、於御黑書院御一字御拜領、被任少將、御腰物御拜領、其上御盃幷御肴御頂戴、御懇之上意、重疊難有御仕合に被思召候。此段何茂可申聞旨御意に候。右に付於竹之間爲御祝儀御帳に付、大炊・將監御貸長屋ニも相勤、平士は頭に謁、頭・支配人御小屋ニ爲御祝詞勤。

〔德川實紀〕

六月十二日、臨時の朝會行はる。松平加賀守利見、備前の國盛光の刀に卷物十・金五枚・馬一疋を獻す。御名の字を賜ひ、正四位下左近衞權少將に任ぜられ、重靖とあらため、御盃下されて、來國實の御刀を賜ふ。

六月十四日。前田重靖叙任口宣受領の爲に使者を命ず。

〔政隣記〕

六月十四日、今般被任正四位下少將候に付、口宣御奉書相渡次第、京都ニ持參之御使御大小將青地齋宮ニ被仰渡、直に金澤ニ歸居留り候筈。口宣受取候御使は、從金澤人持組津田木工ニ被仰渡。于時御奉書同十七日相渡、翌十八日齋宮發足、七月朔日京着、木工は七月十日金澤發十七日京着。口宣等木工受取、齋宮金澤ニ持參。

六月廿三日。紀伊侯徳川宗直その女賢姫を前田重靖へ嫁せしめんことを求む。

〔政隣記〕

六月廿三日、御縁組就被仰談候、従紀伊大納言様御家老岡野伊賀守參上、御口上前田土佐守承之申上。御小書院ゟ御出、伊賀守被召出、御口上御聞、御熨斗三方出之。同所に而土佐守相伴、二汁六菜之御料理被下之、外に御引菜出之。重而御出御直答、御縁頬御杉戸之外迄御送。廿五日には紀州様ゟ、一昨日之爲御答御使前田土佐守被遣、副使聞番青木伊右衛門參上。兩人共御目見、土佐守ゟ者大納言様御手自御熨斗鮑被下之。宰相様にも御一所に被成御座。御直答、御料理被下候儀等、此方様之御作法御同事。

廿七日、御縁組御願書、前田信濃守殿御用番松平右近將監殿ゟ御持參。従大納言様者御家老を以被上之候旨、御用人井口源次右衛門被遣、御吸物・御酒・御肴出、跡に葛きり・御吸物等出、前田土佐守を以御答。従此方様紀州様ゟ御案内、聞番青木伊右衛門被遣候。

六月廿八日。諸士の諱の藩侯の名に觸るゝものを改めしむ。

〔高畠左門留帳〕

御一字御頂戴に付、御名乘重靖樣与奉稱候。御家中之人々實名、御名乘同字有之候者、相改可申候。文字は違候而茂唱同事に候者、唱替可申事。

別紙覺書指越之候、條可被得其意候、以上。

六月廿八日　　奥村丹後守

高畠左門殿

村田吉左衞門殿

七月四日。德川家重、前田重靖の婚約を許す。

〔政隣記〕

一、七月四日昨日如例御奉書、四時前御登城之處、御白書院於御緣頰、紀伊大納言樣御息女樣与御緣組御願之通被仰出候旨、御用番堀田相模守殿御演述。依之西之御丸にも御登城、御老中方御勤。紀州樣に者、上使兩人を以御願之通被仰出。右に付紀州樣に土佐守被遣之、御口上伊賀守取次申上候上、大納言樣等重而御直に御聞、土佐守着座、御吸物御相伴被仰付、宰相樣も御同座、御盃被下之。右相濟、於御小座敷御料理被下之。從大納言樣此方樣に伊賀守被遣之、御口上土佐守承之等、御作法紀州樣御同樣也。於御勝手座敷御料理被下之、土佐守相伴。

〔徳川實紀〕
七月四日、酒井左衛門尉忠寄・松平右近將監武元紀邸に御使し、大納言宗直卿の息女を、松平加賀守重靖に配偶を許され、加賀守重靖にはじめて仰下さる。

はじめて仰下さる本のまゝ

〔大野木克寛日記〕
丹羽若狹守殿先達而紀州樣御緣者に候。右丹羽殿ハ者、慶長中御取合已後、從御家御往返無之候。依之最前被及御斷候處、從紀州樣達而被仰込候。且亦丹羽殿之儀、紀州樣御取扱に而、御双方御和談之趣に罷成、被仰通も是巳後有之筈に候由申慣候。

七月五日。金澤小尻垂坂大雨により崩壞す。

〔謙德公御代日記〕
一、七月十八日、當五日金澤小尻たれ大雨に而崩、御細工方小者家潰、妻共三人死候。

七月廿七日。前田重靖就國の暇を受く。

〔政隣記〕
七月廿七日、御暇之上使御老中西尾隱岐守殿を以、御先例之通白銀百枚・御卷物三十御拜領。上使ハ御盃事之節、御刀信國代金十五枚被進之。從大納言樣上使秋元但馬守殿を以、御卷物二十御拜領。上使ハ右同斷、御刀備前國長代金十五枚被遣之。右御作法等都而御先代之通。

七月廿八日。前田重靖登營して就封の辭見す。

〔政隣記〕

七月廿八日、御暇之爲御禮御登城、於御黑書院御禮被仰上候處、御懇之上意、御手自御熨斗鮑被進之、御腰物備前國助(代金二十枚)御頂戴、御鷹二据・御馬二疋(栗毛鴾毛三春立黑木五戸南部立)御拜領。大炊・將監御目見、拜領物等都而如御先例。右相濟、西御丸にも御登、御老中・若年寄中御勤御歸館。昨今之御樣子、年寄中等御前に被召出被仰聞、頭共にも申聞候樣御意。依之諸頭に、左之趣大炊於席演述。

昨日上使西尾隱岐守殿を以、初而御國許に之御暇被進之、白銀・御卷物御拜領。從大納言樣も上使秋元但馬守殿を以被蒙上意、御卷物御拜領。今日御登城被遊、於御黑書院御禮被仰上候處、御懇之上意、御手自御熨斗鮑、御腰物御頂戴、御鷹・御馬御拜領、難有御仕合被思召候。其上大炊・將監御目見、拜領物被仰付、忝御仕合に候。此段何も可申聞旨御意に候。右御祝儀、於竹之間諸頭御帳に付。

〔德川實紀〕

七月廿八日、月なみ例のごとし。松平加賀守重靖始めて就封の暇下され、家助の御刀に馬・鷹を賜ふ。

八月朔日。二ノ丸新殿造營の上棟式を行ふ。

〔大野木克寛日記〕

今日二之御丸御新殿御上棟御規式有り。其書立末に寫之。

八月朔日吉日良辰御上棟御規式

祭主	西田清丞
助行	田邊久之丞
露拂	棟梁大工喜太夫
本酌	同　宗四郎
加	同　源右衛門
給事	棟梁大工豐左衛門
	同　七之助
	同　善四郎

一、露拂座を立て壇に行、布結をほどき、小祓の三方を取出し、壇に行直し階の際に着座。

一、助行座を立て壇に行、一拜して最要中臣祓無音によみて、小祓を左右前後と蒔、一禮して本座に着。

一、祭主座を立て壇に行、神拜拍手、中臣六根淨祓三種の大祓五種加持無音に唱へ、和歌誦文拍手神拜して御大工頭の前につく。御大工頭少し座を出て祝詞を渡す。其時祭主少し會釋して、懷中して座をたゝんとする時、露拂座を立ば、祭主は先立て御屋形の上に昇る。左座につく。祭主は祝詞誦し、和歌誦文神拜しておるゝ時、露拂跡につく。中の瓶子の神酒を提子に移し申なり。是を瓶子改といふ。祭主は御屋根よりおり、御大工頭に祝詞を返し、會釋して相扣申內、御大工頭座を立申時跡に付て來り、御大工頭御上棟の御祝儀申上るとき、祭主も御禮を申本座に歸る。

一、祭主本座に着て、神酒三方を持て御奉行の前に置、給事の役也。

一、本酌・加へ座を立て神酒をつぐ。つぎ樣追而可申談也。

一、御奉行御酒御祝濟て、諸役人皆一統に神酒頂戴也。

以上

八月十六日。前田重靖江戸を發して金澤に向ふ。

〔政隣記〕

八月十六日江戸御發駕、桶川御泊。十七日本庄御泊之筈候處、小山川滿水に付、深谷に御泊御逗留。十九日晝過御發駕、本庄迄被爲入候處、神奈川滿水に付本庄に御泊。廿日坂本。廿

一日上田。廿二日善光寺迄被爲入筈之處、筑摩川・才川共に滿水に付榊に御泊。廿三日牟禮。
廿四日高田、廿五日糸魚川。廿六日境。廿七日魚津。廿八日高岡。廿九日津幡。

九月朔日。前田重靖金澤城に着す。

〔政隣記〕

九月朔日、津幡明け六時之御供揃、非番之人々も惣騎馬御供に而、四時前御馬上に而御着城。
御大式臺より被爲入、健次郎殿御式臺迄御出迎御挨拶有之、御一所に御奥へ被爲入。御供人
奥表共頭分矢天井之間、同斷平士竹之間後下段、御歩・同並つゝじ之間に而御料理被下之。
足輕・小者、割場・御作事所於兩所赤飯・御酒被下之。
一、御着城前御居間・御寢間等御建替被仰付、此御用河内山七左衛門主付相勤之。

九月四日。前田重靖、紀伊侯徳川宗直の女の病を問ふ爲使者を發せしむ。

〔謙徳公御代日記〕

一、九月三日、於江戸賢姫樣御痲疹に付、紀州樣へ御見廻往來早打御使大橋作左衛門御使番被
仰渡、判金一枚・御羽織一拜領、翌四日發足。八日江戸着、九日御使勤。御直答、御料理被下、
白銀十枚・紗綾二卷拜領。同日發足、十四日歸着。

九月四日。前田重靖麻疹を患ふ。

〔政隣記〕

九月四日、御前頃日御熱被爲在、御麻疹之御容躰、中村正伯御藥上之。九日より中村佺安に被轉、十一日夜半より重而正伯、廿一日より八十嶋貞庵に被轉、廿七日より大庭探元に被轉、同日佐々伯順・小宮山了意に診被仰付。

廿一日謙德公御代日記に廿二日に作り廿七日は廿三に作る

九月十日。前田重靖諸士謁見の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔大野木克寛日記〕

九月十日、十三日御禮御延引、夫より段々相延、御日限追而可被仰出旨、御用番安房守・奏者番・予・御横目寺西勘右衛門に言達之。御横目より夫々傳之と云々。

右御延引之子細者、當三日より御寒熱御往來有之、頃日一統流行申候御麻疹御容子。依之中村正伯御藥上之。此外竅之御醫八十島貞庵・中村佺安・大庭探元等毎度罷出候。御容躰者御輕御様子に候得共、御湯未被爲召、旁爲御養生御延引之御様子に候。但右御麻疹御容子者、一向御表向御沙汰無之。右御沙汰無之儀者、江戸表に御沙汰有之候へ者、公儀向へも相知、預玄院様初、御一門様方より御見舞御使者指つどひ、從公儀御尋御奉書到來などゝ候而者、聊之御所勞甚仰山に罷成候故歟、一向年寄中初不知趣。夫故何故御禮之御日限御延引とて申趣無

是月は小盡なり

之候。

九月十一日。前田重靖の入國を賀する爲頭分以上の諸士物を獻る。

〔謙德公御代日記〕

一、九月十一日、御入國・御任官彼是爲御祝儀、頭分以上御肴一種宛、組頭以上御太刀馬代指上等。今日人持以使者上之、御奏者所にて與力請取。頭分以上は人々持參、矢天井之間にて御奏者番ゟ直々相渡。銀子・金子は其々御用番之家來上下着用爲持、二之御丸御進物所與力ゟ相渡す。罷出候頭分熨斗目・上下着用之事。依之御用番抔勤等者無之事。

九月十三日。金澤の町民盆正月を行ひて前田重靖の入國を祝す。

〔政隣記〕

九月十三日、金澤町中年賀盆中の如く遊び、今日作り物抔出し候而御入國を奉賀候。

九月晦日。前田重靖卒去して未だ喪を發せず。

〔政隣記〕

九月廿九日、四時過御前御塞、三匁之獨參湯上之、御開被遊候。其以後五匁之參附湯被召上候。年寄中等何も相詰被在之候處、御前ゟ何も被爲召、御精神御慥に被爲在候。健次郎殿を

備後守は大聖寺侯前田利道

被爲召、御意も有之候處、又暮頃御塞、直に御開き不被遊候。

十月朔日、出仕之面々例月之通登城、於御大廣間年寄中ゟ被謁候處、御前御氣色一兩日別而御勝不被爲遊候之旨、土佐守演述。其上に而一統に御機嫌相伺候事。

一、昨日より年寄中等早朝より夜四時前迄代々被詰、組頭・御用人も替合相詰候。

二日、御氣色御勝れ不遊遊候處、御指引被爲在候に付、頭分以上登城伺御機嫌可申候旨等、昨日御月番より申來。今朝五時頃何も登城、御帳に付退出。

三日、夜半頃御前御氣色御指重之趣に付、年寄中・御家老中登城。

四日、御家老役前田兵部江戶表ゟ早打に而、朝六半時頃發出、同刻御大小將久世權三郎早打に而、江戶表ゟ御醫師御願之御使に被遣之、白銀十枚拜領。

附、兵部出仕之儀は彼是御用可有之に付而也。

同日、頭分以上今朝五時爲伺御機嫌登城候樣、昨日依御月番御廻狀何も罷出、御帳に付退出。

同日、御前御氣色御大切に付、夜九時過年寄中等登城、同夜七時頃御大切之御案內御使、當番御大小將伴源太左衞門を以、備後守樣ゟ年寄中より被申上之。同斷江戶ゟ之御案內御使御大小將丹羽八右衞門ゟ被仰渡、丑刻發早打にて罷越、如御定例白銀十枚拜領之。

〔泰雲公御年譜〕

一、上總介樣、謙德公御御病中御詰被遊候節、或日御詰所へ中村佺安被爲召、此間はひたもい佛事を御覽候由御意に付、佺安申上候は、御壯年之內佛事御覽被遊候は不可然奉存候。必竟異端に御座候間、御差止可被遊之旨申上候所、尤左樣に候得共、面白き事も有之候。御慰にも相成候。されども人間に不定成ものに候。我等も生過たるかと思召候由御意に候。折節御前に賀古八郎太夫罷在候に付、佺安申上候は、是は如何成御意に候哉、誠以無勿躰御意に候。左樣成御意も、佛事御覽被遊候より起り候間、向後必至と御指止可被遊候。八郎太夫は如何被存候哉と申上候。後に存出、不思議成御意哉と存出候由、佺安申聞候旨、此頃之咄に付記置。

〔謙德公年表〕

一、六月粟ヶ崎へ被爲入候節、嘉三郎殿道之記御詠草。（御歲十四、公と晝九時頃より御同道、七時還城なり。）

ことし水無月中の八日、公の供奉して粟ヶ崎の方へ罷りける。道すがらの氣色、折にふれて左り右りに見渡さるゝ山々の梢、青葉漸く茂り行くに、道のかたはらなる稻葉渡る風のいと涼しきに。

いさぎよきかけひの水のおとづれて稻葉を渡る風の涼しき

と打吟じて猶行く〳〵は川の流れもいと淸きになん。

六月は延享四年なり
中の八日とあるは十九日の誤なるべし

にごりなき御代もしらるゝ水そこの猶すみ渡る夏の河波

かくて粟ヶ崎の御亭におはしつきぬ。浦のてうもう遠山の氣色、いはんかたなくをかしげなるに、みづからにも歌よめと仰せ侍りしに。

見え渡る千里の末はうつし繪の筆も及ばぬをちの山の端

夕べになりて粟ヶ崎より御舟に召れ、我も同じ御舟に乘りて出ぬ。浦吹風も身に入るばかりいとすゞしきに。

我やいま此夕方にかよひけんかたへすゞしき夏のうらぶね

御舟を大野のわたりにつけて、やがて外海のかたへおもむかせ給ふ。やゝ有りて宮腰の濱邊に出ぬ。白波のきしをひたせるけしきいとゞ面白う取そへて。

詠めやる千里もはれておのづからをさまる御代の沖津しらなみ

あかず見ん行くも歸るも白波の沖にうつらふ雲の一むら

軒をならぶるはまゝ町をはなれて、松原遙にさしかゝれば、畑いぶせき賤が家の所々に見え渡る。世のいとなみやいとまなからんと、哀に見すてがたきに、寺中の森をすぐるとて時鳥の聲も聞かまほしくて。

時鳥おのが五月は過ぎぬれどまだかれ〴〵のこゑもらさなむ

行き〳〵て日もはや暮がたになりぬ。

遠近やそれとは見えぬ洲崎にはまだ色くれぬ鷺の一むれ

と打吟じて程なく金谷につきぬ。門ひとへのもしほ草なれば落ちりて、見ん人のためかたはらいたきわざ成べし。

あらはれて誰かはとはんそれとなくかきあつめぬる浦のもくづは

〔續漸得雜記〕

一、寶曆三年天珠公御幼稚の頃より被遊候御詠歌を御書留置被遊候をば、善良院樣より、彼公御存生のうちに御添削御乞遊され候有栖川宮樣へ被懸御目、御追善の御歌御乞被成候所、親王樣より右御詠集の奧に。

寶曆三のとし神奈月、しぐるゝ雲のさだめなく、金澤少將身まかり侍りき。まことにいとけなかりし時より、敷島のみちをあふぎしかば、ちかき頃は點などこひ侍りつれば、袂の露いとゞひがたき事になん。母のもとより、かの朝臣のかきあつめし歌をみせにこし侍りて、追慕にはたゞ和歌にしくはなかるべくなど、こまやかに申こし侍りしかば。

純　仁

ありし世にかきあつめてし數々のこと葉の露ぞ涙なりける

あふぎてし言葉の道をしるべとやみのりの花も今開くらむ

〔雜　鈔〕

葉月中のひと日の頃黑津舟にて。

仲　秋

長夜松風遠。淸光滿九天。前園照秋艸。更對月轉圓。

名に高き秋の今宵のさらにまたそらにながむる月のさやけさ

右各利見君御詠。

〔續漸得雜記〕

天珠公御詠

延享三年十二月宗辰君かくれさせ玉ひけるによめる

惜まじよたれもいのちを君のためかゝるをりにしかふる世ならば

延享四年二月聖廟法樂和歌兼題二首

鶯告春

長閑なるひかりをそへて春きぬとけさぞ告げ來る鶯のこゑ

夕　梅

延享四年なり

さらにまた色香もそひぬ夕月の影にしらめるむめの梢は

寛延三年元日

今朝よりの春をしらせて出づる日のひかりも千代とまづかすむらむ

題なし

たがさともあかでぞふかす月に夜を秋のなさけはこゝろ〳〵に

〔越中古文書〕

嘉三郎様天珠公御短歌

ながむれば夜をもあかしの浦波にかすみてうつる春の月影

御祓するそでぞすゞしき秋もはやあすかの川の水のながれに

〔天珠公御詠歌〕

名所擣衣、延享三年十二歳、久世通夏卿添削

身にぞしむ霜夜かさねてうつ音も遠里小野のしづがさごろも

母公の四十になりたまへるを賀してよみ侍る

今日をまづちよの初と契らましみぎりの松のおなじよはひに

はらからなる人によみて贈りける

延享四年なるべし

よろづ世のみどりもふかき松が枝に生さきしるき雛鶴のこゑ
延享四年三月あづまにおもむきける頃、曉かけて宿に出しに、折しも月のひかりののこれるさま、いとあはれにおぼえければ。
よをこめて山路こえゆく旅人をしばしとおくるありあけの月
宗辰君住馴たまひし室にうつり侍りしに、花もやうやうさかりなるを御靈前へ手向くるとておもひつゞけ侍る。
千年もとなれて見しよの家ざくらけふは手向となるぞ哀しき
延享四年十二月宗辰君一周の御いみ、御靈前に手向る和歌十首のうち六首
逐日懷舊
うつりゆくうきよ思へば日に添ひて過ぎし別ぞいとゞ戀しき
曉懷舊
いねがてにしのぶ昔の哀さをいたくなそへそあかつきのかね
夕懷舊
ながむればいとゞ昔のこひしさも猶まさりゆくゆふ暮のそら
深夜懷舊

いとゞ猶ぬれこそまされさよふけてむかしをしのぶ閨の衣手

寄風懷舊

けふは猶むかしわすれぬ衣手になみだなそへそ庭のまつかぜ

猶懷舊

有りしよを忍ぶ軒ばのむらしぐれひとりや猶も袖ぬらさまし

寶暦二年聖廟八百五十年忌奉納、瀧下螢

たきつせの玉とちりかふ夏山の夜半の螢のかげぞすゞしき

同、社頭松

神垣やあふぐもたかし八百年にあまる五十のはるのまつが枝

聖廟の御詠、此たびはぬさも取あへず手向山もみぢのにしき神のまにまにといへるを、一字づゝ五文字の頭にいたゞきて、人々に歌よませけるに、みづからもこの字を得て、船中暮春といふことを

漕出でゝ舟路はるかにみわたせばはるやいづこに歸るうらなみ

寶暦二年六月先公七回の御忌に逢ひたてまつりてよめる

けふは猶おもふもかなし夢ならでまたも見えこぬ君が別れを

夏山のこずゑの蟬に有しよをしたふなみだの音をやそへまし

寄道祝、寶暦三年春有栖川親王殿下御添削

直なるやゝまと言葉のみちも猶たえずさかゆる御代ぞ久しき

治まれるみよの惠にあふ人はなべてやまなぶしきしまのみち

寄竹祝

ふかみどり八千代をうけてさかふべき色も見えけり園の呉竹

〔續漸得雜記〕

一、天珠院樣重靖公へ御近習の内に、和歌讀方の事を伺ひしに御詠歌。

和歌の浦や沖津玉藻のひとつをも拾ひえぬ身は何をしるべに

今年御逝去。禁忌の御歌の由。

十月五日。前田重靖の喪を發す。

〔政隣記〕

十月五日、備後守樣朝六時過御登城、當番組頭大橋又兵衞御先立芙蓉之間に御通、同半時過御退出。追付御立戻、組頭高山善左衞門御先立芙蓉之間に御通、少將樣御逝去に付健次郎殿に御悔之御口上大橋又兵衞に被仰置、追付御歸。

一、頭分以上今朝五時登城候樣、御用番前田大炊より昨日依廻狀。各登城御帳に付、扣罷在、御大廣間に列居、年寄中等罷出、少將樣御逝去之儀等大炊演述左之通。
少將樣御氣色不被爲叶御療養、今五日卯ノ下刻御逝去被遊候。右之趣組・支配之人々ゟ夫々可申聞候。少將樣御病中、拙者共御前ゟ被召出、御養子之儀健次郎樣ゟ御願置被成候間、右之通可奉心得候。若御逝去被遊候者、御家中之人々健次郎樣ゟ御奉公可申上候。御幼年之儀に候間、別而人々致和順相勤候樣可申聞旨御意候條、可被得其意候。右之御樣子組・支配之面々ゟも可被申聞候事。
一、御逝去之儀、江戸表ゟ御案内之御使、御使番岡田主稅・御馬廻組北川治部、今五日八半時過發出。
一、御家中精進は五十日之事。
一、さかやき遠慮、又家中之者は不苦旨。
一、頭分之人々は大門たて、くゞりより往來。
一、御表向はさかやき御三十五日過剃可申等。
右等之趣觸有之。

十月九日。前田重靖、弟重敎を末期養子とするの願書幕府に提出せらる。

〔謙德公御代日記〕
今度私國許歸着以後、氣分相滯候所、指重本復難仕躰に候間、若死去仕候はゞ、實弟前田健次郎に家督相續被仰付被下候樣、先達而相願置候通、宜御執成可被下候、以上。

十月四日　　　　　松平加賀守

右江戸より十月十日出早飛脚、同月十六日到來。右之御紙面九日前田大和守殿、御用番堀田相模守殿に御持參、御持方久世忠左衞門殿御指添候。首尾能御請取候由申來。但先達而左衞門尉樣に御內談之處、御發駕前御相續御願之御紙面出居申に付、右之通之御紙面、御一類之內御持參候樣御內意候由。

十月九日。幕府前田重靖の病を問ふ爲使者及び醫師を發せしめ途にして歸る。

〔謙德公御代日記〕
一、十月九日、御大切に付、御醫師御願之儀、小笠原縫殿助殿を以御願、御醫師森宗乙老被罷越筈に而、同日御凶事之儀申達、夫より被歸。同日御氣色御尋之上使、御使番市橋大膳殿被仰渡、同日暮頃御發足。御大小將長瀨次郎兵衞差添。御凶事相知、十一日晚御大小將本保平太夫御使被仰渡、十二日晝上州新町驛に而追付、御凶事之儀申達、夫より被相戻候。

加賀守は前田重靖

同日御凶事の間脫文あるべし

一、御氣色爲被指重候砌、從金澤飛脚を以江戶表ゟ御屆、段々御注進に付、御尋爲上使市橋大膳被仰渡、其趣左之通。

立紙

御朱印人足八人・馬五疋、從江戶加州金澤迄上下可出之。是者爲御使、市橋大膳被指遣候に付被下之者也。

寶暦三年十月九日　　右宿中

半切

加州金澤ゟ市橋大膳被遣候間、不限夜中斷次第關所可相通者也。

酉十月九日　　相模印

碓氷・關川關所番中

半切

從江戶加州金澤ゟ、市橋大膳儀急御用に而罷越候。依之左之通早々今暮六時、三番町大膳屋敷迄可被指越候。

一、人足　八人　　一、御朱印馬　五疋

右之通今暮六時早々可被指越候、以上。

十月九日　　　　　　　　市橋大膳内　島田常右衛門

伊東忠右衛門

馬込勘解由殿

吉澤主計殿

立紙

一、市橋大膳様

右者加州金澤迄、今九日暮六時前御發駕、急御用に付晝夜御通被遊候。依之御朱印之寫一通、堀田相模守様御關所御證文之寫一通被遺候に付、則指越申候。先々早々相屆、無滯樣に可被致候、以上。

酉十月九日　　　　　　　　馬込勘解由　印

從板橋加州金澤迄宿次問屋衆中

一、右江戸より發出之所、御凶事就御斷、大膳殿道中より東武歸着に御座候。

〔德川實紀〕

十月九日、松平加賀守重靖金澤にありて臥病のよし聞し召され、使番市橋大膳長能に暇を給

ひ、かい地におもむかしめ、粕漬の鯛を給ふ。

十月十一日。前田重靖卒去の報江戸に達す。

〔謙德公御代日記〕

一、天珠院樣十月五日御逝去之旨御案内御使岡田主税(御使番)北川治部(御馬廻差添)十月十一日晩江戸着、御老中方へ御届有之。

十月十二日。幕府前田重教に重靖の忌服を命ず。

〔政隣記〕

十月十七日、於江戸今月十二日從御用番堀田相模守殿、前田信濃守殿に御渡之御紙面今日到來、左之通。但上卷之上前田信濃守に。

前田健次郎

松平加賀守卒去に付、五十日・十三ヶ月之服忌受候樣可被相達候。尤忌服請方相達候儀、於彼地承知之日より右之忌服受候樣相心得、忌服之書付追而指出候樣可被致候。尤健次郎儀當地に呼寄可被申候。到着次第可被申聞候。

右御渡、御稱號も右御書付之趣御承知之上、松平与可被稱旨被仰渡候由。從江戸早打御使御大小將大屋武右衛門・村上清右衛門今日金澤到着、前田兵部より言上、紙面入御覽。然共前記

之通、昨十六日より御痲疹に付、御快然迄御出府御延引之御願書、寄合加藤圖書、副使御馬廻組長瀨彥太夫を以被指出。今夜發足、早打に而罷越、御忌服被請候儀、御書付之御請も被仰遣。右御忌服御出府幷松平御稱號之儀、就御痲疹御出府御延引之儀、何も申聞候樣年寄中迄被仰出。但加藤廿二日江戶着、廿七日發出、圖書は十一月朔日歸、彥太夫は翌二日歸。

〔天珠公御年表〕

一、無御嗣子、異母弟健次郞利篤公御養子御願、依之御服忌定式之通被爲請候樣に被仰下に付、其日より五十日・十三月之御服忌、利篤公被爲請候。押付御出府可被遊之所、御忌明十二月四日に候故、寒中御痲疹以後御斷御延引に付、御家督之御沙汰無之候事。

十月十二日。前田重敎痲疹に罹る。

〔政隣記〕

十月十三日、健次郞樣昨十二日より御風氣之御樣子に而、御熱御指引成御座候處、十五日より御發之物有之、十六日より御痲疹に相極り、御藥者小宮山了意上之。至而御輕く何之御滯も不被爲在、召上方も御宜、廿六日頃には不殘御かせ、晦日御酒湯被爲召候。表面に者十一月三日御湯被爲召候趣也。今月十六日御痲疹之儀、御馬廻組岡田隼人早打御使に而、在江戶前田兵部迄年寄中より申達、御老中御用番にも御屆有之筈、十一月廿八日隼人歸。

一、十一月五日御麻疹御順に者候得共、御肥立兼、御出府之程難計旨御屆有之。

十月十三日。前田重靖の病を問ふ閣老の奉書金澤に達す。

〔謙德公御代日記〕

一、右御所勞爲御尋、御老中方御連名之御奉書、十月九日相渡、宿繼を以十月十三日七時前金澤へ到來。御逝去以後之儀に付、御認之儘御馬廻淺井主税を以御返上。同日發足、早打に而罷越。但不苦候はゞ、健次郎樣御頂戴被成度趣、堀田相模守殿迄被仰遣候處、同十九日則御渡。主税押返早打に而持參、二十四日歸着上之。右御奉書入候箱之內、從大納言樣も御尋之趣、秋元但馬守殿御奉書入有之に付、御拜見、御馬廻佐藤直記御使に而但馬守殿へ御返上。同日發足、早打に而罷越候處、健次郎樣御拜見御留置被成候樣、但馬守殿御指圖、十一月五日罷歸持參上之。

十月十三日。德川家重、使者を本鄕邸に遣はして香奠を贈らしむ。

〔謙德公御代日記〕

一、十月十三日本鄕御座敷へ、上使御奏者番松平周防守殿を以、御香奠白銀五十枚御拜領。御名代出雲守樣御勤に而上意御拜聽、御老中方へも御禮御勤、御一類中難有思召之旨被仰述候由。

〔德川實紀〕

十月十三日、松平加賀守重靖卒去しければ、奏者番松平周防守康福して香銀五十枚を給ひ、弟前田健次郎を弔慰せらる。

十月十七日。前田重教初めて諱を利篤と稱す。

〔政隣記〕

十月十五日健次郎樣御實名之儀、兒島平十郎に考被仰付、考之差上。

利篤公と奉稱。

右年寄中にも小紙に書記相達し候事。

〔高畠左門留帳〕

健次郎樣御名乘字利篤樣与奉稱候。御家中之人々實名、御名乘字同字有之候者相改可申候。文字は違候而茂同事に候者唱替可申事。

御名乘字之儀に付、別紙寫相越候條被得其意、支配之人々に茂可被申候、以上。

十月十七日　本多安房守

高畠左門殿

村田吉左衞門殿

十月十八日。金澤に於て前田重教が重靖の末期養子たるを許容せられたることを告ぐ。

〔謙德公御代日記〕

一、十月十八日、昨日御用番安房守任廻狀、頭分以上常服に而登城御帳に付、御大廣間に列居之處、年寄中出座、左之趣御用番演說。

少將樣今般之御樣子に付、御養子之儀健次郎樣御願置被成候所、去十二日御用番堀田相模守殿より、於御城前田信濃守殿ゟ御書付御渡、御承知之日より五十日・十三ヶ月之御忌服被爲請、御出府被成候樣被仰渡候に付、昨十七日より右之通御忌服被爲請候。且又松平之御稱號も昨日より被稱候。此段何茂可申聞旨被仰出候。右之趣組・支配之人々ゟも可被申聞候事。

十月十八日。前田重教麻疹の癒ゆるまで出府を延期すべきを告ぐ。

〔謙德公御代日記〕

一、十月十八日、健次郎樣御忌服被爲請御出府可被成旨、御用番より御指圖有之に付、早速御出府可被成候處、當十二日より御風邪御樣子に而、御熱被成御座候所、一昨十六日より御麻疹相極御順症には惣躰御輕被成御座、少も無御心許儀不被爲在候。右之御樣子に付、御快氣被遊候迄御出府御延引被成候筈に候。此段爲承知申達候事。

右に付直に伺御機嫌、御用番宅勤筈。

十月十九日。前田重靖を金澤天徳院内に葬る。

〔政隣記〕

十月十九日、天珠院様丑刻過御出棺、松坂より金谷御門、石引町通天徳院へ御移御。葬式辰上刻始、段々相濟、天徳院境内に御納り。健次郎様就御痲疹、爲御名代奥之口迄御近習御用前田兵庫御見送申上。御名代御近習御用富永數馬松坂御門内迄罷出、當番組頭等御臺所御門之方へ出、其外兩組頭・御使番・御臺所奉行・御細工奉行鼠御門之外七十間之方へ列居。前に人々提灯置之、熨斗目・小紋上下着用。役懸之平士并御大小將金谷御門之外明地へ、熨斗目・上下に而出、人々提燈前に置之。御寺下馬前人持組等・寄合罷出、惣門之内へ者御寺詰之頭分以上、白小袖淺黄長袴に而出。本堂へ向右之方へ前田土佐守・村井主膳・御家老中、左之方御奏者番・兩組頭・町奉行・新番頭・御歩頭・御用人・御大小將御番頭・御臺所奉行列居。出雲守様・備後守様等御代香御使者有之。

一、御出棺以後御居間御跡淸め、寶幢寺登城御居間に而勤之。畢而御居間縮置之。

〔續漸得雜記〕

一、天珠院様御卒去前金澤流行うたのはやしに、御茶ばやしといふ事あり。然處寶曆三年御

裕次郎は前田齊廣の子利命

卒去、天德院境内に御納、御墓則御茶林と以前より稱する處也といへり。又裕次郎樣之御墓地、以前より衣谷と稱し、御名之裕字に闇に符合するも不思議成事也と、其頃專ら申ならし候。また金龍院樣御墓地を市左衛門山与稱す。是にも色々咄ある事也。

十月廿三日。是日以降前田重靖の中陰法會を天德院に行ふ。

〔政隣記〕

十月廿三日より廿五日迄、二夜三日之中陰御法事、於天德院御執行、僧數百五十口、御奉行前田大炊。御家中與力以上拜禮被仰付。御三十五日廿八日、御四十九日十一月一日、御百ヶ日目同四日御法事有之。御名代村井主膳。今四日之外御名代は安房守勤之。

十一月十一日。前田重教の出府の期を延べんことを請ふ爲使者を金澤より發せしむ。

〔謙德公御代日記〕

一、十一月十一日、健次郎樣御痲疹御順快被成御座候へ共、向寒氣御旅行如何可有之哉、併公邊御首尾も大切成儀と、十月末より十一月初年寄中數回僉議、御近習頭・御醫師等にも僉議有之候得共、御痲疹後御日數も立不申、其上甚寒冷にも成、御旅行は難被爲成儀と相極。御

痲疹後御肥立兼御見合之處、今以御勝不被遊候。其内道中及深雪可申候間、可成御儀に候はゞ來春中御出府被遊度旨御願書、早打御使戸田齋宮寄合今日金澤發足也。

十二月十九日。幕府前田重教が出府の後家督相續を命ずべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十九日於江戸、御用番西尾隱岐守殿御宅江御一類之内御兩人御出候樣、昨日申來。則今日出雲守樣・前田信濃守殿御越に成候處、左之御書立隱岐守殿御渡に付、直に御館江御持參、前田兵部等江御渡、委細御演述之趣有之に付、御大小將栂内藏太早打申渡、兵部等より言上。内藏太則同日發出、廿四日金澤江着、持參之紙面御月番江相達、則被上之。

松平健次郎、痲疹後肥立兼出府延引に付而者、家督之不被及御沙汰候。遂養生無程出府いたし候者、家督可被仰出候間、家中之者共致安氣可罷在候。且又其間萬一不慮之儀有之候共、家柄之儀に候間、其節は思召も可有之候。此等之趣、親類共江申聞候樣被仰出候。

是歲。幕府諸侯に籾の貯藏を命ず。

〔謙德公年表〕

一、寶暦三年より天下一統諸大名江籾納之有台命。知行高廿歩一に極り、十萬石に二千石宛、本藩も此圖り也。此頃江戸に而落書之狂歌に、金ださず米をあげうこなさるゝは大臣さまの

いかいおきもみ。

〔日暦〕

覺

一、九千三百二十七俵　能美郡

一、一萬四千四百九十三俵　石川郡

一、二千八百三十五俵　河北郡

一、六千七百四十俵　羽咋郡

一、六千九百七十俵　鹿嶋郡

一、四千七百十六俵　鳳至郡

一、二千六百七十七俵　珠洲郡

一、一萬九千六百二俵　礪波郡

一、一萬三千五百三十六俵　射水郡

一、一萬六千九百六十五俵　新川郡

〆

右當秋籾園俵數高如斯候條、得其意、手寄之御藏ゟ夫々御藏納可申渡候。尤籾納相濟候はゞ、

其段組切に可及案内候、已上。

酉八月廿日

岡田又兵衞

國澤太次兵衞

諸郡御扶持人十村中

本文は頭分以上の作法なり

寶曆四年

正月朔日。前田重教未だ家督相續の命に接せずして新年を迎ふ。

元日、四時過二御丸ゟ被爲入、於御居間書院年寄中御家老中・若年寄中被爲召、御目見被仰付。諸頭以上致登城候得共、御目見者不被仰付候。御家督未被爲蒙仰故也。鶴御料理上之候得共、庖丁御覽等之不被及御規式にはは候。

但、御門ゟ者物頭出、警固足輕者割場より出、橋爪御門に者御歩横目二人出、御門松飾有之。

〔大野木克寬日記〕

正月朔日、辰刻人持頭熨斗目・半袴着用登城。巳刻頃御廣間列居。土佐守・安房守・大炊・主殿・九郎左衞門・大膳出座。各御祝賀申上、土佐守及挨拶、各退出。右列居之節、御緣頰御奏者

隼人は大野木克寛

番・御横目伺公如例也。

御用番大膳、左之紙面隼人に被相渡。但昨日被相渡處、余不快に而不罷出、今日被相渡所也。

一、三ヶ日・人日・十五日頭分以上熨斗目着用。右日限之外常服。平侍は三ヶ日迄熨斗目着用之事。

元日頭分以上登城御帳に付、其上に而年寄中謁候事。

一、三御門ゟ元日・人日・朔望物頭等罷出候儀、御在國之通に候事。

但御禮人無之候間、警固者割場より相立可申事。

一、鶴之庖丁・御謠初・御射初・御打初・御馬乘初は不被仰付、十村ゟ御料理茂不被下候事。

一、元日御雜煮、十九日御具足御鏡餅御祝、七種、追儺御儀式は被仰付事。

右之通に候事。

正月十四日。大聖寺藩の飛脚足輕能美郡粟生に於て馬方を斬殺す。

〔泰雲公御年譜〕

一、正月十四日大聖寺備後守様御家來足輕、飛脚にて江戸表より大聖寺へ罷越候者、昨晩片町宮竹屋方止宿いたし、今朝罷立候所、升形邊馬宿之馬に打乘、松任に而繼可申由申候得共、

青は栗生

飛脚之儀に候間柏野迄通候樣に申に付、無是非柏野迄通候所、何こぞ迚之儀大聖寺迄直に通候樣、青邊にて相賴候に付、馬方迷惑いたし、大聖寺迄に而は罷歸儀難成、泊候へば入用も懸り申儀、決而難成、小松迄にても夜に入申儀、所詮難相成、幸替馬有之、御替可被下段申入候所、小松にて馬繼申さへおくれ候間、中々是にて繼替申儀難成由、彼是問答之內、馬方過言を申候哉、飛脚之者馬より下り立、刀を拔馬方を切臥申に付、一人之馬方は迯去、御飛脚之足輕は其馬に乘、小松之方へ罷越申處、青の在所之者ども、其所において僉議可致と相集候得共、不圖被疵付候而は如何と、早速小松へ致注進、町奉行小堀金右衛門江相達候に付、大聖寺役人中江其趣飛脚を以申遣、飛脚者は其儘相通遣候由。馬子は深手にて相果、翌十五日檢使有之由。

正月十八日。前田吉德の女斐姬と婚を約したる二條宗基薨ず。

〔政隣記〕

正月廿二日、二條右大臣宗基御不例之旨、今月十日從京都言上。其後段々御指重之由追而申來。爲御見舞御使者御馬廻組一宮宇左衛門昨夜被仰渡、今日早打に而發出、京都江罷越。同夜十八日薨去之旨告來、普請者一日、鳴物三日遠慮之御觸有之。御悔御使者御馬廻組石黑彌忠次、廿四日發足、常步より少差詰被遣。御代香御先手物頭笠間與三左衛門、同廿七日發足。

但、宇左衛門今月晦日歸、彌忠次二月八日歸。

右御院號、後敬信院前右大臣与奉申旨追而申來。右府樣者斐姫樣与御縁組被爲濟、御結納・御祝儀物も就被進候、二月十八日迄御忌之處、御勝手次第何方ゟ成共御縁組被仰合候樣、御遺誼之旨追而申來。且御妾腹に四歳之御男子有之、忠君与申候。是迄他所に預被置候を御引取、御家督に被立候由も追而申來。

〔泰雲公御年譜〕

一、正月廿二日、於京都二條右大臣樣御病氣御大切に付、爲御見舞早打御使一色宇左衛門罷越候。

一、正月廿四日、二條右府樣當十八日薨去被遊候に付、普請は今廿四日一日、殺生・鳴物は當廿五日迄三日遠慮之旨觸有之。

一、同日二條樣へ御悔御使石黑彌忠次被仰渡、同御代香御使笠間與三左衛門被仰渡、當廿六日發足之由。右府樣御年廿八歳被爲成、九條樣君達之由。

正月廿七日。大槻長太夫人持組前田式部に御預替となる。

〔大野木克寛日記〕

正月廿一日、葛卷賴母ゟ先年より御預置候大槻長太夫、前田式部ゟ御預替之由、賴母入來、

右近ゟ被申聞候由。

廿七日、今日賴母ゟ御預置候大槻長太夫、先達而之通前田式部ゟ引渡、安氣之段紙面を以案内申來る。

二月十七日、先頃前田式部ゟ大槻長太夫御預之儀に付、段々式部存念有之。組頭主膳之室ゟ度々參入、其後土佐守邸ゟも參入有之候。存念無據尤之筋、色々取沙汰有之候。此度之趣、元來年寄中取計に而も無之、御用頭取木村・中山等之者共了簡之躰に候。

二月八日。大聖寺侯前田利道使者を金澤城に派してその參覲の費用を補助せられたることを謝せしむ。

〔大野木克寛日記〕

二月八日、一昨六日從備後守樣御使者野尻五藤太登城。當番織田右近取次、達御聽、御返答同人申述之と云々。

右御使者被進候儀者、去頃御內用之儀付、御家老野口縫殿罷越、去廿一日御城ゟも罷出、年寄中幷御算用場奉行對談、其以後縫殿大聖寺ゟ罷歸候由。然處右以御使者、今般御參勤御要脚御願被成候處、御時節柄にも候處御聞屆被成、御影故御參勤も可被成と、別而難有御仕合思召候由御禮之御使者也と云々。右五藤太御用人格、知行二百五十石之由。右御使者、前廉

一圓相知不申、四時表御式臺に罷越候故、下番足輕立向樣子相尋候處、備後守樣御使者野尻五藤太と申者之由申候に付、御通候樣に申候由。取次御小將中村治太夫誘引、虎之間に可相通候處、御平生者内よりしまり有之に付、通しがたく候故、御式臺御鑓掛之邊に通し置、何方に可申樣も先達而申談無之候故、まづ御横目當番湯原藤左衞門に相屆候由。御横目所に茂、先達而一圓相知れ不申事故、先とりあへず虎之間御しまりを解、御障子も如例はづさせ申候由。其以後御徒・かよひ坊主小頭に茂、御茶・煙草盆等之事申渡候。且又年寄中席執筆相招、藤左衞門相尋候由に候處、執筆共も一圓不存候由。其比者御用番大炊未登城者無之由。右近も未罷出候由。右御鑓掛の邊に御使者爲待候内取次治太夫、先達而年寄共に茂御案内有之候哉と内證に相尋候へば、昨五日到着、御用番大炊殿に罷出、登城刻限相尋申上候へば、今日四時罷出候樣御差圖に付、四時罷出候由申候由に候。畢竟無滯相濟候得共、暫者爰かしこ首尾全部不仕躰に候由。あらまし今日執筆奥村彌三右衞門・御小將御番頭國澤彌兵衞申聞候趣に而記之。大炊殿手前に而夫々被申渡事抜候故、右之通と相聞候。猶追而承合可相記。間違之樣子也。

二月八日。藩醫矢田養安亂心するを以て縮所に拘禁す。

〔泰雲公御年譜〕

一、二月八日御外料百石矢田養安亂心いたし、今朝縮所へ入候。右子細は、四・五日以前御廣式より御内證を以御加增百石被下、本道相勤外料兼帶可仕旨被仰渡、白銀二十五枚拜領仕候旨、爲心祝出入いたし候もの五・六人相招料理振舞、中都与申座頭相招三味線引候樣に申に付、町人中申候は、未鳴物等之興行は無之候間、三味線は御差止可被成樣に申候所、其段は兼而得御内意置候。當時於養安は不苦候間、今宵は大騷可致とて、終夜致酒宴候由。又一說四・五日以前大音喜六郎殿へ罷越、今度健次郎樣御出府被爲任候に付。御内證に被爲成候間、今日中金谷御廣式へ御移可被爲成候。爲其先御内意之御使に罷越候段申置罷歸候由。右之趣に付、役人中承其通に難差置、寺社奉行へ申達、亂心之樣子に付一家中差添罷有候樣示談有之。彌亂心に相極候に付、今朝右之通に罷成候。右養安儀は、大應公應御意、謙德公御代延享四年卯五月廿二日新知も被下置候。養安四代以前は矢田周閑と申、其子亮慮、其子同傳、其子養安也。亮慮文學も有之、詩作抔もいたし候。

二月二十日。前田重教病癒えたるを以て前侯の卒後初めて寶圓寺・天德院に詣づ。

〔政隣記〕

二月廿日、寶圓寺・天德院に御參詣。御道筋松坂通、裏御式臺前、橋爪御門、石川御門より、

石引町より御參詣。御歸同斷。御痲疹に而天珠院樣御逝去以後、今日初而御參詣也。閏二月五日に者天德院、同十二日寶圓寺・天德院、同十六日野田御廟參。御供數御先代之通、外に御抱守組頭騎馬。

二月廿七日。博奕を行ひたる山田戶左衞門以下の諸士處刑せらる。

〔政隣記〕

二月廿七日、博奕一卷左之通落着被仰付。

五ヶ山ゟ流刑、山田戶左衞門。

先達而禁牢之處御知行被召放、橫山藏人與力倉知藤右衞門・成瀨內藏助與力溝口八左衞門。

同斷御扶持被召放、御算用者木崎伊七・同上山田半太夫。

一類ゟ御預御宥免、藤右衞門せがれ倉知政之助。

戶左衞門一類等指扣御免、田中三郎太夫・才所三郎太夫・野々崎吉郎兵衞・堀久右衞門・原田傳太夫・小川林右衞門・小竹庄藏・中村權左衞門・吉田喜兵衞・藤井五郎左衞門。

二月廿八日。小拂奉行鈴木萬兵衞の私曲に關係ある者の處分を定む。

〔政隣記〕

二月廿八日、鈴木萬兵衞一卷左之通落着被仰付。

五ヶ山江流刑。

一木逸角組御大小將　鈴木萬兵衛

萬兵衛儀小拂奉行相勤候內、過分之金銀致私曲、剩金銀受取切手數通致入筆、金銀高相直し遂算用、嶋田五郎右衛門・渡部磯右衛門江も銀子貸渡候段、重々不屆至極之者に付、死刑可被仰付者に候得共、彼是御大赦之御時節に付、死刑御宥免五ヶ山之內江流刑被仰出候得共、先達而牢死之旨頭逸角江公事場奉行中より申來。

牢死は寶暦二年十二月九日なり同年六月七日の條參照

外出不仕樣申渡置有之候得共、不及其儀旨逸角より申渡、萬兵衛弟鈴木十五郎・同人娘一人。

窪田主馬組御大小將　石黑宇兵衛

宇兵衛儀、小拂奉行相勤候內、同役鈴木萬兵衛私曲之筋に拘り申儀無之候得共、金銀高直し候切手有之儀、且同役私曲仕儀心付不申段、不念之仕合に候。急度御咎可被成儀に候得共、此砌之儀故其段者御用捨、指扣御宥免被成候旨、月番大炊頭・主馬江被申渡、主馬宅に而申渡之。

萬兵衛一類指扣御免之人々、粟田源左衛門・吉岡理太夫・三階新五左衛門・本保安太夫・本保長左衛門・中村太郎左衛門・澤田彌左衛門。

伊藤主馬江御預之處御改易、組外中村久兵衛（最前大小將之節萬兵衛同役）。嶋田五郎右衛門江御銀之內貸渡候に付、死刑可被仰付者に候得共、御大赦に付死刑御宥免、御改易。

一類〻御預之處御宥免、久兵衞嫡子中村鍋五郎・同人二男中村又吉。
久兵衞一類指扣御免、堀和左衞門・和田源太夫・南部玄伯・不破玄策。

二月廿九日。幕府前年の如く諸侯に糀の貯藏を命ず。

〔日　曆〕

昨廿八日堀田相模守殿役人中より被相達候間、今日可致參上旨申來、罷越候處、置糀之儀此書付之通御心得被成候樣、相模守申候。御銘々御寫取、御同席樣方御順達被成候樣に、是亦可相達旨申含候由、山田彌右衞門參出之使者中〻一同申聞候に付、委細承知仕候、健次郎儀家督以前候得共、御一同〻懸り被仰渡候儀与相心得申候。則圍糀之儀、去年も此方樣に而故加賀守家督以前に候得共、御一同〻懸り御書付を以被仰渡候間、其趣に相心得、御書付此切に寫取、國許健次郎方に相達、承知之御挨拶追而申上に而可有御座旨申達候處、諸事去夏之趣に御取扱被成可然奉存候旨、彌右衞門申聞候。右寫取候御書付、別紙に調上之申候。御承知之御挨拶被仰出次第、私共内相勤申に而可有御座候、已上。

二月廿九日　　青木伊右衞門

寫

置糀之儀、當年も於御料所圍置候樣に被仰出候間、萬石以上之面々も、當秋收納之節より、

去年置籾之外に、分限高一萬石に付、籾千俵宛園置候樣に被仰出候。
右委細之儀は御勘定奉行可被承合候。
二月
置籾之儀、當年茂萬石以上之面々、當秋收納之節より、去年置籾之外に、分限高一萬石に付
籾千俵宛圍置候樣に被仰出候由、昨二十九日堀田相模守殿に而以御書付被仰渡候由、青木伊
右衞門御使書并御書付寫共兩通出候付而、進之候條被入御覽、御算用場奉行へ可被仰渡候、
已上。
二月晦日
中川八郎右衞門
前田兵部
本多安房守樣
前田大炊樣
村井主膳樣
長九郎左衞門樣
横山大膳樣
追而御承知之上、御挨拶之儀被仰渡次第聞番可申渡候、已上。

右今日御改作所より被仰渡候者、去年之通今年も籾納之儀被仰渡候に付、右紙面御渡、御郡々熟談仕、去年之通に仕候間、指支申趣も有之候はゞ可申上旨被仰渡候。此段私方より可申談旨被仰渡候。尤此紙面落着より私方迄御返し可被成候、以上。

五月六日　　田井村　喜兵衛

村井村　六左衛門様
野々市村　少左衛門様
田井村　吉郎兵衛様
吉野村　藤右衛門様
淵上村　源五郎様
押野村　宇右衛門様
吉野村　甚七様
福富村　喜左衛門様

閏二月二日。大槻朝元の關係者の刑を定む。

〔政隣記〕

閏二月二日大槻一巻落着左之通被仰付。

園田兵太夫は寶曆元年六月六日病死

前田式部に御預置之處遠島　九里治兵衛組大槻長太夫。
一類に御預置之處遠島　大槻長左衛門二男大槻長次郎・同人三男大槻七之助。但七之助者十五歳に成候者御案内可申上旨に而一類に御預置。
庄田舍人に御預置之處遠島　大槻内藏允三男。但右同斷。
庄田舍人に御預置之處遠島　園田兵太夫せがれ園田兵次郎。但松崎喜兵衛に十五歳迄御預。
先達而牢死、附落着刑付は死刑胴生　大槻長左衛門。
奥村主税に御預之處病死、附同斷流刑　園田兵太夫。
御扶持方御切米被召放　新番大槻三太夫・同大槻清左衛門。
指扣御免　吉田藤藏・中村喜三太夫・大屋兵右衛門。
大槻内藏允女子之分者御貪着無之。

〔中川典克藏文書〕

大槻内藏允一卷甲戌閏二月二日落着被仰渡。

御徒小頭並　大槻長左衛門

内藏允禁錮へ度々通路、其上縮所へ過分之金子幷火器等遣候段、重罪至極之者に付、不及赦之御沙汰追而生胴。

長左衛門次男新番並　大槻長次郎

同人三男　大槻七之助

右兩人儀、父長左衛門依罪可爲殺害者に候得共、長左衛門儀先達而致病死、其上彼是御大赦之御時節に付、死刑一等御宥免、五ヶ山之内へ流刑。

但七之助は幼少に候間、一類へ被預置、及十五歳候はゞ可及斷旨可被申渡候。

長左衛門嫡子御馬廻　大槻長太夫

長太夫儀刎首可被仰付者に候へ共、彼是御大赦之御時節に付死刑一等御宥免、五ヶ山之内へ流刑。

御馬廻組　園田兵太夫

兵太夫儀刎首可被仰付者に候へ共、彼是御大切之時節に付死刑一等御宥免、五ヶ山之内へ流刑。

兵太夫せがれ　園田兵次郎

右兵次郎儀、父兵太夫依罪可爲殺害者に候へ共、彼是御大赦之御時節に付死刑一等御宥免、五ヶ山內へ流刑。

但、幼少に付及十五歳候迄一類へ御預。

内藏允實母　惠　山　院

流刑御宥免に而一類へ永く御預。

兵太夫母寶　山　院

右同斷。

長左衞門妻　も　と

一類へ永く御預可被成所、御大赦に付其段御宥免。

内藏允最前召仕候老女　増　田

同人　妾　た　み

右兩人流刑御宥免に而、二ヶ年禁牢之上出牢。

浪　人　久保田四郎左衞門

可爲永牢者に候へ共、御宥免に而三ヶ年禁牢。

祖山村組合頭　十　左　衞　門

内藏允方へ長左衞門より之書狀之使等仕、不屆至極之者に付生胴。

十左衞門せがれ　太　郞　吉

又　吉

可爲殺害者に候へ共、十左衛門儀致牢死候付、爲赦命御助、三ヶ年禁牢。

小松屋左七

可爲斬罪者に候へ共、爲赦三ヶ年禁牢。

左七せがれ　四郎兵衛

父左七死刑御宥免に付、不及御貪着。

禁牢番人　三郎次郎

傳兵衛

不及赦之御沙汰、追而生胴。

三郎次郎せがれ　牛次郎

市之助

可爲殺害者に候得共、三郎次郎儀致牢死候付、爲赦命御助、三ヶ年禁牢。

岩淵村百姓　小助

不及赦之御沙汰、追而生胴。

祖山村肝煎　又兵衛

同所組合頭　三内

右兩人二ヶ年可爲禁牢者に候へ共、爲赦御宥免、尤役儀被指除。

十村岩淵村　伊右衛門

伊右衛門儀、急度可被仰付者に候へ共、爲赦其段御宥免、十村役は被指除。

最前內藏允家來當時浪人　高桑政右衛門

政右衛門儀、可爲永牢者に候へ共、爲赦三ヶ年禁牢。

政右衛門せがれ　高桑浪江

不被及御貪着候。

內藏允せがれ　大槻尙之助

同　榮次郎

同　猪三郎

右三人儀、父內藏允配所於禁錮致自殺候首尾に付、殺害可被仰付者に候へども、彼是御大赦之御時節に付、死刑御宥免、五ヶ山之內へ流刑。

但、尙之助・榮二郎儀は先達而致病死、猪三郎儀は幼少に候間一類へ被預置、及十五歲候はゞ可及斷旨可被申渡候。

右之通被仰出候條、夫々可被申渡候。

一、内藏允・兵太夫・長左衛門娘共、幷長左衛門妹之儀は、一類等へ永く御預可被成候へ共、彼是御大赦之御時節に付、其段御宥免、不被及御貪着候付、夫々一類等へ直に申渡候。

以上

甲戌閏二月二日　　大膳等十人

□田主殿助殿

大槻長左衛門娘　一人

園田兵太夫娘　一人

同人妻松崎故小左衛門妹

内藏允娘　二人

同人娘庄田舍人妻

同人娘深美故治部嫡子故縫殿　妻

長左衛門妹吉田藤藏　妻

右一類へ永く御預可被成者に候へ共、彼是御大赦之御時節に付、其段御宥免。

長左衛門養方弟　大槻三太夫

大槻清左衛門

右兩人不屆者之弟に付、急度可被仰付者に候へ共、彼是御大赦之御時節に候故、其段は御宥免、御切米御扶持方被召放。

岡田兵太夫小舅　松崎故小左衞門
大槻長左衞門妹聟　吉田藤藏
內藏允等いとこ　中村喜三太夫
中村故端左衞門
雅樂　故半次郎
御賄人　大矢兵左衞門
神田御前樣附足輕小頭　上田源左衞門

右內藏允等一類に付、指扣罷有候へ共、右一卷此度落着被仰出申渡候に付、指扣罷有候に不及事。

閏二月十九日。前田重教金澤を發して江戸に向ふ。

〔政隣記〕

閏二月十八日、二御丸に御出、明日就御發駕爲伺御機嫌罷出候頭分以上、一統御目見被仰付。御作法月次出仕之通、於御大廣間月番披露。御意有之、御取合月番被申上候事。

十九日、朝五半時御供揃に而、四時金谷御殿ゟ御出、二御丸ゟ被爲入、追付御發駕。御式臺迄御先立若年寄西尾兵庫、御白洲・三御丸等ゟ年寄中等以下諸頭、河北御門外ゟ平士諸役懸、町端ゟ町奉行等罷出候儀如御先例。御道中御供長九郎左衞門、御道中奉行御小將頭一木逸角、御步頭御近習青木兵右衞門。御鎗粒子山形先頃より爲御持被遊候得共、御道中者黑白羽熊之御鎗二本、黑羅紗包上之方銀覆輪之只今迄之御持柄を爲御持也。中御鎗者、從御先代之手鞠之鍵御鎗爲御持也。御先三品當番迄に而、非番は不被召連候。本御持筒爲御持不被成候。一宿御跡より御供、御家老役横山藏人。

御泊附左之通

今石動　小杉　魚津　境　糸魚川（御晝休之處、青海川高水、境に晝迄御見合故俄御泊と成。）

能生（御泊之處、前日糸魚川御泊故御晝休成。）　高田　關山　牟禮　榊

小諸　坂本　本庄　鴻巣　蕨

同日御發駕後、二御丸年寄中席ゟ諸頭以上罷出、恐悅之趣申述退去。柳之間如前々、定番御馬廻組より勤番之。町廻御大小將勤之。朔望出仕式日、越後屋敷に而年寄中御用被勤之、御用番之諸頭御用人出席。

三月四日。前田重教江戸に着す。

〔政隣記〕
三月四日、昨夜蕨御泊、今朝六半時御立、御下邸へ御立寄、御中邸へ被爲入、預玄院樣へ始而御對顏。九時御上邸へ御着、御居間書院假御圍に被成、御座右二之御間に旅御裝束に而御出、本多安房守・村井主膳・奥村主水一列御目見。畢而前田兵部・中川八郎右衞門被爲召、次御供之長九郎左衞門・横山藏人被爲召。右何茂御意有之。夫より布御上下に被召替、前田信濃守殿等へ初而御逢。畢而引出橋より御奥へ被爲入、淨珠院樣へ初而御對顏被遊候。

三月十一日。前田重教柳營に上りて德川家重に謁し家督相續を命ぜらる。

〔政隣記〕
三月十一日、昨日之依御奉書初而御登城。中之口より御出、御道筋へ年寄中初頭分以上何茂罷出有之。出雲守樣被爲入御同道。御本丸御式臺へ人持御近習前田兵庫・聞番青木伊右衞門、西御丸へ者人持松平玄蕃・聞番中村市郎左衞門罷出有之、御間之內御供仕。御下乘より御玄關迄は、組頭一人・御使番一人・御表小將一人御供仕。騎馬御供者組頭一人宛。尤外御勤等之節も、御前髮被爲在候內者勤之候筈。且又御供數之外、當分御抱守兩人宛、御駕籠際に御供仕候筈也。殿中於御黑書院、初而御目見被爲蒙上意、重而御座間へ被爲召、御家督御相續之儀、段々御懇に上意御直に被仰渡。御裝束者初而御目見申來候故、御熨斗目・御長袴に而御登

家督相續御禮の爲に登營したることの十五日にあるは三月廿三日の條に見ゆ

城也。前々御家督被仰出候節者、御用有之旨之奉書に而御出故、服紗御小袖・御上下に候處、今日者御目見、指續御家督に付右之御裝束也。御家督被仰渡無之内は、先御大廣間に御溜、御家督被仰渡候而者、御代々之御部屋ゟ稲生下野守殿御演述に而被爲入。御本丸相濟、直に西御丸ゟ御登、御老中秋元但馬守殿に被謁。御下り諏訪部文九郎殿ゟ御寄、御半袴に被召替、御老中・若年寄衆御勤。出雲守様不殘御同道。御歸館御表ゟ御出、御客衆ゟ御逢。其御往來於席に、寶生大夫初御役者、狩野・本阿彌・後藤家・藤井貞三・御出入之町人・町醫師等、御通懸り御目見。其後年寄中、次に御家老役、御居間書院三之間に被爲召、御城之御様子被仰聞、頭共ゟも可申聞旨被仰渡候に付、諸頭以上於年寄中席、左之趣安房守演述。

健次郎様今日御登城被成候様、昨日御老中方御連名御奉書到來、則御登城被成候處、於御黒書院初而御目見被仰上、被蒙上意、重而於御座間、天珠院様御願置被成候通り、御家督被仰出、御懇之被蒙上意、難有御仕合被思召候。此段可申聞旨御意候。

右に付、御表向者爲御祝詞御帳に付、御近習向者如前々、重而年寄中席ゟ出御祝詞申上。

公方様ゟ作り御太刀一腰・白縐紗十卷・白銀三十枚・包のし。御馬裸脊一疋鹿毛、能登國鳳至郡久手川村出、四歳五寸。・御目録。

大納言様ゟ作り御太刀一腰・白銀三十枚・包のし・御馬裸脊一疋瓦毛、同國同郡道下村出、四歳四寸三歩。・御目録。

〔德川實紀〕
三月十一日、臨時の朝會あり。加賀國金澤城主松平加賀守重靖が弟松平健次郎はじめて見えたてまつり、家つぎて原封百二萬五千石をたまはり、加賀・能登・越中の國主となさる。

三月十八日。幕府その能登に於ける直轄地を舊に依りて前田重教に寄託す。

〔政隣記〕
三月十八日、左之通御伺置之處、今日御用番右近將監殿ゟ聞番被召呼、左之通御附札を以御渡。

私領國能登國之內、同氏故加賀守ゟ御預地御座候。唯今迄之通相心得可申候哉、御指圖被成可被下候、以上。
三月十二日　御　名

御附札
如亡父時御預地被仰付、諸事前格之通可被心得候。

三月十九日。林信充、前田重教の諱を選定す。

前田重教初諱利篤後四月十五日德川家重の偏諱を賜りて重基に改む

〔政隣記〕

三月十九日、近日御一字被進候儀、從御用番御內意之趣有之、御字之儀林民部少輔殿に被仰遣置候處、今日左之通被調進之。但兒嶋兵十郎に考被仰付、不指支候者基御字に被成度旨、富永數馬奉に而申遣置。

重基　堺の字に反る。

三國封彊。累代洪基。子孫榮耀。維葉維枝。長久之德。太平之時。福壽盈滿。祝千萬斯。

寶曆甲戌三月穀旦　民部少輔從五位下　林　信　充

行年七十四歲謹書朱印

〔政隣記〕

三月十九日、御元服御一字御拜領之御內習有之。御奏者番靑山因幡守殿・朽木土佐守殿・永井伊賀守殿・金森兵部少輔殿御越。

三月十九日。大聖寺侯前田利道參覲の途金澤に宿す。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月十九日大聖寺備後守樣江戶御出府に付金澤御泊、金屋方御止宿。翌二十日晝四つ半時御立被成候。

三月廿三日。前田重教家督相續を命ぜられ及び之を謝する爲登營したりとの報金澤に達す。

〔袖裏雜記〕

今般御使者古屋傳右衛門被成下、今廿三日二御丸において御意之趣申聞、且又御書相渡候付謹而拜戴仕候。去十日御老中方御連名之御奉書到來、御目見被仰付候間御登城被成候樣申來。十一日御登城被遊候處、於御黑書院初而御目見被爲蒙上意、重而於御座間少將樣御家督無相違被仰付候旨段々御懇之上意、重疊難有御仕合思召候。右之段爲可被仰聞、以傳右衛門被仰下候。奉承知候上、頭分以上何も可申聞候。且右之趣大音喜六郞・本多圖書にも可申聞旨御端書之趣も承知仕候。恐々謹言。

三月廿三日

前田大炊

玉井市正

青山將監

横山大膳

前田兵庫殿

富永數馬殿

小堀牛右衛門殿

右御書等之留無之故、御請之内抄出す。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月二十三日、江戸表より御家督御弘之御使古屋傳右衛門、晝四半時到着、直に登城總出仕、御弘之趣先段同樣、此段何茂ゟ可申聞旨、拙者共迄御使札を以被仰下候事。當十五日御家督之御禮被仰上候樣、前日御老中方御連名之御奉書、幷御家來七人可被召連召連之旨御別紙到來、則御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之上意被爲蒙、御手自御熨斗鮑御頂戴、其上御家來御目見被仰付、忝御仕合被思召候。此段可申聞旨御意候由、安房守等より申來候事。

右兩通之趣、御用番前田大炊被申渡。就御家督御目見被仰付面々、本多安房守・村井主膳・長九郎左衛門・奥村主水・横山藏人・中川式部・前田兵部也。

三月廿八日。昨今兩日金澤城下の市民盆正月を行ふ。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月二十七日・八日町中盆正月、町々にて拍子仕候。前田土州・前田大炊兩家にて能興行有之。

先段とは十一日家督相續を命ぜられたる件をいふ

拍子は囃子

寶曆二年六月朔日の條參照

四月四日。大聖寺侯前田利道三河吉田橋助役の成績可ならずとの風評あるを以て自ら責任を幕府に伺ふ。

〔政隣記〕

參州吉田橋御出來不宜候段承知仕候。依之私指扣之儀奉伺候、以上。

四月四日　松平備後守

右被指出候處、翌五日御指扣に不及旨、御付札に而被仰渡候由。爲御知有之。是左衛門尉様江御內談之上、御好に而右御紙面被指出候由也。但足輕二人輕追放、中間二人江戸拂、依公命被仰付。

四月六日。前田重教家督相續を賀する爲閣老の臨邸を求む。

〔政隣記〕

四月六日、御家督爲御祝儀、御老中御招請之儀被仰込候處、五月廿五日晩何茂可罷越旨、西尾隱岐守より御紙面御渡。

四月十日。前田重教使を禁裏に上り家督相續を謝せしむ。

〔政隣記〕

四月十日は御法事前日なるべし前田重熙の卒去發表は十二日なるが故に十一十二兩日の法會なり

四月十日、人持組三田村内匠に、御家督に付禁裏に之御使先達而被仰付置、今日金澤發出、五月十三日御使勤、十八日京發歸。

四月十二日。昨今兩日前田重熙の一周忌法會を寶圓寺に行ふ。

〔泰雲公御年譜〕

一、四月十日より、謙德公御一周忌御法會に付、寶圓寺裏門御番人御馬廻組岩田八郎右衛門・藤田三太夫・江守平馬・不破市左衛門・三階新五左衛門・津田十郎兵衛、同御佛前御番人御馬廻組畑庄太夫・中村鄉右衛門・杉江又太夫・板垣小太吉・行山米右衛門・槻尾左膳・後藤常右衛門・山本大助、御法事御奉行横山大膳、三の御丸鐵炮稽古幷普請・鳴物等、御法事前日より相濟候迄三日遠慮之事。

四月十四日。町人圓藤屋藤右衛門の僕誤つて武士に打水を掛けたるを以て禁牢を命ぜらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、四月十四日後藤瀨兵衛養子又助、武藏辻邊罷通候所、圓藤や藤右衛門与申町人之家來水を打候。折節又助通り懸り候節、水少々懸り候に付、其段町奉行へ相斷、右藤右衛門遠慮、

家來は禁牢いたし候。

四月十五日。前田重敎登營して元服の儀を行ひ偏諱を受け從四位下左近衞權少將に叙任せらる。

〔政隣記〕

四月十五日、御元服被仰付候間、今日五半時御登城可被成旨、昨日御老中方より御內紙之御奉書到來。但御請御無判。依之今朝五時過御熨斗目・御長袴被爲召、備後守樣御同道に而御登城。於御黑書院御懇之上意、御一字重之御字御拜領、被任四位下少將、御盃・御手自御肴御頂戴、御腰物倫光代金二十枚御拜領、其外御作法御前例之通。加賀守重基公与奉稱。御城相濟、西御丸にも御登。夫より諏訪部文九郎殿に御立寄、御裝束被爲直、御老中方・若年寄衆御勤、八時頃御歸館。但御供人之外に、御表小將河村儀右衞門御下乘迄罷越、御城之御樣子承、早馬に而罷歸、富永數馬に相達。

今日御西御丸に之御献上物、去年六月十二日御先代樣御一字御拜領等之節御同事に付、留略す。

今日御歸以後、於御居間御熨斗鮑御祝、御客衆に御逢。畢而年寄衆等御前に被爲召、今日御城に而之御樣子被仰聞、安房守に者何茂に可申聞旨御意。

〔徳川實紀〕

四月十五日、松平健次郎御前にて首服を加へられ、御盃下され、正四位下の少將に叙任し、御名の一字賜はりて加賀守重敎と稱し、備前の國倫光の御刀を賜ふ。重敎より三原正直の刀・金五枚・時服十・馬一疋を奉る。

四月十九日。前田重敎、紀伊侯德川宗將の女と婚を約す。

紀伊侯の女名は勝姬

〔政隣記〕

三月廿五日、御縁組之儀、紀伊宰相樣御嫡女樣与被仰合候儀、今日紀州樣ゟ前田信濃守殿を以被仰進。御越前御逢之節御のし出、御開之上御料理出、御引菜御盃事も被遊。四月十九日本多安房守を以御約諾之儀被仰進、爲御答從紀州樣も岡田伊賀守被遣。同廿一日御縁組御願書、御用番西尾隱岐守殿ゟ前田信濃守殿を以御指出。

四月廿六日。前田重敎叙任の口宣受領の爲使者を江戸より發せしむ。

〔政隣記〕

四月廿六日、左之通口宣御奉書、今日西尾隱岐守殿に而御渡、京都ゟ持參御大小將不破伊織ゟ、御認に而安房守被相渡、今晝江戸發出。

松平加賀守事、正四位下少將被仰付候。口宣等之趣相調候樣、傳奏衆迄可被申入候、恐々謹言。

寶暦四戌四月十五日

西尾隱岐守忠尙
松平右近將監武元
本多伯耆守正珍
酒井左衞門尉忠寄

酒井讃岐守殿

四月廿六日。江戸に於て寶生大夫の扶持を增給す。

〔泰雲公御年譜〕

一、四月廿六日、寶生大夫代々此方樣より三十人扶持被下候所、當大夫只今まで二十人扶持被下置候に付、兼々奉願置候處、十人扶持御引足被下候。

四月廿七日。前田重教、紀州侯德川宗將の女と婚することを許さる。

〔政隣記〕

四月廿七日、昨日御用之儀有之候間、今日四時御登城可被成旨、御老中方依御奉書、則御登城被遊候處、御緣組御願之通、紀伊宰相樣御嫡女与可被仰合、幷於御白書院御緣頰御老中方

御列座被仰渡。西御丸へも爲御禮御登、御老中方御勤御歸舘。若年寄衆ゟ者御使者被遣。紀州樣御兩方樣ゟ安房守爲御使被遣。幷紀州樣も大納言樣より朝比奈惣左衞門、宰相樣より金森孫左衞門被遣。於御大書院被召出、御手自御熨斗鮑・御盃被下、畢而御直答相濟。安房・御家老中段々御居間書院ゟ被爲召、御縁組御願之通被仰出、難有被思召候。頭共ゟも可申聞由御意に付、年寄中席に而左之通安房守演述。

加賀守樣御縁組之儀、紀伊宰相樣御息女樣与被仰合度旨御願被遊候處、今日御登城可被成旨、昨日御老中方御連名之御奉書到來、則御登城被遊候處、御願之通被仰出、難有御仕合被思召候。此段可申聞旨御意候。

右弘於金澤者、五月七日頭分以上依召、布上下着用登城之處、御大廣間に而例之通を以、御用番九郎左衞門左之通演述。

但江戸表与同趣、前月廿七日与有之以御書被仰下候与申事違迄故、留略す。

右爲御祝詞加判之面々ゟ廻勤。

〔德川實紀〕

四月廿七日、紀伊大納言宗直卿のもとに、松平右近將監武元・本多伯耆守正珍御使して、宰相宗將卿の女子を松平加賀守重敎に定婚の御ゆるしあり。加賀守重敎は營中にしてつたへら

る。

是月は大盡なり

四月晦日。澤崎太右衛門逐電したるを以て親族等をして捜索の爲に出發せしむ。

〔泰雲公御年譜〕

一、四月晦日、今般澤崎太右衛門致逐電候に付、一家之内行山傳右衛門・釆右衛門兩人、先御領國邊可相尋之由而、今朝發足。

一、五月十六日致逐電候澤崎太左衛門儀、所行惡事多く候所、十村のせがれに銀三貫目付養子にいたし、頭手前へは自分妾腹せがれの段披露、跡目に相立申首尾に相極置候由。又は藤内之忰共申候。是一つ。去年改作奉行被仰付候節、被下足輕に相渡し、御算用場御印物を似せ賣出候共申候。出奔之節帶し罷越候刀は、相番之内より借用いたし候刀を差罷越候由。已が居宅は、去年博奕騷動之節取組候與力、先頃不行跡之旨に而知行被召放候山内半太夫と申者に、五ヶ年切約束いたし、銀子五百目に賣置候。右銀子、未家明渡不申以前逐電いたし候に付、差當り上り家に相成、半太夫損之旨。其外ヶ樣不埒數多有之候。太右衛門母幷に妻・養子之せがれ等、公事場被召呼、御吟味之筋有之候。太右衛門儀他國可相尋旨一類共へ被仰渡、京・大阪へ尋に罷越候。今度は澤崎藤太夫・佐竹七左衛門兩人罷越候由。三十日切に相尋、右

日限に待出不申候而は、無構可罷歸段被申渡候由。佐竹七左衞門は定番御馬廻也。澤崎妻子は、公事場ゟ召連候は、同苗澤崎藤太夫・行山采右衞門差添、同日母・妻とも致禁牢、揚り屋ゟ入候旨。

五月廿五日。老中等前田重教の招宴に臨む。

〔政隣記〕

五月廿五日、前記前月六日記之通に付、今日御老中方御招請、西尾隱岐守殿・松平右近將監殿、若御年寄小出信濃殿・大岡出雲守殿、此外御役人衆御前例之通七人、九時前後より追々御出。御能翁・弓八幡・羽衣・祝言。御一門様等爲御取持御出。本多安房守等八人・組頭以上、御老中方御盃被下之。安房守其外より少一人進出頂戴。外者二人宛、戸田與一郎御馬頭也、迄御盃被下。組頭以上幷御給仕人長袴着用。御老中御庭ゟも御出御見物、八つ二歩頃御退出。御跡祝御能鶴龜・祝言。今日御首尾能相濟、何も申談宜と御大慶等之趣可申聞哉之儀安房守被伺、其通与被仰出、夫々被申聞。

右之外御作法都而御前例之通。

五月廿六日。犀川の水暴溢す。

〔泰雲公御年譜〕

一、五月廿六日雷鳴大雨に而、晝九つ時過犀川滿水。右水出候て落水之節、法嶋村在所之者、十一屋邊御參詣坂之下に、餘程大き成流木有之に付、引揚申度其邊へ罷越、此木に取付、ゆたもり動し候所、此流木鱗立候樣に相見え候に付、能々見申候所五色に相見え、夫より脇茅原の小高き岸の上に馬の頭ほどに相見え、龜の耳程有之耳有之候巨蛇、赤き舌を出し、彼者を伺候樣子に相見得候に付、彼者只一目見、肝魂も無之樣に而一足に逃歸り、夫より煩出し、廿日程臥居申候由。出水に奥山より流出候哉与申事に候。

六月十一日。米價下直なるを以て諸士の上納を緩くし藩の貸銀に對する除知を免除す。

〔政隣記〕

六月十一日於金澤、御家中之人々二・三年米下直勝手難澁に付、當秋より十二月迄役出銀・諸上納幷御貸銀高除知御用捨之旨、御用番奥村主水被申渡之。

六月十六日。前田重教叙任の口宣江戸に着す。

御年表に七月十一日に作る

〔政隣記〕

御官位に付禁裡へ御献納物御使、人持組篠嶋典膳へ被仰付、五月十五日金澤發出、廿一日京

着、廿二日御使勤之。今月朔日口宣御渡可被成旨に而、御官物指上、口宣幷御懸緒御免狀受取之。御所司代酒井隱岐守殿より御老中ゟ之御返札、典膳受取、不破伊織ゟ相渡、伊織今十六日江戸歸着、右品々指上之。御布上下被爲召、口宣御頂戴、御老中方ゟ聞番御使に而遣之。典膳者直に金澤ゟ今月廿二日歸。

今月は六月

六月廿二日。前田重教家督相續祝賀の爲一門等を招待す。

〔政隣記〕

六月廿二日、御家督爲御祝儀、安藝守樣等御一門樣方初、松平土佐守殿等御大名方、幷御出入御旗本衆等百七人、三十人餘御斷也。被仰遣、御能五番、翁・白髭・田村・熊野・張良・祝言。白洲之内見物も被仰付。

御年表に七月廿七日に作るもの非なるべし

六月廿五日。卯辰觀音院の住僧出奔す。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月二十五日卯辰觀音院出奔。先達而御尋之趣有之に付、遠慮いたし罷在候處、今日寺社所にて、被相尋旨有之。罷歸候以後申分難立有之候哉、一派より立退可然之由、夜に入馳參候由。此發は横山三郎兵衞子喜太夫儀、不行跡之趣有之に付、必竟名跡等に相願候儀難成可有之哉之旨、三郎兵衞當所に而内意之趣、九里治兵衞より名書有之紙面を、觀音院右三郎

兵衛が妾に被相賴謀書いたし、喜太夫世に無き者に仕候巧之由。ヶ樣之儀、三郎兵衞妾之兄弟は、故平田外記妾にて、子供も致出生、外記子惣次郎方に罷有、此者兼々觀音院と密通いたし候儀。ヶ樣之趣に付、右三郎兵衞妾も觀音院に通候而、此謀書爲書候哉。此儀去年九月之儀に候所、其節御上邊之儀治兵衞より沙汰に不及候而、江戶發足以前稻坂三郎兵衞被申置候に付、其後被及言上候哉露顯いたし、右之趣に候由。右三郎兵衞妾、其後三郞兵衞方暇差遣候而、只今高畠善太夫方に罷有候。三郎兵衞子喜太夫は、平田故外記娘緣組契約相極有之に付、何卒右之趣變改も仕度存念に而、ヶ樣之工も候哉と、三郎兵衞方より只今惣次郎手前疑敷存候趣有之致紛失候品も有之由。如斯之仕形に付、觀音院へ公邊より御寄進御道具等、よし。ヶ樣之儀にて三郎兵衞、頭幷惣次郎頭へ內證申入、表立御吟味可有之趣に付、出奔いたし候旨。

七月廿六日。御馬廻組三輪甚五右衞門忰伊織その不行跡露見したるを以て出奔す。

〔泰雲公御年譜〕

一、七月二十六日、御馬廻三輪甚五右衞門せがれ伊織致出奔候。伊織女色に耽、博奕を好み、跡々より段々不行跡之趣致露顯、七・八年以前より、御家中不行跡之子供之隨一に候所、勘五

右衞門儀家督相願申間敷心底、頭へも内存申入置候由。

八月四日。老臣等財政の窮乏を救濟せんが爲銀札を發行すべき議を上つる。

〔袖裏雜記〕

御要脚御指つかへ大概爲相圖候處、年中御物成大概七千三百七十貫目計に候處、御入用高は御領國中幷京・大坂等一ヶ年分大概一萬四千百五十三貫目計、右引合御不足高一ヶ年分六千七百八十三貫目計に御座候。依之遂僉議候處、御代々御沙汰無之儀には候へ共、御領國札遣之儀被仰付候者、一統通用之爲宜は御座候哉与申儀に御座候。前々御三家方を初有之儀、當時越前抔にも札遣に而一段通用も宜由致沙汰候。右之通に候へば、公邊にも障り申儀者無之与相見え申候。銀札遣之儀は勝手次第之段、享保年中被仰渡も有之儀之由申ならし候。聞番手前には左樣之留も有之候哉、潜に聞番御僉議も候而、差支不申趣に候者、右之通可被仰付候哉。左候へば、銀札を以御家中之人々に續銀御貸渡、上納銀幷借銀・買懸銀爲相濟、御貸銀所除知・除米も相返、改而百石二十石充除知爲仕、右續銀上濟爲仕候圖に御座候。大概廿年計に而は相濟候圖に御座候。右札遣之儀は、御領國に而終に無之儀故、若指支申儀も可有之哉否之儀は、未前之儀故難計御座候。諸頭之内にも可然と申ものも有之、不宜儀と申者も有之

躰に御座候。尤ヶ樣之儀者不被仰付程宜敷儀は無御座候へども、段々手詰に相成候上各別之儀と存候。此外御上御勝手幷御家中人々勝手方續に相成候手段無御座候。彌被仰付儀に候者、御役人は御算用場奉行・町奉行兼帶被仰付可然と遂僉議申候。猶更各にも御僉議候而可有御伺候、以上。

八月四日　　九郎左衞門初十八人

八月四日。江州竹生島明神の神輿開帳の爲金澤に着す。

〔泰雲公御年譜〕

一、八月四日、江州竹生嶋明神、寺町眞長寺に而三七日開帳に付、今日神輿御着座。竹生嶋は江州淺井家之内に而、日本五奇異之其一、至極之靈神に而候間、本社に而は有之間敷候。國花萬葉記には、寺領三百石本業寺と有之候。定而神躰之寫に而も可有之候。今度は華王院と有之候。山號は岩金山と云由。人皇四十五代聖武天皇勅願所也。其九ヶ寺妙覺院・吉祥院・梅本坊・常行院・實相院・金竹坊・一乘院・月定院・花王院也。此度開帳之辨天は、高德公より御預被遊候由、年號由緒は不相知候由。其後芳春院樣より御寄附米三斗一升五合有之候由。明曆元己未年則於眞長寺開帳有之、今年迄百年也。於御當國開帳之節、七手之面々より幕借用いたし候舊格有之旨に付、本多家初華王院より使僧を以借用之儀申來、房州は在江戶に候得共

指遣。其外奥村・村井等も同斷之由。

八月四日。金澤の町人先に過言を以て武士に傷つけられたること發覺し追込等に處せらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、八月四日、當七月十六日河南町幷片町之町人四・五人申合、法船寺馬場之賃馬を借り、二・三人馬上にて宇津木濱迄罷越、於砂場責馬可致圖り罷越候於途中、宮腰渡舟場にて、佃庄太夫次男、御改易被仰付候浪人箕浦左膳に行逢、荷物之者に何人に候哉と相尋候處、町人之旨に付、對侍乘打緩怠至極と叱候へば、何廉過言に付拔打申所、何も迯散、其分に而罷歸候由。右被斬候町人は、片町春日彌兵衛せがれ武介と申者。然共元來町人不相應、切られ損にいたし押隱罷在候所、右疵殊之外痛、則近所之外料有澤良朝を賴、鎌にてあやまち仕段申立賴候得共、良朝是は刀疵無紛、當時御用も被仰付候儀、後日相知候而は如何敷、早速可被相斷、其上に而可致療治申聞に付、無是非奉行中ゟ斷、僉議之上、箕浦左膳は重而縮所へ入候由。町人共は親有之分は親有之分は親預、自分は追込に申渡。其同道人片町八幡屋九兵衛・同所茶屋市右衛門、右兩人は追込、春田武介・釜屋清吉・高島屋甚六・吉野屋平二郎、右四人は親預也。

八月十二日。町人越前屋豐右衞門、旅行中武士と詐稱したるを以て追込に處せらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、八月十二日、森下町越前屋豐右衞門儀、先頃妻女召連京都江罷越有之所、隱居親相滯申に付罷歸候樣、留守より申遣罷歸候節、道中伴八矢家來何某、就急用金澤へ早打に而罷歸段、配符を以松任驛迄罷越、人足新町邊迄かき來候所、町端へ迎の籠舁其外手代罷越有之。右松任の人足、自是可罷歸申請候所、早打之御方は御屋敷迄かき付申格之旨、且早打と申先觸有之候へば、人足共晝夜問屋前に相詰候。ケ樣之趣に而、御宅迄御供不仕而は問屋前不相濟旨、彼是問答之內人足共、何与申御侍に候哉日用之者共に承合候得ば、侍衆に而無之、越前屋豐右衞門と申町人之由に付、夫より問屋江罷歸委細相達、問屋より野々市之十村庄右衞門江及斷、右人足幷町端迄迎に出候日傭之者呼寄相糺、御郡奉行岡田逸平太方へ相斷、今日町奉行幷御算用場江も及斷候。同十三日豐右衞門追込申渡。

八月廿二日。前田重教家督相續祝賀の爲一門の婦人を招待す。

〔政隣記〕

八月廿二日爲御家督御祝儀、預玄院樣・淨珠院樣・實成院樣・神田御前樣・同御新造樣・池端奥方樣・盛德院樣・備後守樣奥方樣御招請、御能被仰付。

但、紀伊大納言樣・水戸樣御城附一人宛、兩御隣樣御家老・御留守居、御一門樣方御留守居、後藤・本阿彌・古筆・伊勢等、御出入之御目見町人共、町醫師・左衞門尉樣御斷申上御用人被爲召、御能見物被仰付、御料理被下之。

九月二日。石川郡粟ケ崎村藤右衞門に扶持を與ふるの議を決す。

〔袖裏雜記〕

粟ケ崎村藤右衞門、御かね御用格別拔群に相勤候付、金澤において御屋敷拜領、御扶持被下候樣御郡奉行願に、屋敷被下儀は例も及承不申候、御扶持之儀者願之通被仰付候樣仕度旨、御算用場奉行添紙面に付、段々僉議之上、例者無之候得共、五人扶持可被下儀と僉議、九月二日大炊紙面。

右僉議之通被仰付。

九月廿六日。紀伊侯德川宗直その子宗將と共に本鄉邸に臨む。

〔泰雲公御年譜〕

一、九月廿六日於江戸、紀伊大納言樣宗直卿御父子樣宗將卿御屋敷へ被爲入候。押立御招請与申に

而は無之、御立寄被申趣之由。御能御番附。

翁 千歳 松井榮次郎 三番叟 名女川庄次郎　鷺 傳右衛門　高砂 寶生大夫　間 近藤友右衛門　東北 權太夫

間 鈴木二郎右衛門　祝言猩々 竹田溪珍　萩大名 大藏八右衛門

御客御退出以後、御乞熊坂寶生大夫。囃子方素袍着用。

十月五日に法會を行ひたるは發喪の日なるによる

十月五日。昨今兩日天德院に於て前田重靖一周忌の法會を執行す。

〔泰雲公御年譜〕

一、十月四日・五日天珠院樣御一周忌於天德院御執行、四日寅刻轉讀般若、卯刻献粥諷經・三刹諷經、辰刻羅漢講式、午刻拈香佛事献供諷經。五日寅刻轉讀般若、卯刻献粥諷經、辰刻薦技上堂、午刻甘露施食献供諷經・立塔諷經・救濟大赦大施行會。御佛前番岡田伊織・橋爪權丞・多田左守・後藤常右衛門・鷹栖治部・津田淺右衛門・加藤次郎左衛門・和田知左衛門、同裏門番北川治部・駒井治部左衛門・齋藤吉兵衛・阿部半三郎・松尾主水・淺井主税。右に付大正持より御代香野口兵部。御法事に付御施行四日・五日、御家中拜禮等如例。

十月廿六日。江戸道中蕨及び板橋驛より徴したる始末書を示す。

〔泰雲公御年譜〕

一、江戸道中蕨驛・板橋驛近年風俗不宜、御家中往來之節不埒之趣共有之に付、御聞番を以御

屆有之に付、差出之紙面之寫。

差上申一札之事

拙者共宿場、松平加賀守樣幷御家中御役人樣、其外御献上御荷物等御往來之節、御定賃銀之外、増錢・酒手など、人足・馬方共ねだり取、其上問屋場役人等之内にも、增錢等之儀に付不埓之御挨拶申上候儀有之段被及御聞、依之拙者共被召呼被仰渡候は、御定賃錢取之候上、過分之增賃錢等可取筋無之、尤拙者共宿場之儀は、御荷物貫目相改候場所に御座候得ば、外宿場よりは格別に御定法之趣急度相守、拙者共勿論、馬方・人足等に至迄、不埓無之樣に申付候へども、無其儀、問屋役人等迄、加賀守樣御用に限度々不法之儀有之段、甚不埒至極に思召候之段、委細被仰渡奉畏入候。何分末々拙者共申付も行屆不申、右躰之不埓、其上問屋場役人之內不法之内御挨拶等申上候儀有之候而は、一言可申上樣無御座、奉誤入候へ者、此度之儀者右被及御聞候段、風聞之樣に被仰渡候儀、格別之御慈悲等難有奉存候。然上は此以後、問屋場役人共は勿論、末々人足・馬方等に至迄、右躰之不埒無之樣急度被仰渡奉畏候。若已來、拙者は勿論、人足・馬方等に至迄、不埒之儀被及御聞候者、御吟味之上何分にも科に可被仰付候。依之御請印形指上申所、仍如件。

寶暦四年戌九月朔日　下板橋宿問屋　藤兵衞　年寄　茂右衞門

問や　九右衞門　　問や　七兵衞
問や休番　元右衞門　　年寄　三郎右衞門
年寄　多吉　　年寄　市右衞門
年寄　八郎右衞門　　年寄　宇兵衞

小野左太夫樣　御役所

差上申御請證文之事

一、此度私共被召出御尋被遊候は、松平加賀守樣御家中樣方御旅行之節、御荷物輕重不限、途中に而馬方共增錢ねだりヶ間敷儀申上候段、當御役所ゟ御屆御座候由、如何樣之譯に而左樣之儀仕候哉、御吟味に御座候。拙者共儀、左樣之儀一向不奉存候。殊に馬士共ゟ常々申渡候は、御旅人樣方へ對し途中にて不埒等不仕樣に申付候得共、途中に而右躰之儀心得違申上候馬士共御座候哉、此儀は人馬役之者共へ急度可申渡候。重而增錢等ねだりヶ間敷儀無之樣に可仕旨、拙者共へ一札取置可申候。此上左樣之儀有之候はゞ、私共何分御咎にも可被仰付候。爲之御請證文指上申所如件。

寶曆四年戌九月

中仙通蕨問屋　嘉兵衞　　中仙通蕨問屋　五郎兵衞
年寄　源兵衞　　年寄　兵右衞門

年寄 茂右衛門
年寄 半藏

大野佐左衛門様 御役所

板橋驛・蕨驛近年風俗不宜、荷物貫目等之所にも無貪着色々申立、御定之外過分之賃錢等相貪、御荷物幷御家中之人々旅行之障にも相成候に付、右驛御代官衆等ゟ内々無急度、右之趣聞番心得に而、御屆申置候樣申渡、則及御屆候所、其段右驛々ゟ御申渡之由に而、問屋共等請狀寫別紙兩通、御代官衆役人より内々に而到來に付、爲承知相達置候條、如斯御屆之上、是以後御家中之人々往來之節、荷物貫目御定より重く候而は其詮無之事に候間、右之族無之候樣急度相心得可申事。

右之趣一統相觸候樣、頭・支配ゟ可被申談候、已上。

十月二十六日

前田大炊
西尾隼人

御横目中

十一月八日。前田重教日光東照宮の代拜を松平玄蕃に命ず。

〔政隣記〕

十一月八日、日光御代拜御使若年寄松平玄蕃ゟ被仰付、右相仕舞直に御國ゟ、前月に而御服

終に付、御家督幷御官位兼之御暇被下。依而大炊誘引、御居間書院ゟ被爲召御懇之御意、紗綾三卷・御羽織一御紋付於御前被下之。退於御次黄金三枚西尾隼人演述に而被下之、隼人誘引に而重而御前ゟ出、御禮隼人申上候處、近く被爲召、御手自紋絹二反被下之、隼人御取合申上退。同十一日江戶發御代參仕舞、同廿八日金澤ゟ歸着。

十一月十六日。領內に於ける米穀減收の額を幕府に屆出づ。

〔政隣記〕

十一月十六日、御領分三ヶ國之內、當夏旱損、其上虫付等に而御損之今日御屆高四十萬二千百八十四石也。

十一月廿五日。加賀藩の老臣等大聖寺藩の政情に關して會議す。

〔泰雲公御年譜〕

一、十一月二十五日、越後屋敷不時寄合、此間中每度有之。右は大正持御家中之儀に付而之儀也。御家老野口兵部隱居、千石之內爲家督八百五十石被下、百五十石減知に而、子息縫殿被下新知二百石御取上。來亥年より御家中一統半知に被仰付候旨。御家老山崎權丞隱居家督千石子息伊織ゟ被下、伊織へ被下置候新知三百石御取上被成候由。稻垣與右衞門遠慮御免隱居、御知行三百石之內七十石減知、子織人ゟ家督被下、織人被下置候新知御取上被成候。其

外にも減知、御徒御暇被下候者も有之。町中ゟ御用金二千兩可差上旨被仰渡、御請合不申町人追込被仰付、又禁牢等も有之、物騷に候旨。

十一月廿九日。儉約の爲藩の諸經費を半減すべき命を傳ふ。

〔高畠左門留帳〕

御勝手御難澁に付、猶更嚴敷御儉約之儀被仰付候。則別紙覺書指越之候條、可被得其意候、以上。

十一月廿九日　　長　九郎左衛門

高畠左門殿

村田吉左衛門殿

御勝手方連々御難澁に付、御儉約をも被仰付候得共年々御不足之處、近年打續御吉凶に付而莫大之不時御物入に付、御借銀夥敷相增、其上大坂表御調達も不調之趣、最早何を以御續可被成手段無之候。御儉約之儀者各尤油斷無之に候得共、此上猶更嚴敷御儉約可被仰付外無之候。然者諸場・諸手合萬端御入用方、一統半減之趣に相心得、夫々可被僉議候。半減と有之候而者指支申儀も可有之候得共、御役人中心を合熟談有之候者、其筋も相立可申候。左候得者御格に障り申儀も可有之候得共、當分は御格をも不被改候而者難成御時節に候條、何事に

不依、少分之儀に而も御益之品心付之趣有之候者、先例古格に無泥可被申聞候。畢竟御役人中熟談無之候而者難成儀に候條、被得其意、半減之趣を以僉議可有之候事。

十　一　月

〔泰雲公御年譜〕

一、十二月廿六日、頭中越後屋敷御呼立、向後御儉約に付、諸場手合御入用、只今迄之半分之圖を以御用方取計候樣に与被仰出。

十二月四日。前田重教、德川家治の婚禮に關して祝儀を受く。

〔泰雲公御年譜〕

一、十二月朔日大納言家治公御婚禮に付、同四日上使内藤大和守殿を以御拜領物有之。御簾中樣五十宮樣より御使加藤甚兵衞殿を以同斷。但一種一荷宛也、

十二月十一日。德川家重、前田重教に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月十一日、御鷹之鶴、上使御使番三好勝之助殿を以御拜領、御作法如前々。但當夏雲雀御拜領に付、此度御家督後初而に而無之に付、御服紗小袖・布御上下被爲召、并何も服紗小袖・布上下着用。但翌年二月廿二日御披、御一門樣方等御招請如跡々御作法。

十二月十八日。前田重教その家臣二人に叙爵を許さるべき命を受く。

〔政隣記〕

十二月十八日、昨日御老中方御連名御奉書を以、今日御用之儀候間、四時可被成御登城、若御病氣候者御名代可被差出之旨申來候に付、則今朝御登城之處、於御白書院御願之通御家來兩人諸大夫被仰付候旨、御老中方御列座御用番松平右近將監殿御演述。依之爲御禮西御丸にも御登、御老中方・若御年寄衆御廻勤。御歸館之上御居間書院に大炊・隼人被爲召、兼而御願之通御家來諸大夫兩人被仰付、忝御仕合に候。頭共にも右之段可申聞旨御意。兩人退、重而大炊被爲召、故對馬守代諸大夫被仰付、駿河守と御改之旨被仰渡。且村井主膳叙爵被仰付、豐後守と御改可被遊候。來二月中爲御禮可爲致出府旨、御用番右近將監殿に右兩人交名御屆被仰遣、金澤に御使番志村五郎左衞門を以被仰遣、廿二日江戸發。但御家督後初而諸大夫就被仰付候御先例之通り。

十二月十九日。幕府、前田重教の若年なるを以て巡見上使を派すべき命を傳ふ。

〔泰雲公御年譜〕

當主は前田重教

一、十二月十九日、松平頼母殿二千五百石御使番・大河内善兵衛千五百石御書院番、御當主御若年に被爲在候に、爲御目附御國許ゟ被遣候旨、松平右近將監殿ゟ聞番被召呼被仰渡。

十二月廿四日。宗旨替及び寺替の手續に關して諭す。

〔高畠左門留帳〕

宗旨寺替之儀に付、別紙之趣被得其意、自分心得違無之樣、組・支配之人々ゟ可被申渡候。且亦組等之内裁許有之人々者、其支配ゟ茂相達候樣可被申渡候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月廿四日　本多安房守

高畠左門殿

村田吉左衛門殿

改宗寺替之儀に付、正徳元年・享保八年・寶暦元年別紙之通相觸置候處、寺檀心得違も有之躰に而彼是及異論、近き頃者葬式も指支申躰有之候。畢竟寺檀共に右觸之趣熟得無之故に候。前々より夫婦兩派に而罷在候者、寺檀納得之證據無之分者、其謂夫々寺ゟ相達納得之上、改宗寺替之儀前格之通相願可申渡。是以後も女子致婚儀候而者、夫同宗同寺に罷成儀勿論之儀に候。然共婚儀以後も親之家宗旨之儘に而可罷有子細有之、夫任其意候者之儀者、旦那寺ゟ

茂相違、其段相願可申候。且又婚儀以後夫同宗同寺に罷成候而も、以後に至、親・しうと等之宗旨に致申儀、由緒有之斷之上者、承届候儀も前々之通に候得共、寺檀共心得違も有之躰に付、此度改而申渡候事。

甲戌十二月

十二月廿五日、前田重教袖留の儀を行ふ。

〔政隣記〕

十二月廿五日、去廿一日左之通御紙面御用番右近將監殿へ、聞番を以御差出之處、同日左之通御付札を以被仰渡、則請取に出候聞番、廿五日袖留可申段申達置。但左衛門尉樣より御内意之趣有之。

私儀袖留申度御座候に付相伺申候、以上。

十二月廿一日　　御　名

御付札　可爲伺之通候。

右に付今廿五日朝御袖被爲留、御櫛役才木直右衛門勤之。御熨斗鮑御祝、御奥へ被爲入、白銀二枚被下之。實成院樣二種十疋御持參被進。淨珠院樣御肴一折持參被進。御對顏。夫より四時過御出、御用番右近將監殿初、御老中秋元但馬守殿御勤。左衛門尉樣へも彼是御懇意之爲御禮被爲入、御通、御

奥ゟも被爲入。夫より預玄院様ゟも被爲入、御肴一折御持參被進之。九半時過御歸舘、御祝御膳被召上。

一、備後守様幷至而御心易御出入衆御出、御居間書院に而御饗。備後守様与之御盃事被遊、其節寶生大夫に小謠被仰付。夫より御奥ゟ被爲入、御盃事被遊候。

一、駿河守・隼人被爲召、御袖被留候旨御意有之、御祝儀被申上。

一、年寄中初頭分、於御料理之間御吸物・御酒被下之、御近習頭を以御意有之。御次廻り者御步並迄御吸物・御酒被下。實成院様より被進候赤飯・御肴御吸物、是又御次廻一統被下之。

十二月廿六日。定番御馬廻河合左膳、實父喜多岡平右衛門の若黨を手討とす。

〔泰雲公御年譜〕

一、十二月廿六日、長町喜多岡平右衛門三男定番御馬廻飯田勝左衛門組河合右膳儀、久敷病氣御番引仕罷有、行步相願置、實父平右衛門方へ罷越候所、平右衛門召仕候若黨歸山忠次与申者、今年十八歲、此者へ右膳使申渡候所及過言、しかり申所彌以慮外之趣に付、於臺所眉間を一刀切申所、路次口へ逃出申所切留候由。以上手疵七ヶ所也。此者四年以前より平右衛門方に召仕候所、請人取置不申に付、檢使前埒明兼候由。

一 十二月。江戸に於ける藩費の節減に關し諭示す。

〔政隣記〕

御勝手御難澁之儀、兼而各承知之通累年御指支之處、十ヶ年以來打續御吉凶に付て、莫大之御入用有之、年限之内に者三四度御領國過分之御損毛等有之。其外折重り不時御物入共夥敷、去年も御損毛多御難澁至極に而、可被成手段も無之、最早御勝手御つぶれの場に至候に付、於金澤諸場・諸手合御入用當分半減之趣に申渡有之等に付、此表も右に准じ申趣に候條、御入用相減候樣に被遂詮議、相調理可被申聞候。且又左之趣も可有承知候。

一、年頭御規式を初當分御省略之事。

但、鶴之庖丁之儀は、重き御祝儀事に付被仰付候。年寄中等は御料理下頂戴被仰付候へ共、不及其儀、御吸物・御酒迄被下候事。

一、家來は被下物、都而半減之趣を以被下候事。

一、於江戸家來召仕候者、一統御賄相止候事。

但、勤柄により御賄不被下而難成人々之儀は、其手先にて遂詮議、御儉約奉行等は可相達候事。

一、御進物之品を初、惣而御國より到來、江戸より指遣候物之儀、割場等幷御臺所附小者交

代之節傳附可仕候事。
但、右之趣は其手先々より、割場奉行等ゟ前廉可遂示談候事。
一、割場附小者諸手合爲御用請取候節、御手人拂切候得者、日用相渡御費之筋に候間、御手人相切候段割場より申達候節、不被急御用に候はゞ相延、翌日にても御人請取可申事。
一、御用多時分、諸手合定懸足輕・小者引揚之儀、割場より申達候はゞ隨分遂詮議、相延候ても可成御用者相止、指出可申事。
右之通當分被仰付候條、被得其意、組・支配之人々ゟも可被申談候事。

甲戌十二月

寶曆五年

正月朔日。前田重教登營して新正を賀す。

〔政隣記〕
元日、御三献御祝、御直垂に而六半時御出、始而御登城。於御白書院御太刀御持參御禮被仰上、御着座、御相伴御引渡等出、御盃御頂戴、御時服御熨斗目御拜領。西御丸ゟも御登城、大御門より御歸殿。御敷臺鏡板に前田駿河守・西尾隼人罷出、駿河守へ御禮御首尾能被仰上

候旨御意。御式臺に諸頭幷御大小將列座、御近習頭等は敷附へ出有之御供仕、御玄關より隼人御先立。御勝手座敷三之御間後藤・本阿彌・狩野幷御出入町人、長圍爐裏之間屛風圍之內御手役者、同續屛風圍に而今春三郎右衞門御通掛り御禮申上。御直垂之儘御奥へ被爲入、淨珠院樣・實成院樣へ御對顏、干鯛一箱宛御持參。

一、御裝束御直し、御居間書院へ御出、駿河守・隼人獨禮。長袴着用畢而同三之間御着座、鶴之御規式御覽、長谷川庄左衞門勤之。御居間へ被爲入、重而同三之間へ御出、人持頭分一同御禮。組頭已上は御太刀前に置之。御襖隼人幷富永數馬開閉之。同於御勝手御奥小將・奥新番一同御禮被爲請、被爲入御膳被召上。御表へ御出、御客衆へ御對顏、被爲入候節賓生新丞御通懸御禮申上。御居間書院三之間御着座、最前相殘候頭分幷平士與力等迄一同御禮被爲請。同御勝手に而最前殘候御奥小將等御禮。被爲入御奥に而御雜煮御祝、御盃事被遊。追付備後守樣御出、於御居間書院御對顏。御太刀御持參、披露數馬、御馬代御表小將持出、各長袴に而勤之。畢而御吸物出、御盃事被遊。

一、今日御中邸へ被爲入筈之所、雪に而餘寒强、少々御疝痛に付御延引之旨、御近習頭御使を以預玄院樣へ被仰進。

正月二日。前田重敎上野東照宮に參拜す。

〔政隣記〕

正月三日、御直垂に而上野御宮・御佛殿、御本坊常照院ゟ被爲寄御裝束被召替、廣德寺御參詣。四日增上寺御直垂に而御佛殿御拜、方丈御勤。池德院ゟ被爲寄御裝束被召替、御老中方御勤、左衞門尉樣に而者御廣式ゟも被爲入。六日御三家樣、但紀州樣に而者御兩所共御通御對顏被遊御熨斗御祝。此以後御一門樣等段々御勤。

正月六日。前田重敎乘初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月六日、年頭初而馬場へ御出、御熨斗目に而被爲召。御馬乘にも被仰付。

正月七日。前田重敎射初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月七日、御弓御稽古初、御熨斗目被爲召。御射手小西平左衞門罷出。

正月十二日。前田重敎初めて能樂の太鼓を學ぶ。

〔政隣記〕

正月十二日、藤本太左衞門被爲召、今日より御太鼓御稽古。

正月十三日。前田重教劍術の稽古初を行ふ。

〔政隣記〕

正月十三日、御劍術御稽古可被遊旨此間被仰出、今日御居間書院江八時前御熨斗目に而御出、與力山崎兵左衛門御指南申上、御表小將中村藤右衛門御打太刀勤之。御表小將赤井傳右衛門・小堀左膳も山崎流仕候に付、打太刀被仰付。兵左衛門初代々一篇宛仕、御前に者三返つかひに而相濟、御居間江爲入、御熨斗・御吸物・御酒御祝。右御のし鮑藤右衛門等江も頂戴被仰付。右御稽古之節前田兵庫・富永數馬・小堀牛右衛門並居、御近習頭伺之。各熨斗目着用。

一、御稽古初に付山崎兵左衛門江、御目錄を以白銀一枚被下之。

正月十三日。老臣前田駿河守・村井豐後守叙爵せられたるを以て口宣受領の使者を江戸より發せしむ。

〔政隣記〕

松平加賀守陪臣前田駿河守・村井豐後守事、從五位下諸大夫被仰付候。口宣等之儀相調候樣、傳奏衆迄可被申入候、恐々謹言。

寶暦四戌十二月十八日　　西尾隱岐守

松平右近將監
本多伯耆守
酒井左衞門尉
堀田相模守

酒井讃岐守殿

右御奉書正月十一日、舊臘之御用番伯耆守殿へ聞番御招御渡。京都へ持參御使御大小將津田三郎兵衞、同十三日江戸發足、兩人之姓名書も左之通持參之處、二月六日口宣渡り、同十三日京都發出、十八日江戸へ歸府、讃岐守殿より之御返札聞番を以伯耆守殿に被遣。駿河守口宣者即日御渡、豐後守口宣者御前に被指置、出府之上被渡下筈也。

駿河守菅原孝昌
豐後守平長堅

正月十八日。前田重教初めて能樂の仕舞を習ふ。

〔政隣記〕

正月十八日、寶生彌三郎被爲召、松井伊左衞門・松林千左衞門召連罷出、今日より御仕舞御稽古被遊候。

正月十九日。前田重教前髪を除く禮を行ふ。

〔政隣記〕

正月十九日、今朝御前髪被爲執、（御近習新番才木直右衛門勤之候に付、白銀二枚被下之。）御熨斗目被爲召、御奥に被爲入、淨珠院様・實成院様（生御肴被進御持參、一種五百疋。）御對顔、御熨斗御祝。追付御出、服紗御小袖・御上下に被召替、御居間書院に而駿河守・隼人被爲召、御前髪御執候旨御意。近く被爲召御内用御意有之。夫より四時過御出、左衛門尉様へ被爲入御通、御廣式にも被爲入。本多伯耆守殿・秋元但馬守殿に御勤。御歸殿、備後守様初御客衆へ御逢。御料理出、備後守様へ御引菓御盃事被遊、實生大夫其節小謡勤之。重而御奥に被爲入、御雜煮御祝御盃事被遊。相濟、御中邸へ被爲入、御肴一種御持參。

一、駿河守初頭分以上奥表共、御料理之間に並居、御吸物・御酒被下之。御酒之内御近習頭御使勤之。御近邊者平士以上に御吸物等被下之。諸事御袖留之節御同事。一統熨斗目着用。

一、御前髪就被爲執候、御城御先詰幷騎馬御供相止、御抱守歩御供も御用捨被仰出。

二月朔日。前田重教初めて囃子を演ず。

〔政隣記〕

二月朔日、預玄院様・盛徳院様爲御年賀御出。於御敷舞臺御囃子被仰付、御前にも初而弓八幡

巡見上使の金澤着は四月廿一日に在り

御太鼓、羽衣・芦苅御仕舞被遊。

二月四日。幕府の巡見上使三月中を以て來るべき報金澤に達す。

〔御年譜〕

一、二月四日江戸より早飛脚着、左之通御國に之上使三月中御越之旨申來。但下道中通御使番二千五百石松平賴母殿、御書院番千石大河內善兵衞殿。右途中指添、物頭村杢右衞門、聞番脇田淸左衞門、會所奉行永原忠兵衞、御醫者丸山了悅・下田玄壽。

二月五日。幕府の巡見上使の爲に宿舍の準備を命ず。

〔泰雲公御年譜〕

一、二月五日、今般御目附衆御下向之節、津田玄蕃・寺西彈正居宅早速明、下屋敷に引移候樣被仰渡。但當廿日迄に引越候樣との趣に候。且又津田は御宮請取火消に候所、代り今枝織人被仰付、寺西定火消代り山崎庄兵衞へ被仰付。

一、今般御目附御着之節御用懸り之人々、松原善右衞門・後藤瀨兵衞・九里治兵衞・三輪藤兵衞・高山善左衞門被仰渡。

二月十九日。巡見上使を迎ふる爲本多安房守獅子土藏に貯ふる銀子の員數を檢す。

〔泰雲公御年譜〕

一、二月十九日安房守殿、後藤瀨兵衞・九里治兵衞致同道、東之御丸之御銀土藏へ被出、獅子之御土藏之御銀員數被相改候由。是は御國目附衆御越に付、御城附銀子員數被相尋候に付、其爲に被相改候由。先日も御家中之侍鐵炮所持之員數、組々より書出可申旨觸出有之、頭々に相渡候所、其節御馬廻頭御用番勝尾半左衞門存寄被申達、先觸出相止候旨。

一、今般御國目附御出に付、松平勝五郎樣御國目附御越之振合御聞合有之、留帳到來に付、其趣を以大概相極候旨に而、表立頭分には御書出相渡候よし。松雲公御代萬治元年御年十六に而微妙公御逝去被遊候。同二年御國目附御兩人御越被成候は、今年寶暦五年まで九十七年以前之儀に付、其節は諸場共物每荒目に而、委細之留帳も無之。御家中にもいさい相記置候記錄、御尋も無之に付不差出候。

三月二日。家中の下行を御召米とし及び町人より買上米を行ふことを命ず。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月三日、當年一統致難澁、御下行御召米被仰渡、其外も町中より御買上米被仰渡、五十日を限可被召上旨昨日申渡有之。延拂之直段は、石に付八匁四・五分懸候由。但百石に付五百目充銀子相渡、殘銀は當六月相渡候筈。且又先頃より町方幷御郡方へ、御借銀都合千貫目之圖被仰渡。人々も及難澁聢与御請不申候に付、今度町年寄平野屋半介に頭取被仰渡、大概之町人手前より百目・五十目充割符を以、當四月二十日限り差上候樣被仰渡有之。右之趣に付質屋中申談、一向質取不申。畢竟御召米銀子相渡候樣子等、彌以札遣に可相成樣子と相考、銀子借貸すきと不仕候に付、侍中必至と差支申趣に相聞候。

三月廿七日。前田重教、紀伊老侯德川宗直の邸を訪ふ。

〔政隣記〕

三月廿七日、從紀伊大納言樣、花之内御見廻懸之趣に而被爲入候樣、先達而御日限極り候得共、氣色相に而相延、今日九時頃御出被爲入。御料理者御斷に御座候得ども、大納言樣御相伴に而御料理被進。相濟、御裏付上下に被召替、御庭に御出。大納言樣も御出、於御亭御相伴に而御菓子等被進之。七時頃御歸殿也。御相伴者前田信濃守樣迄に而外無之、阿方御一門樣方も御出無之候。前田駿河守幷御近習之者兩人程罷出候樣申來、駿河守・前田兵庫・御表小

將奥村五兵衞參上、御料理被下。三人共御目見も被仰付、御庭ニも見物被仰付。

四月四日。幕府加賀藩の銀札發行を許可す。

〔政隣記〕

四月四日、御領國中金銀札遣之儀、三月十一日御願置之處、今日前月御用番西尾隱岐守殿に聞番御招、金札者無用、銀札遣者御勝手次第与、御伺紙面に御付札を以御渡。依之右御用主付御馬廻頭稲垣三郎兵衞、同兼御算用場奉行前田源五左衞門・町奉行青地彌四郎に、今月十三日於金澤被仰渡。

〔徳川實紀〕

四月、この月勘定奉行に令し下されしは、こたび松平加賀守重敎が封國にて金銀の牌通用せんことをねがへど、金牌は停止せられ、銀牌はこふまゝにゆるされたり。よてこの後、金牌用ふることはすべて停禁せしむれば、そのこゝろすべし。

四月四日。巡見上使松平賴母・大河内善兵衞を本郷邸に招請す。

〔徳川實紀〕

四月朔日、月なみ例の如し。中略。使番松平賴母近明・書院番大河内善兵衞政與は、加賀國金澤目付にさゝれ、おの〳〵暇をたまふ。

〔泰雲公御年譜〕

一、四月四日、御目付衆松平頼母殿・大河内善兵衛殿御招請。當朔日公方樣御目見相濟候由。爲御餞別御招請、御料理二汁八菜、塗木具、熨斗木地三方。御献立略之。發足以前、駿河守・豐後守より爲餞別菓子・酒肴等被相贈候由。御招請之節御饗應之趣、御作法十萬石以上之御あしらひの由。

四月十二日。前田重熙の三回忌法會を金澤寶圓寺及び江戸廣德寺に行ふ。

〔政隣記〕

四月十二日、謙德院樣御三回忌に付、於金澤寶圓寺今日一日御法事御執行有之。御奉行長九郎左衛門。於江戸も今朝於廣德寺御茶湯御參詣有。其外都而前々之通。

但、於御國御法事、前々兩日御執行之處、舊臘御儉約之儀に付、年寄中僉議之趣伺方間違茂有之候而、此度一日御執行与云々。

一、玉泉寺に而御施行、前々現米百石に候得共、諸事半減之趣故此度五十石に相成候事。

四月十五日。前田利實の大音氏相續を止め金谷御殿に住せしむ。

〔政隣記〕

四月七日朝堀田相模守殿へ、左之通御紙面聞番を以御指出。

右喜六郎私實弟に而國許に罷在申候。幼弱に付是迄御屆不仕候得共、今年十五歳に而丈夫に罷成候に付御屆仕置候、以上。

御　名

右喜六郎殿御出生之御屆無之、大音家ゟ被遣置候處、今般御樣子有之、御屆書被指出候處、相模守殿御請取置に而相濟。依之今月十五日金谷御殿ゟ當分御入、前田姓被稱候、向後殿付可奉唱旨觸有之。翌十六日大音家相續前田土佐守弟典膳に被仰付、人持組ゟ被加之。但、御稱號御改被成候、大音家者外之者ゟ相續被仰付候段御意之趣、本多安房守・横山大膳金谷御殿ゟ罷出申上之置。

四月十五日。巡見上使金澤滯留の際に於ける諸士の心得を諭す。

〔高畠左門留帳〕

今般御國目附松平賴母殿・大河内善兵衞殿御越に候條、御到着幷金澤御巡見等之節、町中等ゟ見物人罷出申間敷事。

一、御在留中火之元之儀、尚更入念可申付事。

一、御在留中於神社等相撲幷をどり、且亦御旅宿近邊に而、下々之者高聲・小歌停止之事。

一、御目附衆御外出之節、御道筋へ割場より足輕を以口上に而相觸可申候條、得其意、人々門前掃除等可申付事。

一、御目付衆金澤御順見之節者人留無之事。

但、御通り筋に侍中等行掛り候者、御會釋茂御邪魔に可有之候間、先拂・足拂一二町茂先に出置候條、御通り之樣子承候者、御通筋に者出向不申樣可相心得事。

附り、家來末々之者御通筋に行懸候者、傍に寄、作法宜敷蹲踞仕可申事。

一、御目付衆御順見御道筋に而、御家來末々等、諸役人中を見知不申候間、隨分御申付候得共、慮外ヶ間敷儀も有之候者、用捨有之樣に兼而可申聞旨、御目付衆より被仰越候條、可有其心得事。

一、御在留中卯辰山・茶臼山邊に農人之外罷越申間敷事。

但、右山に御横目足輕相廻候事。

一、御目附衆之御家來に對し、口論者不及申、路次等に而無禮不仕樣可相心得事。

一、御目附衆御家來に對し、家來末々之者無禮不作法之儀不仕樣、主人々々より急度可申付置候事。

右之通被得其意、組・支配幷家來末々迄急度可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々者、其支

配〻茂相違候樣可被申聞事。
右之趣可被得其意候、以上。

四月十五日　本多安房守

高畠左門殿
村田吉左衞門殿

四月十五日。領內に銀札を發行すべきことを告ぐ。

〔泰雲公御年譜〕

四月十五日、於二之御丸出仕之諸頭〻相渡候御紙面寫。

御家中之諸士勝手及困窮、勤仕に茂障可申躰に付、被遂御僉議、御代々御例者無之候得共、御領國之內銀札遣被仰付候者、御家中幷町・在共勝手に相成、諸商賣通用に茂宜趣に付、右札遣被仰付、其上を以御救茂被仰付候はゞ可然段、御僉議御治定に而、則公儀〻御伺被成候處、銀札遣之儀御伺之通被仰渡候。依之御領國中銀札遣に被仰付候。追而仕法等之趣可被仰渡候。先一統爲承知夫々可申聞置候事。

乙亥四月十五日　本多安房守

但今年より十五ヶ年之間通用之儀御願也。

十六日は誤なるべし

九分九厘は銀一匁より以下なり

寶暦の寶鈔に此文字なし蓋し豫定に止りしなり

〔續漸得雜記〕

一、寶暦五年銀札遣之儀、四月十六日被仰出、七月朔日より札遣候也。正銀通用御停止になる。先假札にて百目札より一匁迄。九分九厘迄は錢遣也。

〔泰雲公御年譜〕

一、今般御領國銀札遣に付、札之表如斯文字有之由。右者由美彌二郎相考候由。

寶鈔　膏澤弘敷。霑土洽財。隨時之義。允大矣哉。

四月十七日。重ねて巡見上使滯留中の心得を諭す。

〔高畠左門留帳〕

今般御國目付衆御越に付、從前々如被仰渡候、御家中末々迄萬端相愼奢侈之躰無之、諸事儉約相心得、御目付衆御在留中不入振廻・寄合等無用之段急度可申渡候。且又諸役人等あなたより被招候者各別、音信・見廻何も申合同樣仕、取分私之心入音信等無之樣相心得可申候。此段何茂可申渡置、拙者共ゟ以御書被仰下候。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ急度可被申渡候。且亦組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂不相洩樣可相達旨可被申渡事。

右之趣於此表一統申渡候付、申達候條可被得其意候、以上。

四月十七日　本多安房守　印

高畠左門殿

村田吉左衛門殿

四月廿一日。巡見上使松平頼母・大河内善兵衛金澤に着す。

〔泰雲公御年譜〕

一、四月二十一日天氣能、御國目付衆晝四時金澤參着之由。但富山に被立寄候節、御馳走方此方樣無御構。高岡瑞龍寺・古城跡・埴生八幡・倶利伽羅長樂寺に被致參詣候由。

〔御年譜〕

一、四月二十一日快天、巳の中刻御國目附松平頼母殿・大河内善兵衛殿御着。依而二十三日・二十五日、人持・組頭迄太刀馬代持參相勤。且一統穩便相心得候樣申渡有之事。

廿三日廿五日は一本に廿二日廿三日に作る

四月廿四日。巡見上使旅宿門前の取締に關して令す。

〔御年表〕

一、佳節・朔望・二十八日其外、御目付衆御旅宿へ人多罷越候儀有之節、門前込合候に付往來指留、右爲縮御歩横目指出置候。御歩横目幷警固足輕相斷候者、誰々に不依脇道より相越可申候。尤家來末々迄申渡置候樣、夫々組・支配へ可被申談事、別紙之通可申談旨御用番安房守

殿被仰聞候に付、御横目諸頭へ申談候事。四月二十四日。

四月晦日。大聖寺侯前田利道歸封の途金澤を通過す。

是月は大盡なり

〔泰雲公御年譜〕

一、四月晦日、備後守樣御歸に付御通被遊。但晝四時御旅宿に被爲入、夜四つ時御立被遊候旨。

五月六日。巡見上使松平頼母・大河內善兵衞金澤城に登る。

〔泰雲公御年譜〕

五月六日快晴、御國目付衆御城巡見。兼而は於二之御丸御料理出申趣に候得共、御斷に付、蓮池之御亭にて御湯漬出候由。但二汁五菜。又御本丸三階之御櫓にて御菓子出申筈。(但二汁五菜の御湯漬と申は、本膳に汁を落申由。是以湯漬と名付候由、)御目付衆晝四時登城、九時過相濟候。

〔追繫集抄〕

二年とあるは誤

寶曆二年松平頼母・大河內善兵衞、以監察來金澤時申報。

一、萬石以上十三人　千石以上百三十四人　百石以上千五十一人
九十三石至卅石六十三人　扶持方侍四十九人　五百石至百石醫十三人
扶持方取二十三人　百五十石至百石步並卅六人　九十石至四十石步並卅五人

俵並扶持方歩並五兵十一人　足輕並小者仲間五千三百十九人　茶堂方・掃除坊主百九人
合七千七百五十三人
一、侍屋敷千三百五十五軒　金澤町數百二町　乘馬七百三十疋

五月十一日。巡見上使松平賴母・大河內善兵衛石川郡白山比咩神社に詣づ。

〔泰雲公御年譜〕
一、五月十一日御目付衆白山巡見、朝五時御出、七時御歸。
一、御目付衆白山御巡見之節、御晝休飛驒屋宗右衛門方に而御料理出候。但白山に而者、拜殿与本社之間を通、巡見迄にて社參は無之由。

五月十六日。巡見上使松平賴母・大河內善兵衛河北郡黑津船より石川郡宮腰に到る。

〔泰雲公御年譜〕
一、五月十六日朝快晴、御目附衆四時黑津船へ御越、九つ半時御宮坂より御召船に乘り、大野御船小屋前にて下、宮腰に而晝休、御料理出。旅宿酒や權右衛門・長沖屋何某之由。船之內

批はへぎと訓む

御宮は城内の東照宮なり

へは御檜木重二組御遣候由。供之家來へは強飯、批にて被下。暮以前に御歸也。

五月十七日。巡見上使松平頼母・大河内善兵衛金澤城内東照宮に詣づ。

〔泰雲公御年譜〕

一、五月十七日朝曇、五時御目附衆御宮幷神護寺へ參詣。御算用場前より御坂へ懸り、甚右坂へ懸、御郭之内通り往來之由。

五月廿六日。前田重煕の生母心鏡院の廿五回忌法會を江戸長元寺に行ふ。

〔政隣記〕

五月廿六日、心鏡院様廿五回忌に付、江戸於長元寺御法事有。御法事濟御參詣。御法事料銀五十枚被遣、會所奉行持參。御法事御用、御家老西尾隼人に被仰付。

但、普請・鳴物者御法事之内遠慮之旨先達而觸有之。

五月。札座を設け銀札方横目を任じ領内の富豪に用銀を命ず。

〔泰雲公御年譜〕

五月

一、今般札座に高島屋三郎右衛門居宅御買上、銀札方横目田内林左衛門・森權十郎被仰渡由。

一、今般御領國札遣近々之趣に付、引替座銀子指支可申哉之趣に付、能登・越中銀持共ゟ相應に銀子御用立候様被仰渡、御城下ゟも表立候町人身上見計、人別當時銀有高可申出候由。森下町越前屋豊右衛門相願、差上申度旨にて、古金・朱封銀・文銀等引合百五十八貫目可差上旨に付、町奉行其段御用番奥村主水殿へ相達候所、神妙之旨被申渡、殊之外褒美之由に付、此段承傳、町人追々差上度旨相願候人々有之。菅波屋三郎兵衛・茶屋三右衛門、其外二十人計有之由。

六月朔日。巡見上使松平頼母能登に入る。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月朔日、夜前より雨天。今日御國目付衆能州ゟ頼母殿迄御巡見御發途。泊付金澤、志雄泊、二日所口泊石動山天平寺參詣、三日中島泊、四日中居村泊、五日宇出津泊、六日粟藏泊、七日輪島泊、八日門前泊惣持寺巡見、九日富木泊、十日大念寺新村泊妙成寺巡見、十一日今濱泊、十二日金澤。

六月十六日。諸士に貸附する銀札を貸銀奉行に交附すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

六月十六日、銀札遣被仰付候に付、御家中之人々ゟ銀札御貸渡被成候、受取可相渡旨、御貸銀奉行に今日御用番奥村主水被申渡。

地米は加賀産米をいふ百石以下の知行にありては加賀米のみにて給せらゝな皆地米と稱す

六月十八日。銀札は當分假札を發行することを令し且つその使用に關する細則を定む。

〔高畠左門留帳〕

御領國銀札遣被仰付候段、先達而申渡候通に候。右札早速出來兼候に付而、當分爲續假札を以て、百石五百目宛、御徒並御切米被下候者ゟ者二百五十目宛、御貸渡被成候事。

一、右銀札於御貸銀所、頭・支配人に可相渡候。何日より可相渡段は、主付役人より直に可申談事。

一、當收納地米之外、先拂申間敷候。百石以下皆地米之人々、三之一之外者拂申間敷候。拂申時節之儀者追而可申渡事。

一、右之通本札出來迄、先當分百石五百目宛爲續御貸渡候得共、收納米茂拂不申儀候條、借銀・買懸銀之儀者、先及貪着申間敷候。尤町方ゟ茂、町奉行より申渡候筈に候事。

一、町方・御郡方商買入用引替可申ため、札座ゟ茂銀札相渡可申候條、來月朔日より勝手次第引替可申事。

一、銀札仕法之儀、別紙之通候事。

右之趣被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配ゟも不洩樣

九分九厘は銀一匁以下なるをいふ

可被申聞候。右之趣可被其意候、以上。

乙亥六月十八日　奥村主水

高畠左門殿

村田吉左衛門殿

銀札仕法之事

一、當七月朔日より銀札遣就被仰付候、正銀通用停止之事。

但、追而本札出來迄之内者假札通用之事。

一、內々に而正銀通用仕者、且又似札仕者於有之者、急度曲事可被仰付候。

但、右之族有之及見聞候者、早速可訴出候。假令雖爲同類、訴人に罷出候者御宥免被成、御褒美可被下候。

一、札座にて正銀百目致持參引替候者には、銀札百目五分可相渡、正銀百目引替候ものへは銀札一匁受取、正銀百目可相渡事。

一、銀札一匁・二匁・三匁・五匁・十匁・二十目・三十目・五十目・百目と九段に相極候間、九分九厘迄者錢遣之事。

但、右假札小札少末々差支可申候間、本札出來迄之内者、銀札幷銀入交可致通用事。

一、札よごれ申歟、或は墨附、且又札之裏印章すれ有之候共、表之印章於相違無之者無滯可致通用。自然損じ候札等、見にくゝ通用難成札は、吟味之上於札座無異儀引替遣し可申候。尤口錢有之間敷事。

一、他國より御國ゟ入商賣仕品々代銀、尤札を以商賣爲仕、罷歸候時分夫々役人ゟ達、札座において引替可申候。御國之產物他國賣出候代銀、札座ゟ爲致上納、銀札可相渡事。

一、諸運賃幷御家中役銀・出銀等都而上納銀、銀札に而上納、尤於銀座封付可申候。此外封付不申候而不叶品々取遣之分も、封付可申事。

一、御家中之面々、他國より調物として正銀可請取と申もの有之候而も、相渡申間敷候。乍然御領國に無之品に而、從他國調候は而不叶品者、頭・支配承屆、主付役人ゟ添紙面を以差越次第可申渡事。

一、江戶・京・大坂其外他國ゟ罷越候もの、正金銀引替之儀、是又頭・支配人承屆候上、右主付役人ゟ添紙面を以申越次第爲引替可申事。

一、金子幷錢相場極置可申事。

右之通相違無之樣相心得可申候事、以上。

乙亥六月

六月廿一日。巡見上使大河内善兵衛越中に入る。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月二十一日朝曇四時より終日降。今朝御目付大河内善兵衛殿越中爲巡察發途。金澤、二十二日今石動泊、二十三日城端泊、二十四日城端泊、二十五日戸出泊、二十六日氷見泊、守山晝付、松山之内假小屋懸中休、二十七日今石動泊、津幡晝、二十八日金澤着。

六月廿二日。本日以降諸士に銀札を貸與す。

〔政隣記〕

一、六月廿二日より於御貸銀所、諸侍江銀札御貸渡。百石に五百目宛、御切米取江者二百五十目宛也。

六月晦日。銀札及び錢の交換比例等を定む。

〔政隣記〕

今般札遣之儀就被仰渡候、諸切手只今迄文丁銀ヲ調申處、札遣之内者文銀札与相調候事。

一、金銀算用、當六月迄正銀渡り方幷七月以後銀札渡り方、打込勘定可承屆事。

是月は大盡なり

一、小拂所江相向候諸切手、當六月晦日迄之日付に而七月に至相向候はゞ、銀札可相渡候。此分者於會所、右之趣致奥書申筈に候事。

一、上納銀幷渡り方共、九分九厘迄之分錢に直し候而、何文四歩与相成候者引捨、何文五分与相成候分ははね込可申事。

一、都而上納銀一匁迄は銀札を以上之、九分九厘より内は錢を以上之申筈に候。依之當七月より十二月迄は、錢相場一匁に付六十七文差に相極候條、右之算用にて可有之候。來年正月よりは前年十二月之相場を以、一ヶ年切に差相極候間、毎年當場江可被承合事。

一、御扶持方代・會所銀初、都而渡り方九分九厘迄は、右之錢相場を以可相渡事。

一、渡方切手調様、案紙遣之候條、別紙之通可被相調候。上納銀切手調様、夫々奉行人等可被承合候事。

一、他國旅人幷御家中之人々江戸等江罷越候節、御國路に而錢買上申筈に付、夫々不指支様申渡置候。地廻御用罷越候人々者、銀札を以錢等買上可申事。

右之趣被得其意、同役並組・支配之人々江も可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も夫々申談候様御申渡可有之候、以上。

六月晦日

御算用場

七月朔日。初めて領内一統に銀札を通用す。

〔泰雲公御年譜〕

一、七月朔日、今日より初而御領國一統銀札通用に付、錢殊之外拂底いたし、朝之間は五十目程札に而賣申候所、晝頃より十五匁程ならでは賣不申候。晩方は一・二匁札之外賣不申候由。銀一匁に付六十四文遣也。

〔泰雲公御年譜〕

一、今般札遣之儀就被仰渡候、札座之町役人、鍋や彌三右衛門・酒や善左衛門・挽茶や次郎兵衛・鹽や伊兵衛・田井や市兵衛、以上五人之由。札座は鍋屋彌三右衛門向之六間口之家御買上に成、此所札座に相成候由。高嶋や三郎右衛門也。

一、御目附衆御出に付狂歌。

　善兵衛が來てもお國は銀づかへ札賴母より外はあるまい。

七月七日。御算用場奉行富田治太夫等銀札遣に不同意なるを以てその職を辭す。

〔泰雲公御年譜〕

一、七月七日、御算用場奉行富田治太夫・横山木工、病氣に付御斷申に付、當分加人津田源右衞門被仰渡候。今般銀札遣之事、右兩人得与同心無之、前田源五左衞門一人之取噯之樣に相成、不致合躰趣共に而、兩人衆御斷申共沙汰に候。

七月十一日。巡見上使松平賴母・大河内善兵衞を二ノ丸御殿に饗應す。

〔泰雲公御年譜〕

一、七月十一日朝より終日細雨。今日御目付衆御兩人、於二之御丸御饗應。御門並三御丸・橋爪御番所御作法、御城中御巡見之通。但八時過御退出。御小書院御相伴前田土佐守。橋爪より御戾御禮有之候。

八月十三日。諸士に貸銀を行ふを以て一層儉約を旨とすべきを命ず。

〔典制彙纂〕

御家中之人々勝手困窮に付御救可被仰付旨被仰出、先達而申渡候。就夫萬端嚴重遂儉約、不覺悟無之樣頭・支配人より急度可申渡候。將又旅行之人々道中召連候人數等も隨分致省略、餘情無之樣可申渡旨被仰出候條、外見に無貪着省略可仕候。追而者被仰出候趣も可有御座候先此段一統可申渡置旨被仰出候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々に可被申聞候。組等之内裁許有之[illegible]。

一錢目は一匁なり

本文は年月を詳にせず

八月十三日

八月。銀貨大に缺乏す。

〔秦雲公御年譜〕

八月

一、銀札遣以後上方ゟ爲登銀引替相滯、殊之外萬端差支、錢一錢目に付六十四錢賣候所、二十目より高之錢一向に難求、段々差閊、此間は三匁より銀高は賣不申趣に付、一錢目六十文賣可申由町會所より相定候由。此節は新酒等賣出候節に候得共無之、古酒は賣切。其外こんにやく玉上方より難成に付一向に難買。諸色萬端とも三割増高直に相成、米直段も次第高價候得共、錢高直成所に引合候而は、漸六十目平均に賣拂候而も四十目平均に可相當候。大豆も新潟より宮腰迄相廻候へとも、宮腰へは付不申故、大豆も甚拂底故、味噌抔も賣不申。其外引替及難澁、上方より差下候品一圓差閊可申旨申事に候。

〔秦雲公御年譜〕

一、銀札通用後、以之外錢拂底、賣不申。依之家中仲間・火消之纏持等申談、元來此銀札之發端は角屋彌三右衛門に候間、蹈込可致打擲と企候旨に付、晝足輕七人夜十一人町付爲相詰候由。第一札遣以前角屋彌三右衛門等方へ錢買込、ヶ様に錢拂底いたし候様にも申沙汰候に付、

彌三右衛門一向外出等差止、錢店も相仕廻候由。所々町々米餘り高直に付、御貸米相願候處不相叶、御上より米賣渡被仰渡、錢百銅に三升賣渡候由。

九月朔日。前田重教老臣に銀札貸與に伴ふ心得を諭す。

〔袖裏雜記〕

猶以左之趣與村豐次郎・本多圖書にも可被申聞候、以上。

家中之諸士覺悟之儀申渡之趣書立、別紙相渡候。此方若年に付、仕置方各別而辛勞之至候。猶更被申談、內外綿密被相心得、各に致習親、諸士風俗相改候樣致度事に候。今度銀鈔遣候儀公邊相願、令助成候儀者大切成事に候へ者、一統致心服、勝手取直致勤仕候儀、被申渡候儀肝要事に候。第一諸頭其心得尤に候間、能々思慮有之可被申渡候、謹言。

少將

御字御判

九月朔日

本多安房守殿

前田駿河守殿

村井豐後守殿
長九郎左衛門殿
横山大膳殿
奥村主水殿
青山將監殿
横山藏人殿
前田兵部殿
玉井市正殿
中川式部殿
西尾隼人殿

家中諸士覺悟之趣、此度書立を以申渡候。何も譜代之人々之事に候へば、勝手取直可勵忠勤者有之儀者勿論候へ共、唯今迄世上之隨風俗、行屆不申哉与存候。畢竟組・支配有之人々等申談、嚴重に相愼、萬端事輕致し候者、其以下之者共はおのづから見習可相改事候。其内にも不覺悟之者有之候者、無用捨早速可達聽候。急度可申渡候。此段頭々幷支配有之面々に、とくと可被申含候事。

九月朔日

代々申渡候家格法令聊相違無之樣可相心得候。就中家中繁務之輩、且無謂人々も勝手甚及困窮候段、去年以來達聽候へども、此方近年打續不時入用等に而難取披に依て、領國に者自往古無之儀、乍心外銀鈔通用之儀公邊相願及助成候。然上者向來勝手取直し可勤仕儀肝要之事候。若不愼之者於有之者可爲曲事候。儉約等之趣は前々詳に申渡有之儀に付、此度分而不申渡候條、右之趣嚴重に相心得候樣一統可被申聞者也。

乙亥九月朔日　　　　御　　印

九月十五日。金澤城內東照宮の正遷宮を行ふ。

〔泰雲公御年譜〕

一、九月十五日、東照宮正遷宮。但殺生は停止之外、普請・鳴物等は不及遠慮旨。同十八日正遷宮御供養有之。

九月廿三日。昨今兩日江戸傳通院に於いて前田光高夫人淸泰院の百回忌法會を行ふ。

〔政隣記〕

九月廿三日、今日清泰院樣百回御忌に付、前々之趣を以御用番堀田相模守殿に覺書聞番持參之處、御直名之御書付を以御窺可被成旨に而候故、則其通を以御伺之處、御窺之通与八月廿一日被仰渡。依之於傳通院昨今三百部之御法事御執行、御奉行は前田駿河守。昨今御參詣。今朝御寺に上使御奏者番井上河内守殿を以、御香奠白銀廿枚御備、御代香御勤。御目付荒川助九郎殿等前々之通參出。且御法事方主付御小將頭大河原八郎左衞門、御用人遠田三郎大夫。四時過御歸舘。追付爲御禮兩御丸に御登城。御老中方御廻勤、其外前々之通り。今日金澤於如來寺も一朝御茶湯有之。御名代御香長九郎左衞門相勤之。其外前々之通り。

〔德川實紀〕

九月廿三日、傳通院にて淸泰院御方(大猷院殿御養女實は水戶中納言賴房卿女松平筑前守光高室)百年周忌によりて、奏者番井上河内守正經代參し、香銀二十枚をすゝめらる。よて松平加賀守重教出仕して謝し奉る。

十月朔日。巡見上使松平賴母・大河内善兵衞金澤を發し歸途に就く。

〔御年譜〕

一、十月朔日御目附衆被罷歸候付、四時首途、東海道通り。町端迄、安房守・土佐守・主水・本多圖書・横山藏人・玉井市正・前田兵部・中川式部、定番頭・御馬廻頭・御小將頭一人宛、町奉行・

町同心等罷出。且道中指添候面々左之通。

御先物頭水野勝助、聞番中村市郎左衛門、會所奉行關屋市右衛門、御歩横目竹内五郎兵衛、

御醫者小瀬甫元・不破元策・久保定圓。

〔泰雲公御年譜〕

一、十月朔日、夜明頃より雨に而終日雨天。今日御目附松平頼母殿・大河内善兵衛殿、四時頃金澤御發途、上通松任御晝小松御泊、大正持晝金津泊。凡東海道十五泊に而、十八日江戸歸着。道中御附被遣醫師、小瀬甫元・不破玄策也。

但於小松御城巡見之節、御饗應も有之筈。尤懸之組頭中等、何茂松任・小松或は御領境迄罷越候由。

一、右御兩人之内、松平頼母殿は文學も有之樣致沙汰候得共、在留中且而其沙汰無之。俳諧は御兩方共被好候哉、百韻も有之、中秋之發句等も有之由。閑暇には楊弓を射て日を被消候よし。頼母殿は人品柔和に相見え候人柄之由。善兵衛殿には元來小身に付、小器量に相見え候由。或云、善兵衛殿御書院番に而、身上三百五十俵之由。御國に被參候に付、千五百石之高に被繕候由。頼母殿は御使番に而、紋丸之内釘貫、屋敷は高德寺前、父名は齋宮、延享四年より御使番被相勤旨。善兵衛殿は元御國出生、能州一之宮神主櫻井何某、先年櫻井氏兩人之

神職にて同苗に候所公事出來、一人は御改易被仰付候所、幼少之せがれ召連、江戸に所緣有之罷越、於彼地成長いたし、公儀御家人相成候由。又は黑津舟神主齋藤何某の弟共、又は越中高岡出生とも申候得共、慥成儀は不相知候得ども、何樣御領國出生に候哉、參着以前より此沙汰有之候。賴母殿は四拾歲ばかり、善兵衞殿は年增に相見え候由。御國御發足之節、賴母殿先乘は湯原長太夫、善兵衞殿先乘は和田權五郎也。賴母殿發足之跡は、掃除等前方被申付候躰に而壁落も無之、善兵衞殿被立候跡は次之間御家來共落書等いたし置、先達而相渡有之候座敷廻り餝有之候屛風・硯箱、其外家來共へ相渡有之候鍋釜・水風呂迄も、たゝみ候而被罷歸候由。

本文は小松城巡見のことに係る

〔高畠左門留帳〕

去月十日之御狀致到來候。然者今般御國目附衆同朔日其表御越、翌日御城巡見御首尾無殘所相濟、三日未明御發途之由。其節横山大膳殿被參取捌有之候。各に茂無滯被相勤候。右之趣早速可被申越處、拜禮被罷出延引之段、委曲御申越之通致承知候。萬端無御障相濟恐悅御同意御座候。右爲御報如此御座候、以上。

十一月四日　　　　　　　　　　青山將監

高畠左門殿

村田吉左衞門殿

〔德川實紀〕

十一月朔日、使番松平賴母近明、書院番大河内善兵衞政與、加賀國金澤よりかへり各謁す。

十月五日。前田重靖の三回忌法會を金澤天德院及び江戸廣德寺に行ふ。

十月五日は前田重靖發喪の日なり

〔政隣記〕

十月五日、天珠院樣就御三回忌に、金澤於天德院昨今御法事有之、御奉行奧村主水。江戸於廣德寺も今朝御讀經有之、御參詣。其外前々暨當年四月十二日御法事之節御同事。於金澤喜六郎殿御參詣有之。

十月十一日。銀札の本札を發行して在來の假札と混用せしむ。

〔政隣記〕

十月十二日、中略。町方にも昨日より本札出、當分假札に交ぜ通用。

〔續漸得雜記〕

十月十六日より本札出來、假札と入交通用。

本文は前出と日附を異にす

十月十二日。諸士に對し再び銀札を貸附す。

〔政隣記〕

十月十二日、御家中之人々江、百石五百目宛銀札今日より渡。

十月十九日。御馬廻組岡田善左衛門石川郡野々市に於て百姓を斬殺す。

〔泰雲公御年譜〕

一、十月十九日、御馬廻千石岡田善左衛門上口江殺生に罷越、野々市百姓家園之内に有之竹を自身截取候所、百姓嚴敷相咎、所望價も可遣申入候得共、最前無斷狼藉成仕形、必竟盗賊同前之旨、彼竹を引たくり候所、善左衛門家來飛懸り、百姓之面をたゝき候に付、百姓家來と組合、善左衛門も見兼、百姓之腕を切落候所、彼百姓之せがれ大膚脱にて飛懸候に付、是も袈裟に切倒卽死いたし候旨。

十月。老臣等先に前田重敎の與へたる諭旨の意を敷衍して諸士に令す。

寶暦六年二月廿一日の條參照

〔政隣記〕

御代々被仰渡置候御家格等、聊相違無之樣可相心得候。就中御家中之人々勝手及困窮、銀鈔御貸渡御救被成候に付、自今嚴敷遂儉約、勝手取直し御奉公相勤可申趣、今般御書立を以被仰渡之趣寫相達候條、拜見候而可奉得其意、委細之趣者年寄中より可申渡旨被仰出候事。

一、右之趣に付借銀・買懸銀等も從御上可被及御沙汰候。御救之樣子、且又借銀等書出樣之

儀者別紙之通に候事。

一、近年不時御用に而度々旅行、又者無據入用打重り候面々勝手難澁之段者、其謂も有之儀に候處、左も無之人々及困窮、去年已來暮兼候程に行詰候段不覺悟之至。前々より毎度儉約之筋被仰出候得共心服薄、且高上之風俗にひかれ、超過分限費用多故に候。今般結構に御救被仰付候事に候間、自今急度心底相改、嚴重に遂儉約、隨分質素に相暮、勝手取失不申樣、覺悟肝要之儀候事。

一、儉約之儀御代々被仰出候御定之內、衣服之儀・音信・贈答・婚禮之式等、鷹數・饗應又は公私之儀に付參會之節料理等、尤押立候能囃子・家作・一季居男女給銀之儀、延享三年付札を以相渡候書立之通、嚴密に相心得可申候。衣服之儀近年麁服に相成、綿衣も用候得ども、尙更至而麁服着用尤之事に候。他國御使者等有之節も、無構麁服を用可申候。且又娘婚禮、勝手惡敷罷成候而者緣談取結候者も心外之事に候間、双方頭々委細承屆、少も華麗無之樣に可申談候。家作等も分限より輕く取計、頭・支配人にも及示談、得指圖可申事。

一、江戶表之裝束者格別に候得共、是以脇々より者輕き衣類可然候。曁旅行之粧猶更輕く、人數も御供之外者、雖爲頭分見苦敷程に減候樣可申渡旨御內意有之候條、可被得其意候。

一、婦人之衣類一切華美有之間敷候。夫は外を勤候而さへ綿衣抔を用申事に候得者、妻子等

之儀は勿論に候。且又見分は麁服之様に仕成候而、不益之費有之品堅着用仕間敷候。櫛・かんざしに金銀を用候儀可爲無用候。自今右様等之品商賣致間敷候旨、町奉行ゟ申渡候。右衣類幷銀いかんざし等目立候品用ひ候者往來候者、夫々承屆候様に役人共ゟ申付置候間、其心得可有之事。

但、男女共無用之銀道具、幷銀に似寄候かんざし等も用候儀可爲無用候。只今迄有來候分も用ひ申間敷候。

一、近年收納拂米等之儀、或は心得違、又者書算違抔与申立、猥成儀有之躰相聞え候。高知之人には、役人共も有之儀に候得者急度可相糺儀、少身之人々は僅之世帶、不念不覺悟之至候。向後右之族於有之者可爲曲事候。都而勝手取失ひ候得者、心外に約を違、不義理之基に候間、此度之御思慮無忘却、古來質素之風俗に立歸、不時御用被仰付候節も不指支様に相心得候儀、朝暮違失有之間敷候事。

一、近年江戸詰之人々之内、諸色屋を初、拂方不埒成儀有之段相聞得候。御外邊之事別而嚴重可及沙汰處、不覺悟之至候。畢竟不益之諸道具等相求、又者度々參會等も仕、費用多き故に候間、向後右之族無之様に急度相心得可申事。

一、今般拙者共迄被仰出候趣も有之候條、組・支配之内不心得之者茂有之候者、急度加異見、

其上にも承引不仕者之儀者、無用捨可有言上候。自今無謂勝手取失候者於有之者、頭・支配人之可爲不念事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江嚴重に可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々者、其支配江も申渡候樣に可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月

今般御家中之人々勝手爲續銀札御貸渡、借銀等從御上被及御沙汰候に付、自今勝手取續之儀一統申渡候通に候。是以後拜借銀幷上納銀等之儀に付相願候儀有之候共、容易に取次紙面被指出間敷候。其内にも至而無構儀者格別に候。只今迄之風俗者、左程難澁無之者迄にても、並有之相願候得者、頭・支配人聞届、願紙面指出候樣に相成候。適綿密に遂詮議、不取次頭等有之候得者、支配も等閑成樣にも有之、又者不働之樣にも及沙汰候に付、十分詮議詰候儀こも不存候而も、並有之儀故不得止事族も有之、同役共無一致儀をも相願、又者下より願候得者、人々手前へ引付強而相願候樣成儀、御上之御難澁をも不顧、彼是与貪候樣成儀者無勿躰事、役儀をも相勤候面々には不相應之儀に候。御上御要脚元來御不足之御勝手に候處、近年相續不時夥敷、御物入御難澁至極に而、御救可被成樣も無之故、御代々御沙汰無事に候得共御願

成、銀札遣被仰付候事に候得者、此上差支候時者最早手段無之儀に候條、被得其意、組・支配之人々勝手取失不申御奉公仕候樣、無油斷可被申談候事。

十　月

覺

一、今般銀札遣就被仰付候、御家中之人々爲續知行高百石に付銀札三貫目宛之圖り、來々年迄に御貸渡可被成候。御扶持方・御切米被下候人々茂右割を以、御步並迄御貸渡可被成候。

但、當七月御貸渡之銀札共、今年中に一貫相渡可申候。殘分者來年・來々年に掛御貸渡之筈に候。

一、上納銀・借銀・買懸銀・祠堂銀・官銀之分も不殘書出可申候。且又質物之儀、侍中に先者有之間敷候得共、質物之品有之人々者、御步並迄書出可申候。從御上可被及御沙汰候。右上納銀を初當七月廿九日迄、質物之分者九月十日迄之分書出可申候。

但、書出樣之儀者、前々之趣を以爲書出、頭・支配人手前に而遂吟味可申候。書出樣難心得品も候者、銀札主付之頭に可有示談候。

以　上

十　月

被今日人持中を初一統申渡候趣に付御請之儀、七手一組切物頭迄連名、月番之宛所に相調、越後屋敷へ可有參出候。幼少病氣等に而登城無之面々へ者、其組筆頭より御書立等之趣相達、是又一組之列に御請相調可申候。幼少に而判形等も難成人々之儀者、代判人より別紙に御請可指出候。諸組頭等之分も右之趣に相心得、組・支配之人々御請之儀者其頭々へ取置、其趣右御請に書載可申事。

亥十月

今日一統申渡候趣、忌中幷病氣等に而登城無之人々へ者、其組々筆頭又者同役向寄より傳達可仕事。

在江戸等之者は代判人より相達可申事。

組・支配之人々へ申渡候者、爲御禮組頭・支配之人々宅へ罷出可申候。年寄中支配之分者、御用番宅へ爲御禮罷出可申候。尤布上下着用之事。

一、與力へ者其寄親より申渡、御禮も寄親迄罷出可申事。

但、自分仕與力へ御貸渡之御禮も、一所に組頭等宅に而可申述事。

一、夫々申渡相濟候者、頭・支配人より御請御用番迄指出可申事。

一、病氣等之人々者、爲御禮其頭・支配迄以使者可申越事。

以上

十　月

十一月十一日。前田重敎、桃園天皇の女御入内を賀し奉る爲使者を金澤より發せしむ。

〔泰雲公御年譜〕

一、十一月十一日、今般女御御入内（一條兼香公姫君也）爲御祝儀、御馬廻頭篠原六郎左衛門御使被仰付、今日發足。

十一月十六日。町人に對して儉約を命ず。

〔舊記〕

今般御家中之人々一統行狀幷儉約等之儀、委曲以御書立被仰出通候。町人等之儀、猶更萬端相愼候樣可被申渡候。就中妻女・娘等之衣類幷櫛かんざし等之儀も、嚴重可被申渡候。

一、自今銀之かんざし幷無用之銀道具致商賣不申樣、細工人等ゟ急度可被申渡候。

右之趣可被得其意事。

別紙御覺書御用番長九郎左衛門殿御渡、町中急度可申渡候。惣而不相應之衣類幷銀之かんざ

し等用候而徘徊仕候者有之候はゞ、逐穿鑿候樣士方孫三郎にも被仰渡候條、町人共妻子等之儀も町附足輕共に申渡置、見咎次第御用番宅へ召連逐穿鑿候樣被仰渡、則足輕共に申渡候條、向後嚴重相心得候樣、町中急度可被申渡候。

一、右之通に而外邊者致遠慮候而も、家内等に而只今迄之通、勝手次第美服幷過分之くし・かんざし等用申候而者無詮事に候條、有來候共内外之無差別用申儀無用候。若違犯之者有之段及見聞候はゞ、家主曲事に可申付事。

但、町中召仕候下女共に至迄、玳瑁之くし・笄用申段不相應之事候間、向後下女之分は木櫛・塗笄之外無用候。是又足輕共咎可申候條、主人々々急度可申付事。

一、自今銀之かんざし・笄、無用之銀道具不致商賣樣に可申付旨被仰渡候間、其筋之細工人共急度相心得、兼而茂申渡置候通、何方によらず右之類誂申者有之候はゞ、先請取置、早速此方に可及斷候。隱置後日に相知候はゞ曲事可申付事。

一、右之趣に候得者、向後是等之品々者商賣不仕筈之事に候條、呉服屋幷小間物商賣人等に急度可被申渡候。此上に茂密々賣出、自然持主穿鑿之上賣主相知候はゞ、急度曲事に可申付事。

附、小間物商賣・古着商賣抔仕候者は、武士方屋敷にも致出入、女中等より打物等致取遣事

候。左樣之筋に而も、右御停止之品々取受申間敷候。若相背申者有之候はゞ、右同事急度可申付。且又古着商賣などには女商人數多有之候間、是又別而嚴重可申聞置候樣可被申渡候。於相背者女たりとも急度曲事可申付事。

一、自然致所持候銀之かんざし賣拂度存候者は、銀札引替所ゟ差出可申候。正味銀割合を以、銀札引替相渡候樣申渡置候。

右之趣町中不相洩樣、嚴重可被申渡候、以上。

十一月十六日

青地彌四郎

津田宇右衞門

會田次左衞門殿

矢部權太夫殿

出口與三太夫殿

野村次郎衞門殿

別紙御覺書御用番長九郎左衞門殿御渡、嚴重に可申渡旨被仰渡候條、是以後町人ども妻子等不相應之衣類、幷銀之かんざし用候而徘徊仕候者有之候はゞ、足輕共見咎次第、御用番宅ゟ召連候樣可被申渡候事。

右覺書十六日小頭共に相渡。

此以後若銀のかんざし引替所に指出候者有之候はゞ、正味銀割合を以銀札相渡、其段可及斷事。

亥十一月

十一月二十日。町人森下屋七兵衞贋札を製造使用したるを以て捕縛せらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、十一月廿日、西御坊町森下屋七兵衞与申者、銀札座へ五十目二枚・三十目一枚持參、小札に引替申所、贋札に付被召捕致禁牢候。黨類も有之、出奔之者一兩人有之。惣而此者贋札多富山邊・能州へ持參、所口邊にて買物いたし、代物に相渡候由。

〔泰雲公御年譜〕

一、十二月八日、今般贋札之黨類橋本や喜兵衞、越前三國に而召捕、今一人紺や九郎兵衞与申者同類、贋札員數五貫目計之由。

十二月。札座の引替用に供する爲町・在に銀子を差出すべきを命ず。

〔泰雲公御年譜〕

十一月

一、今般又々町方・御郡方ゟ御銀差上候樣被仰渡、札座銀子拂底引替不自由に付、町・御郡方こも三千貫目御入用之由。當月十四日迄に有無之趣、人別に町會所迄書付差上候樣に申渡有之。兎角札座銀支に付、諸商賣京・大阪之仕入、來四月迄一圓可爲無用之旨申渡有之由。

十二月五日。領內の作損高を幕府に上申す。

〔政隣記〕

一、八十二萬六千四百石　加賀・越中 能登・近江之内

右私領分之內作毛、春已來不順之氣候に而雨降續、虫附・にち痛等に而今年損毛高右之通に御座候、御屆申達候、以上。

十二月五日

右御用番西尾隱岐守殿ゟ御達。且大聖寺御領御損毛御屆等草高一萬八千九百二十石餘与云々。

十二月十六日。前田重教、傳通院の僧を本鄉邸に饗す。

〔政隣記〕

十二月十六日、清泰院樣御百回御忌御法事、當九月廿三日相濟候に付、今日傳通院和尚御招請。御能翁立五番附祝言有之。於御大書院御饗應、和尚ゟ御引菜御盃事も被遊候。役僧五人ゟ者前田大和守殿出雲守樣之筈に候處、就御風氣御斷に付大和守殿御出。御引菜被成候。其外之僧中ゟ者、御取持之御旗本衆御引菜被成候。大御書院御客、和尚共廿一人御料理出。先年者木具に候得共、時節違候故和尚ゟ者塗三方、其外ゟ者塗木具。御中入に御料理出、濟、於御休息之間中將姫筆之稱讚淨土經被懸御目候。御好に付後段蕎麥切出。朝五半時頃御越、其節御式臺迄御出迎、七半時過御退出。御玄關階下迄御送、頭分以上共熨斗目、平士は服紗小袖・布上下着用之。

但、御能御番組　翁　嵐山　俊成忠則　誓願寺　葵上　春日龍神　附祝言

此三人之子供、兼而親之依賴に、今日被爲召初而御能勤之。

寶生九郎せがれ丹次郎　十歲

寶生新丞せがれ萬作　十歲

金春三郎右衞門せがれ五郎兵衞　八歲

〔政隣記〕

十二月十八日。前田重教左近衞權中將に昇任を命ぜらる。

十二月十八日、昨日之依御奉書四時前御登城之處、於御白書院御緣頰御老中御列座、中將御

本文は金澤にて披露のことに係る

轉任被仰付候旨、御用番隱岐守殿御演述。御禮被仰述、西之御丸御登、御下り諏訪部文九郎殿ゟ御寄。夫より御老中方・若御年寄衆御廻勤、八半時過御歸館。右御城之御樣子、御表小將永井清太夫御供數之外に被召連、從御城早乘に而罷歸申述。夫より一統服紗小袖・布上下改着。

一、御歸館之上、御のし上之御祝之上、御居間書院ゟ御出。將監・隼人被爲召、御樣子被仰聞、頭共等ゟも可申聞旨御意に付、右兩人常席に諸頭等被召呼、御意之趣、中將御轉任之御普爲聽被申聞。

〔德川實紀〕

十二月十八日、松平加賀守重敎中將に任ず。

〔天珠公御年表〕

一、十二月二十八日御用番本多安房守諸頭へ申演趣左之通り。

當月十八日御登城被成候樣に、前日御老中方御連名之御奉書到來、則御登城被遊候所、被任中將候段、御老中方御列座、西尾隱岐守殿被仰渡、難有被思召候。此段何茂可申聞旨、以御書被仰下候事。

十二月廿一日。德川家重、前田重敎に鶴を贈る。

〔政隣記〕

翌年は寶曆六年

大納言は德川家治

十二月廿一日御鷹之鶴、上使御使番池田震五郎殿を以御拜領、御作法如前々。相濟、兩御丸御登城、御老中方御勤等も如前々。翌年二月廿二日御披、御一門樣等五十七輩御招、御酒之內小謠にて御小書院迄に而相濟。讃岐守樣者御勤柄に御表御斷に付、於御居間書院御饗應。追而讃岐守樣御好に付、御居間書院に而一調・仕舞被仰付。

一、御家老中江者御料理被下之、御近習頭等江者鶴御吸物等頂戴被仰付。

一、一統熨斗目・上下、其外如前々。

十二月廿八日。前田重教登營して昇任を謝す。

〔政隣記〕

十二月廿八日、昨日之依御奉書、中將之爲御禮五時前御登城。於御白書院御禮被仰上、(附歲暮御祝儀當日之御禮も被仰上。)御着座、御懇之被爲蒙上意。但今日公方樣に者少々御風氣被成御座、大納言樣御名代に出御。御獻上左之通。

御太刀一腰・黃金一枚・御卷物十・御馬裸背一疋(鹿毛越中新川郡下立村立、三歲三寸五分。)・御目錄。

大納言樣江

御太刀一腰・黃金一枚・御馬裸背一疋(鴾毛越中新川郡若栗村立、三歲二寸五分。)

御簾中樣江

白銀五枚・包のし・御目錄。

一、右に付日光御名代御使、人持組御近習前田兵庫江被仰渡候。

〔政隣記〕

十二月廿九日。前田重教昇任せしを以て口宣受領の使者を江戸より發せしむ。

〔政隣記〕

十二月十八日夕口宣之儀、酒井讃岐守殿江之御奉書、西尾殿江聞番被召呼御渡、左之通。

松平加賀守事爲少將之處、今度中將位階如元被仰付候。口宣等之儀相調候樣傳奏衆迄可被申入候、恐々謹言。

寶暦五亥十二月十八日

西尾隱岐守忠尙

松平右近將監武元

本多伯耆守正珍

酒井左衞門尉忠寄

堀田相模守正齋　各判

酒井讃岐守殿

右御認出來御家老中へ御渡、京都ゟ之御使人（十九日に被仰渡有之。）御大小將神尾伊兵衞ゟ被相渡、翌廿九日晝過江戶發出。尤御姓名書も御渡。

但、御表向に而拜領物無之に付、御内々に而金小判廿兩於御次被下之。

右に付京都ゟ、從金澤御使人持組篠原彌助被遣。

是歲。凶作なるを以て米價大に騰貴す。

〔泰雲公御年譜〕

一、百姓惡作等爲御救、御領國一統五步免御用捨、現米二十二萬石ほど也。町方者、質屋へは五步之渡り方、借銀は二分二厘之渡り方、買懸りは三分三厘之渡り方に而人々請取也。

〔泰雲公御年譜〕

當は十一月

一、頃日米直段、御貸米相渡り候已後は少々充高下有之。當廿五・六日頃は地米百四匁迄仕候所、廿九日は少々引下、九十八匁五分位に候。能州邊別而不作、所口邊飢人多致出來に付、每日御助米飢民へ相渡候。飢民三十四・五人有之由。

〔泰雲公御年譜〕

當時は十二月

一、當時御國米殊之外拂底、地有米百十七八匁位、餅米百三十目位。酒造仕間敷、町中雜水給、餅爲搗候儀も差止可申旨相觸、藏宿中藏敷米等迄御召米に相成候。

〔泰雲公御年譜〕
一、十二月廿九日、頃日米拂底に付、御家中拂米買出之中買手前、時々町會所に可相達旨。人々飯米之外、貸米等之切手に而は藏宿より相渡不申。飯米迄も一度に二石より上は、通を以相渡申間敷旨、町奉行より藏宿へ申渡置候由。

寶暦六年

正月朔日。前田重教登營して新正を賀す。

〔政隣記〕
元日、御祝御膳被召上、御直垂に而、六つ七歩奥之口より御出御登城。於御白書院御禮被仰上、御着座御相伴、御引渡等出、御盃御頂戴、御時服二・御熨斗目綸子御拜領。西御丸にも御登、九時前御歸殿。大御門より被爲入、御通懸御出入町人等御禮被爲請候儀如去春。重而御表に御出、御禮被爲請儀等、其外年頭御規式都而如去春。但今朝御三献者相止。
一、年頭御勤、御參詣も去春之通に付略之。但御轉任已後年頭御兼御參詣に付、御宮等御兩拜可被遊哉、外々之御樣子も池德院に承合有之候處、御兩拜之思召に而御一拜可被遊候。外々樣も左樣之旨被申上。尤御備物は有之、御一拜被遊。

正月十一日。前田重教、前田兵庫をして代拜の爲日光東照宮に赴かしむ。

〔政隣記〕

正月十日、舊臘廿八日に有之通に付、前田兵庫明十一日日光江之發足。依之今日御居間書院江被爲召御意有之、誘引青山將監。同四之間に而御口上書將監渡之、次紗綾二卷御廣蓋を以御表小將持出、被下之旨將監申述。畢而御居間江被爲召、富永數馬誘引、御懇之御意を以御手自御紋付御羽織一・黃金一枚被下之、翌日發。御步八十島十藏御獻上之品々指添、十四日日光江着、十五日御代拜勤之。十八日歸府、御居間書院に而御目見、御懇之御意有之。

但、兼而十五日御代拜勤候筈に付、同朝御請也。服御改は無之。

正月。郡方に令して奢侈を愼ましむ。

〔司農典〕

近年御郡方古來之風俗を取失、別而女共者町方之風儀を相似寄、裝束等宜敷品を相用、緣組取結等之節も、在家不相應之衣類・道具相求候段粗相聞候。今般御書立を以御家中諸士行跡儉約、衣類等之儀も尙更改而被仰出候間、御郡方之儀者別而榮耀費之品少しも無之樣相心得可申候。且又御扶持人・十村・新田裁許・山廻共之內にも、至而勝手難澁之者有之、先年ゟ遂御貸米等願候人々多相成候。此度銀札を以結構に御救被成候儀難有仕合に候。後來人々勝手取續、

御用全相勤可申候。自今拝借米等相願候而も、取次難相願候條、兼而人々其心得可有之候。畢竟役人共心得次第、末々風俗迄亡失いたし候之間、嚴密に相愼、勝手取繕所専要に候。是以後不心得之者於有之に者、糺明之上役儀をも取放、可爲曲事者也。

右之趣可得其意候、以上。

子正月

辰巳八左衛門
横地忠太左衛門
國澤太次兵衛
嶋田十郎左衛門
不破源左衛門 在大阪
岡田又兵衛
小西勘右衛門 在大阪
塚本伊右衛門 煩
小谷兵左衛門 煩

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

正月。物價高直なるを以て買占を行ふ町人を處罰す。

〔泰雲公御年譜〕

正　月

一、當春以來段々諸物高直に付、買込申者吟味有之、足輕差遣檢斷之上、追込相成町人多有之。此度町方木綿・わた・大豆等買置候者嚴重吟味、絹・木綿類不殘町會所へ致持參、會所に而添印に而賣買、毎日之賣高相しらべ、帳面仕立會所へ相斷候旨。

二月七日。鷹方御徒高木友右衞門恣にその娘を嫁せしめ且つ行粧を美にしたるを以て閉門を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

御鷹方御徒高木友右衞門儀娘、舊臘多賀内匠家來玉川六郎左衞門せがれに下に而婚姻相整、剩分限を取失不相應之行粧、御當代にも猶更嚴重愼等之儀被仰出、其旨度々頭申渡をも不用、重々不屆至極無十方仕方に候。依之御扶持可被召放候へども、其段御宥免閉門被仰付候條、急度相愼可申旨、二月七日被仰渡候。

右に付友右衞門せがれ定番御歩並高木九郎、且又御歩武山五平太實父右友右衞門に付、兩人共差扣罷在候樣頭等より申渡候上、如何可相心得哉之旨相達候。御用方抔に付閉門被仰付候者之一類、指扣等者無之候へども、今般者譯も違候故段々伺之上被仰出有之。四月四日左之

通申渡。

松原善右衛門ゟ。

定番御歩並　高木九郎

右九郎父御鷹方御徒高木――嚴重愼等之儀被仰出、其旨度々頭申渡をも不用右之族、九郎儀友右衛門与致同居罷在、父子之間柄に候處、其分に致置候段不届之至候。依之九郎儀遠慮被仰付候條、可被申渡候事。

小塚藤左衛門ゟ。

御歩　武山五平太

右五平太實父高木――不相應之行粧不屆之趣に付、友右衛門儀閉門被仰付候。依之五平太儀先指扣罷在候樣被申渡候旨、先頃紙面被指出候。五平太儀友右衛門宅近所に罷在、其上父子之間柄に候處、其分に致置候段未熟成儀に付、各被申渡置候通、指扣可罷在儀与達御聽候條、可有其心得候事。

二月十日。前田吉德の女婓姫名を操姫と改む。

〔政隣記〕

二月十日、婓姫樣御儀、從雅樂頭樣被仰進候趣有之、操姫樣与御名御改也。

雅樂頭は姫路侯酒井忠恭にして其の子忠宜に婚約せんとするに因る

二月十八日。前田重教昇任の口宣江戸に着す。

〔政隣記〕

二月十八日、舊臘廿八日に有之京都御使人神尾伊兵衛、今月六日京發足、今日江戸に歸府。口宣一箱篠原彌助（前月廿一日金澤發足、右御用濟今月廿一日金澤に歸着。）封印、從御所司代酒井讃岐守殿御老中方に之御返札持參、御家老中請取被上之。右御返札者聞番を以西尾隱岐守殿迄被遣之。口宣、御布上下被爲召御頂戴。畢而御直封を以、表御納戸奉行へ御渡之。右御頂戴之御禮、御老中方不殘に御使者被遣之。

二月廿一日。御馬廻組岡田善左衛門去年の非行により閉門を命ぜらる。

　寶暦五年十月十九日の條參照

〔泰雲公御年譜〕

一、二月廿一日、去冬野々市村に而十月十九日百姓切殺候御馬廻千石岡田善左衛門儀、其節之仕形不宜遠慮仕相達候所、今日相改閉門被仰付。

二月廿三日。紀伊侯德川宗將、前田重教を訪ふ。

〔政隣記〕

二月廿三日紀伊宰相樣・常陸助樣初而御同道に而、御年賀且舊臘御轉任御歡、常陸助樣御目見

爲御祝儀御出之御返禮旁御出。御式臺敷付迄御出迎、御小書院江御誘引。御太刀御持參披露有之。御熨斗三方御持參、鰭御吸物出、御持參御前江も上之、御盃事被遊候。久世忠右衞門殿御見廻懸り之趣に而御出御取持也。御太刀披露御家老役、并御馬代御表小將持出之、御熨斗引役御表小將。是三人とも長袴、其外何も熨斗目・半袴着用。右相濟無程御歸、敷付迄御前御送。但御歸之節大御門内に而御乘輿之儀、御供頭江迄聞番挨拶仕候事。

三月二十日。先に諸士の藏宿より飯米を引出すものに令したる制限を撤す。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月廿日當春以來藏宿中へ申渡有之、飯米取に遣候節、二・三石以上は町會所より差紙面無之而は相渡不申所、今日より無構可相渡旨。夫に付米相場百三十目位、宮腰にて相對に而は百七十目位也。

三月廿七日。米價大に騰貴す。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月二十七日、地米相場二百三十五匁位、前代未聞之事に候。當年御登米七萬石に相極

端本のまゝ

有之、御雇舟端に着岸之所、御國廻り米拂底に付飢民之様子相聞申に付、右之内二萬石御減少に而五萬石被爲登候旨。當二月六日南部様ゟ早飛脚被遣候割場足輕罷歸、道中様子書之内奥州邊甚米拂底、茶屋等一切賣物無之、南部様御城下邊、並松之皮をむき取粉にいたし、團子に仕給申旨。尤餓死人多、塚三ヶ所許、一ヶ所に百人許充埋置候由。或は御助小屋出來、飢人に粥を一日に兩度充被下候由。誠に困窮至極に有之由。御當國も札遣等に而不融通故、諸物高價未曾有之事に候。

四月十二日。金澤にて暴民等、商人釣部屋仁兵衛等の家を破壞す。

〔泰雲公御年譜〕

庚申塚は卯辰山に在り

一、四月十二日夜中御城下騷動、最初徒黨之者相集候は庚申塚之由。森下町茶屋三郎兵衛へ押寄候は五半時。宵より迷子を尋候様、市松と申名を呼あるき申儀、金澤中に候哉誰彼承申候。右茶屋へ取掛頃は、漸人數五・六十人に相見え候よし。半潰に仕候而、夫より人數手分、枯木橋爪淺野屋知左衛門崩候節、淺野川橋之上へ町同心曾田治左衛門・矢部權太夫罷越候所、治左衛門と見請候而打殺候へと呼り、提灯蹈くだき、屋根石を擲打候に付、匍々迯退候由。茶屋三右衛門へ押寄候時、人數之内一人、西尾隼人門番へ立寄申入候は、私共儀御門前之町人茶屋三右衛門へ遺恨之趣御座候に付、只今取掛彼家打潰申に付、御門前騷動可仕候。乍然聊

御屋敷へ相障申儀は無之、勿論火之用心固申付置候間、少も御貪着不被下樣奉願候。去共御門前御固のため御人數御指出之分は、いか樣共奉存候。若三右衛門へ御助力之趣に候者、不及是非御人數へ對し不慮之趣も出來可仕候間、何分御構被下間敷旨申斷、打潰候由。夫より木屋藤太郎方へ罷越打崩仕廻、角屋彌三右衛門方へ取掛こぼち申時分、町奉行青地彌四郎罷出候由。津田宇右衛門は御用番に付、直に町會所へ罷出候旨。御横目は吉田茂兵衛・堀三郎左衛門罷出候由。右徒黨之者共出立、常躰往來之者之通、雪踏草履の如くからみ付、いづれも帽子被り、目計出し、相言葉揃うたか揃うたと申由。人數引揚には拍子木を打、一度押込候儀は不仕、五・六人先へ入、相圖之鑼を打候得ば、見物の躰にて罷在候者ども、一度に噇と押込、蔀を打破、都而道具外へ擲出し微塵に仕、又見物之内へ入交申候。右騷動之前表に候哉、十三夜之月の側至てちかく星有之、光耀殊に甚、見馴不申星にてよからぬ事之由。右徒黨者之内、十二日晝袋町笹屋と云酒店へ參、銀札百目に而酒二斗買上預置、追付取に差越可申旨申置、夜中角屋へ押込候節酒請取に向申所、夜中難相渡旨申所、彌難渡候は、打潰可申由に付、然ば相渡すべく、併角屋方迄爲持越候へと申、夫迄持付候得ば、何茂立寄杓に而呑盡し、角屋へ取掛り申よし。

〔郡方舊記〕

一、寶暦六年四月十二日夜、金澤森下町釣部屋仁兵衛、同與兵衛、茶屋三郎兵衛、尾張町淺野屋知右衛門、新町茶屋三右衛門、堤町すゝみ屋彌三右衛門、袋町木屋藤太郎、右七人之宅へ何者に候哉大勢押込、戸・障子家内に有之諸道具・衣類・帳面等、不殘悉打碎、前代未聞之騷動に御座候。少之物茂盗取申儀は無之よしに候事。

〔螢廼光〕

寶暦六丙子四月十二日夜、何者共不知大勢金澤御城下に集り、角屋彌三右衛門・茶屋三左衛門等町役人の家七軒打潰し及騷動、町奉行・町同心等出て取しづむれども、中々大勢の事にて一人も捕へ得ず退散す。右に付町奉行津田宇右衛門・青地彌四郎指扣へ、二十七人閉門。右は銀札遣候にて萬事不通用に相成る內、角屋三右衛門米三十五萬石貯置、諸人難儀仕させ候由に依て也。

〔政隣記〕

寶暦六年四月十三日夜、下堤町角屋彌三右衛門、袋町木屋藤助、尾張町淺野屋澤右衛門、新町茶屋三右衛門、森下町茶屋三郎兵衛、同町釣部屋仁兵衛宅江、惡黨人亂入、家毀ち、器財等に至迄悉打毀候、後引取候。町奉行津田宇右衛門・青地彌四郎、幷町同心等罷出候得共手に合不申、宇右衛門・彌四郎等を乘馬より引下しに懸り、其外にも手向、中々難取締族与云々。

十三日は十二日なるべし

木屋藤助淺野屋澤右衛門の名前文と異なり

依之翌十四日より、宇右衛門・彌四郎先自分に指扣候に付、當分先左之通被仰渡。

御馬廻頭、前役町奉行也

當分町方支配　附五月四日より御用無之。　篠原六郎左衛門

戸田與一郎

一、翌十四日より角屋彌三右衛門等六人禁牢。

一、同月廿九日左之通被仰付。

役儀被指除閉門　附、代五月四日遠田三郎太夫・和田權五郎　津田宇右衛門

青地彌四郎

御馬廻頭

遠慮、同年役儀被指除閉門　前田源五左衛門

町同心

閉門役儀被指除　曾田治左衛門

矢部權太夫

指扣役儀被指除　出口與三太夫

一、四月十二日騷動已後十日毎に、町割を以家一軒に付幾人口にても米三升充相渡。如斯に候得共、米高直地米二百四十目位也。

四月十六日。前田土佐守銀札遣の非違に關して前田重教に意見を上る。

〔前田直躬內密手記〕

去十二日夜大勢相集、町家六軒打損及騷動候趣、從年寄中等言上仕樣子故、委細不申上候。此度之騷動之儀は大切至極之御儀、御外聞御實儀御笑止千萬奉存候。右騷動末々存込之趣相考候處、去年御領國銀札遣被仰付候より事起り申躰に御座候。銀札遣仕法之儀も、他國に相捌候趣与者違申樣にも相見申候。就夫前田源五左衞門儀、元來發端仕候樣に承及申候。此者取捌依怙贔負も有之、一統此者之仕方心服不仕候。加樣之儀年寄中とくと僉議も不仕哉、此度之騷動町奉行取捌不宜而已之僉議に而、本立之處ゟ不行屆樣にも相聞申候。少々私式存寄も內々申通候得共、源五左衞門手前において、此度之僉議かゝり候筋無之由御座候。此所如何可有之候哉、重而源五左衞門手前へ對し騷動がましき儀有之候而、猶更不可然儀奉存候。唯今之內御役儀被召放急度御下知も有之候はゞ、一統心服可仕樣に奉存候。年寄中指越候而加樣之儀申上候儀、別而迷惑に奉存候へ共、先達而被仰出候筋も有之候故、存寄之通奉達御內聽候、以上。

四月十六日　　　　前田土佐守

去十二日其許騒鋪儀に付、委細紙面之趣令承知候。前田源五左衛門儀、心付之通手前存寄茂同意に付、爰許家老共存寄も相尋候處、是又金澤年寄共同事に候得ども、源五左衛門は遠慮申付候様申渡候。札遣之儀他國とは仕法違候様に被存候旨、諸事指つかへ諸民及難儀候段氣毒之事に候。此上も仕方可有之候哉、是のみに不限心付被申候趣可被示聞候。騒敷事出來令辛勞候。今度は不幸之旨令承知、心中察入候。朦中無滞一段之事に候。

四月二十四日　　　　中　將

前田土佐守殿

是日徳川家重家治同參なり

四月十七日。前田重教、徳川家重に陪從して紅葉山の廟を拜す。

〔政隣記〕

四月十七日、紅葉山就御豫參に、六つ七歩比御直垂に而御出、初而御豫參御首尾能御勤。還御以後御唐戸之御縁に而御拜被遊、四半時過御歸殿。

御唐戸之内に而御拜之筈に而候處、御成前前田信濃守殿等御内見、外御豫參之御方に御立合、御縁に而御拜被遊候筈に相成、則其通に被遊。

四月廿七日。贋札を行ひたる町人紺屋九郎兵衛等斬に處せらる。

〔御年表〕

一、四月二十七日、去暮以來銀札贋札仕候町人御坊町紺屋九郎兵衞、越中津幡江村十村跡源五、寺西彈正家來山田某、（家老の子、故有是より先病氣に而假圍に入置候者　山田織部玄孫の子なり。）此三人、同類共八人、於公事場斬罪に相成。此外贋札仕者二人下獄居候得共、未落着不仕、此度相延申候。

四月廿八日。徳川家重、前田重教に放鷹によりて獲たる鶴を贈る。

〔政隣記〕

四月廿八日、御拳之鶴三、上使御使番池田霞五郎殿を以御拜領。上使御鳥に御指添御越、如前々敷附迄御出迎（御僉議之上御熨斗目被爲召。）御大書院に御誘引。御鳥は御使番有澤才右衞門請取之。（受取候節上使手を被添。）上意御拜聽、御鳥棹共御請取御頂戴（之節も上使御手を被添。）、重而才右衞門に御渡。上使に御挨拶之上被爲入、御跡より御鳥御勝手に引、御熨斗三方出之。御料理御斷に付御菓子出、御引菜御盃事被遊。畢而御請被仰述、最前之所迄御送。追付爲御禮兩御丸に御登城、御老中方御廻勤。且御出前、思召懸も無之御拳之鳥御拜領、難有思召候段、富永數馬を以御家老中へ被仰出。

其後右御鳥拜見被仰付、且御披之儀も前田兵庫を以被仰出。

右御普爲聽、預玄院樣に以御近習頭被仰進、淨珠院樣·實成院樣に者御直に被爲入。

五月二日、右御鳥御披、御一門樣初五十八輩（十九輩は御斷）被仰遣、御盃事之内小謠始り、夫より弓八

幡・東北・祝言御拍子被仰付。一統五半時揃、御家老ゟ者御料理、奥表頭以上ゟ者御鳥之吸物・御酒被下之、預玄院様等へ御鳥御取分被進之。其外御作法共如前々。

四月廿九日。諸士の飯米に餘分あるものは御召米として提出すべきことを令す。

〔秦雲公御年譜〕

一、四月二十九日御米彌拂底に付、御家中飯米餘計有之候者、御召米に可指上段、御用番安房守殿より一統觸有之。同日前田源五左衛門御差添、跡役御算用場奉行兼帶九里治兵衛被仰渡。

四月。濫に異物を食ふべからざることを令す。

〔郡方古例集〕

信州丹波嶋邊飢饉に付、松之皮を食物に致候所、制法不宜、五六十人茂死果、其段領主ゟ達、其後者制法吟味候而用ひ申由。越後名立邊に而者藤之實を給申由。御領國之内も、所により右躰之者自然用ひ可申哉、認方不宜不慮之儀に遂死候者有之候而者、不便之儀に被思召候。右所々ゟ足輕共指遣認様茂承合、委細爲習申傳候様可致候。此段各ゟ可申達旨被仰出候事。

右御改作御奉行所より御書立出申に付寫仕進申候。先々御達可被成候、以上。

四月

磯松三郎左衞門

志村五郎左衞門

辻　織　人

野村源兵衞

五月四日。諸郡不作の狀を視察する爲使番を派遣すべきことを令す。

〔袖裏雜記〕

御親翰を以被仰出有之、左之通申渡。

御領國不作等に而及難澁候躰に付、御郡方別而無御心許被思召候。依之各儀加・越・能諸郡相廻、見分之樣子直に達御聽候樣に可申渡候。委細之儀者、御直に被仰渡候由被仰出候。御步横目一人宛可被指添候。足輕も召連可被申候。員數之儀者遂僉議可被申聞候事。

五　月　四　日

御横目へ

御領國不作等に而及難澁候躰に付、別而無御心許被思召候。依之御使番磯松三郎左衞門・志

村五郎左衛門・辻織人・野村源兵衛儀、加・越・能諸郡相廻、見分之様子達御聽候様に被仰出申渡候。且又御徒横目一人充可被指添旨被仰出候條、人柄相撰被申渡、交名可被書出候事。

五月四日

右に付加州は三郎左衛門、越中は五郎左衛門・源兵衛、能州者織人相廻候趣に示談、明五日發足可仕由。足輕は兩人充召連、内一人は押足輕、一人者物書足輕御横目兼帶仕候様仕度旨。且今般相廻候は所々奉行等手前に拘り候儀且而無之、御郡中様子遂見分申分故、和順に申談候趣に候。將又平日旅人往來無之道にても、往來仕儀も可有之候間、右之趣夫々申渡候様三郎左衛門等申聞候故、其段夫々申渡。

五月九日。昨今兩日前田綱紀の三十三回忌法會を天德院に執行す。

〔泰雲公御年譜〕

一、五月八日・九日松雲院様御三十三回御忌、於天德院御法會御執行。三日遠慮。御法事奉行安房守殿。諸士拜禮等如例。八日朝於玉泉寺前に而御施行兩日也。例年男女共に一升充に候所、今年五合充に相成候。御米高も減候也。

三日遠慮は御法事前一日を加ふなり

五月十三日。新に銀鈔奉行を命じ銀札の朱印押捺を掌らしむ。

〔泰雲公御年譜〕

一、五月十三日銀鈔奉行被仰付。銀札之表朱印を押候役人之由。去年以來主附之頭中押候所、今般相改申旨。今井左太夫・菊田三郎太夫・松平多門・永井平左衛門。

五月十七日。生計困難にして飢餓に瀕する者に貸米を給することを定む。

〔泰雲公御年譜〕

一、五月十五日、此間米段々高直、今日に到り三百目に相成候。

一、五月十七日町中至而及難澁候者、女に一合男に二合充一日之圖りに而、今日より御貸米相渡り申旨。但是は飢にも可及者迄。又夫程に無之者へは、銀札御貸渡にて御拂米相調候筈之旨。右之御扶米、今月より七月迄、一ヶ月に一度充御貸渡之筈に候。

一、五月廿九日今日地米直段三百五十目。但賣米也。

五月廿四日。前田土佐守銀札を廢止せんことを稟請す。

〔前田直躬內密手記〕

銀札遣之儀、彼是差つかへ申候趣有之候故、盆後可被差止趣。依之右致方之趣、御算用場奉行段々及僉議、年寄中に度々相達候へども、慕々敷僉議無之、第一當月御用番九郎左衛門儀、右相止候儀甚不同心に御座候。指續候而大膳・主水・式部儀同事に申聞候。安房守・駿河守儀は最初より差止可然旨申候由に候へども、右四人之面々不同心に付、僉議決定之處難相濟候。

畢竟九郎左衛門等四人其儘札遣候心得に御座候得共、致方了簡も無之儀を彼是与申立候由。此儀頃日九里治兵衛儀、私宅ゟ罷越密々申聞、何とぞ相止候趣に一決仕候様仕度候間、何とぞ助言も申入候様に申聞候。安房守儀も此間私宅ゟ罷越候而、安房守等如何様に申聞候而も承知不仕、何とも氣毒千萬成儀に候由申聞候。相考候處、年寄中和順之躰無之、第一九郎左衛門・大膳儀我意を立申様にも相聞申候。私儀彼是御用筋之儀差出可申子細甚以無御座候。乍然銀札一件之儀、先頃騷動以來兎角彼是難治躰、末々迄銀札相止候様仕なし候族に御座候。とても此儘被差置候而は、畢竟可被仰付様も無之程之筋に罷成可申候。左候得者此度之儀者御大切至極、不被差止候はで者難成御時節に御座候。依而内々を以御用番方へ申遣候は、此度銀札遣之儀に付段々僉議も有之躰承及候。大切至極之儀、不苦候はゞ、御算用場奉行罷出候節決談之趣等承置度儀に候。此度之儀は各別之儀に付、乍指出申遣候旨申遣候處、今日罷出候様申越候故、越後屋敷ゟ出席仕候處、於御隠密所、年寄中・御家老中幷私列座仕、御算用場奉行三人共罷出候て、紙面等も差出、段々口上にて申聞候。御算用場奉行者尤被相止候趣手段に申聞候。九郎左衛門初、其筋有之儀にても無之躰故、段々其趣申聞候へば、一統相止可然趣に決談仕候。安房守・駿河守儀は、最初より御算用場奉行同事之存寄、私儀も尤右之通外無之段申入候。豐後守・大膳・主水・藏人・市正・式部手前、一人充外了簡も無之哉之趣、再往駿

河守申聞候得者、一人充存寄無之趣申達、其上私共相應及挨拶決談仕候。御算用場奉行より差出候紙面に寫取不申候。年寄中より差上申に而可有御座と奉存候。

一、御算用場奉行紙面之內、去年借銀等之方ゟ、百石十五石充除知仕候外、二百五十石以上之者、百石に十五石充免三年御借可被成趣有之候。此儀私申聞候は、三年御借可被成處、七年に仕置、御算用場奉行手前にては三年之心當に仕置、萬々一不作彼是等に而、自然三年にて御手ゟ合兼候はゞ、四年御借、五年目には必被返下候樣有之可然哉と申聞候へば、安房守・駿河守・九郎左衞門・式部・御算用場奉行、一段可然与申候。藏人は如何存寄候哉、七年にては相成申間敷候。五年可然と申候。畢竟五年目には可被返下儀淵底之儀に御座候へば、七年与有之、五年目に被返下候はゞ、一統難有可奉存儀与心附申候。右之趣年寄中よりも申上にて可有御座哉。大膳・主水・市正は是非之儀不申聞候。此儀は猶更前田兵庫等へも御僉議被仰付候而、御治定被仰出候樣仕度儀御座候。

一、御算用場奉行申聞候は、札被相止候はゞ、侍中之內難澁之者も可有之候哉。其上午少々免をも御借被成候儀に候間、彼是申立候儀も可有之哉と申聞候。札相止候儀、御馬廻頭・御小將頭之內にも、前後無考此儘被差置可然与申者も有之候。左候得者、不承知之頭は組中へも其風俗相移申儀に候。此度之儀は大切至極之儀、組中何歟申立不仕候樣に、相止候節組頭中

ハ御親翰を以被仰出候はゞ、尤異變も有之間敷樣に奉存候。私共組之儀は、頭々心得も可有之候得共、是以猶更其心得仕候樣被仰出候はゞ、可御宜哉与奉存候。先達而被仰出之趣も御座候故、今日出席仕候趣等奉達御内聽候、以上。

五月二十四日　　前田土佐守判

六月四日。前田重教銀札通用を停止せしむべきことを告ぐ。

〔前田直躬内密手記〕

銀札遣之儀差つかへ、可指止と算用場奉行遂僉議、年寄共へ度々相達候得共、前月用番九郎左衞門儀指止候儀甚不同心、指續大膳・主水・式部も同事に候。安房守・駿河守儀は最初より指止可然と申候得共、右四人不同心にて不致決談に付、九里治兵衞密々申達候趣も有之、安房守儀も其方宅へ參出、如何樣に申達候ても承知無之段申入、札遣其分指置候ては難治趣と被存候。大切至極之筋に付、内々を以用番へ被申達、越後屋敷へ被出、算用場奉行相招各僉議、御手前にも挨拶も有之、指止候儀に決談いたし候旨、委細紙面之趣令承知候。種銀つかへにも可然僉議も無之躰。然者見合候て益も無之事に候。右僉議之節、大膳・主水・市正は是非之儀も不申候間、畢竟元にて前田兵庫等へも爲致僉議、治定之儀申渡候樣有之度よし被申越候。則此度札遣止候樣に申遣候。

一、右之趣に付、家中知行免借置不申候者而は難成員數僉議、年限も三年と申渡可然やと申事に候得共、先七年と申渡置、夫より引詰止候方は可宜と被申達、共通極候旨是又令承知候。
一、銀札指止免借置候に付、頭ども之內にも彼是と申立候儀も可有之やと、算用場奉行申候趣も有之候。頭々申含樣にて、心服之譯も達申事に候間、直書にて申遣候も可宜哉之旨被申越候。先年寄共より頭々へ內談いたし候樣子承候上、印書などにて可申遣歟と存罷在候。右年寄共內證申聞候儀は、神保縫殿右衛門內談も致候筈に候。幸其方より心付之事に候間、とくと被相考可被申含候。縫殿右衛門より年寄共へ達候節も、可然可被致挨拶候。無味に申渡候筋とは不存候。
一、札止候に付種々仕形も有之、僉議又々決兼可申やと存候間、此度之一卷は被致出座候て挨拶有之可然候。則年寄共へも其段申談有之樣に申遣候。
一、別紙を以年寄共席之樣子被考候處、最前之振とは相違、就中九郎左衛門儀我意を以取捌申躰。安房守・駿河守は先輩之儀にも候得共、承引無之不和順之躰、氣毒被存候。大膳・主水儀は諸事を九郎左衛門申旨に任候樣相見え申候等之儀、安房守・駿河守儀は古風を守心元なき儀無之由被申聞趣共承知。兼而三人之樣子も承罷有、氣毒千萬存事に候。
一、倘算用場奉行夫々しらべ候處、勝手向之儀前田源五左衛門取畴之趣、十方なき致方に相

聞申に付、心付被申越候趣令承知候。相考追而可及沙汰候。年寄共席、松雲院殿時分横目相詰候事被申聞通、是又令承知候。時節を考申付に而も可有之候。今度之趣、御手前事に候得ば無辛労可被存候。此上札止候節、四民之難儀薄き樣申付度事に候。其心得可有之候、以上。

六月四日　　中將

前田土佐守殿

〔袖裏雜記〕

銀鈔遣被指止候旨、六月四日以御親翰被仰出有之。右銀鈔被止僉議品重き故、土佐守も出座申談示談有之趣、右御親翰之内に見。且又被止に付彼是御僉議も有之に付、組も御預置之儀旁、土佐守儀出座可然旨、右御親翰に被仰出、其趣土佐守ゑ申談。

六月八日。是日以後石川郡の飢民等金澤の城下に徘徊す。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月八日、野町一丁目邊へ、堂・後谷之百姓共男女百人餘飢餓罷越臥居申候旨、米賣場所へ相達。九日は新竪町、十日には木倉町に而賣捌候に付、男女夥敷込合、中々女子童部は買付不申、達者成者は二・三升充買請、不達者成は一合も難相調、却而怪我人も有之由。

一、同十一日、此一兩日米直段、相對を以六百目程にも買候由。今日も小立野筋は湯涌谷奥より罷出候飢民二三百人計、白山之奥谷邊よりも久保橋邊へ罷出、食物乞に致徘徊候に付、割場より足輕金澤迄不罷出樣縮方有之由。

一、同十二日、御算用場奉行不破・九里より達而相願申趣有之、山方へ御貸米之儀埒明候に付、末々十村共へ爲申渡候而、飢民共居所へ引取候由。頃日御年寄中二の御丸へ毎日出席、退出及黄昏候。改作奉行小谷兵左衞門昨十一日大坂へ出足、但御土藏より古金六萬兩御渡持參、於大坂引替、江戸御仕送其外御用金相成候。

一、同廿日、昨今米直段八百五十目に相成候。

一、同廿二日、此間批米一圓相渡不申、店仕廻有之所、今日少々充相渡候。但六十五軒之米屋へ毎日一石充相渡、初日一石之立直段五百目に相究、毎日十匁充石に付相減、必竟三十日に三百目相減、詰直段二百目に相極可申旨申渡之。

六月八日。前田重教領民の飢餓を救ふの法を講ぜしむ。

〔日 曆〕

金澤城下并領分者共次第及困窮、賣買運送迄差間候に付、家職指留令餓死族有之旨、其所々支配方前後之辨不宜、急用差出候人々詮議に日を送り、自油斷之樣に相聞候條、急緩之品相

考一統加不便、已後飢餓不申様急度支配可仕候。右之趣夫々請合不申内は、調膳に糶粃迄申付候。要脚其外差閊に成申趣に候はゞ、前代に不厭差留可申事。

不厭本の儘

六月八日夜

右午之刻被仰出、小堀牛右衛門承る。

六月廿二日。大聖寺侯前田利道參覲の途金澤に宿す。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月廿二日、備後守様江戸表へ御出府に付、夜中五つ半時金澤御着被遊、金屋九兵衛方御止宿。

一、同廿三日四つ時頃備後守様御發駕。夫以前兩御寺へ御參詣有之。

兩御寺は寶圓寺及び天德院

六月廿六日。頭役等、諸士の知行米一部を藩に献納せんことを決す。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月二十六日、二之御丸へ頭分以上登城、今般御勝手御難澁に付、年寄中御了簡を以、御家中百石已上之侍、割合を以人々知行米之内差上可然旨、僉議相究候旨。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月二十八日、今般御家中上ヶ米之儀に付頭中より被相渡紙面之寫。

御家中之人々勝手甚及困窮候に付、銀鈔遣被仰付御救被成候者可宜与遂僉議、相伺候所、御領國には自往古無之儀に付乍御心外、御願之上去年一統御救被仰付候。然處僉議行屆不申、種銀引替等差支、諸民及難儀、殊御勝手向甚御費に相成候。累年御勝手御難澁、地・他國之御借銀莫大之儀、最早可被成樣も無之、大切至極之場に至候。右之趣御家中之面々承知仕候而は、當惑御氣之毒に可奉存候事に候。如此之趣に付、責而御償之爲、年寄中等申談、知行米之内百石に付草高十石充、七ヶ年之間差上候趣致一決候。然者右之趣各にも被致承知、組・支配之人々へも、右割之通知行米之内指上可然旨遂僉議候。割之趣は別紙之通に候。尤此度指上候知行米には、最前より之除知之外に候。猶口達申述候事。

丙子六月

知行米之内指上候割合之事

一、五百石以上百石に付草高十石充。

但十石充より多指上度人々も有之候者、勝手次第之事。

一、四百九十石より二百石迄草高七石充。

但右同斷。

一、百石以下は不及差上候事。

但差上度存寄之者有之候者、尤差上可申事。

右之通相廻申候。

六月。紀伊侯徳川宗將の贈りたる合力米加賀藩に着す。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月二十四日、御領國飢饉に付、紀州様より御合力米二千石相廻り候由。其米何も申米にて候哉、御國にての籾米より少々色黒赤く、間に白きも交り有之、見付不宜候。

六月。鳳至郡宇出津の百姓等十村源五の家を破壊す。

〔郡方舊記〕

一、寶暦六年六月、十村宇出津源五組之百姓中致一味、源五へ對意趣有之体にて、源五宅へ大勢押込、家財諸道具等打こぼち、依之御郡奉行不破次郎太夫殿、御改作奉行不破源左衛門殿、并他郡御扶持人十村野々市村少左衛門・大白石村又太郎・荻谷村七左衛門、宇出津村へ御出御吟味有之、頭取四人公事場禁牢、源五儀追込に被仰付。同八年源五儀十村役御取放、御高・家財共被下候。右四人之頭取共牢死、御高等御取上、妻子追出に被仰付候事。

七月五日。堂形米藏に於て足輕等に拂米を行ふ。

〔泰雲公御年譜〕
一、七月五日於堂形、足輕中諸組一統、其外家中長屋借之妻子持等へ御拂米相渡候由。但足輕一人前米一斗充。米問屋其外批賣へも段々相渡り、夫故米直段引下候所、三百四・五十目に相成候旨。
一、同七日新米直段地米二百七十目、氷見百九十目、城端百八十五匁、高岡百八十目、子浦百七十五匁位也。

七月十九日。家中諸士の知行米を割きて献納したるを賞す。

〔泰雲公御年譜〕
一、今度御家中より御知行米之内指上候に付御觸之趣。
御勝手御難澁に付而、拙者共初御家中之面々申談、知行米之内差上候趣達御聽候所、當時人々勝手も不如意之節、誠志之到御感悦被思召候旨、段々御意之趣、御使者神保縫殿右衛門申述、委細拙者共迄御書を以被仰下候。御書被致拜戴、組・支配之人々へも可被申聞候事。
丙子七月十九日　　御用番　横山大膳

七月二十日。諸士等知行米を割きて献納したるを以て特に儉約の勵行を命ず。

〔典制彙纂〕

一、御家中之人々儉約之儀、兼而被仰渡置候通に候。然上今般一統知行米之内指上申事に候得者、猶更專儉約無之候ては難叶事に候。就夫武備之外萬端不具之儀、少茂無泥事に候條、金澤御城下に而往來之節、年寄中を初、供廻行粧牽馬等、成限省略尤に候。小身之人々は不及申、彌諸事其心得有之勝手取續勤仕之儀專要に候條、此段嚴重可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之面々江可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配江も不相洩候樣可被申聞候。尤同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月廿日　　横山大膳

七月廿五日。銀札の通用を廢止す。

〔泰雲公御年譜〕

家中之人々勝手甚及困窮候所、近年打續不時入用等に而難取救、依之領國には無之儀に候得共、銀鈔遣可然旨に付、乍心外公邊江相願、去年以來通用申付候。然處通用指閊、自今可相續躰無之候間、僉議之趣達聽候。依之銀鈔遣之儀差止候。且又此度知行米をも借置、旁家中之人々可及難儀候得共、如何樣にも勝手取續可勤儀肝要に候。右之趣一統可被申聞候者也。

親書日附は江戸にての發令に係る

丙子七月十日　　　御印

〔泰雲公御年譜〕

御家中之諸士勝手及困窮、勤仕にも障可申躰に付、御救可被仰付候所、近年打續不時御物入に而、御救難被成候に付、御代々御例は無御座候得共、御領國中銀鈔遣被仰付候者、御家中町・在共勝手に諸商賣通用にも可宜旨遂僉議、其段達御聽、公邊へ御願之上、去年以來札遣被仰付候所、通用不宜、却而四民共に及難儀候段達御聽候所、左候者可被差止旨被仰出候に付、今日相觸候事。

一、右被差止候に付、正銀無之、御家中之人々難澁可仕候間、取續候樣等救被成候儀候條、幾重にも僉議可仕旨被仰出候に付、何卒御救之道相立候樣致度、種々遂熟談候得共、御要脚必至与御差支に付、思召に相叶不申候得共、一向に手段無之致當惑候。依之收納米之内少々御召米可被仰付候。御切米等之人々も、當十一月御切米等之内、少々御召米に可被仰付候。委細之儀は追而可申渡候事。

但、收納米御召米之儀は、追而本納之内を以差上可申候。代銀中勘を以此度少々相渡申筈に候。御切米等被下候人々も、同事に可相渡候。御給銀被下候者へは、當暮御給銀之内を以少々相渡可申候事。

一、來年ハ懸、御借銀可被成旨被仰渡置候。百石七百五十目充。銀札之儀ハ、今般御差止之事故、御貸渡不被成候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之人々ハ、其支配江も不相洩候樣可被申聞候事。

丙子七月二十五日　　横山大膳

右之通銀札通用相止候に付、二十五日朝之内騷動不斜候。晝九時札相止候儀町方觸有之候。町中家之蔀を下し、一向商事指止罷有候。

〔袖裏雜記〕

左之通七月廿五日申渡有之。

去年以來御領國中銀鈔遣被仰付候處、以之外指つかへ候故可被指止旨被仰出候付、今日より指止候事。

一、右被指止候付而者、町方・御郡方等之者札所持之高に應、不殘正銀を以一時に引替可被渡下儀候へども、御勝手御難澁至極に而、何共可被成樣も無之候付、不被及其儀候。依之町在等江、米五百石銀子二千貫目を以、十ヶ一之圖御渡可被成候。割方之儀者追而可申渡候。相殘候銀札之分ハ、來年より除知之內を以相渡可申候。如此にては一統及難儀可申儀、不便

成事に被思召候へども、其所者此度之儀候間了簡可仕候事。
一、御家中之人々所持之銀札之儀者、書上候上可及差圖候事。
一、右之趣候間、札所持之人々者其支配々々に取集、帳面に記、來月五日切銀札方主付迄指出可申事。但、札指出候節一封に相認、銀高等幷人々名印爲記取立可申候。且又陪臣等所持之札者、其主人々々に取集指出可申候。
右之趣被得其意、組・支配之面々に可被申渡候事。組之内裁許有之人者、其支配にも不相洩樣可被申聞候事。
右之趣可被得其意候、以上。
七月廿五日　横山大膳

〔泰雲公御年譜〕
銀鈔通用今二十五日より相止候段、別紙之通に候。就夫急々相止候而には、末々之者及難儀候事も可有之候間、五匁以下之小札之分は、唯今之通一統暫可爲通用候。十匁以上之札引替相渡候迄、五匁以下之札取立可相渡候事。
一、右小札通用は輕き人々當分取續之爲の儀に候間、借銀・貫掛銀・質物之差引決而相成不申候事。

七月廿五日

〔泰雲公御年譜〕

一、銀札相止候沙汰、當盆前より有之に付、會所銀・聖堂銀借用之人々、銀札を以返上いたし、偖又廿四日に惣様御借銀不殘返上、除知取返候人々も多有之。廿四日には地米一石一貫二・三百目、廿五日晝前迄は二貫目迄仕候由。

〔袖裏雜記〕

去年以來銀札出來、今年五月迄に夫々渡方等之高、御算用場奉行紙面之内〆高左之通見ゆ。

札高六萬五千三百貫目計。

〔續漸得雜記〕

一、寶暦六丙子年七月飢饉、米穀高價曁諸品拂底、銀札遣不自由に付、無錢行といふ狂詩有之、何者之作に候哉面白書記置。

無錢行

時維寶暦第六天。銀札充國更無錢。鳥目倦飛藏土窖。方兄晦蹈遁貨泉。十文御引換想艸。

一升喰溜作小箋。侍林困窮書上直。質屋迷惑無利還。奥様内衣不嫌臭。檀那鼻褌奈耻玄。

差引通利稀昨日。博奕參會多去年。町懲撿斷目浮淚。吏嗜苞苴口流涎。商與家孃啜雜水。

彌三は金澤商人四月十二日條に出づ
源五は前田氏十一月四日の條に出づ

士抱看坊鬻青田。諸人難儀彌三企。贋鈔騷動源五慾。皆云如坐熱火上。誰識忽溺借錢淵。
日々混亂是何事。世間衰微在眼前。

〔續漸得雜記〕

一、御郡方去年過分御貸米出たれ共衰微いたし候に付、當春又候夫食として二萬四千百石御貸附、町中へは御救米として小賣場立、御郡にも小賣米四百石能美郡、六百石石川郡・松任とも、三百石河北郡へ御出し、猶も米不足に付粟ヶ崎木屋藤右衞門被仰渡、大坂においで才覺いたし、他國米買求被仰付により、越後米・佐渡米・播州姫路米・四國土佐米等交、餅・太唐米の類迄四月下旬より宮腰浦へ廻り候。只澤山に成は銀札に而、米穀を初め錢等一切調物拂底也。五月末に至り、御使番幷御徒横目指添御廻し也。加州へは磯松三郎左衞門、越中へは野村源兵衞・志村五郎左衞門、能州は辻織人、何も五月五日に金澤發足也。六月四日より五分札出る。此節御郡方在々より夥敷御城下へ出候而、無理乞いたし候に付、町端に役人晝夜相詰。依之銀札遣御指留之儀、七月廿五日早朝に御觸出る。引替銀は當時十分一御渡、殘り之分は翌年除知之内を以可被渡旨也。十分一の圖り米五萬石銀二千貫目を以、十分一の圖り御渡可被成趣也。此年十月越中・能州・加州とも見立、御領國至而困窮、別而御城下幷石川郡・河北郡困窮至極、飢死人等夥敷事也。

七月廿七日。銀札遣を廢したるを以て諸士に續銀を給すべきことを告ぐ。

〔泰雲公御年譜〕

一、今般札遣相止申に付、當分續銀として御渡觸之寫。

今般銀鈔遣相止候に付、御家中之人々當分爲勝手續、當十月收納幷當暮御下行米代之內、爲中勘別紙割符方之通、來月三日可相渡候條、組切帳面調樣には、御召米裁許與力へ可被承合候事。

一、御役料知も知行高に結び可申事。

一、小者に相渡候分、於當場右日限可相渡候條、別帳に可被相調候事。

一、御扶持方等被下候組外並以上之人々渡高は、當場へ被承合、帳面可被相調候事。

一、右帳面早速不被差出候而は、しらべ方指支候條、當月中夫々可被差出候事。

右之趣可被得其意候、以上。

子七月二十七日　　　御算用場

覺

一、百二十目　　知行高百石當

一、百目　　新番一人當

先達は本年四月十二日

一、八　十　目　　御徒一人當
一、五　十　目　　御居間方坊主一人當
一、四　十　目　　足輕一人當
一、二十五匁　　表坊主一人當
一、二　十　目　　小者一人當
一、十　五　匁　　小者當春御給銀渡り切之分一人當

右割方を以帳面可被差出事。

八月二日。小額銀札の通用廢止を令す。

〔泰雲公御年譜〕

一、八月二日、銀札遣小札之分は、當五日迄輕き者共可致取遣旨、先達而被相觸候所、重而通用之儀可差止旨。

八月八日。先に米商人の家屋を破壞したる者捕縛せらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、八月八日、先達而角屋等家潰し及狼藉候徒黨之内、森下町床髮結與兵衞と申者、友達共へ咄候は、如斯世の中昔之如く相成候は、我等共發端いたし候事之よし物語仕候に付、夫は

如何樣成儀と相尋候に付て、角屋等六軒打潰し申故如斯、我等共働に候段申聞。夫を聞傳被召捕候。其上此者狼藉之節面躰に疵付、湯涌へ入湯致候由。是より同類共も被召捕候由。

八月廿二日。幕府前田吉德の女操姫の姫路侯世嗣酒井忠宜と婚するを許す。

〔政隣記〕

八月廿二日、昨日御老中方御連名之依御奉書、今朝四時前御登城之處、於御白書院御老中方御列座、婓姫樣御緣組御願之通被仰出候旨、御用番松平右近將監殿御演述。（御供之聞番より御用人迄御左右申越上、一統上下着用。）西丸にも御登、御老中方御廻勤。（大岡出雲守殿・若年寄衆へは、聞番御使を以被仰達。）九半時御歸殿、御居間書院に御家老兩人被爲召、御樣子被仰聞、頭共にも申聞候樣御意に付、如例御弘有之。金澤年寄中前田土佐守へ御書被成下候事。

〔泰雲公御年譜〕

一、八月二十九日、江戸表より御飛脚到來。先頃婓姫樣御再嫁之儀、酒井雅樂頭樣御子息阿波守樣へ御願之通被仰出候御弘之由。

婓姫の名を操姫と改めたることは二月十日の條に見ゆ

九月廿五日。犀川・淺野川の水暴溢す。

〔泰雲公御年譜〕

一、九月廿五日犀川・淺野川滿水、川下觀音堂邊土手八分に水溢候。近國共洪水に而、近江湖水邊植出しの分作毛大損之旨。

九月廿七日。前田重教儒臣由美希賢に命じて孝經を講ぜしむ。

〔政隣記〕

九月廿七日夜、由美彌次郎初而御居間に被爲召、孝經之講談御聽聞。

十月十五日。前田土佐守御勝手方主附御用を命ぜらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、十月十五日、前田土佐守殿御勝手方主附御用被仰付。都而御勝手向へ懸り申儀、諸場より御達申筈。

十月十九日。本多安房守名を遠江守と改む。

〔泰雲公御年譜〕

一、十月十九日本多安房守殿、今般酒井雅樂頭樣御嫡子阿波守樣と同稱に付、被相改、遠江守と改稱有之。

此時阿波守忠宜既に卒し大人亦離縁したるを以てなり

〔泰雲公御年譜〕

寶暦十二年八月六日本多遠江守殿通稱安房守に被復。

十月。代官等に命じて收納米の檢査を嚴にせしむ。

〔日　曆〕

近年御領國中所々御藏御詰米計立之節、過分之外減有之候。元來代官中納方不吟味、其上手代共之內心得違有之者、百姓共樣子も有之族故、納方猥に成躰に相聞候。今般僉議之趣も有之、來年より古米計立候節、格別之申立も無之に、過減等候而も不承屆、急度爲償申筈に候條、納手代等手前嚴重に申渡、納方綿密に遂詮議、米乾等も隨分爲入念可申候。米拵等不宜、近年御廻米於大坂表も相難じ、直段抔にも相障申儀有之候由。御益迄にも無之、御爲之所を相考、精誠可遂吟味事。

一、堂形藏米、御下行等渡り方に相成候米減等之樣子も粗承及候。いまだ古米に相成不申內より減米有之躰、元來御藏納不吟味故ヶ樣之趣、近年右之振に相聞候に付、今般僉議之筋も有之候間、以紙面申渡候條、嚴重に可相心得候事。

一、來年早春御領國中御藏所ゟ改役人相廻、一代官切に有米高爲見屆候條、御藏戸前之內御代官二人分或三人分積合相成申候はゞ、右役人相廻候節見屆不指支候樣に、只今より致心得

積入置可申候事。

右之條々可得其意候。代官中之内心得違之者も有之躰承及候。見分役人相廻、相違之趣見咎候においては、急度可相糺候條、兼而可得其意候、以上。

子　十　月

横地右太左衞門
嶋田十郎左衞門
不破源左衞門
笠間清兵衞
小谷兵左衞門
平野安左衞門
小西勘左衞門
塚本猪左衞門　殿
岡田亦兵衞　殿
國澤太次兵衞　殿

加・越・能御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

十一月四日。前田源五左衞門先に銀札發行の際處置を誤りしを以て閉門

を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

十一月四日御用番大膳宅に而、御用番駿河方列座、御横目吉田茂平・堀三郎左衛門指引に而、前田源五左衛門江左之通申渡。寶暦八年七月御免、如御格遠慮被仰付。

前田源五左衛門

去年以來銀札遣之儀に付取捌勤方、都而不應御氣然、致方不宜候故、下々不致心服、彼是及騷動不調法之至に候。依之今度役儀被指除、閉門被仰付候旨被仰出候。

閏十一月朔日。前田治脩越中古國府勝興寺に赴く。

〔泰雲公御年譜〕

一、閏十一月朔日曇。今日尊丸殿越中古國府へ御越。御供揃明六時御發途、土橋御門より御出、御宮坂より會所門通り。御行列御先足輕兩人、矢籠立・御弓・對之御鎗・御具足櫃・御馬・御挾箱・御持鎗・臺笠・立傘・御長刀、御歩新番押九里覺右衛門。御具足櫃等、何茂金御紋也。土橋御門御通之節大御門開候樣、御城代豐後守殿より御入有之。御番所は例之通裏付上下、尤不致下座候。高岡御止宿。翌朝六時同所御發途、四時勝興寺御着。御供之面々、侍は於勝興寺御料理被下之、足輕以下は古國府於御坊、赤飯之上に一汁三菜之料理出、一人鳥目五百銅

充、小者は鳥目二百五十銅充被下之。罷歸候節、古國府より三・四町此方臥木村に致止宿、翌三日金澤へ罷歸候。足輕共御供罷越候儀、御扶持方代先格無之、僉議之上一日一人二匁充御扶持方代被下候。都而御供に而足輕・仲間よなひ銀無之格之由。松雲公御代越中御鷹野之格。又同御代大正持飛驒守樣御煩之節、相公樣御見舞被遊候儀有之に付、是等之格留帳相尋候得共、年久敷儀に付難相知候由。

閏十一月五日。德川家重、前田重教に鶴を贈る。

〔政隣記〕

閏十一月五日、御鷹之鶴、上使御使番堀田内藏助殿を以御拜領。御作法等都而如前々。御披露年三月十五日有之、如跡々。

閏十一月廿四日。領内に於ける收穫減損の額を幕府に申告す。

〔政隣記〕

閏十一月廿四日、御領國御損亡有之に付、今日御用番堀田相模守殿ゐ御屆書被指出、左衞門尉樣ゐも被仰遣。

十三萬二千三十石餘。

閏十一月廿九日。七日市侯前田利尙家督を相續し本郷邸を訪ふ。

〔政隣記〕

閏十一月廿九日、前田大和守殿前月六日於御在所御卒去、今日御嫡前田宮内殿へ御家督被仰付。右に付従此方様も、爲御禮御老中方ゟ御使者被指遣。同日爲御吹聽宮内殿御出、御居間書院に而御對顔。御太刀御持參、披露三輪藤兵衞。畢而御のし出、御挨拶之上御料理出、御引菓御盃事相濟。御歸之節御送ゟ無之。

但、大和守殿御病中御在所ゟ之御見廻使、御大小將ゟ被仰渡候處、御卒去之儀相知候に付不被遣候事。

十二月廿一日。前田吉德の生母預玄院明年九十歳に達するを以て重教より祝儀を贈らしむ。

〔政隣記〕

十二月廿一日、預玄院様來年九十之御賀に付、今日御祝儀物左之通、御近習人持組前田兵庫を以被進之、のしめ・半袴に而勤之。

御屛風一雙・縐紗紅白十卷・綿三十把・鶴一・二種一荷・御目錄。

御附女中ゟも金子被下之、兵庫一集に持參達之。

寶暦七年

正月朔日。前田重教登營して年頭を賀す。

〔政隣記〕

寶暦七丁丑歳、重基公御行年十有七。元日年頭御登城、御歸舘之上御作法、其外御勤・御參詣等之儀、去々年・去年同斷に付省略。

重基は前田重教の前名

正月八日。前田重教入國祝賀能を止むべきことを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

御入國御祝之御能、前々之通可被仰付事に候得共、甚御差支之御時節候間先御延引。且又舊臘御拜領之鶴御披之儀も、御能者可被差止旨等、正月八日以御親翰被仰付。右被仰出以前、御入國御能御入用方御省略等しらべ之趣申上る。御入用高三百貫目計之旨、且右しらべ之趣大要左之通。

一、三百貫匁　　要脚

一、唐織・熨斗目一・羽二重・小袖一　　大夫四人。但竹田には御紋付被下之

一、のしめ一・上絹小袖一充　　惣御役者并江戸・京御役者之せがれ且又御雇役者共

一、のしめ一・上絹小袖二　　波吉三藏
一、小　袖　二　充　　御扶持不被下御當地役者共
一、折　一　合　充　　大夫四人
一、白　銀　二　枚　　御料理頭御能初り前鶴之庖丁相勤候付被下候
一、白銀三枚・絹中二疋　　竹田溪彌
一、白　銀　三　枚　充　　寶生彌三郎等
一、白　銀　二　枚　充　　江戸京幷御國一統惣御役者、御用相勤候御細工者
一、染　　　物　　田中平丞。但開口之文句作上候付被下之
一、のしめ一・長袴一具充　　要脚廣蓋披露之御小將
一、のしめ一・布上下一具充　　御前置御步小頭
一、小袖一・布上下一具　　同　御步
一、布上下一具充　　御幕揚足輕

右減方僉議之朱書等有之候得共爰に略す。且又右御能被仰付候儀、先年も御僉議有之候へども、六日より被指詰候儀者難成趣に而、延享五年にも六日被仰付候。然共享保十年は八月、延享五年は二月に而、短日成方に御座候。三月末四月初より御興行御座候はゞ、日數五日に

被仰付与而茂門申間敷趣も伺之内有之。

正月八日。金澤城内越後屋敷の長屋燒失す。

〔政隣記〕

正月八日夜戌上刻、金澤越後屋敷御長屋より出火、御長屋一筋燒失。御副印所も燒失。御添印を初品々燒失。御式臺等は無別條。右之趣翌九日以早飛脚江戸表へ言上、十四日朝參着。

〔泰雲公御年譜〕

一、正月八日夜五半時越後屋敷より出火。三十間御長屋御門共不殘燒失、御門扉迄相殘。御添印所より燃出候由。津田玄蕃一番駈付、人數殊之外相働候。山崎縫殿御添印所へ罷出怪我、其場に而落命之由。前田左膳も其場に而塞り、家來之肩に懸り罷歸候。御添印所留帳悉致燒失候。

正月。百姓の持高を配分し得べき場合の規定に關し注意を與ふ。

〔改作所張出寫〕

元文三年高分之儀紙面を以申渡置候處、持高五十石餘有之分者、二・三男高分爲致候儀勝手次第之旨相調置候。此所に心得違有之躰に候。五十石餘之高を二・三十石与分申儀に而者無之候。致配分候而も殘高五十石致所持候儀に候者、其餘之分者勝手次第致配分候樣に与申儀候。

此所心得違も可有之候間、重而申渡候條、向後此通可相心得者也。

寳暦七年申正月　　改作奉行

御郡御扶持人・十村中

二月十一日。諸士の儉約を勵行すべきことを令す。

〔典制彙纂〕

一、二月十一日左之覺書幷口達之趣、御用番筆頭一人充越後屋敷において被仰渡。

口達之趣

御家中儉約之儀荒増覺書相渡候。畢竟御上御難澁至極に付、願ケ間敷趣先は難承屆候間、其儀能々相心得、參會等を初先年より儉約之儀申渡候紙面之上をも、猶更減可勤仕儀肝要に候。供之人數・旅行之面々從者等之儀、書立は不相渡候得共、各方に而隨分省略可被申談候事。御家中之人々儉約之儀、兼而被仰渡置候通に付、今更何廉申談候には不及儀に候得共、今般之儀者前々之振合とは甚相違之事に候。御家中之人々勝手難澁に付而、度々御救被仰付、結構成儀此上可申上筋者無之事に候。然所御上御勝手累年御難澁之上、打續御領國作毛不熟、去々年は莫大之御損毛、其上數度不時御物入有之、銀鈔遣被仰付候付而も過分之御費有之、最早御勝手御潰れ被成大切成儀に付、面々申談、知行米之内指上候樣成御時節に候得ば、自

分勝手之儀者、延享三年附札を以相渡候書立之趣急度相守、内外共嚴重に遂儉約、江戸詰等并御使など旅行粧ひ等も、可成程致省略、勤仕つかへ不申樣相心得候儀專要之事に候。平士八百石以上旅行之節、道中鎗二本爲持候得共、當分相減可申候。八百石以下之人々も右に准じ省略可仕候。頭分たり共減少相成候品は可爲其心得候。且又近年收納拂米、猥成儀も有之躰に相聞ヘ、不覺悟之至に候。向後右之族於有之者可爲曲事旨、去々年申渡置候通に候條、猶更嚴密に相心得致勘略、勝手取續候儀肝要之事に候。今般拙者共迄御內意之趣も有之候付、右之趣申談候條、被得其意、組・支配之面々ヘ可被申談候事。

二月

二月十一日。紀伊侯德川宗將本鄕邸に臨む。

〔政隣記〕

二月十一日紀伊宰相樣、爲御年賀御出。鏡板迄御出迎、御小書院ヘ御誘引、御持參之御太刀前田兵部、御馬代御表小將披露。御熨斗御持參。鮨之御吸物出、御盃事被遊、御菓子等出、御引菜御相伴被遊。相濟、追付御歸、敷付迄御送。

二月十一日。前田重教姬路侯酒井忠恭の邸に臨む。

〔政隣記〕

二月十一日、御兼約、九時より雅樂頭様に被爲入。蹴鞠且角力御見物、暮頃御歸殿。聞番を以御禮被仰遣。

〔泰雲公御年譜〕

一、當二月十一日於江戸表、酒井雅樂頭様へ中將様御招請、角力被仰付候。雅樂頭様御抱之角力取十四人、大鳴戸・手柄山・飾磨津・時津風・不知火・響野・初瀬山・小鹽川・哲野川・大空・花笠・新井川・五諸車・小難波、外十七人は御大名衆抱之相撲取御雇之由。

二月十五日。人持組津田玄蕃先に城内越後屋敷火災の際消防の功ありしを以て賞せらる。

〔御年譜〕

一、二月十五日出仕後、津田玄蕃登城仕候様被仰渡。但煩に付名代永原平兵衞。

御手前儀、前月八日夜越後邸御長屋出火之節、役筋に而も無之、其上持病之痛所有之候所、押而人數召連、早速罷出情出被防候段、達御聽候所、別而大儀に被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。

二月十六日。手取川の水暴溢す。

二月なり

〔泰雲公御年譜〕

一、當十五日・六日大雨に而、雪水高、上口源兵衛嶋与申所より切込、水嶋邊へ水込入候而、往來二・三日無之、往還川彌深相成、中々流早く、舟橋も掛がたく、所々淵も致出來、旅人小松より別宮へ廻り、鶴來道より罷通候。水嶋驛土藏五ヶ所水に而押潰、當分水嶋中何茂二階に住居之由。幅四町に長六里計之間水押入、田地夥敷崩、高六萬石御損失之旨。去年水上川除御普請相願候節被仰付、三十貫目計御入用に而出來之所、只今如斯に相成候而は、三百貫目計之御入用に而も出來兼可申哉之旨。

二月十八日。前田重教本年歸國せざるべしとの報金澤に達す。

〔泰雲公御年譜〕

一、二月十八日江戸表より御飛脚到着。公方樣御隱居、大納言樣に御政務御讓與可被遊之趣有之候由。然ば將軍宣下可有之、先達而中將樣御入國可被遊哉之御沙汰有之候得共、右之御樣子に付今年は御入國有之間敷哉之旨。

二月廿二日。大聖寺侯前田利道の嫡子龜丸本鄕邸を訪ふ。

〔政隣記〕

二月廿二日、備後守樣御嫡龜丸樣、今日御宮參。御歸に此方御廣式に御立寄、御太刀馬代御

持參、於御廣式披露年寄女中。御吸物出、御盃事之節御刀備前國則光被進、年寄女中遂披露、御頂戴被遊、追付御料理被進之、紗綾紅白二卷・鯛一折幷御手遊犬作り物被進之。披露都而年寄女中。幷御供之女中ゟ茂金子被下之。御表向に而者、御太刀金馬代・綿十把・一種・五百疋、備後守様幷御内様ゟ、干鯛一箱宛、御歸後御小將頭津田内記御使に而被進之。

一、御供之御家老、於御居間書院御目見、御意有之。誘引將監。頭分も御目見被仰付、於竹之間御料理被下之。於御廣式も御菓子・御酒・御吸物被下之。

一、御廣式向一統布上下。頭分・御用人・御賄頭者熨斗目着用。

三月朔日。前田重教姫路侯酒井忠恭父子を招請す。

〔政隣記〕

三月朔日、雅樂頭様・阿波守様御兼約に而今日御招請。九半時頃御同道に而御出、御出迎御小書院ゟ御誘引、御挨拶之上御居間書院ゟ御誘引、御常服に被召替。追付御料理出、相濟八時過より御庭ゟ御出、所々御見物、高山於御亭御菓子・御吸物等出。夫より御馬見所ゟ被爲入、雅樂頭様・阿波守様・酒井駿河守殿・前田大和守殿・前田帶刀殿・齋藤長八郎殿・同三六殿、各爲御牽之御馬に御乘、前田伊豆守殿者此方様御馬に御乘。但御父子様・長八郎殿は、此方様御馬にも御召被成。尤御前も御乘馬被遊、其外御馬役齋藤只右衛門・齋藤權五郎・絹川源兵衛・有

田庄右衞門、御近習より中村新兵衞・奥村五兵衞・羽田源次郎に乘馬被仰付。暮頃御馬場相濟、御居間書院へ被爲入、後段幷御湯漬出、六時過御歸。若雨天に候得者、御拍子有之筈に而御手役者等相詰有之。

三月二日。本多遠江守の臣小笠原善左衞門博奕を以て知行を沒收せらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月二日、本多遠州家臣知行二百三十石小笠原善左衞門知行被取揚、七人扶持給、遠慮被申付候由。此小笠原は元信州出之者、本多家にても由緒正敷家之由。博奕を好勝手難澁、常々不奉公不行跡被申立、如斯被申付旨。

三月十一日。前田重教當秋歸國すべしとの報重ねて金澤に達す。

〔泰雲公御年譜〕

一、三月十一日江戸表より町飛脚到來。前月廿八日御老中より小笠原縫殿介殿を以、御入國之御暇可被進旨御內意有之候に付、當七・八月頃御國入可被遊旨。

四月朔日。姫路侯の世子酒井忠宜、前田吉德の女操姫に結納を贈る。

〔政隣記〕

二月廿一日、操姫樣ゟ從阿波守樣御結納被進候御日取、來ル四月朔日より從雅樂頭樣、今日松前主馬殿（久世忠左衛門殿之筈に候處、依御氣滯主馬殿に相決。）を以被仰越、主馬殿御勝手座敷上之門ゟ御通。夫より御小書院ゟ御通。御口上小笠原縫殿助殿ゟ御申聞。於御料理之間將監承之申上。御出御逢、御熨斗出、御入、御料理相濟御直答左之通。

來ル四月朔日、實姉方ゟ阿波守殿より結納之祝儀被指越度段致承知。彌被指越候樣御演述賴入る。

〔政隣記〕

一、四月朔日、御結納被進候御使者、御家老松平左忠、副使御留守居白倉茂兵衛、八時罷越、御口上御家老承之。預玄院樣・淨珠院樣ゟ之御口上者茂兵衛申述、御附之頭々罷出承之。御祝儀物者御使者より以前に參候に付、夫々御大書院に飾置之。御前御出、左忠御家老誘引罷出、御口上申上、退自分之御禮申上、持參之御太刀目録組頭披露之。茂兵衛組頭誘引、自分之御禮申上。畢而於御大書院、左忠ゟ御料理被下之。御相伴御旗本衆、相濟御廣間ゟ退、重而御大書院へ御出、左忠御家老誘引罷出、御肴を被下、本座ゟ直り候時、御刀（高田助盛、代金五枚。）御家老持出被下之。相濟重而御大書院ゟ御着座、御直答被仰含。副使幷御祝儀物指添來候侍分、御勝手座敷等に而御料理被下之。御祝儀物左之通。

操姫樣江

御小袖三重　包のし　御帶二筋　包のし

御末廣二本　昆布一折三十把　鯣一折三十連　鹽鯛一折三十枚

御樽三荷　御目錄

中將樣江

御太刀金馬代　時服三　包のし　鹽鯛一折十枚

御樽一荷　御目錄

預玄院樣等江も被進物、幷御附年寄女中江も被下物有之。

右御時服等品々操姫樣江、翌二日立裁領飛脚を以金澤江被遣之。且先達而相極有之御肴等之內、中將樣初預玄院樣等・御前樣方江も、夫々御取分被進之。

四月四日。諸士の不品行なる者を頭役等の隱蔽すべからざる旨を告ぐ。

〔典制彙纂〕

御家中之人々行狀儉約等之儀、度々被仰出候得共、行届不申旨も有之樣子に候。且又收納米拂方不埒之趣も有之體被聞召候。頭々手前に而抱置、外より達御聽候者、急度可被仰付旨、此度拙者共江御內々被仰出之趣、其品詳には難申達候。畢竟不愼之族、且拂米之譯不宜趣、

外より達御聽候而ハ事重相成候事故、自今拙者共手前に而抱置申儀難成趣に候條、平生萬端急度被相愼候儀肝要之事に候。

右之趣密々申談候事。

四　月

右四月四日御用番より各演述。但一統ハ御馬廻頭・御小將頭へ御親翰を以直に被仰出候趣有之。右組頭より申談候事。

五月三日。大聖寺侯前田利道歸封の途金澤を過ぐ。

〔泰雲公御年譜〕

一、五月三日、備後守樣江戸表より御歸邑に付、昨夜津幡御泊に而今日御通行。

五月六日。前田重教本年入國の際供奉すべき家老を命ず。

〔政隣記〕

五月六日、於御居間書院、當秋御入國御供御家老役、靑山將監・前田兵部ハ御直に被仰渡。

五月十八日。前田重教の母實成院金澤に着す。

〔泰雲公御年譜〕

善良院は前田重靖の母

兩水は犀川淺野川

おこ畠は大河端

一、五月朔日善良院様金谷御廣敷へ御移。是は前月廿七日實成院様に江戸表御發駕、金澤御着之上は二之丸御廣敷へ被爲入筈に付、金谷へ御移之旨。

一、五月十八日、朝より雨天、實成院様津幡御泊に而、四時前金澤御着。御供御附物頭福嶋武左衛門、御預地方瀬川久右衛門も御供被仰付。但先月二十七日江戸表御發足之所、御道中惡敷、六日御逗留有之、二十二日振に而御着被成候。

五月廿九日。金澤に大雨ありて家屋の倒壞多し。

〔御年譜〕

一、五月二十八日より二十九日大雨。所々山崩家損じ、觀音下・天神町・寶圓寺谷間等合十三・四軒損じ、其外大水出候事。

〔泰雲公御年譜〕

一、五月二十九日夜來より無絶間大雨、兩水滿水。竪町牛右衛門橋所々水着。天神町邊山崩に而家四・五軒潰、天神之攝社潰、本社も傾申旨。惣構之村井家門前腰丈け水有之。光岸寺前同斷。卯辰愛宕下山崩、家四・五軒潰、怪我人も有之。津幡筋竹橋落、往來難成。上道、當春切込候水嶋邊、又々破損往來相止候。宮腰道大威德橋より末水着、船に而致往來候。是は七つ屋之下切込、おこ畠・諸江邊より水一扁に押込候由。才川に而流死四人有之。

村上采女等は能登口郡の御郡奉行なり他の諸郡も同例なるべし

一、六月、今般御領國水損二・三日以前迄御算用之注進丸四十二萬石計之由。御國不限、美濃・尾張・近江邊水損夥敷有之由。

五月。擅に神社境內の樹木を伐採することを禁ず。

〔寶暦年中羽鹿政令〕

近年神社之木を伐申故、社により殊之外荒申躰相見申候。村方之者・神主抔申合、隱伐賣木抔に致申儀候得者沙汰之限に候條、急度村々之者に可申渡置候。若我儘に神主伐申樣子候はゞ、氏子共より相構爲伐申間敷候。無據儀に而も申時は、神主より寺社奉行・山奉行願申に而可有之候。無左候而むざと伐申樣子に候はゞ、指留可申候。承引無之候はゞ、百姓共より此方へ相斷候樣可申渡候。拙者共より寺社奉行中にも、先達而申達置候趣在之候。在々より惣而近年神社を輕、祭祀迄も不沙汰に仕樣相聞不屆候。費不厭結構を仕樣にて申儀に而は無之候。神事無怠樣可相心得候。此旨會得有之、能々申渡、村々より請紙面取置可申候。寺社共に此心得可申渡事。

右之通申渡候條、以後不締之樣子相聞候はゞ、面々等閑故与存候間、無油斷可申付候、以上。

丑五月　村上采女

六月なり

拍子は囃

不破次郎太夫

羽咋・鹿嶋兩郡十村中 山廻中

六月十二日。昨今兩日前田吉德の十三回忌法會を寶圓寺に執行す。

〔泰雲公御年譜〕

一、護國公御十三回忌、於寶圓寺十一日・十二日御法會御執行。御法事奉行前田駿河守殿。十日より三日之間普請鳴物等遠慮。諸士拜禮等如例。

六月二十日。德川吉宗の七回忌法會を金澤神護寺に執行す。

〔泰雲公御年譜〕

一、六月廿日、有德院樣御七回忌於上野御法事御執行、御豫參り等に而、夜半より御宿坊常照院に被爲入御用意之所、雨天に相成御成御延引。

同日右御法事、於神護寺御執行有之。普請・鳴物・押立候能拍子は遠慮。

七月三日。前田重教紀伊老侯德川宗直の病を訪ふ。

〔政隣記〕

七月三日、紀伊大納言樣夜前より御變症に而、御勝不被成旨、今朝申來、早速御使番有澤才

右衞門被遣之。追付御前にも御見廻可被遊之所、少々御痢合惡く候に付、前田兵部被遣。于時今夜六時過聞番迄奉札來、被及御大切候段申來候に付、急御供揃に而可被爲入旨被仰出、先物頭一人・御小將一人被遣。物頭者相詰、御小將者於御途中御容躰可申上旨、御用人申談。五時過御出、あなた御屋敷邊より早乘被爲召候而被爲入、御家老久能丹波守被爲召、御容躰委細御尋、九時前御歸館之處、八時頃御附使者罷歸、大納言樣御逝去之段申上。依而爲御悔、青山將監御使に被遣之。

一、四日右御逝去に付、爲伺御機嫌惣登城。普請は三日、鳴物七日停止之由。大御目付衆より御廻狀來候處、御前少々御痢合惡く、御登城御斷。

一、六日紀伊宰相樣へ、今朝爲御悔被爲入。

七月十八日。前田重教上野覺王院に於ける紀伊老侯德川宗直の中陰法會に詣づ。

〔政隣記〕

七月九日、大納言樣御法號大慧院樣御遺骸、今日御出棺、上野護法院へ被爲移。夫より谷中於感應寺御火葬に而被爲成、御遺骨紀州へ御移、於紀州御中陰御法事有之。依之從金澤、御馬廻頭九里覺右衞門へ御代番御使被仰渡。但上野於覺王院も、同十八日御中陰御法事有之、

大納言は紀伊老侯

七時前御參詣、御燒香被遊候。

七月廿一日。前田重教將に封に就かんとするを以て一門等を訪ふ。

〔政隣記〕

七月廿一日、御國江之御暇被仰出候者、無程御發駕に付、今日より御一門樣江御暇乞之御勤有之。廿三日同斷。廿五日預玄院樣江被爲入、御餞別之御料理被進之。且御參詣者、御暇後廿九日より被爲初候事。

七月廿七日。前田重教就封の暇を受く。

〔政隣記〕

七月廿七日、今日九時過爲上使御老中松平右近將監殿御出。御前御門下蹴込之外迄御出迎、御大書院江御誘引、初而御國許江之御暇被仰出候段上意御拜聽。御熨斗出御入、重而御出御挨拶之上、御小書院江御誘引、御前御相伴に而御料理出之、御引菜向詰御持參、御酒之上御引肴出雲守樣上使江迄御引、御前江者御給事人上之。御濃茶御前御持參。御盃事上使御始御前江被進之、御返盃、其御盃重而御前へ被進御納被遊。且御刀一腰被遣に付、大久保甚左衞門殿御持出、御詰之節被進之。御嘉儀者久世忠左衞門殿、御拜領物白銀百枚・縐紗三十卷、御例之通也。且明日御暇之御禮可被仰上旨、御家來兩人御目見可被仰付候間可被召連由、御覺

書右近將監殿御直に御渡、無程御退出。其外如御前例也。
一、大納言様よりも上使秋元但馬守殿西御老中八時前御出、御作法右同斷。御盃事之節被進候御刀、松前主馬殿御持出、御嘉儀者忠右衛門殿御勤。御拜領物者綴紗二十卷也。
右御退出、御出前、明日御供可被召連旨、將監・兵部江前田兵庫を以被仰出。

大納言は徳川家治

七月廿八日。前田重教登營して就封の辭見す。

〔政隣記〕
七月廿八日、御暇之爲御禮御登城之處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴之。其上御刀備前盛光代金廿枚幷御鷹・御馬御拜領。御家來將監・兵部御目見、卷物二宛拜領被仰付。右等之爲御禮、西丸江も御登、御下り御老中方・若年寄衆江も御廻勤、九半時頃御歸殿。御側衆等江御使被遣、預玄院様等江御普爲聽、御近習頭御使、御前様方江者御表向より。且御家老兩人被爲召、御城之御様子被仰聞、頭分以上江も可申聞旨御意。金澤年寄中幷前田土佐守江も御書被成候に付、今晩御家老中江御渡。善良院様・實成院様・操姬様・喜六郎殿に御普爲聽被仰進。明朝卯刻立中飛脚に傳附被仰進之。

〔政隣記〕
七月廿九日、昨日御拜領之御馬、今朝西尾隱岐守殿より爲牽御指越、請取方如御先例。且御

居間先於御庭御覽、御纒神保縫殿右衛門上之、御頂戴。夕方御居間前之於御馬場、齋藤只右衛門・絹川源兵衛に御乘せ被成、其節御家老中江拜見被仰付、其後御前江被爲召。

八月二日。前田重教就封の際旅中側筒五挺を隨ふことを許さる。

〔政隣記〕

八月三日、前月御用番西尾隱岐守殿より聞番呼に來、脇田淸左衛門罷越候處、御側筒五挺爲御持被成度旨、先月御願書御差出置之處、御願之通相濟。碓氷・今切・福嶋之御關所御證文、御老中方御連印に而御渡、幷御添書も御渡に付受取歸上之。但御文言者、向後無間違可被相通云々。福島江之御證文者、尾張樣御家來江直に御用番より御渡之旨被仰渡。

右に付爲御禮、御老中方不殘江聞番被遣之。

八月六日。前田重教江戶を發して就封の途に上る。

〔政隣記〕

八月六日快晴。御老中方昨夕御廻勤。今朝六時過御內證江被爲入、押付御歸、御膳被召上、御表江御出、出雲守樣幷前田信濃守殿江御對顏。畢而御旅裝束被爲召、重而御內證江被爲入、無程御居間江御歸。御發駕卯の下刻也御作法御先例之通に而、大御門より御出、御中屋敷江御立寄、預玄院樣江御對顏、追付御立。御供御家老靑山將監・前田兵部。御道中奉行者御小將頭

津田内記御歩頭兼御用人青木彦太夫。

今日御晝休大宮、御泊桶川。御泊桶川迄預玄院様・淨珠院様より御用人を以御見廻被仰進、御泊迄以御飛脚生干御肴一箱宛被進之。從御前様方も御泊迄御飛脚を以被仰進、從出雲守様・勝五郎様も御飛札被進之、紀伊守相樣御家老より青山將監等迄御飛脚奉札を以砂糖漬一器被進之。

七日　吹上　御中休。　熊谷　御晝休。　本庄　御泊。

八日　倉ヶ野　同。　板ヶ鼻　同。　坂本　同。

九日　輕井澤　同。　追分　同。　小諸　同。

十日　海野　同。　榊　同。　矢代　同。

十一日　丹波島　同。　新町　御中休。　野尻　同。

十二日　關山　御晝休。　荒井　同。　高田　同。

十三日　名立　同。　能生　同。　糸魚川　同。

十四日　青海　御中休。　境　同。

十五日　舟見　同。　三日市　御晝休。　滑川　同。

十六日　岩瀬　同。

十七日　小杉　同。　高岡　同。九時御着、御裝束被召替、追付瑞龍寺御參詣、御入國故御廟にも御參詣。

十八日　今石動　　　　　　　　　　　　　津　幡　同。
同。

御泊迄從實成院樣御附物頭福島武左衞門御進物有之、從善良院樣・操姫樣も御附御用人を以御進物有之。夫々御直答。

一、就御入國に津幡迄御家老之內可罷出筈に候得共、御時節柄に付先達而從年寄中被相伺候處、不及罷出に暇被仰出候事。

八月十六日。虎之子及び取拔賴母子と稱する富突類似のものを行ふを禁ず。

〔日　曆〕

近年虎之子幷取拔賴母子与申名目に而棟取之者有之、多分者寺社方にたより、寄進抔之申立に而致人集、其內にには萬人講与名附、富突之樣成儀を取立、其外百人・五十人之取拔等は數多有之躰。畢竟棟取之者其過分之德分を考、相加り候者共へにに鬮取次第利潤も有之樣子を以進込、亦は紋付与申品も取扱、專博奕同事之趣。且富突札等之類は、寺社方寄進之趣に而他領より入込、於當地取次之者も有之躰相聞、不屆之至に候。自今右之族於有之者可爲曲事候條、此段急度相心得候樣一統可被申渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之面々にに可被申渡候。組等之內裁許有之人々は、其支配之面々にも

相達候樣被申聞、同役人中可有傳達事。

右之趣可被得其意候、已上。

八月十六日　　横山大膳

八月十九日。前田重教金澤城に着す。

〔政隣記〕

八月十九日、朝六半時之御供揃に而津幡驛御發駕、四時御着城。三之御丸橋爪ゟ年寄中九郎左衛門・豐次郎・靱負罷出有之候處御意有之。三之御丸等ゟ罷出候人持役、懸り頭分ゟも御意有之。大御式臺より被爲入。御城代且御用番之横山大膳幷御家老中、敷付ゟ御奥小將横目山口六郎左衛門、左ゟ御近習御用富永數馬幷御奥小將奥村五兵衛罷出、大膳・御家老中罷出有之旨數馬申上候處御意有之。右之方階下ゟ喜六郎殿御出御會釋被遊、御先立若年寄松平玄蕃勤之。實檢之間之方備後守樣御使者生駒修理罷在、奏者披露之節御中座被遊、御意者無之。御居間書院より御先立數馬勤之、御居間に御着座之上、御熨斗三方御奥小將持出上之。喜六郎殿御居間ゟ御通御對顏。御旅裝束之儘御內證ゟ被爲入、實成院樣ゟ御對顏、追付御居間ゟ被爲入。夫より御居間書院へ御出、年寄中等三切に被爲召御意有之。相濟、御布上下に被召替、重而御居間書院へ御出座、入國御禮之江戸表御使御家老本多圖書儀、御用番大膳誘引に而被

召出、右御禮御使者之儀被仰渡。大膳御取合申上候處、御意有之處ゟ黄金三枚・卷物三・御羽織一被下之。廣蓋御表小將持出、頂戴之退出。追付發足、十月十三日歸着、卽刻御目見御意有之。

一、就御入國に年寄中等生肴献上之。

一、今日之御祝儀、御表向頭分以上登城御帳に付、御近習頭以上は年寄衆席へ出御祝詞申上。且御供之頭以上者御表向も御帳に不附、年寄衆ゟ出御祝詞申上。

一、初而御入國に付、御供中御歩並迄一統御料理被下、足輕・小者ゟ者赤飯被下之。

一、年寄中等より若年寄迄、御膳下御料理被下之。

八月。江戸の分銅改方後藤四郎兵衞將に其の手代を加賀藩に派遣すべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

分銅御改之儀、寛保三亥年六月諸國ゟ御觸出申候。夫より只今迄御傳馬御證文頂戴仕、追々國々相改廻り申候。此度北陸道七ヶ國之御傳馬御證文頂戴仕、相改候に付、御國元ゟ茂分銅役人相廻り相改申候。先年御觸出有之候儀に御座候得者、差付參候而茂宜敷御座候得共、御當地御屋敷より御國元ゟ被仰遣置候上、右役人相廻候得者、御國元に而分銅御改之儀、諸事

御互に御談合宜敷御座候故、早速御國元に被仰遣可被下候。尤分銅改之仕法等者、廻り役人御國元に着之節、先方御役人樣に、只今迄國々相改候仕法を御談申候而相濟候儀に御座候間、此度御國元に分銅改相廻り候間、廻り役人と相談じ、改御請候樣にと申儀計仰遣候而宜敷御座候。則御證文之寫持參仕候、以上。

（寫は之を略す）

後藤四郎兵衛御分銅方役人

　　谷口彌六

八月

私御貸長屋に後藤理兵衛罷越、同苗四郎兵衛先年相願、分銅改諸國相廻候等に御座候。夫前御役人中に被仰渡、指支不申樣に仕度奉願候。一統外々樣に茂、四郎兵衛役人直に罷出御屆申上候得共、此方樣之儀に付、私罷出御屆申上候。何分に茂御役人中迄被仰達置被下候樣に仕度奉存旨、理兵衛申聞候。別紙兩通指出候に付御達申候、以上。

（兩通は前掲の文及び證文の寫なり）

九月十六日　　伴　源太左衛門

前田内藏助樣

竹田金右衛門樣

林源太左衛門樣

分銅御改之儀に付、別紙兩通寫指越候條、被得其意、指支不申樣夫々可被申渡候、以上。

十月八日　　　御算用場

不破次郎太夫殿

村上采女殿

九月朔日。前田重教入國に付今日以後諸士の拜賀を受く。

〔政隣記〕

九月朔日、就御入國御家中一統獨禮被爲請、今日より被仰付。御表宜旨月番遠江守より被申上、五時過御奥書院ゟ御出御。直垂被爲召、土佐守・遠江守・駿河守大紋に而御禮申上、着座之上御熨斗被下之。御取合御家老役布衣着用、御刀持御表小將素袍着、御表小將素袍着持出。右相濟被爲入、御長袴に被召替、於御居間書院に喜六郎殿御長袴御禮被仰上。披露若年寄。御着座之上、御熨斗三方御表小將持出上之。御戴相濟、於御小書院大膳・主水・九郎左衛門・豐次郎・靱負・御家老役・若年寄迄御禮被爲請、被爲入。五半時過御大廣間ゟ御出御長袴、人持・頭分・御表小將迄御禮。畢而被爲入、重而四半時過御出、御大小將より御射手・御異風・新番・御醫師・坊主頭迄御禮、相濟被爲入。大概御作法如年頭。

二日、五時過御長袴に而御大廣間ゟ御出。昨日御用等に而相詰候頭分等・御馬廻六組御禮。重而御出、御馬廻六組御用番支配共、小松御馬廻・魚津御馬廻等御禮。相濟被爲入候節、於柳

之間御役者御通懸り御目見被仰付。
四日、五半時御半袴に而御大廣間江御着座、小松御城番人持津田源右衛門、二日當番之御馬廻、定番御馬廻八組御禮。被爲入、四半時過重而御出、組外四組御用番支配共、寺社奉行支配、御前樣方等御附御用人等、町同心・御厩方御禮被爲請。
五日、天德院江御參詣。
六日、五半時御半袴に而御大廣間江御出。四日當番に而相殘候人々、御歩小頭等、御料理頭・御賄頭・御臺所頭・御細工者小頭御禮。四半時過重而御出、駿河守與力より組附・明組・本組與力・御大工頭迄御禮被爲請。被爲入候節於柳之御間、撿校三人・町人共御通懸御目見被仰付。
七日、五半時御半袴に而御小書院御出。隱居之面々鳥目獻上、年寄中之子弟太刀に而御禮、人持之嫡子・頭分之嫡子鳥目に而御禮。夫より御大廣間江御出、最前煩・差合等に而不罷出人々、昨日當番之人々、今津甚右衛門・鴻池吉右衛門・具足屋七左衛門・辻新十郎・升屋熊藏・朝田屋與兵衛御禮被爲請。
九日、天德院江御參詣。
十一日、四時前御長袴に而御大廣間江御出。能州惣持寺より小松梅林院迄三十七人、十帖一本に而御禮。春日神主高井周防守より白山神主中務迄七人鳥目。所口光德寺・江戸常照院々代・普明院、一帖一本に而御禮。小松御馬廻御番頭御禮被爲請。

十二日、兩御寺御參詣。

十三日、四時前御長袴に而御大廣間ゟ御出。西田國泰寺より高岡聖安寺迄九人、十帖一本に而御禮。此内域端善德寺者御太刀馬代献上之。且最前より煩等に而相殘候人々、魚津・今石動附近與力大文字屋茂右衞門・同人せがれ茂兵衞御禮被爲請。

一、御入國に付十村等者、十一月十二日寶圓寺御參詣御歸之節、裏御式臺板之間に年頭之通並に置、御通懸り之御目見被仰付。

九月六日。大阪の御藏元鴻池吉右衞門等金澤城に登り前田重教に謁す。

〔泰雲公御年譜〕

一、九月六日、大坂御藏本鴻池吉右衞門・辻新十郎・具足屋七左衞門・御舟裁許伴熊藏・江島屋・淺田屋等爲御目見罷出候。

一、同十一日、京・大坂御用聞町人鴻池等、於二丸御料理被下、拜領物有之。

一、同二十三日、大坂御藏本鴻池吉右衞門、二御丸御次被爲召、小堀氏・富永氏・神保氏列座に而、御紋付御上下・同黑縮緬御羽織、御懇之御意を以拜領被仰付。當十九日鴻池・具足屋・辻三家之者、例之拜領之外、金子三十兩・生絹十匹宛、御銀方御用精に入相勤候儀、御喜悅被遊候旨に而被下置候旨。但御紋付拜領之儀希有之儀に候旨。

十月十二日。前田利常百回忌の法會を寶圓寺に執行す。

〔泰雲公御年譜〕

一、十月十日より十二日迄、微妙公百回御忌御法事於寶圓寺御執行。御佛殿番（山本久右衛門・富永惣兵衛・井上善左衛門・山本吉大夫・伊藤忠左衛門・大鳴助右衛門・井上長太夫・小野木作左衛門）裏門番人（平岡善八郎・高澤平次右衛門・加藤九兵衛・細井宇平次・井上平左衛門・前田次郎左衛門・小野木次左衛門・名越勝左衛門）惣御奉行前田土佐守殿。今日普請・鳴物・殺生遠慮。大聖寺より御使者生駒萬平、片町大浦屋幸右衛門方止宿。

一、同十一日、於玉泉寺御施行米被下、八時以前中將樣御佛參。喜六郎殿にも御拜參。

一、同十二日、四時過中將樣御參詣。

十月。贓物を藩外に出して處分したる能美郡の百姓清兵衛捕へらる。

〔泰雲公御年譜〕

一、十月當月初頃に候哉、御城下之賊物近國へ出し申趣。御國者・他國者与取組洩候段、盗賊改奉行土方孫三郎承込、手合之足輕小頭一人・平足輕一人・小者一人差添、町人躰に仕立、越前三國幷敦賀邊迄指遣、問屋へ便り爲聞合候處、小松近在有德之百姓三田村清兵衛与申者致棟梁、三國邊問屋に取組、每歲菜種買込、密々致廻船候事委細承届。其身も菜種買込置候に付、廻船之方便仕度旨申候而、則問屋方に而右清兵衛に致對面、春に到り可致廻船段申合

罷歸、改方奉行所へ相達候所、捕手足輕十餘人差遣、右爲目明小頭相添、清兵衞儀召捕、黨類之儀致吟味候處、小松に而兩人、近在に而一人、以上四人召捕罷歸、吟味之上及白狀、公事場へ引渡候。右清兵衞儀は、土藏も數ヶ所致所持、菜種夥敷買込置、金銀も過分に致所持在候者之由。

十一月十日。昨今兩日德川綱吉の五十回忌法會を金澤神護寺に豫修す。

徳川綱吉の忌日は正月十日なるを以て引上げたるなり

〔泰雲公御年譜〕

一、十一月九日・十日常憲院樣五十回御忌於神護寺御執行、法華三昧。御法事奉行奥村主水殿、御佛前番・名越次郎左衞門内藤善太夫・九津見左右衞門・岡田又太夫・山岸八郎右衞門・中村新藏。

十一月十日。幕府御預地鳳至郡黑島村に火災あり。

〔泰雲公御年譜〕

一、十一月、當十日能州御預地黑嶋村火事、二百軒餘燒失之由、家數三百計之所也、

十一月廿一日。平田宇右衞門その子與右衞門の拘置を懈りしを以て閉門を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

十一月廿一日駿河守より伺之、伺之通被仰出。左之通。不行狀者博奕宿等仕旨抔之事也。

平田宇右衛門

右宇右衛門せがれ與右衛門儀、先年より縮所に入置候處、右縮所を破り出、行衛相知不申旨書付指出候。與右衛門儀先年御留場之内に而網張、其後土田金左衛門娘申合致出奔立歸候趣等、不屆至極之者に候へ者、縮方も嚴重に仕置可申處、又候右之族、畢竟縮方も等閑故に候。宇右衛門儀常々行狀等も不宜段被聞召候へども、相愼申儀も可有之哉与御猶豫被成置候へども相嗜不申、重々不屆之至に被思召候。依之閉門被仰付。

十二月朔日。前田利實袖留の儀を行ふ。

〔政隣記〕

十二月朔日、喜六郎殿御袖被爲留、爲御禮御登城、於御溜に御口上を以干鯛一箱被上之。追付於御居間書院御禮被仰上、御料理被進之。御盃之上御道具（兼信代金十枚）波之間御料理被下之。

喜六郎時に金澤小立野の新宅に在り

御道具の次脱字あるべし

十二月十九日。徳川家重の前田重教に贈りたる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

十二月十九日、宿次以御奉書御鷹之鶴御拜領、今夜到來。右御禮之御使御馬廻頭高山善左衛

門、廿三日發足、正月七日江戶着。十五日御目見、廿七日御奉書渡、卷物拜領、晦日發足、二月十三日金澤に歸着。右鶴翌年四月十八日御披。

十二月廿六日。横山大膳を叙爵せしめて山城守と稱せしむ。

〔政隣記〕

十二月廿六日、諸大夫欠人代御願置之所、去十八日御名代前田信濃守殿に御老中方御列座、御用番西尾隱岐守殿被仰渡、御演述之趣左之通。

兼而御願置被成候通、御家來諸大夫被仰付候。

右之通申來に付、則横山大膳叙爵被仰付、名も山城守与御改之儀御屆も相濟候趣、翌廿七日被仰渡、年寄中等も被爲召御意有之。

十二月廿六日。追儺の儀を金澤城內に行ふ。

〔泰雲公御年譜〕

一、十二月廿六日、御追儺御規式。御年男奥野嘉藤次。豆打候御間、御本丸・御居間・同二之御間・御寢之間・御居間書院・御膳所・御奥御書院・御小書院・御上段・御廣間御上段・大御式臺階下・柳之御間・御臺所、以上十二間。

右御規式相濟、御城代之前に豆差上候而、御目錄被下之。初而相勤候者には御熨斗目・御紋付

被下候。二度目より綿三把被下之。畢而御吸物・御酒被下之。豆は箕に入て、御居間方坊主小頭持之、手燭は坊主小頭持候て、惠方に向指置候に付、手燭に向左之膝を突、右の膝を立、福はうちと二聲豆を上へ打、鬼は外と後へ打之。裝束熨斗目・長袴・少さ刀帶申候。御居間に而は御敷居の外にて少さ刀取之。

是歲。朝鮮の流材加賀・能登の浦に漂着す。

〔續漸得雜記〕

一、寶曆七年丁丑秋末冬初、諸國浦々へ唐木の材木大木根共に流來よし、京都にても沙汰あり。能州浦其外加州宮腰・本吉抔、唐木の材木葉者なくして根共に拔て流來。外國の山崩るゝかと沙汰有之處、十二月大乘寺領橋立へ長さ三十間の大橋流木、材木も流來。其橋の葱臺、唐金に而包み毛彫あり。一說に本吉へ上るともいふ。朝鮮國馬韓守侯配地周匝六百里の內、蔚山と中山大布と中山相並、左右山兩方共に高山。但兩韓にて右兩山の間に大河あり。日本年號子ノ歲に當る五月中旬より大雨、二十三日の間不止。六月上旬より大地震三日動、大布山崩候。右穿海河ふさがり、山の高さ不知、五日の間水不退、下民是に恐れ晝夜先を不知して迯候。五日目に右大河破れ、百里の間流出、野山平地になり、海上高山拔出、死人六百人計のよし、牛馬數不知。今日本へ流來唐木に無違、右兩國配地國主より米金を與へ民を助らる。

去三月唐船林こうこうの者長崎へ渡り、魚山禪師扇子に書留有之。委曲長き事ゆゑ少々書留來候よし。朝鮮年號康陵十一年、日本寶曆六年に當也。

附錄年表

元文三年　戊午　　皇紀二三九八

正月　○朔日諸大夫、年頭の禮の服裝に長袴を用ふ。(一)

○二日前田宗辰初めて柳營に登り年頭を賀す。(一)

○八日十村等に命じて農事の勸奬を懈るなからしむ。(一)

○十二日河北郡に於いて製造する紙の種類を調査せしむ。(三)

○二十日十村等の職務に關する心得を諭す。(一一)

○廿九日本鄕邸の作事門等類燒に罹る。(一五)

三月　○四日前田利和の抱守を辭したる中吉助左衞門遠慮を命ぜらる。(一六)

○十一日嫁娶を行ふ人家に礫を投ずるの禁を勵行せしむ。(一七)

○十一日大聖寺侯前田利道幼年なるを以て加賀藩より横目を派遣す。(一八)

四月　○十一日前田重靖金澤觀音院に宮參を行ふ。(一八)

五月　○三日稻新助・内山覺仲の幕府より助修を命ぜられたる庶物類纂續集成る。(一九)

六月　○朔日前田重靖の生母の族奧泉金兵衞新たに祿せらる。(二〇)

○二日金澤卯辰觀音山崩壞す。(二一)

○十五日大槻朝元その祿を加增せらる。(二二)

○廿二日二條宗熈の薨去を弔する爲金澤より使者を發す。(二三)

○藩侯の行列に於ける器具服裝等の制を定む。(二三)

七月　○朔日内山覺仲等幕府の庶物類纂續集補助の任務を終りたるを以て秩祿を增さる。(二四)

○六日前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。(二四)

○十日本鄕邸の大書院・小書院等成る。(二五)

○十八日前田吉德江戸に着す。(二五)

○廿三日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。(二六)

○百姓存生の内養子をなし置きたる者といへども相續の際許可を得ざるべからざることを命す。(二六)

八月　○二日十村を命ぜられたる際提出すべき誓紙に關して規定す。(二七)

○四日前田吉德、德川家治の生誕を祝する爲老中の臨邸を請ふ。(二八)

○十日能登の十村等に對し樫樹伐採に關する取扱方

を合す。(二八)

○十四日大槻朝元の妻歿す。(二九)

○廿一日幕府より交附せられたる人參種を金澤に送る。(三〇)

九月 ○六日河北郡小坂村にある礫刑場の由來を上申す、(三〇)

○七日老中松平伊豆守等本郷邸に臨む。(三一)

○廿一日前田吉德　德川家治の生誕を賀する爲一門以下を招待す。(三二)

○凶作なるを以て免切を許すべき村數を協議決定す。(三四)

十月 ○十三日金澤小立野の水道內より小兒の首三個を發見す。(三八)

○廿六日本郷邸前の附近にて發見したる棄兒を廣式に收容して扶育す。(三八)

十一月 ○十日幕府より交附せられたる人參の實生を金澤に送致す。(三九)

十二月 ○朔日大に雪降るを以て城中に三千餘の人夫を使用して之を除かしむ。(四〇)

○廿二日前田宗辰袖留の儀を行ふ。(四〇)

○廿五日前田吉德の生母明年侯の五十歲に達するを祝して物を贈る。(四一)

○物價高直なるを以て在江戸の小者の給銀支給法を改めしむ。(四一)

是歲 ○氣候順ならずして領內の收穫大に缺損す。(四二)

元文四年　己未　皇紀二三九九

正月 ○朔日前田吉德病むを以て年頭の禮を缺く。(四三)

○廿二日村肝煎交迭の際屆出の手續を令す。(四三)

○廿五日德川吉宗、前田吉德に鶴を贈る。(四四)

二月 ○四日前田利和着袴の儀を擧ぐ。(四五)

○十八日平井吉左衞門その若黨等の爲に殺さる。(四五)

○廿五日非人頭等金澤町中の持分を定む。(四七)

○廿五日前田吉德の養女繁姬盛岡侯の嫡子南部信貞に婚することを許さる。(五一)

四月 ○朔日前田宗辰初めて月次登營の禮を行ふ。(五二)

○二日前田吉德の女楊姬髮置の儀を行ふ。(五二)

○十二日中村典膳、前田綱紀の雅號を富永數馬に報ず。(五二)

○十四日前田吉德の女益姬江戸に生る。(五四)

○十四日能登奧郡の諸職人工賃を增さんことを請ふ。(五四)

○廿八日小松に火災あり。(五五)

五月 ○四日幕府の編輯せる庶物類纂續集の謄寫を命ず。(五六)

○廿五日前田重熙乘馬初の儀を行ふ。(五六)

六月 ○十六日前田宗辰登營し初めて嘉祥の禮を行ふ。(五六)

七月 ○朔日大槻朝元その秩祿を增さる。(五七)

○五日金澤闕助馬場に火災あり。(五七)

○廿一日先に平井吉左衞門を殺害したる若黨等磔刑に處せらる。(五八)

八月 ○廿七日前田吉德就封の暇を受く。(五九)

○廿二日前田吉德江戸を發し、歸國の途に就く。(六〇)

九月 ○二日年寄橫山大和守の指控を免ず。(六〇)

○四日前田吉德金澤に着す。(六一)

十月 ○二日金澤三社珉德寺前に火災あり。(六一)

○廿五日毛利六郎左衞門知行を召放さる。(六二)

○廿六日青木恒右衞門逼塞を命ぜられ小倉多門知行を召放さる。(六二)

十一月 ○十二日前田吉德の女橋姫江戸に生る。(六三)

○十九日前田重靖袴着の儀を行ふ。(六三)

十二月 ○六日前田重熈疱瘡を患ふとの報金澤に達す。(六三)

○九日前田宗辰疱瘡を患ふとの報金澤に達す。(六四)

○十二日前田吉德の女益姫江戸に歿す。(六四)

○廿五日金澤に於いて前田宗辰の疱瘡平癒を賀す。(六五)

元文五年　庚申　皇紀二四〇〇

正月 ○十三日前田吉德幕府に使を派して先に宗辰の疱瘡を問はれたるを謝す。(六六)

○十五日前田吉德本年出府に供奉せしむる家老等を命ず。(六六)

○二十日百姓の分高を行ふ時は殘餘の持高五拾石以上たるべき前令を恪守せしむ。(六六)

○廿一日大槻朝元の知行を加增せらる。(六七)

○廿七日前田吉德の女橋姫江戸に歿す。(六七)

二月 ○十一日富田織部の與力水谷孫丞竊盜の罪を以て取調べられ、後五箇山に流さる。(六八)

○十七日前田宗辰前髮を除く。(六八)

○廿九日大槻朝元、前田善左衞門の妹を迎へて妻とす。(六九)

五月 ○九日前田綱紀の十七回忌法會を天德院に執行す。(七一)

○十九日前田吉德の養女繁姫將に婚せんとするを以て能を演ぜしむ。(七五)

六月 ○八日先に前田綱紀の法會を執行したるを以て特赦を命ず。(七五)

七月 ○三日前田吉德の女斐姫金澤に生る。(七六)

○六日前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。(七六)

○十八日前田吉德江戸に着す。(七六)

閏七月 ○朔日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。(七六)

八月 ○十村の職務及び百姓の心得に關して諭す。(七七)

九月　○廿二日前田吉徳の養女繁姫金澤を發して江戸に向ふ。(七九)

十月　○領内に於ける米穀の減收を幕府に上申す。(八一)

十一月　○二日前田宗辰會津侯保科正容の女常姫に結納を贈る。(八二)
○十九日前田吉徳の養女繁姫盛岡侯の嫡子南部信貞に嫁す。(八六)
○十九日隱質を取ることを禁止す。(八九)

十二月　○朔日前田吉徳參議に任ぜらる。(九〇)
○三日大槻朝元その祿を加增せらる。(九二)
○四日凶作に拘らず租納皆濟せしを以て賞與として諸郡に貸米を行ふ。(九二)
○十一日前田吉徳登營して參議昇任を謝す。(九三)
○十三日前田吉徳參議昇任の口宣を受くるが爲に使を京都に赴かしむ。(九四)
○十五日前田吉徳使を日光山に遣して參議昇任を謝せしむ。(九六)
○十八日前田吉徳前名吉治を改む。(九七)
○廿一日前田重熙初めて諱を利安と稱す。(九七)
○廿八日遠田勘右衛門班を人持組に進めらる。(九七)

寛保元年　辛酉　皇紀二四〇一

正月　○元日前田吉徳初めて參議相當の禮を以て登營賀儀を行ふ。(一〇一)
○廿七日前田吉徳の參議に任ぜられたる口宣江戸に達す。(一〇二)

二月　○十九日前田吉徳參議拜任を祝する爲閣老等の臨邸を求む。(一〇三)
○廿一日前田吉徳初めて徳川吉宗直判の内書を受く。(一〇三)
○廿六日大槻朝元その祿を加增せらる。(一〇三)
○廿九日前田吉徳、徳川家宣の夫人逝去したるを以て登營奉弔す。(一〇四)

三月　○三日幕府諸侯を召して改元のことありたるを報ず。(一〇四)
○八日金澤寶圓寺附近に災あり。(一〇四)

四月　○十八日前田吉徳の女喜代姫將に婚せんとするを以て餞別の宴を行ふ。(一〇五)
○廿一日廣島侯淺野吉良の嫡子淺野宗恒、喜代姫に結納を贈る。(一〇五)
○廿二日喜代姫淺野宗恒に入輿す。(一〇六)

五月　○四日閣老等前田吉徳の招宴に臨む。(一〇七)
○六日前田吉徳、皇子の降誕を賀する爲金澤より使者を發せしむ。(一〇七)
○廿五日前田吉徳、參議拜任を祝する爲一門を請待す。(一〇八)

六月　○朔日前田重熙弓始の儀を行ふ。(一〇八)

〇十五日御歩小頭井關源左衞門等江戸にて駕籠に乘りたるを以て遠慮を命ぜらる。(一〇八)
〇二十日前田吉德の子八十五郎江戸に生る。(一〇九)
〇廿四日前田重靖の抱守山口彌兵衞の役儀を除き遠慮を命ず。(一一〇)

七月 〇廿七日前田吉德就封の暇を受く。(一一〇)
〇石川郡の十村等、百姓の風邪に罹りたる者多きを以て貸米を請ふ。(一一〇)

八月 〇廿二日前田吉德江戸を發して金澤に向ふ。(一一三)

九月 〇四日前田吉德金澤に着す。(一一三)
〇廿六日儒者兒島平十郎江戸より來り組外組に加へらる。(一一三)

十月 〇廿三日前田重教金澤に生る。(一一四)

十一月 〇八日藩の財政困難なるを以て儉約を專一とすべきを告ぐ。(一一四)
〇二十日十村等に命じて嘗て配下の組より藩に用立てたる銀子の利子を低減せしむ。(一一五)
〇廿二日百姓その作配する田地を悉く切高とすることを禁じ、必ずその幾分を剩さしむ。(一一六)

十二月 〇八日前田重靖生母の族奧泉金兵衞縮所に押籠めらる。(一一七)
〇二十日藤內をして死刑の者ある時その執行に當らしめん爲手當として鳥目を給す。(一一八)
〇二十日御馬廻組津田新六の子平馬足輕小頭を疵つけて自殺す。(一一九)

是歳 〇御算用場奉行等藩債償却の方法を上申す。(一一九)

寛保二年・壬戌 皇紀二四〇二

正月 〇朔日前田吉德金澤に於いて年頭の禮を行ひ諸士の拜賀を受く。(一二〇)
〇朔日辰の刻日蝕あり。(一二六)
〇二日前田吉德諸士の拜賀を受け諸初の儀を行ふ。(一二七)
〇三日前田吉德寶圓寺に詣で次いで諸士の拜賀を受く。(一三〇)
〇四日前田吉德乘初・射初・打初の儀を行はしめ諸士の拜賀を受く。(一三二)
〇五日前田吉德天德院に詣づ。(一三三)
〇六日前田吉德寺社方の拜賀を受く。(一三四)
〇七日諸士の出仕するもの年寄等に謁す。(一三六)
〇八日前田吉德神護寺の佛殿に詣づ。(一三六)
〇九日前田吉德天德院に詣づ。(一三六)
〇十二日前田吉德寶圓寺に詣で歸城の後十村・山廻等に謁を許す。(一三六)
〇十五日前田吉德小松城番等の拜賀を受く。(一三七)
〇十八日前田吉德城內の東照宮に詣づ。(一三九)
〇十九日鏡開の儀を行ふ。(一三九)

○廿二日大槻朝元その祿を加增せらる。(一四〇)
○廿三日徳川吉宗の贈れる鶴金澤に着す。(一四〇)
○晦日前田吉徳如來寺に詣づ。(一四〇)

二月 ○朔日前田吉徳小松城番等の拜賀を受く。(一四〇)
○朔日金澤城門の警固として大組足輕を當らしむることに改む。(一四一)
○廿四日取揚高の作除米上納の勵行を命す。(一四二)

三月 ○朔日加藤庄助の子宇右衛門、山本又九郎の小者を斬る。(一四二)
○廿五日田地の施肥を充分ならしむる爲諸郡に無利息貸銀を行ふべきを告ぐ。(一四三)

四月 ○十五日前田吉徳先に參議に任ぜられたるを祝し、能を興行して諸士に觀覽せしむ。(一四五)
○十八日繁姫及び喜代姫の婚儀と前田宗辰の結納との終れるを祝し能を演ぜしむ。(一四六)

五月 ○十一日前田吉徳能を興行し大槻朝元をして道成寺を演ぜしむ。(一四六)

六月 ○十四日佳節朔望に登城出仕する諸士の無作法を戒む。(一四六)
○廿五日和田源左衛門の若黨擅に殿中の能を觀たるを以て扶持を召放たる。(一四七)

七月 ○十三日前田吉徳金澤を發し參覲の途に就く。(一四七)
○廿五日前田吉徳江戸に着す。(一四八)
○廿八日前田吉徳登營して參覲の禮を行ふ。(一四八)

八月 ○九日前田宗辰歸國の暇を受く。(一四八)
○十一日前田宗辰登營して歸國の暇を賜はりたるを謝す。(一四九)
○廿三日前田宗辰歸國の際路を東海道に取るべきことを内示す。(一四九)
○廿四日前田吉徳、徳川吉宗の昇任等を賀するが爲に閣老の臨邸を求む。(一五〇)
○廿七日前田吉徳參覲交替の期を春季に改めんことを請ひて許さる。(一五一)

九月 ○二日前田宗辰江戸を發して東海道より歸國の途に就く。(一五一)
○十六日前田宗辰金澤に着す。(一五三)
○二十日前田吉徳夫人の三十三回忌法會を江戸傳通院に行ふ。(一五四)

十月 ○十七日青地藤太夫、大槻朝元の非違を本多安房守に彈劾す。(一五四)
○十九日閣老土岐丹後守等本郷邸に臨み前田吉徳の饗を受く。(一六一)
○廿二日前田吉徳、徳川吉宗の昇任等を祝する爲一門以下を饗す。(一六二)

十一月 ○十五日前田吉徳その子重熈に鎧を贈る。(一六三)

十二月 ○十五日大槻朝元その祿を加增せらる。(一六三)

是歳 ○淺野川大橋の長さを減じて改架す。(一六三)

寛保三年　癸亥　　皇紀二四〇三

正月 ○十一日淺香左京、京都詰中に失行ありしを以て閉門を命ぜらる。(一六四)

○十一日御算用者齋藤市太郎等指扣を命ぜらる。(一六五)

○廿七日前田重熙松平氏を冒す。(一六六)

二月 ○十一日徳川吉宗、前田吉徳に鶴を贈る。(一六六)

○十五日前田重熙初めて柳營に上り徳川吉宗に謁す。(一六七)

○廿九日前田吉徳の女保姫金澤に生る。(一六九)

三月 ○五日諸郡の田畑内檢地は改作奉行之を行ふことを定む。(一六九)

○十一日前田宗辰金澤を發して江戸に上る。(一七〇)

○十一日前田重熙朔望佳節に登營することを許さる。(一七〇)

○廿四日前田宗辰江戸に着す。(一七〇)

○廿七日閣老本多中務大輔駒込邸に臨み前田宗辰の出府を勞す。(一七一)

四月 ○朔日前田宗辰登營して徳川吉宗に謁す。(一七一)

○十三日前田吉徳柳營に於ける作法に就いて諭さる。(一七一)

○十三日前田吉徳就封の暇を受く。(一七二)

○十五日前田吉徳登營して就國の辭見す。(一七二)

○廿一日前田吉徳初めて江戸駒込邸の新殿に臨む。(一七三)

閏四月 ○朔日前田吉徳江戸を發し就封の途に上る。(一七三)

○四日土清水鹽硝藏の鹽硝爆發す。(一七四)

○十三日前田吉徳金澤城に歸着す。(一七四)

○廿五日諸士の名を掃部と稱するものを改めしむ。(一七四)

五月 ○十日金澤卯辰山の瀦水堤防崩壞す。(一七四)

○十五日婚禮を擧ぐるもの、家に石礫を投ずるを禁ず。(一七五)

○十九日前田重教卯辰山觀音院に宮參を行ふ。(一七〇)

○廿五日越中新川郡愛本の橋梁改架せられしを以て通行を許す。(一七六)

六月 ○五日前田吉徳、大槻朝元をして倶利伽羅長樂寺の後住を石動山東林院に命ぜしむ。(一七七)

○十一日徳川吉宗使を發して前田吉徳の暑中の安を訪はしむ。(一七七)

○十一日重ねて出合宿を營むことを禁ず。(一七九)

○十四日金澤に於いて諸士の行狀を愼むべき命を傳ふ。(一八〇)

○十四日物價を低廉ならしむべきを命ず。(一八一)

○十八日深尾安左衞門、遠田勘右衞門の若黨の無禮

を告めて之を傷つく。(一八二)
○十八日女を抱え置き人集めすることを禁ず。(一八三)
○廿二日豪雨の爲金澤の河川溢れ家を流し人を傷つく。(一八五)
○加賀河北郡池ヶ原村の田地龜裂し高低を生す。(一八六)

七月　○廿一日青地彌四郎藩の許可を得てその小者を殺害す。(一八七)
○廿七日前田土佐守、大槻朝元を前田宗辰に彈劾す。(一八七)

八月　○四日前田重靖等大槻內藏允の下邸に臨む。(一九〇)
○七日組外組臼井林左衛門、家來を手討して仕損じたるを以て逼塞を命ぜらる。(一九〇)

九月　○朔日前田土佐守政事に關して前田宗辰の諮問に答へ、再び大槻朝元を彈劾す。(一九一)
○十九日德川吉宗の昇任等を祝する爲金澤城にて能を興行し諸士に觀覽せしむ。(二〇三)

十月　○二日淺野川小橋下に一文橋を架するの許可を得んことを請願す。(二〇四)
○廿七日幕府より交附せられたる朝鮮人參二十根を金澤に送致す。(二〇六)

十一月　○彗星見はる。(二〇六)

十二月　○朔日前田吉德の子喜六郎金澤に生る。(二〇七)
○十日青地藤太夫、大槻朝元を青木新兵衛に彈劾す。(二〇七)
○十日前田吉德の女保姫歿す。(二一四)
○十五日大槻朝元その秩祿を加增せらる。(二一四)
○廿一日前田重熙敍爵して但馬守と稱す。(二一四)
○田地に施すべき肥料買入の方法を諭す。(二一五)

延享元年　甲子　皇紀二四〇四

二月　○朔日大阪より齎せる蠟の實を御算用場に納む。(二一九)
○五日昨今兩日前田光高の百回忌法會を天德院に取越執行す。(二二三)
○十一日前田光高百回忌法會終るを以て天德院等の僧を請待す。(二二三)
○廿六日本多安房守、前田吉德の諭告により末家本多賴母と輯睦す。(二二四)
○羽咋・鹿島二郡の十村等施肥に關する諮問に答申す。(二二七)

三月　○十一日改元の報江戸より金澤に達す。(二二九)
○十八日前田吉德の側室を大音厚固に嫁せしむ。(二三〇)
○十八日金澤大樋町に災あり。(二三〇)
○廿九日前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。(二三〇)

四月　○十一日前田吉徳江戸に着す。(二三二)
○十五日前田吉徳登營して參覲の禮を行ふ。(二三二)
○十九日會津侯保科正容の女常姫將に前田宗辰に入輿せんとするを以て道具を駒込邸に搬入す。(二三二)
○廿二日前田宗辰駒込邸に於て婚儀を擧ぐ。(二三三)
○廿九日前田宗辰歸國の暇を受く。(二三八)

五月　○朔日前田宗辰登營して歸國の賜暇を謝す。(二三九)
○二日前田宗辰會津侯保科正容の邸に臨む。(二四〇)
○十一日會津侯保科正容駒込邸に臨む。(二四〇)
○十六日前田宗辰初めて夫人の爲に能を興行す。(二四二)
○十九日前田宗辰その夫人と共に本郷邸に臨む。(二四三)
○廿五日前田宗辰江戸を發して金澤に向ふ。(二四三)

六月　○七日前田宗辰金澤に着す。(二四三)
○十日前田土佐守、前田宗辰に書を上り時事の益々非なることを告ぐ。(二四四)
○十四日前田重熙持鎗二本を携ふることを許さる。(二四五)
○廿三日御馬廻組頭原田又兵衛城門の勤番中酩酊するを以て蟄居を命ぜらる。(二四六)
○廿七日老臣前田土佐守月番並に加判の職を免ぜらる。(二四六)

七月　○十日前田土佐守その職を免ぜられたることを前田宗辰の侍臣に告ぐ。(二四七)
○金澤に風邪大に流行す。(二四八)

八月　○廿五日加藤清左衛門、前田利常の日光東照宮に獻納せる燈籠磨直監督の任に當れるを以て賞賜せらる。(二四八)

十一月　○十日本郷邸に於いて初めて猿廻に厩の祓を行はしむ。(二五〇)

十二月　○廿一日前田重熙前髮除去の儀を行ふ。(二五一)
○廿六日富山侯前田利隆卒去の報本郷邸に達す。(二五一)

延享二年　乙丑　　皇紀二四〇五

正月　○四日前田治脩金澤城に生る。(二五三)
○廿三日前田吉徳その子重熙と共に歸國するの許可を幕府に請ふ。(二五三)
○廿四日前田吉徳の子喜六郎家中大音氏を繼ぐ。(二五三)

二月　○十六日前田利和射初・乘馬初の儀を行ふ。(二五四)
○廿六日富山侯前田利幸家督を相續したるを以て本郷邸に來りて之を謝す。(二五四)

三月　○五日同國の遊行上人金澤玉泉寺より出發す。(二五五)
○十一日前田重靖金澤を發し廿三日江戸に着す。(二五五)

○十五日前田宗辰金澤を發し廿六日江戸に着す。(二五六)
○郡方に於いて勸進をなし又は之を周旋するを禁ず。(二五七)

四月
○朔日前田宗辰江戸着府の後初めて登營す。(二五八)
○十六日前田吉徳就封の暇を受く。(二五八)
○十八日前田吉徳登營して就封の辭見す。(二五八)
○十八日前田重熙就國の暇を受く。(二五九)
○廿一日前田吉徳及び重熙江戸を發す。(二六〇)

五月
○二日前田宗辰駒込邸に於いて能を演ず。(二六三)
○六日前田吉徳及び重熙金澤に着す。(二六三)
○七日前田吉徳病に臥す。(二六五)
○九日前田吉徳病むを以て恒例の天徳院參詣等を廢す。(二六五)
○十八日是日以後前田吉徳の病大に漸む。(二六五)

六月
○十一日能登鳳至・珠洲二郡に於ける職人の工料を定む。(二八二)
○十二日前田吉徳金澤城に卒す。(二八三)
○前田吉徳行狀。(二九一)
○十六日前田土佐守、前田吉徳の病中に於ける大槻朝元の非違を彈劾す。(二九四)
○十八日徳川吉宗、前田吉徳の病を訪ふ爲使者を發せしむ。(二九四)
○二十日徳川吉宗、前田宗辰に香銀を贈りて吉徳の卒去を弔す。(二九五)
○廿六日前田吉徳の葬儀を寶圓寺に行ひ、次いで野田山の塋域に移葬す。(二九五)

七月
○朔日前田宗辰の本多安房守に與へて城中の留守を嚴にせしむるの書金澤に着す。(二九九)
○朔日是日以降金澤寶圓寺に於いて前田吉徳の中陰法會を執行す。(三〇〇)
○二日前田宗辰の政務に關し老臣に諭したる書を披露す。(三〇一)
○二日本日より江戸廣徳寺に於いて前田吉徳の中陰法會を執行す。(三〇二)
○二日前田重熙將に江戸に發向せんとするを以て道中奉行等を命ず。(三〇三)
○二日前田宗辰の生母を淨珠院と稱せしむ。(三〇三)
○六日前田宗辰使者を金澤に發して老臣に出府を命ず。(三〇三)
○八日前田吉徳の卒去以後月額を剃らざる日數を定む。(三〇四)
○十五日前田重熙金澤を發し廿六日江戸に着す。(三〇四)
○十五日前田宗辰駒込邸より本郷邸に移る。(三〇五)
○廿四日金澤寶圓寺に於いて前田吉徳の四十九日忌

の法會を繰上げ執行す。(三〇六)
○廿五日前田宗辰登營して家督相續の命を受く。(三〇六)
○前田吉徳の側室等落飾す。(三〇九)

八月

○二日金澤寶圓寺及び江戸廣徳寺に於いて前田吉徳の法會を執行す。(三〇九)
○二日金澤東本願寺別院に前田吉徳の追弔法會を行ふ。(三一〇)
○三日金澤に於いて諸士に前田宗辰の家督相續を命ぜられたることを告ぐ。(三一〇)
○三日大槻朝元表向の勤務に轉じ朔望登城を命ぜらる。(三一一)
○四日前田宗辰佐渡守の稱を改めて加賀守と稱す。(三一一)
○十日前田宗辰書を前田土佐守に與へてその言行を愼むべきことを諭す。(三一二)
○十一日前田宗辰入國の際諸士の行裝を華美ならしめざるべきを命ず。(三一四)
○十一日前田宗辰登營して先に家督相續を命ぜられたるを謝す。(三一五)
○十三日金澤の町民前田宗辰の家督相續を祝して盆正月を行ふ。(三一七)
○十四日前田宗辰當分就封せざることに決す。(三一七)
○十六日越後市振の民、越中との領境に關し協議せんことを求む。(三一八)
○廿二日前田宗辰當分就封せざるを以て在江戸の諸士を減ず。(三二〇)

九月

○十三日幕府前田吉徳の女總姫を富山侯前田利幸に嫁せしむることを許す。(三二一)
○十八日前田宗辰諸場・諸役人に儉約の勵行を命ず。(三二一)

十月

○朔日前田宗辰登營して徳川吉宗・家重の代替を祝す。(三二三)
○十五日前田宗辰老臣等に書を與へ、大組足輕の職務に就いて諭示す。(三二三)
○十八日前田宗辰左近衞權中將に任ぜらる。(三二三)
○廿八日前田吉徳の近習たりし遠田勘右衞門隱居を命ぜらる。(三二四)
○廿九日前田宗辰中將轉任の口宣等受領の爲使者を京都に發せしむ。(三二五)

十一月

○二日前田宗辰登營して徳川家重の將軍宣下の儀に列す。(三二六)
○二日儒者由美希賢新知二百石を以て召抱えらる。(三二八)
○十三日二條宗基本郷邸に臨む。(三二九)
○十五日徳川家重自ら將軍宣下を祝して物を前田宗辰に賜ふ。(三三〇)
○廿五日越中新川郡と越後との境論解決す。(三三〇)

〇晦日前田宗辰夫人逝去す。（三三一）
〇前田宗辰江戸に在勤する諸士の華美を戒む。（三三三）

十二月　〇九日前田宗辰夫人の葬儀を行ふ。（三三三）
〇十二日前田宗辰夫人の中陰法會を江戸廣德寺に執行す。（三三六）
〇廿一日德川家重、前田宗辰に鶴を贈る。（三三六）

延享三年　丙寅　皇紀二四〇六

正月　〇七日前田宗辰初めて人日の登營出仕を許さる。（三三七）
〇十一日富山侯前田利幸結納を前田吉德の女總姬に贈る。（三三八）
〇十一日前田宗辰太刀仕初の儀を行ふ。（三四〇）
〇廿七日前田宗辰、德川家重の將軍宣下を祝する爲閣老を本鄕邸に招請す。（三四〇）

二月　〇十四日金澤淺野町に災あり。（三四一）

三月　〇朔日前田宗辰の家督相續と中將陞任祝賀の爲物を獻じたる諸士に書を與ふ。（三四二）
〇八日五ヶ年間儉約の令を傳へ、諸士も亦之を勵行すべきを告ぐ。（三四二）
〇十八日總姬將に富山侯前田利幸に入輿せんとするを以て之を饗す。（三四五）
〇江戸詰諸士の從者を減ずべきことを令す。（三四五）
〇巡見上使將に來らんとするを以て金澤に於いて通行の道筋等を議す。（三四八）

四月　〇朔日女二宮の薨去を弔するが爲江戸より使者を發せしむ。（三四九）
〇朔日儉約實行につき享保十四年の令に基づき更に細目を示す。（三四九）
〇二日前田土佐守儉約の實行に關して書を前田宗辰に上る。（三五七）
〇二日總姬富山侯前田利幸に入輿す。（三五八）
〇四日富山侯前田利幸本鄕邸に聟入の儀を行ふ。（三五八）
〇六日前田宗辰富山侯前田利幸の邸に舅入の儀を行ふ。（三五九）
〇十六日儉約勵行につき一門間に使者の派遣進物の贈答を廢せしむ。（三六一）
〇十六日幕府前田治脩の出家を許す。（三六一）
〇廿三日幕府の巡見上使金澤に着す。（三六二）
〇廿五日堀多仲太その父大小將組堀治部左衞門等を殺害す。（三六二）
〇廿八日前田治脩越中古府勝興寺の住職に定めらる。（三六四）
〇廿八日儉約につき當分一門來邸の際その從者を饗應せざることに改む。（三六五）
〇廿八日領內の鄕村高辻帳を幕府に上る。（三六五）
〇町民に對し儉約の實行を令す。（三六六）

○小堀左兵衛等三人に儉約方御用を命ず（三六七）
○先に越後と加賀藩領越中との境界の爭議交渉に關し功ありしものを賞す。（三六八）

五月
○十二日百姓の行狀に關して令す。（三六九）
○十二日犯罪に對する刑罰の裁量は寶永以前の例に據るべきことを令す。（三七二）
○廿六日京都紫野芳春院に前田吉德の位牌を置き石塔を建つることを許す。（三七三）

六月
○六日前田治脩名を犀丸と稱す。（三七三）
○七日能登越中に砂を降らす。（三七四）
○八日前田宗辰諸士の諱として用ふべからざる文字を示す。（三七五）
○十三日金澤新堅町に災あり。（三七六）
○十八日前田宗辰、有栖川宮の養女と婚約したることを告ぐ。（三七六）
○廿七日諸士の困窮を救濟する爲除知を以て上納及び借銀返濟等に當てしむ。（三七七）
○能登に於ける幕府領にして加賀藩に預地となり居るもの、納租の慣習に關し上申す。（三七九）

七月
○朔日前田宗辰老臣等に政務を愼むべき内意を告ぐ。（三八一）
○二日大槻朝元を本多安房守の邸に招きて蟄居を命す。（三八二）
○四日前田宗辰武術の師範等に賞賜す。（三八五）
○廿五日前田宗辰寶生大夫より翁傳授を受く。（三八五）

八月
○四日清水次郎太夫不行狀を以て能登島に流さる。（三八五）
○五日貸銀裁許堀六郎左衛門の職を免じ遠慮を命す。（三八六）
○十二日藩侯に對する獻上物の手續を簡易にすべき令金澤に達す。（三八七）
○廿六日前田宗辰家督相續を祝する爲閣老等を招請す。（三八八）

九月
○二日前田宗辰の命によりて國境に關する諸規定の寫を上つる。（三八八）
○二十日前田吉德夫人の廿七回忌法會を江戸傳通院に執行す。（三九〇）
○二十日前田宗辰家督相續を賀する爲一門を招請す。（三九一）

十月
○十一日前田宗辰、德川家重より領國の判物を受く。（三九一）
○廿五日前田宗辰、將軍宣下及び己の家督相續を祝する爲再び一門を招待す。（三九二）
○廿七日御馬廻組玉木彦左衛門その妻及び姦夫を殺害す。（三九三）

十一月
○二十日越中高岡の瑞龍寺火災に罹る。（三九六）
○廿七日德川家重鶴を前田宗辰に贈る。（三九八）

十二月
○七日前田宗辰の病狀稍漸む。（三九九）

○八日前田宗辰卒し、未だ喪を發せず。(三九九)
○九日德川家重使を遣はして前田宗辰の病を問はしむ。(四〇一)
○十日前田重熙を以て養嗣子とせんとの願書を閣老に提出す。(四〇三)
○十一日德川家重再び使を遣して前田宗辰の病を訪はしむ。(四〇六)
○十二日前田宗辰卒去を公表す。(四〇八)
○前田宗辰行狀。(四一四)
○十四日德川家重、前田宗辰の卒去を弔して香銀を贈る。(四三二)
○十四日前田宗辰罹病の報金澤に達す。(四三二)
○十六日前田宗辰危篤の報金澤に達す。(四三三)
○十七日金澤に於いて諸士に前田宗辰卒去のことを告ぐ。(四三三)
○十九日金澤に於いて前田重熙が前侯の繼嗣たるべきことを告ぐ。(四三四)
○廿四日葬儀に與る諸士の服裝を定む。(四三五)
○廿四日家中諸士の遠慮に關する規程を定む。(四三六)
○廿五日前田宗辰の武術師範たりし諸士に賞賜す。(四三七)
○廿七日前田重熙政務に關する心得を老臣に示す。(四三七)
○廿八日前田宗辰の靈柩江戶を發す。(四三八)

延享四年　丁卯　　皇紀二四〇七

正月

○八日前田重熙火災に際して出馬する時の行列を定む。(四四四)
○十二日今明兩日前田宗辰の中陰法事を江戶廣德寺に行ふ。(四四五)
○十七日前田宗辰の靈柩金澤に着す。(四五二)
○十七日前田宗辰の卒後初めて與力以上の諸士に月代を剃らしむ。(四五二)
○二十日前田宗辰の葬儀を行ふ。(四五三)
○廿六日前田重熙家督相續を命ぜらる。(四五三)
○廿九日前田重熙、諸士に先代の家法を恪守すべきことを諭す。(四五五)

二月

○四日前田重熙但馬守を改めて加賀守と稱す。(四五六)
○十二日前田重熙登營して家督相續を命ぜられたるを謝す。(四五六)
○十九日前田重熙正四位下左近衛權少將に叙任し、前の諱利安を改む。(四五八)
○廿三日能美郡小松町に災あり。(四五九)
○廿五日前田重熙任官の口宣受領の爲に使者を江戶より發せしむ。(四五九)

三月

○四日前田重熙諸士の子弟を庶民とする事に關して命す。(四六〇)
○廿五日山崎只右衛門能登島に流さる。(四六〇)

四月 ○朔日前田重熙弟勢之佐に利和の諱を與ふ。（四六一）
○四日前田重熙家督相續を祝する爲閣老等を招請す。（四六一）
○十九日加賀・越中の鳥見等に前田重熙の入封を國境に迎ふべきを令す。（四六二）
○十五日前田重熙就封の暇を受く。（四六三）
○十九日前田重熙登營して就封の辭見す。（四六四）
○廿五日前田重熙江戸を發し就封の途に着く。（四六五）

五月 ○六日前田重熙金澤に着す。（四六六）
○十日村御印の交付を改作奉行の取扱とすべきことを令す。（四六七）
○十一日前田重熙その弟嘉三郎に利見の諱を與ふ、（四六八）
○十六日原宗兵衞の小者金澤十間町に於いて斬らる。（四六八）
○金澤大乘寺及び鹿島郡永光寺の所屬本寺を定めらる。（四六八）

六月 ○十一日寶圓寺に於いて今明日前田吉德の三周忌法會を執行す。（四六九）
○十八日前田重靖の抱守才所三郎太夫等遠慮を命ぜらる。（四六九）
○十九日前田重熙石川郡粟ヶ崎及び宮腰を巡見す、（四六九）
○廿五日加賀に毛髮を降らす。（四七二）
○廿九日前田重熙金澤の郊外卯辰山を巡見す。（四七二）

七月 ○十一日前田重熙、向後毎月父兄の忌日に當り菩提寺に參詣すべきを告ぐ。（四七三）
○十八日前田重熙射手の技を覽る。（四七四）
○廿四日高岡町奉行澤田治兵衞等知行を召放さる。（四七五）
○廿八日前田重熙石川郡打木濱に散策す。（四七六）
○晦日前田重熙徒士の遊泳の技を覽る。（四七六）
○前田重熙老臣の馬術を覽る。（四七六）

八月 ○六日前田重熙金澤の郊外大乘寺山に散策す。（四七七）
○十三日前田重熙河北郡黑津舟に散策す。（四七七）
○十五日前田重熙儒者由美希賢等を召して作詩を命ず。（四七七）
○十九日金澤淺野川及び犀川漲溢す。（四七七）
○廿八日銀子借替擔保の爲に金澤城内獅子土藏に貯ふる慶長小判を出さしむ。（四七八）
○領國及び江戸・京・大阪に於ける藩の經費を豫算す。（四七八）
○前田重熙、中村典膳を召して綱紀の世の政務を問ふ。（四九二）

九月 ○六日前田重熙使を京都に發して桃園天皇の卽位を賀し奉らしむ。（四九三）
○十九日前田重熙金澤城内を巡見す。（四九三）
○晦日不作なるを以て諸士の本納拂米を見合すべき

十月 ことを命す。(四九三)
〇風邪大に流行す。(四九四)
〇四日諸士の本納拂米を許す。(四九四)
〇十日前田重熙老臣を蓮池亭に會して觀楓の宴を開く。(四九五)
〇十七日遠田勘右衛門等知行の一部を上りて藩費を補はんことを請ひて許さる。(四九七)
〇十九日領内不作なるを以て引免せし額を幕府に屆出づ。(四九七)
〇二十日前田重熙銃手の射的を覽る。(四九八)
〇廿一日前田重熙金澤城内を巡視す。(四九八)
〇大聖寺侯前田利道の求に應じて金子を調達せしむ。(四九九)

十一月 〇四日村御印再交付の請求は從前の如く郡奉行の取扱とすべきことを令す。(四九九)
〇九日諸士の妾を妻とすることを禁す。(五〇〇)
〇十一日今明日天德院に於いて前田宗辰の一周忌法會を執行す。(五〇一)
〇廿八日本日より江戸に於いて前田宗辰夫人の三周忌法會を行ふ。(五〇二)

十二月 〇四日儉約の爲嚴に音信・贈答・餞別を廢せしむ。(五〇二)
〇十八日大槻朝元を流刑を命じ當分成瀨内藏助の邸に禁錮せしむ。(五〇三)

〇廿九日德川家重、前田重熙に贈る所の鶴金澤に着す。(五〇六)

寛延元年 戊辰　皇紀二四〇八

正月 〇十日金澤卯辰妙泰寺燒失す。(五〇七)

二月 〇朔日是日以降三日まで前田利家百五十回忌法會を金澤寶圓寺に行ふ。(五〇七)
〇十一日前田重熙その入國を祝するが爲め是日以降屢能を演じて士庶に觀覽せしむ。(五〇八)
〇二十日大槻朝元の兄大槻七郎左衛門病歿す。(五一四)
〇廿二日前田重熙小將組の士の風俗を改むべきことを諭す。(五一八)

三月 〇朔日前田重熙高松侯松平賴泰の女と緣組を内約す。(五二〇)
〇七日前田重熙金澤を發して參覲の途に就く。(五二〇)
〇二十日前田重熙江戸に着す。(五二一)
〇廿八日前田重熙登營して參覲の禮を行ふ。(五二一)

四月 〇六日金澤に於て諸士に前田重熙の江戸に着せしことを告ぐ。(五二二)
〇十日朝鮮聘使を迎ふる爲馬匹・馬醫等を金澤より遠州舞坂に向ひて發せしむ。(五二三)
〇十七日前田重熙朝鮮人江戸着の際淺草日音院に於いて觀覽すべきことを告ぐ。(五二三)
〇十八日大槻朝元を配所越中五ヶ山に赴かしむ。(五

三)

〇廿九日徳川家繼の三十三回忌法會を金澤如來寺に行ふ。(五二四)

五月 〇八日今明兩日金澤天德院に於て前田綱紀の二十五回忌法會を行ふ。(五二四)

〇十六日大槻朝元の一門前田修理等遠慮を免除せらる。(五二五)

〇廿一日前田重熙淺草日音院に於いて朝鮮人の來聘を觀る。(五二六)

〇廿八日前田重熙朝鮮人の曲馬を宗對馬守邸に見る。(五二七)

六月 〇朔日前田重熙登營して朝鮮聘使謁見の儀に參列す。(五二七)

〇朔日淨珠院等淺草日音院に於いて朝鮮人の登城を觀る。(五二八)

〇三日前田重熙登營して朝鮮人の曲馬を觀る。(五二九)

〇五日淺野川・犀川暴溢す。(五二九)

〇八日本鄉邸内の與力小屋より失火す。(五三〇)

〇十三日楊姫等淺草の町家に於て朝鮮人の江戸出發を觀る。(五三一)

〇廿一日前田吉德の側室眞如院その子八十五郎と共に江戸を發し金澤に向ふ。(五三二)

〇廿五日前田重熙と高松侯松平賴泰の女との婚約許可せらる。(五三三)

七月 〇朔日前田重熙登營して朝鮮より献上せし鷹を下賜せらる。(五三四)

〇十二日金澤に隕星あり。(五三四)

〇十七日前田吉德の側室眞如院を金谷御殿に幽す。(五三五)

〇十八日前田重熙登營して改元の令を傳へらる。(五四二)

〇廿七日足輕井村源兵衛、眞如院の密謀を助けしを以て禁牢に處せらる。(五四二)

八月 〇十三日前田光高の子萬菊丸の百年忌法會を江戸廣德寺に營む。(五四三)

〇十六日前田重熙家督相續祝賀の爲本鄉邸に能を演ぜしむ。(五四三)

〇廿二日前田土佐守、眞如院等の處分に關して前田重熙に意見を上申す。(五四四)

九月 〇六日浪人高桑政右衛門大槻朝元の配所に赴かんとしたるを以て禁牢に處せらる。(五五四)

〇十二日大槻朝元配所にて自殺す。(五五六)

〇廿九日大槻朝元の自殺に關し小松屋佐七を逮捕す。(五六五)

十月 〇二日大槻朝元の母惠照院その他禁牢せらる。(五六六)

〇七日園田兵太夫御預に處せらる。(五六六)

〇七日園田兵太夫の母法山院禁牢に處せらる。(五六七)

〇十一日幕府の寺社奉行大岡越前守、往年白山に關

する加賀・越前交渉の記錄を徵す。（五六八）
○十三日老女岡田、金谷御殿にて自殺す。（五六八）
○十四日眞如院の侍女淺尾江戸より金澤に着す。（五六八）
○十六日大槻長太夫その組頭に召預となる。（五六九）
○廿八日江戸に於て前田利和附御横目足輕荒木吉郎太夫金子を詐取したるを以て入牢を命ぜらる。（五六九）

十一月 ○十一日今明兩日金澤天德院にて前田宗辰の三回忌法會を行ふ。（五七〇）

十二月 ○六日前田綱紀の女榮君薨す。（五七一）
○六日德川家重、前田重熙に鶴を贈る。（五七二）
○廿一日前田重熙左近衞權中將に陞任を命ぜらる。（五七二）

寛延二年　己巳　皇紀二四〇九

正月 ○朔日前田重熙登營して年頭を祝す。（五七三）
○朔日金澤に於いて諸士に前田重熙の昇任を披露す。（五七三）
○朔日江戸に於いて半田權佐の若黨等騷擾す。（五七四）
○朔日人持組永井多宮の息傳七亂心して人を傷つく。（五七五）
○七日前田重熙初めて人日に登營す。（五七五）
○七日奧村助右衞門・本多主殿二人叙爵を命ぜられたる報金澤に達す。（五七六）

○七日前田重熙を呼ぶに中將の官名を以てすべきを告ぐ。（五七七）
○十五日使を京都に發して二條吉忠夫人榮君の薨去を弔せしむ。（五七八）
○廿三日前田重熙先に中將に任ぜられしを以て口宣受領の使者金澤を發す。（五七八）
○廿五日使を日光東照宮に遣はして前田重熙の昇任を謝せしむ。（五七八）
○改作奉行より諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻の執務に關して戒告す。（五七九）

二月 ○十一日奧村丹後守、本多安房守その叙爵を前田重熙に謝する爲金澤を發す。（五八一）
○十五日前田吉德の側室眞如院歿す。（五八二）
○廿八日前田重熙會津侯保科容貞を本鄉邸に招請す。（五八三）
○猥に百姓の金澤等に出でゝ奉行を爲すことを禁ず。（五八三）

三月 ○朔日前田重熙、三條西實稱を下谷廣德寺の旅宿に訪問す。（五八五）
○十一日前田重靖金澤を發して江戸に向ふ。（五八六）
○廿一日前田利和に屬する留書荒木吉郎太夫死刑に處せらる。（五八六）

四月 ○朔日前田重熙脚疾に罹るを以て登營の際杖を用ふるを許さる。（五八六）

○十一日前田重熙脚疾を以て就國賜暇の上使を受くる能はざることを屆出づ。(五八七)

○十三日前田利和金澤に歸り石川郡上野の別邸に錮せらる。(五八七)

五月 ○十八日前田重熙再び脚疾を望月三英に診せしむ。(五八八)

○十八日河北郡三坂附近に降雪あり。(五八八)

○廿三日前田重熙の脚疾大に輕快す。(五八九)

○廿五日大聖寺侯前田利道就封の途金澤に宿泊す。(五八九)

○廿八日諸郡百姓の宿方に住するものに限り請負業を營むことを許す。(五八九)

六月 ○十七日新番組菊田與左衞門追剝の容疑を得て自殺す。(五九〇)

○廿四日江戸よりの飛脚金澤に着し前田重熙の病状を告ぐ。(五九二)

○諸郡の川入山崩等に檢地を行ふべきことを告ぐ。(五九二)

七月 ○二日藩醫佐々伯順江戸に着し前田重熙の病を診す。(五九三)

○七日犀川・淺野川暴溢す。(五九四)

○十一日徳川家重使を遣はして前田重熙の病状を問はしむ。(五九四)

○大槻朝元の長子直之助病歿す。(五九四)

八月 ○朔日幕府に太刀を獻上する使者の格式を改む。(五九五)

○五日前田重熙、大庭探元をして病を療せしめ爾後快方に向ふ。(五九五)

○廿一日大槻朝元の次子永次郎病歿す。(五九六)

○廿二日小松に於いて城番三田村左京の用人水島太郎左衞門、給人野口助太夫と鬪諍す。(五九六)

九月 ○六日前田重熙復望月三英をして病を診せしめ本年の就封を止む。(五九七)

十月 ○廿一日大槻朝元の餘黨淺尾を殺害せしむ。(五九七)

○廿五日藩の政務に關する費用は從來の半額に節減すべきを命ず。(五九八)

○廿六日前田重熙の脚疾輕快し服藥を止む。(五九九)

○諸郡檢地の際に要する繩張人を定むべきことを命ず。(五九九)

十一月 ○四日金澤に於いて諸士の風俗華美なるを戒む。(六〇〇)

○四日前田重熙の脚疾全快を祈る爲江戸より使を伊勢大神宮及び北野天滿宮に發せしむ。(六〇一)

○十五日前田重熙江戸詰の小將組及び聞番の風儀を改むべきことを諭す。(六〇一)

寛延三年　庚午　皇紀二四一〇

十二月 ○三日徳川家重、前田重熙に鶴を贈る。(六〇四)

正月 ○朔日前田重煕病後なるを以て登營拜賀を廢す。(六〇四)
○二十日前田吉德の女喜代姫歿す。(六〇四)
二月 ○朔日前田重煕、徳川家重の初老を祝して物を献る。(六〇六)
○五日金澤觀音山崩壞す。(六〇六)
○十日郡奉行等、能美郡今江村源助がその女を嫁せしむる際不都合ありたるを以て十村の職を褫奪すべきことを議す。(六〇七)
○十四日前田重煕老臣に書を與へて士風の荒怠を戒匡救の急を諭す。(六〇八)
○廿七日前田重煕の病癒え床拂を行ふ。(六一三)
○晦日宿方の馬借困難するを以て家中の諸士等にその非行を戒む。(六一三)
三月 ○二日前田重煕平尾邸に散策す。(六一六)
○十九日大聖寺侯前田利道參覲の途次金澤に着す。(六一七)
四月 ○二日前田重煕の病癒えたるを以て隔日御居間書院に政務を見る。(六一七)
○二十日徳川家光の百回忌法會を金澤神護寺に執行す。(六一八)
○廿五日前田重煕病癒えたるを以て閣老を歷訪す。(六一九)
五月 ○十五日前田重煕病後初めて登營し徳川家重に謁す。(六一九)
○十八日前田重煕江戸より使を發して櫻町上皇の崩御を奉悼す。(六二〇)
○廿二日前田重煕幕醫竹田長春院を招きて之を饗す。(六二一)
○廿六日前田重煕今年初秋を以て就封の暇を賜はらんことを請ふ。(六二一)
六月 ○八日天德院の靈廟に前田宗辰の畫像を掲ぐ。(六二二)
七月 ○二日前田重煕病氣平癒を祝し能を演ぜしむ。(六二三)
○廿七日前田重煕就封の暇を受く。(六二三)
○廿八日前田重煕登營して就封の辭見す。(六二三)
八月 ○十一日前田重煕江戸を發して歸國の途に上る。(六二四)
○十三日金澤に於て御近習頭武田杢左衛門等四人指扣を命ぜらる。(六二四)
○十八日珠洲郡小木村の百姓牛舌判金を發掘す。(六二五)
○廿二日前田重煕金澤に着す。(六二五)
○廿三日先に徳川家光の百回忌法會を擧げたるを以て赦を行ふ。(六二六)
○大槻朝元の母惠照院病歿す。(六二六)
九月 ○四日前田重煕高岡瑞龍寺にある前田利長の墓に年中四次代參を派すべきことを定む。(六二七)
○十四日前田重煕諸士の窮乏を救ふ方法を講ぜし

む。(六二七)

十月　○廿一日前田重熙初めて金澤の郊外に放鷹す。(六二九)
○廿八日前田重熙家中の士の風儀を改むべきことを
諭す。(六三〇)

十一月　○六日前田吉德の養女弓姫歿す。(六三三)
○廿五日堀久五郎等在江戸中非行ありたるを以て役
儀を除き遠慮を命ぜらる。(六三三)

十二月　○朔日德川家重の使金澤に着して前田重熙に鶴を贈
る。(六三四)
○十一日金澤の城下に於て猪を捕獲す。(六三四)
○十二日前田重熙自今放鷹を廢すべきことを告ぐ。
(六三四)
○廿五日前田吉德の女斐姫二條宗基に縁組を許さ
る。(六三五)
○廿七日富山侯前田利幸の江戸邸火を失す。(六三六)
○廿八日明年頭に於て藩侯に供奉する新番並に御歩
の綿衣を着することを定む。(六三六)

寶暦元年　辛未　皇紀二四一一

正月　○朔日前田重熙金澤に於て諸大夫裝束の拜禮を受
く。(六三七)
○三日前田重熙金澤寶圓寺に詣でゝ轉倒す。(六三七)
○十七日前田重熙、中村佺安をして病を診せしむ。
(六三七)
○廿一日進物裁許與力等私曲の嫌疑あるを以て指扣
を命ぜらる。(六三八)
○廿六日町人の妻女等紅裏の絹服を着すべからざる
を令す。(六三八)
○廿九日降雪赤色を帶ぶ。(六三八)

二月　○朔日十村等柳之間に於て前田重熙に拜謁を許さ
る。(六三九)
○八日前田吉德の側室壽清院歿す。(六四〇)
○廿四日前田重熙諸醫をして病を診せしむ。(六四一)

三月　○十六日前田重熙乘馬にて蓮池庭に遊ぶ。(六四一)
○廿一日前田重熙今日より大庭探元の調劑を服す。
(六四一)

四月　○朔日今秋參覲の際隨行の家老を命ず。(六四二)
○二日前田重熙當分隔日に居間書院に出でゝ政務を視
ることを告ぐ。(六四二)
○十七日前田重熙城内東照宮社參の服裝に就いて令
す。(六四二)
○廿五日地震により下街道の往來閉塞す。(六四二)
○廿六日前田重熙、放鷹によりて獲たる雁を德川家
重に贈る爲脚夫を發す。(六四四)

五月　○七日前田重熙自今日々居間書院に於て政務を見
る。(六四四)
○十九日前田重熙近習頭の士の勤務に關して諭す。
(六四五)

六月 ○朔日大聖寺侯前田利道金澤城に登る。(六四八)

○七日大槻朝元の餘類園田兵太夫病歿す。(六四八)

○十日本年參觀の際木曾路通行を幕府に屆出でたる報金澤に達す。(六四九)

○十二日昨今兩日金澤寶圓寺に於いて前田吉德の七回忌法會を營む。(六四九)

○十五日二條宗基の使者金澤城に於いて斐姫に結納を贈る。(六四九)

○十六日德川吉宗罹病の報金澤に達す。(六五〇)

○十八日前田吉德追福の法會終るを以て諸寺の住僧を金澤城に招請す。(六五〇)

○十九日諸士の困窮を救濟する爲藩より借銀を許す。(六五三)

○廿六日德川吉宗薨去の報金澤に達す。(六五七)

閏六月 ○十四日御徒木村文左衞門江戶より逐電す。(六五七)

○十五日諸士に儉約の勵行を命ず。(六五八)

○十九日前田重熙、富山・大聖寺藩の者を加賀藩の士の養子とする場合の取扱を告ぐ。(六五九)

○廿一日前田重熙金澤を發し江戶に向ふ。(六六〇)

七月 ○七日前田重熙江戶に着す。(六六一)

○十日前田重熙前將軍德川宗吉の遺物配分を受く。(六六一)

○十日能登諸浦に產する煎海鼠を鹿島郡所口町鹽屋清五郎に賣渡すべきを命ず。(六六二)

○廿八日前田重熙病を以て參覲謁見の禮を缺き使者を派して物を德川家重に上る。(六六四)

○一季居奉公人の給銀を定む。(六六四)

八月 ○朔日諸士の風俗を戒むる爲享保十四年の令を新にす。(六六八)

○大地新八郎上書して學問の要を述ぶ。(六六九)

九月 ○六日富山侯前田利幸中仙道より歸國の途金澤を過ぐ。(六七一)

○十四日前田重熙諸士救濟の事に關して老臣に書を與ふ。(六七三)

十月 ○朔日前田重熙參覲の後初めて登營す。(六七三)

○廿九日宗旨替及び寺替に關し舊令を守るべきを命ず。(六七四)

十一月 ○三日前田重熙使者を幕府に派して改元を賀せしむ。(六七五)

○十七日先に改元の事ありたることを金澤の諸士に告ぐ。(六七六)

○十八日前田重熙淨珠院を招請し歌舞伎を觀覽に供す。(六七六)

○廿九日昨今兩日江戶廣德寺に於いて前田宗辰夫人の七回忌法會を營む。(六七七)

十二月 ○四日德川家重使者を以て前田重熙の寒候を問はしむ。(六七八)

○五日大聖寺侯前田利道參州吉田橋架設の助役を命

せらる。(六七八)

○十一日取次役のもの、勤方を諭し併せて江戸詰人の扶持方を復舊すべきことを告ぐ。(六七八)

○十一日餌指等御鷹場に於いて八寸以上の串を用ひて捕鳥したるを以て處罰せらる。(六七九)

○十七日前田重靖松平氏を冒すことを許さる。(六八〇)

○廿八日前田重靖叙爵して上總介と稱す。(六八〇)

寶曆二年　壬申　皇紀二四一二

正月　○朔日前田重熙・重靖共に登營して年頭を祝す。(六八二)

○六月前田重熙火事場に於ける作法に就き諭示す。(六八三)

○七日前田重靖登營して先に叙爵せられしことを謝す。(六八四)

○十三日金澤に於て諸士に前田重靖の先に叙爵せられたることを告ぐ。(六八四)

二月　○十五日前田重靖初めて月次登營を行ふ。(六八五)

○六日江戸に於て横井元泰等不謹愼なるを以て處分せらる。(六八五)

○十八日前田重靖叙爵の口宣を受く。(六八六)

○廿五日菅公八百五十年祭を京都北野に行ふを以て刀劍・白銀等を獻納す。(六八七)

三月　○十一日前田重熙本郷邸に高松侯松平賴恭を招請す。(六八九)

○十八日大聖寺侯前田利道參覲の途金澤に宿す。(六九〇)

○廿七日前田重熙、高松侯松平賴恭の邸に臨む。(六九〇)

○廿九日金澤卯辰の本光寺燒失す。(六九一)

○御算用者西澤甚五左衛門江戸より逐電す。(六九一)

四月　○十五日前田重熙御目見坊主等をして狂言を學ばしむ。(六九二)

○十七日前田重熙、德川家治の紅葉山社參に供奉す。(六九二)

○石川郡佐那武社の請により神事能執行の費用を補給す。(六九二)

○前田重熙脚疾を患ふるを以て就封の延期を請ひて許さる。(六九三)

五月　○十四日老臣長九郎左衛門の醫小林意仙遠慮を命ぜらる。(六九三)

○十六日前田重熙の脚疾可ならざるを以て是日以後江戸の諸醫を招き診せしむ。(六九四)

○廿三日宗門奉行等一向宗及び日蓮宗を、淨土眞宗及び法華宗と稱すべからざることを議す。(六九五)

○廿六日本日以降大乘寺に於て道元禪師五百回忌を執行す。(六九六)

六月　○朔日大聖寺侯前田利道の助役を命ぜられたる三河

吉田の橋梁成れるを以て賞を受く。(六九六)
○二日秋田侯佐竹義眞、前田吉德の女楊姫に結納を贈る。(六九六)
○四日組外組中村久兵衛私曲を以て御預となる。(六九七)
○七日大小將組鈴木萬兵衛私曲を以て御預となる。(六九八)
○二十日金澤神護寺に於て德川吉宗の一周忌を執行す。(七〇〇)
○廿六日寄合組小塚監物遁世せんことを寺社奉行に出願す。(七〇〇)
○廿七日前田重靖袖留の儀を行ふ。(七〇一)

七月 ○朔日前田吉德の女楊姫秋田侯佐竹義眞に入輿す。(七〇一)
○五日石川郡宮腰浦に於て老臣長九郎左衛門火矢・大筒の發射を練習せしむ。(七〇二)
○廿五日前田重熙の脚疾尚癒えざるを以て再び就封の延期を請ひて許さる。(七〇三)

八月 ○十五日前田重熙、重靖と共に名月を賞す。(七〇四)
○廿一日足輕宮川文平獺と誤りて人を害す。(七〇六)
○廿三日丹羽八右衛門の妻丹羽右膳と相對死を行ふ。(七〇六)
○曹洞宗旦那御異風收甚五左衛門の母及び妻の日蓮宗寺院に參詣することを禁ず。(七〇七)

九月 ○二日德川家重使者を以て前田重熙の病を問はしむ。(七〇八)
○二日衡器の檢閲に關する幕府の令を領内に布く。(七〇八)
○十九日今明兩日江戸傳通院に於いて前田吉德夫人光現院の三十三回忌法會を行ふ。(七一〇)
○廿七日米價下直なるを以て諸士本納の半額を御召米に供することを許す。(七一〇)

十一月 ○十一日今明日天德院に於て前田宗辰の七回忌法會を執行す。(七一一)
○廿三日德川家治疱瘡に罹るを以て白山比咩神社等に祈禱を命ず。(七一二)
○前田重熙病んで就封を見合せたるを以て道中方役人に歸國を命ず。(七一二)

十二月 ○五日德川家重、前田重熙に鶴を贈る。(七一三)
○七日諸士に貸附する會所銀の額を改めその利子を免ず。(七一三)
○廿七日前田重靖前髮を除く禮を行ふ。(七一三)

寶暦三年　癸酉　皇紀二四一三

正月 ○朔日前田重熙の病未だ癒えざるを以て登營拜賀の禮を廢す。(七一四)
○二月十一日先に禪宗寺院の嗷訴に對する處置を誤るを以て年寄奥村丹後守は差扣、寺社奉行及び宗門

奉行は遠慮を命ぜらる。(七一四)
○能登諸郡に藩の用銀の上納を命ず。(七一六)

三月 ○十三日御算用者上田藤左衞門等博奕を以て禁牢を命ぜらる。(七一七)
○廿二日金澤城内東照宮の外遷宮行はるゝを以て諸殺生を行ふことを禁ず。(七一七)

四月 ○四日御異風牧甚五兵衞門等旦那寺のことにより遠慮を命ぜらる。(七一八)
○六日前田重熙病む。(七一九)
○八日前田重熙弟重靖を養子とすべきことを定む。(七二〇)
○八日前田重熙卒し十二日に至るまでその喪を秘す。(七二二)
○前田重熙行狀。(七二三)
○十二日前田重熙の喪を發す。(七五八)
○十二日前田重靖、重熙の嗣として服忌を受くべきを命ぜらる。(七五九)
○十三日醫師に命じて金澤より江戸に向はしむ。(七五九)
○十四日前田重熙の病輕快ならざるの報金澤に達す。(七五九)
○十六日徳川家重、前田重靖に使者を遣はして香奠を贈る。(七六〇)
○十六日前田重熙卒去の報金澤に達す。(七六一)
○十九日金澤にて前田重熙の遺志を諸士に傳ふ。(七六二)
○廿五日前田重熙の靈柩江戸を發す。(七六二)

五月 ○朔日前田重靖本郷邸に移る。(七六三)
○七日昨今兩日に前田重熙の中陰法會を江戸廣德寺に執行す。(七六三)
○十三日前田重熙の葬儀を金澤寶圓寺に行ふ。(七六四)
○十四日前田重靖命じて弟重教が老臣村井主膳の養子たるべき前約を解かしむ。(七六四)
○十八日前田重靖、重熙の遺領相續を命ぜらる。(七六五)
○前田重靖の家中に乘輿免許の者を增して十三人と定む。(七六八)

六月 ○四日前田重靖上總介を改めて加賀守と稱す。(七六八)
○五日前田重靖登營して家督相續の恩を謝す。(七六九)
○十日前田重靖老臣をして徳川家重の賜馬を觀覽せしむ。(七七一)
○十二日前田重靖前名利見を改め正四位下左近衞權少將に叙任す。(七七二)
○十四日前田重靖叙任口宣受領の爲に使者を命ず。(七七三)
○廿三日紀伊侯徳川宗直その女賢姫を前田重靖へ嫁せしめんことを求む。(七七四)
○廿八日諸士の諱の藩侯の名に觸るゝものを改めし

む。（七七四）

七月 〇四日徳川家重、前田重靖の婚約を許す。（七七五）

〇五日金澤小尻垂坂大雨により崩壞す。（七七六）

〇廿七日前田重靖就國の暇を受く。（七七六）

〇廿八日前田重靖發營して就封の辭見す。（七七七）

八月 〇朔日二ノ丸新殿造營の上棟式を行ふ。（七七八）

〇十六日前田重靖江戸を發して金澤に向ふ。（七七九）

九月 〇朔日前田重靖金澤城に着す。（七八〇）

〇四日前田重靖、紀伊侯徳川宗直の女の病を問ふ爲使者を發せしむ。（七八〇）

〇四日前田重靖麻疹を患ふ。（七八一）

〇十日前田重靖諸士謁見の期を延ぶべきことを告ぐ。（七八一）

〇十一日前田重靖の入國を賀する爲頭分以上の諸士物を獻る。（七八二）

〇十三日金澤の町民盆正月を行ひて前田重靖の入國を祝す。（七八二）

〇晦日前田重靖卒去して未だ喪を發せず。（七八二）

十月 〇前田重靖行狀（七八三）

〇五日前田重靖の喪を發す。（七九一）

〇九日前田重靖、弟重教を末期養子とするの願書幕府に提出せらる。（七九二）

〇九日幕府前田重靖の病を問ふ爲使者及び醫師を發せしめ途にして歸る。（七九三）

〇十一日前田重靖卒去の報江戸に達す。（七九六）

〇十二日幕府前田重教に重靖の忌服を命ず。（七九六）

〇十二日前田重教麻疹に罹る。（七九七）

〇十三日前田重靖の病を問ふ閣老の奉書金澤に達す。（七九八）

〇十三日徳川家重、使者を本郷邸に遣はして香奠を贈らしむ。（七九八）

〇十七日前田重教初めて諱を利篤と稱す。（七九九）

〇十八日金澤に於て前田重教が重靖の末期養子たるを許容せられたることを告ぐ。（八〇〇）

〇十八日前田重教麻疹の癒ゆるまで出府を延期すべきを告ぐ。（八〇〇）

〇十九日前田重靖を金澤天徳院内に葬る。（八〇一）

〇廿三日是日以降前田重靖の中陰法會を天徳院に行ふ。（八〇二）

十一月 〇十一日前田重教の出府の期を延べんことを請ふ爲使者を金澤より發せしむ。（八〇二）

十二月 〇十九日幕府前田重教が出府の後家督相續を命ずべきことを告ぐ。（八〇三）

是歳 〇幕府諸侯に籾の貯藏を命ず。（八〇三）

寶暦四年 甲戌 皇紀二四一四

正月 〇朔日前田重教未だ家督相續の命に接せずして新年を迎ふ。（八〇五）

十四日大聖寺藩の飛脚足輕能美郡粟生に於て馬方を斬殺す。(八〇六)

○十八日前田吉德の女斐姫と婚を約したる二條宗基薨ず。(八〇七)

○廿七日大槻長太夫人持組前田式部に御預替となる。(八〇八)

二月

○八日大聖寺侯前田利道使者を金澤城に派してその參覲の費用を補助せられたることを謝せしむ。(八〇九)

○八日藩醫矢田養安亂心するを以て縮所に拘禁す。(八一〇)

○二十日前田重教病癒えたるを以て前侯の卒後初めて寶圓寺・天德院に詣づ。(八一一)

○廿七日博奕を行ひたる山田戸左衞門以下の諸士處刑せらる。(八一二)

○廿八日小拂奉行鈴木萬兵衞の私曲に關係ある者の處分を定む。(八一三)

○廿九日幕府前年の如く諸侯に籾の貯藏を命す。(八一四)

閏二月

○二日大槻朝元の關係者の刑を定む。(八一六)

○十九日前田重教金澤を發して江戸に向ふ。(八二三)

三月

○四日前田重教江戸に着す。(八二四)

○十一日前田重教柳營に上りて德川家重に謁し家督相續を命ぜらる。(八二五)

○十八日幕府その能登に於ける直轄地を舊に依りて前田重教に寄託す。(八二七)

○十九日林信充、前田重教の諱を選定す。(八二七)

○十九日大聖寺侯前田利道參覲の途金澤に宿す。(八二六)

○廿三日前田重教家督相續を命ぜられ及び之を謝する爲登營したりとの報金澤に達す。(八二九)

○廿八日昨今兩日金澤城下の市民盆正月を行ふ。(八三〇)

四月

○四日大聖寺侯前田利道三河吉田橋助役の成績可ならずとの風評あるを以て自ら責任を幕府に伺ふ。(八三一)

○六日前田重教家督相續を賀する爲閣老の臨邸を求む。(八三二)

○十日前田重教使を禁裏に上り家督相續を謝せしむ。(八三一)

○十二日昨今兩日前田重熙の一周忌法會を寶圓寺に行ふ。(八三二)

○十四日町人圓藤屋藤右衞門の僕誤つて武士に打水を掛けたるを以て禁牢を命ぜらる。(八三三)

○十五日前田重教登營して元服の儀を行ひ偏諱を受け從四位下左近衞權少將に叙任せらる。(八三三)

○十九日前田重教、紀伊侯德川宗將の女と婚を約す。(八三四)

○廿六日前田重教叙任の口宣受領の爲使者を江戸よ

り發せしむ。(八三四)

○廿六日江戸に於て寶生大夫の扶持を増給す。(八三五)

○廿七日前田重教、紀州侯徳川宗將の女と婚することを許さる。(八三五)

○晦日澤崎太右衛門逐電したるを以て親族等をして捜索の爲に出發せしむ。(八三七)

五月

○廿五日老中等前田重教の招宴に臨む。(八三八)

○廿六日犀川の水暴溢す。(八三八)

六月

○十一日米價下直なるを以て諸士の上納を緩くし藩の貸銀に對する除知を免除す。(八三九)

○十六日前田重教叙任の口宣江戸に着す。(八三九)

○廿二日前田重教家督相續祝賀の爲一門等を招待す。(八四〇)

○廿五日卯辰觀音院の住僧出奔す。(八四〇)

○廿六日御馬廻組三輪甚五右衛門忰伊織その不行跡露見したるを以て出奔す。(八四一)

八月

○四日老臣等財政の窮乏を救濟せんが爲銀札を發行すべき議を上つる。(八四二)

○四日江州竹生島明神の神輿開帳の爲金澤に着す。(八四三)

○四日金澤の町人先に過言を以て武士に傷つけられたること發覺し追込等に處せらる。(八四四)

○十二日町人越前屋豊右衛門、旅行中武士と詐稱したるを以て追込に處せらる。(八四五)

○廿二日前田重教家督相續祝賀の爲一門の婦人を招待す。(八四五)

九月

○二日石川郡粟ヶ崎村藤右衛門に扶持を與ふるの議を決す。(八四六)

○廿六日紀伊侯徳川宗直その子宗將と共に本鄉邸に臨む。(八四六)

十月

○五日昨今兩日天德院に於て前田重靖一周忌の法會を執行す。(八四七)

○廿六日江戸道中廐及び板橋驛より徵したる始末書を示す。(八四七)

十一月

○八日前田重教日光東照宮の代拜を松平支蕃に命す。(八五〇)

○十六日領内に於ける米穀減收の額を幕府に屆出づ。(八五一)

○廿五日加賀藩の老臣等大聖寺藩の政情に關して會議す。(八五一)

○廿九日儉約の爲藩の諸經費を半減すべき命を傳ふ。(八五二)

十二月

○四日前田重教、徳川家治の婚禮に關して祝儀を受く。(八五三)

○十一日徳川家重、前田重教に鶴を贈る。(八五三)

○十八日前田重教その家臣二人に叙爵を許さるべき命を受く。(八五四)

○十九日幕府、前田重教の若年なるを以て巡見上使

を派すべき命を傳ふ。(八五四)
○廿四日宗旨替及び寺替の手續に關して諭す。(八五五)
○廿五日前田重教袖留の儀を行ふ。(八五六)
○廿六日定番御馬廻河合左膳、實父喜多岡平右衛門の若黨を手討とす。(八五七)
○江戸に於ける藩費の節減に關し諭示す。(八五八)

寶暦五年 乙亥 皇紀二四一五

正月 ○朔日前田重教登營して新正を賀す。(八五九)
○三日前田重教上野東照宮に參拜す。(八六〇)
○六日前田重教乘初の儀を行ふ。(八六一)
○七日前田重教射初の儀を行ふ。(八六二)
○十二日前田重教初めて能樂の太鼓を學ぶ。(八六二)
○十三日前田重教劍術の稽古初を行ふ。(八六二)
○十三日老臣前田駿河守・村井豐後守叙爵せられたるを以て口宣受領の使者を江戸より發せしむ。(八六三)
○十八日前田重教初めて能樂の仕舞を習ふ。(八六三)
○十九日前田重教前髮を除く禮を行ふ。(八六四)

二月 ○朔日前田重教初めて囃子を演ず。(八六四)
○四日幕府の巡見上使三月中を以て來るべき報金澤に達す。(八六五)
○五日幕府の巡見上使の爲に宿舍の準備を命ず。(八六五)
○十九日巡見上使を迎ふる爲本多安房守獅子土藏に貯ふる銀子の員數を檢す。(八六六)

三月 ○二日家中の下行を御召米とし及び町人より買上米を行ふことを命ず。(八六六)
○廿七日前田重教、紀伊老侯徳川宗直の邸を訪ふ。(八六七)

四月 ○四日幕府加賀藩の銀札發行を許可す。(八六八)
○四日巡見上使松平賴母・大河内善兵衛を本郷邸に招請す。(八六八)
○十二日前田重煕の三回忌法會を金澤寶圓寺及び江戸廣德寺に行ふ。(八六九)
○十五日前田利實の大音氏相續を止め金谷御殿に住せしむ。(八六九)
○十五日巡見上使金澤滯留の際に於ける諸士の心得を諭す。(八七〇)
○十五日領内に銀札を發行すべきことを告ぐ。(八七二)
○十七日重ねて巡見上使滯留中の心得を諭す。(八七三)
○廿一日巡見上使松平賴母・大河内善兵衛金澤に着す。(八七四)
○廿四日巡見上使旅宿門前の取締に關して令す。(八七四)
○晦日大聖寺侯前田利道歸封の途金澤を通過す。(八七五)

五月 ○六日巡見上使松平賴母・大河内善兵衛金澤城に登る。(八七五)

○十一日巡見上使松平頼母・大河内善兵衛石川郡白山比咩神社に詣づ。(八七八)
○十六日巡見上使松平頼母・大河内善兵衛河北郡黑津船より石川郡宮腰に到る。(八七六)
○十七日巡見上使松平頼母・大河内善兵衛金澤城内東照宮に詣づ。(八七七)
○廿六日前田重熙の生母心鏡院の廿五回忌法會を江戸長元寺に行ふ。(八七七)
○札座を設け銀札方横目を任じ領内の富家に用銀を命す。(八七七)

六月○朔日巡見上使松平頼母能登に入る。(八七八)
○十六日諸士に貸附する銀札を貸銀奉行に交附すべきことを告ぐ。(八七八)
○十八日銀札は當分假札を發行することを令し且つその使用に關する細則を定む。(八七九)
○廿一日巡見上使大河内善兵衛越中に入る。(八八二)
○廿二日本日以降諸士に銀札を貸與す。(八八二)
○晦日銀札及び錢の交換比例等を定む。(八八二)

七月 ○朔日初めて領内一統に銀札を通用す。(八八四)
○七日御算用場奉行富田治太夫等銀札遣に不同意なるを以てその職を辭す。(八八四)
○十一日巡見上使松平頼母・大河内善兵衛を二ノ丸御殿に饗應す。(八八五)

八月 ○十三日諸士に貸銀を行ふを以て一層儉約を旨とすべきを命す。(八八五)
○銀貨大に缺乏す。(八八六)

九月 ○朔日前田重教老臣に銀札貸與に伴ふ心得を諭す。(八八七)
○十五日金澤城内東照宮の正遷宮を行ふ。(八八九)
○廿三日昨今兩日江戸傳通院に於いて前田光高夫人清泰院の百回忌法會を行ふ。(八八九)

十月 ○朔日巡見上使松平頼母・大河内善兵衛金澤を發し歸途に就く。(八九〇)
○五日前田重靖の三回忌法會を金澤天德院及び江戸廣德寺に行ふ。(八九三)
○十一日銀札の本札を發行して在來の假札と混用せしむ。(八九三)
○十二日諸士に對し再び銀札を貸附す。(八九三)
○十九日御馬廻組岡田善左衛門石川郡野々市に於て百姓を斬殺す。(八九四)
○老臣等先に前田重教の與へたる諭旨を敷衍して諸士に令す。(八九四)

十一月 ○十一日前田重教、桃園天皇の女御入内を賀し奉る爲使者を金澤より發せしむ。(九〇〇)
○十六日町人に對して儉約を命す。(九〇〇)
○二十日町人森下屋七兵衛贋札を製造したるを以て捕縛せらる。(九〇三)
○札座の引替用に供する爲町・在に銀子を差出すべ

きを命す。(九〇三)

十二月　〇五日領内の作損高を幕府に上申す。(九〇四)
〇十六日前田重敎傳通院の僧を本郷邸に饗す。(九〇四)
〇十八日前田重敎左近衞權中將に昇任を命ぜらる。(九〇五)
〇廿一日德川家重、前田重敎に鶴を贈る。(九〇六)
〇廿八日前田重敎登營して昇任を謝す。(九〇七)
〇廿九日前田重敎昇任せしを以て口宣受領の使者を江戸より發せしむ。(九〇八)

是　歲　〇凶作なるを以て米價大に騰貴す。(九〇九)

寶曆六年　丙子　皇紀二四一六

正　月　〇朔日前田重敎登營して新正を賀す。(九一〇)
〇十一日前田重敎、前田兵庫をして代拜の爲日光東照宮に赴かしむ。(九一一)
〇郡方に令して奢侈を愼ましむ。(九一二)
〇物價高直なるを以て買占を行ふ町人を處罰す。(九一三)

二　月　〇七日鷹方御徒高木友右衞門恣にその娘を嫁せしめ且つ行粧を美にしたるを以て閉門を命ぜらる。(九一三)
〇十日前田吉德の女斐姬名を操姬と改む。(九一四)
〇十八日前田重敎昇任の口宣江戸に着す。(九一五)
〇廿一日御馬廻組岡田善左衞門去年の非行により閉門を命ぜらる。(九一五)
〇廿三日紀伊侯德川宗將、前田重敎を訪ふ。(九一五)

三　月　〇二十日先に諸士の藏宿より飯米を引出すものに令したる制限を撤す。(九一六)
〇廿七日米價大に騰貴す。(九一六)

四　月　〇十二日金澤にて暴民等、商人釣部屋仁兵衞等の家を破壞す。(九一七)
〇十六日前田土佐守銀札遣の非違に關して前田重敎に意見を上る。(九二一)
〇十七日前田重敎、德川家重に陪從して紅葉山の廟を拜す。(九二二)
〇廿七日贋札を行ひたる町人紺屋九郞兵衞等斬に處せらる。(九二三)
〇廿八日德川家重、前田重敎に、放鷹によりて獲たる鶴を贈る。(九二三)
〇廿九日諸士の飯米に餘分あるものは御召米として提出すべきことを令す。(九二四)
〇濫に異物を食ふべからざることを令す。(九二四)

五　月　〇四日諸郡不作の狀を視察する爲使番を派遣すべきことを令す。(九二五)
〇九日昨今兩日前田綱紀の三十三回忌法會を天德院に執行す。(九二六)
〇十三日新に銀鈔奉行を命じ銀札の朱印押捺を掌らしむ。(九二六)
〇十七日生計困難にして飢餓に瀕する者に貸米を給

することを定む。(九二七)

○廿四日前田土佐守銀札を廢止せんことを稟請す。(九二七)

六月　○四日前田重敎銀札通用を停止せしむべきことを告ぐ。(九三〇)

○八日是日以後石川郡の飢民等金澤の城下に徘徊す。(九三二)

○八日前田重敎領民の飢餓を救ふの法を講ぜしむ。(九三三)

○廿二日大聖寺侯前田利道參覲の途金澤に宿す。(九三四)

○廿六日頭役等、諸士の知行米一部を藩に獻納せんことを決す。(九三四)

○紀伊侯德川宗將の贈りたる合力米加賀藩に着す。(九三六)

○鳳至郡宇出津の百姓等十村源五の家を破壞す。(九三六)

七月　○五日堂形米藏に於て足輕等に拂米を行ふ。(九三六)

○十九日家中諸士の知行米を割きて獻納したるを賞す。(九三七)

○二十日諸士等知行米を割きて獻納したるを以て特に儉約の勵行を命す。(九三七)

○廿五日銀札の通用を廢止す。(九三八)

○廿七日銀札遣を廢したるを以て諸士に續銀を給すべきことを告ぐ。(九四四)

八月　○二日小額銀札の通用廢止を令す。(九四五)

○八日先に米商人の家屋を破壞したる者捕縛せらる。(九四五)

○廿二日幕府前田吉德の女操姬の姬路侯世嗣酒井忠宜と婚するを許す。(九四六)

九月　○廿五日犀川・淺野川の水暴溢す。(九四六)

○廿七日前田重敎儒臣由美希賢に命じて孝經を講ぜしむ。(九四七)

十月　○十五日前田土佐守御勝手方主附御用を命ぜらる。(九四七)

○十九日本多安房守名を遠江守と改む。(九四七)

○代官等に命じて收納米の檢査を嚴にせしむ。(九四八)

十一月　○四日前田源五左衞門先に銀札發行の際處置を誤りしを以て閉門を命ぜらる。(九四九)

閏十一月　○朔日前田治脩越中古國府勝興寺に赴く。(九五〇)

○五日德川家重、前田重敎に鶴を贈る。(九五一)

○廿四日領内に於ける收穫減損の額を幕府に申告す。(九五一)

○廿九日七日市侯前田利尙家督を相續し本鄉邸を訪ふ。(九五二)

閏十二月　○廿一日前田吉德の生母預玄院明年九十歲に達するを以て重敎より祝儀を贈らしむ。(九五三)

寶曆七年　丁丑　　皇紀二四一七

正月　○朔日前田重教登營して年頭を賀す。(九五三)
○八日前田重教入國祝賀能を止むべきことを告ぐ。(九五三)
○八日金澤城内越後屋敷の長屋燒失す。(九五五)
○百姓の持高を配分し得べき場合の規定に關し注意を與ふ。(九五五)

二月　○十一日諸士の儉約を勵行すべきことを令す。(九五六)
○十一日紀伊侯德川宗將本郷邸に臨む。(九五七)
○十一日前田重教姫路侯酒井忠恭の邸に臨む。(九五七)
○十五日人持組津田玄蕃先に城内越後屋敷火災の際消防の功ありしを以て賞せらる。(九五八)
○十六日手取川の水暴溢す。(九五八)
○十八日前田重教本年歸國せざるべしとの報金澤に達す。(九五九)
○廿二日大聖寺侯前田利道の嫡子龜丸本郷邸を訪ふ。(九五九)

三月　○朔日前田重教姫路侯酒井忠恭父子を招請す。(九六〇)
○二日本多遠江守の臣小笠原善左衛門博奕を以て知行を沒收せらる。(九六一)
○十一日前田重教當秋歸國すべしとの報重ねて金澤に達す。(九六一)

四月　○朔日姫路侯の世子酒井忠宜、前田吉德の女操姫に結納を贈る。(九六一)
○四日諸士の不品行なる者を頭役等の隱蔽すべからざる旨を告ぐ。(九六三)

五月　○三日大聖寺侯前田利道歸封の途金澤を過ぐ。(九六四)
○六日前田重教本年入國の際供奉すべき家老を命す。(九六四)
○十八日前田重教の母實成院金澤に着す。(九六四)
○廿九日金澤に大雨ありて家屋の倒壞多し。(九六五)
○擅に神社境内の樹木を伐採することを禁す。(九六六)

六月　○十二日昨今兩日前田吉德の十三回忌法會を寶圓寺に執行す。(九六七)
○二十日德川吉宗の七回忌法會を金澤神護寺に執行す。(九六七)

七月　○三日前田重教紀伊老侯德川宗直の病を訪ふ。(九六七)
○十八日前田重教上野覺王院に於ける紀伊老侯德川宗直の中陰法會に詣づ。(九六八)
○廿一日前田重教將に封に就かんとするを以て一門等を訪ふ。(九六八)
○廿七日前田重教就封の暇を受く。(九六九)
○廿八日前田重教登營して就封の辭見す。(九七〇)

八月　○三日前田重教就封の際旅中側筒五挺を隨ふことを許さる。(九七一)
○六日前田重教江戸を發して就封の途に上る。(九七一)

〇十六日虎之子及び取扱頼母子と稱する富突類似のものを行ふを禁ず。(九七三)

〇十九日前田重教金澤城に着す。(九七四)

〇江戸の分銅改方後藤四郎兵衞將に其の手代を加賀藩に派遣すべきことを告ぐ。(九七五)

九月 〇朔日前田重教入國に付今日以後諸士の拜賀を受く。(九七七)

〇六日大阪の御藏元鴻池吉右衞門等金澤城に登り前田重教に謁す。(九七九)

十月 〇十二日前田利常百回忌の法會を寶圓寺に執行す。(九八〇)

〇穢物を藩外に出して處分したる能美郡の百姓清兵衞捕へらる。(九八〇)

十一月 〇十日昨今兩日德川綱吉の五十回忌法會を金澤神護寺に豫修す。(九八一)

〇十日幕府御預地鳳至郡黑島村に火災あり。(九八一)

〇廿一日平田宇右衞門その子與右衞門の拘置を懈りしを以て閉門を命ぜらる。(九八一)

十二月 〇朔日前田利實袖留の儀を行ふ。(九八二)

〇十九日德川家重の前田重教に贈りたる鶴金澤に着す。(九八二)

〇廿六日横山大膳を叙爵せしめて山城守と稱せしむ。(九八三)

〇廿六日追儺の儀を金澤城内に行ふ。(九八三)

是歳 〇朝鮮の舟材加賀・能登の浦に漂着す。(九八四)

就業

侯爵前田家編輯　日置謙

昭和九年十月五日印刷
昭和九年十月十日發行

（非賣品）

著作者　東京市目黒區駒場町八百六十一番地
侯爵 前田家編輯部

發行者　東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地
石黒文吉

印刷者　石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
高橋覺吉

印刷所　石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
明治印刷株式會社

